奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■

1月号

1

January-1968

奇譚クラブ　昭和四十二年十二月二十日印刷　昭和四十三年一月一日発行　一月号（第二十二巻第一号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

奇譚クラブ

昭和四十三年一月号

昭和四十二年十二月二十日印刷　昭和四十三年一月一日発行　一月号（第二十二巻第一号）毎月一回一日発行　昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

定価三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan

1月号　￥35

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇（38年8月号より連載）の発端より暴力団の本拠に妙齢の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の饗宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇（39年11月号より41年12月号まで）に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によって〈花と蛇〉の書き出しから全部通しで読むことが出来ます。四カ年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説『花と蛇』を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」収録内容見出し一覧

…前篇…

第一章 発端（静子令夫人—誘拐された令夫人—送られた着衣—ズベ公の本拠）
第二章 陥穽（二度の嫌がらせ—運転手の正体—地獄の結婚）
第三章 美人探偵（落花紛々—美人探偵京子—浣腸地獄図）
第四章 浣腸図（強制—屈伏）
第五章 救援者（羞恥地獄—観念の座—京子の活躍）
第六章 救援の失敗（逆転—嬲りもの）
第七章 好餌（京子の屈伏—淫獣の餌）
第八章 悪魔の哄笑（毒牙は迫る—新鮮な生贄—悪魔の笑い—遂に美津子も）
第九章 地下室（悪鬼の饗宴—美津子のおどり）
第十章 翻弄（屈辱と羞恥—身代りに立つ夫人）
第十一章 蛇の執念（裸踊り—おしめ使う夫人—屈辱の挨拶）
第十二章 姉妹危し（屈辱の猿ぐつわ—浣腸競演）
第十三章 調教師（遂に京子も—土牢の中—調教師来る）
第十四章 美津子受難（二人の美女—調教室—狂乱の美津子）
第十五章 結末（美津子の屈伏—二つの肉塊—絶対絶命—美しい童女—スター誕生）

…続篇…

第一章 密室の秘密ショー（プロローグ—狼の批評—洗面器）
第二章 脱走の失敗（美津子の脱走—望み破れて—絶望の涙—美津子の覚悟）
第三章 華やかな饗宴（悪魔の二次会—狂乱の静子夫人—鬼女の計画）
第四章 地獄屋敷へ新顔（新たな獲物—テープレコーダー—美津子のいわけ—美少年）
第五章 翻弄されるカップル（美少年と美少女—折檻部屋—乙女の涙—毒牙は迫る）
第六章 一千万円の身代金（正気づいた小夜子—眼の保養—嵐のあと）
第七章 身代金奪取の失敗（小夜子の受難—女体の悲しさ—美しいニューフェイス）
第八章 涙の宣誓文（美女と木馬—毒婦の恋—嵐の小夜子）
第九章 恐怖の逆転劇（悪魔の相談—恐ろしい計画—千代夫人—狂乱の静子夫人）
第十章 奇妙な三々九度（鬼女の嬌声—地獄の花嫁）
第十一章 飼育される白い動物（美しき敗北者—プレイ開始—白い指）
第十二章 悪魔と悪女の悪業（恐ろしい仕事—全身美容—悪魔の寝室）
第十三章 屈辱の地獄図絵（猫とねずみ—強迫—侵入者）
第十四章 逃走の恐怖と失敗（風前の灯—再教育—京子の号泣—勝利に酔う悪魔）
第十五章 悪魔達の残忍な所業（朝の酒—白い酒樽—ガラスの尻尾）
第十六章 落花無残の修羅場（白いコンビ—バラの肥料—開幕準備）
第十七章 淫らな美女の調教（嵐の後—二人花形—美女戦）
第十八章 すさまじいショーの展開（変身—密談—舌と唇）
第十九章 汚水にまみれた宝石（流血—猿の檻—舞台衣裳—スターの心得—バラ夫人）
第二十章 華々しき美女の屈伏（一難去って—静態—身検）
第二十一章 対峙する美女と美女（嵐に立つ令嬢—美女対峙—悲しい説得—調教開始）
第二十二章 あくどい陥穽（修羅図—失心する小夜子—悪の部屋）
第二十三章 羞恥図絵の展開（復讐の生贄—汚辱に泣く令嬢—小夜子の屈伏）

直接お申込み乞う　定価五〇〇円　略号〔花特〕

限定版写真集　山原清子妖艶緊縛　〈美しき縛しめ〉第七集

刺青の魅力を探ぐる　写真集

頒価一部　一〇〇〇円（〒共）　略号〈美7〉

最近撮影の力作　未公開の秘蔵写真集　**刺青の女王**＝山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な　**刺青女体緊縛フォト結集版**（思わず息をのむ凄いポーズ満載）

限定版写真集　大塚啓子・鈴木晃子・山原清子　〈美しき縛しめ〉第八集

女斗と緊縛競艶写真特集

一部　一〇〇〇円、略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動！女性が女性を縛る **緊縛プレイ**の写真化　動きのある **相互縛り場面**の美しい展開

◎ファンの要望に応えて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱいに演技してもらった躍動的フォト集。

限定版写真集　〈美しき縛しめ〉第九集
（女性刑罰拷問特集）〈西洋篇〉

革具に拘束される女　媚態七十二葉

頒価一〇〇〇円（送共）　略号〈美9〉

モデル＝清楚な美木乃々子＝グラマーで美貌の大塚啓子
真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

〈女性刑罰拷問特集〉（日本篇）「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ——。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・オンパレード「女王様に飼育される日々」

頒価一部　一〇五〇円（送50円）　略号『M特』

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの方に提供するグラビア写真集の結集版です。発刊以来数カ月、すでに残りが少なくなりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。

今月の新版SM趣向異色フォト集案内

恵子の妊孕美緊縛
大手札四枚一組　略号〈おに〉五〇〇円
中河恵子
あくなき嗜虐の願望を満足させるため大胆奔放な緊縛姿態を開陳した恵子嬢が美しい妊孕の女体を縛りの実験台に提供した。

初妊娠の六カ月腹
大手札四枚一組　略号〈おぬ〉五〇〇円
中河恵子
初めて子を孕んだ二十二才の若々しい女体は適度の脂肪を全身にみなぎらせては緊縛の人身御供としての美しさを発揮している。

裸身縛りの妊孕美
大手札四枚一組　略号〈おす〉五〇〇円
中河恵子
妊娠して以来、一層のM心理がたかまり強烈な縛りを甘受するようになった恵子の膨満腹を中心にその美しさを誇らかに強調した。

身籠った裸身責め
大手札四枚一組　略号〈おも〉五〇〇円
中河恵子
同好者である恋人の種を宿した恵子は今やマゾ心理の昂揚から惜しげもなく裸身を晒して緊縛美の探求のため先駆となるのだった。

麗わしの妊婦縛り
大手札四枚一組　略号〈おひ〉五〇〇円
中河恵子
恥かしげにぽってりと妊娠六カ月の裸身が縄目に痛めつけられながらも、その限りなき美しさを画面一杯に媚をふりまいている。

膨満の腹部緊縛美
大手札四枚一組　略号〈おみ〉五〇〇円
中河恵子
ようやく胎児の胎動しはじめた腹部は恰好よく膨れ上り、娘時代と違った色気を発散して憧れの縄目を受けて美しく躍動する。

立縛り髪責め哀歓
大手札四枚一組　略号〈おけ〉五〇〇円
安井喜久子
均斉のとれた全裸の肢体にぴっしりと掛った縄目。腰まで垂れる黒髪を鷲づかみにされて、のけぞるように引回される安井夫人。

猿轡の裸身を晒す
大手札四枚一組　略号〈おふ〉五〇〇円
安井喜久子
猿轡の布片以外は一糸もまとわぬ裸身に肌もくびれるばかり厳しく掛った縄は流石にM夫人だけあって素晴しい喰い込みをする。

後手縛りで引回す
大手札四枚一組　略号〈おく〉五〇〇円
安井喜久子
手の指先から二の腕のつけ根までぎっちり締め上げた後手縛りで痺れる痺れると喚くのをかまわず縄尻を攫んで引き回すひととき。

片足吊り上げ責め
大手札四枚一組　略号〈おて〉五〇〇円
安井喜久子
厳しい高手小手縛りで転がし、片足首に縄を掛けて引き上げればあられもない姿態にて全身をふるわせてマゾの境地を満喫する夫人。

憂愁夫人菱縄縛り
大手札四枚一組　略号〈おや〉五〇〇円
安井喜久子
愁いに満ちた美貌の夫人の細っそりとした裸身をくびるように情容赦のない菱縄が双丘の上下から臍のまわりに至るまで彩ってゆく。

柱対向立縛り夫人
大手札四枚一組　略号〈おあ〉五〇〇円
安井喜久子
全裸の麗わしの女体は柱に向って立縛りに固定され、むき出しの可愛い臀部には苛責のないムチが肉もくじけとばかり炸裂する。

片足吊り裂き責め
大手札四枚一組　略号〈およ〉五〇〇円
安井喜久子
片足だけを吊り上げることによって開股を強制すれば残った肢をばたつかせ空を蹴り長い髪をふり乱してもがき回る被虐のポーズ。

逆エビ責めに喘ぐ
大手札四枚一組　略号〈おわ〉五〇〇円
安井喜久子
柔軟な肢体を誇る裸身が両足首を縛った縄と高手小手の縄とを連結して締め上げることによって美しい曲線を描いて苦痛に喘ぐ。

柱正面立縛り媚態
大手札四枚一組　略号〈おの〉五〇〇円
安井喜久子
後手縛りで柱を背にして正面向いて立縛りになった裸身は、すっくと爪先立って羞らいに満ちた媚態でファンの方々の眼に捧げる。

股間縛りにもがく
大手札四枚一組　略号〈おう〉五〇〇円
安井喜久子
首縄から胸胴腹へと下った縄は股をくぐって背後の後手首へ連結され、横倒しに転がされると締まる縄目の痛さにうううともがく。

豊満女体をくびる
大手札四枚一組　略号〈おれ〉五〇〇円
愛知葉子
奇クサロンにその豊満な緊縛肢体を晒した彼女が最近の見事なボリュムを肌に喰い込む縄にまかして自慢の裸身を提供してくれた。

開股前屈愛撫責め
大手札三枚一組　略号〈おね〉四〇〇円
愛知葉子
開いた両足首に棒をかまして棒の中央と首縄とを連繋して締め上げ巨大な臀部を晒した提供作品。

逆エビ縛りの愛撫
大手札三枚一組　略号〈おな〉四〇〇円
愛知葉子
肉づきのよい円ろやかな太股をそり反えらせて逆エビ縛りの苦痛に耐える肢体を鑑賞を願いたい。

新しい風俗文献誌　KITAN CLUB

昭和四十三年一月号

＜第22巻第1号・通刊第235号＞

奇譚クラブ　1月号　目次

（目次カット「燭台」室井亜砂路・画）

☆鞭打ちの女王関谷富佐子夫人悦虐図

鞭打ちによる絶妙のポーズと表情で定評のある関谷富佐子夫人の最近益々円熟した鞭捷フォトを極く最近撮影したネガにより、ここに関谷夫人悦虐図決定版として提供いたします。強烈なる実際の笞打ちによって、その真迫的な表情の露出を狙っておりますが、勿論、柔肌に喰い込む縄目も豊富に使用しておりますから、緊縛ファンの方々にも、その豊満な縛られ姿態と豊かな悦虐表情を十分に楽しんで頂けるものと思います。

鞭打ち惑溺の表情

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めち」 五〇〇円

簡単な縛られ方で身の自由がきき、そして強烈な鞭打によって思いきりもがき苦しみたいという夫人の希望をかなえた惑溺の瞬間。

股裂き縛りで痛打

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めの」 五〇〇円

もがけばもがくほど、両方の太股が厳しい縄目によって開いてゆくという恐しい縛り方で革鞭は情容赦なく柔肌に炸烈してゆく。

海老縛り鞭打地獄

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めぬ」 五〇〇円

柔軟な女体が二つ折りになるまで締めあげたロープをちぎれるばかりに張りきらせて、あくなき革鞭の暴虐の下に悶え苦しむ表情。

尻立縛強打に泣く

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めし」 五〇〇円

この豊かなお尻を思いきりぶって頂戴と突立てた頸と両膝頭を連繋した緊縛姿態で鞭の猛襲を浴びれば遂に女体は横倒しになる。

笞は臀部に炸裂す

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めけ」 五〇〇円

両手を思いきり開げて左右に吊られた豊艶な全裸の女体に、前から背後から鞭の霰が乱れ飛べば縄をきしませて全身はねじれる。

鞭に悶える鉄砲責

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めま」 五〇〇円

いわゆる鉄砲と呼ばれる縛り方で右手は肩から左手は後手に背後で連結され臀部と太股に鞭の雨が降れば女体は七転の苦悶を示す。

逆手吊で晒す臀部

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めむ」 五〇〇円

両手首を逆手に吊り上げれば、その激痛に頭部を垂れて臀部を晒す鞭打ち許容のポーズとなる。鞭はその目標めがけて派手に鳴る。

鞭に縛りに夢心地

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めり」 五〇〇円

柔肌に喰い込む縄、そして更に激しい鞭の洗礼、夢心地をさまよう恍惚の表情はS男の心を奪う。

鞭は美体にからむ

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めも」 五〇〇円

手ごたえのある固ぶとりの美肌に、ぴしりぴしりと重量感のある革ムチが飛べば、激痛に爪先立って耐える肌に忽ちミミズ脹れ。

狂う鞭に狂う夫人

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「める」 五〇〇円

殴って殴って手のだるくなるほど殴り続ければ流石の鞭の女王も狂態をさらけ尽して、今や法悦にも似た美しい表情を漲らす。

両手吊女体に強打

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めさ」 五〇〇円

右手左手とも左右に思いきり開げて縛られると全裸の全身すべてをムチ打ちの嵐の中に晒して、一打また一打毎にうねり狂う女体。

鉄砲縛り鞭打地獄

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めせ」 五〇〇円

両手を鉄砲責めにし、その縄尻を両足首に連結して鞭をふるえば許された動ける範囲で女体は奇妙な舞踊を続けて次第に昻揚する。

鞭打ち感泣の極致

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めて」 五〇〇円

鞭打ち責めの末、反応を続けた夫人は感泣の表情をこれ以上出すことは出来ず遂に悶悦した。

逆海老開股の鞭打

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めひ」 五〇〇円

逆エビ縛りで鞭を揮えば、そり反りそり反り畳の上を転々としてころがりまわり、更にその女体に鞭が所きらわず乱打される。

悶絶した関谷夫人

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めへ」 五〇〇円

激しいムチ打ちを加え続けていると、やがていくらムチ打っても反応を示さなくなる。その悶絶した女体の表情をキャッチした。

のけぞる悦虐表情

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めふ」 五〇〇円

両手吊りの夫人に鞭の強打は、爪先を立て頭をふり乱し、挙句の果はのけぞって悶悦のMの表情を余すところなく露呈する。

責による法悦表情

関谷富佐子 大手札四枚一組 略号「めら」 五〇〇円

苦痛を耐える表情がこれほど美しいとは思わなかったと誰でも思うだろうが、S人士にとっては、これこそ珠玉の姿態と表情だ。

愛縄の記

滝澤蓉子

新婚十一カ月目の私は鉄筋ビル九階の三DKのベランダで洗濯物を干していながら、ビニールで包んだ紐をまさぐって、思わず顔を赤らめるのでした。夜毎、私の肌をひしひしと縛りつける夫の愛の縄が今思いだされて、洗濯物をかけるロープさえが、何かしら妖しく私の心を揺すぶるのでした。

夫は妻である私にかくしだてをしない人でした。私もまた彼の妻になった以上、愛している夫のすべてを知りたかったのです。新婚旅行から帰ってきた夜、私は夫から初めて奇クを見せられました。いや、そればかりか独身時代に彼が集めたという夥しい数のコレクションも見せてもらいました。

私は夫の説明をききながら、沢山の写真を見てゆきました。好奇心がふつふつと心の底から湧きあがってくるようでした。こうして彼と二人っきりでいるのが、私にとって無上の幸福であるのに、このように、彼と私との間にきってもきれない秘密の絆がつくられてゆくということに全身がふるえるような嬉しさを味わうのでした。

この写真のモデルになっているどの女よりも私は若くて美しく、そして夫を魅惑させるポーズをとれる自信が私にはありました。このピチピチとした肉体を夫の眼の前で思いきり誇示してみたいという気持が強かったのです。

そのうち、夫が九階の一番奥まった部屋をわざわざ選んだのかということがわかりました。厚い鉄扉をへだてて廊下のすぐ前にエレベーターがあるだけで、この部屋一つだけが全く孤立していて、そして密室になっているのです。

夏、ベランダに出ると目の下に大都会の光の渦が目まぐるしく回っております。境の扉を開けると数十米上空の涼風が快く吹き込んできます。附近に高い建物がないので窓を開けていても誰にのぞかれることもないのです。それにコンクリートの壁の向うは、はてしない空間なのです。

食事を終えて入浴をすませるとこの密室で二人っきりの縄による愛のプレイが展開されます。大都会の真只中で彼と私のたった二人っきりのプレイ。奇クは、そのときの私達にとって大切な伴侶となって欠かせないものです。わざわざ私が買いに行かなくても発売と同時に取りつけの書店から届けてくれます。夫の買う専門書、文芸誌、週刊誌、スポーツ雑誌。私の求める婦人雑誌などと同じように大切なお得意として、忘れることなく毎月、届けてくれるのです。

夫の愛の縄は私の柔肌にからみついてきます。独身時代に果されなかった女体緊縛のプレイが、今では私をパートナーとして思いきり行うことが出来るのですから、夫の感激もさぞかしと想像されます。そして、二度とない私の若さと美しさを永遠に保存しておくのだといって、私の縛られた姿態を写真にとることを始めました。

密室の中での二人きりのプレイが、これによって他人の眼に触れるかもしれないという期待が私達のプレイに対する感激を一層深めるのに役立ちました。二人っきりでいたいという気持と、第三者に見せて誇りたいという相矛盾した気持が、相互に働いて私達のプレイを次第に深味のあるものにしてゆきました。撮影しだしてから、まだ半年ぐらいにしかなりませんが、36枚撮りのフィルムを三十本ばかり撮りましたので千枚近いフォトが私達二人だけのシークレット・アルバムを飾っております。

近く結婚一周年を迎えますので記念に二泊三日の温泉旅行をして思いきり派手な緊縛プレイを実施したいと夫と話し合っています。それともう一つ、私の写真を誌上に公開したいということと。

（第四十三回）　辻村　隆

九月の末から十月中旬過ぎまでハントに対談に、会合にと、慌ただしい日が続いた。

熱海で団鬼六氏と対談し、左近麻里子を撮って一息ついたら、安井氏からの要請で南紀への旅行である。仕事もおちおち手につかない。十月下旬はじめ、団鬼六氏との対談でも一寸触れておいたが、東京の若手落語家のナンバー・ワン、本職以外でバリバリ活躍しておられる立川談志師匠の突然の訪問を受けた。彼のマネージャーも同行している。マネージャーは長縄氏といって通称ロープ。まったく以て、SMのプレイにふさわしいお名前であるが、勿論、本名である。

何でも見てやろう。何でも知っておこうという、立川談志師の熱意には敬服する。大阪のクラブニューOSのショウに出ておられる寸暇を割いて来訪されたのだが、割り切った考えは、流石に当代の人気者にふさわしい。ズバズバと又あけすけに喋べる彼の高座に、悪名高い評判もあったが、逢えばとても親しみがもてる。しかもチャンと礼儀をわきまえておられた。彼が同好者であるとは申し上げないが、少女趣味はお持ちである。私の開陳した資料に、眼を丸くして驚いていた。坊ちゃん然としたウブなところが、彼の身上なのかも知れない。再会を約して数時間で別れたが、後味のよい初の対面であった。

× × ×

談志師匠と別れた翌日、女流作家を目指す、清原麻耶さんと会った。十二月号の読者通信にものせておられるが、黛ジュンという新進歌手に似た感じの、素晴らしいセンスのある女性である。ミニ・スカートがとてもよく似合い、暇を見つけては、女子大生などをガールハントしているとのこと。いずれ彼女の作品が逐次、誌上を飾るようになれば、大人気の出ること請合いの娘さんである。御本人はレスビアン。男性は全然興味ないが、私に対してはハントする男として、一度顔を見たかったらしい。こんな女性を交えて座談会などやれば、嘸かし愉しい話が弾むことだろう。彼女の艶名華やかとなる頃合をねらって、対談を書いてみたい。匿名でなく、フォトにも顔を出して、堂々と名乗りをあげた処、並いる男性執筆者連、おそらく顔色なしの体たらくであろう。デビュー後の精進を祈るや切である。

× × ×

『オー嬢の物語』のポーリーヌ・レアージュが序文を書く『肉体の映像』（原名L'IMAGE）という異色本が講談社から発行されている。（定価三百円）原作はジャン・ド・ベルグとしてあるが、或いは高名作家の匿名だという噂もある本で、内容は、男性が客観的に見た、女性同志のSMプレイを克明に描いてある。この本の訴える課題は、サド＝マゾヒズムであるという、SとMが紙一重に存在していることを力説している。緊縛と鞭打ち、それに倒錯の悦虐がフンダンに出てくる。甘美な女性同

短信往来

麻生保様へ

江川詩二より

『読物紡唄』を読んで頂き嬉しく存じます。ただ小生は斉藤夜居氏と同様にマニアというより、むしろ風俗文献研究という立場をとっていますので、特にM的な世界と限定しません。たまたまマゾッホの作品に小生なりの文献的価値を考え、とり上げただけです。その意味で今後、御期待にそえる投稿が出来るかどうか――。

なお、マゾッホの作品が載った『文学時代』昭和六年八月号の編集後記〈記者より〉に〝岡田三郎氏の訳になるマゾヒズム短篇集は、変態性慾文学者として知られているマゾッホの短篇中から見本的なものを、ここに示したものです。マルキ・サァドのサァジィズム、虐待狂に対する被虐待狂の病的心理を取り扱ったものが、この名ある所以です。その名だけは、ずい分、知られていますが、実際、作品に接せらるるのは、諸君もこれがはじめてではないだろう

志というオブラートにくるんだプレイは、Sによし、Mによし、レスビアンに更によしといった内容で、私は清原麻耶さんにも、この本の一読をすすめた。

×　×　×

十二月号サロン欄の、名古屋市三好ルミさんの、あどけなきフォトに魅せられて、編集長に散々ねだって住所をきき出し、手紙を出したら、折返し返事が届いた。私とのプレイを希んでいる由。しかし時間などの都合もあって名古屋まで出向いて欲しいとの事だった。好きな道なら千里も遠しとせずである。十一月初旬、始めて彼女と会う約束になっているが、いいハントが出来るか否か、今から胸をときめかせている。可愛いい『ひそかなる私の願い』に対しておそらく引く手数多あることであろう。その先陣をうけたまわるとなると、又ぞろ羨望の的となるやも知れぬが、そこは二十年近く、奇ク専門にかいて来た雑文屋の役得と、何卒御ゆるし願いたい。

かと存じます〃（傍点は筆者）とあり、この〃はじめて〃という言葉が、小生の注目した所です。おそらく、当時の文学的な諸誌としては、初めての本格的なマゾッホの作品、翻訳紹介ではないか――という点です。麻生氏の、お人柄を拝察して、小生も卒直な返信をし、お礼の言葉と致します。

「奇譚クラブ」にショック受ける

―最近号の傾向と明日への方向―

太田三郎

奇譚クラブの十一、十二月号は各一篇ずつ、問題をはらんだ原稿が掲載されて、それにショックを受けた。それは、快よい戦慄である。その原稿を、あえて取り上げた編集部の決断に、ショックを受けた。それは快よい戦慄である。『憎縄の記』と『奇譚クラブを斬る』である。すでに「憎縄の記」については、早くも十二月号で羽鳥水江女史がこれに触れていた。女史とは別な角度から見ると、この告白が本誌に載ったことは、奇譚クラブが単なるエロ雑誌でもなく、安易な自己礼讃的なS・Mマニア誌でもない、文字通り新しい風俗文献誌であることをハッキリ打ち出した点を、力説したいのである。マニア対象の雑誌に縄を憎むというような人妻の文章をのせること――その編集的冒険は〃奇譚クラブは、もっと深い内容を包む雑誌であるのだ〃という十二月号の木見修氏（私評論・優しい女たち）の叫ぶような実感が反響される。その地点から理解される本誌の、広く深い世界を物語るものだ。この告白は、S・Mプレイのあり方、Sマニアを夫に持つ常識的な人妻との問題等に――発展すべき話題の要素は多分にある。

一方『奇譚クラブを斬る』の論評は、結論的に新しいS・M小説出でよ、又はS・M小説とは、どのようなものであるかという〃新構想〃にしぼられるようだが、これについても、文句なしに好きだという〃花と蛇〃ファンの声もあろうし、ムヅカシイことはヌキだという現状に満足している大衆席の声。その反面、いまの小説、読物では飽き足りない星野氏を支持するファンの声も上がろうか。これに十二月のサロンの山上四郎氏〃奇クに『花と蛇』に匹敵する小説が、なかなか現われないということは悲しむべきである〃という声も加わって、この論評もこれから波紋を描く種を有している。

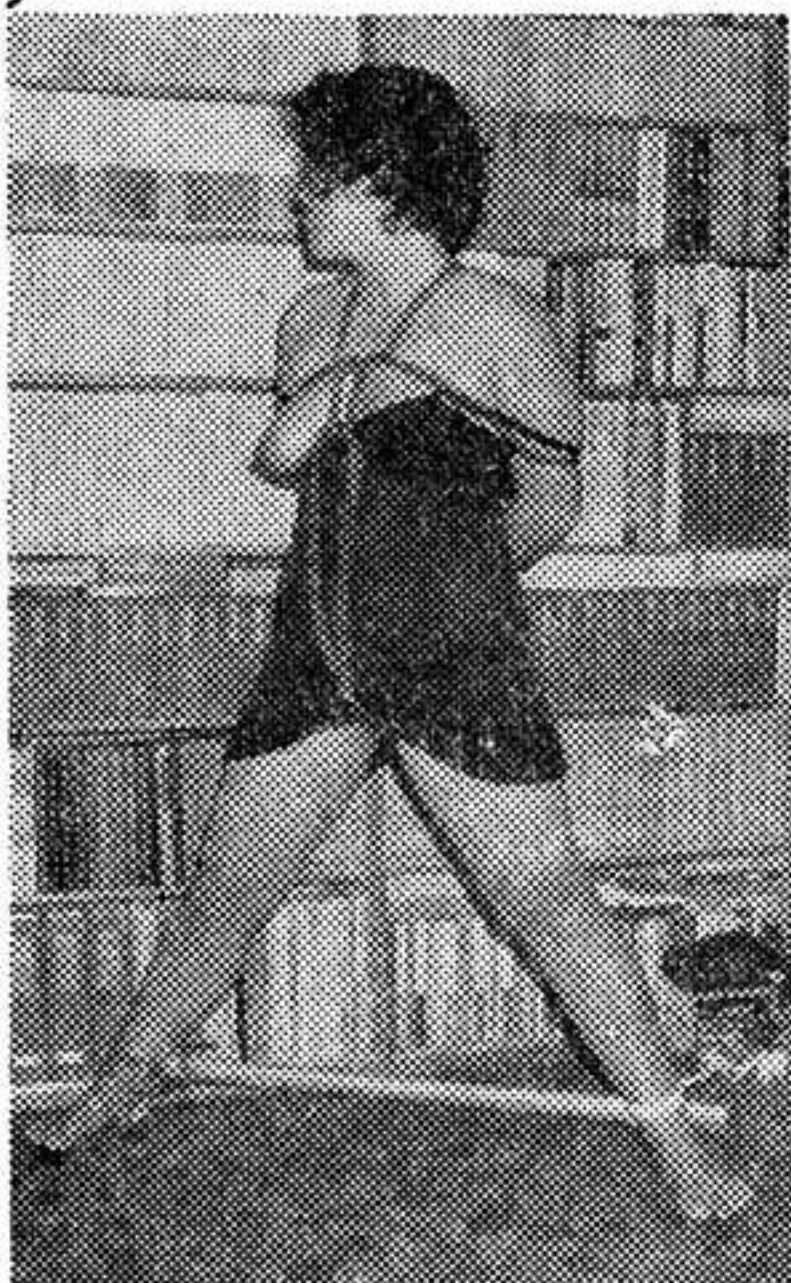
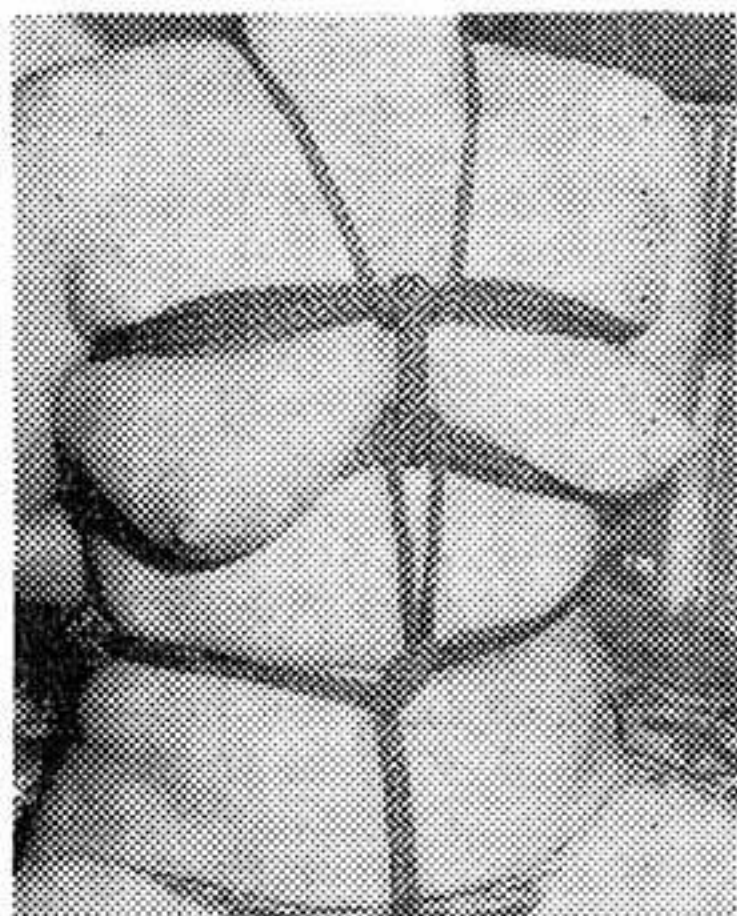
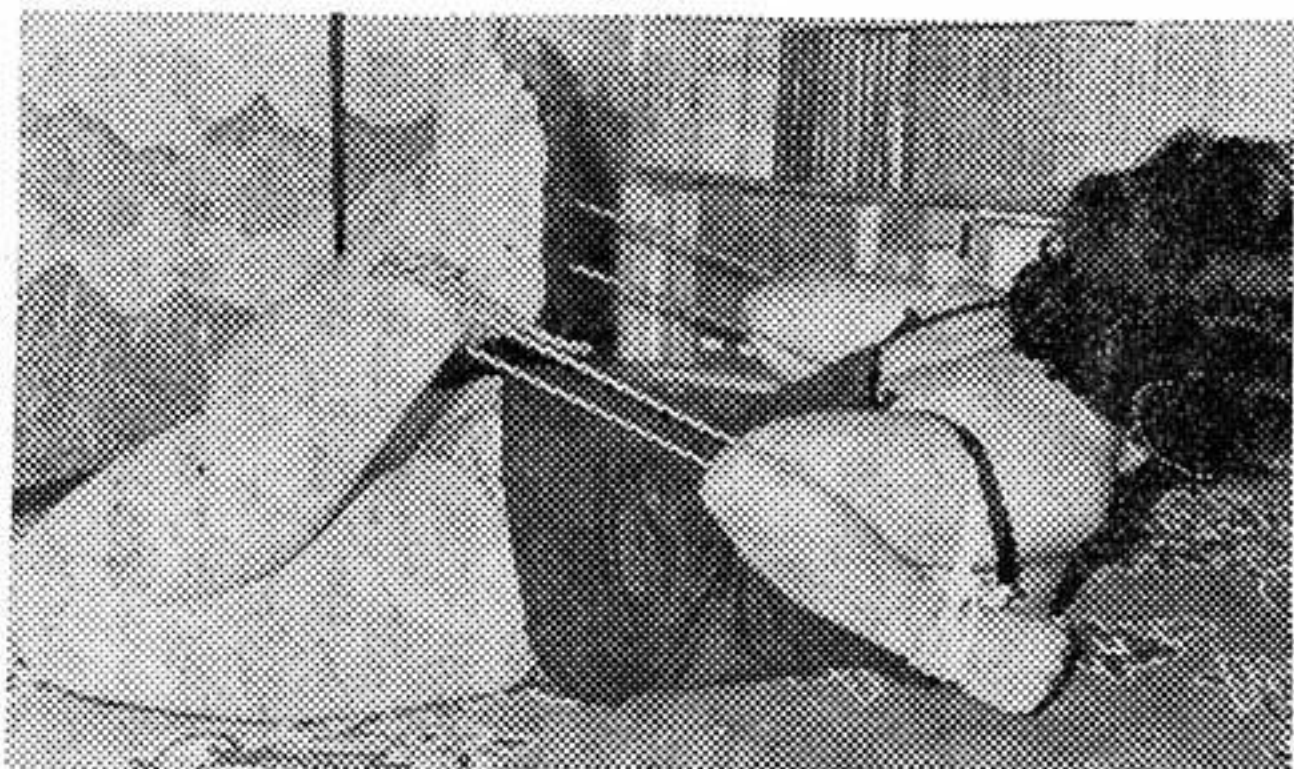
○

――昭和四十二年度は、二つの大きな問題をはらみつつ幕を閉じていく。それは明日の奇譚クラブを考え、象徴的とも思われる幕切れでもあろうか。そして昭和四十三年度は、先ず『憎縄の記』と『奇譚クラブを斬る』が投げかけた問題が一層開花され、新しい正月号の幕は上る。そして、それは継続されよう。そう期待したい。その論壇と平行して、真実にして赤裸々な告白が陸続として誌上に発表される気運ともなり、又は創作の世界も刺戟され、良い作品が登場する。その意味でも「読む雑誌」という編集部よりの掛け声が、本当に期待される年にもなるのだ。私は、これからの奇譚クラブの方向を信じたい。

編集部だより

○ＳＭマニアにとっては秘宝ともいうべき長篇小説〈花と蛇〉の発端から読みたいと言われる方のために『前篇』と『続篇』とを一挙に登載した臨時増刊号を、十一月中に発刊の予定である。
○清原麻耶という妙齢の女性からレスビアン・ラブをテーマにした原稿を貰った。一日、彼女に従ってそのハントぶりを写真にしてみた。写真にも自信があるので女性の手でカメラ・ハントを試みたいとも言っていた。若し座談会をやるなら、司会者としてでもゲストとしてでも参加したいとのこと。
○座談会といえば、若手落語家として売り出している立川談志も本誌主催の座談会だったら一読者として喜んで出席したいと言ってくれているので、実現できれば愉快な話も大いに飛び出してくるのではないか。いずれ彼に団鬼六なんかを混えて座談会を催したい。
○過日、待望の団鬼六・辻村隆の対談を果すことが出来た。新幹線の開通で東京大阪間は時間的には隣接都市となったので、今後は許

私の夫婦プレイ

愛知葉子

ストーブを焚くようになると、雨戸を締め切り、外とのしゃ断がよくなるのと、夏の暑さとは異りその暖さが快く、ついつい上衣を脱いでしまうようになります。
それに夜の長いこと。テレビを見ていてもつまらない番組が多くいきおいプレイに走るようになります。夫婦のプレイで道具もないので、あり合わせのロープや棒切れくらいしか使用できないので、いつも同じような縛り方しか出来ませんが、それでも種々と工夫しているつもりなのですが。
どなたか夫婦プレイに適するもので、こんな風にしてはというようなことを、御指導頂きたいと存じます。
下手な縛り方や、下手な写真を写すわけですが、それでも縛られた手が充血し、無理に曲げた体やロープのくいこむ肌の痛さが、いつか痺れてくる頃には、ストロボの光や、シャッターの音が気にならなくなって、時間を忘れて熱中してしまい。しばしば汗を流すことがあります。
平凡パンチ十月三十日号に、残酷なポイン・ショーと題して、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロのキャバレーでのショーが紹介されていましたので、真似てやってみましたが、なかなか体力と練習が必要のようで、ついにロープをとくことが出来ず、悲鳴を上げてしまいました。

すかぎり、こういった企画を積極的に進めてゆきたいと思う。
○最近、夫婦プレイに関する体験の通信や写真を送ってこられる方が非常に多くなった。今月号のカメラ・ハントで話題となった安井夫妻についても、更に念入りな再度のプレイを試みたいと双方で願っている由なので期待頂きたい。
○〔稿談性風俗資料入門〕で毎月の本誌を飾っている斎藤夜居氏の個人雑誌『愛書家くらぶ』について10月28日号の「図書新聞」に詳細取り上げられていた。愛書家としての氏の御健筆を切に祈る。
○〈大島照代との顛末記」で偽りのない告白記を寄せてくれた河本光三氏が同女との後日譚に加えて新しいモデル志望女性とのいきさつを便りにしてきた。豊富な写真を添付されてきたのだが公開出来ないものが多くて残念だった。
○中河恵子さんの妊娠中のフォトを撮影することが出来た。告白文も今月号には間に合わなかったが次号には是非載せたい。妊娠九カ月ぐらい迄は月を追うて撮影させて貰うよう依頼してあるので実現出来るだろう。尚、目下受付けているモデル志望の通信が若干あるので今後の誌上を飾れると思う。

月の二十四日、二十五日というものは、何ともソワソワする日であり、もし二十六日になっても店頭に奇クがパッとあらわれなかったら、それこそ体中が大さわぎを始めることでありましょう。ひょんなことから、ファーブル先生の『昆虫記』にも凝り出し、岩波文庫（二十巻）は、なかなか揃わないので、ある古本屋さんに『昆虫記』を見つけにいったのが二十三日。さっと目に入ったのが奇ク十二月号、三百二十円なり。これは又、いかなることとか。かたじけなさに五百円でも惜しくはない。
　さて、十二月号は、すばらしくいずれがアヤメかカキツバタ。能見積さん、室井亜砂路さん、木見修さん。いや、みんなが好い。
　私も、いささか、よく反省して羽鳥水江さんのお叱りを自分の戒めとして生きる道をみつけたい。

無題……

〈生きている報告のために〉

黒井珍平

『憎縄の記』の筆者の夫の方のように暴力こそ振わなかったにしても、夫婦が、ここまでこじれきってしまったのは、小生の何ともいいようのない敗北感で満たされています。
　中世カトリックの坊さんたちの色好みでなく、真剣な修道院においてさえ、彼等は女色から離れていた。いかに聖人君子といえども目の前に美しい女体が、くねくねとあらわれたら、どんなに修行において危険かをよく知っていた。詭弁を言うつもりではない。しかし、目の前にともかく僕の方では愛している妻がいて、何をすることもできない苦しさは、奇クの諸先輩からいくら笑われ、罵られても、どうすることもできない。
　ギリシャ神話のタンタロスの報いをうけている罪。
「池中に首まで浸かり、喉がかわいて水を飲もうとすると水がなくなり、頭上には実もたわわな果樹の枝が垂れ下っているが、飢を覚えて食べようとすると、枝が遠ざかって食べられない。常に飢になやまされる」
　目の前に熟れきった愛らしい妻の手を、ただ後手縛りにしたい、それだけののぞみに飢えている。妻のごきげんの好いときでも、つい手を後へやるだけで、ありありと嫌悪が浮かぶ。
　妻が〝いや、いや〟という。これは本当にいやではない。いやでないいやである。十年近い時が流れて、好きないやと、本当にいやないやとは、直ぐ見分がつく。本当に身悚いして鳥肌だっていやがるのは、妻の手を後へ組んだときで、仕方がないので我慢する。しかし一カ月の間、妻の体に指を触れられない自信はない。
　やめましょう、きりがない。バカでアホゥの小心者、卑怯者、黒井珍平め。自分で蒔いたたねだ。自分で刈り取れ。「天は自ら助くるものを助く」福沢先生の、おおせの通り。どうすればよいか、判らない。奇クよ、こんな馬鹿は、ほったらかしておけ。それでも私は、奇クへ片想い。淋しいな。

TV通信・・・・

十月十六日放映

テレビドラマ　「剣」

首斬り浅右衛門

沢　潟　し　の

題名からして、えらいものを持出したものです。

御覧にならなかったお方のために、朝日新聞の番組欄から引用しますと、我が子宗春を死に追いやった女、キクの私生活や、取り調べ状況を与力から聞かされている中に、憎しみから愛着へと変化して行く山田浅右衛門の感情の、複雑な起伏を描いた作品です。

劇としては仲々面白い作品で、三国連太郎の浅右衛門が、日常の職務として出役してから今日の罪人が、息子の情婦である事に気付き、ついに例の無かった斬り損じをするまでの心理劇で、そのかぎりでは大作と云ってもよく、よい出来栄えだったと思います。

ただ、例によって例のごとく、私流のアラさがしを致しますと、筋書きが少し変です。

山田浅右衛門と云う人は、代々ずい分妙な立場のまま、役をつとめて居たので、彼は徳川家の家来ではなく、浪人です。

その浪人だった初代が、据物斬の名手だと云う事で、臨時に召し出され、将軍御料の刀剣の試斬をしたところ、旗本八万騎の中にも類の無い上手と云う事になり、ずるずるべったりに牢屋敷に入り浸りの様な事になり、公式試験として行う死骸の胴を斬るだけでは、注文に応じきれなくなって、本来牢屋同心の役だった斬首役まで代行する様になって終ったのです。したがって処刑する罪人の素性や罪状を、改って説明を受ける等と云う事は有り得ません。

山田氏が、扱った罪人の姓名を知って居たのは、特に世上に有名だったり、何かの話題になった者だけで、こういう者については、牢役人との間の話題になるでしょうから、今日斬る罪人が誰か知って居る場合も多かったと思われますが、それ以外の並の罪人は人足が曳いて来て、場所に据えるのを斬ると、斬殻は直ぐにわきへ片付け、次の罪人を引据えると云う事をくり返すだけの事です。

牢屋敷の斬場で首を斬る、下手人、死罪、獄門の罪人は、大抵十人から二十人位まとめて斬り、一年に千人以上、二千人位処刑した年もざらに有ったのですから、罪人の素性罪状を一々説明して居たら日が暮れてしまいます。

（スチール・大映映画「斬る」の一シーン。天知茂、藤村志保）

「斬首晒」

提供・新宮明夫

私の観た緊縛映画

細川英治

大映映画　「温泉芸者」

「性犯」大蔵映画で主演は井上幸子、名和三平。

この映画ほど、S・Mに理解をもって作られた映画はないだろうと思われるほどに、S的要素の多い人間と、マゾ的要素の多い人間の心理状態を巧みに出している。

先ず、その責め方を説明するとベッドにうつぶせにされて、手足をベッドの四隅の柱にかたく縛られ素裸のまま鞭打たれる。その鞭打ちが、又迫力があって、ビシビシと女の子の背や尻にはじける。それがすむと、ヘビ責めが始まり、女の子の手といわず腹といわず、ところかまわず身体中にヘビをからませられる。それかと思うと、今度は部屋にとりつけてある大きな拷問用のはりつけ台の真中に、人間の胴がやっとはまるような穴があけてある板に、尻つき出しの形に身体を固定されて縛りつけられ、高田宗久というサド的カメラマンに、背後から皮鞭で尻をピシピシ鞭打たれるのである。その鞭を逃れようと必死にもだえる女の子……。

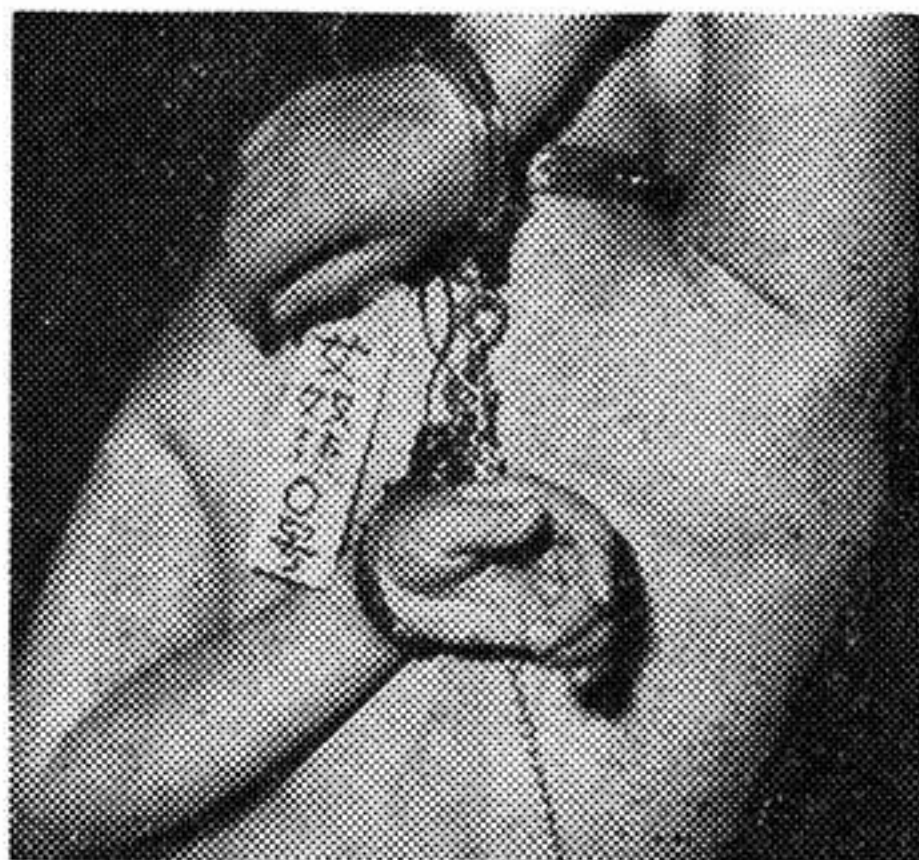
カメラは、背後からとその前面から鞭打たれる女の子の苦悶と、恐怖の表情をたくみにとらえてあり、それが又、次第に恐怖と喜びの入りまじった複雑な陶酔に変ってくる。その他、大きなパイプを跨がせて木馬責めにしたり、天井から吊り下げて、とげのついた机の上に上半身を無理にねかし、とげ責めにしたりして、S的ファンに、そうとうサービスしてくれている。

女の子も、凌辱され鞭打たれて責めつづけられている中に、だんだんマゾ化されて、その異常の世界から脱けられなくなってくるという物語であった。

「荒野の用心棒」というイタリア映画があるが、イタリア西部劇は女をあつかうのも、とても乱暴で荒っぽく、鼻すじの通った金髪の美女を掴まえると、先ずパンティだけの丸裸に剝いて、ゆっくりとその女体を観賞し品定めをする。それも酒をのみながら、右向け左向け、後向けなどと身体の向きを変えさせる。そして犯して自分のものにする。女が口ごたえでもしようものなら、天井から下っている棒に女の両手をバンザイの形に縛りつけ、牛を追う長いムチでビシビシ打ちすえ引っぱたくのだから、たまったものではない。又、気に入らぬ女は、女の顔めがけてピストルをズドン！　まったく荒っぽい。けれども見ている方にとっては、芝居気ぬきの荒っぽさの方が迫力がある。

「牝犬たち」この映画では、女斗シーンや女同志の鞭打ちに見るべきところが、かなりある。

「黒幕」松竹映画では、女スパイがとらえられ、敵方に塗り薬をたっぷり塗られて身もだえたり、ベットに仰向けに縛りつけられて、その手足に電気のコードを取りつけられ電気責めにあうところが、ものすごく迫力があった。

「欲情」アメリカ映画では、女をつかまえて自分も一しょに河の中に入り、女を浸けたり出したりして女のもがき苦しむさまを見て、ニタニタ笑って喜び、本人もズブ濡れになって、いやというほど女をいじめ、ついには女を殺してしまう。この水責めもすごかった。

愛の誓約書

益田四郎

私は長年の愛読者です。現在、交際している女性と先日会ったとき、別紙の様な誓約書をとりましたので、その時の写真と共にお目にかけます

○

私は今、手錠をかけられた手にペンを持ちこれを書いています。両手の間隔は約十五糎で自由はききませんし、手錠の中央についたくさりの先端は貴方の手にしっかり握られ、たとえ書いている途中でも、貴方の気が向き、くさりをぐいと引かれれば、もう貴方の思うまま、貴方のひざの上か又はたたみの上に倒されてしまいます。そして首輪には木の札がついています。それには『女奴隷○号』と書かれています。これを書き終えるまで、いじめるのは少しだけ待って下さい。終ったら、どのようにでも貴方の思う通り、たっぷり責めて下さい。

私は、いつも私を奴隷にして下さる貴方が大好きです。貴方にお会いした時は、いつでも自分から先に両手を揃えて差し出し「貴方早く手錠をかけて下さい」ということにします。

愛のいましめを受けた上、接吻させて頂きます。貴方にしばられている時、ロープのすれる音や手錠のしまるカチカチという音、そしてぎゅっと引きしまる感触で、昂奮してくるのをどうすることも出来ません。きっちりと縛られてエビ責めにされたり又、蝋涙責めにされた上で愛される時、一番幸せを感じます。

私は、貴方様専属の『女奴隷○号』です。御主人様の御命令ならば、どんなことでも喜んで従います。もし少しでもおくれたり反抗の様子が見えたなら、遠慮なく御仕置して下さい。

私を充分責め抜いて貴方様の御気分がよくなったら、今度は私をたっぷりと、お気の済むまで愛して下さい。

伏して、お願い申上げます。

女奴隷○号より

御主人様

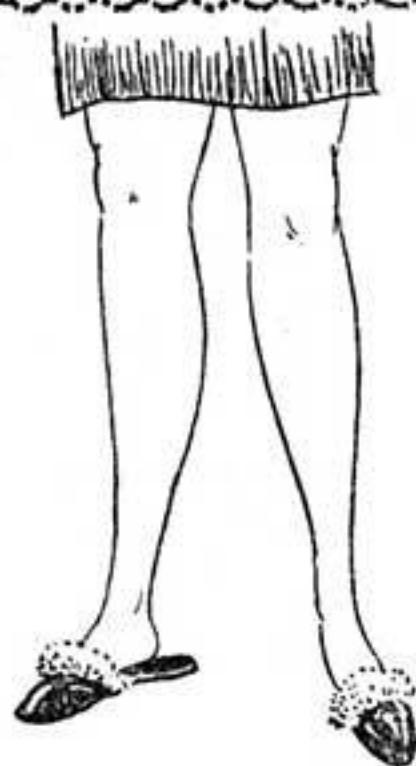
大阪の小山公子様に

（七月号の読者ページの）

霜田和夫

〔献詩〕

もう逢わない約束
ゆびきりの
小指に細い血うっすらと
あなたは女だからいけないわ
十月にわたしの外套はおらせて
はだか木に押しやった
おまえ
そばかすのコロンビーヌ抱いて

おまえと歩く街に灰色の鋪道に
つかれた十月がただよって
あなたは女だからいけないわ
おまえの眼泣きはらし
刺しゅうの手袋赤いとり

二十才の青春
＜赤いスリッパー＞
早渡真会

僕の下宿に高校生のかわいいお嬢さんがいる。少しつり上った目をしているが、きりりと締まった鼻から口にかけてが何とも言えず美しい。ほんのりとふくらんだ両の胸、そして全体的に均整のよくとれた若々しい体は、一人暮しの僕にとっては、かなり鮮麗なものに映ってくる。

僕の部屋と廊下一つを隔てて、そのお嬢さんの勉強部屋兼寝室があり、戸を開けると彼女の部屋の戸が目の前にある。夏になって風通しを良くするために戸を開けたまま、一人もの憂く読書したり空想に耽ったりしていて、ふと目を転じると、彼女の脱ぎ捨てたスリッパーが目に映る。彼女が部屋を出入りするたびに、こっそり彼女の足もとを盗み見していた僕は、いつしかこのスリッパーに奇妙な欲情を感じるようになった。

それは夏の蒸し暑い夜だった。時計はすでに二時をまわり、しじまがあたりを包んでいた。夜晩くまで読書していた僕は、ふと目を移して廊下を見た。赤いスリッパーが無雑作に脱ぎ捨てられてあった。吸いつけられるように、じっとそれを見ていた僕は、やがて、その魔力に引きつけられて、廊下に身を乗り出すと、両手をついてひざまずいていた。

あたりは静かだ。彼女も眠り込んでいるらしい。僕はそっと右手を伸して片方のスリッパーにさわった。ごくりと生唾をのむ。胸の血が騒ぐ。ゆっくりとそれを引き寄せて、左手のひらに載せ、目をつむって唇を近づける。そして、スリッパーをもとに戻すと、かすかに溜息をつく。あたりは依然として静かだ。立ち上って灯りを消す。夜の暗黒と静寂の中で、僕の体は妖しく燃え上っている。

そして——数分後、僕は彼女のスリッパーに顔をうずめ、唇をおしつけ、懸命に臭いをかぎながら忘我の境をさまよっていた。

今も、そのスリッパーが、いつものように乱雑に置かれてある。先日、お嬢さんのこの神聖なスリッパーを他の人がはいているのを見て以来、なんだか清浄なイメージがこわされたようで残念だが、あの夜の余りにも動物的な自分を思い出してなつかしい。

自称Sの僕にも案外Mらしい面があるのだなあ、とか、あんなのをフェチシズムというのだろうかとか、臭覚が性欲に案外大きな影響力を持つのだなぁ、などと、さまざまに思いをめぐらしている。

童貞の青年にとって、独り寝の夜は侘びしくて淋しい。ああ。

……私のイメージ画集……
由貴子の回想「点検」
原由貴子

羞らいを忍んで

久木耀子

最近の誌上ではモデルを志願される方々が多く顔を見せておられて同性として何んだか心づよく感じます。私は父一人娘一人で二人きりの、淋しい生活です。夜は殆ど留守番で昼は週に二回ばかりSクレパス主催の絵のモデルをしております。そんなわけで身体はあいておりますから、是非一度御社のモデルをしてみたいと思い、お便りを差し上げた次第です。今年の夏うつした写真を同封しておきますから、若し誌友の方でモデルに使ってみようとおっしゃる方がおられましたら誌上に掲載下さってもかまいません。

高校を卒えてから、まだ一度もお勤めしたこともなく、全くの世間知らずでSMのことについても何も存じておりませんが、何となく興味を持っていて未知のものへの好奇心を抱いております。

クレパスの絵のモデルでは、いつも着衣でして一回も脱いだことはございませんが、縛りのモデルでしたら喜んで裸になります。こんな私でもよかったら、是非お試し下さるか、誌友の方で確かな方へ御紹介頂ければ幸いです。父は殆ど外出勝ちですから、お返事は自宅へお送り下さいましても差支えございません。年齢二十一才、身長一六二センチ、体重は五二キロでございます。よろしくお願い申し上げます。

「羞恥への使者」

宮城昌子

「麗しき小雀への使者」

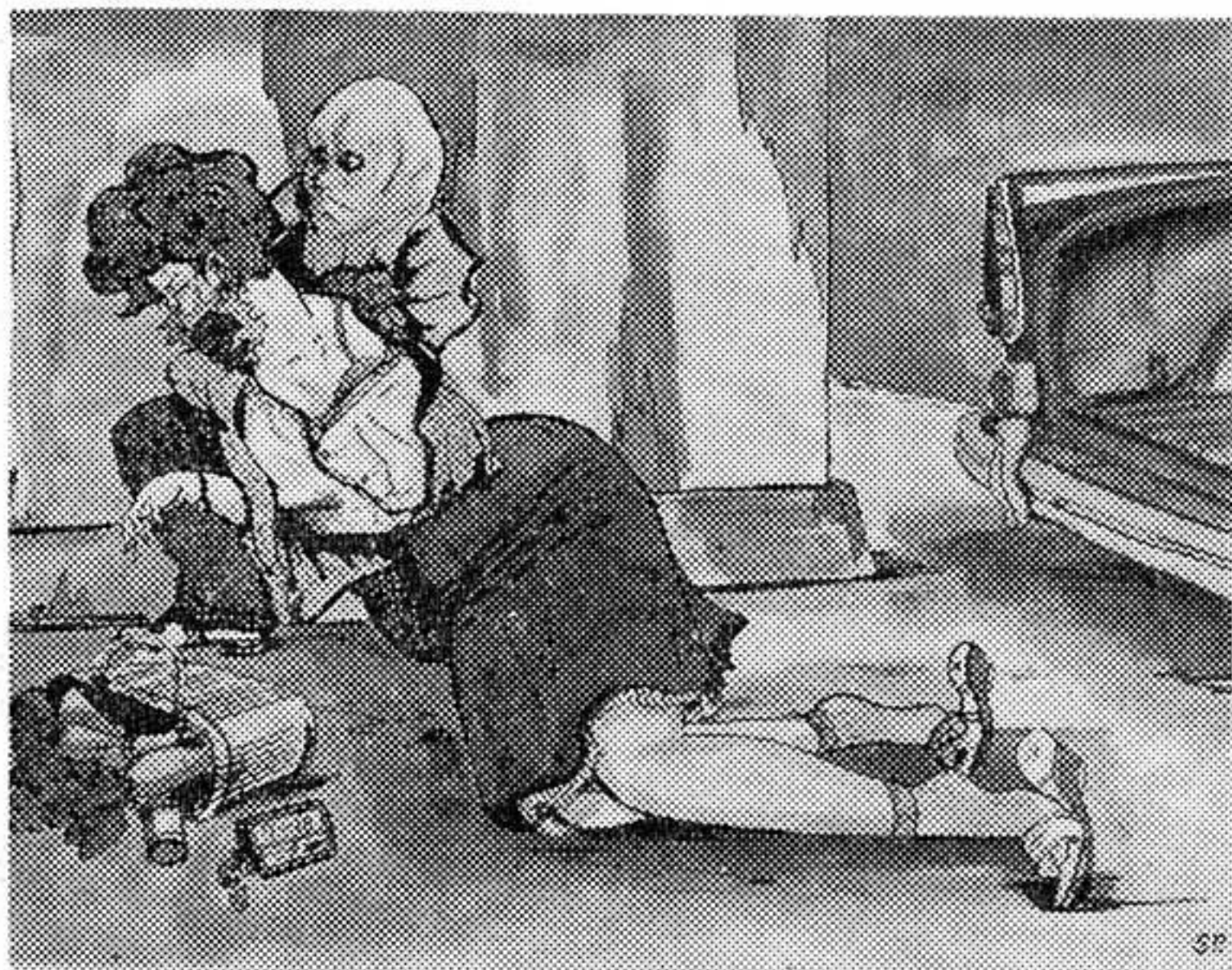
野江三郎

白ポストの中身

S・S

私は善人が此世に沢山の害悪を加えはしまいかと危ぶむ者である
—オスカァ・ワイルド—

昭和三十八年秋頃にも悪書追放運動があり、この時にはテレビのニュースに、いわゆる悪書なるものが空地にうず高く積み上げられて、火あぶりの刑に処されている場面が映っていた。確かに、そう思い込んだら、世の中には煙と灰にしたくなる物は、あに悪書のみならんや、とは云うものの、まさかナチではあるまいし、日本の婦人全部がそうだとはいわないが、本に火をつける程残虐だとは思わなかった。いつも音頭をとるのは教育ママや主婦連ということになっているが、所詮彼女たちは紅衛兵的な、思想という点、思考力においても乳臭をおびた動かされ易い、一陣の風で左右する、考えない葦に過ぎぬ。このことは識者ならずとも、背後で風をあふっている者の存在を知っている――。だから、いつも悪書問題に就いてはまともな議論を聴くことができないようである。けれども、あのぶざまな恥じっさらしな三悪追放運動（読まない、見せない、売らない）の白ポストは一日も早く撤去した方がいいと思う。エロ本取締りなどということは、思想を抑圧するための単なる〈囮〉に過ぎないのだから……。

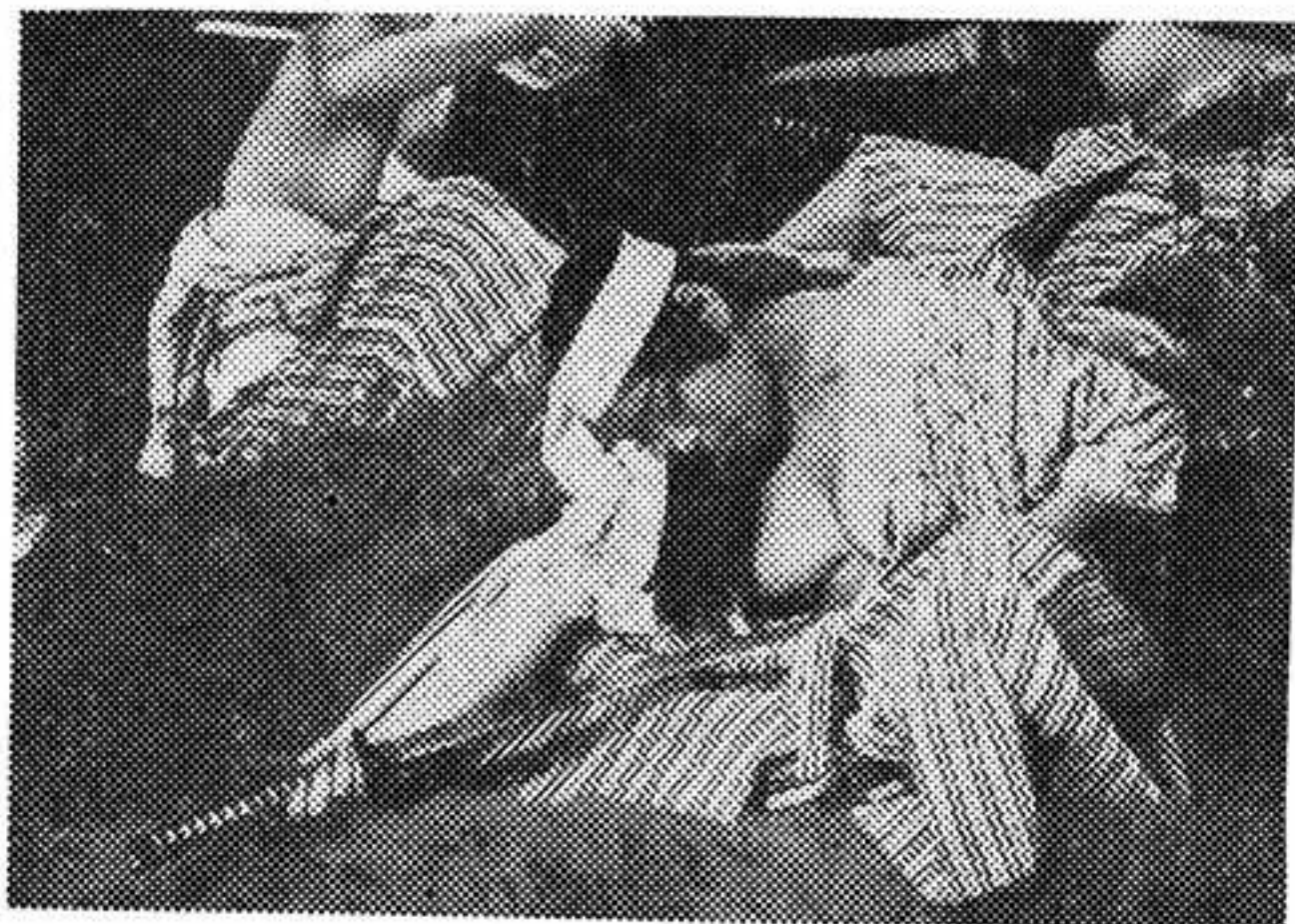
『新評』（42・7）には〝ショックレポート〟「悪書狩りに狂奔する魔女の正体」柳田邦夫、があり警視庁中心のエロ本追放運動は、思想の悪書狩りへの引込線だ、と論じ詳細なデータもあり、例えば本誌読者ならずとも興味のある、あの白ポストの中身の報告書が出ている。警視庁防犯部少年第一課調査（42・4・1）と称するもので、やはり週刊誌が最も多く、最高点だけ記すとマンガサンデー百六十一点。雑誌は週刊誌にくらべ高価だし、買う以上は本気で読むから、最高点の風俗奇譚二十九点次点サスペンスマガジン十八点、三位実話と秘録十七点、四位が文芸春秋社の漫画読本とは、まったく地に落ちたね。そして奇譚クラブが漫画読本と同じく十一点である。これは人気番附ではないから本来は数に入らない方がいいのだが一応ご参考迄に。尚、蛇足ながらポストの中味の総点数は週刊誌一三五五冊、雑誌は二二九冊で、週刊誌というものが如何にクダラナイかよく分る。また読物雑誌ともなれば、如何に良妻賢母の眼をかすめて、夫やムスコたちが、万難を排して秘筺に納めているかがよく分るではないか。

………僕のイメージ画集………

「暗黒街の使者」　遠藤春一

舞台のSMシーン　一ノ瀬英雄

二度目のお便りを致します。
十一月号での呼びかけに、反応がなくて残念ですが、奇クのホームグラウンドである大阪を中心とした関西方面の方は、なかなか活潑らしく思えて羨しいです。
先日、ふとしたきっかけで、日劇ミュージック・ホールへ出掛けました。華美を誇るここでも、SMマニアの興味をそそるシーンが見られました。その節、撮影したものですがお送り致します。

劇団「赤と黒」評

ショッキングと噂される劇団・赤と黒の上演については、本誌にもよくレポが掲載されているが、「イイノホール」での公演について〝プレイボーイ〟(10・31日号)が次のように報じているので抜萃しよう。
……半裸の女性(志村曜子)が柔肌に短刀をあてて割腹して果てる――。
……「拷問」となると、さらにスゴイ。拷問器具が舞台に登場し、キリシタン女囚達を次々と苦しめる。といっても、これはストリップやエロ芝居ではない。
……団員はみんな「軽演劇をまじめにやっているつもり」だ。……劇団代表者の横尾真一氏は不満をぶちまけるのである。「私たちが、芸術祭参加の申請をしたのに、認めてもらえないんです。未知の劇団だからという理由なんですがね」
……劇団・天井桟敷に対しても〝ゲテモノ〟などの声がきかれたが、ちょっと変ったことをすると侮辱的なレッテルを貼られてしまうのはなぜだ。この国の悪い風潮だと思うのだが。……
と、この冒険的ともいえる体当り劇団に対して好意的である。その是非は別としても、〝ちょっと変ったことをすると侮辱的〟云々は確かに感じられる〝島国根性〟と共鳴出来るのだ。

(大阪・T生)

SMの詩(うた)

百合子嬢のイメージによる

田部　真

「サドって何?」
「マゾって何?」
少女はきいた。
丸い頬に逆光を受けて
生毛が光っていた。

○

「縛られるってそんなに良いの」
少女の瞳は丸かった。
首を一寸傾けて
円らな瞳を未知の世界に向けた。

○

少女は縛られていた。
何日か後に
幼い体は丸かった。
汚れを知らない肌は柔かかった。

○

後手に組まされた手を軽く握り
一寸辱恥の表情を見せながらも
少女は明るかった。
胸も腰も幼なく
それだけに
裸像は一そう美しかった。
白いふくらみを彩る薄紅の蕾
丸味をくびる縄幾筋

○

「縛られるって良いじゃないの」
少女の唇は何かを待っていた。
その時から少女は女になった。
新しい世界に目覚めた。
汚れなき体のままで

「暴力?」　春川ナミオ

……僕のイメージ画集……

「草原に懲らしめられる奴隷」　室井亜砂路

朗報、〈メンスバンド〉到着

（使用済の月経帯）

希望者に譲ります

若い女性の使用済のメンスバンドが多量にまとめて入手できるというところは、未婚の女性ばかりの入っている女子寮でしょう。

新品のメンスバンドと交換するという条件で今般使用済の月経帯を某会社の女子寮から若干蒐集して貰いました。色は黒、ピンク、水色、黄色とさまざまですが、いずれも相当長く使用したものばかりです。本誌の愛読者に限り特にお譲りしたいと思いますので、御希望の方は本誌編集部小倉妙子宛お申込み下さい。

只今のところ数に限りがありますから希望枚数に送付を添付された方に先着順にお送りします。品切れになりましたら、次回に入手した際、優先的に御連絡させていただきます。

（編集部・小倉妙子）

妊婦マニアは期待する

瀬沼四郎

先日十二月号を見た。羽鳥水江さんの「独りごと」――昭和四十年八月号「子を孕んでいるナルシス」以来、本当に久し振りの寄稿で、やはり懐しい。内容が、妊婦マニア向きのものでないのが残念だが。今後のご健筆をお願いしたいところだ。

同じく「奇クサロン」の「編集部だより」で、中河恵子さんが「目下妊娠五カ月」で、「必ず妊婦モデルになってくれる」から「妊婦ファンは大いに期待下さっていい」とあるのは嬉しい。未来の夫君は本誌の愛読者、すでに承諾を得ているそうで、仮に「期待するな」と言われても、マニアは期待するのだから、これでは、実現しなかったらおさまらなくなる。で、この機会に一つ、忘れないで注文を出して置きたいと思うことがある。

これまでの妊婦フォト分譲品を見ると、どうしても腹部を中心に写したものが多く、妊娠した裸女の全身像がきわめて少ない。特に臨月のものほど、その素晴しい巨大な腹部に撮影者の注意が惹きつけられてしまうのか、胸と腹とのクローズ・アップが多い。無理からぬこととは思うが、同時に、完全な全身を画面に入れたものがほとんどない。その中でも、直立したポーズのものは、せいぜいヒザまで写っていれば余程よい方であろう。これは非常に残念といわねばならぬことである。

文字通り頭のテッペンから足の爪先まで妊婦の完全な全身像を、しかも直立したポーズでの全身裸像を、上下に幾分のスペースを残して撮ってもらえないだろうか。これが第一である。

次に、その場合、かなり小さく写ることは止むを得ないので、直立妊婦全身裸像の場合は、従来の大手札版では不足する。だから是非、出来ればカラーでキャビネ版以上、特別鑑賞用のデラックス版を作ってほしい。

もし夫婦プレイ用のものをご主人が撮影されるのだったら、第三者の勝手な注文は許されまいが、編集部がマニア向けに撮影されるのであれば、是非お願いしたい。長く保存される珍貴資料として。

書きたいことを先に書いてしまったので、あと、思いつくままに記してみよう。

以前ストリップとかヌード・スタジオとかで妊婦ハントしてみたこと、その成果がきわめて乏しかったことなどを小生は書いたことがある。羽鳥さんの「……ナルシス」などにも小生のそういう方面の記事がヒントになっているのかも知れないが、それは自惚れとして、一時そういう方面に興味を持ち、やってみたことは事実である。羽鳥さんの創作などは一種の理想であるが、その後も関心は持っている。

大阪のストリップも一流どこになると、妊娠ストリッパーはいないだろうから、三流か四流どこを狙うのだが、そういうところでは概してダンサーの体の線がひどく崩れていて年令が四十以上かと思うようなのもある。仮りに孕んでいても、余り感心しないのでこの頃は敬遠し勝ちになっている。あるいは小生のスタミナが老化して衰えたのかも知れないが、やはり肉体の美しさがないとミジメな気持ちになるのである。しかも例の昭和三十九年秋の妊娠ストリッパー以後、一度も見あたらないのだから、いい加減飽きても来る。

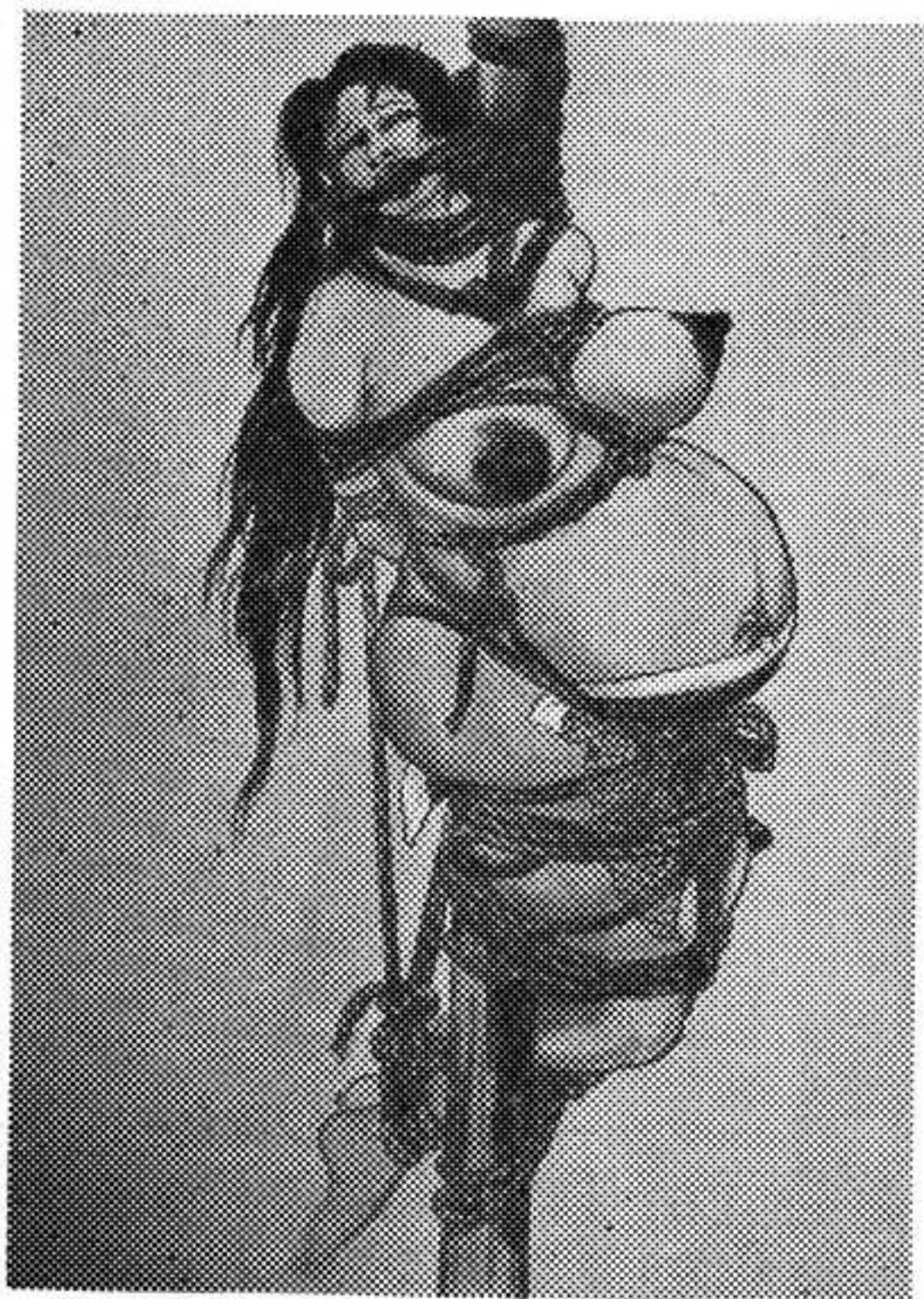
昭和四十年八月号の「妊婦ヌードハント」で同じ劇場に同じストリッパーが出るように書いたのは間違いで、いろんなダンサーのチームが、五日か十日ごとに巡回しているのは本誌上で書かれている通りだと分った。必要ないかも知れないが訂正して置く。なお同じ記事中若い妊娠中らしいダンサーというのも小生の見誤りだったような気がしている。

ヌード・スタジオやガイド・クラブは、電話で聞き合わしてみた位なので分らないが、まず可能性はなさそうである。何しろどれもかなり前の話だが、たとえば次のようなやりとりである。

(若い女の声で値段など説明してくれる)

「ちょっと、特別な注文があるんだが」

「ハイ、何でしょうか」

「妊娠してオナカの大きい人はい

ないかね」
（ガヤガヤと相談する声）
「今、マスターがいませんので、分りませんから、あとでお電話して下さい」
「無理な注文をして悪いけど是非何とか探してほしいな。もちろん料金は特別に出すよ」
「ハイ、聞いてみます。お客様のご希望には出来るだけ添うようにしますわ」
　右の調子で（あるいは）と思ってもう一度電話したら、マスターらしい男の声で、
「アホなこと言うて、冷かさんといて……」
　で、（冗談ではない）と言い訳する間もなくチョンである。それでも最初に出たモデル嬢は純真なのか、カマトトなのか。
　もう一つ、ポン引きに声を掛けられたときのこと。思い切って言ってみた。
「ちょっと変った注文があるんだがね」
「SですかMですか。そんなのもいまっせ」
「いや、ちょっと違う。……妊娠した女なんだ。そんなのはいないかい」
「からかわんとくれやす。孕んどったら商売になりまへんがな。何カ月ぐらいどすのや」
　と、それでも聞いて来るので、
「出来るだけハラの大きいのがいいな」
　と答えると、さも（あきれた）と言わんばかりに、プイと離れて行ってしまった。
　腹の少し膨れた感じの街娼に呼びとめられたことがある。汚い感じの女だったが、
「妊娠何カ月だい」
　と尋ねると、バカにしたように聞えたのだろう、大きな声で、
「何言うとんの。地腹やないか」
　と怒った様子で、考えてみるとやはり中年肥りだったのだろう。
　何はともあれ、中河恵子さんの妊婦ヌードフォト分譲を、大いに期待している。

私のイメージ画集……………

「妊婦受難二題」

小　妻　容　子

最近の縛り映画から

東山映史

最近のピンク映画の縛り作品に奇譚クラブの名前がヒンピンと出てくるようになった。

その名前がタイトルに現れるのが、小川欽也監督の「性犯」である。キャメラマンの女主人公が井上幸子。新人で小柄だが、引き締った肢体で豊満な乳房を持っている佳人。林美樹の縛りのヌードモデルが、鶴田八郎のS派カメラマンに責められている姿をかいまみてから、彼女の胸の深奥に眠っていたマゾがめざめ、同棲中の恋人をも捨てて、鶴田のモデルになるのだが、その責め方がすばらしいのである。

水中の緊縛シーンから、吊り責め、首かせ台に緊縛され、両足を拡げて固定された上にムチ打ちされる。その絶叫ぶりは迫力があった。更にエビ縛りからローソク責め、最後には機械工場内で、バイプに跨らされ、猿ぐつわをはめられてのムチ責め等、たんのうさせてくれた。

ヤマベ・プロ作品「肉地獄」はご存じ「花と蛇」の作者、団鬼六氏の花巻京太郎・脚本。

ボスの情婦、辰巳典子が、前の情婦の藤ひろ子、その妹の林美樹に捕えられ、女の恨みで責められる。ハダカにされて吊され、ホゥキの両端に左右の足首を縛りつけられるのが変っている。最後には地下室で、柱に立ち縛りにされたまま、藤ひろ子と共にガソリンで焼き殺されてしまうのだが、純情な顔立ちの辰巳典子の責められシーンはイタダける。「処女無惨」に引続いての受難役だが、このところ、いじめられ役のナンバーワンというところ。

「猟色」は、変態老人のエジキにされた原ひろみが、寝室で立ち縛りにされたり、後手に緊縛されたままベッドでいたぶられるなど大奮斗の熱演。その他、クサリで縛られて写真を撮られたり、ビール瓶の破片の上にころがされたり、大いに小道具を使った、美女責めや、変った緊縛の撮影風景なども観せてくれる。

……………僕のイメージ画集……………

(右)「落下傘部隊」　桐原紫門

(左)「落城に散る」　中田　寿

奇譚クラブ

昭和43年新年号

（1968年・新年号<第22巻第1号・通刊第235号>）

本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象として編集しておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう、十分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順次整えて参りましたが、更に挿入写真の減少及び見出し、キャッチフレーズの改訂などによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いものは極力掲載しないようにするのは勿論、掲載した文章は十二分に検討を加え、いやしくも青少年の健全なる育成に支障を与えないよう努力いたします。尚、本誌の発行部数は最低限度にとどめ、その増大を企るための努力はいたしません。

団鬼六・辻村隆対談——

「オ二六先生大いにシバる」

—『花と蛇』対『SM・カメラハント』

——辻村隆

左近麻里子と倶に熱海へ！

十一時三十五分に新大阪駅を出発した新幹線「こだま号」は、二十分後に予定通り京都駅に滑りこむ。十号車の11番のD席、それが私の切符の指定ナンバーである。隣りのE席は人待顔に空席であった。この空席の切符を左近麻里子が握って、間もなく私の隣りに坐る筈であった。東京へ向って走る列車の、冨士山が見える側の窓で二人掛になっている。箕田編集長の思いやりある配慮で、アベックのシートを予約してくれてあったのだ。反対窓のシートは三人掛けであった。編集長から特急こだまの指定券のD席が私に送られ、もう一枚は左近麻里子に送ってある。

何の為に、何の目的で？……

冒頭のタイトルでお分りの通り、団鬼六先生との、長年の念願の対談に行くためであった。対談の日程といい左近麻里子との同伴といい、すべては編集長が万端、段取りしてくれたのである。彼から電話で伝えられた様に、私は唯、彼の意のままに動いておればよかったのだ。その編集長は、私達より一日早く、東京へ出張し、今日熱海で落合うことになっていた。

私は弾む胸を更にときめかし、躍る心を一層逸らせて、隣人を待ち受けていた。山本一章の二回に亘るカメラルポで、既にハントとしての先手はとられたが、絶好の佳人に会える嬉しさは、かくしようもなかった。左近麻里子と会って、団鬼六先生と会って、これから熱海でどの様に展開してゆくかは、総ては未知である。私は、S・Mに生甲斐を托して、今ひしひしと歓びをかみしめていた。

窓の彼方のホームに目をやる私の視線の外に、フト人の気配を感じて振向くと、軽い会釈と共に、薄いグリーンのサングラスの女性が、つつましやかに隣席に腰を降した。紛れもなくフオトで見憶えのある左近麻里子に違いなかった。年甲斐もなく私の息ははずむ。

「左近さんですね、私は――」

「存じ上げておりますわ辻村さんでしょう」

サングラスの奥で、翳った瞳が軽く笑っていた。こだまは、いつしか徐々にホームを離れていた。

「箕田さんは？　御一緒じゃありませんの」

「ええ、昨日から東京へ出張しているんです。熱海で落合う約束なんですが、ひょっとしたら気を利かせたのじゃないかな」

「そうですの。私はてっきり御一緒かと思って、大分車の中を見廻したんですよ」

「それはそれは。でも、よく出て来られましたネ。私は、あなたと一緒に行けるなんてことは、二日前まで知らされてなかった。編集長が東京へ行く寸前に、電話で伝えて来たものだから、あわててしまいました」

「御迷惑なんでは……」

「と、とんでもない。光栄の至りですよ。単に団先生と対談するだけと思っていたのに、附録の方が素晴らしくって一石二鳥ですよ。いや、一石二鳥はおかしいかな。本命がどちらか分らなくなってしまった感じです。左近さんは、私と同伴のこと知っていたの」

「箕田さんの最初の御連絡は団先生に逢わないかって言うことだったのです。『花と蛇』は私の大好きな読物ですから、一も二もなく承知したのですけど、辻村さんも御一緒だと聞いて、本当のところ厭だったのです」

「どうして又……」

私は心外だった。初対面の彼女が何故、私を嫌ったのだろうか。山本一章がヘンなことを吹き込んだのではないかというような危惧と疑心が、咄嗟に走った。

「辻村さんのカメラ・ハント、ずっと読ましていただいてるんですけど、随分、無茶をなさる非道い方だと思って、怖かったのです」

「ヒドいことって？　ハハ、それこそひどいですね。私は自分はどうもフエミニストで、だらしがないと思っていますのに。そんなに非道いですか？」

「悪くいえば、次々と女をくいものにする、ドンファン。それも女性を散々叩いたり縛ったりして、独りで喜んでいるといった……」

「そうですか」

左近麻里子は生真面目な顔付で、私を直視すると、刺すようにズバリと言ってのけた。

私はそれ以上、何も言えなかった。私がハントを書く場合、概ね男性諸氏を対象として書いている。女性がハントを読めば、辻村隆と言う人間が、キザで鼻もちならぬエゴイス

トとしてうつったのかも知れない。快調に走る新幹線のスピードとは逆に、私の心は重く沈潜し、妙に気拙い雰囲気が流れた。
「少し言い過ぎたようですわね。御免なさいね」
私が放心したようにボンヤリしているので彼女は気の毒にでもなったのか、気をとり直して、柔らかい言葉を送ってきた。
「いいんです。あなたのように、判っきり仰有る人は余りいないんですが、確かにおおせの通りかも知れませんね。プロ野球でも、巨人が余り強すぎて勝ち過ぎると、アンチ巨人の連中が殖えるように、調子にのり過ぎて、いい気になって羨望の的になっていると、そのうちアンチ辻村の同好の士が多くなっていくかも知れません。大いに心すべきですね」
「そんなに深い意味で言ったのじゃないんです。でも辻村さんが巨人軍を例にあげて仰有ったので申すのではありませんが、アンチ巨人の方々も、内心は大ファンだと思うのです。大鵬といい、巨人といい、余り調子いいから反って憎らしくなるので、若しそれらが負け出したら、きっとその連中は、カンカンになって応援すると思いますわ。一種のファン気質なんでしょうね。だから若し、アンチ辻村さんの人々がいると仮定して、辻村さんがカメラ・ハントをピタリと中止されて、奇クから姿を消されたら、むしろそんな方々の方ががかえってやいやい言うのじゃないでしょうか。私も辻村さんが厭で憎らしいくせに、奇クを開くと、先ずカメラ・ハントかて尚更、又憎らしくなるんです」

『花と蛇』を最先に読んじゃうのです。そし
「困ったですね。それこそ『困っちゃうね』ですよ。しかし左近さんも山本氏とのプレイでは、かなり強烈な縛りを受けていられるようじゃありませんか。私には、とてもあれ程のことは出来ない」
「そうでしょうか。でも浣腸とか鞭打ちとか私なんか、それこそゾッとするようなことをなさっているじゃありませんか?」
「山本氏は緊縛、猿轡、眼隠しといった、女性の自由を完全に奪うというやり方の、むしろフオトよりプレイそのものを愉しんでいるものが多いのです。しかし、どの女性にも殆んど類型的だから、長年に亘ると、またかといった感じで飽きられるんじゃないかと思うのです。私の本質もSですが、広域に亘ってハントするようになったのは、ひとつは同好の友人達が、人それぞれ容貌が違うように、趣向も又おのずから変っているからなのです。一昨日、山本一章が、関谷富佐子さんとプレイしましたが、彼女が鞭打ちを好むた

め、恐らく彼も鞭打ちしたことでしょう。大島照代さんへのクリスプレイに対しても、羽島水江さんや瀬沼四郎氏などから、再度クリスプレイのハントをして欲しいという激励の手紙が届きました。一方では嫌悪する人あれば、他方では、すごく喜こんでおられる人もいるのです。妊婦の好きな人、切腹をこのむ人、S的女性願望のM男性、女斗美、刑罰、ホモにレスボス、A感覚等々、実に風俗の世界も多種多様なんです。その全部の願望は充せなくても、或る程度の広域なプレイが、長年の間に、私に与えられた課題となってきているのです。編集長の献身的な協力、同好の士の援助、それからそれへとたぐった糸は逃さずに追及して、それがいつしか三年以上のカメラ・ハントの成果となってきたのです」

「辻村さんは私をハントなさりたいとお考えになりましたの」

「勿論です。しかしあなたの場合は、山本氏が一歩先んじました。彼のルポにも幾許かのフィクションはあるでしょうが、兎も角、先行しましたからね。山本氏から編集部へ、そして分譲モデルとなられて、実の処、食指を動かしたのですが、そのうち凄くあなたを気に入った山本一章が、追い打ちをかけるように続・左近麻里子を書いた。あなたとは、是非一度プレイしたいと思っていましたが、もう私の出る幕がなくなってしまった。そんな感じです」

「それが計らずもっていうわけね」

「団先生の余慶を受けて」

私達は思わず顔を見合せて笑った。彼女の地味なツーピースの袖が長い。そこに私は左近麻里子のプレイの縄跡に対する配慮を感じた。大きな黒い瞳に聡明さがにじんでいた。

米原―岐阜羽島―名古屋―豊橋……。

いつしか浜名湖が指呼の間に見え、そろそろ空腹を覚えた頃、雲に包まれた冨士山が、頂上を黒々と天に突き出して聳えていた。

弁当とお茶を二つ。私達は仲よく並んで、さしてうまくない車内弁当を、つついた。

「私、時々上京するんですけど、熱海は始めてなんです。辻村さんは?」

「私も正直いって始めてなんですよ。開西の温泉場なら殆んど知っているんですが」

「今日のプレイは辻村さんがなさるの?」

「本来ならばそう願いたいが、フオトやカメラで鞄がかなり重くなったので、縄は新しいの一本きりなんです。余り強烈な緊縛は出来ないでしょう」

「助かりましたわ」

「残念ですよ」

「団先生なさるかしら?」

「先生に華を持たせて上げたいですね」

「対談中、お邪魔にならないかしら」

「いて貰うために、わざわざお呼びしたのでしょう。勿論、一緒に」

「何だか今から胸がドキドキしますわ」

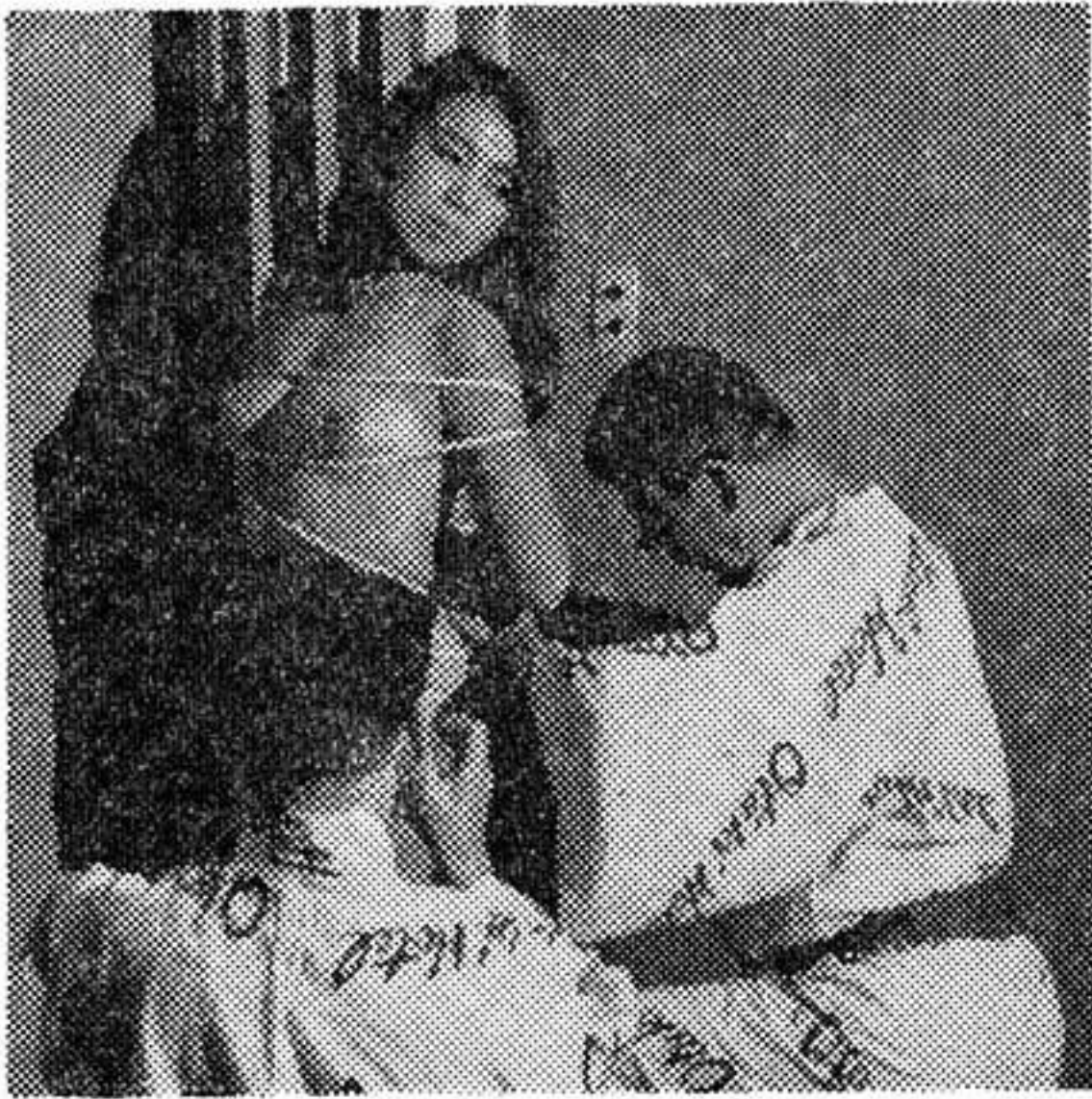
左近麻里子は豊かな胸を両手で押えてみせた。無雑作に流れた黒髪が心もち揺れる。

私の心は二つに割れていた。待望久しき団鬼六先生との対面という喜びの心と、思いがけぬ大附録の、左近麻里子緊縛というお添ものに弾む心とに――。しかし正直いって、今の私は左近麻里子の方へ、遥かに多くのウエイトが傾いていた。

ごく在りきたりの、アベック然とした私達二人をのせて、こだま号は驀進していた。

鬼六先生待ちの熱海の一時間

二時四十分――こだま号は熱海駅に滑り込む。私達は駅頭に立った。忽ち二、三人の客引きが、いい鴨と許り近づく。それを断わる

のに私は、しばし辟易する。私はキョロキョロと編集長の姿を辺りに求めた。
何とも騒々しい、まるでゴッタ煮のような熱海駅前広場である。右往左往する団体客、家族連れやアベック、田舎然たるお上りさんの群、観光外人の一団、その人浪を走る客引き、案内係、ガイド。箱根、伊豆、東京などへ走るバスのむらがり。九月末のウイークデイというのに、温泉都市の玄関は雑踏をきわめていた。私達はもう一度、改札出口の方へ引返した。

「仕方がない。ここらで暫らく待つことにしましょう」
「箕田さん、来ているんでしょうか」
左近麻里子は少し、心細い声を出した。
「もし逢えなきゃ、あなたと二人温泉ホテルへ行こうじゃありませんか。構わないでしょう」
「構いますわ。何の為に来たのか……」
「私と二人じゃつまらないっていうわけ」
「それとこれとは、違いますわ。辻村さんとなら京都ででもお会い出来るでしょう。わざわざ熱海まで出てこなくても」
左近麻里子は、不安げな面持ちで右顧左眄した。
「大丈夫、編集長はきっと迎えに来ますよ。絶対約束を破ったことのない人だから……」
私の、その言葉を裏書きするように、その時、駅前デパートの方から編集長が姿を現わした。白い革鞄を重たげに提げて、私達を認めて近附いてくる。
「やあ、遅れてすまなかった。一寸、団鬼六氏に電話していたものだから。幾らかけてもつながらないんだ。彼の住む真鶴へは市内電話だと思って、かけていたんだが、かからなかった筈だ。熱海は静岡県で、ここから湯河原・真鶴と、二つ先の住居は神奈川県なんだね。市外電話の出来る所を探して、やっとつながったんだよ」
彼は顔をみるなり、すぐ進行形の話にかかった。いつもの通りで挨拶や雑件は一切抜きである。左近麻里子に対しても（よく来られたね）とも言わない。それでいいのだ彼は。
「それで団さん、もう来るの？」
「真鶴からタクシーを飛ばしてくるそうだ。予約してなかったので、兎も角、駅前の旅館の案内所に頼んでおいた。海岸べりの、お宮の松に近いOホテルを斡旋してくれたので、団氏にもOホテルを知らせておいたよ。さあ、車でホテルに行くとするか」
テキパキと彼はコトを運んでゆく。
タクシーで降されたホテルの周辺は、十層近い大ホテルが林立している。海岸は近く、プロムナードを挟んで、市営駐車場が絶好の場所をデンと占めている。遥か岬の彼方の山頂に熱海城が、秋の陽光をうけて白く輝やいて聳えていた。
ホテルに入って案内されたのは九階の奥の部屋。私はその狭さに驚いた。四帖半一間に申訳程度においた窓ぎわの腰掛け二つ。部屋

の調度の貧弱なこと。大阪市内の三流のアベックホテルより未だ劣っている。

表の道路に面して九階建の豪勢なビルに対して、これは又何という中味の貧弱さであろうか。

「ひどいお部屋ねえ」

左近麻里子も流石に、あきれて呟いた。

「案内係め、大分甘い汁を吸いやがったな。辻村さん、これじゃ幾ら何でも動きがとれないよ。部屋を変えて貰おうよ」

私達は鞄を置いてドヤドヤと部屋を出た。エレベーターは七階迄で、二階段下らねばならない。フロントで解約しかねまじき見幕で交渉すると、七階の少し広い部屋に変更してくれた。こことても温泉ホテルにしては粗末な方だが、行き当りばったりのいちげんの悲しさ、辛抱することにした。

「団さんが来るまで、表にでも出ようか」

私は編集長を誘った。

「ウン、そうだな。出てもいいが私は少し疲れたから転がっているよ。左近さん、どうする。辻村氏と出てきなさいよ。それともお風呂に入る?」

「そうね、じゃあ少し散歩しようかしら」

彼女は私と共にホテルを出た。私はカメラと三脚をぶら下げている。ホテルの真向い側は公園めいて噴水もあげているが、海岸べりの遊歩道へ行くには、無粋な有料駐車場の鉄柵が邪魔して、遠廻りせざるを得ない。

迂回して海岸べりを、私達は歩く。有名なお宮の松も、ごく平凡な単調な松に過ぎず、貫一お宮の名場面は、その辺りからは、てんで想像しようもなかった。

「左近さん、今夜は多分おそくなるでしょうが、あなた泊っていいの?」

「新幹線の最終で帰るつもりですわ」

「一人で?」

「一人でしか仕方ないでしょう」

「いっそ泊ればいいのに」

「その道のベテラン許りでしょう。朝になったら私、それこそ蒸発してしまいますわ」

「雑魚寝も面白いよ」

「面白いのはあなた方だけ。私は、そうはゆきませんわ」

「どうして」

「どうしてって、わかってるじゃありませんか。一晩中みんなで寄ってたかって、代りばんこに私を縛って虐めるんでしょう」

「本気でそんな事、考えているの。私達は皆案外、紳士なんだよ。団さんだって、きっと紳士だと思うがねえ」

「男って、いざとなれば、誰でもケモノになる素質がありますわ」

「そんな経験があった?」

「……」

左近麻里子は黙して、さりげなく水平線の彼方に眼をやっていた。二十四才という年令にしては彼女は落付き過ぎていた。地味なツーピースで包まれたその肉体は、女の悲しさを過去に味わっていたのかも知れない。どことなく憂いにみちた、もの寂しげなその横顔を、波のしぶきに送られた汐風が吹きぬけていった。

この人は男性不信に陥っているのではなかろうか。失恋の痛手か、手ひどい欺されようをしたのか、いずれにしても女のさがの悲愁を胸底深く秘めている様に思えた。

私達はここかしこで、数枚自動シャッターで二人を写した。左近麻里子独りのポートレイトも何枚か撮った。

「送って下さる?」

「ええ、勿論」

「私とこへ?」

「そうですよ」

「じゃあ、何故私の住所をききませんの?」

「いいんですね」
私は名刺を彼女に渡した。更にもう一枚の名刺の裏に、彼女の口移しの住所を書き留めた。
「電話してもいいんでしょ」
「どうぞ、いつでもお待ちしますわ」
「もう怖くないの？」
「多分ね」
遥か向うで、編集長がしきりに手を高く挙げて振っている。どうやら団鬼六先生御到着らしい。私達は、あわてて引返していった。

団キ六に非ず　団オニ六であること

オール初対面である。編集長が団氏と初対面とは、私や左近麻里子ならいざ知らず、これは信じられぬくらいである。
久濶を舒すもくそもない。やあやあ箕田です、辻村です、団です、この人左近麻里子ですでもう挨拶は終り。いとも簡単そのもの。
編集長はオブザーバー。左近さんはさしずめゲストのホステス。主役は私と団氏である。
編集長はすべて私に一任したといった顔付でノホホンとしている。遠来でテープレコーダも持参していない。この対談は概ね、私の脳裡に灼きつけたものである。（対談中、団氏に対して失礼な描写ありとせば私の不徳。団先生、何卒御寛容下さい）

第一次対談

辻「団先生は私の想像していたよりも、随分お若いのですね。ペンネームから推察しまして、もう少し年配の古風な感じの、ネットリした方かと思いました」
団「いやいや、案外だったでしょう。昭和壱桁なんですよ。辻村さんの方が上でしょう」
辻「私は大正の二桁です。しかし『花と蛇』は随分続いていますね。あの筆の力はやはり若さがものをいうのでしょうね。私には到底あの根気がありませんよ。奇クはまるで『花と蛇』でもっているようなもんです」
団「とんでもない。辻村さんの『カメラ・ハント』だって、我々作家仲間じゃ大変な評判なんです。仲間が、一度機会があったら辻村さんを紹介しろって、そりゃ大変ですよ」
辻「いやどうも、買い被っていらっしゃる。とてもとても。団先生の『キ六談義』も内幕を判っきり書いていらっしゃるので、いつも感心しています」
団「あのネ、それは私としては、『オニ六談義』といって欲しいのです。私のペンネームはダン・キロクじゃなくて、ダン・オニロクなんですよ」
辻「えっ、オニ六なんですか。これは失礼しました。編集長もキ六というし、私もてっきり団キ六だと思っていたのですが、確か『花と蛇』の第一回では、以前のペンネームの花巻京太郎で書かれていましたネ。団鬼六と変えられた、何かいわく因縁でもあるのですか

？」

団「いいえ、唯何となく漠然と――。花巻京太郎のペンネームでは、他誌に時代ものを発表していましたので、奇クではひとつ新発足のつもりで、新しいペンネームでいこうと思って、それで改名したのです。今じゃピンク映画のシナリオは殆んど団鬼六でやっていますよ。ピンク女優なんかから、オニ六先生、オニ六先生と呼ばれるのも一寸変っていて面白いですから。本名よりオニ六の方が通りよくなりましたよ」

辻「私は又勝手に団先生のペンネームの由来を、自分風に解釈していたのですよ。団鬼六の団鬼（だんき）を逆さに読むと奇譚となるでしょう。六は語呂がよいから六とした。鬼一でも鬼七でもおかしい、鬼九としたら、これ又奇クになってしまうでしょう。それで中をとって鬼六、或いは六はシックスですから、セックスをもじってひとひねりしたのかなあと、いろいろ考えたことがあるんです」

団「驚いたですね。私自身、唯何となくつけたペンネームを、そう深く考察していただいているとは思いもよりませんでしたよ。じゃあ、今度からペンネームの由来を聞かれるとそう答えましょう。しかしそうなると、オニ六では一寸困ったことになりました」

辻「オニ六先生の方が、ユーモアがあって、それに何となく無邪気でいいですよ。私も以前は、緑猛比古のペンネームで専ら時代小説を書いていた頃は、それが本命で、辻村隆はルポかエッセイで弱かったのです。それが奇クの時代ものという制約から、時代考証など大変で、段々辻村隆が前面に押し出されてきて、緑猛比古は姿を消して、もう一昔になります」

団「私の好きだった、子母沢寛氏の『お天狗安』によく似たのが、緑猛比古氏でありましたね」

辻「『お天狗松昔噺』でしょう。五回許り連載しましたが、ネタが続かなくて消えました」

団「あれは面白かったですよ」

辻「団先生は作家専業なんですか？　私は余技みたいなものだけど」

団「まあ今の処はそうなってしまいました。NETテレビで、レギュラーで月数本シナリオを書いています。それに外国映画の吹き替えの翻訳。ここらがまあ本業ですね。ハイド氏の方は団鬼六のペンネームで奇クとヤマベプロのピンク映画のシナリオ、そんな処ではかなり悪名を売りましたよ」

『花と蛇』対『SMカメラ・ハント』

団「辻村さんのカメラ・ハント、実に愉しいですネ。今日はそのフオトを拝見させていただくのがたのしみだったのです」

辻「何しろ散逸するものですから、古いものはアルバムに貼って収集してあるんですが、今日は未整理の最近のものを百枚許り持参しました」

（私は鞄から用意して来たフオトの束をとり出すと、机上に並べた。いつしか左近麻里子が団氏の傍らの椅子へ坐って、熱心にフオトの数々に眼を通していた）

団「いやあ、聞きしに勝る大したシロモノですね。恐れ入りましたよ。唯慾をいえば、人みなそれぞれの好みがありましてね。緊縛といっても、余りゴテゴテ縛ったのじゃなく、女体の美しさを存分に表現した、簡潔な立ち縛りが好きなんです。こういっちゃなんだけど、このフオトの中の夫婦プレイのフオトなど、どちらかというと、美しいというより、グロですね。女性の苦悶の表情も過ぎたるは及ばざるが如しで、醜くなるとムードが壊れるのじゃないかしら」

辻「それはカメラ・ハントで以前『息づまる刹那に酔う女』という表題で書いた山本河津子さんと、今の御主人のプレイなんです。一寸ついてゆけないドギつさですが、夫婦は真剣そのもので、先刻団さんが仰有った通り、人皆それぞれの好みのある一適例なんですよ。いずれ折を見て、夫婦プレイとしてカメラ・ハントに書くつもりなんですが、私にしてもその女性にある美しさを、なるべく強調したものをハントのフオトにのせるようにしているのです。それにしても、『花と蛇』の静子夫人は、さながら責められる女性の象徴のようなものですね。それで『花と蛇』でいつも感じることですが、毎月号で、何か一つか二つ、責め場のポイントを摑んで、その責行為に対して、これでもかこれでもかと書いていらっしゃる。まるで文自体を責めさいなんでいるみたいな迫真の感じをうけるのです」

団「その通りですよ。あれで未だ遠慮しているくらいです。若し書くことを許されるならひとつの責め場を設定して、それに対して百枚でも、百五十枚でもネチネチと書き込みますよ。何しろ静子夫人は、私の分身でもあるのですから」

辻「分身といいますと、つまり団先生が静子夫人の境遇に身をおいて、責められる立場をあれこれ想像なさるといった、謂わばセックスを伴なう羞恥責の、ありとあらゆるシチュエーションを彼女に当て嵌めてみるわけですね」

団「静子夫人は、被虐対象の理想像なんですね。性の倒錯と申しますか、自分が静子夫人だったら、こんな場合どんなに羞恥にもがくだろう。こうされた場合、自分が静子夫人だったらどんな態度をとるだろうとか。つまり私は人間として男性であっても、心は自由ですから、私を静子という女におきかえて見つめてみるのです。凡ゆる責めを想像して、それを静子になり切った私の心に当て嵌めてみるのです。男が女になることを願望し、女が男らしく振舞って女を可愛がる、といった、そんな性の倒錯心理も、こうした願望の現われじゃないかと思うんですが」

辻「独身の男は愛情の対象として考える女性に静子夫人を求め、夫は妻に対して、はかしきれぬ願望を静子夫人に代替させて、心の中に巣喰っているSM的な衝動を抑制している」

団「ブルーフイルムを見たり、春本をよむといつしか欲情するでしょう。責めに対する願望とか、S的な衝動心理を、『花と蛇』によってはかしているといった、謂わば自涜的なものと考えられるのです。辻村さんの場合どうか知らないですが、責めといっても、帰する処はセックスに繋がるのじゃないでしょうか」

辻「セックスの倦怠期に於ける前戯と考えてもいいし、平凡さに飽いて刺激を求めたくなる手段でもあるし、勿論どんな場合でもセックス抜きではSMのプレイは考えられないでしょうね、本来の姿は――。唯、私のカメラ・ハントの場合、プレイを撮るということにかなり重点をおいていますから、次々と変る女性と、そこまでゆくのは少し行き過ぎだと思うのです。対一人の女性とプレイするのなら、それは勿論ゆきつく処までゆくでしょうがね。しかし奇クの執筆者多しといえども、手を変え品を変えて、これでもかこれでもかと、セックスにつながる責めを書かれたのは団先生をもって嚆矢となすですね」

団「だからね、プレイといってもセックスにつながるものなら、そうしたセックスを前提とした責めの数々を、筆にし得る可能の限界ギリギリの線まで書いてみたかったのです」

辻「スレスレの危機を孕んではいますがね」

団「度胸を据えて、或る程度覚悟の上です。ひとつは私の心の中に住む静子が、羞恥に悶え、汚辱と屈辱にのたうち、衆人環視の下に破廉恥を曝す姿が、私の憧憬でもあり、願望でもあるのです。言い換えれば、責めのS的な小説を書きながら、倒錯した私自身の心の中には、M的要素が巣喰っているのかも知れません」

辻「一連の緊縛、クリスタール、ハルン、同性愛、剃毛、A感覚、鞭打ちなど、一通りのものは出ましたね。あの静子夫人が知能指数の低い松太郎とかいう男の子供を宿した場合、いよいよ妊婦ということになりますね」

団「それを考えてるのですよ。ところが私自身、どうも妊婦というものに弱い。さて妊娠中の大きいお腹の静子夫人をどう扱えばよいか、それというのも私が妊婦に興味がないからかも知れませんが」

辻「私は妊婦を二人許り撮る機会に浴しましたが、増田みゆきさんの場合、妊娠三カ月から臨月まで、そのハラの移り変りを克明にとってゆきました。妊婦も臨月になると、もう美的なものより、とってる私の方が苦しくなりますね。みゆき夫人の場合なんか双生児だったでしょう。よく羽村京子さん辺りが昔、蛙腹というような言葉を使いましたが、正にその通りですね。おヘソがすっかりなくなってしまうんです。正常な場合でこそ臍は凹んでいますが、もうこれ以上ふくらまないというギリギリ一杯まで膨張しますと、オヘソがすっかりズンベラボーになってしまうんですよ。女体の神秘の恐ろしさを感じたですね」

団「後学のために、一度拝見したかったですね。すごかったでしょう。双生児でもそのくらい張り切るものなら、先日生れてまもなく全部なくなりましたが、あの四つ児を生む直前の、母体の膨張ぶりなんか、想像しただけでも気が遠くなりそうですね」

辻「妊婦を描いたら、又喜こぶ同好の人もいますよ。『花と蛇』は、どんな人にも一つや二つ持っているSM的な心理を、次々と広範囲に織りまぜていらっしゃる。それが受ける要素であり、原因なのかも知れませんね」

団「だから私も静子夫人だけではなしに、いろいろな女性を脇役的に登場させるのです。それらの女性も、多かれ少なかれ皆プレイの洗礼を受けた女性で、S的女性も登場するし男娼のようなM的な男が、ネチネチ女性を責めたりもします。判っきりいって、盛り沢山の責め場を展開し乍ら書くセックスものなんです」

辻「それが私には書けないんですね。セックスは当然責めやプレイに最大につながり乍ら努めて逃避し敬遠しているんです。MでもSでも、それだけのSMの行為で終ることは先ずないんですね。プレイという言葉の意味に

はSMプラス、セックスを含んでいるのですが、SMのみを前面に押し出して、セックスには殆んどふれない。ずるいんですがね。奇クの読物の中でも、羞恥責めという名を藉りて、堂々とセックスを書いているのは団先生だけでしょう。大胆すぎて、私など到底描けませんが、それだけに伏字が最近すごくふえてきましたネ。大体推察出来る程度の(……)ですが」

団「だから、仲間の悪友連は、出版社へ送る前の生原稿を、先ず見せろといって、やいやい押しかけてくるんです。だけど、それが人間本来の、責めの衝動心理じゃないんですか。Sの字をもって象徴されているサジストの本家、マルキ・ド・サドの小説だって、殆んどSのプレイは前戯的なものです。帰する処、アーヌス代替のセックスで終っていますが、当時としては妊婦が怖かったからに過ぎないんです。今の様な時代なら、当然代替じゃなく、そのものでいくでしょう」

辻「『悪徳の栄え』など、その最たるものですからね。A感覚もクリスプレイも、所謂描ききれないものに対する代替かも知れませんからね。いずれもそれによってセックスの昂奮を換起させるのですから。最近、ある同好の人から面白い話をききましたが、『花と蛇』の海賊版があるそうです。海賊版というより贋作といった方がいいのですが、ストーリーの行程だけは、団先生の『花と蛇』そのままなのです。違うところは羞恥責めのシーンとなると俄然ズバリの表現で、微にいり細を穿って描いてあるのですね。ガリ版刷りらしいですが、実にうまいところへ眼をつけたものだと思いますね。私も一度読んでみたい位いですよ。責め春本のテーマを随分提供していらっしゃるわけです」

団「謂わば変型の性愛小説としてとられても仕方ないんですが、例えば剣の道にも柳生真影流や真庭念流といった正統派もありますが、私は鎖鎌で一家をなした宍戸梅軒のような変型派もあっていいと思うのです。正統派的性愛小説の作家も、最近ではレスボスやソドムの世界を描いたりするようになって来ました。鎖鎌流のSMプレイ的性愛小説も、偶にはあっていいじゃないでしょうか。戸川昌子さんにしてもそんな世界を女であり乍らよく描いていますし、梶山季之氏の小説にしても、鎖鎌流のものが大分使われていますよ。『遊戯の報酬』なんて小説は、奇クの影響を随分うけた内容で、遊戯とはそもそもプレイなんですからね」

辻「確かにそうした傾向になりつつありますね。世の中が泰平ムードだと、人々は泰平になれて、追い追い刺激の強いものを求めるようになるのでしょう。『金瓶梅』の、責めに徹したように書き変えたピンク芝居が、堂々と一流のショウ劇場で上演されて若い女性も結構覗きにきているようです。羞かし見たしという微妙な心理なんですね」

団「『花と蛇』も一種ののぞき見的なんですよ。やくざの衆人環視の中で、さまざまに羞恥と屈辱におののく彼等の痴態を、絶対の安全圏からのぞいているといったのが『花と蛇』なんです。言い換えればマスターベーションしているんですよ、あの小説によって」

辻「人間誰しも、多かれ少なかれ悪徳への願望があるものです。当代一の美人女優や人気絶頂の女性歌手などを誘拐して、散々弄んだ挙句、高慢や嬌奢の鼻を、へし折ってやりたい。全裸で縛り上げて、フオトをとり、警察へ言いつけるとこのフオトをばら撒くぞと脅すと、彼女達は人気の没落を恐れて、或いはそのままで、こと勿れで済ましてしまうかも知れない。実際、それに類似した事件も発生しています。しかし現実は、理性が働いて、

頭がよくて、金のある奴で、充分可能性のある人間が反ってやらない。智能指数の低い人間が衝動にかられてやるから、すぐ捕ってしまう。そんな心の片隅の、ほんの一握りの悪徳の欲求を『花と蛇』はみたしているように思うのです。その欲求心を『花と蛇』で発散させて、結局は自己満足してしまう。団先生の仰有る精神的オナニーとなるんですね」

団「それで欲求不足なら、夫婦プレイという安全な、誰からも文句のいわれない方向へ進展してゆくのかも知れませんね」

オニ六先生プレイ開陳！

団鬼六氏とのSM談は汲めども尽きなかった。編集長が先刻から、しきりに時間を気にしていることに私は気付いた。何て迂かつなのだろう。左近麻里子は最終新幹線で帰る筈なのだ。とすれば話に夢中になっている間も、時間は容赦なく経過していったのだ。

私も編集長も一泊の予定だし、団鬼六氏も棲家の真鶴まではタクシーで飛ばして数十分足らずなのだ。話は徹宵でも出来るではないか。問題は一刻も早くプレイすべきであったのだ。でなければ哀愁の佳人、左近麻里子をわざわざ同伴した甲斐がないというものだ。

「団先生——話に夢中になっていましたが、早速ここらでひとつプレイをやろうじゃありませんか。つい話が弾んだものだからうっかりして——実は左近さん、八時頃にはもう帰るのですが」

「えッ、泊るのじゃなかったのですか、そいつは大変、もう五時近いですよ。それならそうと先に仰有っていただければ、話は後廻しにしたのに」

「御免なさい、ついうっかりしちまって。食事の時間を少し遅らせましょう」

「そうですね。しかし左近さんも夕食すまして帰るとなると、そう矢鱈におそくも出来ませんし、六時半頃にしましょうか」

「一時間半あれば、かなりプレイ出来るでしょう。じゃあ早速」

私は電話で夕食の時間を六時半に頼んだ。忽ちバタバタと狭い部屋の中は慌ただしくなる。私や編集長は馴れているから、手際よくカメラ準備をすませる。二人ともストロボ使用である。団先生もおもむろにカメラを持ち出して来た。

「あれッ、フイルムを買ってくるのを忘れちゃった。辻村さん、お持ちじゃありませんか」

私は予備として、熱海駅前の売店で買った二本のフイルムのうちの一本を彼に渡す。

「ストロボをつけないんですか」

「ええ、最近カメラ屋で買ったのですが、暗くても撮るというので——」

カメラを拝見すると、最近カラーが夜でも撮ると宣伝しているヤシカエレクトロニクス35である。秋山夫妻もこれを持っていて、私はD・P・Eを依頼されたが、ネガは無慚だった。成程、焦点はどこか一個所合っているのだが、前後は完全にぼけていた。螢光灯ぐ

らいの光源なら、焦点深度が浅いのは当然である。いくら夜うつるとはいえ、絞りを完全に開ききったような状態では、いいのが、撮れる筈がない。団先生自身、カメラには弱いのですよと仰有ってるが、知識の方も未だ少しお弱いようである。ストロボはそれぞれ一台ずつしか準備してこなかったから、オニ六先生に貸すわけにもゆかない。まあ夜でも撮れるというカメラで、焦点深度のうんと浅いフオトで我慢なさるより仕方あるまい。

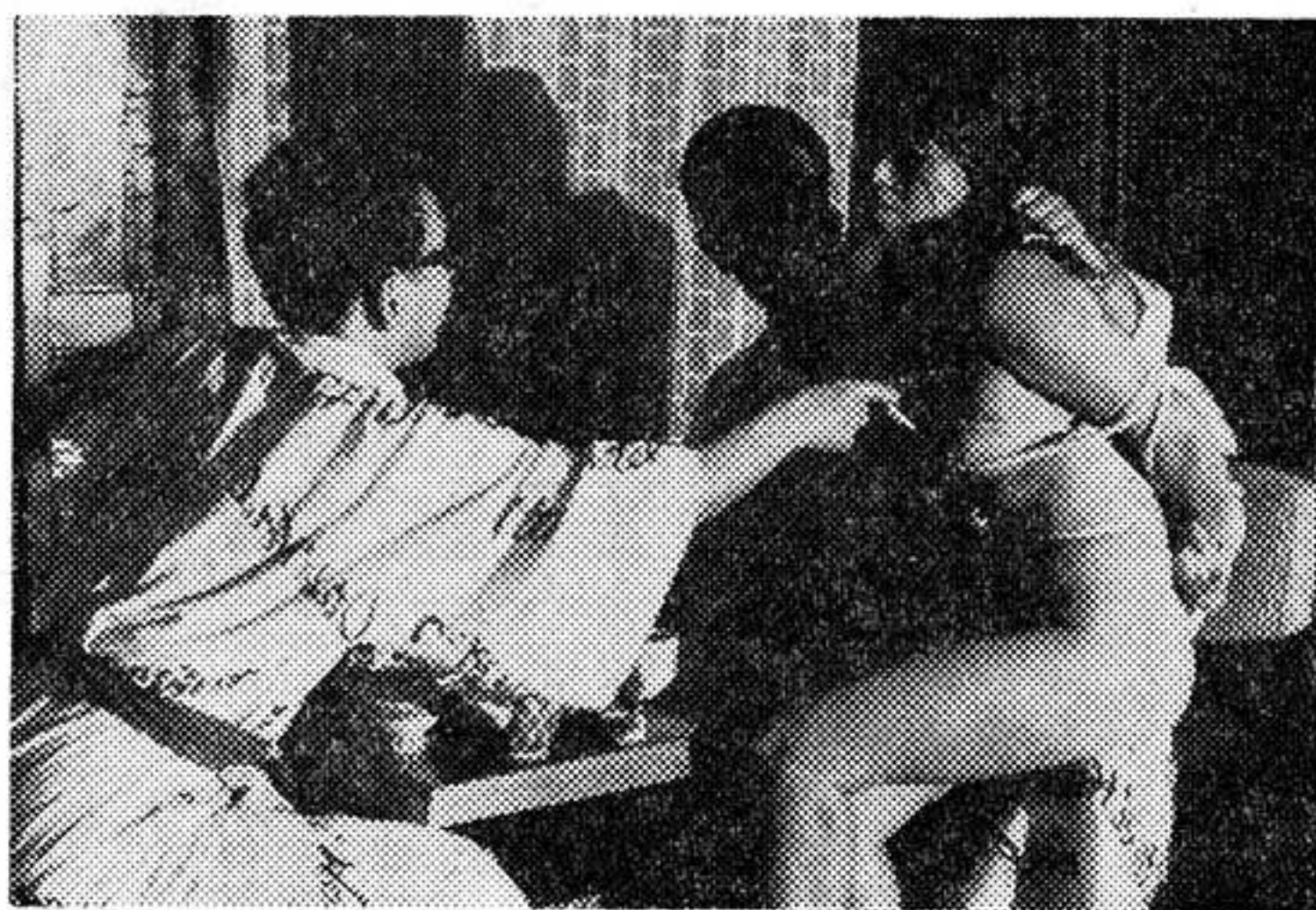
準備する間に、左近麻里子は匆々にバスにつかって、浴衣を裸に纏って出てきた。簡単なメイキャップを始めている。

「辻村さんは縛りにも強いがカメラも強い。私は又、カメラは弱くて、しかも緊縛となるとカラキシ駄目なんですよ。オニ六談義にも書きましたが、どうも女性を縛るのは苦手でしてね」

オニ六先生は、プレイの時期、頓に迫ると見るや、そろそろ弱音を吐き出してきた。

「御謙遜でしょう。『花と蛇』は申すに及ばず、数々のピンク映画の縛りシーンなんかの演出をなさっているし、是非お手並拝見とゆきたいんですよ。左近さんも団先生に縛られるのを大いに期待しているんですよ」

私はハッパをかける。因らせたいような、そのくせ、この場はオニ六先生に花をもたせてあげたい様な微妙な心理であった。

編集長は私達のやりとりをニヤニヤ面白そうに傍観している。左近麻里子は早く始めないのといわん許りに、私とオニ六先生の顔を交互にみている。私達も宿衣に着換えた。

「兎も角、辻村さん、ひとつお手本を示して下さいよ。頼みますよ」

時間が経つ許りだ。潔ぎよく私は引受けてたった一本きりのゴツゴツした新縄をとり上げると彼女に近づいていった。さて一本の縄をどう使うべきか――。

彼は立ち縛りが好きだといった。しかもゴテゴテと縄の掛らぬポーズがいいということだ。一本の縄ではゴテゴテしようにも仕方がなかった。反って幸いである。

「じゃあ、左近さん、脱いでくれますか」

彼女はうなずくと、三人の男の環視の中央で、いさぎよく宿衣をかなぐり捨てた。程よく張った胸のふくらみ、くびれた胴、ぐっとボリュームのあるヒップとモデルのスタイルとしては満点に近い肢態であった。山本一章が惚れ込んだのも無理はない。オニ六先生はゴクリと唾をのみ込む音をさせて、眼を大きく見開いて、早くもストロボなしのカメラを大上段に構えていた。私の緊縛の行程をとるつもりなのであろう。

簡素な床の間に柱が四本おあつらえむきに立っていて、それが、部屋付のバス・トイレへの入口の境目の役も果していた。

柱を背にさせて、両手を後ろで縛ると、ぐ

るぐる体に巻きつけて脛まで巻いていった。
「新しくて堅いので少し痛いですわ。なるべくお手柔らかにね」
縛っている私に、左近麻里子が小声で囁やいた。彼女は撮る角度によって、凄く妖艶にみえ、哀愁を含んでみえ、又野暮ったくもみえた。
オニ六先生は、或いは離れ、時には近々と接近し、下からねらい、横から構え、しきりにハッスルしていた。私も縛り終ってカメラを構え、数枚を忽ちにして撮る。柱ごと巻きつけた体を徐々に移行させる間も、オニ六先生はしきりにカメラを構えている。柱を背にして廻るうち、縄がゆるんできた。これ以上撮っても緊縛感はない。私はカメラを置いて解きにかかる。
「さあ、オニ六先生、次はやって下さいよ」
私は縄をバトンタッチした。雰囲気にもようやく馴れたオニ六先生は、今度は躊躇せずツカツカと彼女に近寄っていった。
「ああ、あなたはいい体をしてますね。うん実にいい、映画に出て下さいよ。あなたならいける。緊縛女優ナンバーワンにしてみせますよ。ギャラも、うんとはずみますよ。どう東京へ出てきませんか」
オニ六先生は後手に彼女を縛って、胸に縄を掛け乍ら、しきりに口説いた。
「私なんかとても——」
左近麻里子は、この思いがけない言葉に、咄嗟には返事も出来ず、困惑した表情になった。演技、台詞など、ズブの素人の彼女にとって、それが例えピンク映画にしろ、一応女優と名のつく職業である以上、とても大それたものだと考えたに相違なかった。
「うん大丈夫、お芝居なんか私に任しておきなさい。パクパク口を開いて、言葉らしきものを言ってればいいのだよ。すべてアフレコだから。台詞はアルバイトの女子大生がうまく合わして喋べってくれますよ。どう、思い切ってやる気ない？」
縛り乍ら彼は尚もしきりに口説いていた。左近麻里子の否定の言葉が段々弱くなってきた。少しは心を動かし始めたのではなかろうか。それほどに、オニ六先生の口説きは彼女に一眼惚れした熱心さに加えて優雅、且つ情熱的であった。
「どうでしょうね編集長、この人を私にいただけませんか」
埒あかずと見てか、オニ六先生の鉾先は、編集長へ直截に迫った。
「いやいや、駄目ですよ。うちにとっても大切な人ですからね」
「そんな薄情なことといわずに、左近さんを口説いて下さいよ。頼みますよ」
団先生、どうやら本気らしい様子である。編集長も、その熱意に押されてタジタジとなった。苦笑し乍ら、
「ハハ、冗談ですよ。私個人の意志で束縛も出来ませんしね。まあ、御本人がよければ大いに結構ですが、どう言いますかね」
「きっと売出してみせますよ。私がこう言っちゃ悪いが、ピンク女優さんはズベ公めいた人が多いんですが、この人には全然そんなところがない。何か憂愁の翳をどこかに漂よわせた清純な感じがするんです」
「いいところのお嬢さんですよ」
編集長はニヤリとして、左近麻里子の横顔をみながら、呟やくようにいった。
「そうでしょうね、確かにそんな感じを受けます。けれど役柄は、私ならバーかどこかの悪女的なマダムにしますね。一番緊縛の多い主役にもってゆく為にね。それで緊縛の演出は辻村氏にお願いして、原作はオリジナルで書いてシナリオも私がつくります。特技演出辻村隆、主演左近麻里子とね。これなら確か

に奇クのファンにうけますよ」

団鬼六の夢は、無限に拡がってゆくようであった。彼は胸縄をかけ後手に縛った左近麻里子を、抱きかかえる様に壁ぎわ近くまで押してゆき、壁にそわせて直立させて、演出の眼でシゲシゲと彼女の裸身に見いっていた。

彼も又、山本一章と等しく、一眼惚れで彼女の裸身が気に入ったらしくみえた。確かに左近麻里子には妖しい魅力があった。彼女が服を着て、つつましやかに控えていた時にはオニ六先生もさしたる関心を示さなかった。それが地味な目立たぬ平凡さからであろうか。それが一旦裸身を曝した時、私自身も呀っと眼を瞠るような妖艶な、みずみずしい魅力が女体から発散し出したのである。左近麻里子の女体から発散する妖しい毒気に、オニ六先生も私も当てられたらしい。

「ピンク映画のお縛り女優で、左近さんほどの人は正直いって、いませんよ。辻村さんもそう思いませんか」

「そうでしょうかね。眼の肥えておられる団先生が仰有るのだから間違いないでしょう。しかし確かに、この人の裸身は素晴らしいですねえ」

私は合槌をうった。オニ六先生は眼を細めて尚も見入っている。左近麻里子は擽ぐったいような、嬉しいような、そのくせ困ったような表情で佇立していた。

「ウン、本当にいい、本当にいい娘だ。すごく感じて来たね。左近さん、あなた縛られることに抵抗を感じる?」

「いいえ別に――私も綺麗な緊縛でしたらいいと思います」

「嬉しいね。あなたはMですよ。純情なM女性なんだなあ。ああ、一度吊ってみたくなった。あなたに静子夫人のイメージがダブってきましたよ」

「団先生になら、吊られてみたいですわ」

「うんやりましょう、約束しましたよ。この部屋はダメだけど、東京へ出て来て下さい。その折はハッスルしますよ」

オニ六先生は純粋に感激しているようであった。私は後方から二人のやりとりを撮っていた。左近麻里子は本当に上京するかも知れない。そんな予感がフト浮んで消えた。オニ六先生の歓喜は最高頂に達しているかに見えた。彼女も又、団先生のこの純粋さに、かなり心を打たれている様に思えたからである。

「私ばかりやって悪いけど、もうひとつ変ったポーズ頼みましょう。じゃあ、ここらでひとつ坐って、あぐらを組んでいただけませんか」

オニ六先生はすっかり調子づいて来たようであった。私はその傍らから、余った縄を首から胸に廻して、あぐらに組んだ両足を縛って引き絞る。三人のシャッター音が、あちこちで微かな音を立て、ストロボは明滅した。

「じゃあ、私がひとつ柱縛りをやってみましょう。静子夫人のイメージを、この人にダブらせてね」

ハッスルし出したオニ六先生は、彼女の縄をみずから解くと、その侭、息もつかせず柱

の側へ引っ立てるようにしてつれていった。六、七メートル近い、長い一本の縄は扱いにくいのか、彼は縄を二つに分けて曲げて二筋にした。二筋にした縄で先ず両手を縛り、二重許り胸に巻いて、股近く両腿にかけ終ったら、縄の端がきて足らなくなってしまった。オニ六先生はしきりにもぞもぞやっている。
「辻村さん、この縄の最後どうするんです。これじゃ恰好がつきませんよ」
縄の端っこを握って、彼は閉口した顔付で私に助けを求めた。
「太腿に挟んでおいたらどうでしょう。折角団先生じきじきの縛りですから。じゃあ撮しますよ」
既に彼の縛り過程を数枚フィルムに納めていたが、改めて声をかける。団鬼六氏は自分自身の書く『花と蛇』の文中の縛りのようには仲々ゆかず、やはり彼自身告白するように確かに縛ることは不器用であった。想像と現実はかくも違うものであろうか。私と編集長は、その縛りに対して、顔を見合せると、微苦笑を洩らした。余りにも初歩的で平易すぎたからである。しかし、当のオニ六先生は、ひたいに汗すらにじませて、懸命に緊縛ととりくんでいるのだ。笑っては申訳ない。

フト腕時計をみると、六時を少し廻っていた。女中さんが夕食を運んでくる時間に、もうあと、三十分もない。私は内心少しいら立ってきた。一巻のフィルムを撮り終えて、新らしいフィルムを装填した許りである。もう少し撮らないと、折角のチャンスなのに惜しい気がする。
「時間ももうあまり有りませんから、急いで変ったのを少しやりましょう」
団氏に代って、彼女の縄を解く。いや、解くというより、太腿に挟んであった縄尻を抜くと、スルスルと縄は数秒間で勝手に解けておちた。両手の縄も甘く、左近麻里子が両手をぐっと縮めたら、縄はスルリと蛇の抜け殻のように柱に添って落下した。
「菱型の股縛りをやってみましょう」
私が近づくと、団鬼六氏は、緊縛に関しては一目おいているのか、あっさりと、私に縄をよこしてくれた。首縄をかけて、胸で菱型にし、素早く両手を縛って股縄にして引き締める。二本の股縄は、深々と陥没してくいこんでいた。
オニ六先生は私の縛ってゆく過程を、感心したように、みとれていた。
「流石に早いですなあ、辻村さんは……」
「一本の縄で、少しあっけないんですが、さあ撮って下さいよ」
もっと犇々と縛ってみたい疼きが湧いてくるが、いたし方ない。
夢中になって三人がとりまくっている時、錠をかけた部屋の入口がドンドン叩かれた。
「何だろうね」
部屋の入口に近い団氏が、二の間への襖をあけて、内から把手を廻す。
「夕食をもって来たんですよ。どうします」
「早いですね、六時半といっておいたのに」
私は改めて腕時計をみた。六時十五分だ。そろそろ運び込んできたに違いない。
「ち、ちょっと待って下さい」
私は、左近麻里子の体を抱えるようにしてあわてて、バス・トイレ室の方へ駆け込むように飛び込んだ。ノコノコと宿の女中に入って来られては恰好がつかない。部屋の中は電気のコードや、ストロボ線、カメラのたぐいで、狭い部屋がごった返してある。
料理を上りがまちへ置いて女中は出ていった。やれやれ——。
私は再びバストイレ室へ引返す。縛られた侭、左近麻里子は裸の身をかくしようもなくションボリとたたずんでいた。

「御免御免、女中が食事を運んで来たものだから、あわてちゃって…」

私は彼女の体を抱きしめるようにして、座敷に戻って来た。

「手首が少し痛みますわ。縄が固いからでしょうか」

彼女は遠慮勝ちに、私に囁やくように訴えた。

「じゃあ、もうほどこう。いつも使っているのなら、少々長くても痛くないんだけどね」

言訳がましく弁解し乍ら縄をとく。彼女の手首に深々と、くっきり縄痕が刻まれていた。

「左近さん、新幹線の下りの最終は何時だったかね」

編集長が、きいた。

「京都へ帰るのは、たしか午後八時の熱海発だったと思います。駅で待っている時、時刻表を見ておいたのですけど……」

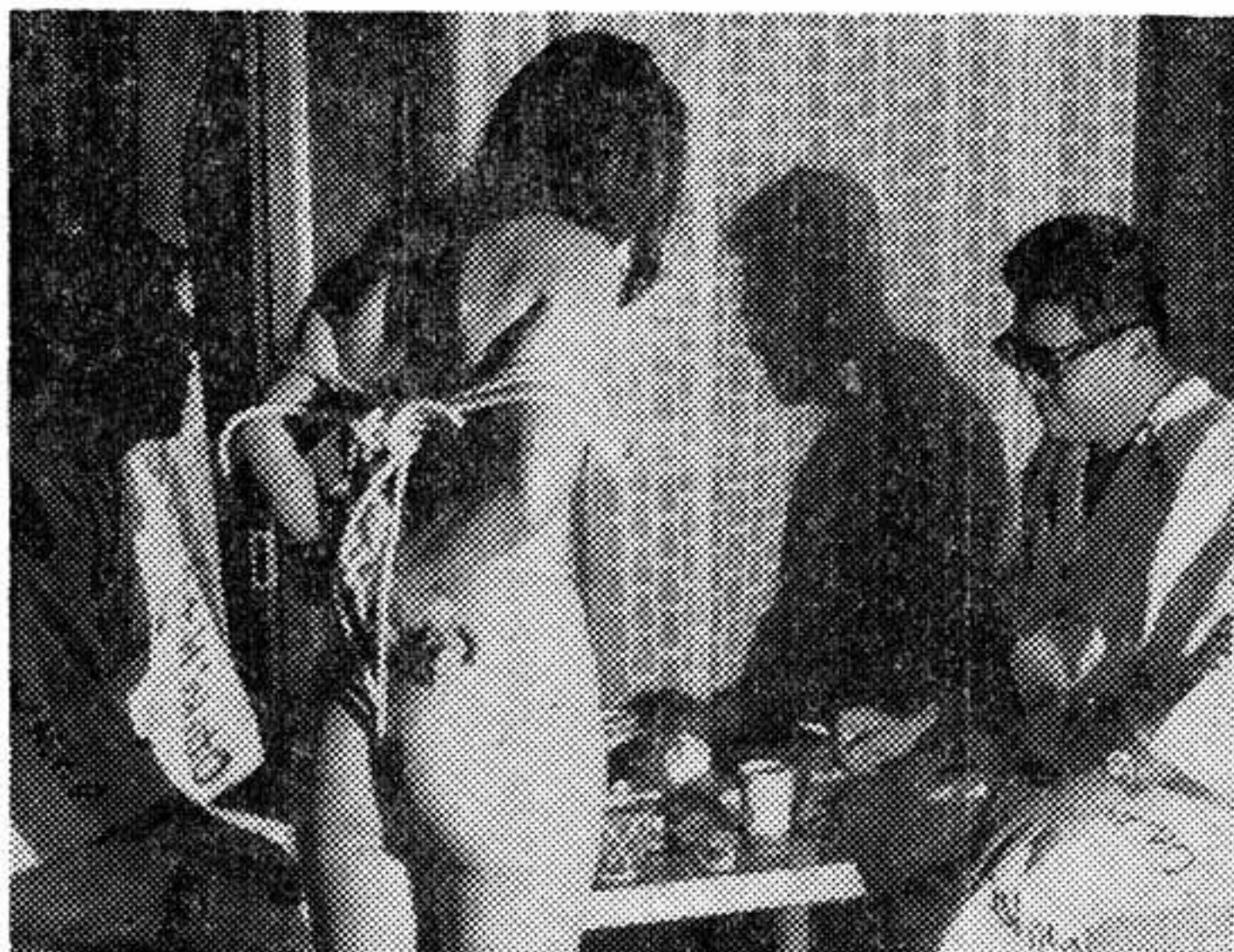
「それでも夜の十一時近くなるんだね。それに乗らないと帰れないんだな」

「いっそ、思い切って泊ってもらったらどうなんです」

オニ六先生は未練たっぷりだった。この感激と昂奮をもう少し持続したかったに違いなかった。口には出さぬが私も同じ思いであった。もう少し手をかけて縛りたかった。

「ええ、私もそうしたいのですけど明日どうしても行かねばならぬ大切なお仕事があるものですから、どうしても…」

「残念だなあ、一体お仕事は何なんです?」

「それはチョット…」

「じゃあ、もうよすしか仕方ないんですね。惜しいなあ」

オニ六先生は、如何にも無念やる方なき表情で、髀肉の嘆をかこった。

「それじゃ最後にひとつ、この浴衣の紐で簡単に縛って、団先生が『花と蛇』のラストシーンで静子夫人を縛ったようにロープをぐるぐる巻きに腰に巻きつけてみたら如何です。あのシーンは、よかったですよ」

私は映画『花と蛇』のラストシーンを回想して提案した。

「いいですね、やりましょう。その位の時間はあるんでしょう」

私は、団先生と私の腰紐を解いて、左近麻里子の両手を後に縛り、胸に紐をかけた。その間に、団先生はかがみ込んで近々と体をよせて、腰から腿へと縄を巻きつけていった。あわただしくシャッターをきって数枚。すぐ又解きにかかる。

「どうですか、その胸を腰紐で縛った侭で、応接セットに坐った先生の膝へ、彼女を抱き上げて、ぐっとうしろから抱きしめたポーズなんて、いかしますよ」

「いや、どうも。いいんですか、そんなことして——」

「それを、向い側に座った辻村隆がニヤニヤみている、てな図はどうです」
「有難すぎて……」
　私は照れ気味の彼の胸の中へ、倒し込むように左近麻里子の白く柔らかい女体を押しつけていった。カメラを構える私達をみて、団氏はさり気なく机上のタオルでフワッと前を蔽ってやった。団鬼六氏の抱えた手が、いつしか彼女の胸の辺りを撫でて這っている。ポーズを少し変えにいって、ついでにタオルを剝いでくる。左近麻里子は神妙に彼に抱かれて黒くよく光る円らな瞳を閉じた。絶えずつき纏っていた憂愁の翳りがその時消えて、陶酔に似た微かな歓喜の表情が、彼女の面上に走るのを私はこの眼で判っきり確かめた。紛れもなく彼女は団鬼六氏に好意を抱いたようであった。若し私と編集長という二人の邪魔者がいなかったならば、彼の唇を左近麻里子はおそらく拒まなかったであろう。そんなプレイの充実したフィナーレが、快よい疼きとなって、私の心に鮮烈な印象を灼きつけたのであった。

緊縛的ピンク映画考現学

　熱海という、日本でも有数の泉都のホテルに来ていながら、左近麻里子が室内のちっぽけなバスに、さっと入っただけで、私達三人は未だ一風呂も浴びられぬ慌ただしさであった。対談につぐプレイの連続で、流石に一様に微かな疲労の色を泌ませていた。
　左近麻里子の特急に乗る時間もあるので、バタバタと部屋中を片附け、電話をする。待ち兼ねたように女中が料理を運んでくる。
　私達はお互の健康と、将来の親交を誓って盃で乾杯した。
　オニ六先生は酒にはかなり強い方だった。ビールとチャンポンで、談笑の合間にも盃はたえず空になる。日頃は車に乗ることもあって、殆んどたしなまぬ編集長も、よく飲んだし、私も今夜の酒は滅法旨かった。つい度を過していった。それというのも空になった、私や団先生の盃に、左近麻里子が傍らからよく気を遣っては酒をついでくれたからであろう。彼女も奨められる侭に、コップに軽く一杯のビールをあけて、すぐ御飯にした。どことなく寂しげなかげりはいつしか消えて、私達の遠慮無用のSM話を、時々微笑みを浮べては愉しげにきいていた。それでいてつつましく淑やかに、ちっとも余計な口出しはしなかった。
　話の内容が内容なので、女中さんには遠慮してもらって、プレイと奇クで結びついた私達四人、まるで十年来の知己のように、よく語り、よく談じ、愉快に興じた。

第二次対談

辻「『柔肌しぐれ』は見損ないましたが『鞭と肌』はみました。あれは恰度『美女拷問』との二本立てで、よく客が入っていました。最近、何かピンク映画のシナリオを書かれたのですか?」
団「ええ、先日『肉地獄』というのがクランクアップしました」
辻「ああ、それなら、大阪でも来週辺りから千日前のオリオン座で封切られますよ」
団「早いんですね、案外。それに今撮影中の『奴隷妻』というのですが、どうせ私のシナリオだから、多かれ少なかれ縛りシーンは二本のどれにも入っています」
辻「『奴隷妻』なんて題は、如何にも奇ク向きですね。それでその映画、この熱海辺りでとらないんですか」
団「明日はロケで石廊崎に行きます。あッそ

うだ、いい機会だからお二人共是非一緒にいらっしゃいよ。左近さんも一緒にどう?」

辻「是非拝見したいですね、やはりヤマベプロなんですかね」

団「そうです。しかし、私は先程の辻村さんの縛るのを見ていてつくずく思いましたね。何しろ製作者の岸信太郎始め、監督からチーフ、俳優に至るまで誰も縛れないんですね。私のように縛ることにかけては全然苦手な者が、一番マシなんですから、緊縛といってもいい加減なものです。どうです、明日ロケ地へ行って、ひとつ緊縛プレイの指導をしていただけませんか」

辻「いやどうも。しかし明日急に突然行ったからといって、そううまく緊縛のシーンがあるわけでもないでしょう。それでピンク女優さんの主演は誰?」

団「それがね、新鮮味を出すために、ニューフェイスの若い新人なんです。反っておとなしく素直で使いいいんですよ。しかしまあ、ここまで折角来られたのだから、是非行ってほしいですな」

私も食指が動いた。出来るものなら覗いて見たい気持、しきりであった。

辻「今夜ゆっくり編集長と相談して、明日にでも御電話しますよ」

私は編集長と帰阪を同行動するつもりだったので即答は、さけた。

団「是非万障くり合せて下さいね。でも万一今回が駄目だったら、今年の十二月にカラーで時代物の縛り映画をとる予定なんです。その時は辻村さん、きっと緊縛の方の演出をお願いしますよ。町娘が雲助に襲われて、縛られてあれやというシーンなんか考えているんですよ」

辻「それは愉しいですね。必ず行きますよ。何なら雲助になって出演しましょうか」

団「そりゃそうしていただけば、願ったり叶ったりですよ。タイトルにも辻村隆特別出演とか、大きく入れましてネ。こりゃ奇クで受けますよ」

辻「どこに出ていたんだいと悪友から聞かれて、雲助――（爆笑）」

団「じゃあ、雲助を主人公にしよう」

辻「そんな主人公の映画、きき始めですよ」

団「私がピンク映画に関係した最初に、製作者に進言したんですよ。時代劇仕立のパートカラーで、嗜虐をふんだんに盛り込んだものをやったら、必ず当るってネ。ところが全部SM気のない連中だから、本気で相手にしてくれない。専らベッドシーンや、お色気ふんだんのピンクもの許り撮っている。そのうちに新東宝興業で小森白さんが『拷問刑罰史』をとった。あれは凄くうけて儲かりましたからね。その小森監督が全然SM気なしの人と来ていましてね。ピンク映画がオッパイ丸出しなのに、気を使って、オッパイを縄で縛ってかくすんです。その縛り方も、こうだろうか、ああだろうかと、勝手に想像して縛ってみたんですね。縛りについちゃ私も兎や角言えた柄じゃないけど、辻村さんのようなプロ

じゃないんですよ。縛りに関してはズブの素人なんです。それでも凄く当った。それみろ、だから言わんこっちゃない。あの時やっておけば、今頃笑いが止らないのにと言ってやりました。まあ遅蒔きながら、そんなことでいよいよ年末には、ヤマベプロ第一作の時代劇のパートカラーをとりますよ」

辻「緊縛にかなりウエイトをおいても映倫の方は大丈夫なんでしょう」

団「必然性があれば絶対大丈夫でしょうね。映倫の方は専らエロの方に許り眼を光らせていますからね。仄かなエロチシズムを匂わせておいて、その代り、緊縛や責めの方はうんと沢山盛り込むんですよ」

辻「うずうずしてきましたよ。新高恵子や美矢かおる辺り、犇々と縛れたら楽しいでしょうな」

団「カメラ・ハントによかったら、紹介しますよ。Y嬢、S嬢、A嬢なんか、私が口をきいたらO・Kしますよ」

辻「是非ともお願いします。いよいよ私も東京へ出張することになりそうですな」

団「フーテン族の女の子も一人知っています」

辻「段々、慾が出て来ます。ところで、この二本の映画、どんなストーリーなんです」

団「このシナリオのどちらかを奇クに発表しますが、映画の方が先に封切られるかも知れません。しかし最近のピンク映画は、どのプロも嗜虐趣味が横溢して来ましたね。何らかの恰好で縛りシーンが入っているが、皆満足なのが少ないようです。それというのもそんな傾向だからやるのであって、演出も俳優にもSMの気なしでしょう。羊頭狗肉が多いんですね。私の書いた脚本二冊、今夜持って来ましたから、話すと長くなるからお持ち帰り下さい」

辻「ピンク映画でも、奇譚クラブ連載、団鬼六原作なんて広告ビラが出るようになりましたね。内容は殆んど団先生の書き下しなんですが、大した人気ですな」

団「ええ、東京のある劇場なんか、表看板にすごく、そのことが大きく書いてありましてネ、当の書いた本人がびっくりしているんですよ。奇クも有名になりましたね。古本屋なんかで、グラビヤのあった頃の本なんか、定価の三倍も五倍もの値がついているんだから、段々と稀少価値が出てきました」

辻「映画『花と蛇』では、奇クの読者は大分がっかりしていたようですが、あれがギリギリの限界でしょうね」

団「小説通りなんて、とてもじゃありませんが、最初のシナリオはもっと凄かったし、長かったのです。あちこち削られちゃって、遂々あんなものになりました。私自身不満なのですから、そりゃ『花と蛇』の愛読者の方は物足りなかったと思いますね」

辻「私はあの静子夫人になった女優の、紫千鶴さんを、東京のK氏から紹介してもらってハントする予定だったのです。あの人は神戸の人なんですよ。処がその後ピンク女優から足を洗って堅気になったとかいうことで、遂々お流れになったんです。当時は残念でしたが、もう今となっては、ニュースバリューも薄れましたからね。ピンクスターをハントするとしても、矢張り現役でないとね」

宴(うたげ)のあと佳人との別れは淋し

七時四十分頃、時間ぎりぎりまで左近麻里子は私達につき合っていたが、遂に別れる時間がきた。既にホテルの表玄関にハイヤーが彼女を待っていた。順調に走れば、駅までは五分とかからぬ距離であった。

「いよいよお別れですね。オニ六という人間は、こんな男だと覚えていて下さいね」

オニ六先生の眼は、やるせなげにまたたいていた。
「本当に愉しいひとときでしたわ。団先生も辻村さんも、とてもいい方許りですわ」
左近麻里子は、軽くメーキャップした侭の顔をほころばせた。やや太めに描いた眉の下で、黒く大きな瞳が、別れを惜しむかのように、きらきらとうるんで黒耀石のように光った。黙って彼女は手を差出した。団氏がその手を力をこめて握る。ついで私が柔らかい指を押しつぶすように堅く握手する。
「さあ、時間だね。降りよう」
編集長が促がした。私はカメラを持った。別れのせめてひととき、去りゆく彼女のイメージをカメラに納めたいと思ったのだった。七階から一階へ――。
「ゆっくり、大きな浴場でつかりたかったですわ。折角熱海まで来たのに、私の家のお風呂よりチッポケなんですもの」
エレベーターの中の彼女の言葉は、今日のあわただしさを裏書きしているかに思えた。
団先生と左近麻里子は仏頂面で人待顔のハイヤーの運ちゃんの心をよそに、二人並んで私のカメラに入った。電池装填のストロボが瞬間に光る。

さよなら、さよなら――言葉を交して、左近麻里子一人をのせた車は、忽ちにネオン輝やく熱海のメインストリートを走り去っていった。熱海から京都まで、夜の特急で彼女ひとり、どんな感懐を抱いて揺られてゆくことだろう。有難う麻里ちゃん！　又逢おうね。
ホテルの玄関に男三人、しばし空白の虚脱状態で佇んでいる。
「少し散策しましょうか、その辺りを」
虚脱を破る編集長の声に、我に返って、私達は道路を横断すると、歩道にしつらえられた公園の、噴水の前のベンチに腰を降した。
「いい娘でしたね。凄く協力的で、素直で」
独り言のようにオニ六先生は呟いた。
「これを機会に、又とれますよ。辻村さん、二三枚ここらで、記念写真とっておこうよ」
編集長が一番、冷静だった。
「大塚啓子さんに東京でお会いになったそうですね」と私。
「ええ、突然訪ねて来て吃驚しましたよ。彼女は左近さんと違って、陽性な明るい娘でしょう。その時はプレイ出来なかったけど、本人はその気でいたらしいんですね。惜しいことをしましたよ」
「彼女、とても逢いたがっていますよ。連絡しましょうか」
「ええ、今度こそ撮りますよ。しかしもう何年になるかなあ、私が麻布におった頃でしたからね。こんな文筆業でしょう、東京の騒音に堪えられなくなって、真鶴に恰好の家があったので引越したのですが、静かでいい環境ですよ」
自転車に乗った若い男が、車を止めると、降りてツカツカ近寄って来た。
「旦那、おもしろい処へ案内しましょうか。ズバリですよ、ええ、どうです」
「ああ、いらないよ。又にするよ」
団氏が、あっさり断ってくれた。古ぼけた八ミリ、よごれた女の痴戯。今更そんなものを見て何になるのだ。もっともっと愉しいことが、今の今まであったじゃないか、と言わん許りの口吻だった。ポン引らしき女が近寄り、エロバーの客引きがしつこく迫る。夜の女達だろうか、若い女が二、三人遠くから私達の様子を見ている。夜の幕と共に、色餓鬼にむらがる女獣共は、爪をといで獲物をねらっていた。色と女と金に明け暮れる歓楽境に、いで湯の情緒はもうクスリにしたくもなかった。
私達は、いささか辟易してホテルに引揚げ

て、食べさしの料理もその侭になった部屋に戻って来た。改めて男同志の酒のやりとりが始まる。女客が帰ったと見て、女中が酌につい てきた。ささくれだったそっけなさ。相手にする気にもなれず、女中を無視して、私達は放談に没入していった。

（第三次対談）

オニ六先生 交友録や生い立ちのこと

団「私の古くからつき合っている連中が、一度、辻村さんを紹介しろって聞かないんですよ。そんな連中と座談会でもやれば面白いと思いますがね。かなり、芸能方面の有名人もいますよ」

辻「どんな方達なんです」

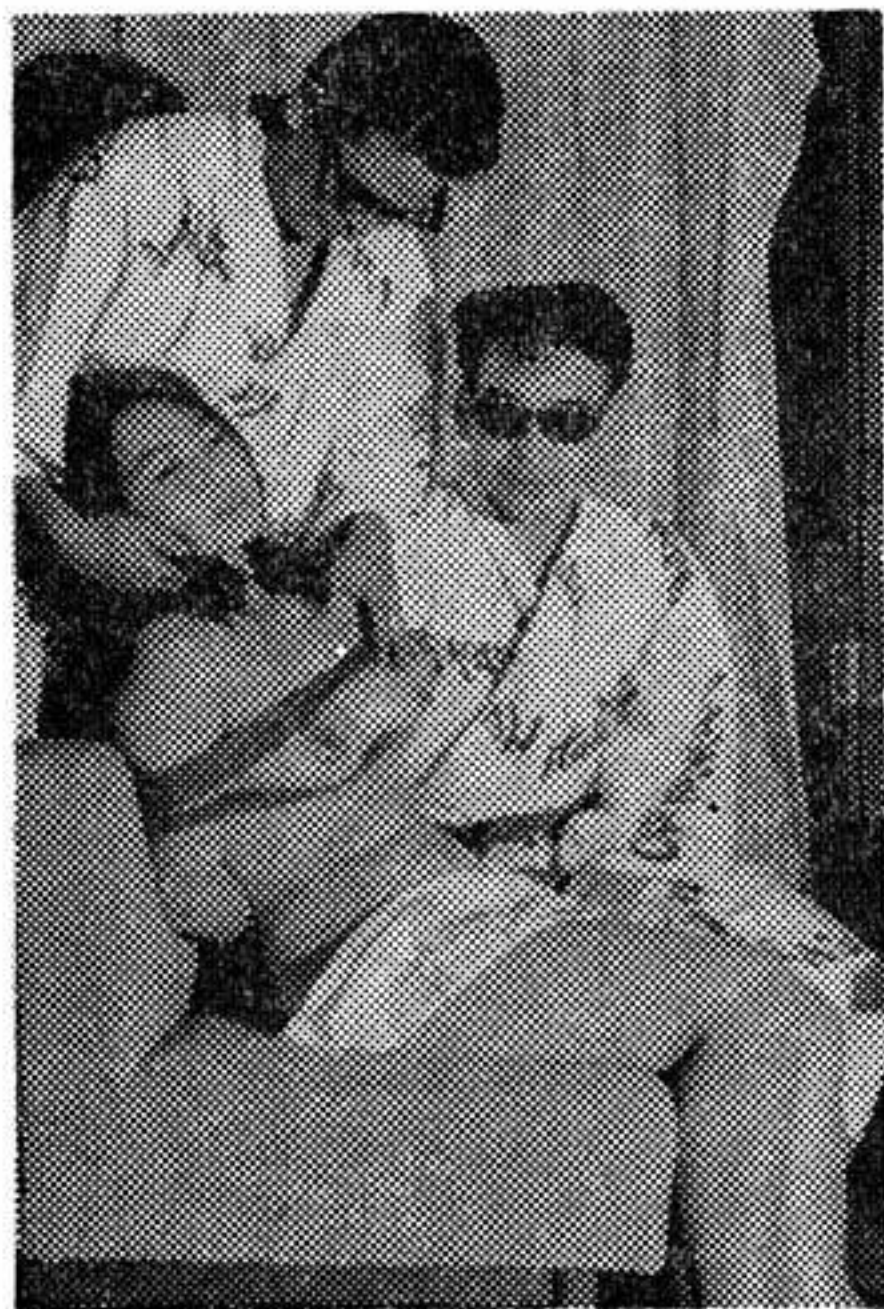
団「落語が本職なんですが、近頃はあちこちでやたらと忙がしい若手で、売出し中のT・D、口が悪いので評判になりましたが、根はとってもいい奴なんですよ」

辻「私のこと知っているとなると、やはり奇クのファンということになりますね」

団「私の送ってもらった本を、いつも持ってゆきますよ。辻村隆って男は、本当にあれだけハントやっているのかって聞くから、フオトが出ている以上まあまあ、いい具合にやっているんだろうと答えましたが、本当にハントされたのでしょう」

辻「始めは毎月のつもりじゃなかったのが、編集長に、いい調子にのせられて、来月は来月はと、遂々三年間やって来ました。勿論或る程度面白くする為に、多かれ少なかれフィクションはまじっています。幾ら私がタフでもそうそうは続かないんですよ。辻村って野郎は、年がら年中、女の尻を追い廻わしているように思われますが、それじゃこの物価高の折柄、喰っちゃいけない。第一女房が黙っていませんよね。だからまあ、そこはほどほどにって処ですね」

団「ハントした人は、すべてがすべてうまく行くとは限らないんでしょう」

辻「随分待ち呆うけやフラれがありますよ。でもそいつはカメラにならないから書かないだけです。いつかハント外伝で、振られの巻を纏めて書いてみようかと思ったりしています。それに悪名が高過ぎて、読者通信の夫婦プレイ志願の方々も、辻村というと最初からとてもとてもと敬遠してしまうのですね。奇クをよんでいる女の人で、モデル志望の人があっても、ハナに辻村と名乗ると怖がって逢ってくれない。悪名も売れると却って困りますよ。左近麻里子がいい例で、今日来る車中での話では、団さんには会いたいが、私が一緒だと嫌だといって、大分駄々をこねたようです。過ぎたるは及ばざるが如しとはよく言ったものですよ」

団「私もそうなってみたいですな。何しろ辻村さんは、もう奇クに二十年来書いておられるでしょう。謂わば奇クの歴史ですな」

辻「その代り、奇ク一本槍で、よその誘惑はうけつけない。うけつけないと言うより、内

弁慶で、奇クという殻の中だけで、威張ったり大きな顔をしていられるんですね。よその雑誌社では鼻もひっかけてくれない」

団「そんなことないですよ。他社の風俗誌にも書かれたらどうです」

辻「カメラ・ハント一つでのつのつです。とてもそれだけのスタミナはありませんよ。第一、箕田さんに悪いしね」

団「その義理堅いところがいいのかな。でも一度座談会やりましょうよ。T・D氏なら名を名乗って堂々と出て来ますよ。そんな判っきりした男なんです。それにヤマベプロの岸信太郎さんも来るでしょうし、新東宝の小森白監督なども声をかければくるでしょう。もう一人、コメディアンで大ファンがいるんですが、彼はT・Dのように割り切っていませんから、名前はよう出しませんが、あなたに会いたがっていますよ。座談会に、今日の様に左近さんあたり一緒におられると、錦上華なんですが」

辻「面白そうですね。是非計画して下さい。ところで話は一寸変りますが、団先生の言葉は余り東京弁じゃありませんね。ときどき関西的な言葉が出ますけど、お国はどこ――」

団「その筈ですよ。生れは滋賀県で、大学がK大、学生時代は十三のつい先の神崎川のほとりに下宿していたんですよ。大学を出てしばらく教職にいたんですが私の柄じゃない。文筆運動はその頃からやっていましたが、文芸春秋社の『オール読物』のオール新人賞に投稿してみたら、意外なことに新人文学賞に当選しました。それからなんです」

辻「まともなものでなんですね」

団「ええ、本名でした。単行本もまともなもので出ております。最近その一篇が採り上げられまして、近くNETでテレビ映画化されます。俳優はN親娘です。大阪のジャンジャン横丁を舞台にして書きました。題名はこれですが、是非御覧になって下さい」

辻「作家活動も本ものなんですね。私なんかとても足許へよれませんよ。今日の対談は、団先生にお願いしたくなりましたよ」

団「私もオニ六談義で少し触れますが、辻村さんがお書きになるでしょうから、ほんの僅かのつもりです」

辻「奇クでは制約も多いでしょうが、何か将来、奇クに対しての希望は?」

団「何しろ、この種の風俗誌で、戦後以来延々とつづいたのは、偉とするに足ると思います。何かあちこちの審議会なども小うるさいようですが、風俗誌の元祖として頑張って欲しいんです。私の『花と蛇』も特集号として出ましたが、あれは増刊形式の雑誌スタイルでしょう。私としては単行本にして欲しかったと思います。若し編集長にその意図があれば、例えばSM叢書といった様なスタイルで出されるならば、私は奇クの為に、オリジナルの書下しをドシドシ書いて行きます。十巻や二十巻ぐらいの全集ものが出来るのじゃないでしょうか。勿論全集の中には、辻村さんの『奇譚三十九夜物語』とか『SMカメラハント』も含まれ、過去の人で『松井籟子集』もいいでしょうし、沼正三氏の『家畜人ヤプー』とか吾妻新氏の『夜光島』なんかも入れてやられたら、これはきっと受けると思いますよ。もしその気があれば売込みの方は、あちこちへかけ合って奔走しますがね。今、実は東京のある出版社から、そんな話があるのですが、団鬼六の生みの親の、暁出版に声をかけず他社の出版社で、団鬼六集を出すのは、背信行為ともとられますので声をかけたのです。どうですか編集長――」

編「有難う、よく声をかけてくれました。雑誌は一月勝負ですが、単行本となると息が長いので別のむずかしさがありますね。例えば

回収が大変おそくなるとかいった。しかし、よく検討してみるつもりです。私としてはむしろ、月刊より週刊をやってみたいという気持の方が強いのです。例えば、秋山夫妻のショウや、青木順子ショウなどの日程も、週刊なら読者は発売と同時に、劇場に走れるでしょうしね。しかしこれとても現在の陣容では無理なんです。ニュースソース的なもの、読物やトップ記事的なものは、大資本の週刊誌に到底太刀打出来ない。肩の凝らない、しかも車中でも拾い読みの出来る、SMを軽く匂わせた準風俗的なものでなら勝負しても、とは思いますが今の処は抱負だけなんです」

熱海の夜は更けて—

単行本問題から、団鬼六氏の鉾先は俄然編集長へと向けられていった。単行本発刊の件について、二人は熱心に打合せる。その話題は、最早私とのSM的な対談から離れた出版の問題へと進展していった。作家活動に全精力を集中した団鬼六氏にとっては、今や堂々とSM作家として勝負しようという意気込みが感じられた。それに徹しようとする、まやかしのない彼の毅然とした態度に私は胸打たれる思いであった。二十数年の奇クの歴史を振り返って、それこそ満天の星のように数知れぬ人々が、この奇クに執筆されたことであろう。しかしその人々はいつしかうたかたの様に消え、又新らしく次々と執筆をする旗手が出現してくるのが奇クの宿命的な性格であった。精力絶倫をもって鳴る、今や一方の代表的な雄のS氏すら、奇クへの執筆は仮名をもってしたのだ。今茲に団鬼六氏一人、始めて奇クの作家として、自からも認め、何ら憶せずおめず名乗り出ようとしている。既にその片鱗は、彼の『鬼六談義』でかなりはっきり自分というものを打出してきているのだ。T・D氏が奇クの座談会に堂々と名をつらね、その他の知名人もこれに続くとき、奇クは秘密めいたヴェールの殻を破って、始めて同好者向雑誌から、一般誌として躍進するのではなかろうか。今、団鬼六氏は、その公刊性を高めるために、敢然と火蓋をきって丁々発止と火花を散らしてやり合っている。

パン、パン、パンと、するどく夜のしじまを破って、花火の音が炸烈した。私はそっと席を立ってベランダへ出た。七階のこの部屋からは、五彩をまきちらしたようなネオンの輝きが、一望のもとに研を競って瞬き合い、キラキラと波浪に輝いていた。

見遥かす熱海城の彼方に、夜空に虹をまいて、打上花火が鮮やかに夜空を彩どっては、果敢なく闇にとけていった。

景気よく打上花火は、あとからあとからと熱海の夜を飾って、空を染めて消えてゆく。

論戦から離れて、ひとりベランダにたたずむ私の脳裡に、左近麻里子の面影が浮んで消えた。今ごろはもう名古屋辺りか、夜の特急

列車にポツンと独りゆられる彼女に、恐らく濃い哀愁のかげりが、にじみ出ていることであろう。

私は邪魔にならぬように、そっとタオルを握って席を立った。

部屋を出たすぐ眼の前に大展望風呂があった。扉を開くと誰も入っていない。シンとした夜の気配。裸になって浴場におり立って、私は体を震わせた。非道いことをするもので未だ午後十時というのに、すっかり温泉を抜いてあってカラッポなのだった。

裸にあわてて宿衣をひっかけ、下着を抱いてエレベーターを押すと、もう運転停止――。

熱海のホテルはみなこうであろうか。私は腹を立てながら、地下のドーム風呂まで、延々と七階層、降りて行く。

婦人専用脱衣室の前を過ぎ、隣りの男子専用の脱衣場で宿衣を脱いで飛び込む。ここも誰一人つかっていない、一日の疲れをほぐすように長々とのびてから、広々とした浴槽を泳ぐ。浴槽の中央部に半分許りしきりがあって、恰度円周の中心から半径だけしきられている。泳いでそのしきりの彼方へ、ゆらゆらと流れてゆくと、ぼーっと人間の形が湯気の中に浮かび上り、近づくにつれて、それがうら若い娘と知って、私はあわてた。娘は湯舟のふちに腰をおろしていたが、あわててジャボンと飛び込んだ。

幸か不幸か近視の私は、その近くへゆくまで女体に気付かなかったのだった。入口は男女別々でも、湯舟の中は仕切り一つで混浴になっていたのだ。

「辻村さーん、辻村さーん」

入口の方から、団鬼六氏の声が聞える。慌てて私は引返す。編集長と二人、私を求めてこのドーム風呂にやって来たのだった。

「ああ、やっぱりここでしたネ。姿が見えなかったものだから」

「あの仕切りの向うが女風呂になっているんですが、一人切りで仕切りの向うまで泳いでいったら、若い娘さんを見ちゃったんです」

「えッ、女の子一人ですか?」

「そう一人――」

「じゃあ、私も泳いでこよう」

私は混浴の温泉で、いつも近視が口惜しくなる。まさか眼鏡をかけても入れず、折角の美形が、瞬昧蒙古として辛うじて霞んでみえるだけなのだ。

「もういませんよ」

「じゃあ、こちらの声が聞こえて上ったのでしょう」

「ああ、惜しいことをしました」

私達は声を揃えて笑った。

「辻村さん、風呂から上ったらすぐ失礼します」

「おや帰るのですか。泊られたら…」

「三十分位で帰れるのです。女房の顔が見たくなりましたよ」

「恋女房ですね」

「久し振りにハッスルしますか」

「こちらは男二人、アベック部屋でネンネです」

「ホテルは夜中じゅうあいています。夜を求めて出られたら」

「夜の女ですか、面白くありませんよ」

「でしょうね。分りますよ」

温泉の湯気が仄々と私の体を包んで温めてくれた。

長い一日だった。女の浴槽の方で数人の女の声がし出した。終い風呂の女中達だろうか。もう一度泳いでゆきたい気持を押えて、私は湯舟のふちに頭をのせて、団鬼六氏と並んで眼を閉じていた。

『縄』日記抜萃

井風呂秋於

久し振りに……ひとりで都心へでも遊びに出掛けようか、と思って一張羅の洋服を鼻唄まじりで、ひっぱり出した。

　着換えようとしたら、早やズボンに足を突っこむ段階からして窮屈な感じ。ギョッ！として鼻唄を打ちきり、チャックを閉めようとしたが、これもすーッといかない。

（あれ、縮んだかな？　この安物——）

　とモソモソやっていると、其処へ、例によって、ゴボウテンの煮たのなんかを紅唇の中(なか)に半ば突入させて登志子が通りかかった、とお思いくだされ。

「どうしたの？」

「ウン、服のヤロウ、縮んでやがんのさ。これだから安物は、こまる！」

「ふン」

「あれ——ふンたァなんだ」

　自称、凄味充分の白眼をむいてやると、彼女ゴボウテンをきゅッと呑みくだし、それから人間ばなれのした声で、

「なに好いたこと言ってんのよ、その服が伸びたり縮んだりなんかするもんですか。正確にいえば、あんたが肥ったのネ、ウン」

　自分で言い切って、うなずいてやがる。

　ふたたびギョ！として、鏡の前へ走った。

「ね、ちょっと仕事が楽になると、あんたの身体はそれだから。……だから、あたしが言ってるでしょ。毎日体操をするなりして身体を動かしなさいって。わかった？」

「なに言ってやがる」

「アラ、なによ」

「大の男がそんな、美容体操なんて出来るもンかい」

「美容とは、だれも言ってないわよ。じゃいいわ、タテヨコの差が無くなってもあきらめることね」

　彼女は、歯をせせりながら冷然と言い放つや、深刻の気ただよう私の全身を見下げ見上げつ、不意に、

「キェ！　キェ！」

　と、猿公(えて)が聞いたらすっかり生甲斐を無くしてしまいそうな声で笑い、悠々と奥へ消えていった。私はショックだった。

　いまや、天高く馬肥ゆる秋の候、とは言えど、とてもそんなことをいって澄ましていら

れる場合じゃない。長い間、性根を入れて鏡をのぞかなかった故もあるが、成程教えられて気がついてみると、これじゃまさしく〝天高く豚みたいに肥えた秋於〟だった。

考えてみると?

こんなに腹まわりがでっかくなっていては外も歩きにくい。この若輩たる身が、あたかも功成り名遂げた人物であるかの如く、腹を突き出し、ノホホンと街の中を往けるもんじゃない。第一、社会をたぶらかしているようで、良心がうずくというもんだ。それに、（あ、向うから美しい女性が来る……アッ横手から可愛い娘がやって来る！――）

そのたびに、息を詰め腹をひっこめてエエ恰好しなきゃならないってんだから、実に苦労が多いというもんだ。もちろん向うから来るのがお子さまランチみたいな女の子なら、私のシュミじゃないから何もそんなことする必要はないけど……

そこで、外出のたびにこんなことをやっていては、いくら土管のような神経を保有していても此の先、到底持ちこたえていけるものじゃない、と悟って、ついに私はヤケクソ気分で、〝美容体操〟なるものをやらかす決心をしたのである。せめて人生半ばまでの辛抱であると、ここに世にも涙ぐましき『減量戦』を開始することを決心したのである。

だが貴方、または貴女もご承知の通り、この減量ってヤツ、決して生易しいものじゃないときている。世の女性方が日課のアレッぽちの体操を私がいくら真似してみても、このデデーンとだぶり出ている腹に通じる筈がない。あんた家をぶっこわす気？　と彼女に噛みつかれるのが関の山である。

といって、おとなしく減食だけをすれば、どうせギクギクと胃袋あたりが鳴きやがって仕事にまで支障をきたすのは眼に見えとる。

といってサ、外へ出て物凄く烈しい運動をするとなると、こりゃまた眼も廻るけど、ついでに脳味噌のほうも一廻転半ぐらいしそうに思えて気が進まない。

結局、虫の良い話だけど、もっとこう、喰べて落着いて出来る〝美容体操〟を、ということになった。私ア、いつか自動車にはねられてアタマ打ったときよりも、深刻な顔になって、考えましたネ。

デザインは私がした。ちゃっかりとへそくりの千円札をまき上げてから、登志子はその〝減量用ドレス〟なるものを、縫ってくれた。厚いビニールのドレス？　である。

私は早速、着てみることにした。

ツーピース型になっていて、そのロング・スカートの膝から下がフワッとひろがっている。これは軽い屈伸運動ぐらいは出来るようにとのデザインである。丈夫な紐が通してあってそれをギュッと締めると、ウエストから下は、まるで筒にでもはいったような感じ。

つぎに上衣。首まわりにぴっちり詰まった丸えりで背あきになっていて、長袖の手首のところと、ウエストのところにも強いゴムがはいっている。これは『熱気』がなるべく逃げないようにとの愚考からだった。

見ちゃアおれないわ、とばかりに何処かへ消えていた彼女を呼びつけて、背中のファスナーを閉めてもらうと、着たときは気味悪く冷い感じだけど、すぐに、これならどうやら目的を達するに有効だ、と思った。

さて、試し着が済むと、その夜から早速、私の、〝涙ぐましき減量戦〟が始った。

素裸になって着衣の後――二十分乃至三十分は全体的な屈伸運動。

それが終ると、間も置かず、彼女の手を借りて今度は綿ロープでキッチリと後手に縛り

あげてもらい、整理済みの押し入れの一室へ押しこめてもらう。
押しこめが終ったところで両足を緊縛していただく。そして百ワットの裸電球の下、ぴしゃりとカーテン付き襖も閉めきられて放置されること、三十分乃至四十五分。
——文字にすると易しいようだが、私の場合この三十分が地獄の苦しみとなる。窮屈な場所で身体をくの字に折り、背中にくくりつけられた後手の痛みもさることながら、このまま窒息してしまうんじゃなかろうかとさえ思う、汗と涙の長い長い時間だった。しかし、いくら泣けど喚れど、この規定とする時間は誰あらぬ本人の決めたこと。絶対に時間内は解放されない仕組みになっとる。
私ァもうこれだけでヤメタァ！と思った。

しかし不幸にも、我が家には安達ガ原の鬼婆みたいのがいた。
——ようやく規定時間が過ぎると、足を解いてもらい押し入れから出る。このときザーアッとこぼれ落ちる汗水の気味悪さ！いやこんなこたァどうでもいい。次に、たった一分間ぐらいの休憩で（彼女の言うには五分も経ったと風邪をひくらしい）ふたたび予定コースを開始。私ァ自分の作った段取りが今更の如くにうらめしい。が、仕方ない。
バタンと俯伏せに倒されると、背中の手首と足首とを別のロープで縛りつながれて、思いきりよく絞られる。
「あッ、痛い！」
「なによ、これぐらい」
彼女は冷然、私は泣きっ面。
「そ、それならいいけど……そのかわり、顔の汗ぐらい、拭いてくれ」
「いいよ」
だが——彼女はタオルでも取って来て拭いてくれるのかと思ったら、そのままかがみこんで、イヤにのろのろした手付きで私の顔の汗を、指ではじき始めるのだ。ムカッとはするが何ぶんとも身動きのとれない口惜しさ、私は眼を閉じてしまう。

かくて放置されること、また十五分。
「お、おい——もう、時間だろう？」
「あと……四分」
「よ、四分ぐらい、もういいじゃンか。いッペン縄をほどいてくれや」
「だめ！」
「き、きびしいこというなッ」
「ふン、だらけるんじゃない——」
あくまでも厳格なる執行女史は、見るも無惨な私の姿をにらみつけて咆哮する。
さて、この〃弓反り美容体操〃が済むと、またもや縛られたままで屈伸運動を『暴力』の手を借りてさせられるのだが、これが終って——やっとロープを解いてもらう。
これらのことは、もちろん最初のうちは一日一度の線で消化できたのであるが、案外とこれが疲労のほうに効き目が強く、いつしか二日に一度、三日に一度と変更していった。
いつも後でヘルス・メーターに乗ってみるが、そのたびに何となく体重が減っていくようで……というより、身体の水分が抜けていくような感じであった。
現在も時折りだが、この〃減量戦〃はつづいている。だが、結論を現在において申すならば、なにぶんとも私自身の至って旺盛な食

欲の故もあって、強烈な効き目は感覚の上だけで、肉体のほうには左程、効果はないもよう、といったところである。
「いやねえ、あんたの身体って、案外にしつっこいのね」
　最近では彼女のほうが、このように音を挙げる仕末である。そのたびに私は、鼻の穴をおっぴろげていうのである。
「おらァ、あきらめねえぞ」と。
　急になにを言いだすのかと思ったら――
　私の〝告白〟が所載されている本誌の四、六、十月号をひっぱり出してきて登志子のヤツめ、
「フン、どうせまたうまいこと言いわけしようとするんだろうけど、それより先に、もう一度、自分の書いたものを読み直してみるがいいわ」
　と、妙に丁寧な手付きでその三冊を並べ始めた。そして、
「――いくらあたしの事は添えもの程度にしか書いてないといっても、これじゃあ、あたしという女は、まるで鬼婆じゃないの」
　これが並みの女性よりも一オクターブ高い発声を常とする女の声かと信じられないほどの低音で、私にネットリと絡んできたのである。つまり、彼女の言おうとするのは――
『登志子』という女は、女装した私を縛ったり操ったり踏みつけたりすることだけを、何よりの楽しみとしている、という風にしか書いていないというのである。これは事実を無視したやりくちであり、依ってこれより厳重に抗議するというのだ。
　ところが、幸か不幸か、この時の私はヒジョウに頭が冴えとる状態にあった。いつもなら、毎度のごとく繰り返される屁理屈合戦に於いて、見るも無惨な敗戦ばかりを強いられていた私なのだが、この時ばかりはキッとなり、ゴロ寝して味読していた人生の書――俗にはエロ本ともいうが、それをばバッと閉じるや、すっくと起き上がる！
「――アホ」
　そこで眼の前の問題とする三冊をポンポンと叩いて、
「自分が添えもの程度にしか書かれていないってことがわかっていりゃ、それでいいじゃねえか。書き始めて約一年、いまごろになって不意に何を言ってやがる。第一、主人公を引き立たせるのが添えものの役目ってえもんだ。安達カ原の鬼婆ァ、サド性横溢の登志子さん、ああ、まことに結構なことじゃねえか。え、そうだろう？」
　頭の冴えとるわりには、余り豪華な斬り込み方じゃないけど……私は、大いに肩肘を張り、胸を反らしましたネ。
「フンだ、主人公だなんて……」
　思わぬ反撃にあってか、彼女はいちだんと低声になり、樹陰にひそむオラン・ウータンみたいな眼つきをした。
　こうなると、私はすぐに調子に乗るという美徳がある。一層、居丈高になって、
「だけど、まァいいってことよォ。本名を書いてあるわけじゃなし、写真が載ったわけじゃなし、お前が鬼だろうがサド婆ァだろうがそんなこと知ってる人間はひとりもいねえ。それによォ、今更そんなゴタクを並べるたァお前らしくもねえや、――まァ、いいってことよォ。罪ほろぼしって意味じゃねえけど、そのうちに服地の一枚や二枚、買ってもやらァな」
　ツイ、口走ってしまった。
　するとオラン・ウー……いや、彼女は、不意に乳ッ房ゆるがしてクックッと笑い、
「そ、それ、ほんと？――」
　今度は餌をねらうジャガーみたいな眼つき

をしゃがった。瞬間、頭の冴えとる私はドキッとしたね。

いまになると、どうやら、この下心あってあのように突然、絡みついてきたとしか思われない。結局、買ってやると言ってしまった手前、ヤケクソで流行布地二着分も買ってしまったが、そのときはさぞやヤロウめ、腹の中で真っ赤な舌を出していやがったに違いねえ。

いまも、その服着て、都心のデパートをハシゴしてくると言って出掛けてやがんの。

可愛い刺激のある遊び、そんな楽しみで縛りプレイを繰り返していると、ついそれまでのカラを破って、未知の女性とプレイしたくなったりするものらしい。

『……私たち夫婦はプレイをこよなく愛しているものですが、愛読者の方で、私たち同様の方がございましたら……』

とかいう、真面目な投書をよく本誌の通信欄で見掛けたりするが、私も、そのような投書を一度と思いながらそのふんぎりがつきかねて、いつしか諦念してしまう。まだまだ徹していないからだろうが、しかし、現今では――やはり私たちの間のものは、このまま私たちの間だけで細く長く、楽しく秘めやかに守りつづけていくに如かずと、多少痩せ我慢めいてるが、そう思っている。

そのかわり、と言ってはなんだが、「あんな女性とプレイをしてみたい」「こんな人とこんな話をして過ごしたい」といった想念のすべてを、大げさな言葉で恐れ入るが、一カ処に集結させて炎と燃えあがらせることにしている。私が例の「あきこ」登場記などを書いている合い間にも、性懲りもなく別の原稿用紙に向い、秤蕩也のペン・ネームで〝妖紅記〟とか〝妖縛の果て〟なる怪作をモノした？　のもその所為である。

〝妖紅記〟に至っては、一人二人の女性じゃ面倒くさい、ええい十数人ひとまとめにして縛っちゃえ――とばかりに書きなぐってしまったものである。

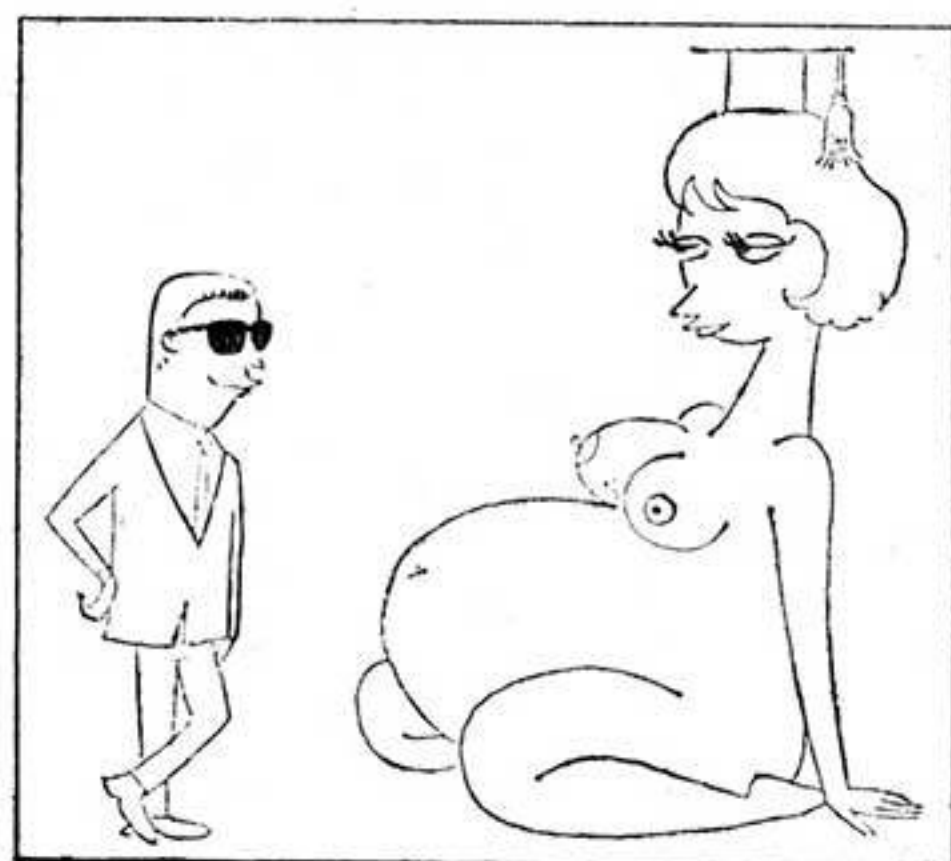
これによって、私の「浮気ごころ」？　は一応、霧散してしまった。いうなれば結構なストレス解消法でもある。要らぬスケベェ心を本誌がなだめてくだすったようなものだ。

創作については、夜乃採郎大先輩あたりからお賞めとお叱り半々の言葉を受けたものであるが、これは盲蛇に怯じずのたとえ通り、なにぶんとも創作ものを書くのは生れて始めてという私のこと、いまになって冷汗三斗の感である。しかし、こんなことを言っては「生意気な奴だ」と唾されるかも知れないが、あの〝懸賞応募作〟が本誌に所載されたころから、本誌に、とみに応募作と銘うった作品が登場し始めた風である。

愛読者として嬉しい限りである。

しかしこのことが本誌にとって、いいことなのかどうか、それは私にはわからない――

ただ、毎月次々と発表される応募作の、素晴らしい熱意ぶりにすっかり圧倒された形になって、私の場合はしばしば沈黙といった状態にいることには間違いなかった――

（おわり）

この野蛮は許せない

—〈憎縄の記〉を読んで—

羽鳥水江

カット・雑誌「宝石」所載
サトウサンペイ筆

はじめに

気が向いたときにはいろいろ投稿する癖に書かないとなるとサッパリ、というのが、わたしの悪い癖です。いつの間にか二年以上も休んでしまいました。その間、奇クは毎号かかさず愛読していました。増田みゆきさんの素晴らしい妊娠各月腹部記録のヌード・フォト、わたし好みの大量高圧浣腸の告白、ことに十月号辻村さんの「甘い羞恥」の中の大島照代さんなど、いずれも大変興味をそそられました。実は「甘い羞恥」を読んで、わたしも何か一言是非、と思っていました。そういう気持になっていた矢先、十一月号巻頭論文とも言うべき、寺宇治久美さんの「憎縄の記〈ある若妻の抗議〉」を見て相当のショックを受けました。それで、そちらの方を先に書くことにしました。なお、わたしがこれから書くとすれば、浣腸の方はすでに毎月かなり取り扱われているようですから、まだ十分に登場するに至っていない妊婦ものに重点を置いてみたいと考えています。

一

寺宇治久美さん（以下、単に〈久美さん〉と呼びます）は、ご自分の経験に寄せて、奇クに抗議する私信を書かれたのですから、その文が誌上に載ることは多分、期待されなかったでしょう。ですから、これからわたしが書くことも、果して読んでいただけるかどうか分らないわけです。もし読んでいただけなかったら残念ですが、奇クにたいする非難だけは晴らしておきたい。というのが、わたし

の偽らざる心情です。

わたしのこれから述べることは、久美さんのご主人（と言っても、もう別れていらっしゃるかも知れませんが）のやり方を弁護しようというのではありません。正にその逆です。そうではなくて奇クの立場を正しく述べたいと思うのです。わたしは、ご主人にたいする彼女の不満を全面的に支持します。しかし、ご主人のおっしゃることは奇クの立場とは全面的に違います。彼女のご主人の言い分は奇クの完全な誤解、というよりも、甚しい曲解に基づいています。ご主人のやり方を、わたしはまったく承認することが出来ません。このことを知っていただきたくて、こうして筆を執りました。

第一「女には、男以上の耐苦性が備っているし、マゾの要素が共通してあるものだ」とか「女性が、苦しみの中に悦びを見出す特技的なものを共通して持っているものだ」とかいう漠然とした理由から、「しばってでも独占しようとしてくれる夫に対して、愛情をかき立てられて、喜びを覚える。そうなるのが女であり妻なんだ。そこに妻としての値打と悦びがあり、幸福感が溢れてくる」などと、どうして言えるのでしょうか。とんでもない飛躍です。前提が独断的である上に、結論はもっと、間違っています。「その気持を、キミに味わしてやるためにしばるんだ」だの「自分は余り気のりしないのだが、キミの望みだから、こうしてしばってあげた」と言うに至っては、暴論もいいところです。久美さんが「絶対賛成出来ない」「衝き上げてくる激しい憤りを、どうしようもありませんでした」とおっしゃるのは無理もありません。「夫の独善」と繰り返し書いていらっしゃるのも、その通りだと思います。

大体、挙式後四月目ぐらいの妻に、ハダカで無残にしばり上げられた女の写真を観せて、その通りにやってくれと要求するなんてことは、非常識きわまると言わねばなりません。週に一、二度のデートを一年余りの交際期間中つづけて、その婚約中はそういう自分の嗜好など一口も言わないでおいて、結婚してしまえば、いきなり妻をハダカにして縛ろうとされたりしたら、びっくりしない方が不思議です。おそらく、どんな女だって驚くでしょう。驚かなかったら、どうかしています。一般に女性には多少、マゾの気があるということが仮に事実であるとしても、特定の女性が必ずマゾと言えるとは限りません。まして縛られて喜ぶなどという女性は、その中でもごく少数者でしょう。まったく見当ちがいです。そういう事実を無視した、むしろ事実に反する前提に立ったご主人の論理が、独善的であり支離滅裂なのは当然のことです。女性はすべてマゾでなければならないとか、縛られて喜ばなければならないなど、という理由は何もありません。奇クの誌上でも、各人の嗜好は千差万別です。鞭打たれて悦ぶ女性もいれば、浣腸されたい女もおり、縛られたいと言う人もいます。どうでなければならないなどということは、何もないのです。女がサドである場合もありうるし、サドとマゾの両方である場合もありうるのです。そして縛られたり浣腸されたり、鞭打たれたりすることを好む女性は、やはり特殊だと思います。でなかったら、いつも社会の片隅で遠慮しいしい存在を主張する、というより存在を許してほしいと嘆願する人たちの集団である奇クの読者層の、あの特異な雰囲気は生れなかったでしょう。

わたしたちは奇クとその雰囲気を、とても大切にします。しかし奇クを、普通の一般の夫婦生活のバイブル、あるいは教科書にしようとは少しも思っていません。とんでもない

ことです。「もっと勉強して……」だの「もっとアレを読むこと」によって、努力して何とかなろうなどと、むずかしく考えてムキになるような種類のことがらではありません。自分の性癖が他人と違うことに長い間悩んだあげく、奇クによって救われるというならそれもよいし、好奇心から空想してただ楽しむだけでもよいのです。それ以上のことは、誰が誰にたいしても要求出来ません。どんなに無理なリクツによっても、正当化出来ないことです。まったくムチャです。

第二に、それにも増してわたしが許せないと思うのは、久美さんのご主人が、久美さんをいたわる気持を、まったく持ち合わせていないらしいことです。見合い結婚でありながら、久美さんが「ベタ惚れ」になられたのをいいことにして、まったくひどい。久美さんの人格を認めないことです。むしろ「人権を認めない」と言った方が、いいかも知れません。この点を抗議される彼女の主張は、よく考え抜かれて論旨が首尾一貫しており、十分説得力があります。わたしがつけ加えるものは、何もないぐらいです。夫婦のプレイは、相互に娯しみを与え合うものでなくてはなりません。心のかよい合いとか、ほのぼのとした愛情とか、要するに精神的なものがなくてはなりません。妻だから何をしてもいいということにはなりません。妻が夫に絶対服従すべきものでもありません。妻も娯しむ権利があります。夫だけの一方的な満足が、いかに夫婦の和合をさまたげることでしょうか。心のかよい合いのない男女の結びつきは、夫婦ではありません。野獣か野蛮人か幼児ならともかく、成熟した人間の間の関係ではありません。

「私が結婚したのは、……夫の玩具や奴隷になりに来たのではありません」

「夫は私をしばって、いたぶることに懸命になり出しているのです。……まるで、結婚はそのためだけにしたようで、正気の沙汰ではないのです」

「そう割り切って、夫婦間の一つの遊戯、テクニックとして没入するには、精神的な拠りどころが欲しいのです」

「私は結婚した以上、柔順でありたいとは思いますが、暗中模索のままの盲従とは根本的に違うものだと思います」

「彼の気持は、その時に限って私を妻とは思っていないのよ。自分が捉えた生きた玩具。ただ、歪んだ獣欲の対象として、しばり上げいじり廻すだけの白い肉塊。その上、その惨めさを喜ぶのが女だって？冗談じゃないわ。……私は心の底から夫を愛することが出来る状態が欲しいのよ」

久美さんのことばは、わたしには一々もっともと思われます。「妻といっても一人の人間です」まったく、その通りです。

このお手紙（と言っていいと思います）には、久美さんのご主人の考え方が、事態の進むにつれて、いよいよ仮面を剝がれて、その醜悪な核心をムキ出しにされて来る過程が、実にリアルに、よく分るように描き出されています。そして久美さんの心が次第に真実を直視し、ご主人の心から離れて行く過程が実によく理解出来ます。ご主人の非人間的な性格がグロテスクなまでに、克明に描写されています。実に見事だと言っていいでしょう。何という男のエゴイズム。人間の気持ちが分らない、変態的な性格。本質的な意味での変態的な性格。人間の気持ちが分らない、あるいは分ろうとしない非人間を相手にしたときの、何とも言えないいらだたしさ、怖しさ。

「自己の欲望を正当化するための詭弁」

「主人の意に反する妻が、どんな淋しい気持で日を送らなければならないか、よく味わっ

て考えろ、というような考えがあったのではないかと思います。……彼は私の降伏を待っていたのでした」

長くなりそうなので端折りますが、

「しばられるのが当然で、それでこそ女だ、妻だなんて理屈をこじつけることを反省さえしてくれれば……」

と言われる妻の気持を全然、理解しようともせず、ただ無理が通って道理がひっこむのを待っている、力をもって押し切ることしか考えていないご主人を、ついに「卑怯」「軽蔑すべき人間」「ヒトをバカにするにもホドがあります」とまで、ののしられるのも、わたしには決して無理だとは思われません。

彼女をここまで追いやったのは、明らかにご主人の責任です。彼女は全く正当だと思います。はじめの頃、純真にも、

「私は、それらの話を極めて好意的な誠意をもって一生懸命に聞きました。納得のいかない点は、私の精神年令の故に実感が伴わないのだろうと解釈したのです」

「私には女としての欠陥があるのかしら」

と考えておられた久美さんが、次の段階でもまだ、

「何故、もっと素直に要求してくれないの。打ち明けて言ってさえくれれば嫌なことでも私は甘んじて努力したのに。しばられることぐらいが何です。羞しいことなどありません。いくら丸ハダカでも、どんなみじめなしばられ方をしても、いいのです。夫婦ですもの。しばるのは強盗や他人ではないのです。身心を、いえ、生命までも託した夫の手で、しばられるのですもの。いささかの不安も恐怖もあるわけがないのです」

という当然の疑問を持たれるだけだったのに、最後にはどうしても我慢出来ないというところまで行く過程が、よく納得出来るだけの説得力をもって、詳細に書かれているからです。これは言うまでもなく、嗜好の内容の問題とは全然、関係のないことです。

二

少し、くどくなったようです。でも、もう一つ二つ、書いて置きたいことがあります。

大分、前のことです。雑誌「宝石」の昭和四十年十一月号で、〈大学対抗舌合戦〉と称して、東大の男子学生と東京女子大の女子学生が三人ずつ。「女に教養は必要ない」という座談会をやっています。レフェリーの野坂昭如さんの司会が、男性側の偏見を支持して、全く感心しない結論を出しています。わたしは大いにフンガイして、今もその切り抜きをとっています。カットの漫画も感心しないことは同じですが、ちょっと面白いので送って載せてもらいます。この東大の学生たちが、女性の社会的立場の弱さを頭からそのまま是認した上で、エリート意識ムキ出しの、実に浅薄な放言をしているのです。「憎縄の記」の感想を書いたついでに、いくらか八つ当り気味ですが、紹介して置きたいと思います。

現在の大学が学問をするところでなくなっているかどうかは別として、男性側は、

「大学が真理探求の場だ、というのは表面上のことじゃないですか」

「教養とか知識を身につけたところで、人間の本質は変らんですよ」

と驚くべき低俗ぶりを発揮しています。それにたいして女性側は、ちゃんとまともに、

「ものを考える、という人生上の態度のことを言いたいんです。それは教養によって養われるものだと思います。ですから、女性に教養が必要じゃない、とおっしゃる方がありましたら、それは人間に考えることをやめろ、というのと同じじゃないか、と思います」

と言うのですが、てんで通じません。

「教養を家庭で生かすなんて、むずかしいと思いますよ」

「要するに、結婚する前に、大学じゃ教えてくれないことで、女にとって必要なことがたくさんあるんじゃないですか」

　亭主がゼニ稼ぎするのは「天の定め」という前提の上に立って女性をバカにし、

「それでもやっぱり、男の方が大学で身につけたことを使う機会は多いですよね」

　と何の疑問もなく既成事実によりかかり、就職のことで痛いところを突かれると、

「その哀れな心情を認めて下さいよ。なにしろ、男は食うために、けんめいなんだから」

「とにかく真理とかなんとかでは食っていけないよ、男は」

　と、たちまち、あやまってしまうのですから、東大の秀才ともあろう者が、これでは最低もいいところだと思いました。そういう自分を棚に上げて、女房に望むことといったら、全く慰安のための道具なのです。

「この場で真理探求のなんのかんのと言われること自体、ああ、家に帰ってもこんなことを言われるのか、と思うと、うんざりしますよね」

　こういう女性蔑視の、女性の人格を認めない議論が天下の東大生の議論ですから、まったく嫌になってしまいます。もっとも近頃は東大生が泥棒をして、新聞に書かれる世の中ですけれども。

　ところで、ここでこんなことを言い出したのは、外でもありません。大学生になっても、まだ教育ママの庇護の下にあるフニャフニャした甘ったれが多いといわれる、最近の風潮を思い出したからです。どこも男らしいところがない。ふやけたところが、この座談会に出た東大生たちと久美さんのご主人とに共通なように思うからです。以上、手きびしい言い方で気がひけますが、久美さんが「母性愛」と言っておられるのが面白いと思ったのです。ここがご主人との感じ方の別れ目という気がしますので、少し引用してみましょう。

「彼がブルブル慄えながら喰いつきそうにしばられた私を眺め、グルグルとベッドを廻って奇妙なウナリ声のような声で盛んに感歎詞を並べ立て、本当の愛の表現、キスの雨を降らせたのを、ハッキリと覚えています。しばられることには、彼の強調する悦びなど髪の毛ほども覚えませんでしたが、彼の恐ろしいほどの感激ぶりに、異質の充足感を覚えたのは確かでした。夫を、こんなに私が惹きつけることが出来たという喜びです。私はその瞬間に、何かわかったような気がしました。けれど、それは彼のいう、しばられることに悦びを感ずるマゾ性とは違います。今、冷静に振り返ってみると、それは、わが身を犠牲にして愛するものを満足させ、その満足したさまをみて自分が満足する、一言でいって、つまり母性愛の働きに他ならないと思うのです」

　あるいは「母性愛」ということばの、このような用法には異論があるかも知れません。しかし、わたしには、なかなか面白い表現法のような気がします。大学生が未来の妻の「母性愛」を求めているように、久美さんのご主人は、久美さんを苦しめるという奇妙な方法で、ダダッ子のように歪んだ「母性愛」を求めていたのかも知れないのです。

「泣く子と地頭には勝てない」と言います。幼児が母親にものをねだるときは、どうするでしょうか。ただ泣いて相手を困らせることによって、自分の欲望を通そうとします。理屈も何もありません。相手が閉口して負けてしまうのを待っているわけです。相手が根負

けして降伏するまで、実力行使をしてガンバルわけです。無邪気であると言い、頑是ないと言えばそれまでですが、要するに聞き分けがないのです。そのような幼児に「躾け」をして、だんだん分別をつけさせ、一人前の大人にまで育て上げるのが、母親をはじめ、家族や社会のつとめです。事実、小さい子は、囲りから躾けられて、少しずつ聞き分けがよくなり、他人と一緒にやって行くことを覚えます。他人との欲望と他人の欲望とを調和させ、人間らしく振舞うことが出来るようになるのです。

小児なら、まだよいと思います。わがままを言って泣き、我を通そうとする子には、知らない顔をして放って置くのが一番です。こらしめて思い知らせてやるのです。何でもこどもの言うなりになって、こどもが喜ぶのを見て喜ぶというのは、真の母性愛ではありません。暴君を許してはならないのです。

男性には、幾分か小児的性格が残ると言います。また男性は一般に母性愛を求めるとも言われます。しかし久美さんのご主人のように、体も大きく力も強い、経済的にも一家の主人公である大人が、かよわい妻を相手に小児的なこの「母性愛」を求めたらどうなるでしょうか。もはや「小さい」暴君ではない。本物の暴君です。「母性愛」を求められる方にとっては、悲劇です。悲惨です。近頃「母親をなぐる中学生」が、問題になっていますが、それは自業自得で、しようがないにしても、夫が妻を虐待することは大きく言えば人道問題です。場合によっては犯罪です。反社会的行為です。男が女をいじめて喜び、女は男にいじめられて喜ぶのが「自然」であるということから、夫が妻の諒解なしにハダカにして縛り上げることが許されるなら、同じ論法で、女は誰でも男に強姦されたいという潜在欲望があるから、男はいつでも好きなときに女を強姦してかまわないということになりかねません。いかに背理であるか、お分りになりましょう。体の大きな小児は、まことに困ったものです。

暴君というのも同じことです。絶えずイライラし、半ば気が狂っていて、囲りの者はいつどんな目にあわされるか分らないのです。まるで野獣のように振舞い、野蛮で、小児的で、たまたま絶大な絶対的権力を持っているが故に、その犯罪行為が是認され、そのためにまた、本人も囲りもいっそう悪くなり、手のつけられない状態になるのです。最後にはもて余して、暴君を抹殺するより外に手がない、ということになります。本来、反社会的存在であるからです。

サドとかマゾとかいうものが、こういう反社会的な要素をある程度、含んでいることは卒直に認めなければなりません。それは、場合によっては、脱線して世間の指弾を受けるあるいは社会の制裁を受けることとさえ、覚悟しておかなくてはなりません。しかし有難いことに、現代では、夫婦の間のセックスは、多少逸脱していようとも、他人に迷惑さえかけなければ、プライバシーとして容認されるという考え方が、だんだん強くなって来ています。それだけに、夫妻の間のセックスは、プレイの要素を十分に持つことが出来るし、持つことが要求されていると言うことが出来ましょう。人間にとってセックスは、すべてではないのです。久美さんは奇クを「性誌」と言われますが、セックスのプレイは生活の一部です。人生の一部です。ただ衝動にまかせて行動するならば、人間は野獣と変りないことになってしまいます。野獣の性衝動は一年のある季節に限られています。一年中、セックスが可能な人間にあっては、セックスが

人生の目的であるはずはありません。「セックスが最高」などと言っていては、赤ん坊や動物と同じで、人間であるとは言えません。ただ肉体的な快感を追い求めるだけだったら、機械的、衝動的なことがらに過ぎず、人間はセックスの奴隷ということになります。いわば肉体に強制されて、そうならざるを得ないということになります。

人間の「セックス」というのは、そんな貧しいものではないのだ、と、わたしは思います。もっと、何て言ったらいいか、自由に求めるものではないでしょうか。「遊び」というか「娯しみ」というか、もっとそういう要素を多く含んだものではないでしょうか。相手があって成立する、そういう娯しみ。演戯することによって豊かになり、相手を喜ばせることによって自分も喜ぶ。ガツガツと貪り食うのではなくて、ゆっくり楽しむ。そういうものではないでしょうか。別に言えば、反社会的要素を含むが故に、スリルがあり、複雑に楽しいものになるのではないでしょうか。

三

長くなってしまいました。わたしは別段、むずかしい「プレイの哲学」などというものを説こうというのではありません。しかし、もう少し続けさしてもらいます。

これも大分、前のことになりますが、昭和四十年十一月号の奇クで、夜乃探郎さんが「論評＜奇譚クラブ＞」なる名文を書かれたことがあります。その中でわたし(羽鳥水江)を次のように論評なさっています。

「羽鳥女史はマゾヒストであろう。ただし、同じMでも、ちょっとケタハズレである。とにかく＜自分の体を料理し解剖されて、相手にたべられてしまいたい＞というような、食人種という未開の土人の話と反対の、切望だからで、この問題について、もう少しく考察してみよう」

「マゾヒストはロマンチスト（夢想家）でもある。だから、現実生活とは別に＜マゾヒズム天国＞を演技?することができるようだ」

「羽鳥女史はマゾヒストであろうけれど、リアリスト（現実派）である。よってマゾヒズムの世界では、異端者的存在ということになるであろうか」

「羽鳥女史の＜現実＞は、眼から直接、触れる世界（浣腸・妊婦・解剖）だけあって、まことに生ぐさい凄絶さが感じられるのである」「一般マゾヒストは、別の世界を（舞台を）もつことが出来る。そして、そのアブ的極致に自虐的悦楽はあろうけれど＜死＞は無い」

「羽鳥女史のアブ的極致は＜死＞が条件とされる。（……自己の生体解剖・その肉を・内臓を、だれかに食べられたい）これは生きてる限り不可能なことである。そうかと言って、まさか本当に……。マニヤの限界すれすれの地点で、いつも羽鳥女史は、すべてに欲求不満の状態をさまよっていることになるようだ。……逃げ場のないだけ、それが原稿用紙の上に叩きつけられるとなると＜無残地獄図絵＞を描き出す。マニヤたる、大方読者は＜スゲェナァー＞と、そのスリルに拍手カッサイするが、書いた本人の心境たるや……?……」

長く引用しました。わたしの本領が、＜浣腸・妊婦・解剖＞であるということは、まったく異議ありません。そのまま承認します。しかし＜ロマンチスト＞でなくて＜リアリスト＞であるという点は少し違います。たしかに浣腸マニアとしては、わたしは相当にハラワタを酷使します。虐待すると言ってもいいでしょう。＜ハラワタを嬲られたい！＞とい

う欲望から、相当無茶なことまでして、肉体的に苦しみを味わい、満足を得ることが可能だからです。〈妊婦〉、これもそうです。いろんな事情から女がいつも子を孕んでいることは出来ませんが、孕もうと思えば孕めます。男が女を孕ましてさえくれるならば。しかし体を解剖されたり、料理されたりすることは現実的には不可能だ、とおっしゃるのでしょう。ここが問題だと思うのです。

人間は想像力を持った動物です。想像力というのが漠然としていると言うなら、哲学的に言えば構想力、逆にもっと広げて言えば、空想力、妄想力と言ってもいいです。この想像力、あるいは空想したり妄想したりする能力によって、人間は苦痛を快楽に変え、単に必要に迫られて行動するのではなしに、行動の途中を楽しみ、遊ぶことが出来るのです。温湯を肛門からビッシリと注入され、液体をドップリと含んだハラワタに圧されて、ハラがミリミリと張りつめるまで、膨まされた状態が苦しいのを、マゾヒストの悦楽に変えるものは、この想像力です。腹が膨れた妊婦が、その見事に膨れ上ったグロテスクな腹を、おおぜいの男たちに観賞されたいと願うのは、実際、観賞されるかどうかは別としてその心の中の想像力によってです。腹を裂いてハラワタをつかみ出される、バラバラに料理して食べられてしまう、という想像だって、これと同じことです。その場合、女は決して、本当に無慈悲に、まるで野獣に襲いかかられる獲物のように取り扱われたいなどと思ってはいないのです。本気で手かげんなしにヒドイ目にあわされたいなどと思ってはいないのです。愛情なしの一方的なプレイなどというものは、成立しません。逆に愛情があれば、久美さんではありませんが、たいていのことにはついて行けるのです。犬や猫だって、理由もなくヒドイ目にあわせたら怒ってかみつきます。かわいがってやれば少しぐらい荒っぽくしても、喜んでジャレつきます。犬や猫と一緒にはなりませんが、まして人間が、いくら女房だからといって、愛情のない行為には嫌悪を覚えないはずはありません。

わたしが仮りに〈リアリスト〉だと見えるとしたら、それは、わたしの想像力、空想力、妄想力がいくらかリアルで、つまり具体的で激しいということに過ぎません。わたしだって、人格を無視して無慈悲に扱われることは嫌です。女は単に男性の欲望の満足の手段ではありませんもの。

〈動物的〉ということばがあります。しかし動物は人間と違って、必要もないのにただ他のものをいじめたり、危害を加えたりすることはないと思います。非常に攻撃的な動物だって、生きるために必要な性質として、そういう特性が具わっているだけのことで、人間の場合と根本的に違います。雌のカマキリが交尾したばかりの雄のカマキリを食べてしまうのは、繁殖するために必要な栄養をとるためです。そうしなければ生きられないし、種を保存することが出来ないために、必要に迫られて、そうせざるを得ないのです。

動物は、人間が考えているような意味では、決して〈動物的〉ではないのです。食欲や性欲を満たすのは、それが生存のために必要だからで、そのことを〈動物的〉と言うのなら分りますが、残酷だという点から見れば、人間の方が動物よりも余程〈動物的〉なのです。オオカミに育てられた人間のこどもが、四つ脚で歩き、手を使わないで直接、口で食べ物を食べ、身を守るためにオオカミのように吠えるのは、人間が単に動物になった場合です。それも動物的な人間かも知れませんが、文明人の中にいる〈動物的〉な人間とは違ったものです。殺さないことが出来る、

いじめないことが出来るのに、敢えて殺したりいじめたりする、それが人間です。ただ残酷なことをするために残酷なことをする能力は、人間だけにしか具わっていません。
＜野蛮＞というのも同じことです。野蛮人が人を殺したりする場合、何も理由がないのに殺すことは、比較的少ないのではないでしょうか。人を殺すには、殺さないとこちらがやられるとか、食物がないとかいう、何らかの現実的な理由か、あるいは想像上の、たとえば宗教的な理由がある場合に、ほとんど限られるものではないでしょうか。人間は想像力を持っているだけに、想像を現実と混同すると、とんでもない悲劇が生じます。古い時代には、宗教的な迷信から、間違って人を殺したことがありましょう。しかしそれは、つまりそういう野蛮は、いわゆる人間の＜残酷好み＞とは根本的に違います。皮肉なことですが、人類は文明が進めば進むほど＜野蛮＞になると言えないこともありません。
＜暴君＞の場合は違います。暴君は必要もないのに、人々をいじめ、殺したりします。彼は狂った欲望を持っており、彼の狂った欲望から生じる狂った想像、と言うより、空想や妄想を、現実に実行しようと、するのです。＜必要＞に関係なく膨れ上った＜欲望＞そして空想と現実との＜混同＞ではなく、空想を現実にも＜実行＞しようとするのです。歴史上＜暴君＞と言われるような人たちは、たとえば妊婦の腹を裂いて胎内の子を見たとかいわれる殷の紂王、わが国の武烈天皇、豊臣秀次、その他の人たちは、いずれも王朝の末期とか、そうでなくても自分の身が危ういとかで、非常な不安の中にあって頭がおかしくなっていたのではないでしょうか。彼らは例外なく悲惨な末路をたどるか、少なくとも子孫がとだえてしまっているようです。
　暴君はただ理由もなく、不安から頭がおかしくなって、人をいじめたり殺したりしたのだろう、とわたしは言いました。ただ、暴君がこのようなことを行ない得たのは、彼が絶大な絶対権力を持っていて、普通の人なら犯罪として追求されることでも罰せられる心配なしに公然と行ない得たからです。しかも歴史上に残る有名な暴君たちは、大体、終りを完うしていません。久美さんのご主人のような＜家庭の中の暴君＞が、円満な家庭生活を完うし得るとは、わたしには思えません。嫌なことを言うようですが、間違えば犯罪者になりかねない、とさえ、思います。わたしが＜この野蛮は許せない＞というのは、このことです。（ことばが過ぎたらお許し下さい）
　もちろん一般に男は、こどもっぽいところがあるとか、夫は妻に母性愛を求めている、とかいうことは事実でしょう。わたしもそれは否定しません。女には男を一種の、こどもとして見るような＜母性愛＞があることも事実です。しかし、それも程度によります。亭主は、こどもではなく大人です。体も大きく、力も強く、知能も発達しています。こどもだって＜暴君＞にさせて置くのは正しい母性愛とは言えないでしょう。盲目的な母性愛は、しばしば、こどもを誤らせます。まして妻の人格を認めず、妻に盲従を強いる暴君のいる家庭は悲惨です。このようなことが許されていい道理はありません。
　それじゃあ、われわれはどうなるんだ。SとMは救われないのか。という奇クの読者の方たちの抗議が出るかも知れません。しかし、わたしは、ただプレイには＜愛情＞が必要だ、と言いたいだけなのです。それは相互の＜娯しみ＞を基本条件とするプレイでなければならないと言いたいのです。愛情の上に立ってお互いの嗜好に協力し合うという形で、夫婦の間でどういうことをしようとも、

それは自由です。Sだって、Mだって、相手が喜ぶことならば、進んで応じるのが愛情ある夫婦でしょう。一方的な人格無視はいけないのです。まず、はじめから極端なことを要求するのは、愛情ある夫婦とは言えないでしょう。相手の気持をよく理解して、進度を加減しながら、じっくりと時間をかけて〈飼育〉して行くことは、夫婦の幸福な生活を実現しこそすれ、何ら非難に値することではないでしょう。むしろ、それこそSM夫婦の理想ではないでしょうか。

わたしの考えは甘いかも知れません。議論としても不十分で、間違ったところもあると思います。そういう点は、どんどん批判して下さって構いません。それはそれとして、最後に「憎組の記」を見ながら、奇クの性格について一言、述べて置きたいことがあります。

四

人間が想像力を持った動物であるということは、動物にはない新しい世界、自覚した生物としての豊富な精神の世界を、人間に開いてくれるものです。これは、すばらしいことです。人間も他の動物と同じように肉体を持ち、その肉体の必要に応じて欲望をみたします。しかし、欲望はもともと、必要をはるかに超えるものです。普通、人間の必要という場合でも、動物に必要なものより、はるかに以上のものを指します。動物の必要を超えるところに人間が成立します。そして人間の欲望は、その人間の必要をどんどん引き上げて行きます。これは人間だけに起り得ることです。

人間が食欲や性欲を満たすとき、動物のようにガツガツとみたすでしょうか。清潔な食堂、くつろいだ雰囲気、美しく盛られた食物でなければ、人間はおいしいとは思いません。静かな部屋、落ちついた照明、甘ったるいムードの中で男と女が抱き合います。ときにはガツガツと飢えたケモノのように振舞うとしても、毎日がそうであれば、それは人間らしい生活とは言えないでしょう。婚約期間中は甘いことばかり言っておきながら、もう結婚四月目には、ハダカで無残に縛り上げられた女の写真を見せられ、その次の夜からは自分がその通りにされてしまった久美さんは、二十一歳と二十八歳という年令の開きのせいもあるでしょうが、何て純真で初心（うぶ）な人だろうと思います。しかし、

「彼がブルブル慄えながら喰いつきそうにしばられた私を眺め、グルグルとベッドを廻って奇妙なウナリ声のような声で……」

というところで、

「彼の恐ろしいほどの感激ぶりに異質の充足感を覚えた……」

というのも分りますが、それから毎日、八カ月にわたってそういうことが続いたというのですから、人間らしいところのある女なら、それに疑問を感じない方がどうかしています。どう見ても夫が新妻を扱う態度ではありません。オオカミが獲物に襲いかかる恰好です。動物と同じように、人間も肉体の満足を求めてそれに溺れることはあっても、それに没入するだけの「精神的よりどころ」すなわち、人間らしい〈愛〉というものが必要です。納得できないことを無理に強制されて、理解しようと努力しても理解出来ないのは当り前のことです。混乱させられた頭がいつかは、おかしいと気づき出すのは自然の成り行きです。久美さんの頭を混乱させるような仕方で、読まされた奇クに、久美さんが反感を持たれても、文句は言えないところです。

第一、奇クは、まるでキリスト教徒がバイブルを読むような態度で、夫婦生活の指針と

して読むような書物とは違います。久美さんの純真なのにつけこんだご主人は、全く噴飯に値することを久美さんに強いたのです。まず読み方が間違っています。テレビのよろめきドラマをよく見て、自分もそのように行動するための手本にする奥さんがあるかも知れませんが、それがテレビの正しい見方だなどと言ったら笑いものでしょう。奇譚クラブには嘘も書いてありましょう。下らないことも一ぱい書いてありましょう。しかし、それはどの雑誌も似たりよったりです。ただ、誇張して書きたいという点は、他の単にセックスを売り物にしている雑誌より、マニアの気持を考えればむしろ自然で、弁護の余地があると思っています。現実に出来ないから、縛ったり殴ったり、その他もっといろんなことをする場面を文字で見て想像して楽しむのです。もちろん大いにいいことが書いてあるわけではありませんが、そこにいわゆる悪書の効用もあるのです。〈聖書〉ではありません。確かにむしろ〈性書〉でしょう。しかし単なる性書ではなくて、いくらか変った面を持っています。そしてそういう面がマニアにとって奇譚クラブの面白い、と言って悪ければ、特に期待されているところなのです。

奇譚クラブを読んでみて理解出来なくたって、一向、構わないことです。わたしたちにだって、理解出来ないことが沢山、書いてあります。どの傾向のものは嫌いだから読まないなどと言うと、反論が出そうですから止しておきますけれど、わたしに限らず、全部読む人の方が少ないかも知れません。また、マニアでない人が読んでみて、へえ、こんなことがあるのかと思って下さっても、何も差しつかえないことです。あるいは熱心なマニアが読むのよりも、一般の人たちが読んで下さる方が多いかも知れません。それでいいのです。好奇心だけから読んで、夫が妻にも読ませ、夫婦生活がいくらか楽しくなったとすれば、それは予想外の手柄というべきものでしょう。そのために夫婦生活が、まずくなる場合もあり得ないでもない。たとえば久美さんのように、と言われれば、ただ黙って頭を下げるしかありません。出来るだけ、そんなことがないようにと祈るしかありません。

わたしは無責任なことを言っているのでしょうか。そうかも知れません。そうだとしたら、どうか久美さんのご主人のように奇クを悪用、もしくは少なくとも間違った使い方をしないで欲しいとお願いします。どうか是非これが性生活のお手本だ、見本だなどと言わないで欲しいと思います。久美さんのご主人の場合は、それ以前の、妻にたいする態度そのものに問題があることは前に申した通りです。わたしたち奇クに愛着を持っているものは、奇クを決して立派な雑誌だと思ってはいませんが、だから、つぶしてしまえという論に対しては賛成しかねます。どんな立派な、たとえば学術書だって、犯罪に利用しようと思えば出来ます。久美さんのケースは、わたしにとってショックでしたが、大部分の人はそういう読み方をしていないと信じる理由がありますし、また普通なら、そういう読み方をされるはずがないと思っています。

〈プレイ〉ということばには、「遊び・遊戯」という意味と「戯曲・演戯」という意味とがあります。つまり〈役割を演ずる〉という要素と、それが同時に〈一緒に娯しむ〉ことになるという要素とが、なくてはなりません。動物には芸当を教えこむことは出来ても、それが動物にとって楽しみである、と言うことは出来ないでしょう。英語で〈娯楽〉といえば〈エンタティンメント〉です。エンタティンメントの一番代表的なものが、東洋でも西洋でも芝居、演劇、見せ物です。大勢

の人たちが集まってワイワイさわぐ、飲み食いを伴った、お祭りさわぎです。この陽気な〈プレイの精神〉を忘れて、やたらにむずかしい顔をしてムキになって努力したりすべきものではありません。夫婦プレイでも、それぞれが演ずる役割に従って娯しくやるべきもので、それが何か行（ぎょう）のようになったらおしまいです。我田引水ですが、ヨーロッパで十五世紀頃、「妊娠した女を裸で人の眼に曝すことさえ躊躇しなかった」などといわれるのも、何かそういった楽しいお祭りかなんかの時だったのでしょう。

〈エンタティンメント〉ということばは、「他人をもてなす」という意味もあります。他人と交際することは、まず会話することから始まります。会話によって、他人と心が通じ合うのです。わたしたちが、奇クという場に集い合い、たわいもないことばかり語り合うのも、そのためです。投稿したり読み合ったりして、お互いに慰め合うのです。お互いに約束を守り、気心が分っている仲間ですから、決して〈空想〉と〈現実〉が混同されたり、愚かにも空想を現実に〈実行〉したりすることはないはずです。誰かが暴走しようとする場合にはチェックがかかります。奇抜な、あるいは奇矯な話題が語られたとしても、空想と実際、冗談と本気の区別は分っています。感興を増すことはあっても、雰囲気をブチこわさないで済みます。ワイフ・スワッピングなどと言って、複数の夫婦で楽しみ合う遊びが流行しているらしいのも、根本はこういう「見たい・見せたい」「聞きたい・聞かせたい」などという欲求からなのでしょう。もちろん、あまり夢中になり過ぎて、日常生活のモラルを無視しても困りますけれど。

アブノーマルということは、それだけで単なるセックスの解放ということ以上に、危険な要素を含んでいます。肉体の解放、それ自体も人間にとって大事な意味をもっています。しかし、単なる肉体の解放は、精神の解放につながらなければ〈動物になることの自由〉に過ぎません。アブノーマルなセックスの解放もまた〈動物よりも動物的な人間になることの自由〉であってはなりません。しかしむしろ、アブノーマルであることを自覚しているわたしたちの方が、間違いが少ないんじゃないでしょうか。わたしたちは世の中の偏見を知っています。自分たちの理解出来ないことを危険視する偏見を。ですから、わたしたちはいつも控え目で、世間を恐れています。わたしたちだけに許された特別の妖しい愉悦の代償として、世間をかき乱してはならないことをよく知っています。

アブノーマルな欲望というものは、極端なものについては、普通は空想だけのものです。妄想というものは、実現しようとすれば、その妄想のためという以外の動機を持たないもので、他人から見れば無意味な行動です。だから、そのことを自分でよく知っているそれらの人たちは、それを実行しません。実行するはずがないのです。なぜなら、オオカミが必要もないのに羊を殺すことがないのと同様で、本当に必要でもないことのために身を滅しても意味がないからです。空想だけでも一応、間に合うからです。必要にせまられて金を奪ったり、人を殺したりするのと訳けが違います。こんな馬鹿げた引き合わないことはないからです。

大変、長たらしくクドクドと余計なことを書いたようです。プレイというものの本質を、わたしがこうだと思うところに従って、生意気ですが少し書いてみました。「憎縄の記」の久美さんをはじめ、皆さまのご参考になりましたでしょうか。

―― 懸賞入選作品 ――

狂獣の宴（下）

能美積

21 獣の宴

三人の贄は、夫々の鎖に並んで繋がれた。房代は緋色の絨氈に相応しく、襦袢の裾を乱して横坐りにされ、その両横に里絵と映子が立たされた。

〃総ては私の計算どおりに進展させる。食事と睡眠の時間も与えよう。お前たちは一時しのぎの玩弄物ではないからだ。ひょっとしたら私の余命が尽きるまで、その肌の美しさは衰える事もないかも知れんからな。生理現象は私の助手に申し出るとよろしい。サテ十分ほど時間を与える。その間に、まず手紙を書く順番を決めておきなさい〃

そう云い残して、剛三は室を出た。

〃都築さん。房代さんも里絵さんも負けては駄目よ。頑張って下さい、ね〃

〃あ、あなたは？〃

〃立花の秘書なの。見張り中に、うっかりして捕まってしまったの〃

〃あたし達のために、申し訳けありません〃

〃そんな事いいわ。これもお給料の内ですもの。今に立花や、それに伊藤という人が救い出しに来て下さるわ〃

〃だめ、駄目なのよ、映子さん〃

〝なぜ、どうしてなの、里絵さん？〟

〝あなたは知らないけど、ここは密室なの。あたしはそれを知らせる事も出来ない内に〟

〝大丈夫よ、きっとみつかるわ。力を落しては駄目。あたし達が脱出しなければ、あの獣のような男を捕える事は出来ないでしょう。それに房代さん、御主人を殺害した犯人だって、あの蟹浦なんでしょう〟

〝ああっ〟

〝頑張りましょう。三人、力を合せて機会を狙えば、なんとかあの男を倒せると思うわ〟

〝エ、映子さん、あの男は怖しい男なの。とても、あなたには想像もつかない程の……〟

〝知ってます。でも拷問なんかに負けては駄目。里絵さんの事だって私が名刺さえ持っていなければ良かったんだけど。でも今度は大丈夫よ。どんな事があっても偽の手紙なんか書かないわね、貴女達も誓ってちょうだい〟

〝あ、あの男は、ハ、はだかにするの……〟

〝はだか？　そんないやらしい事を〟

〝里絵さん、あ、あなたも……〟

〝お姉さま、……お姉さんも……〟

〝羞かしい、死ぬような辛い思いを……〟

姉妹は、おぞましい責苦を思い出し声もなく泣きむせぶのだった。威勢のよかった映子も裸にされるときかされて、息を呑んだ。そういえば貞操を云々、と蟹浦は言っていたようだ。現実にそんな馬鹿な事が……

剛三が、おしのをしたがえて戻って来た。

〝これはとんだ愁歎場だな。何も泣く事もあるまいに……処で今の話ではまだ順番もきめとらんようだが、どうしたね。映子、目ばかりパチパチさせとるが、どうした。お前達の話は、私の耳には筒抜けなんだよ。さて、誰から始めるね？……〟

〝手紙なんか書きません。でも責めるのだったら、あたしを責めて。その代り、二人の人には手出しをしないで〟

〝残念だが、お前の指図は受けけん。しかし、なんだな、お前だけが泣いとらんというのは不自然な話。よろしい、先ずお前の泣き声を出させる事から始めよう。おしの、足枷を出しなさい〟

〝止めて、その人は何の関係もないのです。苛めるなら、あたしにして〟

〝駄目、駄目よ、里絵ちゃん。あたしが、私が責められます。映子ちゃんも私に任せて〟

〝ほ、ほう余程みんな責められるのがお好きらしいな。しかし私は私の計算通りにやる〟

剛三は足枷を持って、映子に近づいた。

〝おしの、スラックスを脱がせなさい〟

おしのは命をうけると間髪をいれず行動を開始した。房代は瞳を凍らせて、おしのの動きを凝視したが、里絵は逆に瞼をふさいだ。この女の惨忍性を身を以って体験させられているのだった。ジッパーが引き下された。

〝な、なにすんのよ……〟

〝あたり前の事をきくな〟

身を屈めてスラックスを脱がせようとしたおしのの顔を、映子は膝頭で蹴りあげた。おしのは、俯向けに引っくりかえった。

〝こいつ、なめた真似をしよって〟

今度は剛三が代って、一気にスラックスを足首の処まで、ずりおろした。それで映子は動けなくなった。必死に太腿を閉じ合わせたため薄いスリップがよじれて、桃色のパンティが透けてみえた。

〝お前は優しくするとつけあがる性質（タチ）だな〟

剛三は足枷を放り投げると、麻縄を用意してきた。それで身もがきする足首を厳重に縛りあげると、ようやく起きあがったおしのに鎖をさげるように命じた。鎖は、すべてベッドの頭部にあたる位置にセットされた、釦によって上下する仕組みだった。鎖がさがると、フックに止めてあった後手の縄を外して、剛

三は足首の縄を力任せに引っ張った。重心を失った映子の体は、音を立てて転倒した。両腕は背中に折り曲げられ、手首は背骨のあたりに縛られているのだった、悲鳴が四囲の鏡にこだました。剛三に容赦はなかった。彼は足首の縄を、ブラブラ揺れているフックに繋いだ。

〝剝き易いように、適当な高さに吊るんだ〟

カラカラと音を立てて鎖が縮んだ。逆に映子は、足の方から伸びていった。肩が絨氈にわずかに触れるまでに吊りあげられた。剛三は、足首にまといついているスラックスをつまんで投げた。胸と手首の縄は解放した。映子は両手で体を支えて後ろ向きになった。変形な腕たて伏せの恰好だった、既に腰のあたりまでめくれあがったスリップは、ブラウスと共にひきはがれた。ブラジャアは、ひとまとめの衣類と一緒に、肌からはなれてしまっていた。パンティは毛むくじゃらの指によって、真っ二つに引き裂かれた。

〝いゃあ。た、助けて〟

映子は始めて言葉になる声を発した。たった今、里絵によってきかされた信じられないような屈辱が、一挙に襲いかかってきたのであった。剛三は手首を一つにまとめて括ると、改めて仰向けにした。

〝おしの、伏せんように押さえとけ〟

小麦色の皮膚を持つ見事な裸身だった。丹念に時間をかけて灼き、磨きあげた事を証明するにたる、統一された肌の色だった。

〝おしの、思いがけぬ拾い物だな〟

〝はい、でもあの娘に比べると大分、おちるようでございますよ〟

鼻っ柱を蹴られた遺恨も手伝って、おしのは手首の縄をぐいぐいしぼった。若い小麦色の生贄は、ぜいぜいと咽喉をならしてくねりもがいた。剛三は、どっかと床に腰をおろすと、その贄を料理にかかった。映子の乳首は小さかった。だが剛三の蟹のような手の動きとともに、微妙な変化を生じていた。押し殺した悲鳴が恨みと羞恥を包んで、悲しげに幾度も湧き上り、尾をひいた。

〝旦那様。この娘は旦那様の事をけだものだなぞと申しておりましたね〟

〝ふむ、可愛いい顔だが、口はよくない〟

〝ヒイッー〟

指先が無遠慮に這い、映子は狂気のように全身をふるわせた。

〝けだものとは、どんなものか、思い知らせてあげましょうよ。第一、これではし・の・が、くたびれてしまいます〟

〝そうだな、猪吊りにしてみるか〟

おしのは嬉しそうに起きあがると、手首の縄を足首を吊ったフックにかけて、掛声をあげてしぼり始めた。みるみる内に両手は引きあげられ、足首のそれと重なった。おしのは小走りにスイッチの方に走った。

〝いゃあッ…た、助けて……〟

全身が床を、はなれた。

〝やめて、助けて、助けてやって。お願い〟

房代の声に剛三は振り返った。胸元が乱れて、胸の隆起の谷間のあたりが剛三のすぐ横に息づいている。柔肌に喰いこんでいるのであろう二の腕のあたりがくびれているのだ。身悶えて荒い呼吸を吐いているのが、映子にはない女の色香を、室一杯に巻き散らしていた。思わず絶叫はしたものの、まっすぐ剛三にみすえられて房代は、はっと顔を伏せた。白いうなじにくねるおくれ毛が、他のなにかを連想させて、新たな食慾が剛三を狩りたてていた。剛三は、ゆっくりと向きを変えた。

〝房代、お前が代りになるかね……〟

〝……〟

〝おしの、もっと吊りあげるのだ。それから皮の鞭をもってきなさい〟

カラカラと鎖がなった。映子の体は芋虫のように宙に悶えた。剛三は、しなやかな鞭を手にして映子の周囲を一巡した。狙いは小麦色のもっとも打ち易い双丘だった。ヒュウーと空を切って、その先端が伸張しきった若肌に喰い入った。
〝ひいっー……〟
〝やめて、やめて下さい〟
〝どうした、裸になるのかね？〟
〝ハ、はい……〟
〝だめ、だめお姉様。あたし、私が〟
〝私は、どちらでもよろしい。早くきめなさい。でないとこの娘が痛い目をみるだけだ〟
〝あたしです。は、早く映子さんを降して〟
〝先ず、肌を拝んでからだ〟
剛三は房代の縄を解き放った。絶望の淵に追い詰められて、房代は既に生ける屍に化していた。形ばかりの、洪によって巻きつけられた伊達巻は、はらりと解けた。
〝少しでも、あがらってみろ。映子の肌に鞭がとぶのだ。ほう、下着はなにもないのか？これは、どうも驚いたな〟
房代は両手で乳房を蔽うった。そんな惨めな義姉の姿を足元にみながら、どうする術もない里絵も又、救いのない地獄の中で絶望の涙を流し続けているのである。ぎしっ、ぎしっと縄が鳴った。映子も同じ気持であろう。自分の為に肌を晒した房代。
見れば見るほど美しい女であった。しっとりと脂の乗った肉のまるみが、ふるえている。丸い肩と胸のあたりを波のようにあえがせているのは、口惜しさと羞かしさに必死になって耐えているのだ。それが余計に剛三の好き心をゆさぶるのだった。後には手づかずの餅肌がある。いや待てよ、里絵はもっと後の楽しみにとっておくのだ。とりあえず、その必要もないのだが一応、手紙を書かせるか？
〝おしの、しゅろ縄を使おう〟
〝はいはい、かしこまりました〟
〝房代、手を背中に廻すのだ。映子のためにな〟
さからう事は許されなかった。両の腕を、おそるおそる後に回すと、ぞろりとした感触が二の腕に絡みついてきた。むっちりと盛り上った胸の隆起が、その頂点まで羞恥に烈しく息づいている。夕べから、あく事なく繰り返された縄目の恥辱。だがこの縄は、身も心もそそけだつような、いやらしさだった。
〝しゅろで編んだ縄なのだ。少しかゆいが、我慢しろ〟
〝は、早く、映子さんを降してあげて……〟
〝まだお前を縛り終っては、おらんのだぞ。さあ、さあ、早く。今度は足だ。足を出すのだ〟
〝ああっ、も、もうこれで許して……〟
〝仕方がない、映子を責めよう。私は、どうも鞭を使うのが苦手でな。鞭というやつは、みた目よりはるかによう利く。下手をすると、殺してしまうかも知れんぞ〟
〝出します。足を、足を括って……〟

………◇………

〝む、むうっ……むうっ……〟
映子の、断続的な呻きであった。
〝ああっ……か、かゆい……ああっ、え、映子さん、ゆるしてえ。……ああっ〟
房代は死ぬより辛い姿であった。上半身はしゅろ縄で締めあげられ、緋色の床に転がっている。両足は別々に縛りあげられ、高々と天井を向いている。いや、もっと辛いのは映子であった。つまり猪吊りの姿態の上に、唇に縄を噛まされているのだ。その縄が房代の両足を支えているのだった。存分にのけぞらされた首筋が、折れんばかりの苦しみだった。房代にも、それが解るのだ。少しでも足

を伸して楽にさせてはやりたいのだが、房代も又、腰骨の激痛と、肌をさいなむしゅろ縄のかゆさに、脂汗をにじませて悶え狂っているのだった。里絵だけは先刻と同じ姿勢でいる。剛三が、

〝なんだこれは。フームご念の入ったことじゃ。房代、誰にこんなわるさをされた〟

洪の仕業による陶器肌をからかって、室を出てから、数十分は経過していた。おしのが残って交互に三人を看視している。書く気になったら一人ずつ連れてきなさい。そういい置いて、剛三は去ったのだ。

〝おしのさん、お願い。許して、許してあげて……あたしを代りに苛めて下さい。許して〟

無駄な哀願と知りつつも、叫び続ける里絵であった。

〝お姉さま、……いっそ、いっそ、舌を噛んで、し、死にましょう……〟

〝ああっ、死、死にます。舌を舌を噛んで〟

〝ああ、いいともさ。勝手にお死によ。でもねえ、死んだって同じ事だよ。舌なんか噛んだって、そう簡単には死ねないもんでねえ……それに前にもあった事だけど、旦那様は血だらけの体も、またとてもお好きなんだよ〟

〝ああっ……おねえさま〟

〝それに、この娘は死ねないよ。あんた達の分まで、たんまり可愛がって貰える訳さ〟

おしのは、映子の首にぶらさがっている金色のクロスのペンダントを手にすると、それで映子の鼻の孔をくすぐった。

〝ク、グエッ〟

〝おしのさん、手紙を書きます。助けて〟

〝おや、そうかい、あんたが一番楽な筈なのに。まあ、いいよ。書く気になったんなら書斉に案内してあげる〟

〝お姉さま、……映子さん、待ってて。すぐに、直ぐに助けてあげます〟

助けられる訳けはなかった。しかし、この地獄の苦しみから、たとえ一刻でも解放してやる為には、それ以外に道はなかった。

……………◇……………

夜が来た。ほんの数時間ではあるが、三人に安らぎの時が与えられた。縄目は許されたが、代りに手枷と足枷が嵌められた。三人とも黙っていた。何を話しても無駄であり、総てが聴取されるのだ。房代は少しだが居睡ったようだった。おしのが入って来た。

〝これから入浴。食事の欲しい人は、そうおっしゃい。いっときますがね、あんた達には四六時中、見張りがついているのです。変な考えを起しても無駄な事です〟

入浴を済ませ、気の進まぬ食事が終ると、再び地獄の室へ追い込まれた。一縷の望みを持って、なんとかする隙を三人ともこの様に摑もうと願ったのだが、おしのの言葉どうり無駄な事であった。化粧が始まった。それぞれの肌に合うカラークリームでメェキャップされ、濃いアイシャドゥとルゥジュが引かれた。総てが完了すると、おしのは揃いの長襦袢と湯文字を並べた。

〝これが枷の鍵です。勝手に外して、さっさっと身仕舞をなさい。ゆっくりしてる時間はありませんよ〟

おしのは、そういいつけて大急ぎで室を出た。三人の裸女は、いわれた通りをするしかなかった。たとえ、これから何が始まるにしても、裸でいるよりはましだった。身につけ終ると三人は、一隅により添って顔を見合わせた。昼間、剛三によってきかされた言葉の一つが、けばけばしい衣裳と、どぎついメェキャップをなされた事によって、お互いの胸の内に大きな不安となって現われているのだった。壁が開かれた。男達はゾロゾロ室に入って来

た。

〃どうかね諸君。この見事な花はどうじゃ、素晴しい眺めであろうが〃

誰も応えなかった。ただ目を見開いて三人の美女をみつめるだけだった。

〃諸君には気の毒だが、当分の間は外で見張りを頼みたい。御覧のとおり自由にさせとるんでな、三人で、襲われては、ひとたまりもないんだよ。フワッフワッフワッ〃

剛三は自分の戦利品？を若い者にみせびらかす事によって自己満足し、三人に、絶対に逃走の可能性のない事を鼓吹したのだった。おしのに手渡された麻縄をしごいて、剛三は里絵を手招いた。なにか言おうとした房代を制して、里絵は自から進み出で背を向けると、両手を後ろに被縛の姿勢をとった。その態度が剛三を怒らせる結果になった。剛三は、たった今結んだばかりの里絵の腰紐を抜きとった。いきなり衆人環視の中で裸にされるとは夢想だにしなかっただけに里絵は愕然となった。が遅いのだ。あっという間に、燃えるような緋の湯文字一枚に剝かれて、突っ伏した。

〃お前達は出ろ。出て行くんだ……〃

男達は、見幕に気押されて、それでも眼の隅に焼きついて離れないであろう里絵の半裸に圧倒されてしまったようだった。白壁が元の通りにしまるまでには、里絵は無残にも高手小手に縛りあげられてしまっていた。おしのが馳け込んできた。

〃まあ、旦那様、これは又どうした事でー〃

〃予定を替えた。まず里絵を賞味する。三番の枷を出しなさい〃

おしのが救急箱から取り出したのは五分丸程の銅製の棒だった。両端に紐がある。鼻をつまんで、それが里絵の歯を割った。棒は頰に添って折り曲げられ、二本の紐が首筋で結えられた。舌を噛ませぬ用心だった。

〃サア、立て。たってベッドへ歩くのだ〃

よろよろと里絵は起きた。いや、引き起されたのだ。女盛りの、肥り加減の雪の肌、むっちり盛り上った乳房の見事さ。必死に身を縮めているのは、囚われの女のあわれな姿勢であった。ベッドの上に押し倒した剛三は、湯文字に手をかけた。

〃サ、里絵ちゃん……〃

〃房代、それから映子もだ。お前達も裸になれ……散々私に見せた体だ、羞かしい事はもうなかろう。脱ぐのだ、自分でだ〃

〃……〃

〃愚図々々してると、容赦はせん。里絵の湯文字を引っ剝ぐぞ。そして房代のように丸坊主にしてやる〃

〃待って、ぬ、脱ぎます〃

〃腰の物は許しておこう。襦袢を取れ〃

それは剛三の憐憫の情ではない。どうにでもなる獲物たちを、じわじわ、いたぶり凌辱する事に依って、異常な快感に酔い痴れているのにすぎない。房代は、身を屈めて羞恥に打ち震えながら、自からの手で襦袢をはいだ。幾人もの男達によって、縄をかけられ、羞かしめを受けた肌であっても、改めて晒す羞かしさに、限りのあろう筈はない。しかも、この獣のような男の命(メイ)で、最愛の夫は殺されたのだ。豊かな双胸を両の手でかき抱く。

〃両手は上に挙げておけ。そんな恰好では裸になった価値がないぞ。万才をするんだ〃

それすらも、許そうとはしない非情さ。

〃映子は、どうしたね。無関係の里絵のためには裸になぞは、なれんという訳けか……〃

半裸の二人は両手を頭上に、晒し者の惨めな姿態を強制された。剛三は首輪をとると里絵のうなじに回し、鎖をベッドに繋ぎとめて、ゆっくりと二人の方に歩みよった。

〃今までにも随分いろんな女共を縛ったが、複数の、それもお前等のような美女揃いの経験は残念ながら一度もない。いうなればだ、盆と正月、それにお祭りが重なった。……古いかな、こういう形容は。ハッハッハッ〃

腹の底からこみあがってくる笑い声を、押えようともしないのだった。

〃美しい肌には、なんといっても縄がよく似合う。よくしなう細い縄がな……〃

勝手な理屈を、勝手につけて、

〃おしの、房代を後手に縛りなさい。手首だけでよろしい。厳重にだ〃

〃平凡すぎますよ、旦那様。わたくしの時のように、もっともっと、いろんな縛り方がありますのに〃

そんな事を言いながらも、おしのも又楽しんでいる。

〃縄の真ん中で縛りなさい。二重にして垂らしておくのだ。さてっと、次は映子の番だがお前は房代と背中合わせになれ。そうそう、手は降ろして、それから房代の腕の間に差し込むんだ。子供の時によくやったろう、ギッコンバッタンの要領だ。よろしい。おしの、映子の手を房代の乳の下、いや上がよいな。まわして 括り合わせ なさい。 縄の 中心でだぞ〃

少し背の高い映子の両手は房代の腋を持ちあげるようにして、重ねて固定された。何をされるのか解らない未知の恐怖に、そして目の前の鏡に写し出される惨めな我が身に房代も映子も、おそれおののくばかりであった。

剛三は、映子を縛った縄の一本で、房代の胸の谷間から乳房をもちあげるようにしておいて、映子の前に 廻り、一寸の間、思案したが、

〃よし、口にかませよう。それが一番効果があるだろう。あーんと口を大きく開けろ〃

唇を二つに割ったその縄尻は、房代の二の腕を締めあげ乳房の下で止められた。もう一本も反対側から同じ方法で廻される。映子は二重に縄を啣えさせられた勘定になる。腰骨の上のあたりに固定された柔らかい筈の房代の掌が痛い。剛三は、犠牲の足元にとぐろを巻いている二本の縄、房代の両手を縛り合せた縄の片方を、おしのに渡し、自分も又その一本をつまんだ。

〃少しで良い、二人共、片足を持ちあげろ〃

この上にまだ足までも縛られるのか？……

おずおずと、お互いに、かばい合いながら、そっと片足をあげた。と同時に、

〃ヒャアッ……〃

〃ムッ、ムムウ〃

気づいた時は、もう遅いのだ。二本の縄は被縛者を従割りにせんばかりに巻きつき、二人の男女はケタケタ、コロコロと笑いながら上に引き揚げ、締めつけた。

〃だ、旦那様、何処に止めます、縄尻は〃

〃何処でもよい。私は、ほれ、こうするよ〃

二人の咽喉に縄が絡んだ。映子の唇を割って胸に巻かれた縄のために、房代の方は楽かもしれぬが、映子の方は、みるも無惨。

〃何をもたもたしとる。どれ、かしなさい〃

胸を締めた縄目には、新しい縄の通せる余裕はないのだ。が、剛三は女の肌の柔軟性を周知している。縄止めは完了した。与えられた一枚の湯文字が、羞恥をやわらげる唯一の布切れであった。そして、それで連縛が終ったのでは無かったのだ。

〃すわれ。二人共、正座するのだ〃

出来る筈もない注文だった。しかし、出来ぬ事を強要するのが剛三だった。

〃仕方がない。房代、お前は正座だ。映子は両足を横に開け。それなら坐れるだろう〃

縄目の苦痛に悶えくねり、二人は座した。更に映子には、もっと苛酷な拷問が用意され

ていた。右足首に足枷が科せられ、それは房代の膝に乗せて左足首と繋ぎ合わされた。悲鳴は声にはならなかった。映子の全身を支える形になった房代も、又苦悶の脂汗をしたたり落し始めていた。
〃さあ、これで終りだ。ゆっくり汗を流すんだな。これから里絵と相談がある。前にもいったと思うが、里絵に対して私は無理強いはやらん積りだ。屈伏し、服従せん限りはな。姉思いの娘だから他分、簡単に私を受け入れて呉れると思うが……どうかね。苦しそうだな、だが私を怨むな。お前等二人に休息の時間を与えるか否かは、総て里絵しだいなんだ〃
剛三は、ゆっくりとベッドに歩みよった。
高手小手に縛り上げられ、首枷を嵌められた里絵は、房代の名前を呼び続けていた。けものの眼光が、再び自分に向けられた時、処女の本能で総毛だつ思いであったが、里絵は観念のまなこを閉じた。姉と映子をおぞましい責苦から救い出すのは、この身を投げ出す以外に道は無いのだ。噛まされた鉛の棒は声を出す自由こそあれ、汚辱の泥沼から逃げ得る最後の手段さえ封じてあるのだ。
〃里絵、これは鷹の羽毛だ、鳩のもあるよ。いいかね、私はお前のその磨きぬかれた見事な肌に少しでも傷を負わせたくは無い。そこでこれを使う事にする。縄目の跡も残したくはないのだが……止むを得ん。一刻も早く私の物になる事だ。責めるのは二人の役目だけで充分、間に合う。さあ、どうするね〃
〃サ、里絵ちゃん……〃
〃……〃
〃負けては駄目、駄目よ。私はいいの。せめて、せめて、あなただけは、助かって……〃
〃うるさいぞ、房代。お前達も仲々の観物だが、今の私に観賞の余裕はない。おしの、シャッタァを降すからな、お前は二人を看視しろ。殺さん程度に可愛がってやれ〃
〃はい旦那様。ごゆるりとお楽しみ遊ばせ〃
信じられない仕掛けがあった。音もなく降りて来た金属性のシャッタァが、二人の贄とベッドの里絵との間を遮断した。剛三は鷹の羽毛を握り直した。
〃やっと二人きりになれたな、里絵。さあ、どうする。私の腕で泣いてみせるか？　それとも羽毛の擽りに悲鳴をあげるか。フッフッフッ、焦る事は無い、私はどっちみち楽しむのだ。ハッハッハッ〃

…………◇…………

首枷と後手の身に自由は無かった。ただあるのは、精一杯に身を縮めて突っ伏すだけの里絵である。柔らかいクッションに胸を埋めて下半身をくの字に折り曲げ、来る筈のない救いへの空しい祈りのひととき。
〃さて、そろそろはじめるか……〃
〃いや、やめて。よらないで……〃
〃そうは、いかん。さてどこから始めるか〃
剛三は、どっかと腰を下すと、犠牲の背肌を瞶めた。長い黒髪が藻のように怪しく乱れて、まといついている。それが余計に男心をそそるのだ。括し合わされた両の手が、必死に宙をさまよっている。黒髪を、ゆっくりと掻き分ける。ただそれだけで美肌は怖れおののくのだ。露わな二の腕から肩にいたる、女だけにある、なめらかな曲線。そこのあたりを羽毛が、ゆるりと餇っていった。
〃あ、あああっ〃
それでなくとも敏感な里絵の肌が、引き締った。剛三の手がゆっくりと動いて、おののく可愛いい両足首を抑えこむ。
〃どうだね、擽ったいかね。じゃが、こんなのは試し程度さ。ほれ、ここん処をこうしておいて、足のうらを、こうしたら……〃
〃あっ、ひ、ひ、ひ〃

桜貝をはめこんだような、美しい足指が反りかえり、曲り、そしてくねった。耐えようのない擽ぐったさであった。無意識の内に里絵は仰向けになっていた。それをいい事に、羽毛は、柔らかい鳩の羽根と取り替えられ、頬から枷のはまった咽喉のあたりと移動するのだ。気も狂わんばかりの地獄の責めだ。

〝あーッ。ひい……ひい〟

羽毛の魔手は瞬時の猶予もくれなかった。もっとも剛三自体も汗みどろの斗いなのだ。躍り狂う女体を力任せに押えておいて、ある時は速く、そしてゆっくりと責め苛なむ事に全力をそそいでいるのだ。里絵は狂気の脂汗を流し、剛三も又、嗜虐のほむらをこの瞬間にかけて、額に汗をにじませていた。

流石に剛三も疲れたようだった。一息いれて、ガウンを手荒く脱ぎ捨てた。烈しい身悶えの後の、骨も肉もばらばらになってしまったような、里絵のあえぎ。

〝どうだね、少しは、こたえたかな〟

〝……〟

〝お前は美しい娘だ。房代もそうだが、お前の体は磨けば磨くほど、素晴しくなる〟

反射的に胸を覆う仕草をする。だが両腕の自由はない。

〝こうしている間も二人は地獄の苦しみを味わっているのだぞ。お前が柔らかいベッドの上で転げ回って遊んでいる間、お前の姉は映子を、おぶって泣いているのだ〟

そうだった。余りの苦しさに里絵は、それを忘れていたのだ。

〝どうやら納得がゆかぬらしいな。では、そろそろ、はじめからやり直すか……〟

〝い、いや、ゆるして……〟

〝轡のせいかな。言葉がはっきりせんな。いっその事、腰巻きもひん剝いて、もっと擽ってみせようか〟

いいも終らず、いまわしい食指が湯文字を摑んだ。

〝いやぁ……助けて……〟

〝さあ、焦る事はない。今度は、つばめの羽根とするか。こいつは小さいが、よう利くぞ〟

〝きえっ……〟

ところかまわず匍いずりまわる擽ったさは羞恥の極限に追いこまれた女体にとって、正にこの世の地獄であった。悲鳴をあげて、苦悶に歪む里絵の顔に、剛三の眼が血走って来た。

〝どうだ。ウンというかな？　たった一言、どうぞといえば……〟

〝いや、いやっ……やめて……〟

〝くそっ、こうなったら容赦はせん。気が狂うまで擽ってやる……覚悟しろよ〟

剛三の手に三本の羽根が握られた。満されぬ慾望が、その羽毛にこめられて、

〝ひいッ、ひい……ひいっ……〟

総身の毛穴がそそけだち、躯中の血が今にも吹き出さんばかりの苦しさだった。

………◇………

シャッターが開かれたのは、閉じられてから、三十分程経っていたろうか。連縛の贄はおしのによって、責め嬲られていた。おしのは、かつて里絵にもそうしたように糸孔のない細い針で、房代の胸の上で括り合せた映子の指を攻撃していた。チクチクッとやるのだが、それだけで映子は悶え躍った。

〝お願い、やめて、許してあげて……〟

哀願する房代も、我が身を責められているのと同じ苦しみだった。映子がもがくたびに縄目に激痛が走り、膝の骨が折れてしまうばかりの苦しさだったし、それにも増して凌辱されているであろう里絵を思うと、身も心も打ちひしがれる辛さであった。シャッターの巻き上る音と同時に二人は、我が身の辛さも

忘れて目を見開いた。眼前の壁に、前手と両足に皮の枷を嵌められて、精根を使い果した贄が俯伏せている。全裸の里絵が死んだように横たわっている。ピクリとも動かなかった。総てが終った。二人の贄は、処女と人妻との受けとり方の相違はあったが、そう思わずにはいられなかった。剛三は、パンツ一枚で、二人の傍に寄って来た。

〃強情な娘だ。あれだけの責めにも、とうとう拒み通しおった〃

〃まぁ、旦那様。それで〃

〃約束どおりだ。私は強制はせんよ。楽しみは明日にのばそう。手を代え品を代えてな……。本来ならこの二人も許せん処だが、私も疲れた。そこで慈悲を与えよう。縄は私がとく。枷を用意しなさい。今夜はマットレスを与えてゆっくり休養させてやる。そうだな、明朝起床は八時だ。湯浴みをさせ洗髪もするのだ。昼食後、美容師を呼ぶ。より美しく装わせ優遇する事によって、感謝の気持を抱かせる。それも一つの方法だろう……何時もなら明日は定例の取引の日だ……が、その必要が失くなったので障りはない。午後三時、調教に入る。房代、三月前の明日、あのバンドマンは死んでいる。其の記念すべき日にどうかね〃

声にならない絶叫を、房代は、あげた。

22　敗北者

立花の愛車、ワーゲンが川底に頭をつっこんだ姿で発見されたのは、朝早くの事であった。あの日、電話を借りる、と室を出た高倉は、たっぷり三十分待たせて戻ってくると、外人がよくやるように大仰に肩をすくめて

〃お互いに話し合いの必要はなくなったよ〃

と言った。

〃鈴木美沙子が現われたそうだよ。僕は、あんた達の手中にあると勝手に思いこんでいたんだが、馬鹿な話だ〃

〃………〃

〃百万円にだ、質屋並みの利子をつけてね。事が事だけに、会長はメンツを捨てて水に流す。とまあ、そういう訳けだ〃

そう言い捨てて帰っていったのだ。立花も雄吉も信じる訳けにはいかなかった。念の為、映子のアパートへ電話をいれた。掛けておいた筈の入口の鍵は中から外され、藻抜けの空です、という返事が戻ってきた。

〃里絵さんが勝手に出る訳けはない。ひょっとしたら、もう一度、奴等の手に……〃

〃なぜ、奴等にあそこが解るんだ〃

〃表に待たせていた助手がいないのです〃

〃………〃

〃とにかく待つより術はありません。二人共、無事なのなら、真っ先にここへ現われる筈です。念の為、事務所の方へも連絡しておきましょう〃

だが、遂に誰一人として現われなかった。

翌朝、立花が出社してまもなく所轄署からの電話であった。

〃君、無事だったのか。あんたが、あんた程の男が道交法を知らん訳けはなかろう。事故を起したら何故、届け出んのだ。我々はだな、アクアラング隊まで出動させて川底をさらっとるんだぞ。き、君は罰金ではすまさん〃

〃運転していたのは私では無い。助手です。女なのです。捜索は続行して下さい。私はすぐに現場、いや、その前に署へ参ります〃

取るものもとりあえず、立花は急行した。事態を重視した交通係官は、彼を刑事室へ招じ入れた。彼は事の顛末を説明した。若い刑事部長は信じられない表情で聴き終えると、善後策を検討し始め、三時間程で一つの結論を出した。先ず非公式に蟹浦邸を訪ね、伊藤

雄吉をも同行せしめ、都築里絵を拘束していたという事実を、しのという女から聞き出せたら、というのであった。立花に異論のあろう筈は無い。彼はメモを繰って雄吉を呼び出した。

〃なんだ、あんたか。立花さん、こんな馬鹿なはなしってあるかい。まったくの話……〃

〃どうしました？　なにがあったんです〃

〃たった今、速達が来たよ。二人からだ。いいかね。色々迷惑を掛けたが、大阪に住む訳けにはいかんので帰京する。そんな文面なんだ〃

〃それは、にせものでしょう。他分〃

〃里絵という人のは知らんが、房代さんの字には間違いない。新大阪駅にてっと末尾にあるんだ。いいかい、驚くな。今、房代さんのマンションに電話してみたんだ。今朝、委任状を持った運送屋が来て総てを完了したそうだ。あんたん処にも現金書留がきただろう。調査費用の残額を送った。そう書いたるぜ〃

〃わたしは朝から警察です。とにかく、直ぐそちらへ行きます。いや、そうじゃあない。叶映子がいなくなっているのです。すまんが今度は私の為に協力して欲しい……〃

…………◇…………

杉田と高倉は鳩首会談の真最中だった。この室にいる限り、誰にきかれる心配もないのだが、ヒソヒソばなしになるのは悪党共の習性みたいな物なのだろう。卓上には新聞が開かれている。三国人射殺事件を報じたものだが、二人の話題は房代に関する事であった。

〃三人もの美女を、ボス一人に独占させる法は無い〃

それが共通の意見であった。夫々に思惑は違っていたが……。杉田が怖れているのは房代の口から、勝手に売り飛ばした事を明かされるのでは無いか？　という不安がある。そして当然の事だが洪殺しの犯人が自分である事が発覚する。くすねたヤクの秘密がバレれば、消される事は歴然だった。今の処、好色な剛三の事だ、女共にかまけてそこまで手は廻るまいが、いずれ解る。早くなんとか手を打っておく必要がある。解ってからでは遅い。

高倉の方は房代の色香に溺れていた。それでなくとも、かねてから狙っていたのだ。それが羞恥責の極限におののく彼女の素晴しさを味わった事で、尚一層の執着心を燃やしているのだった。

〃あけみだけでも、なんとか分けて欲しいもんですな。会長には手つかずの娘が二人もいるんですからなあ……〃

〃くれる訳けはない。奪い出さん限りはな〃

〃う、奪えますか？〃

〃やる気があるのかね、高倉くん〃

〃あ、あんたがやるのなら……〃

〃見張りの四人は俺の手の者だ。買収は簡単だが、問題は、おしのという、あの婆ぁだ〃

〃……〃

〃菅沼だって顎の先で使う程の女だからなあ。ボスの絶対の崇拝者なんだ〃

〃やりましょう、儂に任せて下さい。それで他の二人も連れ出しますか。でないと私等の仕業だとしゃべられてしまいますよ〃

〃それは不味い。いいかね、ボスに取ってあけみ一人位は、どうという事もない筈だ。それこそボスを怒らせる結果になるぜ。いいかね、ボスに取ってあけみ一人位は、どうという事もない筈だ。それに、あの秘密の室を知っている者は限定されているのだ。……其処でだ、あの婆ぁを利用する〃

〃……〃

〃あの婆さんを、房代が金でそそのかせて、二人で逃げ出したという手は、どうかね？〃

〃しかし、他の二人が……？〃

〃黙らせるのさ。房代は助ける。お前達が口

裏を合せて、婆さんが裏切ったとボスに言えば房代の命は保証する。反対にあけみ、いや房代だ。二つ名があると、ややこしくていかんな。房代にも秘密の室は絶対、口外せんと約束させる。これは、どうだ〃

〃それは駄目ですよ。二人が逃げ出せば会長は秘密を知られると思うのは当然でしょう〃

〃だからだな、自分がしゃべれば二人は殺される。秘密は守るから命は助けてやって欲しい。そんな風に一筆書かせておけばいい〃

〃でも、姉妹なんですよ。そんな裏切りを、会長が信じますか……〃

〃信じるさ。ほんの一寸の間、一緒にいただけの亭主の妹じゃあないか。あの室はな、地獄の室なんだぜ。一生、脱け出せん処なんだ。勿論、三人一緒に逃げ出す算段だったが、婆さんがボスへの義理だてに一番不要な女だけを連れ出した。そう思わせる細工もしとく。どうだね、高倉君。現にだ、俺達だってボスを裏切ろうとしている。婆さんも房代も二度と現われる事はないし、信じる以外にどうするね。私達の手中にある限り、房代は唖も同然だし、ボスも安心して二人を楽しめる。あんたもだ……〃

〃……わかりました。で、何時やります〃

〃今日は駄目だ。今頃二人の娘はもう娘ではなくなっているかも知れん、となると房代だって、あれだけの美人だ。ボスが放っておく訳けはない。そん時は俺達の敗け、という事になるが……明日以外にボスを誘い出す口実がないのだ。一か八か、明日まで待とう〃

23　喪服

〃今、美容師、それにチャームスクールの助教師が到着した。交替で別室に案内するが、無駄口は一切無用だ。もちろん相応の報酬を払ってあるし私の息の掛った連中だが、人間には好奇心というものがあるからな。おしのを付き添わせるが、不心要な事はいわんに越した事はない。でないと、無縁の人が二人死なねばならん事になる。解ったな。まず里絵からだ。髪型を変えよう。夜会巻風のアップスタイルが似合うだろう。衿足の美しさを強調させるのだ。房代のようにな。おしの、鍵を出しなさい。それと襦袢だけでは礼を失する。なにか部屋着を与えなさい〃

余程楽しいのであろう、剛三は一人で張り切っている。三人にとっては楽しかろう訳けはない。獣を喜ばせる為の美容なのだ。

正三時、総てを終った三人は応接室のソファに並んで坐らされていた。両膝に揃えた手首に枷がある。映子だけが、きらびやかなチャイナドレスをまとっていた。ブルー地に銀糸で、登り竜を刺繍した見事な色彩が小麦色の肌にマッチして素晴しい。その両脇の里絵と房代は異様な喪服姿であった。色白な二人の美貌を、より際立たせる為に、剛三がそうしたのだが、勿論、惨忍な含みのある事は、否定出来まい。次郎を殺させた命日だといってある。

〃約束どおり、服従のための調教に入る。何度も繰り返す事だが、決して強制はせんぞ。しかしだ、今日はお前達の内の誰かに屈伏して貰う事になるだろう。でないと、私が辛い。これだけの美形を眼前にしながら、指を喰わえて辛抱しろとは、残酷もいい処だ〃

〃………〃

〃昨夜のように選り好みはやらん。誰でもよろしい。甚だ不体裁な話だが私には、いずれがあやめ、かきつばた。解るかね。古い譬だが房代には人妻であったという、女盛りの色香が溢れんばかりの魅力を秘めて私の心をとろかせるのだ。里絵には、その逆の事がいえる。お前は恋をしている女の艶だ。無論、相手が私でない事は分っとるがね、そういう事

は通用せん。その玉の肌は私によって磨かれねばならんのだ。映子は、もぎたての果実の匂いが満ち満ちている。かぶるには惜しい実だが、色あせぬ内に賞味せねば価値が無い〃

〃………〃

〃どうかね、三人に一つのチャンスを与えよう。最初に私に許したものに第一奴隷としての資格をやる。夜は枷もすまい。特別に一室を提供して、おしの同様の権利をやる〃

〃………〃

〃どうした？　誰も応えてくれんのかね。では止むを得ん、室に入って調教にかかる〃

〃ま、待って下さい……〃

〃どうした房代、発言は自由だぞ〃

〃わたしが……わたしが貴方の自由になれば他の二人を許して下さいますか〃

〃それは無理だ。私の秘密を知ったものを邸外へ出す事は出来んのだよ〃

〃出してくれとは申しません。せめて—〃

〃せめて、なんだ？〃

〃二人はなにも知らないのです。せめて純潔だけは許してやってほしいのです……〃

〃今も言った通りだ。熟して今にも落ちんばかりの甘い果実。それに多少、酢っぱいかもしれんが、もぎたての果物の味は、こたえられん〃

〃その代り、わたしは……どのような責苦をも厭いません。二人だけは、二人だけは〃

〃房代、私にだって嘘も方便ぐらいの事は解る。よろしい承知した、そういっておいてたっぷりお前を楽しんだ後で、今度は二人を服従させる。そういう方法もあるのだが、私はそういう卑劣な方法は好まんのだ〃

〃あ、あなたは……〃

〃何だね、映子、言い給え〃

〃こんな事をしておいて、そ、それを卑劣な方法だとは思わないのですか……〃

〃おしの、どうやら交渉決裂のようだ。三人を引っ立てろ。お前等に慈悲は無用だ。私流にやってやる、私流にな……〃

…………◇…………

　室の中央に妙な物が下ってきた。反りのないスキー板のような二枚の鉄板は、その中央をネジでとめられ、そこに鎖が繋いである。房代と里絵は手枷を鎖に繋がれて、両手を頭上にして立たされている。露わな二の腕が喪服の黒と対照的に、めくれた袖口には緋色の襦袢が絡んで、なまめかしい。今の処、里絵にも房代にも昨夜の屈辱と比べると、それは何でもないようなものかも知れぬ。だが、そんな事で済ます男でない事は、解りすぎるほど解っていた。映子だけが自由であった。

〃これが、なにをするものか分るかね〃

　剛三が差し示した平板の四方には、一つ宛の枷が取りつけてあるのだ。彼は、横に揺れている、その板を縦に直した。

〃さあ、おいで。お前も、あの二人と同じ姿勢になるだけだ〃

　おしのに背中をこづかれて、映子は、おずおずと、その板に歩み寄った。

〃後向きかな。お前は、どっちを選ぶ？〃

〃旦那様、前向きが常識でございますよ〃

〃では、そうする〃

　まるで、あやつり人形のように映子の体はくるりと廻され右手が持ちあげられると、もうそれで自分の意志ではどうする事も出来ないのだった。左手は別の板に、おしのが止め剝きだしのノースリーブの腕を、ゆっくりと撫でおろした剛三の指が、胸元に触れた。映子の顔色が蒼白に変じた。その部分の紐を引くとドレスが一瞬にして、はぎとられる仕立てになっているのは、映子自身が一番知っている事だった。そして、それは、あっという間に実行されたのだ。後はパンティ一枚であった。

〝私に手出し、いや足出しだな、そんな真似をしてみろ、どういう事になるか〟

映子は顔を反向け瞼を閉じて、パンティの引きおろされる羞恥に耐えた。

〝目を開け。そして、これを啣えるんだ〟

たった今、はぎとられた物が鼻先に差しつけられていた。毛むくじゃらな手が鼻腔をふさぐ。蒼白であった顔色が今度は逆に充血した。剛三は唇を割り開き、布切れを押し込んで行く。

〝む、むっう、うー〟

足元では、おしのが形の良い両足を別々の板に繋ぎ止めている。剛三はハンカチを取り出すと、厳重な猿轡を噛まし終えた。

〝声が出るかな、試して見よう〟

剛三は、双の胸丘を力任せに抓りあげた。悲鳴は完全に封じられ、これから加えられるであろう、拷問の凄惨さを暗示するかのようだった。剛三は、なめし皮の鞭をしごいた。

〝さあ、私の第一奴隷には誰がなるかね。責められる映子か、それ共、二人の内の、どちらだ〟

〝やめて、やめて下さい。む、むごい〟

〝もう沢山だ。お前達は昨夜、私に恥をかかせた。今日は許さん。絶対に服従させてやる。よし、おしの、開け〟

映子の悲鳴は声にはならない。が、四肢が序々に、押し拡がれていったのだ、腰骨の辺りを中心にして、平板はXの字に開かれていた。映子は狂気のように、肩と胸をふってもがいた。素晴しい観物であった。すくなくとも剛三には、そうであった。この若々しい小麦色の肌は、少々の鞭では、へこたれまい。

〝ヒュウーッ〟

鞭が鳴った。最初の一撃は、むき出しの太腿に振り下された。

〝いやあっ〟

絶叫が背後で起った。房代と里絵の、それであった。剛三は、その叫声に刺戟されたかのように、革の鞭を振り続けた。赤い筋が太腿に、腹部に、そして乳房の上部にも、ふくれあがった。流石に急所だけは打たなかった。永い年月鍛えあげた手慣れた鞭の捌きであった。大きく振りあげた腕は一旦そこで停止する。映子は瞳孔を見開いて、その一点を凝視する。次に襲いかかるであろう激痛を予想して、四肢が烈しくけいれんし、顔を反向ける。とたんに鞭が飛ぶ。汗の玉が乱れ散る。

〝やめて、やめて下さい。あたしを、私を自由にして下さい〟

〝旦那様、そろそろ限界のようですよ。ほれ血が滲んで参りました〟

〝そうだな。よし、つぎは擽ってやる。毛羽根を用意しろ〟

剛三は映子の右手首の枷を掴むと、ぐいっと引いた。Xの字の平板は、そのままの状態で回転した、残酷な逆さはりつけの形になった。新たなる恐怖に、失神寸前のあわれな贄は戦慄した。鞭のあたった部分だけが少し宛、縞模様にふくらんでゆく。頭に血がのぼってきたのであろうか、鼻腔を拡げて荒い息を吐きながら、苦悶にうごめいていた。

〝擽り易いように、少し吊れ〟

〝蟹浦さん……〟

〝ほう、ききなれぬ言葉だな。私の名を呼んでくれるとは光栄だ。なんだね〟

〝もうやめて下さい。それ以上続けると映子さんは、気が狂ってしまいます……〟

〝成程、体験から出た言葉だな。里絵、たしかに私は一人、この羽根で狂わした経験がある〟

〝貴方の目的は、その人を狂わせるためでは無いでしょう。あ、あたし達を羞かしめる事

が目的なんでしょう〃
〃いやに冷静になったもんだな。そうさ、私の目的はお前達を屈伏させる事だ。いいかね女という動物は一度、身を許すと二度とは離れようとはせぬものなのだ。特にお前のような生娘に於いておやだ。大体、当節、兄の仇だとか夫の仇(アダ)なぞは通用せんぞ。そういう愚かな考えを捨て去って服従させる。映子は、そのための責道具にすぎんのさ〃
〃では、あたしを勝手になすって下さい〃
〃ほほう、又だます積りかな〃
〃ちがいます。貴方の命令どおりにします。あたしは負けたのです。こ、これ以上むごい責め苦を見ているのは堪えられないのです〃
〃……〃
〃屈伏します。服従もします。その代り約束を守って下さい〃
〃約束？　なんだ……〃
〃あたしを第一奴隷にして優遇する、そう、おっしゃったではありませんか〃
〃いいとも。お前がその気なら、おしのなんかは今すぐにでも、お払い箱だ〃
〃まぁ、旦那様、なんという事を……〃
〃ハッハッハッ。ま、それは冗談だが。とにかく、お前ほどの美形が自由になるとなれば、私はどんな要求にでも応ずるぞ〃
〃じゃあ映子さんを、お、起して下さい〃
〃さてっと。それは約束を果してからではいかんかな。どうも又裏切られそうでならん〃
〃信じて下さい。あたしは姉や映子さんがなぶりものにされているのを見ていられないので、決心をしたのです……〃
　剛三は首をひねった。もっとも欲していたものが、余りにも簡単に服従を誓っている。あの苛酷な操り責めにすら耐え抜いた里絵なのだ。しかし、疑っていたのでは限りがない。どうせ縛って自由にするのだ。……さかしまの磔柱を元に戻した。映子は、がっくりと、こうべを垂れた。
〃さ、里絵ちゃん。あ、あなたは何という事をいうのです。いけない、いけないわ〃
〃お姉さま、目をつぶってて。こうする以外に方法はないのよ……〃
〃だから、だから、あたしが身代りに……〃
〃駄目、駄目よ。どうせ三人とも……。身代りなんて通用しないの。あきらめるのよ、お姉さまッ……〃
〃それなら、あたしが、あたしが〃
〃いけないわ。あの人が一番求めているのは私なのよ。そ、それに次郎兄さんの為にも……今日だけはお姉さまを救いたいの……あたしが、あたしが……〃
　両手吊りの無惨な姿態で、お互いにかばい合う、血を吐く思いの会話であった。
〃里絵、お前は美しいだけでなく、誠に利口な女だ。気に入ったぞ。よろしい、もう一つ約束してやる。お前がその気でいるなら、当分の間、この二人には手出しをすまい。お前だけで私は充分、満足なのだ……どうかね……〃
〃あ、有難う、ございます〃
　憎むべき男の前に里絵は深く頭を下げた。
〃おしの、二人の枷を外してやりなさい〃
　自由が戻った。だが救われたのではない。
〃も一つ、これは条件だ。お前の申出が本当とわかるまで、房代には裸になっていてもらおう。若し万一にだ、お前に心変りがするようだったら、その時は容赦はせん。そのための準備をしておく。ついでだが、その役目をお前に命じよう。どうだ。やれるかね……〃
〃いたします。どのような事でも……〃
〃結構だ。はじめ給え〃
〃お姉様、帯を解きます。後ろを向いて！〃
〃ああっ、里絵ちゃん、あ、あんまりよ〃
〃許して、あたしも辛いの。でも逆らえばど

うなるの。お姉様も苛められるわ。は、裸になれば許して貰える。だ、だから我慢して〃
　里絵は泣きながら帯を解き、腰紐をぬきとると、肌着もろとも脱ぎ取った。
〃縛れ。腰衣は許そう。さあ、この麻縄で後手に縛りあげろ〃
〃そ、そんな、許してやると……〃
〃約束を果してからだ。そういった筈だぞ〃
　手渡された麻縄で、兄嫁の両腕を背で組ませて、里絵は縛った。往生柱がおろされる。剛三は縄尻りをたぐって房代を立たせ、棒縛りに括りつけた。鞭が差し出された。
〃二つ三つ撲れ。お前が心変りすれば、房代がどのような苦しみを味わう事になるか、自分の手で良く味わっておけ。手加減すれば私が代る、いいな！〃
〃ああっ……〃
〃さあ、やれ。打つのだ。どうした〃
　意を決して、里絵の腕が空を切った。房代は唇を噛みしめて、痛みを耐えた。義理の妹とはいえ、姉を鞭打つ。正に地獄図絵さながらの光景が、展開されたのである。
　房代は里絵が発狂したのではないかと思った。それほどに、鞭先は痛烈に肌を噛んだ。三つ目を振り終ると里絵は、その場に崩折れた。

……………◇……………

　剛三は、ベッドの傍に椅子を運んで腰を据えた。おしのは、かための盃ごとをするのだといって室を出た。おぞましい地獄の舞台はこれからが本番だった。
〃さあ里絵、わたしの前に立ちなさい。そして、一枚ずつ時間を掛けて脱いでいくのだ〃
〃シャ、シャッターをおろして下さい〃
〃ならん。二人にみせつけるのだ〃
　三方の鏡には、赤いビロードのカーテンが垂らされている。今の剛三にとって鏡は不要のものだった。いずれは女達にさまざまの姿態を強要して、楽しむ時はあるだろう。だが今日は、里絵を奪えばいいのだ。赤いカーテンと赤い羽根蒲団。そこに縛りあげられ、羞じらいに震え、身を悶え、自分を受け入れるという獲物を置けば良いのだ。里絵は、切れ長の睫毛を伏せて帯を解き、黒衣をはいだ。剛三は腕を伸して、螢光灯のスイッチを切った。瞬時ではあるが四囲は漆黒の闇と化し、磔柱の映子も棒縛りの房代も闇に消えた。スタンドの明りが点火される。赤い電灯が使用されていた。燃えてでもいるような緋色の長襦袢。すべてが赤一色に統一され、息を呑むほどの美しさであった。長襦袢は剛三の手によって、丁寧に丁寧に脱がされて行く。純白の肌衣と腰衣、その下には白滋の肌がある筈だった。剛三は、ゆっくりと剝いでいった。小刻みに震えてはいたが、里絵に抵抗の気配は全くなかった。おしのが入ってきた。
〃旦那様。いい体をしていますねえ。こんな明りの下でみると、女のあたしでさえ、妙な気持になりますよ〃
　里絵の手に、銚子（チョウシ）が渡される。立たされたままで酌を強いられた。
〃お前も一杯、うけるがよい〃
　死ぬほどの羞かしさを、房代と映子のために堪えつづける里絵は、その屈辱を一息に呑み干した。剛三が細紐を拾いあげた。
〃両手を、うしろに廻しなさい。縛る〃
〃く、括らなくとも……〃
〃痛くはせん。私流の、それが掟なのだ。別にお前を信用せん訳けではないが、縛っておかんと、どうにも落着かんのだ。それに気の毒だが、猿轡も嵌めさせて貰うよ。当分の間だがな。一応、それも習慣なのだ〃
〃く、苦しくはしないで下さい〃
〃可愛いい事をいう舌だ。轡をする前に、愛の印しをやってくれるか？〃

〃……〃

〃いやかね〃

〃いえ、致します。でも本当に姉さまたちを苛めないと約束して……〃

〃ああ、いいとも。綺麗な指だな。私の方が吸いついてやりたいぐらいだ〃

縄止めは終った。被縛の姿態を抱きすくめると、剛三は唇を寄せて来た。

〃お前がする接吻だ。分っているな〃

〃ハ、はい〃

柔らかな生物が、剛三の分厚い唇を這いまわった。剛三は用心深く自分の舌を出してみた。ホンのすこしだった。噛まれないか？という不安も、自分の加えて来た非道さを意識している現れだったかも知れない。伸した舌の先に里絵の歯を感じるとさっと引いた。しかし、里絵は、約束通り屈伏を体で表現していた。剛三は安心と同時に能動的になった。

〃あっ、ゆ、ゆっ……〃

叫ぼうとして、里絵は絶句した。許しを乞うてはならぬのだ。おぞましさに鳥肌立つ思いであった。

ヒクヒクッと、後手の背が痛々しく、けいれんしている。多すぎるほどの髪の毛が乱れに乱れて、まとわりついていた。

誰一人、声もなかった。

〃里絵。もう良い、起きなさい〃

例の優しい声に変っていた。

〃お前は素晴しい娘だ。約束どおり、あの二人は楽にしてやろう。当分ではなく、お前が従順である限り、手出しもせんよ〃

剛三は、里絵を引き起すと、腰衣を拾って投げ与えた。里絵はそっと白い形の良い脚を伸して、その布切れを引き寄せようとしていた。縛られたままの姿で腰をくの字に曲げた悩ましい曲線に、剛三は魅せられたように見入っている。

〃里絵、私の汗を拭いてくれんかね〃

〃は、はい、でも手を括られていては〃

〃よいのだ、そのままで。愛らしいその舌で、なめてくれんか〃

〃……〃

〃いやかね、汚ないとでもいうのかい〃

〃い、いえ、そんな……〃

里絵は、意志のない人形に化しているかのようだった。膝で匍って顎を突き出す。剛三は、征服者の快感に心の底から酔い痴れていた。

〃おしの、二人の縄を解いてやりなさい。灯りを点けるのだ。おう、可哀相に。二人共、里絵に感謝するのだぞ。お前らにとっても、この私にとってもだが、里絵は、いわば生菩薩のようなものだ。みぃ、一度、男に身を任せると、女というもの……ク、クッ……グエッ……〃

物凄い絶叫だった。驚いておしのが振り返った時、剛三の巨体は緋色の絨氈に転がっていた。その醜く転げ廻り、丸くなって抱きかかえるようにしている下腹から、おびただしい血が吹き出している。縛られたままの里絵が、ふっとばされたように突伏していたが、すべての男性を魅了する形のよいその唇に、血の塊りとも見える小塊があった。

…………◇…………

おしのは、電話に武者振りついた。一刻も早く、医師に連絡の必要があった。でなければ、旦那様は死んでしまう。かといって直接病院に、電話をいれる訳けには、いかない。理由が理由だった。近くに住んでいる菅沼を呼ぶか。いや、あの男では、駄目だ。そうだ杉田さんに、相談しよう。おしのは、美苑にダイヤルした。

〃ボスが。……よし、解った。医者は私が手配する。おしのさん、それまで応接室には誰

も入れるな。三人の女は大丈夫だな……〃
おしのは室へ引きかえした。剛三は絨氈へ身を縮めて、最後のひきつけを起していた。
〃だ、旦那様。今、医者が参ります……〃
〃く、くっくっ〃
何か言おうとして果し得ず、獣は、こと切れた。多量の出血が原因だろう。それにしても、ぶざまな、剛三に相応しい最期かも知れなかった。里絵は遂に勝ったのだ。汚辱にまみれ、肌身を汚されはしたけれど、その男は既に一個の屍と化した。我身を犠牲にして、姉と映子を守り、兄の復讐も果した。
〃おしのさん……〃
里絵は冷静だった。
〃蟹浦は死にましたね。もう二度と、誰をも羞かしめる事も、苦しめる事も出来ない〃
〃……〃
〃警察へ電話をして下さい。あたしは、あなたの事は忘れます……あなたは、このけだもののような男の命令によって動いただけなのでしょう……あなたも私達と同じ犠牲者。そう思っています。だから電話をかけて下さい〃
おしのは、血に染った里絵の方を振りかえった。
〃わかりましたよ。旦那様はお亡くなりになったんだからね。あなたのいうようにいたします。……でも、そんな姿で人の前には出られないでしょう、解いてあげます〃
〃有難う、おしのさん……〃
〃でも、あんたは勇気のある人ですね……。はじめから、旦那様を殺す積りだったんですか？〃
〃そうです。でも最初は殺す積りはなかったの。あたしは護身法を習っています。急所を蹴ってなんとか脱出しようと計ったんです。でも手を括られてしまったし、おしのさんも見張っている。逃げられないと解って覚悟を決めたの〃
〃そうでしたか。でも罪にはなりませんよ。もともと、旦那様がいけなかったんですからね。さあ、早くしないと今、杉田さんが此処にくる事になっているんですよ〃
〃ス、杉田が……〃
房代が言った。
〃杉田？　って誰なの、お姉さま……〃
〃怖しい男よ。早く解いてあげて〃
〃かたくて、なかなかほどけないんですよ。そうだ、箱の中に切る物があります。一寸、待って下さいね〃
里絵は、縛られたままの房代の胸に顔を埋めた。
〃お姉さま、もう大丈夫。映子さんもみんな助かったの。よかった、よかったわ〃
〃許して里絵ちゃん……。あなたばかりにあんな、あんな辛い思いを……〃
〃ムッ、むうっ、むうっ〃
不意に映子が烈しく身をよじった。
〃どうしたの映子さん。苦しいの、待って今すぐ楽に、あっ……〃
なにがどうなったのか、とっさに理解出来ない里絵だった。もろに転倒し、したたか胸を打ちつけて、両足に麻縄が絡む気配にはじめて、おしのの仕業と解った。もう遅い。足首を一つに束ねて、おしのは里絵の頭に尻を乗せると全身の力をこめて引きしぼった。縄は自由のない両手首に繋ぎ合わせる、逆海老だった。
〃な、なにすんの、おしのさん。狂ったの〃
おしのは、投げ捨ててあった革鞭を拾いげると、里絵の背を打ち据えた。
〃ヒッ、ヒイ……〃
〃やめて、助けて、おしのさんっ……〃
おしのはやめなかった。滅多打ちだった。白い肌に幾筋もの鞭痕がふくれあがった。

〃これぐらいじゃあ、とても旦那様の怨みは消えないよ。ほれ、見るがいい。お前に殺された可哀想な旦那様の死に顔を……〃

おしのは、ベッドの方に走ると、一つのボタンをおした。音を立てて鎖が下って来た。先端のフックに麻縄が通され、再び鎖を巻きあげる。

〃ぎっ……ぎえっ……〃

逆海老のまま里絵の躯は、房代の眼前にまで吊りあがった。がっくり、と顎が落ちた。

〃さ、里絵ちゃん、しっかりして。おしのさん、た、助けて……〃

そのおしのは、百目蝋燭に火をつけて歩みよって来た。

〃お前が旦那様にしたようにしてやる！〃

蝋燭のほむらが、ゆっくりと里絵に近づけられた時、ベルが鳴った。

………◇………

おしのは、せわしなく玄関の扉を開いた。すでに、没しはじめた夕陽を背に、そこに待っていたのは杉田ではなかった。

〃警察の者です。蟹浦さんは御在宅ですか〃

〃……いえ、留守ですが……〃

〃あんた、しのさんですね〃

〃……はあ……そうですが……〃

〃では、この方を御存知ですか？〃

〃……いえ、存じあげませんが……〃

〃ふざけるな。俺だ、伊藤雄吉だ〃

〃君、止め給え。乱暴な口をきいちゃあ、いかん……。処で、しのさんにお尋ねしたい事があるのですが、御足労願えませんか〃

〃私は当家の使用人です。勝手に出る訳けには参りません。逮捕状でもお持ちなら別ですけど。でなければ明日にして下さいな〃

〃きつい、おっしゃり方ですな。逮捕するなぞとは申しておりませんよ……。では明朝、迎えの者をやりますから、出頭して下さいますね〃

〃はい、わかりました……〃

〃よろしい。失礼しました、引揚げます〃

若い刑事は、始めから踏み込む意志も、おしのを同行する考えも持ってはいなかった。泰然として応待するおしのの表情から、素早く何かを嗅ぎ取っていた。蟹浦は在宅、後は張り込みを強化すればそれでいい。刑事の後に立花が続き、雄吉も背を向けた。そういう段取りになっていたのだ。

〃あのう、一寸……〃

〃なんです？〃

〃いえ、そのイトウさんという人に〃

雄吉だけが後退った。

〃なんだ婆さん。俺の面ぁ、思い出したか〃

〃あんた、九州の生れなのかい？〃

〃この婆ぁ。人の生れをきいてどうする〃

〃別に。ただ、えらく威勢がいいし、なんとなく訛りがあるようだし……〃

〃図星だ。俺は福岡、それも川筋っ子さ。もっとも、余り自慢出来るようなお腹から出ちゃあ、いないがね〃

〃川筋なら、飯塚なんだね……〃

〃オッ、あんたもあっちの人間か。なら解る筈だろう。人間は単純だが曲った事は大嫌いなんだ。どんな事をしても探し出すぜ〃

〃だれを。いえ、何を探しているのだね〃

〃とぼけるな。三人の女だ。前にも言った筈だぜ、房代という人はな、俺の命より大切なんだ。あの人に間違いがあってみろ。あんただって、生かしちゃあ置かん〃

雄吉は、二人の後を追って、去った。

（あの男は、あたしの息子だ。雄吉じゃあないか。すると房代というのは……なんという事だ。これは、どうしたらいいのだろう）

その頃、三人の贄を引取る為に三つの袋を用意した、杉田の車は走っていた。

（終）

体験記

腎盂炎患者となって

早乙女恭子

その日、私はお友達と映画に行くため、銀座のある喫茶店で待合せをしていました。急にゾクゾクッと身慄いがして、変だなと思って立とうとすると目まいがして倒れそうになりました。体がガタガタ慄えます。

お友達にたすけて貰ってタクシーですぐ家に帰り、その足で近くの病院に駆けこみました。病院は時間外なので内科の先生は不在、当直の先生は外科の若い先生でしたが、急患というので診て下さいました。

すぐ熱が計られましたが、三十八度五分まで上りました。

先生は、ちょっと考えてから

「うつぶせになって」

といわれました。私がうつぶせになると、看護婦さんが背中を出すようにいって手伝ってくれました。

先生は、私の背中の方々を触診されていましたが、背骨を段々強く押え始め、私が痛いと感じたところにヨーチンを塗っていかれました。脇腹から腰のところまで三カ所です。

「一寸、痛いかも知れんが……」

といいながら、看護婦さんに合図をされました。運ばれて来た注射の痛かったこと。それこそ、打たれたとたんに私は、そり返ってうなってしまいました。体中にズンとしみこむような痛さでした。

そんな、すごい痛さを我慢したのに、しばらく経っても気分は少しもよくなりません。

先生は、私の「よくならない」という返事を聞くと、今度は「仰向けになって」といわれます。

「便通は?」

「ここ四、五日、全然ありません」

私の返事に、肯いて、今度はお腹の方々を押されます。

「これ脱いで」

私はその日、ブラウスにスラックスという服装でしたが、先生のいわれるのはスラックスのことでした。

その時まで、傍らで心配げに付添ってくれていた母とお友達が、先生から待ち合い室に行くようにいわれているのを聞いて、私は心細くなりました。どんなことをされるのか、急に不安が大きくなってきます。

看護婦さんが、スラックスを脱いで仰向けの私のシュミーズを、胸の辺りまでたくし上

げ、両足を立てるようにといいながら、手を添えて下さいました。

先生の入念な触診が始まりました。お腹を押されると、張っているのが私にもわかる感じでした。

「浣腸してみましょう」

と、先生がこともなげにいわれます。看護婦さんには、もうわかっていたのでしょうか何か、ガチャガチャ音を小さく立てながら、用意されている様子です。

私は、今まで浣腸というものをされたことがありません。だから、そう聞いたとたんに胸がドキッとなりました。きっと顔もまっかになったことでしょう。

「出来ました」

と、看護婦さんが、手押し台を私の傍らまで押して来ました。こわごわ見ますと、台には、大きなイルリガートルに長いくちばしを取りつけたのが置かれています。

あんな大きなものを？　私はびっくりしてしまいました。不安は益々つのります。

看護婦さんは、当然のように、こともなげに私のパンティに手をかけました。私は、もう気分がよくなりましたから、といって逃げ出したくなりましたが、一寸、頭をもたげただけで、目まいがするのでした。

「口を開けて。出来るだけ大きくね。息を吸って、体の力を抜いて。キバルと痛いですからね、なるだけ力まないで」

と、注意して下さる看護婦さんの言葉通りにしようと思うのですが、力を抜くといっても仲々うまく行きません。先生が、浣腸器を持たれたとたん、私は思わず目をつむってしまいました。

この療法のおかげで、現在までずいぶん多くの人が救われたということを後になって聞きましたが、その時には、こんな妙な、こんないやな療法を考え出したお医者さんを恨みたい気持になりました。

痛い、というより、何ともいえない羞恥とおぞましさ。うまくいい現わせませんが、不思議な力を持つガラス器具を創り出したものだと思います。

私は顔を蔽って、生れてはじめての奇妙な処置を受けましたが、それからが、また、ご存知の通りの難関を耐えなければならないのでした。看護婦さんは親切にして下さっているのでしょうが、この場合には私にとっては刑の執行人の一人にも思えます。

「なるだけ、我慢する方が効果的ですよ」

と、言葉はやさしいのですが、押えつける力は相当なものでした。私は原因となった病気のことも、ゾクゾクする身慄いのことも忘れて、ただ一生懸命に煮えかえるようなお腹の痛さ？　を耐えなければなりません。どのくらいの時間だったか判りませんが、私にとってはすごく長い間だったように思えます。

勝手なもので、頭をもたげただけでも目まいがしていたのに、看護婦さんの手をハネのけてお卜イレに走ったときには、身慄いも目まいも忘れていたようでした。

ようやく、ホッとなったような気持で、ふらふらしながらお卜イレを出ると、看護婦さんが待っていて、シュミーズの裾を拭いて下さいました。気がつかなかったのですが、きっと汚れていたのでしょう。私は恥かしくて顔も上げられませんでしたが、看護婦さんは優しく私の肩を抱くようにして、診察室へ連れ帰ってくれました。

再び、レザー張りの診察台へ上ると、先生が、はじめてニコッとされました。

「大分、楽になったでしょう。まあ、あれだけの元気があれば大丈夫」

といいながら、左下辺りのお腹を押えて診ていられました。あんなに苦しめておいて、

楽になったでしょうもないもんだわ、と思いましたが、最初とは少し体の調子が違って来たのは確かでした。

でも、それからしばらく経っても、熱は下りそうでもなく、先生もまた、むつかしい顔付に戻って、そのまま入院ということになってしまったのでした。

お薬のせいか、その夜は、はじめての病院のベッドなのによく眠れました。

翌日、九時頃に改めて担当の先生に診察して戴きました。中年のデップリ肥えた立派な先生でした。内科医長先生だそうですが、診察は入念でした。胸から背中、首筋や口の中まで診て下さいましたが、やはり腰とお腹に重点がおかれたようで、幾度もお腹と腰骨の辺りを押して「痛い？」と訊かれました。「腎盂炎でしょう。後で尿の検査をします。多分、間違いないでしょう」

先生は、傍で心配気な顔付の母にそういって、看護婦さんに何か命じながら出ていかれました。看護婦さんも昨夜の方とは違っていました。

それから三十分も経たないうちに、私はまた苦しまねばなりませんでした。若い看護婦さんが二人、何やらお盆のようなものを持った方と、小型のつい立みたいなものを提げた方とが入って来て、私の足許へ置かれます。私の入院した部屋は三人部屋でしたので、処置中の目隠しだとわかりました。

どうするのかと思っていると、若い看護婦さんが「尿をとります」と事務的にいって、テキパキと準備を始め、無造作に私のおふとんをめくって、私の両膝を立てさせ、パンティをとるようにいいます。

昨夜と同じですので「お浣腸？」と私が訊ねますと「採尿です」というだけです。昨夜の看護婦さんとは違って、ずいぶんいじわるな感じです。

先生がみえますと、看護婦さんは余計テキパキし始め、立てさせた両膝をグイッと拡げさせ、まるで私を人間と思っていないような感じでした。思わず顔を蔽ってしまいます。私と同年輩と思えるのに羞しいことぐらいわかりそうなものですのに……。

先生の手で導尿処置が始まりました。病気を発見し、なおすためにはどうしても必要なことでしょうが、浣腸といい導尿といい、何と病院というところはいやなところでしょう。

病気にかかる方が悪いのはあたりまえでしょうが、その時にはそんなことはちっとも思わず、無情な処置を恨みました。浣腸もそうでしたが、痛い、とも、苦しい、ともいい切れないような奇妙で複雑な感覚なのです。

幸い、私の病気は軽かったので、三日目には熱も下り、すぐに退院することが出来ました。退院する前に、念のためというので、二回目の導尿検査をされましたが、同室の患者さん二人は何れも女性で、その方から聞いたのでは、お二人とも、病気は違いましたが、幾度も浣腸や導尿をされたそうです。もちろん必要あっての処置だろうとは思いますが、揃って「嫌だわ」といっていられました。

私が退院してから、早くも半年以上経ちます。退院の時には、本当に心から、もうあんなおぞましい処置をされなくてもよいと、病気がなおったことよりも嬉しかったのです。それが、近頃、なにか懐しいような気持が混っているように思えて来たのです。こんな変な気持は、自分でも理解出来ないことです。もし実際にもう一度入院しろといわれると、きっと泣き出すでしょうが、一つの想い出として書きたくなったので拙ない筆をとったわけですが、おわらい下さい。

<Mの体験>

アテネの休日

みはら・ひろし

私にとっては二度目の、一カ月ぶりのアテネでした。旅程を都合して土曜日の午後に到着いたしましたので、月曜日までは全く自由な時間が楽しめたのです。

その日の夕方からホテルを出て軽い夕食を済ませた後、バーを片っ端しから飲み歩いてすっかり酔っぱらってしまいましたが、ただ日本の場合と違うのは、相手のホステスが金髪や青い目だというだけで、結局、肩を抱きよせたり、お尻を撫でたり、という通り一ぺんのハシゴ酒で、何の収穫もないまま、ぶらぶら歩きながらホテルの近くまで戻ってきたのは、もう夜半一時を過ぎていました。

アルコールが身体中に廻って、千鳥足でふとみると、ホテルの方へ曲る角のところに、ちょうど地下鉄の入口のように地下へ下りる階段があって、ナイト・クラブのネオンが小さく頭の上にかかっているのです。私は酔った勢いで、この階段をどんどん下りて行きました。下りついたところに紅い革張りの厚い扉があって、白い制服に金ボタンのボーイが開けてくれました。熱帯植物の植木鉢等が並んでいるロビーのようなところを通り抜けますと、もう一度、厚地の紅いカーテンで仕切られた入口があって、このカーテンをくぐりますと、目の前に長いカウンターが向うの端までつながっていて、バンドがやかましくジャズをビートしていましたが、ずらりと並んだカウンターの止り木には、お客は誰もいず、カウンターの中には色の薄いサングラスのような眼鏡をかけたバーテンが一人、コップを磨いていました。

ロビーを通り抜けながら、賑やかに聞えてくるジャズの騒音から、煙草の煙が立ちこめ、フロア一杯にたてこんでいるものと想像したのが、このだだ広いホールに他に人っ子一人、見当らぬのには一寸、戸惑いました。バーテンにブランディを一杯たのんでから見廻しますと、広い正方形のホールの一方の壁に向って端から端までカウンターで、他の三方の壁には入口と同様に厚地の真紅のカーテンが重く垂れ下っていました。壁の一隅をコンボ編成のバンドが陣取り、ホールの中央はダンスの出来るフロアになっているのです。

カウンターに向き直ってフロアを背にして、ブランディ・グラスを口に運びながら、この一杯だけで席を立とうと考えはじめた時、どこから出てきたのか、悩ましい香水の匂いと共に、柔らかい女性のふくらみが、ぴったりと私の身体に密着したのです。

「シナ人なのね。横に坐るわよ」
「残念ながら日本人なんだ。ウイスキーにするかい?」
「いいわね、水割りにして頂戴。日本人は、おとなしいから好きよ。名前は?」
「俺は、おとなしくないさ。名前は先に教えて欲しいな。そして何語でしゃべったらいいんだかもね。俺はごらんのとおり、英語は苦手でね」
「ソフィア……マダム・ソフィア、ギリシャ人よ。でも、アフリカに行ったから、英語よりイタリー語の方が得意よ。もし貴方がギリシャ語が出来ないんならね」
　私は、彼女の方に向き直りました。彼女は眉が濃く、鼻筋が通り、赤い唇の典型的なギリシャ美人で、柔らかいストレートな金髪が肩に波打っていました。もう三十を越したと思われる年で、はち切れんばかりに豊満な大柄な肢体を薄いネグリジェのような赤いドレスで包み〝バルコニィのような〟という表現のように、文字通り圧倒するような巨大な胸を張り出して、ドレスが突き出た胸からカーテンのように垂れているのです。ミニスカートで、ストゥールの上に組んだ脚が太股まで割れて、凄いヴォリゥムの白い内股まで覗けるのです。
「ここで飲んでもつまんないわ。奥の部屋へ入らない?」
「奥の部屋だったら、どういういいことがあるんだい?」
「お気に召すように可愛がってあげるわよ。ウイスキー一瓶とってくれたら入れるのよ」
「それでは、その面白い目にあってみようかな」
「嬉しいわね。ついてらっしゃい」
　二人は、カウンターを立ってフロアを横切りました。驚いたことに、ホールの三方は分厚いカーテンで覆われた壁だと思ったのが、その分厚い真紅のカーテンの一枚一枚が、フロアを囲んで一つ一つ狭い個室になっているのです。私は、その一つに案内されました。個室の中には、二人並んで腰掛けられるぐらいのソファが一つと、小さなテーブルが一つ置いてあり、ボーイがやってきて注文を聞きやがてウイスキー一瓶にグラス二つ、氷の入った小さな容器、水の入ったフラスコとピーナツの小皿を置いて立ち去りました。私は彼女のためにウイスキーを注いでやり、氷を入れて水を注ぎ足してやりました。
　真紅のカーテンで囲まれた薄暗い密室で、ぷりぷりとした身体にぴったりと寄り添われますと、酔いも手伝って私は少なからず興奮しました。
「どうしたの。ここに来たら、すっかりおとなしくなったじゃないの。飲まないの?」
　マダム・ソフィアはグラスを持ち上げ、白いのどをみせてウイスキーをぐいと流し込みました。
「俺は、もうウイスキーは沢山なのさ。待ってるんだよ」
　私は少し彼女から身体を離して、彼女の方に向きを変えました。
「待ってるって、何を?」
　私は、彼女の下腹部に手を伸しました。
「今、貴女の飲んだウイスキーが、ここをこう通って、それから、ここから出て来るのを待つのさ」
「何なの、それ?」
「それを俺が飲むのさ」
　彼女は、けげんな顔で私を見つめました。
「オシッコだよ。貴女の出したものを僕の口で飲みたいのさ」
　彼女は突然、腹を抱えて笑い出しました。
「お前、本当に、あたしの出したものを飲むのかい」

彼女は語調を変えました。
「それに、貴女がそうおっしゃるなら、ここから出てくるものだって喜んで戴きます」
　彼女の盛り上ったお尻に手を廻して、私も語調を変えました。
「アッハッハッハハ」
　とグラスを片手にのけぞって笑い続けた彼女は、急に片手を延して私を抱き寄せ、額にキスしてくれました。
「可愛い坊や！」
「お返しに僕からもキスしたいんだけど、ここにキスすることを許して下さい……」
　私は、マダム・ソフィアの豊満なからだの割に、すらりと延びて恰好のよい足を撫で下して、ハイヒールをはいた足を両手に捧げ持ちました。
「そこにキスしたいのかい。いいわよ……」
　私は、うやうやしく彼女のハイヒールをとり、彼女の足を両手で抱え込んで、先ず足の甲に唇をつけ、それから足の裏を舐め、足指を口に含んでしゃぶりました。その間、彼女はグラスをテーブルに置き、ソファに身を反らして、じっと目をつむっていました。私はすっかり夢中になり、彼女の足を捧げ持ったまま、上目づかいに彼女を見上げて、
「私はマゾヒストなんです……」
　と告白しました。
「そうだと思ったわよ……こうされたいんだろう。どうだ……」
　マダム・ソフィアの白い足が宙に踊って、私の胸をどんどんと蹴りつけました。
　彼女はサディスティンだったのです。あるいは少くともマゾヒストの扱い方を知っているのです。何という幸運！　私は上ずった声で念をおさずにはおられませんでした。
「では、では、マゾヒストが何かってご存知なんですね？　そして貴女はサディスティンなんですね？　ああ、もしそうだったら私はすっかり貴女の奴隷です。どうか、女王様と呼ばせて下さい。私は、もう貴女のご意志のままです。貴女はマゾヒストを苛めるのが、お好きなんですね？」
「フッフッフ……今に判るだろうよ」
　マダム・ソフィアは、私の髪を鷲掴みにして、ぐいとねじ倒しました。私の頭は、横向きにソファに押しつけられました。髪を掴まれて、ソファにぐいぐいと押しつけられながら、私は彼女を見上げました。
　下眼づかいに私を傲然と見下した彼女は、髪を掴んだ手で私の顔をソファに上向きに捻じて、その上にどしんと腰を下したのです。
「私に絶対服従を誓うか？　どうだい、え、返事をおしったら！」
　大柄な彼女はハイヒールを履くと、一米七〇の私より背が高いのです。その彼女の肉付の盛り上ったお臀が、私の顔の上を押し潰してしまいそうな重圧でぴったりと覆い、息の根を止められた私は、声にならぬ声で呻くのみでした。
「これっ！　どうして返事をしないのさ！　私の奴隷になるのが嫌なのかいっ？」
　私のシャツの胸のボタンを外した彼女の指のマニキュアされた長い爪が、私の胸にギリギリと喰い込むのです。
「さあ、どうだっ、これでもか！」
　私の顔の上で、マダム・ソフィアの大きなお臀が弾みをつけて踊り、彼女は調教師のように腰をしゃくるのです。私の目の中を真赤な火の玉が飛び交い、頭の芯がジーンとしびれて息の根はすっかりとまり、胸の筋肉に喰い込んだ彼女の爪は、全身にけいれんが走るほどの激痛を与え続けるのです。
　ううっ、ううっ……と死に物狂いでもがいていた私も、これはいよいよ殺される！　と思った瞬間、ふっとお臀が上り私は大きく口

をあけてハーッと息を吸いこんだまま、ぐったりと死んだようにのびてしまったのです。目を開けても、ぐらぐらと紫色にかすむのです。そんな私を眺めながら、ウィスキーを乱暴に一のみして、ふいと彼女は部屋を出て行きました。ようやく我に返った私は、所在なく起き上って煙草に火をつけました。

五分程して、彼女は仲間のホステス達を連れて、ドヤドヤと帰って来ました。五、六人もいたでしょうか。マダム・ソフィアは、彼女等のめいめい手にしたグラスに、テーブルの上からウイスキーびんを取り上げ、一人、一人にたっぷりと注いでやったのです。

「ご馳走さまあ」

「それじゃ、ごゆっくりね……」

口々にそういって、彼女たちはまた、どやどやと出ていったのです。

「もうウイスキーがないわ。もう一本、とるわよ」

マダム・ソフィアは、空になったびんを振りながら、不服そうな顔を私に向けました。ウイスキーは、一びん三〇ドルなのです。ここへ来るまでに、あちこちのバーをハシゴして歩いたので、お金はもういくらも残ってないはずです。

「すみません、もう、お金が……」

「そんなことないだろう。どれ、ちょっとお見せ！」

彼女は、私のポケットというポケットに手を突っこんで調べました。やっと五ドル札が一枚だけ残っていたのです。

「ふん、仕様がないわね！」

彼女はボーイを呼んで五ドル札を渡し、ウイスキーのダブルを一杯、注文しました。新しく注がれたウイスキーを旨そうにすすりながら、彼女はまた、手を延して私の頭髪を鷲づかみにし、今度はソフィアから引きずり下して床の上に引き据えました。私は、大きくひろげた彼女の股の間に、床の上に正座した恰好になったのです。

「あたしが今、どこに行ったと思う？　トイレさ」

マダム・ソフィアは、意味あり気な眼差しで私を見下したのです。

「どうして、そんな勿体ないことを……どうして私に飲まして下さらないのです……」

私の頭髪が、ぐいっと後に引き下げられ、私はあごを出して上向けの形になりました。

「今は、だめさ。まさかこんなところで、できないだろう？」

「それじゃ、どこで？　今夜ここが済んだらご一緒して……ぜひ飲まして……」

「今夜は、だめよ！　そうだ、明日の晩ならいいわ。お前、どこに泊ってるんだい？」

「この角のアスターホテルです」

「ふん、そこじゃだめだわ。そうだ、お前のホテルの近くのキプロスというレストランで明日の午後七時に落ち合うことにしようよ。夕食をして、あたしのアパートへ行こう」

「そしたら、苛めていただけるんですね。飲まして下さったり、馬にして下さったり……」

「うふふ……覚悟しておくがいいわ。お前、鞭を持ってるかい？」

私は、内地の仲間達へのお土産として、その日の午後、街で柄に彫刻のある革鞭を数本、買入れてホテルに置いてあったのです。

「それでは、鞭を持って、きっと参ります。そして、女王様、お金はどのぐらい用意していったらよいのでしょう？」

「バカ！　明日は、あたしの快楽を満たすために、お前を使ってやるといってるんだよ。勘違いおしでないよ！」

マダム・ソフィアの、火を吹くようなビンタが、私の頬を往復しました。

「ここは商売、明日はあたしが楽しむのさ。判ったわね！　それじゃ今夜はもうお前には用はないわよ。さ、出ておいき、出ておいきったら！」
床の上に正座した私の額を、マダム・ソフィアのハイヒールが力一杯、蹴とばしたのです。私は、すごすごと、そして胸のときめくような期待を残して、このクラブを立ち去ったのです。

翌日は日曜日でしたが、私は午後四時からエーゼントとアポイントがあり、いらいらと何度も腕時計に目を落したのですが、どうしても商談を切り上げることが出来ず、やっと終って飛ぶようにホテルに帰り、鞭を大きなハトロン紙の袋に入れると、レストラン「キプロス」に、あたふたと馳せつけました。その時は既に八時に近く、レストランに彼女、マダム・ソフィアの姿は見当りませんでした。諦めきれない私は、一旦ホテルに帰って後、九時半頃まで時間をつぶしてから、また昨夜のナイトクラブに足を向けたのです。
彼女は、まだ出勤していませんでしたので、私はカウンターに坐ってブランデーを、ちびりちびり舐めながら、時間を稼ぎました。三十分ほどして、ようやく大柄のマダム・ソフィアが姿をあらわしましたが、彼女はお客と一しょだったのです。彼女はカウンターの私を目にすると、つかつかとよってきて、命令口調で
「あとでいってやるから、そこでお待ち！」
と声をかけて、私とは反対側の隅のカウンターに、そのお客を導きました。お客は顎ひげをのばした大男で、ドイツ人のようでした。彼女は、私の方を顎で示して、大男に何かいっては、しきりに笑い合うのです。そして、ことさらに大男に抱きついてキスしたり、もたれかかったりしてさわぐのです。
こうして一時間も待たされた揚句、ようやく大男は帰っていきました。
「さあ、お前さんの番だよ。奥の部屋へ行きたいんだろ？」
私のそばにやってきたマダム・ソフィアは私の耳を引っぱって、カウンターの止り木から引きずり下すのです。彼女は英語で
「カム・マイ・ダーリン」
と、人目の手前、じょうだんめかしているのですが、本当は耳がちぎれるほどどきつく引きずられて、フロアを横切って前夜の個室に入ったのです。
「お前、本当に今日、レストランで待ってたのかい？」
彼女にこうきめつけられて、私はすっかり卑屈になったのです。
「は、はい。お待ちしてたんですが、お見えにならないので……」
「アッハッハッハ、本当にいったのかい。あたしはまた、お前が酔っぱらって、判って聞いてたのかどうか怪しいもんだから、いかなかったのさ。あたしの勝手だろう！」
「勿論です。女王様は全能です。でも……鞭まで用意してお待ちしてたのに……」
「おや、文句をいう気かい？」
「さあ、どうなのさ！」
彼女は私の頭髪をつかんで、また昨夜のように彼女の股の間に私を引き据えたのです。
彼女のハイヒールの足がのびて、正座した私の頭を床に踏みつけるのです。
「奴隷の分際ですので、女王様に何をされても不服はございません……」
「ふん、だったらハイヒールを脱がして、足の裏に接吻おし！」
私は宝物でも扱うように、ていねいに彼女の足を捧げ持ってハイヒールをそっと脱り、そして、うずくような屈辱の快感に浸りなが

ら、マダム・ソフィアの形のよい足の甲に唇をあてたのです。やがて彼女の足の親指と人差指が私の口の中にすっぽりと含まれ、私の舌が二本の足指の股に、軟体動物のように、ぬめりこむのです。上眼づかいに見上げると彼女はソファにもたれ目をとじて、うっとりとした表情です。

「今度は、ここ！」

私の頭髪が乱暴に掴み上げられ、目の前が真赤になりました。私の頭は、たくましい両腿の間にプロレスのように締め上げられ、頭の鉢が割れて砕けるのではないかと思うほどに痛みました。驚いたことにマダム・ソフィアは、ミニスカートのみで下半身を包んでいたのです。彼女の荒々しい扱いは益々激しさを増し、私は息がつまり目がくらんで、頭が割れるような苦しみを味わったのです。

「はい、それまでよ」

私の頭髪を鷲づかみにしていた彼女の両手が、私を押しのけました。そして仰向けになった私の顔に、ぺっと唾を吐きかけました。

「ふん、汚らしい犬めが！　お前、あたしのものを、食べたいといったわね。聞いたことはあるけど、本当に食べさせてみたくなったわ……」

マダム・ソフィアは、ウイスキーグラスを傾けながら手をのばして、テーブルの上のケントを箱ごと取り上げ、私の胸のポケットから万年筆を抜き出して、箱の裏に何やら書きつけた。

「あたしのアパートの電話番号よ。明日、電話をして管理人に場所を聞いて、三時にあたしの部屋をお訪ね。判ったわね？」

私は口の中が、からからに干上るほどの興奮を必死に押さえました。

「本当、本当なんですね。きっと、きっと参ります。鞭も忘れないで持っていきます。鞭打ったり、馬にしたり、踏みにじったりして下さるんですね！」

「覚悟してるがいい、思い知らしてやるわ」

「そして、本当に飲ませたり、食べさせたりして下さるんですね？」

「犬めが！」

彼女は、もう一度そういうと、けがらわしそうに私を見下し、ウイスキーを口に運びながら、片手を私の胸にさし入れて筋肉をつまみ上げ、マニキュアの長い爪をギリギリと肌に食いこませるのです。肉を食いちぎられそうな激痛に、私は悲鳴を上げソファの上で弓のように反りかえりました。もう一方の手が私の脇腹にすべり込み、次は内腿です。

「さあ、もっと音を上げろ！　呻めけ！　泣け！　さあ、もっと！」

ううっ、ひいーっ、……苦悶にのたうち呻く私を、彼女は目を細めて見下します。

「それ、これでもか！　もっと泣け、もっと泣け！　お前が音を上げるのがたまらないのさ！　それ、もっと呻めけ、泣け」

私は頭髪を鷲づかみにされ、彼女の膝の下に押しこまれました。

「もっと呻け！　犬め、泣き続けるんだ！」

私は、涙と汗とでべとべとの顔を必死に動かそうとしましたが、強く締められて呻き続けます。

「もう、いいわ！」

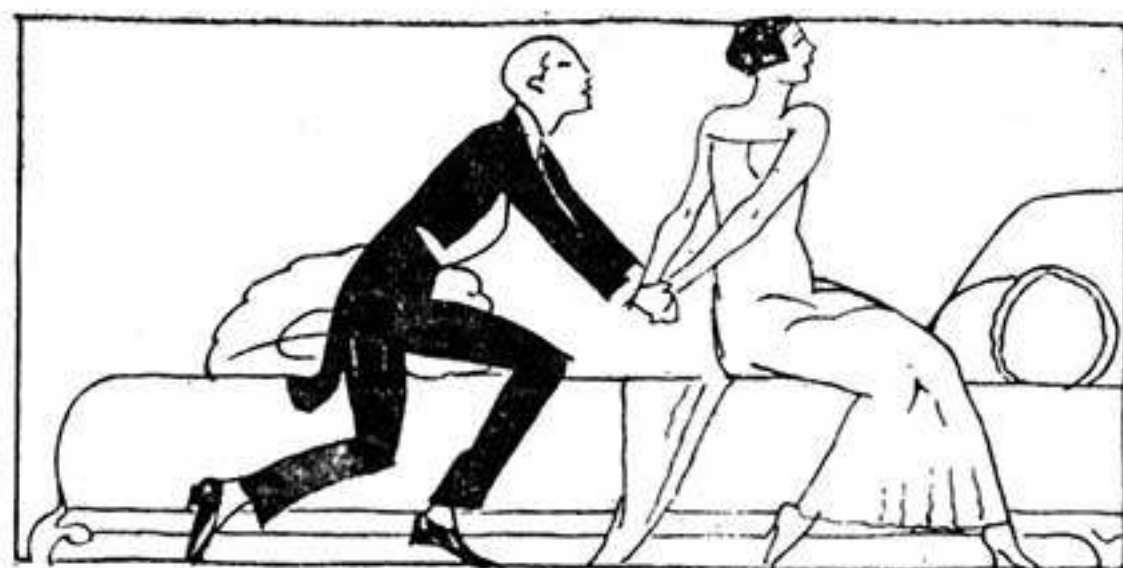
ふうっと大きく息をした彼女は、足を上げて私の肩を床にふみつけました。私は彼女の足許に、つぶされた蛙のようにぶざまに這いつくばったのです。

「トイレにいってくるわ！」

恨めしげに見上げる私に、意地悪な一べつを与えて、彼女はさっと立ち上りました。私は、ごそごそとソファに這い上り、隅の方に腰かけて待つのです。

帰ってきたとき、彼女は昨夜と同じように

それぞれグラスを手にしたホステス達を大勢つれてきました。
「いただきます、ご馳走さまあっ」「悪いわねソフィア……」彼女等は隅に小さくなっている私には目もくれないで、勝手なことを口にしながら、テーブルの上のウィスキーびんをとり上げ、遠慮もなくめいめいのグラスを満たして出ていくのです。
「お前を、もっと苛めたくなったわ。でも、もうウィスキーは、ねえよ！　もう一本、とるからね……」
「女王様、待って下さい。お許し下さい。もう、お金が……」
「なに！　また、持ち合わせがないというのかい。そうだ、お前のホテルは近いだろ？　今すぐお金をとりにお行き！　お金を持ってきたら、お相手してやるわ！」
私は、彼女の足許に土下座しました。
「女王様、お許し下さい。本当にホテルにももうお金がないんです。今日は日曜日だったし、明日、銀行で引き出すまで持ち合わせがないんです。でも明日、三時に、きっと持っていきます。もう少し、いさせて下さい！女王様、おねがいです。お情けを！」
私は床に額をすりつけて必死に哀願しました。
「ふん、お金がなけりゃ、もうお前に用はないよ！　さあ、もう出ていけ。出ておいきったら！」
彼女の足が上って、ハイヒールの先が私の肩をいやというほど蹴りつけました。見上げると彼女は両手を腰にあてがい、股をひろげて仁王立ちに立ちはだかっているのです。隆々と盛り上った胸にまで金髪が波打ち、細められた眼は薄い空色の残忍な冷たさで見下し私は、まるで魔女に魂を抜かれたように、彼女の眼光に射すくめられて、へなへなと崩折れたのです。
「女王様、なんとか都合してきます。ですから、お慈悲を……」
「だったら、とっとと、おいきよ！　さあ、おいきといっているんだよ！」
「とってきます。とってきますから、もう一度だけ、おみ足にキスさせて……」
そろそろと、のばしかけた手を、彼女のハイヒールがガッと踏みつけました。
「今よ！　あたしは今すぐとってこいといってるんだよ！　命令が判らないのか！」
彼女の足に力が入り、ぐりぐりと踏みにじられ、私は悲鳴を上げました。
「ああっ、あっ、お許し……お許しを……。直ぐ、直ぐに……とりにいきます！」
私はホテルに帰り、書類ケースの中からハトロン紙の袋を出して、五十ドル札を一枚抜き出しました。これは商売用に別にしてある預り金なのです。勿論、明日、銀行から自分用のお金を引き出して来れば、その埋め合わせはつくのです。
私は、息せききってクラブに戻りました。バーテンにマダム・ソフィアをたずねると、彼女は既に別のお客がついて、奥の部屋にいるというのです。
「そんな……あんまりな……」
私は我れを忘れて、ボーイの止めるのも聞かずフロアを横切り、彼女の個室のカーテンに手をかけました。
マダム・ソフィアはソファに背をもたせかけ、男の頭を抱え込んでいました。彼女の胸がはだけ、白い豊かな乳房が剝き出しになって、ぷるんと揺れているのです。驚いたように身を起した男は、昨夜の顎ひげのドイツ人でした。男は怒ったように、
「何だ、この男は！」
とドイツ語で、吐き捨てるようにいうのです。

「あたしのお尻を追い廻してしようがないのよ。しつこいったら！」
彼女もドイツ語で、憎々し気に男につぶやき、私にはイタリヤ語で
「何よ、あたしがこうやってるのが見えないのかい?」
と男の首を抱え込んで、乳房を男の口に押しつけるのです。
「お前には、今夜はもう用はないといったはずだろ！　さあ、さっさと出ていけったら」
私は、かあっと首筋に熱いものが通り抜けるのを感じたのです。踏み込みざま、ひげのはえた男の顎にジョルト気味のライトを叩き込んだのです。私は、ずるずるとソファから落ちる男のえり首をつかまえて引きずり、ソファの反対側の床に投げ出すと、男は唸り声を上げて起き上りそうになったので、今度は首の根っ子に手刀を叩きつけると、またがっくりと床の上に崩折れたのです。
「ど、どうする気なのさ！」
マダム・ソフィアは目を大きく見開き、今にも悲鳴を上げそうな口に手を当てて、怯えたように身を固くしているのです。
「俺は、おとなしくはないと最初にいったはずだ。こういったしたり顔の野郎には、我慢ならないのさ……」
私はドイツ語でタンカを切ったのですが、彼女のすらりとのびた白い脚が目に入り、巨大な胸、つい今さっきまで私に女王として君臨した彼女の端麗な顔、冷い薄い空色の無表情な目に出会うと、思わず視線が落ち、肩がすぼみ、自分の身体が小さくちぢまっていくようで、もう一度おずおずと視線を上げた時彼女は、もう完全に私を支配していた時の傲慢な態度にかえっていました。私は、へなへなと床にひざをつき手をついて、彼女の前に土下座した恰好になったのです。
「女王様、お金を、お金をとってきました。ですから……」
イタリア語に戻りました。
「じゃあ、さっさと、お出し！」
マダム・ソフィアは、私の手から五十ドル札を引ったくりました。
「二度とこんなことをやると承知しないよ！　明日は罰として、うんと思いしらしてやるから覚悟するがいい！　さ、用が済んだら出てお行き！　もう、お前には用はないんだぁ」
私は何だか感情が昂ぶって、目から涙がポロポロこぼれるのです。
「命令どおり、お前はお金を持ってきたんだし、あたしはそれを受け取ってやったんだから、それで満足なんだろう！　何か文句があるのかい！　もう今夜は、お前には用がないのがわからないのかい！　さ、出ていけったら、出てお行きよっ！」
私のひれ伏している頭を、マダム・ソフィアのハイヒールの足が、じゃけんに蹴とばしました。顎ひげのドイツ人は、床にとぐろを巻いたようになって、ぐうぐうといびきをかきはじめました。
私は、すごすごとその場を立ち去り、ホテルに帰りました。
バス・ルームに入り、シャツを脱って鏡をみると、私の肩といわず、胸、脇腹、背中と身体中、無残なまでに赤くふくれ上ったミミズ腫れが縦横に走り、爪に破られた表面の皮膚から血が滲み出しているのです。傷跡がかっかと火照り痛んで、鏡に写った傷だらけにされた自分自身が、とても哀れに感じられたのです。
それでもベッドに入ると「明日は思い知らせてやる！」といった彼女の言葉が耳にちらついて容易に眠れませんでした。
明日も長い一日になりそうです。

文献紹介

『夜ノ巴里城』物語

夜居生

写本全一冊、二十一丁、毛筆、漢語カタ仮名混り文。翻訳物である。原作者・訳者共に不明。我國に於ける海外艶笑文献の輸入は幕末・明治初年から舶載され、その後洋行者の手により密かに伝えられたりした。本書も洋行土産か、あるいは洋書マニヤの手になる戯書であらう。私見では本書翻訳刊本は今迄に見ていない。

ラテン民族文化殷盛ノ中心タル佛蘭西ハ富ノ國、美術ノ國、葡萄酒ノ國、美人ノ國トテ世界ニ知ラレタリ。余ガ過去二年間ニ於ケル巴里ノ寄寓ハ、半（ナカバ）ハ学問ノ為メニシテ半（ナカバ）ハ其ノ美人ヲ狩ランガ為ナリキ。元来我ガ生國ノ亜米利加ニ於テハ婦人ノ威権多大ニシテ、シキリニ体面ヲ嬌飾シ、為メニ男女天賦ノ本能ヲ抑圧セラルルヲ常トスルガ故ニ、吾人米國紳士ハ時々此ノ世界ノ楽園タル巴里ニ放浪シテ、天賦浩然ノ気ヲ養ヒ、自由ノ無碍ナル空気ヲ呼吸スルコトヲ無上ノ楽ミトスルモノナリ。

余ハ巴里医科大学ニ於テ医学ヲ修業スル事ヲ目的トセシガ故ニ、同市第五区『レキサンブルグ公園』ノ一隅ナル一旅舎ヲ寓居トシヌ。

実ニ佛蘭西ハ富ノ國ニシテ又富ヲ作ルノ國ナリ。土地ノ人々ハ常ニ早朝ニ起キ、終日労働シ、日常ノ経費ヲ節約シ、貯蓄ヲ旨トスルニ、夜ニ入レバ外國人遊楽ノ為ニトテ肉慾ノ天國到ル処ニ開放セラレ、夜ヲ徹シテ休ムコ

トナク、此ノ地区内ニ止宿スルモノ旅行スルモノノスベテヲシテ美酒ニ美人ニ其ノ財嚢ノ底ヲハタカシメザレバ止マズ。斯クテ夜ノ誘惑ニ疲レタル我々外國人ハ、常ニ正午ヲ起床時ト定メ、コレヨリ読書ニ散歩ニ用達ニト忙ガシク、夕刻ハ学校ノ講義ヲ聞キ、夜ニ到レバ再ビ歌酔淫蕩ノ天國ニ闖入スルナリ。抑モ当地ニ於テ売姫ト交際ヲ結ブニ最モ容易ニシテ、最モ露骨ナルハ市内到ル処ニ開カレタル『カフエー』ナルベシ。

余ガ居住ノ『レキサンブルグ公園サンミッシェル』ハ市街ノ両側ニ沿ヒタル一区域ニシテ、天女ノ顆シク出現スル『カフエー』ニ三十軒ヨリ少ナカラザルベク、夜ニ入レバ姫狩ノ男子頻頻ト入リ込ミ来リ、各机ヲ擁シ、居ヲ占メ、女共ヲ相手ニ酒ヲ飲ミ、珈琲ヲ喫シ、賭博ヲ試ミ、其ノ混雑ナルコト言ハン方ナク、其ノ中ニ男女共寝ノ約束ノ整ヒタルモノハ相携ヘテ『カフエー』ヲ出テ、多クハ美人ノ住居ニ伴ハレテ一夜ノ快ヲ貪ルヲ常トス。由来巴里、伯林等ノ女ハ天真爛漫ニシテ体裁ブラズ、男子ト見レバ直チニ口ヲ開キ同行ヲ促シ交接ヲ勧ムルガ故ニ、如何ニ内気ナ男子ナリテモ忽チ思フ美人ヲ一夜ノ妻ニ持チ得ル便宜アリ。又其ノ料金ノ如キモ普通物品ヲ売買スルト同様、女ノ方ヨリ何程ト切リ出シ一定ノ料金ヲ払フニ於テハ、土地ノ人・外國人ノ区別ナク、日本人・支那人・黒色人種マデモ一様ニ歓迎セルハ之レ或ハ人情ノ薄キヤノ感アレドモ、淫売國ノ天女ナレバ買フ者ニモ売ル者ニモ反ッテ格好ノ品性タルナリ。

而シテ其ノアクマデモ商売的ナルハ、姫等ガ男子ヲ誘フニ、「アナタノ御朋友方モ度々妾ヲ買フテクレマスガ交情ブリガ上手ダト云ッテ、始終ホメテ下サイマスヨ、アナタモ来テ試シテ御覧。」ト云フモアレバ、「妾ハ医学校ノ女学生ユエ衛生ニ注意シテ、病毒ハ絶ヘテ無イカラネ安心シテイラッシャイ。」ト云フモアリ、又「妾ノ寝床ハ綺麗ヨ」ト云フモノ「アナタノ槍ハ素晴シソウネ」ナドト戯レカカリ公衆ノ面前ニ余ノ武器ヲ弄バセルモアリテ、売姫ニモ様々アリ若シ強テ之ヲ拒絶セバ、「バァシャンチィ（随分ネ、ト云フ程ノ意味）ト連呼シツツ而モ尚車馬賃ヲ給ハレト強請スルニ至ッテハ、転ンデモ只ハ起キヌ女人共トイフベシ。

普通『カフエー』ニ群集スル売女ヲ買フニ、只一夜ノ料金大抵拾円ヨリ貳拾円位ニテ、ロンドンノホテル『コンチネンタル』等ニ群集スル売女ニ比スレバ遥カニ安直ナリ、由来パリスノ女ノ交情ブリハ一般ニ親切ニシテ、其ノ衣ヲ脱シテ相抱擁スルヤ……。

（男子をして快楽せしむるに、手指を巧みに弄したり、口唇愛技の秘術をつくすことなど述べ、巴里女は通常の交情よりもこの種の痴戯のほうが事後の処理が簡単なのでこれを喜ぶと云う。又、普通に交情を了れば、紙・ハンカチーフにて拭うことなく、直ちに起床して水・温湯にて入念に洗滌する。なかには一種の器具を使用して十分に膣まで洗い流す場合もあった。これは性病の予防という面もあろうが、むしろ避妊を目的とした行為で、当時の佛國では、夫婦の間でも三人以上の子供は生まないことを定則としている。家産を減少しない為である。従って女子に於ける交後の膣内洗滌法は女性生活上の必須要件として、その技術は幼き頃より、その慈母により教習せしめられるものである、と。——細部描写は省略した）

巴里ニテ『カフエー』同様売姫ノ群集スルハ『オランヒャリ』『ホルベルシェー』『カジノッパリ』等ノ有名ノ大演劇場ニシテ、観劇ノ幕合ヒ毎ニ観客ノ休息シテ酒茶ナド喫スル机側ニ来リ、淫楽ヲ勧ムルコト勉メザルナ

ク至ラザルナシ。中ニハ堂々タル夜会服ヲ着シテ淑女ヲ装ヘル売女モ多数混合ス。余ハパリス寄寓ノ最初ノ半年間ハ大体隔夜ニ此ノ『カフエー』又ハ演劇場ニ出入シテハ快楽ノ相手ヲ求メ、丈高キ女・丈短キ女・肥エ太リタル女・小作リナル女・面長ナル女・丸ポチャナル女・スペイン種ノ黒髪ナル女・独乙産ノ金髪女・内気ナル女・オ転婆ナル女・年若キ女・老タル女等々百般ノ変リタル売姫ヲ取換ヘ引換ヘ撰ビ出シテハ天賦ノ性能ヲ満足セシメタリ。

中ニ「アルマン」ト云ヘル女アリ。カネテヨリ多情尤物トキキケルガ故ニ一夜ヲ試ミタリシニ、例ノ6・9型ニナリ互ヒニ秘戯ヲツクシ、然ル後ニ交情三度ビニ及ンデ余ハ全ク疲労シ、其ノ上能力ヲ失ヒ暫クマドロマムトスレド彼ノ売姫「アルマン」ハ許サズ、御身ハ此処ノベッドヲ何ト心得ルヤ？コレハ家庭ノ寝具ニ非ズ、此処ハ多額ノ金円ヲ消費シテ眠リニ来ル所ニアラザルナリ、汝ハ弱兵ナリズヤトテ、躊躇スル余ガ頭首ヲ取リテ両腿ニ締メ込ミ、呼吸スルコトモナラズ、感覚ヲ失フマデツトメテ後、始メテ放赦セラレテ眠リニ就ケリ。コノ女ニ限リテハ平素好キ者ノ名アル余サヘ流石ニ驚キ、生命惜シクテ二度ト行クコトヲ肯セザリキ。

扨テ、コノ珈琲茶屋又ハ演劇場ニテ会ヒタル売姫ハ情味大抵同様ナリシガ中ニ「ローザ」ト云ヘル女アリ。色白ク体躯小作リニシテ品アリ愛嬌アリテ余ノ好ミニ投ジタレバ、此ノ女ニ限リ大凡三四十回モ同衾シタルベシ。「ローザ」ハ極メテ愛スベキ美点アリシケレド、淫慾ノ念本来アマリニモウスク、第一回ノ交情ヲ了レバ直チニ眠リ、又月イマダ髙フシテモ眼覚ムレバ即時起床シテ、室内ノ整頓、茶ノ用意ナドニ着手スル故多情ナル余ノ淫心ニ何トナク不足ヲ覚エタリ。因テ余ハ一思案シテ、四回目ニ逢ヒ同衾ノ時ニ彼女ヲ説得シ、従来ノ料金一夜拾円ナリシヲ今度ビヨリハ交情ノ度数ニヨリテ加減シ、一夜一回ナル時ハ五円、二回ハ拾円、三回ニ及ンデハ貳拾円ニト定メタリ。彼女ハ快ク之ヲ諾シ、其ノ後ハ深夜ヲ過ギテ早朝起床前ノ余ノ新生気ニモ応ジ三交ヲ常トシタリキ。コレ専ラ金銭ニヨリテ女子ノ情念ヲ動カス事トテ興味ウスキニ似タレド、女ガ喜ビテ之ニ応ジ、実際ノ場合ニハ其ノ動機タル金銭ノ念已ニ脱シテ、交情ノ密度濃クナリテ情念ニ不足ヲ覚ユルコトアラザリキ。

抑々巴里ハ世界ニ於ケル肉慾ノ天國ニシテ、売姫ノ出没スル事ハ、決シテ最モ人目ヲ惹キ易キ『カフエー』演芸場ニ限ルベクモアラズ。余ハ四方八方ニ淫慾ノ翼ヲ広ゲテ売姫ノ探索ニ苦心セリ。由来巴里ニハ常ニ三十万人ノ売女アリトキケバ、一夜ニ二人ヅツヲ捉フルコトトスルモ尚一百年ヲ要スベシ。

之ヨリ我ガ此地ニ止マルベキ二ケ年ノ歳月中ニ眞ノ一端ダモ過了スベキニアラズ。止ム

ナクンバ各方面ニ亘リテ、種類ノ異リタル花ノ数ニ一技ハ興ウスシ、セメテ二技三技ヅツモ手折リ見ンカナ。宝石チリバメタル盛装辺リマバユク上製ノ馬車ニ乗リテ、薄暮『サンゼリゼイ』ノ大路ヲ疾駆スル貴族的ノ売姫ヤ、市内ノ大劇場ニ時メケル当國屈指ノ女優ナドハ元ヨリ帝王時相又ハ世界的富豪ノ玩弄物ニシテ、中ニハ『ペルキ』国王ノ思イ物アレバ英王「エトワード」ノ忍ビ家モアリ。

万金一時ニ尽クルモ情ヲ含ンデ片言ナク、我々中産ノ資ヲ有スル学生ノ仲々ニ手折リ及ブベキ種類ニアラズ。比較的上等ノカフエー店トシテ聞ヘタル『マキシム』『アメリカン』ナドノ金銀燈ノ下ニ深夜品ヨク寄リツドヘル姫等コソ我々ノ遊ビ得ベキ最上ノ種類ナレ。此等ノ上等ノカフエーニハ雑居ノ大広間ノ外ニ、数十ノ別室アリテ秘密ノ使用ニ供シ、男女一度ビ此ノ室ニ入レバ給仕サヘ遠慮シテ電鈴ヲ鳴サザレバ決シテ入リ来ラズ。サテ大広間ニテ約束出来タル男女ハ直ニ此ノ別間ニ入リテ、先ヅ一二品ノ食物トシャンペン酒トヲ命ジ、且ツ飲ミ且ツ喰ヒ且ツハ戯レツ遂ニ室内ナル大形ノ長椅子ノ上ニ寝テ交情スルヲ常トスルナリ。サレバソノ仕方ハ所謂チョンノ間ニテ料金貳拾円、外ニ飲食料貳拾円位ハ払ハセラルベク、学生タル身ニ取リテハ随分ノ贅沢タルナリ。

余ガ『カフエー・アメリカン』ニテ泥懇トナリ五六回交リタル売姫ニ「ユリア」トイヘル仇物アリ、顔色ツヤツヤト美シク眼モトニ何トナク人ヲ魅スベキ淫情ヲ含ミタル女ニテ、余トハ交情トクニ濃カニシテ、ソノ果テハ、余ヲ抱キテ長椅子ノ上ヨリ転ビ落チテ交情ノ誠実ヲ示スヲ常トセリ。

有態ニ云ヘバ巴里ノ夜ハ薄暮ヨリ暁朝ニ至ルマデ、売姫ノ跋扈跳梁シ、又公然ト淫売ヲ標傍セザルモノニテモ、女トイフ女ハ細君トイハズ令嬢ト云ハズ皆一様ノ売姫タルナリ。夜半ニ至リテ演芸場・カフエーノ鎖シタル後ハ、無数ノ売姫上中下ノ区別ナク、其処彼処ノ酒店・菓子店等ニ集合シテ客ヲ待チ、黎明ニ至ルマデ絶ユルコトナク、又十時以後ニ往キ交フ女ハ十人ニ八人マデハ姫ゴゼタルナリ。

中ニハ夫ノ留守ニ一寸小遣イ稼ギニ出テイル細君モアレバ、婚礼ノ支度金作リニトテ金持ノ旅行者ヲ街上ニ捜索スル少女モ多ク、仮ヒ白昼ナリトモ男ノ方ヨリ乗合馬車ニテ或ハ電車中ニテ或ハ公園・料理店ニテ、若シクハ大道ニテモ、女ノ種類ノ何タルヲ問ハズ突然コレニ同行ヲ求ムルモ、怒ルトカ、恥ヅルトカイフ野暮ノ女ハ一人モナシ。只差支ヘナシトカ何処デ逢ハントカ今夜ハ夫ト同居ユエ都合悪シトカ、シトヤカニ応ヘスルノミ。問フモノモトヨリ怪マズ側ニ見聞キスルモノ亦之レヲ閑却シテ注意・留心スルコトナシ。是レアニ世界ニ於ケル美人ノ理想国ニアラズシテ何ゾ！斯カル国トテ巡査殿モ至テ粋人ニシテ親切ナリ。銀貨ノ二ツモ握ラシメ、アタリニ楽ムベキ場所ナキカ、ト問ヘバ、君ハ飢ヘシカ、ト笑ヒツツ何番地ニ某ト云ヘル家ニ売姫住マヘリトカ、後家ノ集合スル秘密屋ハ彼処ナリトカ、大商店ノ売姫タチノ毎夕集合スルハ右方ニ見ユル呉服店ノ二階ナリトカ、裸体女ヲ並ベタル遊女屋ハ次ノ町ニ赤キ街燈ヲ掲ゲタル家ナリトカ、別嬪ヲ供給スル、「トルコ」風呂ハ何丁目何番地ニアルトカ、叮寧ニ教ヘテクレルゾ有難キ。

カクテ余ガ八方ニ姫狩リノ手ヲ広ゲル間一時大イニ興ヲ引キタルハ、東洋風ニ売女多数ヲカカヘ居ル遊女屋ニシテ、外面ノ虚栄ヲ主トスルロンドン抔ニハ決シテ見ルヲ得ザル可ラザル楽境ナリ。而モ巴里トテ欧州ヤソ国ノ一主府ナル以上誰レカヨク東洋ノ公娼ヲ不倫不徳トシテ笑フベキモノゾ。コノ遊女屋ハ

『オペラ街』ヨリ『クテンブルパー』ニ沿ヒタル裏通リニ多ク散在シ、遊客ソノ扉ヲ押シテ入レバ、盛装シタル世話係ノ女中出デ来リ先ヅ客ヲ広間ニ誘ヒテ飲料品ヲススメ、五六人ヨリ七八人ノ女ヲ導キ来リ、各々ニソノ裸体ノ上ニマトヘル一枚ノ透明衣ヲカイマクラセ、腰部ヨリ密林ノ辺ヲ客人ニ鑑査セシメテ、最モ意ニ叶ヘル一人ヲ指示セシム。

（以下は原文のママでは不都合が多いのでその大略のみ記す。斯のようにして客人・遊女共に話しがまとまれば、仲居が寝室に誘う。並部屋もあるが特殊部屋と云うのもあり、明鏡を三方に張り自己との交情の状態を眺めたり、他人の交情を窃視できる装置があったり、又は小舞台があって其処で赤・青・黄その他種々の電光を女体に照破したり出来る仕組になっている。此処の遊女には美人が多く交歓の技術が巧妙で後々まで情味がある。又、此処の女たちは通勤で午後二時に来り、午前三時を限りとして帰ってしまう。）

扨テコノ『アーブル街』ノ一隅ノ遊女屋ニ「ジャンヌ」ト云ヘル美人アリ、華奢ニシテ色気深キ容姿ト其ノ交情ブリノ上手トハ余ノ欲情ヲ動スコト甚ダ深ク、遂ニ秘密ニ相約シ、隔日ニ彼女ガ遊女屋ヘ行ク前ニ最寄リノホテルニ会合シテ食ヲ共ニシ、且ツ情慾ヲ満足スル事ト定メタリ。「ジャンヌ」ハ且テ某演芸場ニテ舞妓ノ一人タリシ由ニテ、肢体至ッテシナヤカニ、食後ハ室内ニテ必ズ舞ノ一手ヲ余ノ為ニ奏シ、然ル後ニ余ノ椅子ニ倚リ沿ヒ来リ、巧ミニ手弄ノ戯ヲ使イ美シキ声ニテ情歌ヲ唄ヒナガラ余ノ淫情ノ充溢スルヲ待ツ。可憐ノ娘子ナリキ。

「ジャンヌ」ヲ得ル後一ケ月ニシテ余ハ「アンナ」夫人ト云ヘル一妖婦ノ魔魅スル処トナリテ彼女トハ会ハズナリヌ。『チュリリト公園』ノ露台ニテ美人「ベナス」ノ石像ヲ眺メツツ在シトキ、君ニハ其ノ像ヲ好ミ給フカ、ト鶯ノ如キ声シテ余ト偶然ノ握手シタルガ因縁ニテ、夫人ノ家ニ伴ハレ支那製ノ茶ナド馳走ニナリテ、辞シテ帰ラントセシトキ夫人ハ強テ引キトメ、主人ナルハ武官ニシテ久シク『モロッコ』ニアリテ帰国セズ、又下婢一人ハ別室ニ居ルモノノ閨房淋シキ事タヘ難ケレバ、袖振リ合フヲ縁ニ一夜ヲ共ニ明カシテヨト云フ。其ノ色白ク肉付キ豊カナル顔ト男ニ厭ヤト云ハセヌ眼ノ魅カトハ、下地ハ好キナ余ヲシテ到底謝絶ノ力無カラシメタリ。夫人ハ清潔ナル布団ヲノベ純白ノ薄絹ノ寝衣ヲ余ニ着セシメ自カラモ着シ、相擁シテ熱キ接吻ス。実ニ「アンナ」夫人ノ美質ハ肉体ノ触接ニヨリテ始メテ十分ニ味ハエル質ニシテ、肌ハ絹ヨリモ滑ラカニシテ一種微妙ノ香気ヲ放チ、美器ニシテ軟性ノ夾雑物充満シ、誠ニ天下無双ノ優物ナリキ。喩ヘンニ類ナクコレ石像ノ「ベナス」ニ魅入リテ余ノ為ニ一夜ノ快楽ヲ与フルコトカナト疑ハル。然ル後ニ安眠シ天明ニ至リテ再度ノ交情ヲ遂ゲテ別レタリ。其後モ引続キ二三ケ月ノ間余ハ数回コノ夫人ヲ訪ネテ淫慾ヲ恣ニシ双方飽クコトヲ知ラザリガ、ソノ後夫人ハ種々ノ事情ヲ陳ベテ余ニ金圓ヲ要求シ、其ノ情思ノ切ナルト共ニ

其ノ世帯ノ内実一方ナラズ苦シキ様ヤウヤク現レ来リ、或日ツイニ猶太人ノ金貸某ヨリ家財ヲ差押ヘ受クコト眼前ニ近ク来レル由ヲ陳ベテ、涙ヲ浮ベテ余ニ二千円ヲ借ラン事ヲ哀求シ、余ソノ情ヲ知ルモノカラ、内心ハ渋リナガラモ二千円ノ小切手ヲ夫人ニ渡シ、其夜ハ思ヒ切ッテ連続四交シ後チ辞シ去リ、遠カラズ再度ノ強請ニ逢ハン事恐シケレバ、其夜限リ夫人ヲ訪フコトモ中絶セリ。其後夫人ヨリ両三度ノ招キ状来タリシガ、余ハ不日帰国スルヲ口実トシテ固ク之ヲ断リヌ。

巴里寄寓一年ヲ経タル時余ハ漸々学問的研究ノ方ニ多忙ヲ感ジタレバ、ナルベク時間ト費用トヲ節約シツツ漁色ヲ遂行スルノ方針ヲ取レリ。即チ概ネ夜ニ入レバ街路・街角ニテ辻君ノ挑ミ寄ルヲ手当リ次第ニ附近ノホテルニ誘ヒテ交情シ、時ニハ一時間ニ連続三人ノ売姫ヲ買ヒシ事アリ、又ハ同時ニ両女ヲ誘引シタルコトモアリヌ。然レドモカノ「アンナ」夫人ト交情セルガ如キ快美ヲ発見スルコト能ハザリシ。斯クノ如ク悪戯ヲ尽シタリシ為ツイニ激烈ナル淋毒ヲ感染シ、シバラク就床ノ止ムヲ得ザルニ至リヌ。看護婦ヲ雇ヒテ日々ニ尿道ヲ洗滌サセツツ約二ケ月間モ安息セリ。看護婦「サアラ」ハ南佛『ニイス』産ニテ五十ヲ過ギタル老婆ナレド性親切ニシテ日夜看護ト治療トニ心ヨリ力ヲ尽シ、特ニ余ガ急性膀胱炎ヲ併発シテ二週間余全ク起キ得ザリシトキ、誠ニ痒キニ手ノ届クバカリ気ノ利キタル世話ヲナシ、余ヲシテ異郷ノ病客タルヲ忘レシメタリ。「サアラ」ハ凡十年前ニ夫ヲ失ヒ今年十五才ノ一人娘ナル「カミア」ト共ニ、細キ生活ヲツナギ来レル薄命ノ身ニテ、余ガ病ノ快癒一方ニ傾キタル頃ヨリ日々「カミア」ヲ伴ヒ来リテ共ニ余ノ看護ト慰安トニ勉メタリ。「カミア」ノ艶麗ニシテ品格アル容色ハ始メテ相見シ時ヨリ強ク余ノ恋情ヲ動カシ、「カミア」モ亦余ニ対シテ且ツ親シク且ツ恥ラウノ気色著シク、ソノ母ガ余ノ尿道ヲ洗滌スル際ノ如キハ顔色紅ヲ潮シテ正視スルヲ得ザリキ。

病中ノ徒然ニトテ母子ノ希望スル処ヲ聞クニ、如何ニシテモ四五千円ノ資金ヲ得テ学生ヲ得意トスル下宿業ヲ営ミタキトノ事ナレバ、余ハ彼等母子ニシテ今後約一年間即チ余ノ巴里滞在中専ラ余ノ為ニ奉仕セントナラバ、希望ノ資金五千円ヲ母子ノ為ニ調達シテ此度ノ親切ニ酬ユベク其ノウチ半金ハ病気全快ト共ニ、半金ハ帰国ノ時渡サンハ如何ニト申出デシニ、母子ハ飛ビ立ツバカリニ喜ビテ之ヲ諾シヌ。兎角スル間ニ完全ニ全快スルコトヲ得今度三人シテ生活スルニ適当ナル家屋ノ捜索ヲ「カミア」ノ母ニ一任シ、余ハ「カミア」ニ新調ノ美服ヲ着セテ佛国南部諸州ノ旅行ニ伴ヒヌ。「カミア」ト始メテ『マルセユ』ノ客舎ニ止宿シタル夜ノ事ナリ、余ハ「カミア」ヲ長椅子ノ上ニ擁シ今夜カラ御身ハ余ニ対シテ新タニ愛ノ努メヲ為サナケレバナラヌ、今迄ハ母人ノ看護シテクレタ一物ハ、今後ハ御身ノ手ニ愛護シテ貰ハナケレバナラヌ、ト云ヘバ彼女ハ顔ヲ赤ラメテ首ヲ垂ルルニ其ノ可愛ラシサ云ハン方ナシ。余ハ一手ニ其ノ腰ヲ抱キ一手ニ裳裾ヲカイマクリ――初物ノ賞玩ニ三年ノ命ヲ延バシヌ。コレヨリ南欧旅行中二十日トイフモノ夜毎ニ色事ノ教授ヲナシテ、巴里ニ帰リカネテノ計画ニヨリ三人シテ臨時ノ世帯ヲ持チ、美シキ娘ノ最モ美シキ十五十六ノ青春ヲ、水ヲモ洩ラサズ始終楽シク快ヨク月日ヲ送リ、ヤガテ目的ノ学業ヲ成シ遂ゲシ時、飽カヌ別レニ「カミア」ノ眼ヲ泣キハラサセテ帰国シヌ。実ニ色事ノ眞味ハ広キニアラズシテ、深ク専ラナルニアリ。「巴里三十万ノ売姫何カアランヤ」コハ「カミア」ヲ得タル後ノ思ヒナリキ。

すいちゅうか

水中花

芳野眉美

呪文

　クラブ麻耶のあかりが消え、停電かとざわめいた客席が、一瞬静まりかえった。豪華なシャンデリアにライトがあたり、すっとさがって、客に背中を向けてピアノに腰掛ける金髪のヌード・ダンサーを照らしだした。

　全裸かとはっとさせたが、赤い絨氈に飛び下りた踊子は、申し訳け程度に小さなバタフライをつけていた。細いヒモは肌にとけて見えない。

　顔は、アメリカのヒッピー族のように極彩色で粉装され、ホットなエレキギターに長い金髪は空を切った。異常に盛り上った乳房をちぎるように、根本にはめこまれた二つの乳輪が男たちを魅きつける。

　小さなクラブは、ヌード・ダンサーの汗の匂いと、全身にスプレーされた香水がミックスして、熟れた女体の熱気が充満した。

　金髪の踊子は、白髪の老人のテーブルの上にあがり、老人に豊満な尻を見せて四つ這いになった。白い尻を振って老人の顔に近づける。にこやかな笑顔を見せた老人は、外の客にテレることなく、ダンサーの汗のにじむ尻に唇を近づけた。クラブに拍手が湧き上がる。連れの品の良い中年の婦人が白扇で顔をおおった。笑いを噛み殺しているのに違いない。

　粉装された踊子の顔がほころび、テーブルにあったナポレオンを口に含むと、白髪の老人の顔を抱くようにしてナポレオンの雫を老人の口中にしたたらせた。踊子は老人のひたいに軽くキスしてテーブルを離れる。

　勘解由小路公博は、テーブルに腰掛けた金髪のヌード・ダンサーに、いきなり頭を引き寄せられ、肌色の極少バタフライに当惑した。ライトがそこだけを浮き上がらせ、店内は爆笑した。

「逃げなくてもいいでしょう」

驚いたことに、踊子は堤麻耶であった。

「ショーが終ったら、奥のわたくしのアトリエにいらして下さる」

バタフライが、こんなに薄いものだとは思わなかった。麻耶の馥郁とした神秘な香がたちこめて、口を動かせば、薄く小さなバタフライは、そのまま公博の口に吸い込まれてしまいそうであった。

「君か」

声をたてようとして、麻耶に唇をふさがれた。クラブのマダムが、全裸に近いヌード・ダンサーを演じているとは、客の誰もが気がついていないようであった。

ピアノの上に飾ってある、孔雀の羽根でつくった仮面をつけた等身大のヌード・フォトも、もしかしたら麻耶自身のかもしれないと公博は思った。麻耶には、自己愛的なところがあるのだろう。自己愛は、しばしば露出癖を持つものである。

クラブの中央に立った麻耶が、肌色のバタフライをさっと取った瞬間、ライトが消えて深い嘆息だけが余韻を残した。

公博は、あかりがつくのを待って立ち上り〈堤麻耶アトリエ〉と書いてあるドアを押して寝室に通った。三面鏡の前で、金髪のかつらを脱ぎ、顔の粉装をおとしている麻耶が振り返り、潤んだ瞳を公博に向けて微笑した。

衿元から裾ぎわまでギャザー縫もゴージャスなナイロンの透明なナイト・ガウンから、なよやかで優雅な肢体があらわに透きとおって公博を迎えていた。二つの乳輪ははずされていず、しめつけられて充血した乳房に、青い筋が幾重にも走っていた。

公博は麻耶の前に跪ずき、いまにも圧迫されてちぎれてしまうのではないかと思われるほど張った乳房に顔を寄せ、輪をみつめた。

「痛い」

触れただけでも苦痛を感じるのだろう。麻耶の両の乳房を責めている輪は、かなり太いプラスチックであった。意外に重く乳房をしめつけているらしかった。

「ばか」

甘えを帯びた声が、麻耶の香ぐわしい唇から洩れた。端正な顔をほんのりと上気させ、麻耶は優しく公博の頭を抱き、髪を愛撫した。

ドアがノックされ、公博は顔をあげた。そのままボーイが貝塚絵馬の伝言を麻耶に告げているのを聞いていた。麻耶が公博の頭を離そうとしなかったからである。麻耶が使用人の前で公然と、公博を愛人と認めたのは始めてであった。

「酔っているようですが」

ボーイは公博を見ないようにしていった。

「お通しして」

麻耶はベッドの奥の衣裳ダンスの戸を開け公博を押し込んだ。

「おとなしくここから覗いていらっしゃい。ショーの続きを見せてあげるわ」

生活能力旺盛な女は、無能の男に母性本能をかきたたせられるらしい。もっとも母性愛を利用して男をいいように玩具あつかいにしている面もあるが。

ボーイに抱かれるようにして案内された絵馬は、何もいわず麻耶の胸に顔を埋めて泣きじゃくった。

「絵馬が泣くなんて、おかしいわ」

麻耶は絵馬の涙にそっと唇を触れ、絵馬を抱きしめた。抱きしめながら、絵馬のハイネックの丸首シャツをとり、ミニスカートをとってしまった。

「絵馬らしくない。何かあったのね」

寝室に飾られた、シャガールの〈女友達〉とクールベの〈眠れるおんなたち〉が、二人を見下している。麻耶がレスビアンでもあっ

たことを公博は知った。男と女を同時に愛せる女なのだろう。
　可愛いブラジャーがベッドに飛び、ビキニのショーツが足首に落ちた。麻耶の脚が絵馬の、か細い素足にからまる。
　絵馬を麻耶は軽々と抱きあげ、そのままそっとレースの天蓋でおおわれたダブルベッドに横たえた。
　麻耶が、ちらっと衣裳ダンスの公博を見、寝室の灯りを消した。ベッドの脇の背の高い電気スタンドの淡い灯りは、幾重にも襞を重ねた純白のナイト・ガウンを着た麻耶を、幻のように、うつしだしていた。
　麻耶は絵馬の小麦色に灼けた肌の中の、白くくっきりと浮き上った白い肌に、静かに顔を寄せた。
「あっ」
　声にはならない声をたて、絵馬は小さく叫ぶように云った。
「やめて」
　絵馬の全身が硬直し、唇がふるえている。
「硬くならないで」
　麻耶の、優しい声が響く。
「力を抜いて。そう、それでいいのよ」
「——」
「さあ、なさいな。わたくしの口の中に」
　公博は耳を疑った。麻耶は何をいっているのだろう。
「いいわね、絵馬」
　まるで呪文をかけられたように、絵馬の全身から、すっと力が抜けた。
「だめ。あ、だめだわ」
　絵馬は両手で顔を、おおった。

庭園灯

　勝手口の呼鈴を押したが返事は無かった。留守のはずはない。寿美麗夫人の居間の灯りを、二階の公博の書斎から見ていた。公博が遊びにでかけたから、鬼頭老人宅を訪問してみたくなったのである。
　勘解由小路香葉夫人は勝手口の戸を開け、自然園の森の一部でもある老人の広大な庭に入った。勝手口から台所まで、中世の土塁の跡が無造作に横たわり、くねくねと細い道が続いている。香葉夫人は木の根に注意しながら暗い道を歩いた。その足が止った。
　庭園灯の下の、集めた落葉の上に、牧二郎が寝ていたのである。
「どうかしたの」
　香葉夫人は、優しくきいた。二郎は返事もしない。香葉夫人が近づいてくるのに、立ち上ろうとも、しなかった。
「奥様は」
「お部屋にいらっしゃいます」
　二郎は眼をつむったまま、そっけない声で答えた。
「御主人様は」
「奥様と御一緒でしょう、きっと」
「そう」
　香葉夫人は、しばらく二郎の横に立っていたが、
「おじゃましては、いけないわね」
　ひとりごとをつぶやき、濡れ濡れとした瞳を二郎に向けて、
「二郎さんを、いただこうかしら」
　夜会巻にさした珊瑚の簪に細い指をあてがった。繊細な鼻が、つんとして夜風になぶられている。
　二郎は、だまってピースを差しだした。
「いじわる」
　香葉夫人は落葉に坐り、二郎の頭をもたげて膝枕をした。ピースを形の良い唇にくわえる。二郎はマッチを手渡した。
　火をつけてから、香葉夫人はそのマッチを見つめ、

「二郎さん、このクラブを御存知なの」
「ええ、ちょっと」
クラブ麻耶のマッチであった。マダムの麻耶との関係など、話す必要はない。そんなことがあると、男はすぐ宣伝したがるが、二郎にその癖はない。
「ママさん、美しい方」
公博の書斎にあったマッチと同じである。
「奥様のほうが美しい」
「いつから、そんなお世辞をぬけぬけといえるようになったの」
香葉夫人はピースの煙を二郎の顔にふきかけた。二郎が口をすぼめて、その煙を吸う。二郎は、香葉夫人の顔に煙を吹き返した。
ひかえめな、おとなしい二郎にしては珍しいことであった。香葉夫人と外ですれ違っても、決して顔を合わせようとせず、軽く会釈して逃げるように通り過ぎてしまう。人が変ったような、今夜の図う図うしい態度は解せない。
「何かあったのね」
二郎の髪を、しなやかな指で愛撫しながら香葉夫人は、きいた。
「そうでしょう」
二郎は香葉夫人の指からピースをとり、自分の口に、あてがった。
「おっしゃい」
「何もありませんよ」
怒った声で二郎は、いった。
「うそ、おっしゃい」
香葉夫人の小指の長い爪が、二郎の、のどにつけられたキスマークを、つつく。
「これ、誰からつけられたの」
「誰でもいいでしょう」
「意外におとななのね、二郎さん」
「子供じゃない」
「じゃ、わたくしにキスして」
二郎は腕をのばして、香葉夫人の首に廻わした。強く引き寄せる。膝枕が乱れた。
不意に二郎は飛び起きた。二郎の両手が香葉夫人の古典模様の着物の衿にかかったと思うと、勢よく衿が開かれて、胸がむきだしにされた。
その瞬間、むっと息苦しいまでに盛り上った胸の丘が、二郎の両手の中にあった。
「痛いわ、二郎さん」
二郎の爪が、ふくよかな胸肌に食い込んでいた。
「許して」
香葉夫人のまっ白な胸許に、くっきりと赤い痣が浮かび上った。一つ、二つ……。
いきなり香葉夫人は、二郎を押し倒した。唇を奪いながら、香葉夫人の手は素早く二郎のワイシャツのボタンを外し、ベルトを解いた。濡れ濡れした瞳は喰い入るように二郎を見つめている。
夜露を受け、庭園灯の灯りに映えて、ぼやっと煙って霞のような香葉夫人の影が、二郎の顔を襲い、二郎は落葉の中に埋まった。香葉夫人の甘い囁きを、二郎は死にものぐるいで耳にした。一方的な攻撃であった。二郎の顔を、香葉夫人の古典模様の着物が蔽う。
二人の影が、溶け合った。
庭園灯は柔らかい光で、香葉夫人を美しく照らしていた。
落葉の集りが、幾度か、かさこそと悲鳴をあげた。
一枚の布で、器用に御高祖頭巾をすると、香葉夫人は雪見燈篭を撫で、
「寿美麗さんに、恋人がいたことを知ったのね」
二郎が荒れている原因を、ついた。
「御存知だったのですか、相手の男」
着物についた落葉をはらいながら、二郎はきいた。

「ハント・バーで知り合ったらしいわね」
　寿美麗夫人は、香葉夫人にだけは話してあるらしい。
「わたくしの恋人は、二郎さんにしようかしら」
「ハント・バーで、みつけたらいかがです」
「まあ」
　二郎の頬をつついて、くすっと笑った。
「無能な公博でさえ、麻耶とかいうママを愛人にしているのですものね」
　愛人にされている、とはいわなかった。夫の浮気を認めているような口先であった。
「なんとなく、乱れていますね」
　二郎は、卒直に感じたことをいった。
「乱れている」
「ええ」
「それはいけないわ。自由なのよ。素直なのよ、自分に」
「よくわからない」
「男が女を、女が男を、同性でもいいわ、どんな形にせよ、その場限りであっても、一人であろうと、二人であろうと、同時でも、愛するということは、すばらしいことだと思わない」
　香葉夫人は、二郎に優しく微笑みかけた。
「そのうち、わかるわよ」
　庭園灯を背に、暗い土塁の小道から、闇に消えた。
「明日の朝、子供たちが学校に行ったら、わたくしの寝室に来て頂戴」
　別れぎわに、ささやいた香葉夫人の言葉がいつまでも二郎の耳に残った。夏休も近づいていた。いくら夫の公博と寝室を別にしているとはいえ、香葉夫人の行為は、あまりにも大胆すぎると思った。二郎は、いつまでも闇を見つめていた。

フーテン

　国電S駅中央広場の緑の芝生に、中年の浮浪者、ガキのフーテン族、尻の青味のとれない和製ヒッピー族が、寝ころんでいる。
　中雄一郎と腕を組んでS駅を下りたリリが、いきなり雄一郎の腕をふりほどき、はだしになってかけだした。尻までたれた金髪が風になびく。
　ナポレオン・カットに、菜っ葉服もよれよれの、汚れた皮サンダルをつっかけて、芝生の前にぼんやり突っ立っていた男に、リリは抱きついた。
「ナポ、会いたかったわ」
　リリは、薄汚れた男に激しくキスをする。
　十数人のフーテンが、げらげら笑いながら二人を囲んだ。ナポとリリの熱烈なキスに拍手を送っている。
　リリのハンドバッグと金色のサンダルを持たされた雄一郎は、一人のフーテンを呼び、百円カンパしてリリの荷物をあずけ、近くのビアホールに入った。酔いも手伝って頭がぐらぐらするが、まだ飲み足りないような気がしていた。
　酔っていなければリリと一緒に歩けるものではない。長い金髪のかつらだけでも人眼をひくのに、夜でもサングラスをかけ、肌がすけてしまう薄いミニドレスで腕にからまれては、リリと街を歩くのは勇気のいることなのである。雄一郎は洋品店に寄り、パンティというものを知らないようなリリに、買いあたえて穿かせたほどであった。
　国電で坐ったら、前の男が卒倒するぞ、と雄一郎は、リリにいった。
　リリとナポと呼ばれた男は、抱きあって接吻したまま、なかなかはなれない。十数人のフーテンたちは、二人の回わりを輪のようにぐるぐる回りながら踊りだした。まるでインデアンだと雄一郎は思った。あんなキタネエ

奴のどこがいいのだろう。リリの気が知れなかった。風呂にはいらない身体から、悪臭がぷんぷんするようであった。

雄一郎はリリとホテルから出てきたばかりだった。寿美麗夫人とのデートを、意外な侵入者でつぶされた腹癒せかもしれなかった。

異母妹の絵馬に、寿美麗夫人と逢うホテルを教えたのは失敗であった。いや、二郎が通う予備校の近くのホテルを、危険だと感じていても、そのまま使用していたのが失敗だったのかもしれない。

絵馬とリリが、雄一郎と寿美麗夫人の部屋に侵入し、呆然としている雄一郎を尻目に、二人はしゃあしゃあと浴室で湯を浴びたのである。その間、寿美麗夫人は何も云わず、そそくさと服装をととのえてホテルを出ていった。絵馬が二郎を呼んだが、二郎はついに来なかった。ホテルの廊下で、寿美麗夫人と二郎が出会ったかどうか、雄一郎は知らない。

これで終りだな、と雄一郎は思った。とうとう俺も失恋した。雄一郎は何杯目かのジョッキを鯨飲した。

ジョッキから顔を上げると、どかどかとビアホールに入ってきた三人のフーテン娘に雄一郎は囲まれていた。

「エマのお兄さんだって」

フーテンバッグをさげた、素足の娘がいった。

「リリからきいたよ」

雄一郎は面倒くさそうにうなずいた。三人ともまだ高校生なのだろう。成人式前の娘たちであった。

「何かたべさせてよ、腹ぺこぺこなんだ」

（おSEXの会会員）と胸にマジックで落書している娘がいった。この娘はワラジを履いている。

「それから、お風呂に入らせてくれない。どこかのホテルでさ」

ボサボサに汚れた髪を、ぼりぼりやっていた娘がいった。

「いつお風呂にはいったのか、忘れてしまった」

不潔なこの娘は、細いマンボズボンの尻に（メイクラブ）と書いてあった。まるでモモヒキだと雄一郎は思った。

周囲の視線が雄一郎のテーブルに集中し、フーテン娘を好奇な眼で眺めている。

「三人を抱かせてあげるからさ、ねえ、エマのお兄さん」

娘たちの声は大きい。ビアホール中に響いているはずであった。

「よし、三人とも抱いてやる」

雄一郎はどなった。

「同時にな」

一瞬店内が静まりかえったようであった。それから笑い声が少しずつ店内に充満していった。にぎやかなビヤホールに戻る。

「好きなのを食え」

雄一郎はボーイを呼び、ステーキと小声でいった（メイクラブ）に微笑して、ステーキを六人前、注文した。

リリとナポはまだはなれていない。いったい、いつまで二人は接吻しているつもりなのだろう。踊りの輪は三十人ばかりにふくれていた。

二郎はいつの間にか帰り、絵馬とリリと三人でホテルを出たが、バーを二軒寄ったところで、絵馬が消えてしまった。リリと二人きりになると、リリが雄一郎を勝手にいきずりのホテルに連れ込んでしまったのである。リリは今度はナポとホテルへ行くだろう。雄一郎の財布から、ホテル代ぐらいはちゃっかり巻き上げているはずであった。

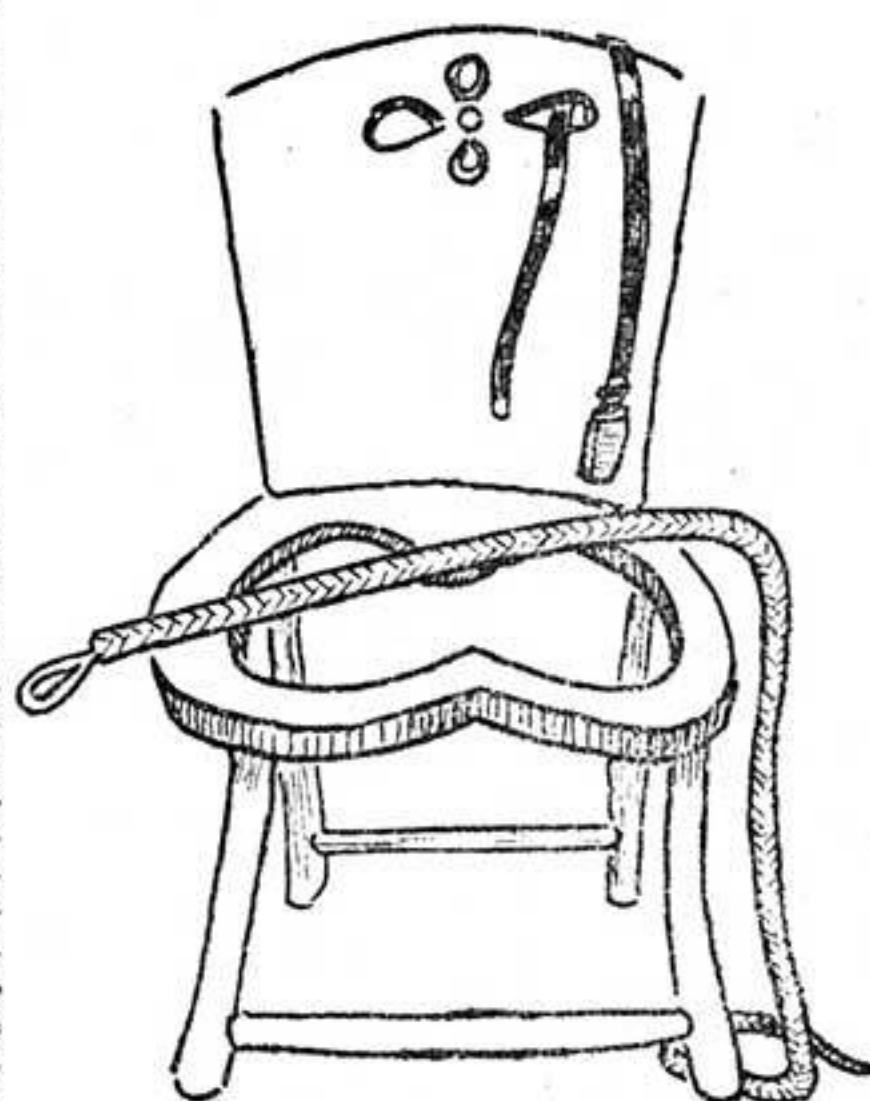
急激に酔いが迫り、雄一郎はがくっとテーブルに首を落とした。

（続く）

連載サディズム小説

心傷たむ遍歴

＜第三十七章　仮釈放審査（三）＞

西条　操

クラリスが呼び入れられ、五分間で戻って来た。
「悪く思わないでね、おミシュちゃん。よっぽど付き合おうかと思ったけど、要領のいいのが私の癖なんだもの。でも、アッサリし過ぎちゃってて妙な具合。なんだか白けてたし——。フン、さては——」
ミシュリーヌは、頬にめり込む革バンドをしとど濡らせつつ、コックリとうなずいた。
「あの、三一六号、交話を致しました。反則を申告します。すみません」
イザベルが背後に寄り、クラリスの頭を小突いて去った。
「ね、こういう要領でやるのよ。ところで、殿方お二人さんがミシュちゃんのために一肌脱いだ様子よ。そうショげないで」
五二五号が鳴咽しながら戻って来て、これで一応、面接は全部、終った。
「さあて、いよいよ天の審判のときね。有罪か無罪か——。お祈り捧げて待ってな」
キャプシーヌが膝をガクガクさせて曳かれ入り、泣きながら戻って坐り込んだ。嬉し涙ということは気配で分かる。
ジャポネ娘も歓喜のあまり、戻って来て腰を抜かした。
ミシュリーヌは飛ばされてヒーと哭き、クラリスが呼び入れられた。半ば以上は諦めていても、後回しにされて見ると、絶望がひしひしと全身を貫ぬく。
クラリスさえもが嬉し涙を不覚にも浮べ、五二五号が戻って来て、
「うれしいッ——も、もう、こんな——」
と、手錠を指先に、まさぐった。
「四五三号ッ。いよいよお前だよ。立ちな」
ミシュリーヌだけは膝枷をかけられ、テレーヌも付き添って、曳かれ入った。

「どう？　少しは気持が鎮まったかしら？」

ミシュリーヌは涙を浮べて、激しくうなずいた。マダム・オッセンが威儀を正した。

「そう。じゃ、可哀想だけどそのままで聞きなさい。もう、お前の答えを聞く必要はないからね。いいこと？」

ミシュリーヌは全身を硬張らせ、微かな期待に取り縋って、この身の自由をば掌中に握る人々に合掌した。

おずおずとあげた女囚の眸が、真正面に見据えるシュバリエ夫人の老いの眸と合った。

――飛んだところでお恥かしい姿をお見せしましたわね。人生って、ほんとに妙なめぐり合わせですこと。私のこと、まだお腹立ちですのね。でも、御無理ございませんわ、シュバリエ奥さま。たったおひとりの息子さんの命を縮めたのも、結局はこの私のせいなんですもの。ええ、たしかにそのとおりです。すみませんでした、ほんとに。私、決してお恨みなどいたしませんことよ。お望みなら、あと二年、ここで辛抱しますわ。だって、私のジュヌビェーブは生きてますし、待てばいつかは逢えますもの。そりゃ、すぐにでも逢いたいですわ。逢いたくて、逢いたくて――。でも、エミールさまへのお詫びをしなくちゃいけませんわねえ。あと二年、こうして、こんな姿で過ごします。ですけど、お心が解けたら、一日でも早くお願いできまして？――

ミシュリーヌは静かに眸を伏せ、ずきずきする手首を撫で、硬い手錠をまさぐった。

なおも見詰める老婦人の双眸がふと翳り、まばたいて和ごむ。

「ね、御覧なさいな、あの手首。深い筋が喰い入っちゃって、すりむけてるわ」

「さっき暴れたからじゃない？　だけど、手錠の痕ってのは小指側がひどくなるのね。拇指の側かと思ってたけど」

「フロレンスは研究熱心だこと。御自分で試めしたらどう？　でも、よおくもう分ってるでしょうに、どうしてもがいたりするのかしら。ちょっとはずしてやったらいいのに」

「冗談云わないで、ブリジット。あの女囚、手錠なんか馴れっこで平気だと嘆いてたじゃないの」

ミシュリーヌは嵌口具の鉄を口中に噛みしめた。あの匂やかに粧おう若奥さまがたが、こんな手錠や革ベルトや捕縄なんかの味を知る筈もない。閉じ込められて外から鍵をかけられる屈辱すら御存知あるまいに、体に錠をおろされるみじめな悲哀などは御想像も出来なかろう。

「ま、手錠は当り前だけど、嵌口具はもういいんじゃないかしら？　近くで見るのは三度目だけど、とってもむごたらしい感じ――」

「そうね、ブリジット。いつも、似たり寄ったりの変りばえしないレコードばっかりだものねえ。このひとのLPレコードは変ってたわ。マンネリから脱して刺戟があったわよ。もう少し聴いてもいいわね」

若奥さまがたの不謹慎さに、シュバリエ老夫人の眸が光った。いまはもう、その軽薄さを責める色さえ浮んでいた。

「では――」

と、書類などを披げて、オッセン夫人が咳払いした。

「四五三号囚、ミシュリーヌ・ダリュウ。お前の仮釈放嘆願について、その審査の決定を保留します。分った？　近いうちに、もう一度面接して決めます。それまで、まじめに勤めて更に反省を重ねなさい。いいわね？」

モレシェンヌまでもがホッとし、その気配が腰のロープに感じられる。

「分ったかしら？　却下されたんじゃないのよ」ジョアンヌ女史が云って聞かせた。

「近いうちに、もう一度よんで下すって、吟

味して頂けるんだよ。ほんとに、特別のお取計らいなの。御温情を裏切るような真似をしないことだね。さ、お礼を申しあげなさい」
　ミシュリーヌは素直にうなずき、忽ち嬉しさがこみあげ、きわめて自然に膝を落した。
「課長さん」
　シュバリエ夫人が、深々と垂れる金髪を見やりつつ、深い声音で云った。
「あまりひどい罰を加えないでやって下さいな。もう、充分に悔悛してるようですから」
「そうですとも、僕たちからもお願いする」
　男性たちは熱心に庇い、若夫人たちが口をとがらせた。
「でも、いわば法廷侮辱罪みたいなものよ」
「そう。まるで無実の罪を訴えるみたいだったわ。ロレッタの真似かしら。法廷であれだけのことを口走れたら大したもんだけど」
「あなたたち。ここは法廷ではありません。私たちは裁く者じゃないのよ。裁判官気取りはおよしなさいな」
「レニエ夫人のおっしゃるとおりだわ」
　シュバリエ夫人までが同調し、まるで変った風向きに、若奥さまがたはバチクリした。これだから、御老人がたは扱い難い。
「ねえ、もういいでしょ？　嵌口を解いてやって下さいな」
「あら」と、オッセン夫人が踏み止まる。
「最後になってから、またぞろ騒ぐようなことになると、かえって本人が可哀想です。ほかの女は全部……。この女だけが――」
　ミシュレーヌは腰縄を曳かれて退出した。
「保留だったのね？」と、クラリスが囁く。
「そう。ま、よかったわ。せいぜい三カ月延びただけ。悪いけど、私、お先にね」
　ミシュリーヌは涙を溜めてコックリした。
「さあ、立ちな。お送り申しあげるんだよ」
　五名の女囚は後ろ腰に太いロープを通されて、再び珠数繋ぎにされた。追われて戸外に出て、本館玄関の車寄せのわきに並び、キチンと正座させられる。お手数をかけた委員の方々をお送り申しあげるのだ。砕石の砂利に膝をそろえるのだから、素足に喰い込む小石の鋭さが、泣きたいほどだった。初夏の午後の明るい陽光を全身に受けて、女囚たちはまぶしさに顔歪めつつ、みじめな想いでひたすらに待った。
　仮釈放というものの有難味と重々しさを思い知らせるべく、コリンヌ課長が発案の行事であった。バスした者なら辛抱も出来ようというものだが、却下された女囚にとっては断腸の思いもいいところで、情けなさと口惜しさのあまりに一騒動起すことも屡々だ。最後の哀願を絞りあげての愁嘆場を演じない方が稀なのだが、ここで泣き喚いたとて、もはやそれは無駄なこと、いったん決定した却下を覆えすなどということは、委員会の権威にかけても絶対にない。
　ミシュリーヌは鼻を啜りあげ、ポロリと涙をこぼした。保留と聞いて先刻は喜んだ彼女であったが、こうして青空の下で並んでいると、ほかの四人は全部バスしたのに自分独りだけが――と悲しくなり、劣等感と疎外感に胸を締めつけられて来るのだった。その四人もふと啜りあげ、一人が忍び泣くと、釣られたように嗚咽する。爽やかな陽光降りそそぐ下でうなだれ正座していると、わが姿の情けなさがこみあげて来るのだ。脛に喰い入る砂利の痛さ――女囚たちは耐えかねて足指をそらせ、微かに呻いて腰をよじる。
「こら、じっとしてるんだ。感謝を全身に表わして正座だよ。動くなというのに!!」
　五二五号の大きなお尻に笞が鳴った。
「こら、もすこし間隔をあけな。もっと、もっと――。列が曲ったよ。膝をそろえてッ」
　女囚たちは腰ロープを一杯に張って座り直

し、引張り合ってよろめき呻き、地を離れたロープが砂利に影を落とした。
女囚たちの額に油汗が浮んだ頃、ようやくのことで、お歴々が玄関に現われた。
「お行儀のいいとこをお見せしないと、折角のお慈悲がパアになるよ」
テレーヌが脅やかし、女囚たちは体を硬張らせた。クラリスでさえも思わず居住まいを正し、手錠がきらめいて腰ロープが揺れる。
眺めやって、ブリジットが云った。
「イヤねえ、このお見送りだけは――」
「そうね。このときだけは、全部パスさせてやりゃよかったのに、と思っちゃう。ま、そこらが狙いかも知れないけど――」
「まず今日は、大体のところ、気が軽いわ」
「人を裁くのって難かしいわねえ。正義と人情の板挟み。今夜のパーティどうしょうかしら？　疲れちゃったもの」
七人の男女は、意義ある一仕事を終えた満足感に浸りつつ、三台の車に分乗して、所長以下の最敬礼の裡に玄関を滑り出た。
「今日の連中は珍しく、その――」
「左様。粒がそろってましたっけ」
二人の男はうなずき合って眼をつぶり、ふり返って眺める。運転手たちも気を奪われ、待っている間に鑑賞したことだろうに、またぞろキャプシーヌを標準に品定めをやり直すものだから、女囚の列の前で、一台ならず二台までもが車輪を砂利に落としたのだった。
眼前を過ぎ去る乗用車三台――女囚たちは歯を喰い縛って見送り、再び閉じる鉄門を盗み見て、啜りあげた。
「立って。なにをシュンとしてるの？」
女囚たちは呻いてよろめき、珠数繋ぎのロープを引張り合って更にふらつき、脛のあたりの砂利を足裏でこすり落とした。
独り曳かれて戻る地下通路で、ミシュリーヌは嗚咽し、モレシェンヌに慰められて、更に甘えて泣きじゃくった。
イヴェットは当直デスクから悄然と立ち上がり、胸つぶれる想いでミシュリーヌを迎えた。先に帰って来たジョアンヌ女史から、既に結果を聞かされていたのだ。
ミシュリーヌはイヴェットを見るなり、声を放って泣いた。
「お前は大丈夫だと思ってたけどねえ」
ジョアンヌ女史はミシュリーヌを眺めた。
「泣くのはもうおよし。けど、うちだけが駄目とはねえ。無理しても模範囚にしときゃよかったね、やっぱり。フォンティーヌ大苦心の具申書だったんだけど――」
女史は残念がり、フォンティーヌは溜息を吐いて無言だ。
「今日の皆さま、この四五三号のときには少し妙でしたわ。ほんとですわよ」
とモレシェンヌがいきまき、女史がジロリと睨む。
「決してヤケを起すんじゃないよ、え？　四五三号。なあに、ほんの少し延びただけさ」
「――は、はい――はい」
ミシュリーヌは、眼頭を押えた。
「ところで、やっぱり懲罰しなきゃいけないねえ。コリンヌ課長とも相談したんだけど」
「まあ!!」モレシェンヌが腹立たしげだ。
「この四五三号がピカ一でしたわ。それなに――皆さんアキメクラよ。ええ、そうですとも!!」
「お黙り、モレシェンヌ。委員会のことをかれこれ云ってはいけないよ。私たちのお仕事は別なんだから。公私混同はいけないね」
マジョーリも無論、顔を出していて失望の色も濃く、ジョアンヌ女史はモレシェンヌから眼を転じた。
「一週間ほど謹慎させることにしよう。分ったね？　もうお説教はしないからね、え？」

「――はい。そうさせて下さいまし。もうしわけありません。御心配をかけて――」
「ウン。そんなお前が、どうして辛抱できなかったんだろ。なにを云われても、すみません、すみませんで押し通しゃよかったのに。おっと、こんなこた口走っちゃいけないね。モレシェンヌ、捕縄かけて独房へ入れてやりなさい」
「捕縄をですって? まあ!! そ、そんな」
「今夜には解いてやるのよ。さ――」
「イヤです」
ジョアンヌ女史が眼を丸くして困惑し、
「お願いします、モレシェンヌさま」
と、女囚が手錠の音を立てた。
「私がやるわ」とマリーがやって来た。
「仕事は仕事よ。どうせ人間がやってることだものね、委員会だって――」
マリーはあっさりと割り切り、ミシュリーヌに捕縄をかけた。一号捕縄は矢張り辛い。
「すみません――」
と、ミシュリーヌは啜りあげ、縄尻を取られてションボリと曳かれて行く。
「私のこと、ずい分とひどいと思ってるだろね? モレシェンヌ」
見送って、ジョアンヌ女史は云った。
「あんたの気持は分るわ。たしかに、委員の連中、ちょっとハメをはずしたよ。特に若手マダムがたがね。でもさ、あんただって、あのときには押えつけて叱ってたじゃないか」
モレシェンヌは黙って頬をふくらませる。
「誰かがケジメつけて憎まれ役を買って出なきゃいけないのさ。ま、モレシェンヌも、そうだね、あと五年したら分るかねえ、苦しい思いをさせてやるのが慈悲だってことが――」
と、マジョーリが微笑した。ひょっとすると、マジョーリはイヴェット以上にミシュリーヌのことを知っているのかも知れない。
「神の御心は人間には分からなくってよ」
「あのね、モレシェンヌ。看守長さんはね、おみ足が痛くておメメが一週間ほど近眼になっちまって、独房のあたりにはとても行けないし、全然見えないようになるわ。ホホホ」
ジョアンヌ女史がニヤリとし、謹慎房の鉄格子扉が重々しく閉じて錠が鳴り、イヴェットは胸が痛くなった――。
ミシュリーヌは、またしても謹慎独房の鉄格子の中から、監舎の明け暮れを眺めて正座する身となった。
夕方ともなれば、出払っていた連中が疲れ果てて追い戻されて来る。生まれたままの姿になった女囚の群が監房ごとに六名ずつ並び、右肘に囚人番号札を結びつけ、両腕を背に、股を大きくひろげて広間に整列する。笛が鋭く鳴ると、裸形の群は長々と舌を出し、匂やかに粧う婦人看守たちを盗み見ながら、諦め切って哀しげに、身体捜検の順番を待つのだ。
きまり切った日常の行事は、号令の代りに笛の合図で行なわれるようになっていた。だから、新入女囚には、観察房からとっくりと見覚えさせる必要があるというものだった。一週間を眺め暮すのだから、本番に入ってマゴついても、新入だからとて容赦はして貰えない。
笛が鳴り、第一房の六名がバッと腿を合わせ、次の号笛で一斉に進み出る。腿を高々とあげて足並みそろえ、広間中央の白線を足裏にキッチリ踏んで止まるのだが、笛がピ、ピーと二声鳴ればやり直しだ。もう一度やっても性根がこもっていなければ、身検を受けさせて頂けないで、ピピピピーと追い払われてしまい、横手に並んで後回しにされる。もちろん、四ツ這いの腰を高々とあげ、膝を伸ばした両足を思い切りひろげて、その間から眺

めてお勉強させられるのだ。忽ち一群が後回しにされた。
キャスリーヌ婦人看守あたりが笞を手に、広間へ突き出す双丘を見下ろして回わる。尻に、腿に、ふくらはぎに、嘲罵と笞が飛び、
「踵をあげてッ。こら、舌の出し方が短い」
六組の双丘が哀しげに、爪先立ちににじり上がり、逆さまに覗く顔が泣きそうだ。
女囚の群はトチるまいと緊張し、白線を素足に踏んで直立不動――次の笛で〝火〟の字の姿勢を取る。制服女性が純白の衿も匂やかに、真正面から全身を見据えて行き、
「脚をもっとひろげてッ」
と、ピカピカの靴が内腿を蹴る。どんなに情けなくとも身動き一つ許されず、唇を噛むことも出来ない。舌を長々と出した滑稽な姿なのだから――。
笛が鳴り、一人々々が囚人番号と整理番号を叫びあげる。喚き終えれば、またも舌を延ばし、わが身のほどを胸に噛みしめるのだ。
そのつぎの〝腰あげ四ツ這い〟との間に、〝跳びあがり〟動作がつけ加えられていた。もちろんコリンヌ課長の発想によるもので、坐業の多い女囚たちには適当な夕べの運動だという。

〝火〟の字の姿勢のまま、まっすぐに五回跳びあがり、なにも隠していないことを示すのだが、制服女性の気分次第で、簡単に五回が十回となってしまう。なにしろ、笛で初めた跳躍は、笛が許すまで続けねばならない。
短い一吹きごとに六名がそろって跳ねあがる。跳ね方が精一杯でなかったり、不ぞろいだったりすれば、鋭く指さされ、叱り罵しられ、背後から笞や革ロープが素肌に飛んで来る。
ピ、ピーと二声鳴れば回れ右の命令だ。それを間違って、それまでどおりにもう一跳ねをやらかしでもすれば、最低でも革ロープ二発が手痛く降って、緊張と注意の足りなさを思い知らされてしまう。ベルディーヌにでも見付かればコトで、笞と靴先とで列外に追い払われ、イヤというほどに跳躍を繰返されたあげく、腕立伏せで顎を出させられ、トコトン絞りあげられる破目となるのだ。虫の居所によっては連帯責任とやらを適用され、六人全部が汗みどろのトレーニングに悲鳴をあげさせられて、同房囚たちから恨まれる仕儀となる。
回れ右をした女囚の列は独房群の方にお尻を向け、続く号笛一声で両手を床に突く。

「膝が曲ってるッ。伸ばして」
「掌を、ちゃんと床につけてッ」
制服女性たちが叱りつけて見回わり、
「動くんじゃないッ」
と、身じろぎ一つ許されずに、両脚を大きくひろげたままだ。大抵の新入り女囚は涙をポロポロとこぼしてしまうが、少くとも一分間は風にさらされて放置される。
もちろん、制服女性たちにしたところで、そんなに念入りに検査するわけもなく、いわば、そのような恰好をさせれば目的は達せられるという次第なのだ。
ミシュリーヌは眺めて頰染めるのだった。いままでの毎日を、あんな風にして調べられていたのだ。そして、これからもまだ何カ月かを、ああいう具合にして恥かしめられるのだ。ミシュリーヌは、傍観者の立場で、屈辱の儀式をつぶさに眺め、それを実際にやらせられるとき以上にみじめな想いであった。
以前のように一人ずつがせいぜい三組ぐらいならともかく、六名が横一列に並んで四ツ這っていると、なんだか人間の姿とは思えなくなる。観察房の鉄格子越しにこの光景を見せられた新入りの女囚は、十人のうち九人までが顔を掩ってしまい、この身にも逃れられ

ない運命だと思いやった途端、声を忍んで泣き出してしまうのであった。

「どうだい？　エディス。少しは平気になったかい。フフフ、まだソワソワしてる」

ベルディヌが新米婦人看守をからかった。

「照れることないさ。合法的な猥せつ物陳列だよね。そんなにムキになるほど見て回ることないんだってば」

キャスリーヌが笑いをこらえ、イヴェットは憫れみを禁じかねる。いくら規則による身検業務だとはいえ、相手が受刑者の身とはいえ、こんなザマを毎日やらされる女囚たちの気持にもなって見るがいい。イヴェットは溜息を吐きながらも、いく分かは気が軽い。ミシュリーヌ奥さまの裸か身の痛ましさを見ずにすむからだ。

「だけど、夏場になると、この匂いには参っちまうねえ。性悪女はいくら毎日シャワー浴びさせたって——。いっぺん、そとで陽に干させてやるといいんだ。でも、エディス。お前さんだってもう三カ月だろ？　そんなに深刻がるこたないんだよ。イヴエットなんか、二週間でマバタキひとつしなくなったよ。もっとも、あの娘は看護婦やってたんだ——。こら、動くなっていうのに!!」

九房のあばずれたちは巨大な腰部を高々と突き出し、ひとしお永々と四ツ這わせられている。その列の六つのうち、二つにはベルトが喰い込み、ぶら下がる手錠が、冷く揺れた。

イヴェットは低音の笛を唇に当て、第六房の一群に〝シャワーやめ〟を命じた。

「こら、メスブタども」

と、ベルディーヌが床を蹴る。

「あれはシャワー場の笛だよッ。テノールとバスの区別もつかないなんて、それでよく殿方たちを口説けるもんだ。電話だったら相手を間違えてドヤされるねえ。お粗末なのはお尻あたりだけじゃなくて、耳もガバガバの締まらなさ加減——。こら、踵をあげえ。ふくらはぎを緊張させるッ。そしたら、腿の筋肉だって、少しは——ね」

グラマー自慢のあばずれたちが口惜しげに床を見詰め、両脚の間からベルディーヌを睨んだ。三六五号がなにか喚いたが、舌を引っ込める勇気はないので、口惜しいのだという気持だけが分かる。三六五号は自称三監ピカ一のセックスアピールの持ち主——その自慢の肉体にケチをつけられては、腹も立つことだろう。締まらないかどうか試して見たら？　ま、そりゃ無理な相談だよねえ、あんただって女だもん——。

そんなことを口走ったつもりだろう。

ベルディーヌも、マジョーリあたりが居ないとなると、言いたいことをいうものだ。そんなベルディーヌだが、浅間しい姿の群を背景に眺めると、その制服姿から、女らしい線がときたま匂い立つ。ベルディーヌですらそうなのだから、盗み見る裸か身たちは哀しい。

「こら、腰を振れ。大きく回しな」

ベルディーヌは、三六五号の盛り上った双丘にピシリと笞を当て、またも床を蹴って命じた。彼女は脚の太さを気にしているので、頑としてシームレス靴下は穿かず、フルファッションの縫い目をばまっすぐに、その筋目を絶えず気にしている。

あばずれたちはヤケクソ気味——いずれも眺め甲斐のある双丘を、ぶるぶる回した。

「そのまま右向け右ィ」

ベルディーヌは靴下の縫い目に手をやりながら号令を下だす。

「前へ進めッ。列を乱すと承知しないよッ」

メス豚二匹の手錠が触れ合って鳴り、六個の赤裸は、広間の周囲を四ツ這って回らさ

れ、キャスリーヌが面白そうに追い立てた。

　眺めて眉ひそめるイヴェットだったが、九房のあばずれどもとあれば、そんなにも胸は痛まない。まったく、あのあばずれどもにはマジョーリすら、手を焼いている。

　ベルディーヌの笛が鳴り、十房の六名が腿を高々と踏み出し、白線の上に緊張して両脚をひろげ立ち、永らく出しっぱなしの舌をさらに精一杯延ばして、両腕あげての不動の姿勢を取った。

「おや? こりゃ何だい?」

　ベルディーヌの眸が光り、三七四号の肩から糸屑一本を摘まみあげた。元文部省秘書嬢はビクリと、おののき、

「――す、すみません――お、おゆるし――」

と、恐怖に声も出ない。この娘は、鉄窓から男を追い求める態度を憎まれているので、仮釈放のお慈悲もないままに、二年半の刑期一杯を勤めさせられる予定だ。

　ベルディーヌの笞が腿にしたたか降り、娘は若々しい肢体をよじった。

「こら、舌を出すッ。いうことがあったら、そのままで云いな」

　ベルディーヌは無理なことを言い、さらに二の腕の内側を、シバキあげた。

「こんな糸を持ち込んでどうしょうっていうんだい? 縄梯子こさえて牢破りする気?」

　娘はヒーと悲鳴をあげ、身もだえて赦しを乞うた。糸屑一本のことで哀れなものだ。

「当分、床に坐らせてやるから反省しな」

　ベルディーヌは最後の一発を肩口に当て、豊かな腰にスカートをゆすりあげ、笛を鋭く吹いたのだった。

　翌日のひる近く、看守長室から小突かれて出て来た新入り女囚を広間越しに見て、ミシュリーヌは眼を疑った。それは、ヴィヴィアンヌの変り果てた姿であった。

　ヴィヴィアンヌは広間に立たされて待ち、やがて、昼食に戻って来た全員に引き合わされた。

「さ、自己紹介するのよ、誇り高き女性」

「――被拘禁者略取罪、公務執行妨害罪、逃走ほう助罪、強盗および窃盗罪、警察官傷害致死罪、銃器不法所持ならびに使用、法廷侮辱罪――懲役四十五年――」

　ヴィヴィアンヌの声は抑揚もなく虚ろに響き、あばずれたちがタマゲて眼を丸くする。

「ふえーッ。あんた、分ったかい? ラテン語とギリシャ語を並べ立てやがったけど」

「タタキとノビだけは分ったよ。だけど、四十五年とはねえ。終身より始末が悪いね」

「盛り合わせ料理だとああなっちまうのさ」

　ジョアンヌ女史が

「まだあるだろ。出し惜しみするでないよ」
と頭を小突いた。さっき、お説教を受けたときの態度が気に喰わないし、教養高き女性には風当りが強い女史だ。
「――弁護士法違反――」
「ふん。それで、鑑札のナンバーは?」
「三八七号。第十一監房仮六番――」
聞いて、あばずれたちが肩をすくめた。
「ちょっとお。あの娘――だか若後家だか、女弁護士だったんだって!! 知ってる?」
クリスチーヌはニンマリした。十一房の六番とは、自分と同じ整理番号だ。指折り数えて待ち焦がれている満期日に、よもや計算違いはなかろうとは思っている彼女だったが、自分の代りが現われた今、いよいよ、その日も三、四日のうちとなったのだ。
ヴィヴィアンヌはフィリスに引き立てられて、ミシュリーヌの隣房にやって来た。
「あら、はずして下さるの? 寛大なのね」
「余計なこというんじゃないのッ。私たちを怒らせると、お前なんか忽ちツーロン行よ。いいの? 分際をわきまえることねッ」
フィリスは、荒々しく手錠をはずした。
「いいのよ、どこだって。なんなら、すぐにギアナにでもアフリカにでも送ってよ。早く死ねるとこの方がいいわ」
フィリス婦人看守は唇を歪め、押し込んだ鉄格子扉を重々しく閉じた。ヤケクソ気味に度胸を据えた、長期刑女囚は扱い難い。三監頭痛の種が、ふえた。
「ま、ゆっくりと考え直すのよ。もう一度、鎖なしに陽の目を拝んでから死にたいと思わないこと? これッ、膝をそろえてッ」
監舎は再び静かになり、ミシュリーヌは声をひそめて、隣房へ囁きかけた。
「いったいどうしたの? ヴィヴィアンヌ。あら、私に気がつかなくって? ふくれツラして天井ばかり見てるからだわ。ホラ、ミシュリーヌよ。お世話になったミシュリーヌ・ダリューです」
しばらくして、虚ろな声が返って来る。
「――ああ、思い出したわ。そう、そうだったわね。まだ居たの? たしか三年……」
「四年ですわ。その節はいろいろと――。お驚きになって? 私も十一房なのよ」
「ちっとも。私には、もう驚くことなんてないの」
「そんな――。私、ほんとにびっくりしましてよ。どうしてまたあなたみたいなひとが」
「さっき喚かされたでしょ? お聞きのとおりの兇悪犯。ま、ボチボチ話すわ。ここが永住の場所なのね。やっと落ち着いたわ。枯れて朽ち果てるのを待つばかり――」
「そんなの、駄目よ、ヴィヴィアンヌ。元気出して、一生懸命にやらなきゃ――」
「ありがと。でも、なんのためにやるの?」
「なんのためにって――そりゃ――」
「心配しなくてもいいのよ。絶対に自殺なんかしないわ。死ぬまで此の世にもたれかかってやるつもり。なるようになれだわ」
ミシュリーヌは、暗然とした。いくら短く見積っても、これからの二十年間を獄窓で送らねばならないヴィヴィアンヌだ。その年月の長さはミシュリーヌの胸にひしひしと迫って、彼女は慰める言葉もなかった。
「――ミシュリーヌも男のためにこうなったのよね。ちゃんと知ってたわよ。というのはウソ。あとで思い至ったんだけど――。私も男のためよ。たった一人の、かけがえのないほどにいとしい男のため。ただ、私のはね、パーンパーンて派手だったの――。ああ、フィリップ。生きてさえくれたら、素晴しい模範女囚になって見せるんだけど――」
「黙って!! ヴィヴィアンヌ」
ジョーゼット婦人看守がデスクからやって

来て、うさん臭げにミシュリーヌを見た。
「交話してたのね？　駄目じゃないの」
「すみません。ほんのちょっとばかり——。申しわけございません」
　ミシュリーヌは素直に認めて詫びた。
「用便は？　たしか、おひるのが、まだだったわね？」
「はい。ヴィヴィ……いえ、三八七号のことでお忙しかったものですから、あとでと……」
「そうだったわね。交話の罰としてトバしてやりたいとこだけど、ま、いいだろ」
　顎をしゃくられて、ミシュリーヌはいそいそと膝をにじった。股布のボタンを外し、モンペの締革を上衣の下からまさぐり出し、小さく堅牢な錠前を指先に支えて鍵を待つ。
「すみません——」
　と呟き、さし込まれる鍵を見下ろし、与えられる紙一片を押し戴き、僅かに奥へにじり退って身支度をするのだが、上衣の後ろ腰から垂れる股布は長々と、ままならぬ手で処置に悩むミシュリーヌだった。
「お前は、いつまで経っても顔を赤くするのね。無理しておとなしくすることたないのよ。遠慮なくおやり。僅かな楽しみの一つだろ」
　ジョーゼットは真正面から鉄格子越しに盗視して云い、女囚は後始末しながら唇を噛んだ。毎日のことながら、ともすれば胸が熱くなって泣きたい、みじめさだった。
　革バンドを腰に締め、定位置の穴に尾錠を留め、鉄格子すれすれに膝立ちして上衣をかかげ持つ。淡紅色にマニキュアした指が鉄格子の外側から延び、ガチリと鳴った錠前がぶら下がった。ギッチリと締まった革具が錠前ごとに尾錠で摑まれ、二、三度前後にゆすぶられる。これはジョーゼット婦人看守のクセで、拘束具を装着したあとでは屢々こうやって確かめるのだが、やる方は何の気なしにゆすぶって見るだけとは云え、やられる身にとっては、情けなさも一しお、泌みる仕草だ。
ミシュリーヌはされるままにゆさぶられてよろけ、膝立ちを立て直して啜りあげ、背を丸めて股布をシゴキ取り、固いボタン穴に悩みつつ、留めた。
「ありがとうございました——」
「ウン。ちょっと手をお見せ」
　ジョーゼットは、今度は手錠をゆすぶる。
「えらくゆるいじゃない？」
「——すみません」
　この手錠がガタガタなのは、今朝マジョーリが緩めてくれたからで、マジョーリとベルディーヌは、そのことで口喧嘩までやった。
「あら、お前が謝ることたぁないんだけどね。ま、いいだろ。抜けやしないわ」
　ミシュリーヌは膝をそろえて畏こまり、腿におく両手首を、そっと撫でた。
　ジョーゼットはヴィヴィアンヌの前に立って、二十五年の三六〇号どころではない新入り女囚を見下ろした。まったく難場を背負いこまされたもので、ジョアンヌ女史のクジ運が弱いせいだ。
「三八七号。膝が崩れてる。直しなさい」
　ジョーゼットはおそるおそる命令し、黙って坐り直す姿にホッとしたようだ。この新入りが曲りなりにも正座していたのが不思議なくらいだった。いとも神妙な隣りの四五三号と話をした、せいかも知れない。
「ちゃんと返事しなさいッ」
　ジョーゼットは調子に乗ってキメつけた。
「はい、はい。法務事務官さま」
「重ね返事はいけないよッ。お前、もう相当に痛い目に逢わされて来たんだろ？」
「さあ——。心頭を滅却すれば火もまた涼しって言葉、御存知かしら？」
「何だって!!」

「ともかく、手向いは致しませんから、御存分になすっていいの。それから、お規則も守りますわ。もちろん、監獄法と同施行細則の範囲でね。あら、お気に障ったかしら?」

ジョーゼット婦人看守はふくらはぎをピクピクさせ、眼を白黒させた。法規でやり合ったら勝てる相手ではない。こうしてコンクリート床に正座させるのだって、ホジくれば、合法的かどうかは微妙なところだろう。この厄介な新入りの取扱いについては、ジョアンヌ女史から特に指示もされていることだ。ジョーゼットは一睨みを与えて、そのまま立ち去った。獄衣の錠を解いてやらずに放置したなら、いずれはネをあげて両手合わせることだろう。ジョーゼットはそう考えたのだったが、それは甘い考えだった。ヴィヴィアンヌは、女囚たちが帰監する直前、正座のままで平然と垂れ流してしまったのだった。

フォンティーヌが眉をしかめて舌打ちし、おシメと防水ブルマーをつけさせ、後手錠を首に吊りあげて鋭く叱りつけ、自らビンタの数発を与えて、再び叩き込んだ。

ヴィヴィアンヌの囚衣はシモーヌが洗濯してやり、身検もそこそこに女囚たちは監房入りだ。今日の労役は二時間ばかり早仕舞いだし、各監房には本錠がビシリとおろされた。

「どうしたんだろ、今日は」

「みんな行っちまいやがったよ、牢番たち」

女囚たちは、不審がった。

「残ってるのはモレシェンヌとフォンティーヌだけ。ストライキかいな」

「ホント? 嬉しいわねえ。久しぶりにヤラかそうかね、心ゆくまで堪能してやるから」

「何をヤラかすのさ? 浅間しいったら。あらま、もう匂って来てる。嘆かわしいねえ」

「へへへ。お前さん、赤札でお気の毒。なあに、ヤセ我慢張ることないんだってば。構うことないからおやりなよ。オツなもんだよ」

「ちきしょうッ。ヒガませやがるったら」

歯ぎしりして無念がるのは、ベルト股手錠の四名で、タレコミをしそうなヒガみ方だ。

「ね、ね。お姫さまをからかってやろうじゃないか。キリキリ舞いさせてやろうっと」

あばずれの一人が提案し、喚きあげた。

「担当さまあッ。三七〇号、九房三番、用便をお願い申しあげまぁす。すみません――」

飛んで来たモレシェンヌは溜息を吐き、大柄な中年女囚に両手で拝まれて眉をひそめ、規定時刻外の用便を許してやるべく、獄衣の鍵を取り出した。

「担当さま。おありがとう存じます。紙をもう一枚、頂けませんかしら?」

「駄目ッ。どこまでツケあがるのよッ。早く済ませなさい」

モレシェンヌが獄衣に施錠するや否や、代って一人が両手を合わせた。一人に許可した以上、他のものには許さないというわけには行かない。

こんどは別の監房からも嘆願の声が喚きあげ、モレシェンヌは唇を噛んだ。

「どうしたの? ああ、やっぱりね」

フォンティーヌがマットを踏んでやって来て、忽ち察して、そう云った。

「ナメられてるのよ、モレシェンヌは。さ、私が見ててやるからおやりッ」

フォンティーヌの槍玉にあげられた不運な女囚は三六三号――ヤンキー女マーサが満期出獄のあとを襲った枕探しコールガールだ。

「こら、なによッ。全然じゃないのッ。それでお仕舞いなの?」

三六三号は腰を振ったが、無い袖は振れないし、乾いたダムからは水は流れない。

「ここへおいでッ。後ろ向いて」

「あ、あッ。手錠はかんにんして――」

「文句、云うんじゃないのッ」

「あたし、恥ずかしい病気を持ってますの。ですから、お小水が近くって――。ほ、ほんとですのよ――」

フォンティーヌはもとより、女囚たちも吹き出した。裟婆での商売が商売だったから、そんなこともあろうかというものだが、そんな剱呑な病菌を持つ女なら、先ず病監で徹底的に治療してから監舎入りさせる。そんなことは近代的刑務所で落ち度のある筈もない。

「笑わせないでッ。さ、こうして反省しなさい。壁に向って正座ッ」

ガッチリと後手錠を受けた三六三号はシュンとして、壁際に膝をそろえた。

「ほかには、もういない？」

マジョーリが心服するフォンティーヌだから、さすがのあばずれたちも神妙に声なく、フォンティーヌは咽喉で笑ってモレシェンヌを促がした。

「フォンティーヌさま」

と、三五八号の無理心中片われ娘がいう。

「みなさま、今日はどうなさいましたの？なにかありまして？」

「余計なこと心配しなくていいの。静かに反省してなさい」

三十娘の女囚は、鼻を啜ってうなだれた。

「フン。二言目には反省と来るんだから。反省の神様だって忙しかろうじゃないか」

「みんなピクニックへ行ったんだろ。おバスケにサンドイッチ詰めて、歌を唄って――」

「なあにさァ、牢番女のファッションショウさ。だから、大年増とヤセッポチとが残ってるんだよ」

三六〇号が、聞えよがしに云った。

「なんだって!!」

と、フォンティーヌはきびしく振り向いて足を停め、二十五年の長期刑女囚を鋭く睨みつけた。

形だけは神妙にうなだれてはいるが、横目で隣りのアバズレと眼で笑い合いながら、舌をベロリと出す。

「チッ！」

フォンティーヌは、睨みつけて聞えよがしに舌打ちをする。

ひとつ、ぎゅうというほど締め上げてやろうかしら。わざと私たちをからかい始めるなんてもっての他だわ。こいつは長い間の牢住いで慣れてしまってんのね。慣れるっていうことはこんなときにはいいことじゃないわ。でも、こいつには少々ぐらいの懲戒じゃこたえないだろうし……。

長期刑女囚は鋭いフォンティーヌの視線を浴びて、さすがに身を縮めていた。もともとあばずれの上に、二十五年の長期刑を云いわたされ、どうでもしろとふてくされて、つい反抗的な言動をとりたくなるのだが、懲戒を受けるのはやはり辛い。鞭や、ホースで打たれればやはり痛いし、後手錠にギッチリ縛り上げられて長時間の正座なんてまっぴらだ。

「ホーッ」

フォンティーヌの靴音が去ると、思わずとび出す溜息も当然というものだ。

「たすかったわね」

「危い危い」

「もうちょっとで聞けるとこだったのにね」

「なにがさ」

「悪るうございました、看守さま。もう決して悪口は申しません。お許しを……。ビシリッ！　ヒーッ！」

「冗談じゃないよ」

「尤も、おまえさんじゃ、あんまりいただけないけどさ。やはり、同じ身をよじって悲鳴を挙げるのも、女でなくちゃね」

「オヤ。じゃ、あたいは女じゃないてえの」

「あらご免。でも、ねえ……フフ」

「覚えといでよッ！」

「ね、ねえ。制服たち、ほんとにどこへ消えたんだろ?」
「何でもさァ、事故防の講習だとかホザいてたわよ。ま、カンケないけどサ」
「ジコボーて、どんなお帽子?」
「ぷッ。笑わせないで。ま、枕探しにゃガクは要らないというものの、お帽子と来ちゃうんだから」
「お前さんは水の出が悪かったから反省してりゃいいんだ。水道局さ。やかましいねえ、いくらガチャつかせたって無駄だってば」
「教えてやろうか。ジコボーてのは事故防止のこと。分ったかい? そのお勉強さ。御苦労なこったよ、まったく」
「あら」と三五八号が声をあげる。
「護送車が事故、起したのかしら? 珠数繋ぎの手錠付きだったら助からないわ。怖い」
「ぷッ。またぞろ純情なのが現われたねえ。事故ったたって、ここはハイウェイの検問所じゃないよ。自動車や電車や交差点にはカンケないの。いいかい? つまり、あたしたちを逃しちゃいけないってこと」
「そう。ムショで事故といや、脱走と自殺が横綱格さ。もっとも、自殺するようなのは、ここへ来るまでにヤラかしてるけどね」
「要するに、あたしたちを念入りにフン縛って、おメメ皿にして、見張れってさァ。毎年一回は、偉いさんが来て一席ぶつことになってるんだから。あーあ、鉄格子が太く見えて来たじゃないかよォ」
「逃がさないぞって云われると、余計逃げたくて切ないねえ。事故防止か。あたしたち、まるで車並みジャンか」
「じゃ、そろそろアクセルを踏む?」
「フフフ。うまいこというねえ。さっき、トップギアで坂を昇ってたのにさァ、隣りの武骨女どもがモレシェンヌを呼び立てやがったもんだから——。やり直しだね。バックミラーはどう? モレ姫君はたしか近眼気味だったわね? ズボンにこんな鍵かけやがって」
　莫連女囚たちは性懲りもなく、モンペの裾をたくしあげて、ぼやき合った。
　その頃、本館の一室では、いかにも、事故防止の講話が、たけなわだった。
　大黒板には、事故についてのグラフやら数字やらが掲げられている。自殺およびその未遂、罹病および病死、逃走とその未遂、喧嘩や傷害沙汰、担当官に対する腕力反抗、一般人に対する不穏な言動——。
　法務省矯正局から派遣されたマダム・フランソワーズは云った。
「——もちろん、最も戒心しなければいけないのは逃走事故です。受刑者を逃がしてしまっては、社会に対して申しわけありません。私たちは社会防衛を第一義と考えて行動するべきです。幸い、ここではまだ、捜査発動に至った逃走事故は発生していませんが、御存知のように昨年末、ツーロンで集団逃走事故が発生しましたし、引続いて今年の初め、リヨンにおいて二名が逃げました。そして、一層厳正な執務を要請しておりました矢先、先週、ニースで、検事拘留中の女子被疑者が逃走しました。ツーロンの二人はまだ捕まっていません。ほんとうに遺憾なことです」
　本省に顔の利くコリンヌとはいえ、このあいだのソフィア事件は警察に知られていることだし、準逃走事故扱いからはずしてもらうには一苦労した。殊勲者のイヴェットとモレシェンヌは賞金を貰ったのだったが、警察に知られずに処理していたならば、臨時昇給は間違いなかったところだ。
「もちろん、女子関係のこの数字は、男子関係のものより遥かにも小さくはあります。しかし、受刑者総数の比率から見れば、すべての事故について、決して低くはありません。

一般人に対する不穏事故なんか、なんと、男子の二倍に達する率を示しています」
　職員たちの間に、驚きの声が洩れた。
「——逃走事故は、すべて監外で発生しています。つまり、監視と戒具使用のミスです。心服させておればいい、というのは理想ですし、そうあるべきですが、そんなことはいうべくして不可能ですよ。面倒がらないで、戒具は規程どおりに厳正に施して下さい。そうしてやるのが、受刑者たちにとっても、詰まるところプラスなのです。監外に在って拘束がゆるむと、ついつい、出来心というものが生じます。そして、逃走すれば、いろいろと罪を重ねる破目になり、結局は捕まって刑を加重されてしまうのです。拘束をゆるめてやることは、受刑者本人のためには決してならないのですよ。情にほだされてかりそめの自由を与えたりするのは、もってのほかです。また監外を連れて行くときなんかに、可哀想な仕打ちをしていると一般人に思われるんじゃないか、と遠慮することはありません。堂々と胸を張って、監視をきびしくして欲しいものです。おろかな大衆の感傷など、少しも気にしなくていいのです。繰返しますけど、被拘禁者を完全に拘束するのが私たちの天職ですし、そうあってこそ初めて、社会防衛と正義とが貫かれるというものなのです」
　マダム・フランソワーズは大見得を切り、なおも細かい点を、いろいろと注意するのであった——。
　クリスチーヌは満期出獄を三日後に控え、喜々として本館へ移されて行った。
　ミシュリーヌは軽いお説教の後、一週間ぶりで監房に戻された。そして、ヴィヴィアンヌの観察期間は二週間に延ばされ、さらに一週間延伸され、第十一房の最前席は長いこと空席のままであった。

（未完）

十一月号を読んで

＜「憎縄の記」について想うこと＞

黒井珍平

今月は書かないつもりでしたが、十一月号の寺宇治久美さんのお手紙をよみ、書きたくなりました。

その前に〝夜の徒然草〟に小生の〝煉獄〟について触れられてあったので〝憎縄の記〟との関連もあり、少し言わせて戴きたいと思います。

まず、中宮栄氏の提供される写真には、どういうものかぞっこん参っている者の一人でして、私の太ももフェティシズムと、しばり方がぴったりするのです。そして他の方々と違い、その出所がアイマイモコとしてさっぱり判らず、ということは二三九頁の下三段〝往日秘蔵してあったが、ワイフとなった高潔な女性の手で焚書にされ……〟という〝文〟と、二四四頁下三段〝夫婦でSMプレイをしました……よんでいて楽しいではないか〟という〝文〟と、どう繋がらしていただけばよいのか。それなれば私が〝女性は必ずMになる〟というのは迷信か。ひいては女性の心理というものを妻を実験台として、探って書いている〝煉獄〟は、私としては嘘いつわりのない有りのままの世界であり、ただ、Mになってくれない妻へのあてつけに〝煉獄〟を書き、妻の悪口を書きなぐっている訳ではなく、書くことによって読者にも自分の弱点をつかまれることもはっきりする訳で、あくまで〝煉獄〟というテーマにピリオッドをうっただけで、もう書かないとはいわなかったつもりです。

死ぬの殺すのといっても、人間はそうカンタンに一を選ぶ訳にもいかず、奇クを通じてこんな夫婦もあるということは、SMで仲好い夫婦ばかりの例（これもよいが）の中にあって、一つぐらいはこういう例があってもよいのではないかと思い。書いている訳なのです。不快な方には申訳ありませんが……。

奇クの読者の内、奇クを妻に見せない人、見せても協力を得られない人、そんな必要を感じていない人、というふうに分類してみたなら、SMプレイをしましたという包みかくしのない喜びの便り（中宮氏の言う、私にも嬉しい便り）の出来る人の数は、はるかに低いパーセンティージになるのではないか。

「週刊文春」までは持って帰るが、「週刊現代」は家に持込めないサラリーマンもある話をききました。吉行氏の〃砂の上の植物群〃を妻に読ませられないなどという亭主もあると聞きます。いわゆるエリート・サラリーマン。公序良俗に生き、せっせと立身出世なさる方々の群なのでしょう。僕には人間性を失った羊のムレにしかみえません……我田引水でしょうが。

中宮氏の文中の「フイルムがまっくろけ」論はどういうのか意味がわかりかねます。もし私を指したのであれば、何か打算的引退でもしたととられたのであるか？　私の悲観グセはたしかにオーバーでしょうが、しかしこれも嘘を書く訳にいかず、感じたままを正直に書いているのです。愚にもつかないことかどうか知りませんが〃憎縄の記〃に書かれたような世界は〃一年〃ですが、私は〃十年〃の年月で、これに似た世界を送っているものの一人として、夫婦というもの、男と女の違いを、むしろ、読者中の大先輩たち諸公からご教示を戴きたくて（まるきり反応はありませんが）書いているようなものです。直接、中宮氏と文通でも出来れば嬉しいのですが、妻によって奇クとも文通不可能な状態にあっては、ままになりません。

さて「憎縄の記」。よくぞ載せて下った。これぞ真実の叫び声であろうと思い、意見を述べます。

最初に読んだ時、たしかにむかっときました。読後、あまりに私の妻の心理とそっくりなので、妻がフィクションでも送ったのかと一瞬思ったくらい。第二回目、しんみりと読みました。失礼な言い方ですが、他のSM肯定小説以上に興奮しました。迫力を感じたのです。ここにSM心理のどうにもならない真実の断面を見せられた想いがしました。そして、女性の心理（妻を通してしか知らないのですが）が実によく出ている。

夫は、しばる趣味があるとデート中にいってくれなかった、とおっしゃる。これは、言えません。これを云わなかった〃夫〃の気持はわからないではありません。しかし、夫、男としてのみにくさを、私はこの手紙でズバリと指摘された想いで、呻っています。妻も全く同じようなことをいいました。

そっ直にさえいってくれたら、嫌なことでも我慢するのに……というこの方の文は、そっくり私にもあてはまります。正当化するつもりではないのに、ついこの方の夫のような態度をとったかも知れません。深く反省させられました。弁護する訳ではありませんが、あなたが出ていって二度と帰らないとして、せいせいされるかどうかは知りません。しかし、独善的ではあるが、この夫は、妻をただ肉塊としてしばり、喜んでいるのではないはずです。やはり、〃愛の表現〃なのです。あなたに去られた夫は、おそらく、生死をさまよう気持になるのではないでしょうか。

ただ、ずっと奇クを読んでいるものの一人として、いって置きたいことは、編集部が、「M性のない女は、女の資格がない」などいうことを肯定していると感ずるのは、あなたの誤解だということです。そんなことは決してないはずです。奇クの中には、かずかずの悦びとともに、嘆き、否定論も堂々と載っています。又本当に身にしみて〃SM〃や〃奇ク〃に嫌悪を持たれる方々（私の妻も全く同じ）は、軽々しく〃悪書追放〃運動などには加わらないのではないか、という私の推測が見当違いでなかったことを、この方の抗議文の中にも見出した思いです。私の妻も、白ポ

ストなどは嫌だと云っています。
　SMプレイをたのしむ方々でも、全部の人が、奥さまは〝M〟だとは、ハッキリ表明なさっている訳ではない。つまり、妻の側からの発言が少ないのです。この〝文〟がはじめてではないかと思います。例の運動（悪書追放）に本気で取り組んでおられる方の投稿があったら、青少年のためにも本当はいいのではないでしょうか。ディスカッションするのです。でも、これはムリでしょうね。
　もし私の妻が投稿したら「憎縄の記」と同じような文になるでしょう。ただ、十年の年月と、二人の子供を抱えた場合の発言ですから、自然とニュアンスが違ってくるでしょうが。私の妻は、自分の友人に私のS性をヒナンする手紙を書き、私にみせたことがありましたが、寺宇治さんと同じように、SMを単純にエロと解釈しているらしいのです。この方も、文献誌を性誌にせよといっておられますが、私は、これもこの方や妻の誤解だといいたいのです。
　SMは〝性以前のもの〟というか、食欲、金銭欲、性欲、その他、さまざまの本能的欲望の一項目として〝SM欲〟とでも名づけて考えても、よいぐらいのものだと思います。その上でないと説明がつかないのではないでしょうか。
　ともかく、しばる、即ち、女を愛情でなくおもちゃにする。SMイコールエロというような、単純な即断と誤解は、不本意で悲しむべき現象だと思います。そこのところがふっきれないので、いつまでたってもくい違いはずんずん深まって行くのでしょう。
　悲しいことですが、妻がMでなくてはならないと、本心から希んでいるS男はどのくらいの割合いを占めているでしょう。殆んどの人がそうではない、といえると思います。本当のMの女性につかまったら、S男は逃げだすのではないでしょうか。三島由紀夫氏のいう〝SMはなれ合いである〟という発言はある程度、正しいと思います。
　しかし、ノーマルな妻はSMプレイを嫌悪する。それをあえて続ければ、夫は加害者の立場になる。そして、これは許されない。ではどうすれば好いのか。ここに私自身の問題があり、未だに解決がつかずに居ります。（奇クの大先輩たちは、堂々とその壁をうち破って、自信をもって味のある、ペーソスのある諸作品を書いておられるのですが……）
　私の妻は、ことあるごとにマゾヒトスの女と結婚しろといいますが、私には、この私の愛妻一人が生命であり、その愛妻がしばられることを嫌悪する以上、何年でも辛抱づよく待つか、諦めの境地に至るか、私の本能の変化を待つかしか方法はないと思います。そのことが、夫婦を息苦しい生活に追い込むとしても……。
　したがって「憎縄の記」に書かれた範囲内に於ては、妻からみた夫の行動が、いかに独りよがりで、いかにせっかちに映ったとしても、私のような、自分自身がカベを突き破れないでいる者にとっては、どちらへも同情の念が湧いて、どちらを支持する訳にも行かない恰好になってしまうのです。
　〝女をしばって愛するのが好き、とはわからない心情〟でしょうが、私には、いかなるバリゾーゲンを浴びても一言の反論もし得ないのです。しかし、悲しいかな〝地球は動く〟式に、妻をしばって愛するときには、本当に可愛いと思い、有頂天になる男も一部には実在するのです。
　もしあなたの心の隅に、夫に対する〝愛〟

が本当に残っていれば、いつかは判ってくださるのではないでしょうか。Mでない妻とSである夫との夫婦生活が成り立つとすれば、その原動力は〝愛〟以外にはないでしょう。

私の妻は〝とっくに愛を失った〟といいます。事実でしょう。それでも、なんとか一年中の大部分は波風も立たずに過し、ときには後手だけには括らせてくれる時もあります。

〝我慢だわね〟〝なれ合いなのネ〟などという妻。そしてSM心理はわからない妻。女の心理、一寸、よくわかりませんが、あなたのように女としても、主婦としても、お若い方は、ハイさようならで済むかも知れませんが結婚後十年ともなると、別れるという言葉の意味もいささか深刻です。

あなたの書かれたものを論ずるとすれば、あなたのご主人の云い分も聞かないと出来ないことでしょうが、一人よがりであったろうことは想像出来ますし、私の気持から推してご主人は、あなたを世界中でたった一人の女性と考えていられたのだろうと、想像することも出来ます。こういう枠を平気で破れる方、妻がぐずぐずいうのなら外でいくらでも……と考え、実行出来る性質の方からみれば、実に馬鹿げた、情けない、みじめな男とわらわれそうな夫ですが、妻にとっては最高のことではないのでしょうか。

大江健三郎氏が書かれたもので、共産主義国の社会でSM性の夫婦はどうなっているかという文がありました。人間である以上、主義、思想に関係なく、こういう欲望を待つ人も居ることでしょうが、どこどこまでも、妻とむつまじく暮したいのは人情というものでしょう。だからこそ、夫婦間に通じ合えないものがあれば、カタストロフがくる。私の場合、この性癖がある故に、自分も苦しみ、いつまでも、妻との力比べが続くのかも知れません。あまり長々しいのでこの辺で止めようと思います。

最後に、奇クサロンに〝疎外者の悲哀〟を書かれた粂田満様。歯がゆいといわれるのは判りますが、夜乃探郎氏や、保藤久人氏にアタルのは大人気ない。仲よく結び合って行こうではないですか。時の流れに押されるのは仕方ないことでしょう。〝奇ク〟その他がみんな姿を消したときには、日本人の一人一人が、再び国家に依って統制され監視される日ではないでしょうか。万国博に外人が来る機会に、又、悪書から、ヌードの入った軟派誌まで追放しようという動きが、万国博事務局で始められているとか。どんな新手の運動であるのか知りませんが、我々の世界は、やはり我々の手で守るより他はないのではないでしょうか。明治百年（昭和維新）ムード、万国博に依るインタナショナルムードに流されつつある現在、溜息が出そうです。金子光晴先生の詩の世界のように……。

暗いところにいる者には恐ろしいものもよく見える。インサイダーには何も見えないかも知れません。前進する、かげのない、いさましい日本しか見ようとしない人達も沢山居ることは、史実が証明しています。〝どんな時、どんなことがあり、どんな人が、どんな立場でどうしたか〟――岩波新書〝昭和史〟にも現われています。

統制のもとには思想の自由はないでしょうし、我々個人のささやかな希求など、勿論、無造作に踏みにじられることでしょう。平和をおびやかす悲しい事実が背景として、そこにそびえているのが、ハッキリと見えるようです。世相に敏感なのは、むしろ我々のような世界に居るもの、といえないでしょうか。

ピンク映画シナリオ（団鬼六・提供）
製作・ヤマベ・プロダクション

奴隷妻
（どれいづま）

脚本・団鬼六
監督・岸信太郎

登場人物

義雄　青山一郎
健作　伊海田弘
春江　松宮ゆき
朱美　辰見のり子
沼田　山本昌平
西村　槇直樹
井上　沢田実

1　田舎の駅前

義雄が旅行鞄を持ち、人待ち顔に立っている。
旅行鞄を持った春江が、息せき切って走って来る。

義雄　あ、お嬢さん。
春江　やっと抜け出せたわ。さ、行きましょう。
義雄　はあ。
春江　どうしたの、元気がないわね。
義雄　色々お世話になった上州屋さんを裏切ったと思うと——
春江　今更、何いってんのよ。私、父の作った借金のために死ぬ程嫌な男と結婚させられるのよ。貴方だけが頼みじゃないの。
義雄　はあ。
春江　早く行かないと追手が来るかも知れないわ。
義雄　じゃ、僕、切符を買って来ます。ここで待って下さい。

2　切符売場近く

義雄、小走りにやって来て、ハッと立ち上る。義雄の父親の辰造が怒りに顔を歪めて立っている。
義雄　お、お父さん。
辰造　義雄、貴様、上州屋のお嬢さんをそそのかして、一体、どこへ逃げる気なんだ。
義雄　そそのかしたなんて、そんな。お嬢

さんはね、死ぬ程嫌な男と結婚させられるんだ。だから、僕は――。

辰造　そんな事がお前と何の関係がある。上州屋さんにはお前も俺も大恩があるのを忘れたのか。

義雄　――

辰造　さ、来るんだ。俺と一緒に上州屋さんの所へ行って謝るんだ。

義雄　嫌だっ、あんまり皆んな、勝手過ぎるよっ。

辰造　何だと、こいつ。

辰造、義雄の襟首をつかむ。義雄、逃げようと身悶えしながら大声で、

義雄　お嬢さん！

3　駅前

春江、不安な表情で立っている。

上州屋の長男、信太郎が走って来る。

春江　あ、兄さん。

信太郎　お父さんが心配している。さ、帰ろう。

春江　嫌よ、誰があんな家に――

信太郎　春江っ。

春江、逃げ出す。

それを追った信太郎、うしろから春江の肩をつかむ。

春江　嫌よ、離してっ。

信太郎　うちの者がどうなってもいいというのか。春江！

春江　（必死に悶えながら）義雄さんっ。

4　山道（数年後）

箱根の山々が見渡せる山道を義雄が旅行鞄を持って歩いている。

小鳥が囀っている。

農夫が通りかかる。

義雄　あの――一寸、お伺いしますが――

農夫　ああ、何だね。

義雄　山東園という温泉旅館は――

農夫　ああ、山東園かね。この道を真っ直ぐに行けばすぐにわかるよ。

義雄　そうですか。どうも有難うございました。

義雄、農夫に頭を下げ、歩き出す。

5　山東園玄関

義雄　ごめん下さい。

玄関の敷台の上に立った義雄、旅館の中に声をかける。

ロビーのソファに居睡りしている女中の町子が、義雄の眼に映じる。

旅館の表も、内部も、静寂な空気に包まれてロビーの柱時計が、単調な音を立てている。

義雄　ごめん下さい。

居睡りしていた町子、ふと眼を覚まし、玄関に立っている義雄を見て、

町子　あ、いらっしゃいまし。

と、あわてて出て来る。

町子　いらっしゃいまし。さ、お荷物を。

（と、義雄の荷物を取ろうとする）

義雄　あの、僕は──。

町子　はあ？

義雄　ここの奥様からお手紙を頂いて、福島から出て参ったのですが──。

町子　ああ、運転手さんなのね。

義雄　はい。川村義雄と申します。

町子　そう。私はここの女中で町子。ま、お上んなさいよ。

6 ロビー

ロビーのソファに、義雄、恐縮した物腰で坐る。

町子、テーブルの上に散らかっているのものを片づけながら、

町子　シーズン・オフで、この所、旅館は閑なのよ。あんた、ここの奥さんと同じ故郷（くに）の人だってね。

義雄　はあ、父が奥様の御実家の運転手をしていたんです。

町子　ま、すると、あんた、親子二代にわたっての運転手なのね。

義雄　（微笑する）

町子　でも、ここの奥さんの実家というのは破産したんでしょう。随分と以前に。

義雄　ええ、上州屋といいましてね。昔は立派な穀物問屋だったのですが──

町子　あの、今、奥様は。

町子　ああ、一寸待っていてね。今、伝えて来るわ。

町子、二階へ上って行く。

7 同・二階、廊下

町子、歩いて来ると、襖の前に膝を折り、

町子　あの、奥様。

8 同・春江の部屋

艶めかしい夜具の上で、夫の瀬川健作と抱擁し合っている春江。

表の方から、町子の声がする。

町子の声　あの、奥様。おいでになりますか。

健作の愛撫を受けていた春江、町子の声に気づいてハッとする。

春江　貴方、町子さんが。

健作から、体を離そうとする春江。しかし、健作は強引に春江を抱擁したまま。

健作　いいじゃないか。あわてる事はないさ。

健作、笑いながら、身を離そうとする春江を押さえつけるようにし、

健作　何だ、町子。用があるなら、ここへ入って来い。

春江　いけませんわ。貴方、こんな所を、町子さんに。お願い、離して下さい。

健作　（笑って）町子の奴、閑さえあれば寝てばかりいやがる。一寸、眼を覚まさせてやるんだ。

健作、ニヤニヤして、激しく身を揉む春江を押さえこみ、

健作　町子、いいから、ここへ入って来い。

春江　駄目っ、駄目よ。町子さん！

9 同・廊下

町子、小首をかしげるようにして、そっと襖をあける。

春江の白い肢が、健作の肢とからみ合っているのをふと眼にした町子、ギョッとして襖を閉める。

健作の声　どうしたんだ町子、早く入って来いよ。ハハハ。

10 客間

卓の前に、どっかとあぐらを組んで坐った健作。丹前の懐から煙草を取り出す。

その前に、先程から正座して坐っていた義雄。マッチをすり、健作が口にした煙草に

火をつける。

健作、フーと煙を吐きながら、義雄を見て、

健作　年はいくつだ。

義雄　二十五です。

健作　酒とか煙草は？

義雄　やりません。

健作　ほう。今の若者にしちゃ、珍らしいね。もっぱら女の方が専門ってわけか？

義雄　はあ？（意味のわからぬ表情）

健作　ハハハ、ま、いい。君は、親父の代から女房の実家に使われていたそうだね。

義雄　はあ、親父も私も、トラックの運転手をしておりました。随分と面倒を見て頂いたんです。

健作　俺は逆に実家の面倒を見させられたよ。俺にいわすなれば女房の実家は厄病神だったな。破産するなら、何故もっと早く破産してくれなかったと恨んでいるんだ。

義雄　（不思議そうな表情で、健作を見る）

健作　二千万近くも融資させられて、結果、元も子もとれずじまい。今の女房はその担保（かた）にもらったようなものだが、ちと高くつき過ぎたね。ハハハ。

義雄　（眼をパチパチさせる）

健作　どうした。ハハハ。随分とひどい事いう男だと驚いたんだろう。あけっぴろげなのが俺の性格なんだ。気にするな。

健作、義雄の複雑な表情を見て、笑いつづける。

春江の声　失礼致します。

襖が開いて、和服姿の春江が入って来る。

義雄、懐かしげに春江を見上げる。

義雄　（手をつくようにして）お久しぶりでございます。奥様。その節は、色々と御厄介になりまして。

春江　（冷たい容貌に、微笑を浮べて）お変りありませんか。お父さんは？

義雄　はい。最近、山の方で、養鶏所のようなものを始めまして。

春江　そう。それは、よかったわ。

春江、義雄に何かいいかけるが、健作に気兼ねしたようにその場へ坐る。

健作　さ、俺は出かけるぞ。

健作、立ち上る。

春江　どこへいらっしゃるんですか？

健作　一時に観光業者に会わなきゃならないんだ。（義雄を見て）そうだ、早速で悪いが、君、湯本の方まで車を運転してくれないか。

義雄　はい。
春江　でも、貴方、義雄さんは今着いた所で疲れていらっしゃるわ。
義雄　いえ、大丈夫です。体だけは自信がありますから。
健作　ハハハ、若い奴はそうでなくちゃいかん。
健作、立ち上って部屋を出て行く。
二人きりになった義雄と春江、ふと視線が合う。
義雄　奥様、どうして私をここへ――。
春江　義雄さん。私、貴方にどうしても、もう一度、逢いたかったのよ。色々、聞いて頂きたい事が――。
健作の声　おい、春江、何してるんだ、早く着がえを出せよ。
春江　ハ、ハイ。
春江、あわてて立ち上る。

11　山東園　玄関近く

義雄、自動車（トヨペット）を掃除している。
背広姿の健作、悠然とした足どりで歩いて来る。
春江が健作の鞄を持ってあとについて来る。
義雄、自動車のドアを開け、頭を下げる。
健作が乗りこむと、義雄、春江の手から鞄を受取り、
義雄　それでは奥様、行って参ります。
春江　早速でごめんなさいね。
義雄、運転席に乗り、エンジンをかける。
走って行く自動車を春江、不安げな表情で見送る。

12　山道を走る自動車

13　同、自動車の内部

健作、ポケットから煙草を取出しながら、運転する義雄に話しかける。
健作　な、君。春江の奴は俺と一緒になってから東京へ逃げ出した事があるんだ。ようやく見つけて引きずり戻したが、芸者をやってやがるんだ。俺と一緒にいるより、芸者をしていた方が気が楽なんだろうかね。
義雄　（硬化した表情）
健作　君は春江の実家の上州屋で、昔、何か不始末な事をしたんじゃないか。
義雄　（狼狽して）いいえ、別に――ど、どうしてですか。
健作　ハハハ、何となくそんな気がしたからさ。（煙草に火をつけて）な、君、忠実な部下は主人の秘密を守る事だ。わかるね。
義雄　はあ？
健作　そこの松林の所で車を止めろ。

14　松林の近く

自動車（トヨペット）、止る。
松林の中から、頭にネッカチーフを巻いた若い女（朱美）が出て来る。
健作、車窓を開けて、
健作　おい、早く乗れよ。
朱実、小走りにやって来て、車に乗る。
義雄、不可解な表情をする。
健作　さて、予定は変更だ。真鶴海岸へやってくれ。
義雄　真鶴ですか。
健作　そう。海岸ぶちに落着いた旅館があるんだ。君はそこから帰っていい。
義雄、不快な顔つきでハンドルを握る。走り出す自動車。

15　真鶴の旅館の一室

浴衣姿の朱実が、鏡の前で化粧している。
襖が開いて、浴場から戻って来たらしい健作、手拭を投げ出すと、ふざけるように朱実の肩を抱きしめる。
朱実　（甘く拒否して）ううん、あわてちゃ駄目。

健作、夜具の上に朱実を押し倒し、接吻する。

朱実　ねえ、さっきの運転手さん。むっつり黙りこんで何だか感じ悪いわ。

健作　そうかね。あいつは女房と同じ故郷の人間さ。女房が頼むんで今日から使ってやってるんだよ。

朱実　へえ。それじゃ、奥さんの味方でしょ。貴方と私の事、きっと奥さんに告げ口するわよ。

健作　かまうもんか。そこが俺の狙いさ。女房の奴をいらいらさせてやる。ハハハ。

朱実　貴方って変な人ね。

健作　一種のサジストってのだろうな。春江の奴をいじめると俺はたまらなく愉快になるんだよ。

朱実　奥さんに何度も逃げられる筈だわ。

健作　（キラリと眼を光らせて）今度来た運転手も油断のならない奴だ。奴は昔、春江ときっと何かある。そうでなければ、春江がしつこく使ってくれという筈がない。お前の兄の手下に頼んで、少し痛めつけるようにいっといたが。

朱実　こわい人ね。若旦那って人は。

健作　ハハハ、そうでもないさ。まあ、いってみれば、それだけ女房に惚れているってわけさ。

朱実　（すねて）うん何だかんだいっても結局は奥さんを愛しているんだわ。

健作　ハハハ、ま、そういう事になるかな。怒るな、怒るな。

朱実　口惜しいわ。憎い人――。

朱実、健作にしがみつき、濃厚な愛欲図絵を展開させていく。

16　海岸近くの道

義雄の運転する自動車、停車する。

義雄、車から出て来ると、海の方へ歩き出す。

砂辺に腰をかけた義雄、石を拾って海へ投げこむ。

考えこむ。

駐車させてある自動車の傍をオープンカーが通りかかり停車する。

やくざ風の男、西村と井上が乗っている。

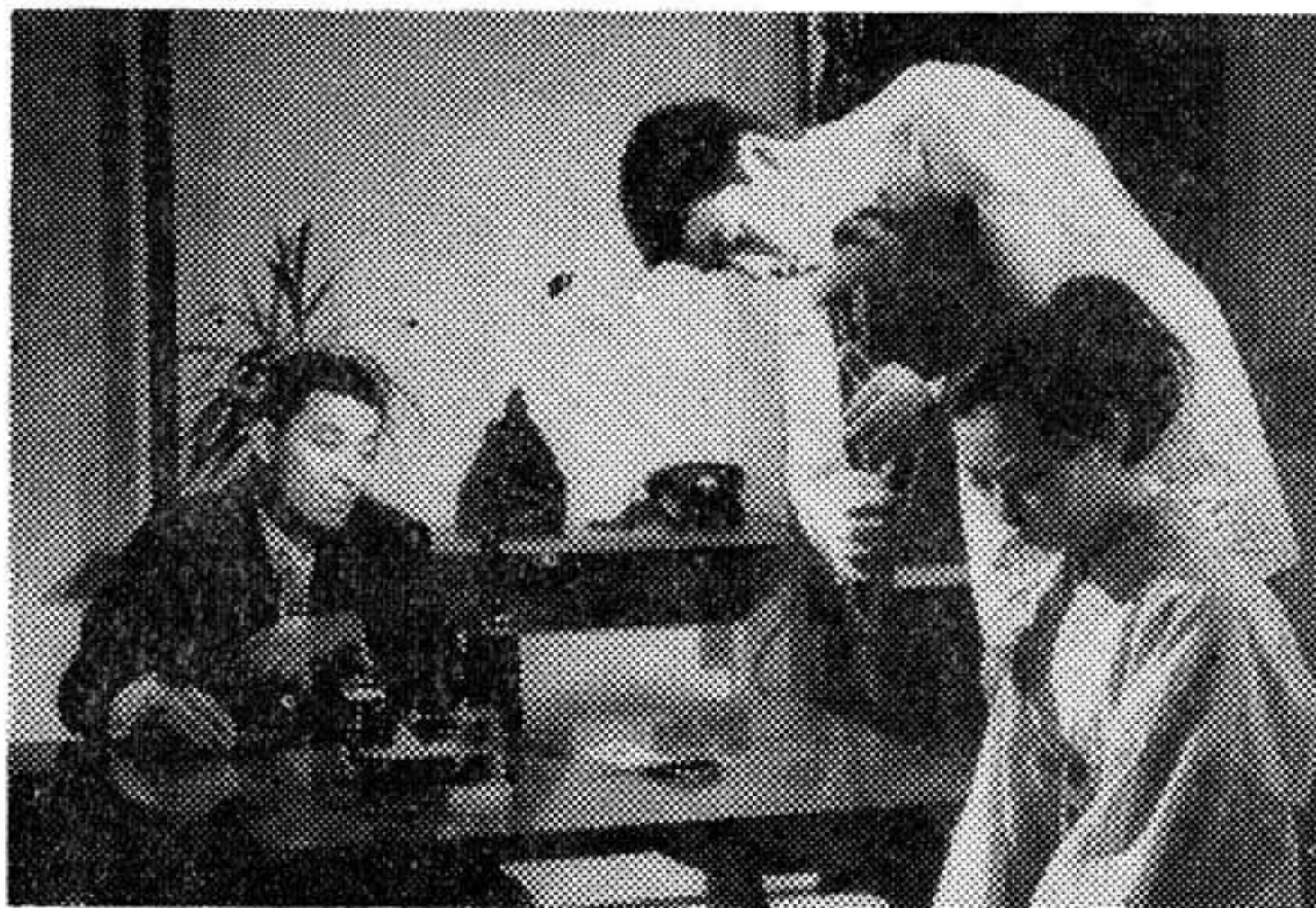
井上　兄貴、山東園の車だぜ。

西村と井上、オープンカーを降り、自動車の傍へ歩いて来る。車窓の中をのぞいて、

西村　誰もいねえや。

井上　なあ、兄貴。この運転手を痛めつけろってのはどういうわけなんだろ。

西村　山東園の若旦那は、気違だよ。何を思ってんのかわけがわからんねえ。

ま、銭（ぜに）になる事だからな、文句はいわねえようにしようぜ。
海岸の方から、義雄が思いつめた表情で、のっそり戻って来る。
井　上　兄貴、来たぜ、あの野郎だろ。
西村と、井上、自動車（トヨペット）に背をもたれさせ歩いて来た義雄に侮蔑的な視線を投げつける。
西　村　こんな所へ車を置きゃ通行の邪魔だよ、とんま野郎！
義　雄　（むっとするが押さえて）どうも、すみません。
と、車の中へ入ろうとする。
西村の足が義雄の足をひっかける。
地面に転倒する義雄。
西村と井上、笑い出す。
義　雄　（立ち上って）あんた達、俺に何の恨みがあるんだ。
西　村　（ニヤリとして）やるか、この野郎。丁度、退屈していたところなんだ。
西村、いきなり、義雄の顎にアッパーを入れる。義雄、吹っ飛び、自動車のボディにたたきつけられる。次に井上が、義雄の胸倉をとって引起し肩先へ空手打を喰わし、足で蹴り上げる。地面に転倒する義雄。
西　村　久しぶりに気分が晴れたぜ。
井　上　へっへへ、兄貴、行こうか。
西村と井上、自分達の車へ戻って行く。
地面に這いつくばっている義雄、落ちている棒切れを見つけ、それを手にするとフラフラ、立ち上る。

義　雄　（待てっ）
西村と井上、振り返る。
義雄、剣士のように声をはりあげ、突進すると、井上の頭に電光石火の早業で棒切を振りおろす。
悲鳴をあげた井上。頭を両手でおさえ、ひっくり返る。
西　村　くそっ。
西村、義雄の殺気に慄えながら、ナイフを抜く。
再び、声をあげて突進した義雄、西村の小手を棒で打ち、ナイフをたたき落す。
あわてた西村の脳天を棒が一撃、地面に吹っ飛ぶ西村。
義雄、大きく肩で息しながら、棒を地面に投げ捨てると車に戻る。
西村と井上、うめきながら地面をのたうっている。
自動車（トヨペット）、走って行く。

17　酒場、黒猫

軽快なレコードの音楽。
マスターの沼田（バーテンの服を着ている）大きな口を開けて、カウンターの中で笑い出す。
スタンドに坐っているのは、頭に膏薬をは

った井上と手に縛帯を巻いた西村で、浮かぬ顔つき、二人とも、ピーナツを口へほりこんでいる。

沼田　そりゃ相手は剣道の有段者だぜ。えらい奴にぶつかったもんだな（面白そうに笑う）。

西村　そう笑わねえでくれよ、兄貴――いや、マスター。

沼田　だが、山東園も仲々面白い運転手を雇ったもんじゃねえか。それだけ腕が立ちゃ、逆に用人棒が務まるぜ。ハハハ、

沼田、シエッカーを振り始める。

井上　畜生、あの野郎、今度逢ったらただじゃおかねえからな。

沼田　ま、そう力むな。お前達は、もうカー公の足を洗ったんだ。この店の用人棒だけしてりゃいい。表で、下手な喧嘩するんじゃねえぞ。

井上　へえ、どうもすみません、兄貴（面目なさそうに頭を下げる）。

沼田　兄貴なんていい方はよせ、俺はこの店のマスターだ。

酒場のドアが開いて、朱実が入って来る。

沼田　（ニコニコして）よ、おかえり。

朱実　（スタンドに坐って）ああ、疲れちゃった。何か一杯、頂載よ。

沼田　大分、お楽しみが過ぎたんじゃねえか。

朱実　あいつ、しつこくて、しつこくて、胸くそが悪いったら、ありしゃないよ。

沼田　ぜいたくいうなよ。月、五万円の特別手当が寝るだけで頂けるんじゃないか。女って重宝なもんだぜ（笑う）。

朱実　ふん、情婦の兄になりすましてそれを絞り取ろうとするのがいるんだから、男って奴はこわいよ。（ふと西村達を見て）ちょっと、あんた達、どうしたのよ、怪我なんかして。

沼田　おめえの旦那のいいつけで運転手にいちゃもんをつけてよ、逆にのされてやがるんだ。ざまぁねえや。

朱実　ええ、あの運転手に――へえ、あいつがそんなに強いとは思わなかったわ。人は見かけによらないものね。

西村と井上、酸っぱい表情でビールを飲む。

ボックスの客の相手をしていた女給の景子、スタンドへ来て、

景子　マスター、ボックスのお客、お会計を頼みます。

沼田　あいよ、（メモしながら）ビール三本にカクテル二つ、オードブル一皿か。えーと二万五千円だ。

西村、値段だけ書いた勘定書を景子に渡す。

ボックスに戻った景子。女給の一人と抱き合ってふざけている客に勘定書を見せる。

景子　お願い致します。

客　（酔眼を勘定書に向けて）二千五百円か。割と安いじゃないか、この店は。

景子　（甘えかかって）あら、御冗談おっしゃっちゃ嫌。もっと、はっきり御覧になって。

景子、客に体をすりよせて。

景子　二万と五千円、ね、おわかりになって。

客　ええ？（と眼をこすりながら勘定書を見直す）冗談じゃないよ、君。ビールの三本や四本ぐらいで、どうしてこんなべらぼうな値段になるんだふざけるな。

カウンターの沼田、西村と井上に眼くばせをする。

二人、うなずいて立ち上る。

沼田、朱実の肩をつく。

沼田　今夜は、これで店じまいだ。二階へ来ねえか。

朱実、うなずいて、沼田のあとに続く。

ボックスの方では、西村と井上が仕事にかかっている。

椅子から立上って「人をなめるのもいいかげんにしろ」などと女給に当り散らしている客の肩をたたいた西村。

西村　よお、この店にケチをつけに来たのかよ、おっさん。

井上、客の胸をついて椅子へ腰かけさせる。

西村、テーブルの上に尻を乗せる。

井上　散々、飲み食いしやがって、銭を払わねえというのかよ。

西村　はっきり話をつけようじゃねえか、え、おい。

女給達、そっぽを向いて、煙草をくゆらせながら二人の用人棒に任せて、ボックスから引揚げ始める。

18　同酒場の二階

沼田と朱実、夜具の上で激しく抱擁し合っている。

やがて——朱実から体を離した沼田、灰皿を引寄せ煙草に火をつける。

朱実、余韻を楽しむかのよう沼田の裸の背に頬をすり寄せる。

沼田　（冷ややかに）よ、出しなよ。

朱実　ええ？

沼田　おめえの旦那が下すったものさ。今日は支払日なんだろ。

朱実　変ないい方——はい、お兄様。

朱実、枕元のハンドバックに手をのばして札を取り出す。

朱実の出して五万円を沼田、眼を細めて数え、布団の下へ押し入れる。

朱実　（煙草を口にして）ね、昔のように、どうして威勢よく仕事をしないの。俺の女房を寝取りやがったとしめあげりゃ、あの男、五十や百万ぐらい吐き出すかも知れないのに。

沼田　馬鹿いうな、俺はやくざの足は洗ってるんだぜ。山東園の若旦那はいいお得意様だ。おめえを俺の妹にして、気長にコツコツ稼がせてもらった方が気が楽だ。第一恐喝（かつあげ）に出たところであの男、一筋縄じゃいかねえよ。

朱実　へえ、随分と弱気になったものね。

沼田　弱気になったんじゃねえ（ニヤニヤして）俺は俺で、色々と楽しみがあるんだ。

沼田、上体を起し上衣のポケットから封筒を取出し、その中より写真を何枚か出す。

朱実　何よ、それ。

朱実、沼田がニヤニヤして眺めている写真を横からのぞきこんで。
朱　実　何だヌード写真じゃないの。へえ、きれいな体しているわね。
沼　田　朱実、これ誰だかわかるか――おめえのスポンサー、瀬川健作の奥方だよ。
朱　実　ええ？　まさか。
沼　田　あの奥方はな、一度、山東園を逃げ出して東京で芸者をやっていた事があるんだ、その時、待合へ遊びに行った俺の昔の友達公がよ、あんまりいい女だってんで、酒の中へ薬を入れたんだな。
朱　実　あんたの仲間のやりそうな事ね。
沼　田　薬で眠らせてから裸にして、こういう写真をとったってわけさ。このネガにゃ元手がかかってらぁ。あの奥方から相当に稼がせてもらわなきゃぁね。
朱　実　相変らず、悪い奴だね、あんたって人は。
沼　田　悪いのは今に始まった事じゃねえや。フフフ、おめえは、山東園の旦那様、俺は山東園の奥方様。お互に仲良く喰いついたってわけさ。面白いじゃないか、え、朱実。
沼田、ニヤニヤしながら立上り、服を着始める。

19　山東園　居間（朝）

健作と春江が朝食をとっている。
春　江　貴方、おかわりは。
健　作　もういい（茶碗を置く）
春　江　（冷たく）昨夜は何処へお泊りでしたの。
健　作　（陰湿な微笑をして）気になるかね。
春江、黙って食卓の上のものを片づけ始める。
健　作　運転手の川村に、聞いてみちゃどうだ。（ニヤニヤ春江の表情を観察している。）
春　江　使用人に聞くなんて、そんなはしたない事は出来ませんわ。
襖が開いて、女中の町子が入って来る。
町　子　お早ようございます。お手紙がこれだけ来ておりますが―。
町子、何通かの手紙を健作の傍へ置き、頭を下げて出て行く。
健作、手紙の束を取上げる。
健　作　寿観光――OK旅行社――おや、これは、お前宛だぞ。
健作、手紙の一通を春江の膝の上に、ほり投げる。
春江、手紙の裏を返すが差出人の名はない。不審な表情で春江が封を切ると一枚の写真が出て来る。彼女自身のヌード。
春江、ギョッとする。
健作、ふと、春江の顔を見て、
健　作　どうした春江、馬鹿に顔色が悪いじゃないか。
春　江　（あわてて手紙を袂に入れる）
健　作　どこからの手紙だ、それは。
春　江　はあ、あの、女学校時代の友達なんです。
健　作　一寸、見せなさい。
春　江　（狼狽して）あの他愛のない昔の事を書いてるんです。貴方には興味のない事ですわ。
健　作　いいから見せなさい。（手を出す）
襖の向こうから町子の声がする。
町子の声　あの旦那様。
健　作　何だ。
町子の声　寿観光の山吹さんからお電話なんですが。

健作　そうか、よし。

健作、立ち上って出て行く。

春江、ほっとして、窓辺へ寄り、袂からも一度、封筒を出す。写真をとり出し、細かく引裂く。封筒から、一枚の手紙が出て来る。

手紙の文字〝この写真の事で、御相談致したく、近くお電話申上げます〟。

春江、青ざめる。

20　同、山東園の庭

春江、池の中の鯉を、ぼんやり眺めている。苦痛を噛みしめている春江の横顔。

縁先に町子が小走りでやって来る。

町子　奥様、お電話です。

春江　（硬化した表情）ど、どなたから。

町子　それが奥様、名前をおっしゃらないんですよ。

春江、青ざめる。

21　同、山東園・ロビー

春江、電話の受話器をとる。

春江　もしもし――あの、どなた様でしょうか。

22　酒場・黒猫

がらんとした薄暗い昼間の店内。

沼田、煙草をくわえながら電話している。

沼田　（電話）お手紙で予告しておいた筈なんですけどね（ニヤリとして）写真ごらんになって頂けましたか。早速ですがね、奥さん――。

23　山東園　ロビー

春江、慄えながら、受話器を耳に当てている。

沼田の電話の声　湯河原の月見荘っていう旅館に三時、きっかり来てほしいんです。お越しにならないとあの写真、あちこちバラまくという段どりになっているんですがね。

春江　（慄える）

沼田の声　もしもし、聞こえてるんですか。

春江　わ、わかりました。

春江、電話を切ると、ふらふらソファに坐りこむ。

その辺を掃除していた女中の君子。春江の血の気の失せた横顔を不審に思い、

君子　奥様、どうなさったのですか。お顔の色が――。

春江　（力のない微笑して）何でもないのよ。一寸、頭が痛いだけ。

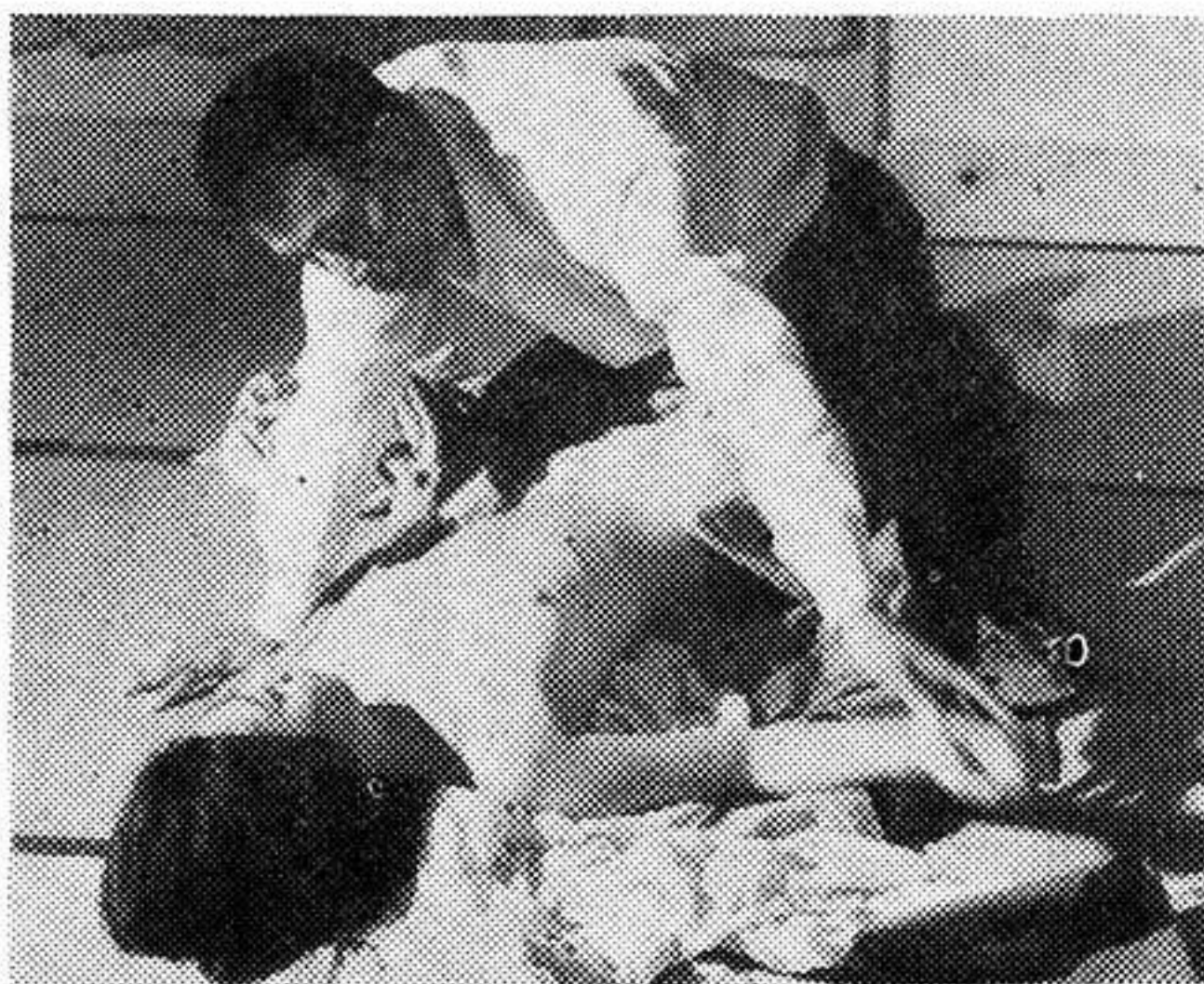
君子　お薬をお持ちしましょうか。

春江　いいのよ。それより君子さん、旦那様は？

君子　もうとっくに、自動車でお出かけになりましたわ。

春江　そう（微笑して）おかしな人ね、私に告げず家を飛出す事があるのよ。

君子　（ふと玄関の方を見て）ああ、川村さんが帰って来ましたわ。

義雄、手袋を外しながら玄関に入って来る。

義　雄　（春江に）只今、戻りました。
春　江　（微笑して）御苦労様。如何が、少しは仕事に馴れまして。
義　雄　は、何とか。あの、旦那様は寿観光の山吹社長と夕食をして、それから御帰宅の予定です。
春　江　そう。（腕時計を見て）お疲れのところ悪いけど、義雄さん。
義　雄　は？
　女中の君子が二階へ上って行くのを見て、
春　江　これから湯河原まで、私を送って下さらない。
義　雄　（ふと不審そうな顔つきになるが）はい、かしこまりました。

24　**走る自動車の中**

春江、じっと思いつめた表情で、うしろのシートに坐っている。
義雄、ハンドルを動かしながら、
義　雄　奥様、気を悪くしないで下さい。
春　江　ええ？
義　雄　僕はどうも、奥様の御主人が好きになれそうじゃないんです。
春　江　――。
義　雄　それに奥様は今、どうしても幸せだとは思えない。昔の奥様は、ほんとに明るい方だったのに、今は何か、暗い陰が――。
春　江　義雄さん。一寸、この辺で車を止めて下さらない。少し景色が見たいの。

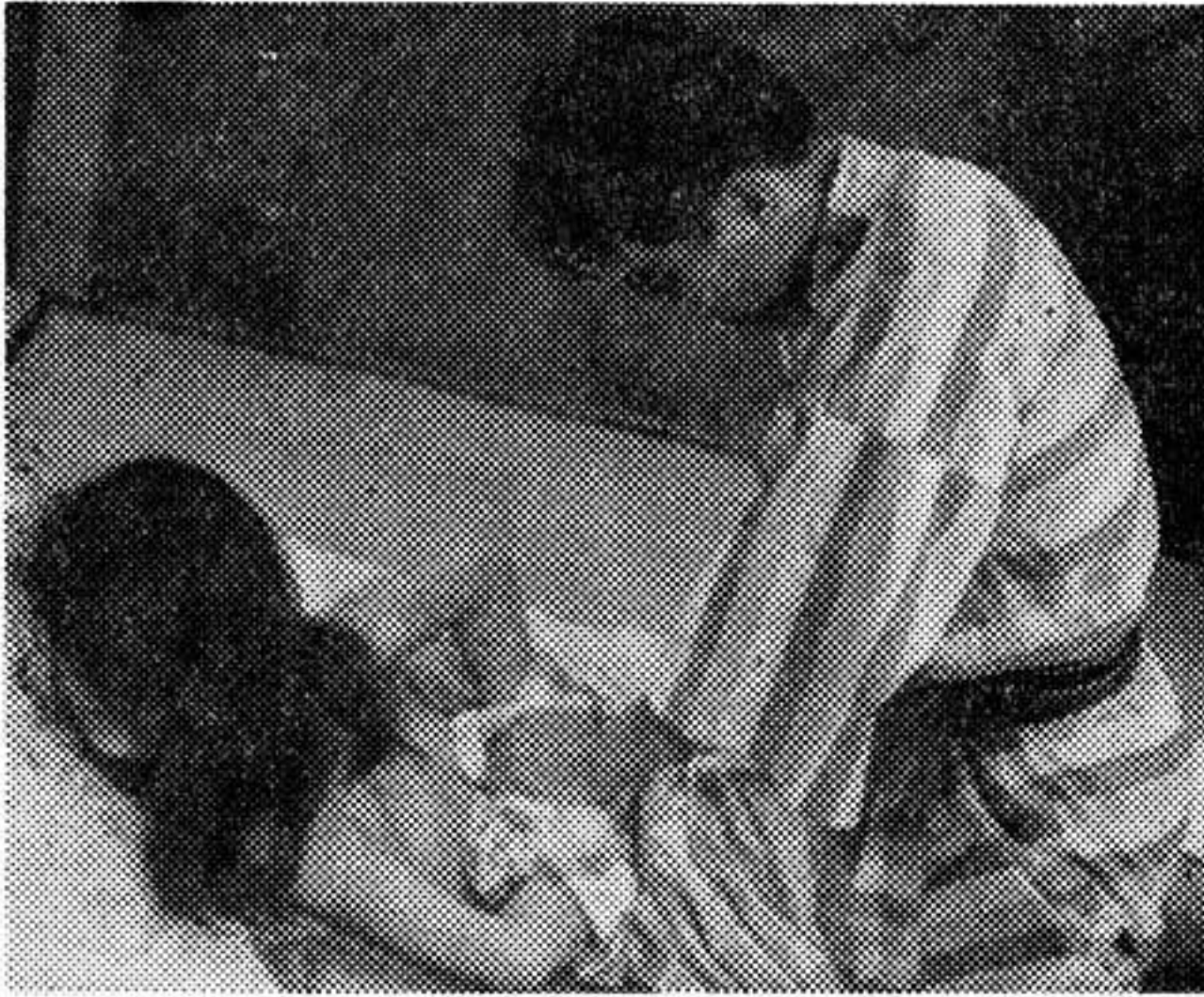
25　**原生林の近く**

自動車、止まる。
運転席から降りて来た義雄、自動車のドアを開ける。
春　江　ね、義雄さん。少し、散歩してみない。
春江、先に歩き出す。
義雄、そんな春江の行動を解しかねていたが、自動車のドアをぴしゃりと閉め、春江のあとに続く。

26　**遠景の見える丘**

春江、丘の上に立って周囲の景色を眺めている。
春　江　私ね、義雄さん。今、自分の一番楽しい時は、こうして遠くの景色を眺めている時なの。私が自分に戻るのは、その時だけかも知れないわ。
義雄、離れた所に立って複雑な気分で春江を見ている。
春江、義雄の方を見て微笑する。
春　江　義雄さん、運命って皮肉なものね。あの時、義雄さんが私を連れて逃げていてくれれば、こんな地獄の苦しみを味あわなくてもすんだのに。
義　雄　――。
春　江　あの時、私、父や兄から、ひどくぶたれたわ。よりにもよって、使用人の息子などと……って。フフフ。
義　雄　僕も親父から三日間、なぐられ、顔がフットボールみたいに腫れました。
　二人、顔を見合わせて笑い合う。
春　江　ねえ、義雄さん、もし私が今、貴方に、どこかへ連れて逃げてといったら――。
義　雄　ええ？
春　江　（笑って）冗談よ。そんな事したら今度は二人とも殺されてしまうかも知れないわ。私、義雄さんが傍にいてくれるだけで満足なの。
義　雄　――。
春　江　今の私は、瀬川健作の妻じゃなくて奴隷なのよ。父が大変なお金を彼から借りてしまったためにね。瀬川は変質なのよ。でも、貴方が傍にいて

くれれば私、私（すすり上げる）。

義雄　――奥様。

春江　（涙をふいて）御苦労様。私、ここから一人で行くわ。貴方は山東園へ戻って下さい。

義雄　いえ、お供します。何だか奥様が気がかりなんです。

春江　お願い。今日は私を一人にしておいてほしいの。じゃね。

春江、一人で坂の方へ歩き出す。

義雄、茫然と立ちすくみ、春江の後姿を見送っている。

27　旅館、月見荘、その一室

春江、硬化した表情で畳に坐っている。卓の前で、ニヤニヤしながらビールを飲む沼田。

沼田　ま、そんな堅苦しくならずに、どうです。一杯。

春江　いくら出せば、あの写真、全部を譲って下さるんです。

沼田　何もそう急がなくてもいいじゃありませんか。さ、どうぞ。

沼田、ビールを手にして春江にすすめる。

春江　（憎悪のこもった瞳を向け）結構ですわ。また、昔のように薬が入っていると困りますもの。

沼田　ハハハ、こいつは参った。

沼田、内ポケットから何枚かの写真を出し、眼の前の春江と見くらべるようにして口元を歪める。

沼田　だが、奥さん、薬を飲ませて女を裸にして、写真をとるとは、大した悪党もいるもんですね。もっとも、油断した女の方も悪かったんだが。

春江　（口惜しげに唇を噛みしめる）

沼田　こいつは僕の秘蔵品だ。毎晩、抱いて寝てるんですよ。

沼田、写真を卓の上に置く。

春江、たまらなくなって突然、写真をひったくり、ズタズタに引裂いてしまう。

沼田　ハハハ、破ったって無駄ですよ、奥さん。こっちに原板があり、こんなものは何枚でも焼つけが出来るんですからね。

春江、震える手でハンドバッグから札束を取出す。

春江　ここに十万円あります。ここで原板を譲って下さい。

沼田　お譲りしたいんだが、あの原板は十万や二十万のはした金で手に入れたもんじゃないんでね。

春江　いくら払えばいいんです。はっきりおっしゃって下さい。

沼田　金も欲しいが、俺の本当のお目当ては。

沼田、春江の手を握る。

春江　な、何をするんです。

春江、沼田の手を振り切り、立ち上る。

襖を開けると、西村と井上が、廊下からの

っそり入って来る。
春　江　あっ。
沼　田　いいじゃないか、え、奥さん。
沼田、うしろから春江の肩に手をかける。
春江、沼田の頬をぶつ。
沼田、ニヤリと口元を歪める。
沼　田　下手に出りゃいい気になりやがって。なめた真似しやがると、俺達は本性をむき出すぜ。
春　江　（わなわな慄える）
沼　田　今は大家の若奥様かも知れねえが、芸者をやっていた時代だってあるんだろ。お高くとまるねえ。
沼田、春江に襲いかかる。
西村と井上、顔を見合わして、ニヤニヤしている。
春江、畳に転倒しながら必死に抵抗している。
春　江　やめて、やめて下さいっ。
沼　田　おめえの旦那だって、結構、楽しんでるんだぜ。え、何も、遠慮する事はねえよ。
春江、沼田の手に噛みつく。
沼　田　痛えっ。畜生、こうなりゃ、俺達がどんな風に女(スケ)をものにするか教えてやる。井上っ。
井　上　へえ。
沼　田　おめえ達、この奥様を素っ裸に剝ぎな。
井　上　へえ（ごくりと唾をのみこむ）
沼　田　早くしねえか。
井上と西村。沼田にかわって、春江に襲いかかる。
悲鳴を上げ、狂乱したように悶える春江。
沼田。部屋の隅に立ち、春江に噛まれた手をさすりながら、二人の男に衣類を剝ぎ取られていく春江を、楽しそうに見ている。
沼　田　かまう事はねえ。生まれたままの裸にするんだ。
長襦袢姿にされて逃げまどう春江を夜具の敷いてある次の間へ追いつめた西村と井上、遂に、二人がかりで春江の下着まで剝ぎとってしまった。
全裸にされた春江、乳房を両手で押さえ夜具の上に俯伏し、泣きじゃくっている。
沼　田　（吸っていた煙草を灰皿へねじこむと）よし、お前達、外へ出ていろ。
西　村　へへへ、兄貴、あとで俺達にもお裾分けを――。
沼　田　馬鹿野郎。その辺のズベ公を相手にしてるんじゃねえ。山東園の奥様なんだぜ。
沼田、泣きじゃくっている春江に近づき、裸の肩に手をかける。
ポカンと口をあけて、入口あたりに立っている西村と井上に気づいた沼田、顔を、しかめる。
沼　田　出て行かねえか、馬鹿野郎！
二人があわてて出て行くと、沼田、野獣のように春江の上に襲いかぶさる。
春江、両手で顔を覆い隠し、屈辱の涙を流しつづける。
沼　田　へへへ、奥さん、今日はお家へは帰えさねえぜ。

28　海の見える松並木

走って来た自動車、急停車する。
車窓から首を出す義雄。
砂丘の向こうに春江が海を見て、立っている。
義雄、あわてて車から降りる。
春江、海へ向かって歩き始める。
義雄、ハッとして走り出す。

29　海　岸

砂を蹴って走る義雄。
義　雄　奥様！

春江、海の中へ入って行く。
義雄、春江を追って、海の中へ走りこむ。
春江の体に義雄、しがみつく。
義雄　奥様、な、なんて事をするんです。
春江　お願い、義雄さん。私を、私を死なせて頂戴っ。

30　砂　丘

春江、砂丘の上にくずれるようにして泣きじゃくっている。
義雄、茫然と立ちすくみ、春江を見下している。
春江　義雄さん、私、私、もう駄目なの。
義雄　――。
春江　もう私には生きていく気力がないわ。私は生きながら地獄へ落ちてしまったのよ。
義雄　その写真は、黒猫という酒場の主人が握ってるのですね。
春江　（激しくすすり上げて）馬鹿だったわ。私、馬鹿だったわ。
義雄　奥様、とにかく今日は家（うち）へ帰って下さい。御主人がとても心配して――。
春江　嫌っ嫌、もう瀬川の所へは帰りたくないわ。もう帰れないじゃありませんか。

義雄、苦しい表情して、春江の傍に坐りこむ。
春江　義雄さん、お願い、私を連れてここから逃げて。
義雄　（狼狽して）な、何をいうんです、奥様。
春江、義雄に抱きつく。

春江　一日だけでもいい、私、幸せになりたいのよ。義雄さん、私を救って。
義雄　（春江を抱きしめながら）奥様、僕は昔から死ぬ程奥様が好きでした。
春江　そうなら、義雄さん。お願い、私と一緒に――。
義雄　しかし、今の僕に、どうして奥様を幸せにする力が――。
春江　ああ、義雄さん。
春江と義雄、激しく抱擁し合いながら砂の上にくずれ落ちる。

31　走る自動者の中

運転する義雄の横に春江、魂を失ったような表情で坐っている。
義雄　あと二三日の辛抱です。僕は、必ず写真のネガを奴等から取り戻しますよ。
春江、空虚な眼をしばたきながら、
春江　もう、そんなこと、どうだっていいわ。
義雄　しっかりして下さい、奥様。
春江　私、変質者の夫に殺されるかも知れない。
義雄　何をいうんです。――とにかく、あのネガだけはどうしても取返さなけ

ればいけません。

春江、義雄の肩に疲れ切ったように頬をもたれさせる。

義　雄　僕が、僕がついてますよ、奥様。

32　山東園　居間

健作、焦躁の色を瞳に浮かべ、一人でウイスキーを飲んでいる。

自棄（やけ）になったようにウイスキーをあふり、グラスを壁へたたきつけると、フラフラする足を踏みしめて立ち上る。

33　同、山東園ロビー

女中の町子と君子が、せんべいを噛みながら、しゃべっている。

町　子　とうとう奥さん、昨日、帰らなかったけれど、一体どうしたのかしら。若旦那はカンカンよ。傍へ寄りつけないぐらいだわ。

君　子　川村さんが今朝早くから探し廻ってるんだけど――困ったものね。

町子と君子、ふと、階段の方を見て、肩をすくめる。

陰険な顔つきになった健作がフラフラ階段を降りて来たのだ。

健　作　（女中達を見て、ギョロリと眼を向く）貴様達、春江の居場所を俺に隠しているんだな。

町　子　とんでもない、何をおっしゃるんです、旦那様。

健　作　うそをつくなっ。

健作、ロビーの椅子を足で蹴倒す。

女中二人、悲鳴をあげて逃げる。

町子、ふと、玄関の方を見て、

町　子　あ、奥様。

玄関に春江が焦悴した表情で入って来る。

そのあとに、義雄が――。

健作、眼をつりあげて玄関へ近づき、

健　作　どこへ行っていた、春江っ。

春　江　申訳ございません。

健　作　どこへ行ったかと聞いてるんだ。

義　雄　あの実は――。

健　作　お前には聞いとらん。横から口を出すな。

義　雄　は。

健　作　そうだ、川村。お前これからすぐ東京へ行ってくれ。OK旅行社に、この旅館のパンフレットをとどけるんだ。

義　雄　あの、それは今日でなければ駄目でしょうか。

義雄、不安げな表情で春江の横顔を見る。

健　作　急を要するのだ。すぐに行ってくれ。

34　同、二階の廊下

酔った足を踏みしめるようにして歩く健作のあとを春江が悄然と、うなだれて行く。

健作、自分の部屋の襖を開けると、春江の肩に手をかけ、中へ突き入れる。

35　同、健作の部屋

健作に突き飛ばされた春江、畳にフラフラと手をつく。

健　作　さあ、いえ。昨日はどこで何をして来た。

春　江　（うなだれる）

健　作　いえないのか。大体の事はお前の顔に書いてあるぜ。

健作、いきなり、足で春江の肩先を蹴り上げる。

悲鳴をあげて、春江、畳につんのめる。

健　作　口でいえなきゃ、体で聞いてやる。着物を脱ぐんだ。

春　江　（ハッとして健作を見上げる）

健　作　どうした。着物を脱げといってるんだ。

健作、再び春江を足で蹴る。

畳に手をついた春江、屈辱の涙を流しなが

ら立ち上る。

空虚な眼を上の方に向けながら、春江、帯を解き始める。帯や腰紐が、とぐろを巻くように落下していく。

健作、アルコールに濁った眼をじっと春江に向けている。

長襦袢を肩から春江が外し始めると、健作押入れを開け、ロープを取出す。

春江、両手で乳房を抱きながら、軽く瞑目し、観念しきって立っている。

健作、ロープを手にして近づくと、うしろから春江の肩を突く。

健作　今日の折檻は、ちっと骨身にこたえるぞ、いいな。

春江　(瞑目したまま)お好きなようになさって下さいまし。

健作　よし、両手をうしろへ廻すんだ。

春江、乳房を押さえていた手を、うしろへ静かに廻し出す。

健作、何かに憑かれたような血走った顔つきで、春江を後手に縛り上げていく。

36　酒場、黒猫の二階

沼田と朱実が布団の上で、濃厚な抱擁をつづけている。

朱実　一寸、あんた、浮気したね。

沼田　へえ、よくわかったね。

朱実　あんたとは五年も連れ添っているんだよ。そういう事は、すぐにわかるわ。一体、誰よ、相手は。

沼田　へへへ、それがまた、すばらしい女なんだ。色が白くて、ポチャポチャッとしてよ。

朱実　よくもまあ、ぬけぬけと(ふと気づいて)もしやあんた、山東園の——。

沼田　いい勘だ。あの写真をネタにしてよ。へへへ、これから当分、俺は、あの奥方に喰いつけるってわけさ。ま、仲良くやっていこうじゃないか、朱実。

朱実　口惜しい、この悪党っ。

朱実、沼田にしがみつく。

沼田、笑いながら、朱実をいなしている。

階下のドアをたたく音。

沼田　何だ、ありゃ。

37　同、階下の酒場

誰かが酒場のドアを表からたたいている。

ネグリジェ姿の朱実が二階から不快な表情で降りて来る。

朱実　どなた、もうお店は看板なんですけど。

健作の声　朱実、俺だ。一寸、開けてくれ。

朱実　まあ、若旦那。

朱実、あわててドアの内鍵を外す。

泥酔に近い健作が入って来る。

朱実　どうしたんですよ、若旦那。こんなにおそく。

健作　どうもこうもないんだ、朱実。春江の奴が、浮気をしやがった。

朱実　ええ、奥さんが浮気を？　フフフ、ま、お坐りになってよ。若旦那。

朱実、健作をスタンドに坐らせる。

二階から沼田がバーテンの服を着て降りて来る。

沼田　どうなさったんです、若旦那。

沼田、棚からウイスキーをとって注ぐ。

朱実　奥さんがよろめいたんですって、兄さん。

沼田　ええ、奥さんが？

健作　(ウイスキーを一息に飲んで、すわった眼つきをし)くそ、春江の奴、この際、思い知らせてやる。——な朱実、俺に一寸、考えがあるんだ。一緒に山東園に来てくれ。

朱実　だって、若旦那。

沼田　行きなよ、朱実。わざわざここまで

来て下さったんじゃないか。

朱実 (沼田の方へ舌を出すような顔つきをして)じゃ、兄さん。一寸、着がえてくるから若旦那、お願いね。

朱実、二階へ上って行く。

沼田、健作のコップに、ウイスキーを注ぐ。

沼田 人は見かけによらぬものといいますがねえ、まさかあの奥さんがねえ。

38 山東園の前

タクシーが止り、健作と朱実、肩を抱き合うようにして、フラフラ出て来る。

39 同・山東園、二階の廊下

健作、朱実の肩に手をかけ、酒飲み特有のうるさい調子で歩いてくる。

朱実 ねえ、私、こわいわ。何だか敵陣に乗りこんだみたいで。

健作 女中達はとっくに寝ているよ。何も気兼ねいらん。

朱実 でも、奥さんは?

健作 女房か、女房は今、お仕置の真最中だ。ハハハ。

40 同・健作の部屋

襖が開いて、健作と朱美が入って来る。

艶めかしい夜具がちゃんと敷かれてある。

健作、朱実の頬に接吻して、

健作 今夜は、ここで寝るんだぞ、朱実。いいな。

朱実 いいの、こんな事して。

健作 早く服を脱げよ。

朱実、ブラウスやスカートを脱いで、スリップ姿になりながら、しゃっくりをして、

朱実 何だかこわいな。私、奥さんに絞め殺されるんじゃないかしら。

朱実、ふと床の間を見て、あっと声を上げる。

床の間の柱を背にして、湯文字の春江が立ったまま縛りつけられているのだ。

きびしく口に猿轡をかまされている春江。必死に顔をそむけ、屈辱に肩を慄わせている。

健作 ハハハ、お前を絞め殺されないよう、女房はこの通り、がんじがらめにしてある。大丈夫だ。

朱実 (唖然としている)

健作、床の間の春江の傍へ寄り、春江の顎に手をかけて、ぐいと顔を正面に上げさせる。

健作 一日家をあけた罰として、こいつはどのような折檻をも受けると覚悟したんだ。(朱実に)それで俺は考えた。こいつの前でお前を抱いてやる。どうだい、こいつは素ばらしいプランだろう。

屈辱にすすり上げている春江の猿轡を健作は外して、春江の耳をひっぱる。

健作 おい春江。何とかいってみろ。いく

らお前が俺に別れてくれと頼んでも、俺は絶対にお前を離さん。俺はお前に惚れているんだからな。

健作、異常者めいた笑いかたをし、急にけわしい表情になると、いきなり春江の頬を一発、二発、平手打ちする。

次に、朱実の所へ戻った健作、ぴったりと朱実に寄り添い、頬を押しつけ合うようにして、さらし者になっている春江を見上げる。

朱実も、春江の肉体を凝視して、

朱実　きれいな体をしているわ。

健作　そうだろ。何しろ、二千万からの金がかかった女房だからな。ハハハ。

春江、羞恥に身悶えしながら、二人より眼をそらせている。

健作　おい、春江、こっちを向くんだ。

春江　（すすり泣く）

健作　こっちを向くんだ、春江。

春江、涙にうるんだ瞳を二人の方へ向ける。

健作　いいか、春江、しっかり見ているんだぞ。

健作、朱実を夜具の上に押し倒し、激しく抱擁し始める。

健作の技巧に、煽られ、巻きこまれ、甘い声を口から出す朱実。

春江の頬に屈辱の口惜し涙が伝わる。

41　地下室の倉庫、その前

春江、縄尻を健作にとられて引き立てられて来る。

あとから、旅館の浴衣を着た朱実、紙袋を手にし、面白そうについて来る。

健作、倉庫の扉を開けて春江の背をつく。

春江、ぞっとして立ちすくむ。

健作　亭主を踏みにじった罰として、今日から当分、この中で暮すんだ。

朱実　フフフ、まるで奴隷じゃない。

健作　お前がこの倉庫で暮す間、俺は、この朱実と暮す。つまり、お前の代用だ。ハハハ。

春江　貴方は、貴方は気が狂ってるのだわ。

健作、カッとして春江の頬を、ぴしゃりと引っぱだく。

健作　そういう口をきく事は許さん。現在、お前は俺の奴隷なんだ。いいか。さ、入れ。

健作、春江の裸の背を押す。

42　同・倉庫の内部

鉄柱を背にして春江は立たされ、健作と朱実に、別のロープでヒシヒシと縄がけされている。

仕事をすませて立ち上った健作、ギラギラする眼で春江を凝視し、満足げに微笑する。

そんな健作の横に朱実、立って、

朱実　フフフ、ねえ、いいの、奥さんをこんなひどい目に会わせて。

健作　俺は、こいつに心底から惚れている。惚れているからこそ、こいつが憎いんだ。

朱実　変な理屈だわね。

健作　朱実、あれを出せ。

朱実　悪い趣味よ。若旦那。

朱実、持って来た紙袋の中からバタフライを取り出す。

健作　それを奴隷につけてやってくれ。

朱実　ハイハイ。まるで私も奴隷みたいね。

朱実、それを手に持って、春江に近づく。

春江の表情、ひきつる。

朱実　奥さん。これ、私が踊り子をやっていた昔、使っていたものよ。これを奥さんに取りつけるんですって。

春江　嫌っ嫌、馬鹿な事はやめてっ。

健作　（狂気めいた笑い方をして）朱実のものを身につけて、うんと口惜しがるがいい。泣け、わめけ。ハハハ。

朱実、春江の前に身をかがめて、湯文字の紐をゆっくり解き始める。

春江　（狂乱して）やめてっ、お願いっ。嫌、嫌っ。

43　山東園の前

義雄の運転する自動車、止まる。

車から降りた義雄、急ぎ足で玄関へ入って行く。

44　倉庫の中

健作と朱実、笑いこけている。

バタフライを身につけた春江、屈辱に打ちのめされたよう、がっくりと首を落している。

健作、倉庫の隅の棚から、薦（こも）包みを取り、日本刀を引っ張り出す。

朱実　そんな物騒なものは、おやめなさいよ。

健作　こいつは、兄が戦地で使った日本刀だ。よく切れるぞ。

健作、刀を鞘から抜くと、刃を春江の眼前に持って行く。そんな行為を重ねる事によって、残虐性の倒錯した悦びを健作は味わっているのだ。

春江　お願いです。それで、それで一思いに殺して下さい。

健作　冗談いうな。貴様の体には二千万からの金がかかってる。も一つ残念な事には、俺はお前を愛している。なかなか殺せるものか。

春江　（声をあげて泣きじゃくる）

45　倉庫の表

義雄、そっと近づいて、扉の間から中をのぞく。

義雄の眼に、日本刀の背で、鉄柱に縛りつけた春江の体のあちこちを軽くたたき、ニヤニヤしている健作の姿が映ずる。

義雄、ハッとして、扉を開ける。

46　同・倉庫の中

驚いて振り返る健作と朱実。

春江　（悲痛な表情）――義雄さん！

健作、残忍な色を眼に浮べて、

健作　貴様。誰の許可を得て、ここへ入って。

義雄　あ、あんたは、気狂いだ。気狂いのそばにもうこれ以上、奥様を置いておくわけにはいかない。

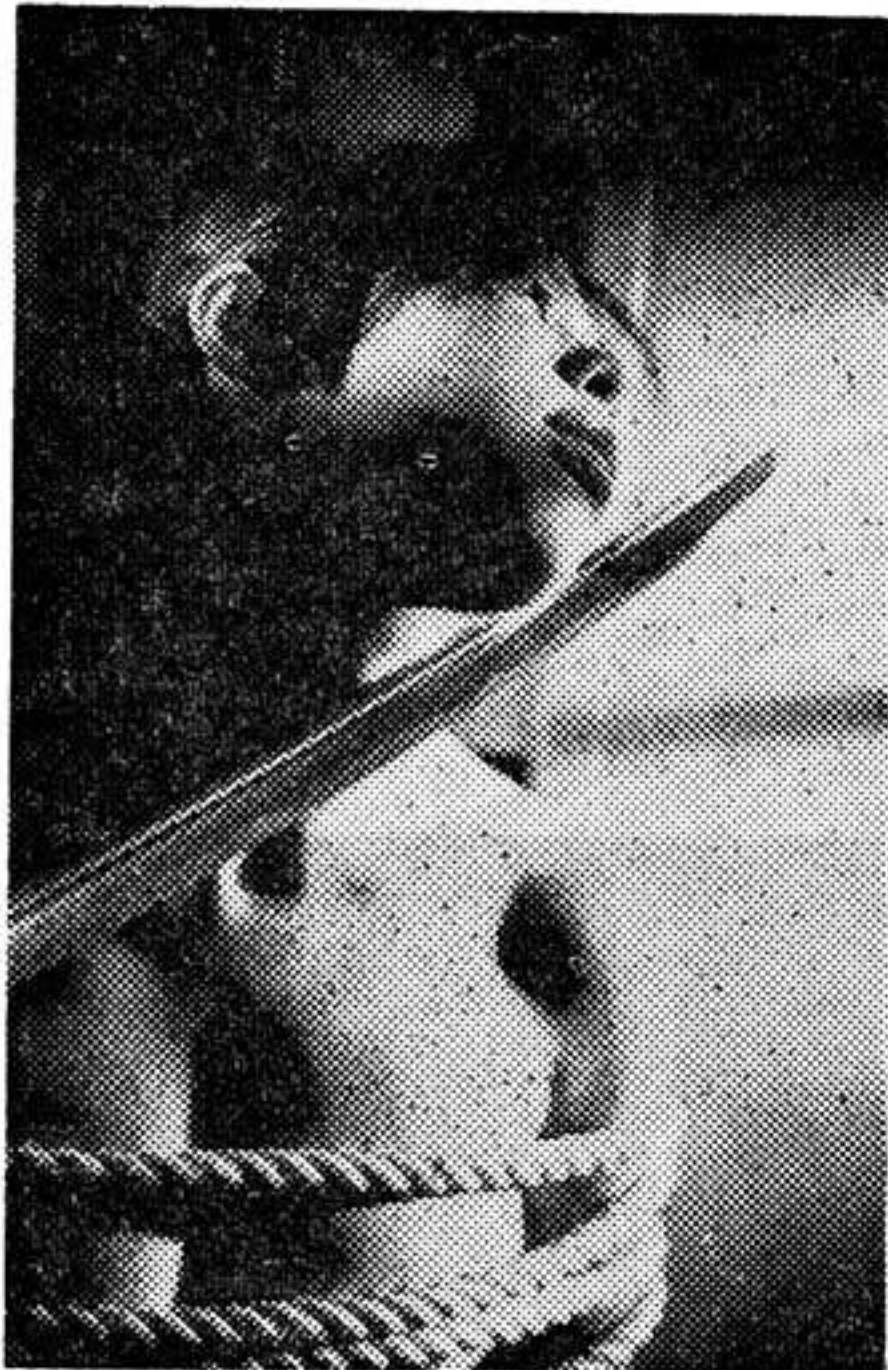
健作　何だと。

健作、手にしていた日本刀を振りあげる。

春江　あっ、危いっ。

健作の振り下した刀を危うくかわして、義雄、健作に飛びかかる。二人、土間に転がって、取っ組み合う。義雄、健作の手から刀をもぎとり、足で健作を蹴飛ばす。

朱実、隅でおろおろして見ている。

健作、水ガメを取り上げ、起き上ろうとす

る義雄の頭上に大きく振りかざす。

春江の悲鳴。

義雄　衝動的に日本刀を突き出す。切先が、健作の胸をえぐる。健作、うめいて土間にくずれ落ちる。

絶命した健作を見て、朱実、悲鳴をあげて外に飛び出して行く。

義雄も、白眼をむいている健作を見て、ギョッとする。

義雄　――しまった。と、とんでもない事を――。

と、義雄、ぺたりと尻もちをつくが、すぐに刀を杖にして立ち、春江の縄を切る。

両手で胸を押さえ、さも羞しげに膝まずく春江の背に自分の背広をかぶせた義雄は、

義雄　奥様、ど、ど、どうしよう。僕は、僕は、若旦那を――。

春江　義雄さん。逃げましょう。それより方法はないわ。

義雄　ああ、奥様。

義雄と春江、抱き合って泣き出す。

47　山道（明け方）

木影で、沼田と朱実、、それに西村の三人が焚火をしている。

沼田　朱実、川村と春江は、ほんとにずらかる相談をしていたんだな。

朱実　（硬化した顔で、うなずく）

沼田　それなら間違いなく、ここを通る筈だ。

朱実　ここで待伏せてどうするの。

沼田　きまってるじゃねえか。ここで、とっつかまえるんだよ。金づるに逃げられてたまるか。

西村　川村が健作を殺らしてくれたんで、兄貴に運が向いてきましたね。

沼田　そうさ。川村は警察へ渡しゃそれで片がつく。あの未亡人は、これで山東園の実権を握る事になるんだ。未亡人は俺達のいいなり放題。たっぷり山東園の生き血を吸い上げる事が出来るってわけだぜ。

朱実　（皮肉めいたいい方で）頭がいいよ、あんたって人は。

沼田　おい、朱実。おめえ、川村が若旦那を刺したのをみたんだろ。警察へ行って、はっきり証言しなきゃいけねえぜ。山東園未亡人には何のおとがめもねえようにな。

西村　それにしても、おそいな。ね、兄貴、あの二人、まさか心中て事は。

沼田　（ギョッとして）そんな事になってみろ。俺達は元も子もなくすようなもんだ。

山道の向こうから、井上が走って来る。

井上　兄貴、来た、来た、来たぜっ。

48　走る自動車の中

義雄、運転している。

その横に、ネッカチーフを巻いた洋装の春江、坐っている。

春江　私、ようやく自由の身になったのだ

わ。

義雄　追われる身ですよ。僕のために奥様はとんでもない苦労をしなきゃならないんだ。

春江　何をいうの。全部、私の故（せい）じゃありませんか。私、逃亡者でも満足よ。ほんの一瞬でもいい、幸せな時があるなら。

春江、義雄の肩に顔を埋める。

義雄、そんな春江に頬ずりしたが、前方を見て、ハッと緊張する。

沼田、西村、井上の三人が、両手を上げて、車に止まるよう合図し、道の中央に立ちはだかっているのだ。

春江、彼等に気づいて、冷たく、

春江　あの男達だわ。写真を囮にして、私をおびき出したのは。

義雄　そうか、くそっ。

49　山道

義雄、アクセルを強く踏む。

道の中央に立ちはだかる三人の中央めがけて突っこんで来る自動車。

沼田　畜生、追うんだ。

三人、オープン車に乗りこみ、義雄の車を追跡する。

50　海岸に沿った道路

○オープン車の中

沼田　おい、西村、一発、威嚇しろ。

西村、内ポケットから拳銃を取り出し、前を走る自動車（トヨペット）を狙う。発砲する。

それが、自動車（トヨペット）のボディをかすめる。

沼田　俺に貸せ。

沼田、西村から拳銃を取り上げると、大きく振りかざして撃つ。

○自動車（トヨペット）の中

ガラスを破った弾丸が、春江の背中に命中して、がっくり首を落とす。

義雄　しっかりして下さい、奥様っ。

春江、義雄に抱かれて、薄く眼を開く。

春江　私とうとう幸せがつかめなかったわ

春江、義雄の胸に、がっくり首を落とす。

義雄、ポロポロ涙をこぼす。

オープン車から、沼田達三人が飛び降り、自動車（トヨペット）に近づき、ギョッとして立ち上る。

自動車から、眼を泣き腫らした義雄が、日本刀を持って降りて来たのだ。

義雄　山東園の若旦那を刺したこれで、いざとなったら自殺する気だった。それを貴様達は早めてくれたぜ。

沼田、ハッとして車の中を見る。

沼田　しまった。ええくそ、こうなりゃ、てめえもあの世へ送ってやる。

沼田、手にした拳銃をいきなり義雄に向けて発砲する。地面に転倒する義雄。

ナイフを手で振り動かしながら、井上が倒れている義雄の傍へ近づく。

義雄、跳ね起きて、下から上へ斬り上げる。井上の片腕が飛び散る。

西村が匕口を低くかまえて突進して来る。

日本刀が西村の脳天をたたき割る。

沼田、発砲する。

義雄の体から血が吹き出る。

沼田の拳銃の弾丸が切れる。拳銃を義雄に投げつけ、沼田、逃げ出す。義雄、渾身の力で、声と共に日本刀を投げつける。

背中を日本刀が突き通し、沼田のけぞる。

義雄、よろめきながら、車へもどり、春江の死体を抱き上げ、砂丘の方へ歩き出す。

義雄、死体を抱いたまま、海の中へ入って行く。海の上に、赤い太陽がはっきり姿を表わす。

義雄　（微笑して）奥様、天国が見えて来ました。さ、行きましょう。

（おわり）

（写真・団　鬼六撮影）

演劇レポート

丸の内「カジバシ」座

法沢余四郎

十月公演として、丸の内カジバシ座で、劇団「赤と黒」によって「拷問御殿」が上演されました。この劇団は本年当初から「拷問」「拷問金瓶梅」「くの一拷問」「続・くの一拷問」と上演を続け、今度の「拷問御殿」に至るわけです。今回のものは、戦国時代に材を採り、徳川家に嫁した有名な築山の悲話をもととしています。

開幕第一景より拷問場面があります。築山殿の部屋近くにひそんでいた女中が、敵方の女間者の疑いで捕えられ、責められます。

後手にくくられた女中は、築山殿の前に曳き出され、詰問され、弓のムチで背中を打たれますが白状しません。そこで「ええい、しからば体に訊こう。痛い目にあいたいそうじゃ」というわけで、舞台は右手にある井戸に移ります。井戸の滑車を通された太い縄が責道具となって、後手を解かれて長襦袢一枚にされた女中が、両手を改めて頭の上でくくられてその太縄に繋がれます。「それ！」という合図とともに女中は井戸の上に吊り上げられて悶えます。両手吊りの女中に割竹の拷問杖がビシビシと襲いかかり、打ち据えられますが白状しません。

「水責めにかけよ」の声とともに、吊り上げられていた女中の姿は、井戸の中に没して行き悲鳴と共に「ボシャーン」と水音が湧き上るのです。数分後に、女中は井戸から引き上げられますが、既に息が絶えています。白状しないままに責め殺されてしまった訳です。

次の景に於る場面では、女中が刀でなぶり殺しにされます。「裸にせい」との命令で、たちまち帯を解かれ着物を剝がれて、湯文字だけのあられもない姿にされてしまいます。「動かぬよう押えつけい」と命ぜられて、女が二人で女中の両手を後手にねじ上げ、身動き出来ぬように押えます。ギラギラする抜身が突きつけられ、切先が女中の乳房を傷つけます。悲鳴が挙るうちに、刀は赤い湯文字をはねて太ももを切り裂きます。残忍な一寸りみの場面は長々と続き、女中はさんざん切刻きざまれて苦しみ廻りますが、最後には首すじを切りつけられ、白い裸身が血で染って凄惨な姿で死んで行くのです。

最後の景では、無台が暗いうちから割竹の打ち降ろされる音と共に、女の悲鳴が聞えて来て、徐々に照明が点じられる仕組みで、明るくなった舞台には二人の女が責められています。一人は後手にしばられ、もう一人の女は、木馬を並べて架け渡した青竹のハシゴに仰向けにくくりつけられています。

二人に対して割竹のムチが、雨のように振り降ろされますが白状をしません。後手にくくられた女が、井戸で水責めにされます。「私はなにも知らない」といい張る女を、何回も水に沈めたり吊り上げたりしての拷問が繰り返えされているとき、伝令が、三郎君が切腹されたと伝えてきます。皆が驚くうちにハシゴにくくりつけられた女が、狂ったよう

に笑いだします。三郎君が死んだのなら私の役目は終った。私が間者で、先に井戸で責め殺された女中の妹だ。水責めにあっている女は無実だから助けてやれ、といいます。

それでは、お前も姉同様に責め抜いてやるとばかりに、改めて女間者に拷問杖が襲いかかるのです。次いで中国に伝わる拷問の方法とかの残酷な責めが行われます。

熱湯の湯気の立ちのぼる鉄ビンが持ち出され、仰臥させられている女間者の太ももがむき出されて、熱湯が注ぎかけられます。女間者は苦しみもだえますが、くくりつけられたハシゴはびくともせず、縄は非情にくい込みます。苦しむ女間者の襟許が責め手に依って剝ぎ拡げられ、こんもりと盛り上りをみせる乳房があらわにされ、そこにも熱湯が注ぎかけられるのです。苦しげに悲鳴をあげる女間者ですが、責め手は容赦なく、次々と肌を剝き出しては熱湯を浴せ、遂に全身隅なく責めつけられた女間者は半死半生の態になりますが、味方の手で死の寸前に助け出されます。

以上が「拷問御殿」の責め場面です。

この劇団、今年始めの「拷問」では、木馬上でのムチ打ち、梯子責め、ソロバン責め。「拷問金瓶梅」では、上半身裸の首カセ、後手の手カセ、足カセという残酷な姿でのムチ打ち責め、焼ゴテによる乳房責め、妊婦の腹裂き。「くの一拷問」での、乳房のヤットコ責め、水車責め、木馬責め。「続・くの一拷問」に於る、裸女のムチ責め、刺青された女の生皮ムキ、等々、色々の責め方が上演されましたが、「くの一拷問」は〝赤い影法師〟より、「続・くの一拷問」は風太郎忍法〝忍法月影沙〟より、それぞれ材を得ているのではないかと思います。

この拷問劇？　は、五回ほどはカジバシ座で、「拷問金瓶梅」はイイノホールで上演されたのですが、週刊誌でも、この劇団「赤と黒」を、種々な形で採り上げています。とくに、八月二十一日号の〝週刊文春〟では、イイノホールでの上演に当って書いています。

〝ピンク劇団桧舞台三日間の賛否。

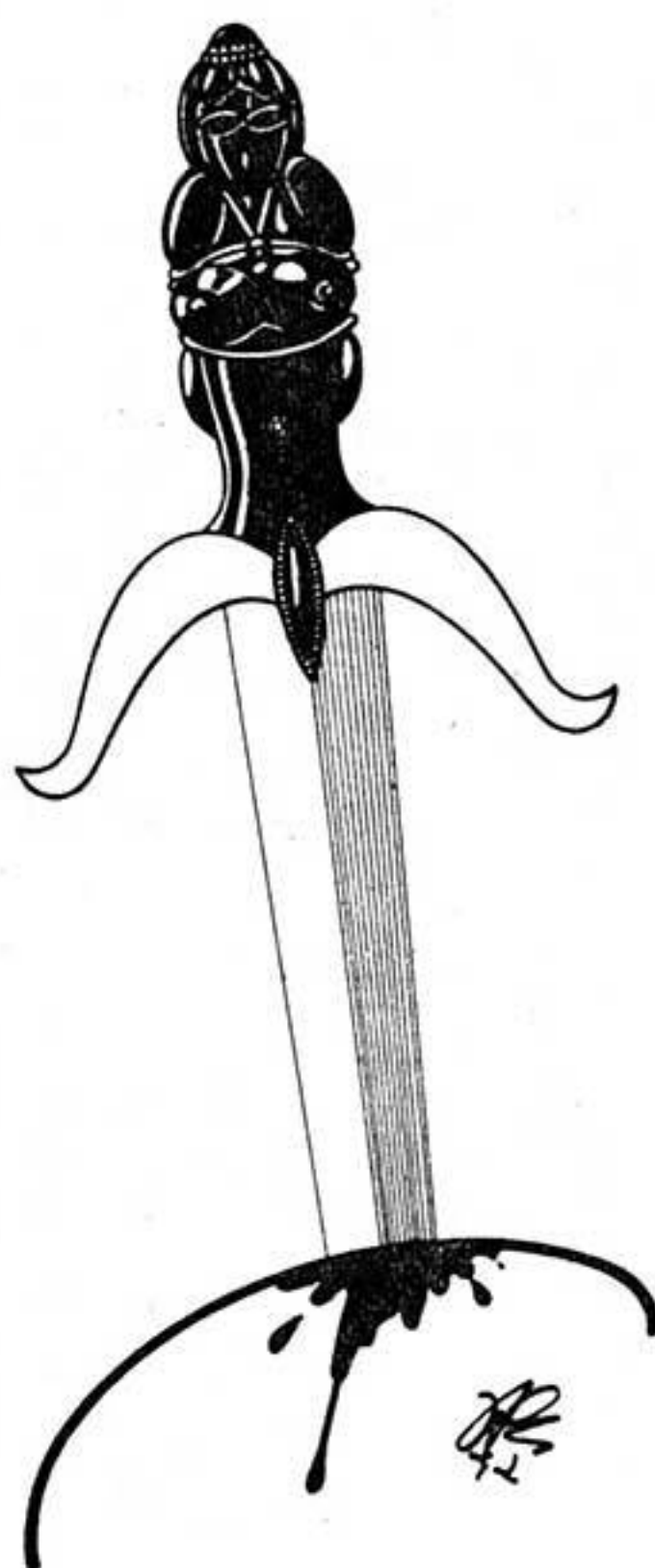
官庁街で公演した、お色気拷問芝居の波紋〟――という見出しで、本文でも、

〝一部のファンにはお馴染みの、ご存知、橋の下劇団「赤と黒」が、突然、イイノホールで三日間のお色気興業を打った。官庁街のエリート社員たちの表情は複雑。顔をしかめるお嬢さんから、アメリカ帰りのその足で駆けつけたご常連まで、さまざまな噂のうちに、問題の芝居の幕は開いたのだが――〟（原文のまま）という風に書いていました。

カジバシ座では、この他の劇団に依っても色々と面白い？　芝居が上演されています。「日本残酷」の〝女スパイの責め〟「残酷の門」の〝ハリツケ〟「美女残酷騒動記」の〝裸女ムチ打ち〟〝裸女の電気責め〟などがあります。

しかし、どの劇団のものより「赤と黒」劇団の上演するものが面白く、迫力があるように思います。その理由の一つは、色々と小道具に工夫がこらされているからといえるでしょう。今回の「拷問御殿」でも、裸女なぶり殺しの景で、刀で傷つけると、白い肌に赤い血が流れ出て迫力を添えます。勿論、赤チンか何かでしょうが細かい細工ですし、熱湯責めの湯煙、井戸責めによる水音などにも、いろんな配慮がみえます。その他にも、ヤットコで責められる乳房からの血。木馬責めにかけられた女の太モモに流れる血。乳房焼の場面での焼ゴテから立ち昇る煙、等々。こういう劇には欠かせない迫真の雰囲気を感じさせる工夫だと思います。劇団「赤と黒」の今後の上演を期待するものです。

復讐

（その6）

＝（ガンペッタ）＝

千葉青鬼

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

衣・食・住

食卓の代用にされた緋沙絵夫人にとって、一秒、一秒が死ぬ程の苦しみだった。腹部を圧するコンロと鍋の重み、火傷しそうな熱さ。そして、もしそれを覆えしでもしたら、という恐怖に身を固くして耐えねばならない切なさ。

それだけに、待ちに待った新藤の食事が、やっと終ったときの安心感は又格別だった。苦痛の連絡する中でも、相対的な差異は必ず存在するから、一段階、苦痛が柔らげられた場合に感じるのは、矢張り安心であり、喜びであることを、今更ながら思い知らされたのであった。

デザートはバナナだった。よく冷やされた大房が緋沙絵夫人のムッチリと盛り上った乳房の上に、ドサリと置かれる。焦熱地獄が、今度は冷寒地獄に変貌する。乳首をふるわして、氷のようなバナナの房を支える。あまりのみじめさに、涸れ果てた筈の涙がどっと流れ出して来る。それが、面の隙間からにじみ出て髪を濡らし、床の絨氈に吸い込まれていった。

やや冷えたころを見計らって、コンロがとり除かれ、鍋がお腹の上にじかに置かれる。冷えたとはいっても、厚い鉄の平鍋である。一旦ためこんだ熱気が、腹部の皮膚をこがしはしないかと思われるように熱かった。胸乳は氷のように冷え、腹はカッカッと熱せられて、奇妙なコントラストを感じさせていた。それでも火が燃えていた時よりは、余程楽になったといわねばならない。

恵利香も、ようやく屈辱のエプロンを取り去って貰うことが出来た。背中にクッキリと十文字の痕が残って痛々しかった。さて、鍋に残された新藤の食べかすが、恵利香の食事である。それでも、久しぶりの人間らしい食事に勇躍した恵利香は、むさぼるように喰べた。犬や猫のように、口だけで喰べさせられるみじめさも、鼻から頬から汁だらけになってしまう情けなさも、今はもう、どうにでもなれと言いたい程、捨鉢な気持だった。

そんなわけで、新藤が面白半分にいたずらをしても、チラッとかなしげな表情を見せただけで、喰べ続けるのだった。白いバナナの中味が新藤の手に残され、皮だけが鍋の中に投げこまれる。これも又、ムシャムシャと呑み込んでしまう。

その光景を、悲しげに天狗面がみつめていた。一瞬、恵利香はその視線を感じて、カッとなった。母親である緋沙絵夫人が、どんな気持でいたか、それと知らない恵利香には想像も出来なかった。むしろ、この見知らぬ金髪女が、自分をあざわらっているように感じとったのである。憤りが身体中を突き抜けるようだった。餓鬼さながらの自分の浅ましさを意識して、情けなく思っているだけに、それを見てとられたことが口惜しかった。恵利香は、思わず身ぶるいした。

それを見透すように、新藤が言う。

「天狗さんにも何か喰べさしてやろう。で、このチューブを鼻から差し込んでやれ」

自分の身に覚えのある恵利香には、それがすぐわかった。残酷な歓びがこみあげた。

渡された細いビニール管を口にくわえると、天狗面に顔をよせて、その鼻の穴から、緋沙絵夫人の咽喉を通そうというのである。勿論、頭を左右に打ち振って抵抗するから、うまく通らない。それではというので、頭の方に廻り、しっかりと膝でしめつけてから、覗き込むようにして押し入れると、今度はスルリと入った。今はこれまでと観念した緋沙絵夫人は急に力を抜いて、おとなしくなった。管は、ズルズルと送りこまれて行く。

「ひっかかったら、ちょっと休むんだ。すぐ通るようになる」

新藤が教える。嚥下本能があるので、括約筋に当って止っても、やがて、それを包みこむようになって先が開けてくるのである。そんなわけで、管は食道から胃に達した。

一方、チューブの反対側に、前回浣腸に使ったポンプのノズルを差込む。ゴム球は再び恵利香の口中へ。

鍋の中の煮汁に、生玉子や野菜ジュース、牛乳などを、やたらにブチ込んでかきまぜたのが緋沙絵夫人の食事だった。

「流動食だが、カロリーは大丈夫だ」

容器に入れながら新藤がつぶやいた。待ちかねたように、恵利香の口がポンプを動かしはじめる。

「ギュー」

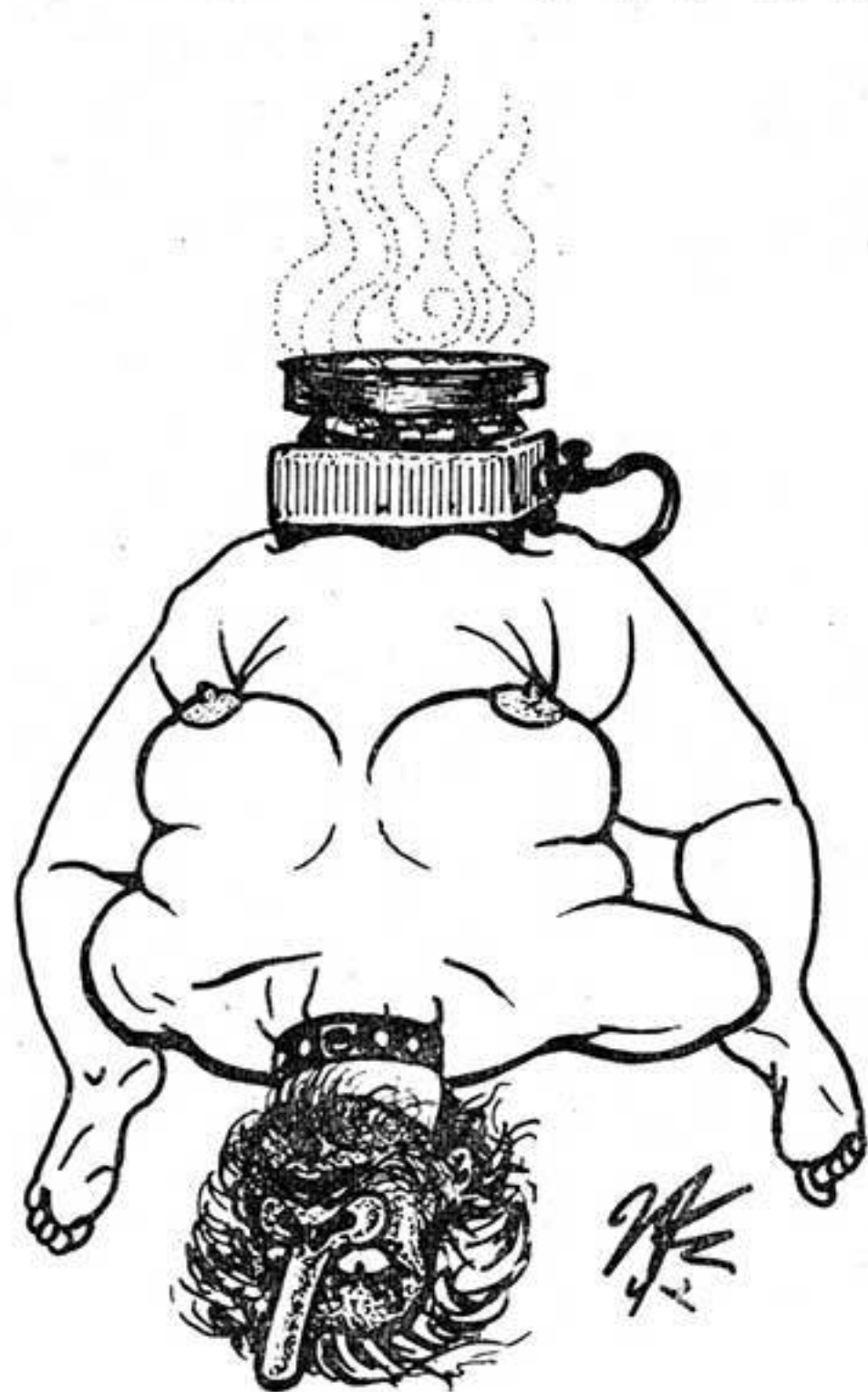
と変な音が天狗面の下から起った。冷えきった液体が直接胃袋の中に注入されはじめたので、たまらなく気持がわるいのである。ハキ出してしまいたいのだけれど、物理的にいって、胃袋の中は空ッポなので、吸い込まれるようにして、おさまってしまう。

惨澹たる緋沙絵夫人の夕食だった。面をか

ぶった口は、口としての用をなさない。緋沙絵夫人の涙をよそにして、味覚を楽しむ舌さえも無視して、胃袋だけが単純に満たされてしまったのである。

「風呂へはいるから、その間にベッドの仕度をしておけよ」

恵利香に指図すると、新藤は緋沙絵夫人の首輪をつかんで、犬でも引張るようにして出て行ってしまった。

一人残された恵利香は壁の一部に組み込まれたベッドを引き出し、メーキングをしなければならない。何もかも口を使う他はないので、馴れなければ何時間かかっても出来ないのである。シーツなども、うっかりくわえると唾がついてあとでしかられてしまう。時には背中を向けて、不自由な後手で引っぱらなければならない。縛られてさえいなければ何でもない作業が、今では大変な重労働になってしまったのであった。

そのころ、緋沙絵夫人を浴室に追いこんだ新藤は、はじめて覆面をとった。その途端

「アッ……。」

と緋沙絵夫人が叫んだのも無理はない。そこには恵利香の知っている新藤の素顔はなかった。巧みに作られたプラスチックス製のマスク、それも、火傷でひきつれになった醜悪な、ゾッとするような容貌を表現していたのだった。そして、そんなこととは露知らない緋沙絵夫人は、そのマスクをこの男の本当の顔と思って震え上ってしまったのである。

その上、緋沙絵夫人の脳裏には、もうとっくに忘れかけていた過去の汚点、不吉な記憶がフト呼び醒されて、この見るもいまわしいマスクと重なってしまったのである。それはあたかも、亡霊がよみがえったかのようであった。

——似ている。本当に……。

——夢をみているのだわ。

恐怖に両眼を一ぱいに見開き。蛇に魅込まれた蛙のように、まじまじと新藤のマスクを見つめている緋沙絵夫人の頭の中は、極度の混乱に陥って行くのだった。

亡った母親とめの顔に似せて作ったマスクが緋沙絵夫人に与えた衝撃の効果を十分に見極めた新藤は、ゆっくりと黒いトレーニングシャツを脱ぎはじめた。新藤のたくましく鍛えあげられた裸身はシミ一つなく、若々しい筋肉の作り出す模様がまぶしいようだった。見事な体躯と、恐ろし気な形相におびえる、緋沙絵夫人の前に傲然と立つ新藤の姿には、勝利者の自負と威厳が満ち溢れていた。

憎んでもあまりある仇敵、緋沙絵夫人は、今は哀れな奴隷となって、目の前にひざまずいているではないか。彼の計画は、半ばを達成したに、ひとしい。

あの万事にひかえ目で、おとなしかった母とめが、どうして丹沢の山中で、ガソリンをかけて焼身自殺をするという激しい行為に出たものか。母の遺書は、一字一字が新藤の眼底に焼きついていた。そのときの母の苦しみはどんなだったろうか。むらむらと、あらたな怒りがこみあげて来た。

天狗面を、むしり取るようにして外した。その下には、土気色になった緋沙絵夫人のうつろな顔があった。

「おや、どうしてそんな顔をするんだ。私の顔が誰かに似ているというのかね。それともこんなに焼けただれたのが怖しいとでもいうのかね」

といいながら、ヌッとそのマスクを近づける。ゾッとなった緋沙絵夫人は

「ヒィーッ」

と言葉にならない悲鳴をあげながら飛びすさろうとして、タイルに足をとられて、忽ちドゥと転ってしまった。うっ伏せに顔をかくすようにして、ガタガタ慄え、歯の根も合わない上ずった声で

「許して、許して……」

と繰返すばかりだった。その後手を解いてクルリとひっくり返し、今度は前手錠をパチンとかける。

「サア、風呂の中に這入れ！」

すでに意思のない人形のようになってしまった緋沙絵夫人は、新藤に小突かれながら、ガクガクと浴槽をまたいだ。つづいて新藤も水音をあげてとびこむ。小やすみもなく、新藤の手が、意志を失ったような緋沙与夫人の肌をいたぶりはじめた。虚脱したような緋沙絵夫人でも、皮膚を這い、つねられ、叩かれ、爪を立てられる責手を無視することが出来ない。ムシズのはしるような思いや、突然の激しい痛覚も唇を噛んでこらえなければならぬ。避けることは絶対に許されないからである。十分なぶった挙句、新藤は洗い場に出た。スポンジ・シートをタイルの上にひろげ大の字なりに横になって、さて今度は

「洗うんだ」

と命令する。そのために両手を前縛りにしたのかと、やっと気がついた緋沙絵夫人は、相手の顔をみないようにしながら、ノロノロとスポンジに石鹸をつけた。

前にまわされて、いくらか自由になったとはいえ、所詮は縛られた両手のことである。なかなか上手には出来ない。しかも、尚、新藤の手はいたぶりをやめようとしない。身をよじって逃れようとすると、たちまち命令の方がおろそかになる。そして、怒号と共にところ構わず、ひっぱたかれる。屈辱と恐怖とおぞましさにさいなまれながら、無我夢中でスポンジをうごかし、無法な支配者を磨きたてる。

「オット、どうも下手なトルコ・ガールだ。そんなヨチヨチの手付じゃあ、心細い。自由に動かせる舌を持ってるだろう、舌で洗って欲しいもんだナ」

ニヤニヤしながら新藤が言った。絶対に逃れ得ないと観念し、どんなことでも逆らえないと覚悟している緋沙絵夫人も身ぶるいして叫んだ。

「あんまりです。そんなこと……」

思っただけでも吐気がつきあげて、思わず絶句したところへ、上体を起した新藤の拳骨がとんだ。ふせぐ間もなく、顎にパンチをうけた緋沙絵夫人は、もんどりうって洗い場にたたきつけられる。その髪をつかんで引き起し、つづけさまに往復ビンタをとられる。

「やるのか、やらないのか！」

ドスのきいた声が耳にいたい。哀れはかなくも拒絶は不可能と再び悟らされる、緋沙絵

夫人だった。
　幾度か強烈なビンタを受け、蹴りとばされながら、どうやら一応の流しが済むと、次はマッサージである。
　固い筋肉を、爪を立てないようにして指の腹でおさえて行く。たかがアンマの仕事とはいえ、馴れない身には、それ程簡単ではなかった。二〇分を過ぎ三〇分たつと、指先は知覚を喪ってしまったかと思われる程、痺れてくる。だが、新藤はなかなかやめさせてくれない。背骨を押させながら、いい気持そうに、うつらうつらとしているではないか。そうこうしているうちに、緋沙絵夫人の手がフト新藤の首筋に触れた。チラッと殺意のようなものが、緋沙絵夫人の脳裏をよぎった。このまま、首をしめて殺してしまえば、恵利香共々助かるかも知れない。思わず指先に力が入る。すると、寝ているとばかり思っていた新藤が、つぶやくように言ったものである。
「私を殺したって逃げられはしない。ここで飢え死ぬのがオチさ」
　ゾッと寒気が走る。何というおそろしい人間だろうと思う。緋沙絵夫人の反抗心は、いつも出端をくじかれて挫折してしまうのだった。いや、むしろそんな考えを捨てようとするかのように、首を振った緋沙絵夫人は、力一ぱい奴隷化への坂道を転がり落ちて行く。
　反逆に対して、めずらしく罰をあたえないで、新藤は言った。
「もういい。初めての夜だ。恵利香と一緒にゆっくりやすませてやるぜ」
　もう一度、ざっと湯舟につかってから、たくましい全身を緋沙絵夫人に拭わせた上で、再び緋沙絵夫人の口にゴルフボールを押しこんでしまう。声を奪われた上、濡れた洗い場のスポンジ・マットの上に仰臥させられる。
「いいか、絶対、動くんじゃないぞ」
　念をおしてから新藤は浴室を出て、C室に戻った。すでにベッドはキチンと調えられ、その下手のカーペットの上に恵利香が正坐して、主人の帰りを待っていたのである。

バナナ

　恵利香の前にズカズカと歩み寄って、あぐらをかいた新藤が、いきなり
「立て」
　と命令した。ギクッと恵利香が立ち上る。素早くしないと、どんなことになるかわからない。
　さすがに、恵利香の方が調教の効果をあらわしていた。内心の苦渋は兎も角、一応従順に言いつけられた姿勢をとった。
「デザートを、お預けにしておいた筈だが……」
　いくら調教されたとはいえ、羞恥心まではなくなっていない。むしろそれは新藤によって大切に保存されてきたといえよう。それだけに、全身を紅に染めて、はずかしさをこらえる姿は、ゆゆしげに又、哀れであった。
「どこへやってしまったんだ！」
　わざと声をあららげて、答えを強要する。
「アノ……」
　と口ごもりながら、
「ベッドをお作りしている間に、落ちてしまったんです」
　と辛うじて説明したのだが、
「さては、いつもの悪いクセが出て、命令を守らなかったんだろう」
　とニヤニヤしながら嫌味を言う。又もや、屈辱に唇を噛む恵利香だった。
「いかん、いかん。命じられた以外のことは絶対にやってはいかんのだ。契約違反だぞ。国へ帰れなくなってもいいのかね」
　といわれて、ふるえ上ってしまう。そんな

ことは、おかまいなく、
「落したバナナはどこへやった?」
「アノ、棄ててしまいました」
「どこに?」
「トレイの中に……」
ベッドの側にある紙屑篭に入れたという。たちまち、新藤の足が、それを蹴とばした。鼻をかんだチリ紙やら、痰を拭ったティッシューなどがカーペットの上に散乱した。その中に、一〇センチ程のバナナの切れ端が見つかったのである。
「勿体ないことをするな。喰べてしまえ」
有無を言わさぬ新藤の調子に、どうしても服従せねばならぬと覚った恵利香は、目を白黒させながらも、やっとのことでそれを呑みこんでしまう。
「ホラ、お前のせいで部屋がよごれてしまったじゃないか。早く片づけろ」
何日も前からの紙屑だった。カラカラに乾いているとはいっても、その一つ一つが、恵利香の汚辱を記録していたのである。顔をそむけたくなる程、おぞましくいとわしいものだった。それをしも、口に銜えて屑篭へもどして行く辛さは、何にたとえたらよいだろうか。さすがにためらっていると、思いきり尻のあたりを平手で叩かれ、
「ウッ――」
とうめいて、ちらかった紙屑山の中に顔を埋めるようにして、ツンのめってしまう。まっ白な臀部の皮膚が、みるみる赤く充血して新藤の手型を浮き彫りにした。
やっとのことで紙屑を篭の中へ戻した。その上、小さなゴミまで、拭いとるように舐めさせられる。恵利香の口は、掃除器の役割まですることになってしまった。
舌を刺戟する異物感に苦しみながら、それでも、やっとのことで紙屑の始末が終ると、新藤は、はじめて満足したように幾分やさしく言った。
「よしよし、ご苦労だった。今夜は、これで寝かせてあげようね」
思わず、ホッとタメ息が出る。一分一秒が一日かと思われる程長い長い毎日であった。露出された神経を、土足でふみにじられるような時間だった。それも、どうやら終って今夜一晩だけは、ゆっくり眠れるかもしれない。たった一つの、哀しい願いだった。
しかし、すぐと恵利香は、自分にもう一つ困ったことが残されていることを意識せねばならなかった。新藤の足下にひざまずいて、
「あの……」
と口ごもるのに、
「なにかね」
わざと白ばくれているが、新藤にはすべてが見通しだった。
「アア!」
悲しげな歎息が洩れる。ここにも羞恥責めが仕込まれてあったのである。陰湿な耐えがたい拷問だった。このまま一晩おかれたのでは、気が狂ってしまいそうだった。
「お許し下さい。どうか、どうか、アノ、おとりになっていただきたいんです」
「何をとれというのかね」
と、ますます意地が悪い。どうしても答えなければならない。消え入りそうな声で、
「さき程、戴いたものの残りを……」
という。押し返すようにして
「どこにあるんだね」
とネチネチと質問してくる。こらえ切れず大粒の涙を落しながら、額を床にすりつけるように平伏して、
「もう許して下さい」
と号泣する恵利香を冷く見下しながら、
「言わなければわからないよ。サア」
涙に声をつまらせて、やっとのことで

「私の……」
「ええ？　どこだって？　小さい声で聞えやしないじゃないか」
　しゃがみこんで、わざと耳をつけるふりをする。もう一度、繰りかえさなければならない。
「そうか、そうか、やっとわかったぜ。どれどれ立ってごらん」
　死ぬほどのはずかしさに、キリキリ歯がみして耐えねばならない恵利香だった。
「よし、とってやろう」
　あっさり言われてホッと息をつくのも束の間、すばやく目かくしをつけられてしまう。その肘をとって、緋沙絵夫人が待っている浴室へ入る。
　気配を感じて、ビクッと身を固くする緋沙絵夫人を膝立ちさせて、
「デザートがとれなくて恵利香が困っている。とってやれよ」
　とささやく。前手錠なので、思わず手をのばすのへ、ピシッとそれを叩き落とし、
「バカッ、お前に手はないんだ」
　と叱咤される。片方は取って貰いたい一心、片方は母性愛から、双方の気持が一致しているので、二人ともためらわなかった。
　とはいっても、ゴルフボールが口中に押し込まれているので、なかなか思うようにならない。言いようもない挫折感を覚えた緋沙絵夫人は、ただ熱い泪がこみあげてきて、どうすることも出来なかった。それでも気持をふるい起すようにしながら、この悲痛な作業をくりかえすのだった。何回も空しく失敗した後に、やっとのことで成功する。その瞬間、
「アーッ」
　複雑なひびきを包んだ恵利香の悲鳴が、ひときわ高かった。

　さもけがらわしいと言うように二人を苦しめた物を吐き捨てた緋沙絵夫人は、弱腰を思いきり蹴とばされて、ドタンと横転してしまった。
「誰がすてろと言った！　サア、すぐ拾え。拾って恵利香に喰わせてやれ」
　口のきけない緋沙絵夫人は、もどかしげに頭をふるわせた。ベソをかいた子供が、いやいやをする姿に似ていた。その頬を又、パシッと

張りとばしながら、
「いやか、いやならお前に喰わせてやるぞ」
どんなことでも、やりかねない新藤のことである。こうなっては、泣く泣く言うことを聞くしかない。
――恵利ちゃん、許してね。
まわらぬ舌でそう言っても、無論恵利香には伝わらないのである。一旦吐き捨てたおぞましいものを、おそるおそる唇にはさむ。依然として手を使うことは許されない。立ち上って、接吻するような恰好で、口うつしに恵利香に喰べさせようとする。一カ月調教の成果はここにもあらわれていた。忸怩とした緋沙絵夫人の気持とは正反対に、恵利香はアッサリと、むしろ、うまそうに問題のバナナを喰べてしまったのである。

スパンコール縛り

「これで、もう文句はないだろうね」
恵利香の、やや上を向いた小さな乳首をピンとはじきながら新藤が言った。目かくしの恵利香が、あわてたように背くところを、間髪を入れず、その乳首を麻糸でくくりあげてしまう。
「いたいっ」
とハデに悲鳴をあげる。たしかに、緋沙絵夫人とちがって、授乳経験のない乳首は、あるかないかと思われるほど小さく愛らしかった。小豆粒のような乳首が、これもかすかに小さい乳輪の真中に、半ば埋れたように見えるにすぎない。それを無理につまみ出すように引っぱって、糸をまきつけたものである。左右とも別々にくくられて、恵利香は身もだえして泣き叫んだ。それは、痛いというよりも、もっと恥ずかしく、辛いことだった。
「なるべくソッとしているんだな。とろうとして引っぱると、ますます締るようになっている」
そういいながら、手早く、今度は緋沙絵夫人の乳首に麻糸をくくりつける。前に廻った両腕の間にはさまれて、むっちりと盛りあがった豊かな乳房。その頂点に、これはむしろ遅く、日本人ばなれのした乳首があった。
この上、何をされるのかと、うずくまったまま慄えている二人の乳房。その四つの乳首から二〇センチばかりの麻糸が四本、ダラリと垂れ下って、これも不安気に小刻みに揺れ動いているのだった。
新藤は、再び、緋沙絵夫人を濡れマットの上に押し倒し、その上手の方に恵利香を、丁度膝が緋沙絵夫人の両耳をハサむように仰向けに転がした。自然、恵利香の両踵は緋沙絵夫人の肩に乗るようになる。その右の親指を緋沙絵夫人の右の乳首に、左の親指を左の乳首に夫々しっかりと結えつけた。そのまま、二人を同時にねじって、ひっくり返しにすると、恵利香の上体を引き起して足の間に緋沙絵夫人の金髪をはさみ込むようにしながら、その背中の上にデンと坐らせてしまう。
ここで、はじめて後手錠を解かれた恵利香は、すぐに前手縛りにされ、その縄尻を緋沙絵夫人の首輪に接続される。それが済むと、恵利香の上体は後に倒されてしまう。丁度、うつ伏せになった緋沙絵夫人と背中合せに頭を逆に固定されようとしているのである。
緋沙絵夫人の膝が折り曲げられ、夫々の親指が、恵利香の左右の乳首にくくり合わされる。更に、下敷になった緋沙絵夫人の前手縛りの縄尻を恵利香の首輪に通して、引き絞るようにしながら、シッカリと固定した。
最後に、二人の両肘を、右は右、左は左とまとめ、力一ぱいに縛り上げると、二人の両腕が菱縄の作用をして、キッチリと締めつけられてしまったのである。首輪と手錠とをつないだ僅か十センチ程の麻縄が、ギリッと腿

に喰いこんだ。二人とも、ジッと動かなくなってしまった。動いたら互いに相手を苦しめるからである。首を引かれる苦しさに、うなじを極限までそらせる。こうしてそれぞれの頭部が邪魔になって、二人ながら膝をすぼめることが出来ない。

「いたい。あっ、いたい」

例の通り、恵利香のハデな悲鳴に、下敷になった緋沙絵夫人は、ますます身をそらせて、少しでも愛娘を楽にしてやろうと、空しい努力を繰返すのだった。

どちらかといえば、上になった恵利香の方が楽な筈である。やがて緋沙絵夫人には、頭をそらせる力もなくなるだろう。何より、下敷になった両腕は、重圧に押されて、次第に知覚を喪って行く。

「ハハハハ……」

悪魔的な新藤の哄笑。

「どうだい、私の考案したスパンコール縛りの味は。ま、これでゆっくり寝みたまえ」

棄てぜりふを残して新藤の姿は消えた。

電灯が消されて、まっくらになると二人とも、あきらめたように静かになった。

疲れ果てているのだろうか、こんな姿勢で縛りつけられていても、恵利香は寝息を立てはじめている。哀れをとどめたのは緋沙絵夫人だった。愛する恵利香の眠りを守るためには、絶対に動いてはならない。母性愛のみが可能にする、あのねばり強さで、緋沙絵夫人は耐えた。しんしんと更けて行く夜を、濡れたスポンジ・マットからあがってくる冷たさにも耐えねばならぬ。寝もやらぬ夜は、一きわ長く、苦しかった。

——恵利香さん。

夫人は、呼んでみた。もちろん声にはならない。くぐもった呻き声が悲しく自分の耳にひびくだけなのだ。

〝ご免なさい、恵利香さん。あの男は私に復讐しているのよ。あなたは何も知らないことなのよ。私を責める道具に、あなたまでこんなひどい目に……〟

緋沙絵夫人の心中を知る筈もない恵利香は、縛り合わされた体を、グッと動かそうとした。寝返りでも打とうとしているらしい。

「ウーン」と小さく声を出して、

夫人のギリギリの耐苦姿勢に、更に激しい苦痛が加わった。夫人の咽喉の奥から、思わず知らず絞り出される悲痛な苦吟。

——こんなひどい縛り方をされているのに、よくも眠れること。

しびれ切った五体と脳裡で、夫人はふと想った。そして、それが、この状態でも尚、眠れるまでに習慣づけられて来たことに思い至ったとき、いじらしさと恐しさに、しびれきり感覚すらなくなった全身に、ゾーッとするような思いが走るのだった。

（未完）

白の女

隆子

トンボ返りで今年も暮れて
知らぬ他国の月を見た
可愛いあの娘は薄情け

(一) 女と鞭とサーカス

世の中の普通の常識からは隔絶された世界が、現在でも間々あるものなのです。たとえば、親分の下にいつでも身を投げ出すことを

誓って、固めの盃をやり取りするヤクザの世界。どんな美女でも役をつけて貰うために監督に平然と肉体を投げだす映画の世界。他と全く離れて、その一職種だけがグループを作って生活している団体をギルドといいます。

その最もギルドらしいギルドの特徴を持ち他の世界から流入を固く拒んで生きているのは、サーカスという曲芸を主として、旅廻りをしている芸人の集団です。

薄い布の天幕を野天に張り、生命をかけた曲芸をお客様に見せるサーカスは、かつて映画やストリップが流行しなかった頃は、あらゆる興行物のトップを行く見世物でありました。現在はその全盛期も過ぎ、サーカス団の数もほとんどなくなりましたが、ごくまれに田舎の祭や地方都市などで、クラリネットが吐きだす哀愁に満ちた天然の美や、サーカスの唄のメロディとともに、このサーカス団を見かけることがあります。そしてサーカスの人気は、一言にしていえば人間の持つ「加虐的変態性欲」を、ごく自然に満足させることにあるといえるでしょう。肌も露わな美女が、空中の落ちたら即死するような場所で宙返りをしたり、身体をくねくねとくねらせて正視できないようなアクロバットの曲技をします。

見物客も見ながら普段心の中でうっ積しているサジスティックな感情を満足させます。時々団長が、いかめしい顔で鞭を持って現われると、その欲望は一層昂まります。あの鞭で、美女も小人も、打たれて泣きながら鍛えられるのだと、想うことによって……。

観客のサーカスに対するイメージは、全くよくしなう鞭によって代表されるのです。ですから、人々のサーカスに対する興味は、表面に現われた芸だけではなく、その裏面の私生活にも及びます。一人で遊んでいた女の子が、人さらいにさらわれて、小さい時から鞭でぶたれ鍛えられる。そして骨が軟くなるように、いつも酢を飲まされ、きびしい稽古の後に、やっと一人前になれるのです。楽屋は毎日、涙と苦しみで一杯です。……こんな想像が、客を一層深い楽しみに誘うのです。

（二）　売られた娘

現在では考えられないでしょうが、大正末期から昭和初期にかけてのサーカス団は、人さらいにさらわれてきた子女とか売られてきた娘が、団長や調教師によって、無理矢理に鞭や絶食などできびしく仕込まれたことは、今さらいうまでもありません。

「田部井娘サーカス団」の花形スターでアクロバットと一輪車の曲技を持ち芸にしていた私も、そのような辛い過去を送ってきた女の一人です。こんどの大戦で戦災孤児が沢山できたように、関東大震災の時にも震災孤児が大勢できました。そのとき私は十五才になっていましたが、住んでいた深川の家がつぶれ、火災の中に両親と兄弟を失って唯一人、頼る者のない孤児になってしまいました。

そんな私の前に或る日、親切な男が現われました。同じ町内に住んでいた人で、仕事の世話をしようというのでした。空腹と心細さから男にしたがい、汽車で水戸まで連れてい

かれ、ちょうどそこで興行していた「田部井娘サーカス団」に売られてしまいました。サーカス団には、十人ばかりの女の子と、十四、五人の屈強な男達がいました。女のうち三人は十才から十二、三才の小娘たちで、いずれも敏捷に立ちまわっていました。

私が優遇されたのは最初の一日だけでした。二日目から、食物は煮こみの酢粥だけです。私は、いきなり黒いズロース一枚の裸にされて、仕込中の三人の少女たちと一しょに、興行の合間をみて昼といわず夜といわず激しい訓練が始められました。調教には、でっぷりと太った、いかにも好色そうな団長があたりました。その上、団長の手には五寸ばかりの竹の根っ子の先に革を垂らした鞭が握られていました。訓練がはじまって三日目の夜、私ははじめて、その鞭の洗礼を受けました。

「こっちへこい」団長はいい捨てると、先に立ってさっさと歩き出しました。私が連れていかれたところは、天幕の一隅に設けられた控室でした。裸の電球が一つ、うす暗い光を投げているだけで誰もいませんでした。その時、私のいる隣の部屋でも相当ひどい訓練を受けているらしく「ううう っ」という呻き声に混って、ピシッという鞭の音、「ヒィーッ」と泣き叫ぶ声が洩れてくるのでした。「お前も大分、気になっているらしいから、一つ隣の様子を見せてやろう」

団長は私の手を取って仕切りの幕を開いて隣室へ入っていきました。未知の世界への期待と好奇心に震えながら、中を見た私の目にうつったものは、まだ十八才ぐらいの少女が調教師に仕込まれている光景でした。

少女の体は仕込台の上に丸くなって、不十分ながらアクロバットのポーズを形づくっています。数回、繰り返す裡に逆になった少女の顔は真赤になりブルブル震えています。「まだ少し固いなあ。又、ハンドルの御厄介になるか」

調教師のその声で、少女の頭のバンドに細いロープが結ばれて両膝の間を通り、台にとりつけられた鉄環を通って台の前面のハンドルへと結ばれます。「始めろ」の声で、調教師の手がハンドルにかかります。ハンドルの回るにつれて、ジリジリと少女の頭が後へ、更に下へと引かれると共に、太股の部分がだんだん前へ出て、体は徐々にまるく反っていきます。両手はいつしか台についてしまい、上半身の重みを耐えていましたが、いよいよ迫ってくる苦痛に、ちぎれるような力をこめて更にしっかりと足首を握っております。

「うむむ、むむっ」少女の赤い唇から低いうめき声が洩れ、ポキポキと背骨の鳴る音が聞こえてきます。それでもハンドルは止りません。やがて少女の頭がお尻につきました。固く閉じられた少女の目から、涙がツーッと溢れ粒となって落ちます。ううっと、私までが息のつまりそうになる一瞬です。どんなに苦しいことでしょう。曲り曲って皮下脂肪のコブのようになった背から腰、これと反対に胸から腹にかけては、反りかえって皮膚もはりさけんばかりに緊張しています。

調教師がハンドルから手を離すと、カラカラと乾いた音をたてて少女の身体は元通りに立ちます。大きく肩で息をして節々を撫でていますと、又、ハンドルが回り始めます。低い呻き声、少女はハンドルに操られる一個の物体となって或は反り曲げられ戻され、又曲げられて鍛えられるのです。次第に全身が紅潮して、じっとりと脂汗がにじみ出て、鈍い裸電球の光をうけてギラギラと輝きます。

「休め」

団長の合図でようやくハンドルからロープがはずされます。台についた両手へ力をこめ

てまるく反った上半身をようやく起すと、ぺたりと台に尻を落して「フーッ」と大きく息を吐いて、グッタリと身体を前へ倒してしまいました。全く疲れきったという恰好です。余りの凄い訓練に歯をカチカチ鳴らして震えている私に、団長は
「どうだい、お前も一丁、丸めて貰うかい」
と、からかいます。煙草を一本吸ってから団長が少女のお尻をピシャッと叩いたのを合図に訓練の再開です。少女は、すっかり諦めきった表情で、目を閉じたまま両膝を立てて上半身を起します。その後で仕込台の上に展開されたのは、訓練というよりは、むしろ拷問と呼ぶにふさわしい惨忍さで、二人の非情な荒くれ男の玩具としての責めに等しい仕込が、可憐な肉体に加えられるのでした。
再び頭のバンドにロープが結ばれ、調教師が回すハンドルで、ようやく少女の頭髪が自分のお尻につくまで反り曲げられますと、ハンドルはフックにかけられ逆転をとめられてしまいます。少女の身体は、まるく曲ったまま見事なアクロバットのポーズで固定されてしまったのです。苦しそうな少女の呻き声。
「中々良いじゃあないですか、これだけ曲りゃ足首を縛れば、首出しの芸も出来るでしょうよ」
「長いこと骨を折らせやがったからな。どうだい、この肌のすべすべしたこと」
団長が台に近寄って、天井に向ってまるく反った腹のあたりを撫で回しますと、一方、調教師は異様に折れ曲った背骨から腰の辺りの工合を調べています。「む、む、むーん」急に一際、うめき声が高くなって、全身にピクリとケイレンに似たものが走ったのは、もうこのポーズに対する苦痛が、極限に達したのでしょう。
「又、音をあげやがる」
団長が長靴にさした鞭を引き抜いて振り上げざま、台をピシッと叩きました。少女の全身の皮膚に戦慄が走り、一文字に閉じた唇から洩れる呻き声を必死に噛み殺します。
「おい、笑え、笑うんだ」
少女は更に笑顔を強制されます。お尻についた頭が僅かに動き、少女の汗に濡れた口からは涎が垂れています。苦痛に満ちた顔が紅潮して、わずかながらもこちらを向きます。笑顔をつくろうと努力しているのでしょうが、それは泣き笑いの顔となって、とうてい見られたものではありません。
「情ねえ面しやがる。おい舌を出せ、もっと長く。そうそう、そのまま右手を離して腹を撫ぜてみろ」
団長の命令で少女は、いわれた通り不自由な恰好のまま、苦痛を忍んで身体を動かさねばなりません。いわれた通りしないと、いつあの恐しい革鞭が飛んでくるかわからないのです。恐くてブルブル震えている私に、
「さあ、今度はお前の番だ。今日からは新型だからな。早く脱いで上った上った」
今までは人の身、これからは我が身。団長にお尻をキュウとつねられて、あわてて支度をします。例によって太股のつけ根にピッタリと喰い込むようなパンツ一枚で台にのぼりました。ピシッピシッと鳴る鞭の音を合図にアクロバットの訓練です。
「まだまだ音をあげるほどじゃねえ。お前の体は、もっともっと曲る筈だ。なまけると承知しないぞ」
尚も非情の鞭は私の臀部へ炸裂しました。そして五年の歳月が流れて、私は一座のスターになり、アクロバットの女王ともいわれるようになりました。しかし舞台上でアクロバットの曲技をする時、一輪車の曲乗りを演ずる時、あの辛い思い出が、いつもいつも鮮かに蘇ってくるのです。鞭の音とともに……。

連載小説

花（はな）と蛇（へび）

団鬼六

続篇（第三十八回）

おとし穴

「何をしてやがるんだ。ここまで来て、まだ俺達に楯をつく気なのかよ」

と、鬼源は、床に泣き伏してしまった静子夫人の白い背を足で蹴上げた。

「わたし、出来ない。ああ、もう勘忍して下さいっ」

と、夫人は両手で顔を覆い、激しく泣きじゃくる。

銀子と朱美が、舌打ちしながら、夫人の乳白色のふくよかな肩に左右から手をかけ、ぐいと上半身を起させた。

「ちょいと、あんたに小夜子の調教をさせてやろうというのは、私達のお慈悲なのよ。チンピラ達に小夜子の調教をさせてもいいというの」

陰湿な微笑を口元に浮かべて、二人のズベ公は、顔を伏せてすすりあげている夫人に言い、ちらっと、うしろに立っている千代の方を見た。

「静子夫人がそういう態度なら仕方がないわね。小夜子は、やっぱりチンピラ部屋へ入れた方がよさそうだわ、鬼源さん」

千代は、鬼源の方を見て、金歯を見せて、ニーと笑った。

「待って――」

静子夫人は、涙で潤む愁いの深い眼を眼前の小夜子に向ける。

小夜子は、悲痛な影の射す美しい黒眼を静子夫人に向けながら、

「――もう小夜子、どうなってもいいの。覚悟をきめています」

と言い、軽く瞑目して、顔を横へそらすのだった。

「許して、小夜子さん」

静子夫人は、一声叫ぶと、小夜子の足元に置かれている小さな壺の中へ指を差入れ、ね

っとりした油状のものを掬いあげた。
「小夜子さん、お願い、こんな事をする静子を許してっ」
静子夫人は、泣きながら、小夜子の下半身に取りすがるように、まといつく。
その瞬間、小夜子は、美しい眉を寄せ、うっとうめいて、大きく首をうしろへのけぞらした。
千代やズベ公達の淫らな視線が、一せいに夫人の行為に向けられる。
「もっと、しっかり塗りこむんだ」
鬼源は、腕組みしながら面白そうに叫び、ふと千代の顔を見て、どんなもんです、というような表情をした。
「とくに——先の方へ——」
そんな事をいって、銀子と朱美はキャッキャッと笑い合う。
ふと、毒婦めいた残忍さが身内にこみ上げてきたのか、静子夫人は、ズベ公達に指摘されたとおり、壺の中のものを更にたっぷりとぬりつけた。
「ああ——嫌、嫌よ」
小夜子は、キリキリと歯を噛み鳴らし、美しい眉を寄せて、左右へ首を振ったが、そうした拒否の姿態とはうらはらに、小夜子はそれをむしろ待ち望んでいたかのように、ぴったりと閉ざしていた麗わしい太腿をゆるめ、静子夫人の苦痛の行為を、甘受しようとしているのである。
津村に激しい感覚のある事を教えこまれたのだが、静子夫人の優美でしなやかな白い指は柔らかくさとすようである。
津村の時は恐怖と嫌悪に、のたうち廻わった小夜子であるが、今、美しい静子夫人の手で甘い責苦を加えられる小夜子は、やり切れないばかりの陶酔した感情が、そこから全身にかけめぐり出し、息をはずませて、美しい顔を、くねくねと揺すった。
「ああ、おねえ様——」
うめきつつ、小夜子は、汗ばんだ体をブルブル震わせる。両手をしごきで縛られていなければ、ひしと静子夫人の体を抱きしめたい小夜子であった。
「フフフ、そこがすんだら、そっちの方にも、たっぷりすりこむのよ、奥様」
銀子が、小夜子の前に立膝をついて作業する静子夫人の肩を突いた。
「許して、許して、小夜子さん」
静子夫人は、すすり上げながら、更に壺の中のものを掬い上げ、小夜子のうしろへ廻わらねばならない。
「——ああ、おねえ様。そ、そんな、嫌っ嫌ですっ」
小夜子は、次に静子夫人の指先が——にかかると激しく狼狽して身をよじる。
「が、がまんして。ね、お願い——」
静子夫人は祈るようにいいながら、ゆるやかに塗りこみ始めた。
「——ああ——」と、小夜子は、艶やかな黒髪を振りつづけ、うめきつづけた。
次に静子夫人は、鬼源に教示されていた通り、立ち上ると、背後から小夜子のしごきで上下をきびしく緊めあげられている白桃のような柔らかい胸許を両手でそっと押さえる。
すると小夜子は、うっと呻いて、たまりかねたよう首をうしろへねじ曲げるようにして静子夫人の唇を求めたのである。
「——小夜子さん」
静子夫人は、すすり上げながら、ぴったりと小夜子の唇に自分の唇を当てた。
小夜子が、切なげに眼を閉ざし、覚悟したことをこう云う形で伝えるさまを見た千代は、ホホホと口に手を当て、笑い出す。
「まあ、お熱い事。人も、うらやむいい仲におなりになったようね」

静子夫人が、愛弟子の小夜子と遂にレスビアンの関係に落ちこんだという事がたまらなく愉快なのだろう。千代は、眼を細め、そんな二人の美女を気持良さそうに見つめながら煙草を取出して口に啣えるのだった。

静子夫人は、小夜子と唇を合せながら、小夜子に謝る気持をこめて、命じられたとおりにしなければならない境遇を嘆くのだった。

小夜子は、急に、さっと唇を離すと、

「ねえ、ねえ、おねえ様――」

と、汗で光る白い頬を夫人の頬へ押しつけるようにし、何かを甘く訴えるようにモジモジ体を揺すり出した。

「か、痒い、痒いわ。ああ、何とかして」

小夜子は、白い頬を、熱くバラ色に染め出し、さももどかしげに体をくねらせ出す。

薬の利き目は、その恐しい威力を次第に発揮し始め、鬼源やズベ公達は、段々と激しくなる小夜子の悶えと同時に、おろおろし始めた静子夫人を見て北叟笑むのだ。

「いいか、ここで一気に小夜子の体と心を作り変えちまうんだ。ここが機会(チャンス)なんだぜ。いいな」

鬼源はそんな事をいって、静子夫人の傍へ近寄ると、夫人の耳に口を寄せ、小夜子に森田組に対する永遠の服従を誓わせるよう指示したのである。

静子夫人は、消え入るように小さくうなずく。もうここに至れば、小夜子の肉と心を微塵に打ちくだき、この地獄の世界の日々に耐えぬける下等な女に改造するより方法はないのだ。それが小夜子にとって、また自分にとっての救いでもあり、逃がれる事の出来ない運命であると、夫人は決心したのである。

静子夫人は胸の張り裂けるばかりの悲しさと氷のような冷酷さとを持って、再び小夜子に立ち向かうのだった。

「どこがそんなに痒いの。小夜子さん、さ、皆さんの前で、はっきりおっしゃって」

「嫌っ、嫌っ」

小夜子は、緊縛された裸身を一層激しく慄わせて、啼泣し始める。

「小夜子さん。貴女は今、ここではっきりとショーのスターとして生れ変るのよ。ためらっちゃ駄目。さ、はっきりおっしゃって」

「――そ、そんな――ああ」

小夜子は泣きじゃくりながら、激しく首を振ったが、何が何だかわからぬ位、全身が火のように燃えさかってきたのである。ずきんずきんと突き上げてくるような激烈な痒み。

「痒い、痒いわ。ああ、おねえ様、助けて」

「いわなきゃ何時までも、このままにしておかねばならないの。さ、おっしゃって」

静子夫人は、懊悩の極にある小夜子の顔に涙にうるんだ翳の深い瞳を向けていった。

「――いいます。いいますわ。ですから、お願い、この痒みを――」

小夜子はカチカチ白い歯を噛み鳴らしながら、ぐっと顔を仰向けて、かたく眼を閉じ合わせた。そして、上の空のように、小さくかすれた声で、

「痒いの。痒いのよ。――とお尻の――」

それを口にした小夜子は、鬼源やズベ公達の哄笑などもう耳に入らない。再び、こみ上げてくる痒痛を全身でキリキリ耐えているのであった。

「それから、もう一つ、その痒みが止まったら、これを使って一生懸命、お稽古に励むのよ。おわかりになって、小夜子さん」

静子夫人は、笊の中の卵の一つを取り、小夜子の眼の前へ持って行く。

小夜子は、こっくりうなずき、

「もう、どんな事でもします。ですから、ねえ、早く――」

何かを訴えるような、何かを誘惑するよう

な、ぞっとする程美しい、ねっとりした瞳を静子夫人に向けた小夜子は、ねだりの甘い言葉を吐きかけながら、鼻を鳴らしつづけるのだった。
「静子のいう事には、一切、服従して下さるわね」
「ハイ」
「それじゃ、ここにいる皆さんの前ではっきり誓って。小夜子は今より身も心もショーのスターになりきり、一生懸命、お稽古に励みます、と——」
「ち、誓います」
　小夜子は、何か遠い幻影でも見るように、ねばっこい瞳を、そっと上に向け、
「小夜子は、今より身も心もショーのスターになり切り、お稽古に励みます」
　小夜子が、唇を慄わせながら宣誓すると、鬼源は、満足げにうなずいて、
「よし、気に入ったぜ。そうと決れば、これからは鬼源流の仕込みで、一人前の立派なスターに磨き上げてやるからな」
　といい、次に静子夫人に向って、
「今日の小夜子に対するおめえの調教はこれ位でいい。あとは銀子達に任せて、おめえの方の調教にかかるぜ」
　鬼源は、懐から、紫色の長いしごきを取出すと、
「さ、両手をうしろへ廻わしな」
　と、きびしい口調になって夫人の肩を突くのだった。
　静子夫人は、ふと狼狽し、悲しげな表情をして、悶え続けている小夜子の方をチラと見る。小夜子をここまで自分に追いこませ、苦痛の極にのたうたせた所で、急に自分に縄をかけようとする鬼源の心に、何かまた邪悪な計画があるのではないかと静子夫人は、両手で乳房を抱きながら後ずさりを始めた。
「何をしてやがるんだ。おめえはおめえで忙がしい体なんだぜ。このあとの事は、銀子達に任しとけばいい。おめえは千代夫人と一緒に隣の部屋へ行くんだ」
　鬼源はそういって、ズカズカ夫人の傍へ歩み寄ると、乳房を覆っている夫人の手を、強引に後へねじ曲げた。
　小夜子が、ふとそれに気づいて、
「お、おねえ様を連れて行っちゃ嫌っ。お願いですッ」
　と、狂ったように緊縛された身を揺り動かした。
　そんな小夜子の気持を宥めるよう銀子と朱美が、小夜子の左右へあわててかけ寄り、
「フフフ、おねえ様だって小夜子と同様、色々お稽古しなきゃならない事があるのよ。小夜子の悩みは、これから私達が解決してあげるわ。しばらく我慢しているのよ」
　そんな事を二人のズベ公がいっている内、静子夫人は、鬼源の手で、ひしひしと後手に縛り上げられている。豊満な夫人の乳房の上下には、あざやかな紫地のしごきが二巻三巻と巻きつき、静子夫人は、その場に立膝をしうなだれたまま、鬼源の縄止めを受けていた。
「さ、立ちな」
　鬼源は、しごきの縄尻を引いて夫人を立ち上らせると、千代の方へ眼くばせをした。
　千代は、陰険な微笑を浮かべて近づき、紫の縄尻を手にとる。
「さ、参りましょう、奥様。隣の部屋に用意が出来てますわ」
「何を、何をなさろうというの」
　静子夫人は、妖怪めいた千代の顔を、ぞっとする思いで見つめる。
　鬼源が、横から口を出した。
「行きゃわかるさ。今日から、おめえには高綿の技術を教えてやる。千代夫人が俺の助手

を務めて下さるんだ。有難く感謝して、さっさと歩きな」

鬼源は、そういって、ちらと銀子達の方に眼をやり、

「じゃ、さっきの手筈の通り、小夜子の方はしっかり頼むぜ。俺は千代夫人と一緒に静子の調教にかかるからな」

鬼源と千代に引立てられていく静子夫人に向って、小夜子は、全身が痺れるばかりの痒みをキリキリ耐えながら、

「行かないでっ。行っちゃ嫌、おねえ様っ」

と絶叫する。

静子夫人が今、自分の眼の前から消え去るという事に、たまらない淋しさと不安、そして、いい知れぬ恐怖とを感じ、小夜子は必死になって、声をふり絞るのだった。

「小夜子さんっ」

鬼源と千代に背を押され、調教室のドアから、外へ連れ出されようとしている静子夫人は、たまらなくなったように振返り、小夜子に声をかける。

「ど、どのような目にあっても、きっと我慢するのよ小夜子さん。死ぬ時は、貴女も私も一緒だわ。ね、約束して頂戴っ」

静子夫人は、涙で光る長い睫毛を悲しげにしばたいてそういい、鬼源の手で外へ押し出されて行った。

「フフフ、静子おねえ様がいないと、そんなに悲しいの、小夜子」

銀子は、鬼源達の姿が部屋から消えると、むしろ、ほっとしたような調子でそういい、

「でもね。あんたはショーのスターなんだから、そう静子夫人ばかり恋しがってくれても困るのよ。やっぱり、男の子を好きになってくれなきゃあね」

銀子と朱美は、何か曰くありげに顔を見合して、クスクス笑う。

「ああ――うう――」

小夜子は、いよいよ激しくこみ上って来た痒痛に、傷ついた獣のように呻きながら、ぴったりと麗わしい雪白の太腿を閉じ合わせ、額にべっとり脂汗を浮かべながら、がたがたと慄え出した。

「フフフ、とても苦しそうね。この薬は、修道院の尼でも娼婦に変えちまうという、とても値打ちのあるものなのよ。如何が。悩みをといて欲しい？　お嬢さん」

「お、お願い、気が、気が狂いそうですっ」

小夜子が、上ずった声で、あえぐように哀願すると、銀子は、ニヤリと笑って、調教室の南側にかかっている水色のカーテンを引いた。

先程から、そこでずっと待機していたらしいチンピラの竹田と堀川が、こそこそと出て来た。二人のチンピラは銀子に、

「ひどいや、姐さん。随分と待たせるじゃないか」

「だってさ、鬼源さん達のいる前じゃ、まずいじゃないか」

小夜子は、ふと眼を開き、醜悪な容貌をしたチンピラやくざが入りこんで来た事に気づくと、あっと戦慄して全身を硬化させた。

銀子は、そんな小夜子の耳をくすぐるようにし、

「ね、お嬢さん。ここにいる二人はね、何時も縁の下の力持ち。昨日だって、本当なら、あんたを抱ける所を静子がでしゃばったためおじゃんになってしまったんだよ。そこで、私と朱美が同情して、この部屋へ隠しておいたってわけさ」

つづいて、朱美が、打ちのめされたように赤らんだ美しい顔を伏せている小夜子の頬を指ではじいて、

「何も、ここでこの人達二人とおかしな事をしろというのじゃないよ。この人達に痒い

をほぐしてもらい、卵のお稽古をつけて頂こうという事だけさ。調教の一日先生を務めてもらうわけよ。わかった？」

何という陰険な銀子と朱美の計画――静子夫人が必死に小夜子をかばった努力を、水の泡にすべく、二人のズベ公は、二人のチンピラをカーテンの向こうに隠し、機会を見ていたのである。

銀子にしても朱美にしても、姐さん、姐さんと慕って来る若いやくざに姐御風を吹かしいい所を見せようとしたのかも知れない。

「いいわね、小夜子。この二人に今日はお稽古してもらうのよ。フフフ」

銀子は、小夜子にそう浴びせて、竹田と堀川に眼くばせをした。

「見てごらん、可哀そうにお尻をモジモジさせて。もう半分、気が狂いかけているのよ。早く何とか解決してあげてよ」

銀子にいわれて、竹田と堀川は、舌なめずりをするように小夜子に近づいた。

小夜子は、恐怖の衝動がさっと悪寒のように背筋を走ったが、それは一瞬の事で、忽ち激烈な痒痛にさいなまれた身をブルブル慄わせ、恐怖も屈辱も遠のき、ただ、一途にこの痒みから解放されたいという必死な気持が、そこにあるだけとなった。

「ね、小夜子。ただそうして、モジモジお尻を振ってるだけじゃ失礼よ。このお兄様方に苦しさを訴えて、早く何とかしてもらいなさいよ」

「そう。この人達の事を小夜子は、おにい様といわなきゃ駄目。わかったわね」

竹田も堀川も、小夜子よりは二つ三つ年下の十八九の札つきの不良少年である。そんな彼等を深窓に生れ育った美しい令嬢に、おにいさまなどといわせ、徹底的にいたぶり抜こうと銀子はホクホクした思いで考えたのだ。

淫虐な薬の効力は最高に達したのか、小夜子は、突然、何かの衝動に打ちのめされたよう、ぐっと首をのけぞらせた。

「おっ、おにい様っ」

もうそこには羞恥もなければ屈辱もない。小夜子は、動物的な呻きをあげて

「おにい様っ、助けて。もう、がまん出来ないわっ」

竹田と堀川は、互いに口元を歪めて、小夜子の左右から、まといつくように体を押しつけると、

「じゃ、おとなしく今日は俺達の調教を受けるっていうんだな」

「――ハイ」

「よし、わかった。じゃ、まず俺達二人と講和のキッスをしろ」

竹田は、そういって、小夜子の顎に手をかけ、自分の方へ顔を向けさせた。

小夜子は、上気の色を見せたまま、薄く眼を閉ざして、突き出してくる竹田の唇に紅唇を当てがい、濡れた練絹のような舌を竹田に吸わせる。

「お次の番だよ」

反対側から、堀川が小夜子の耳をつねって催促すると、ためらわず、小夜子は首を曲げて押しつけて来た堀川の口に、ぴったりと紅唇を合わせるのだった。

「よし、堀川、そこの青竹を取りな。足枷をかけてやるんだ」

堀川が長い青竹を持って、小夜子の足元に身を低めると竹田も縄の切端を拾って、小夜子を開股縛りにすべく身をかがめた。

「開きな、お嬢さん。――はっきり見えるまでな」

竹田は、せせら笑って、小夜子の形のいい臍を指ではじいた。

小夜子は眼をかたく閉ざしたまま、上気した美しい顔を軽くそらし、静かに、いわれた

とうりに従い始める。
「自分で頼んでおいて、何を羞しがってやがるんだ。もっとしっかり開かねえか」
竹田は、徐々に屈伏をみせていく叙情的なほどに白く柔らかい艶々した小夜子の太腿に、じっと視線を注ぎながら、今までの恨みを返すよう大きな声を張りあげる。
小夜子の、心をそそり立てるほど繊細で優美な曲線を描く腰や、なめらかで、ほっそりした柔らかそうな腹部を見つめているうち、竹田や堀川は、全身がムズムズとうずき始めて、どうしょうもなくなったようモタモタ身動きをする。
それを見ていた銀子と朱美が吹き出して
「無理もないわ。十八、十九といえば、一番激しい年頃なんだものね。それに美人のそんな姿をまともに見せられちゃ、たまったもんじゃないわ」
そして、朱美は、毛穴から血でも吹き出しそうな思いで、チンピラ二人に命じられるまま、極端なまでに従う哀れな小夜子に近づき、その足首に青竹の足枷をとりつけるのを手伝いながら
「ね、お嬢さん、この二人はちょっとばかり欲求不満なのよ。お稽古がすんだら、ちっと楽しませてあげてよ」
と、いって笑うのだった。
竹田と堀川は、小夜子に足枷を取りつけると、しばらく眼を注ぎつづける。
「へへへ、お嬢さん、はっきり顔を見せてみなよ。さぞ、羞しいことだろうね」
そんな事をいいながら、竹田は桐の箱の紐を解き始める。
「――ねえっ、おにいさまあ」
小夜子は、さももどかしげに左右へ固定された肢を悶えさせながら、
「まだ、まだなのっ。ああ、もう気が狂いそう――」
と、唇をわなわな慄わせて言った。
堀川は、ガラス棒をハンカチで拭きながら立ち上り、
「まあ、そうあわてるねえ。竹田兄貴が前、俺がうしろ、同時にこってり責めあげてやるからな」
わざとらしく、竹田と堀川が、それぞれ、手にした責め具を、小夜子の眼前に持って行き、小夜子の表情を面白そうに窺う。
「へへへ、俺達二人が得心のいくまで、おめえの悩みを取除いてやるぜ。これとこれを使ってな」
竹田は、小夜子の顎に手をかけて、その美しい顔を、ぐいと正面にこじあげた。
小夜子は、妖しい光をねっとりと瞳に浮かべ、信じられない位に妖艶な表情になって、哀願するような、甘えるような眼差しを、じっと竹田に注ぐのだった。
ざまを見ろ、こうなりゃ、もうこっちのものだ。というような含み笑いをした竹田は、堀川と眼で合図し合った。
「甘い蜜をつけて、しゃぶりてえような可愛いケツだぜ」
小夜子の背面に身を沈めた堀川は、艶々と象牙色に光る、むっちりした双尻を掌で軽く叩いていたが、竹田と顔を見合せてニヤリと照れ笑いを浮べた。
小夜子は、その瞬間、稲妻に感電したかのよう全身を大きく弓反りにし、のけぞらせた顔をひきつらせた。
それは小夜子にとって生れて始めて味わった感覚であったのかも知れない。その息の根も痺れるようなすさまじい感覚は何にたとえればいいのだろうか。
野良犬に等しい二匹の野卑なチンピラに嬲られているという嫌悪の感覚は吹っ飛び、まるでそこに命をかけたよう小夜子は火のよう

な一心となって、忽ち、煽られ、捲きこまれていくのだった。
竹田や堀川よりも、積極的に振舞っているのは、むしろ責められている小夜子の方かも知れなかった。眼はかたく閉ざしてはいるが、小夜子の雪で鞣したような内腿の白い筋肉はピーンと張り、前後の責め手に反応するかのよう、積極的とも見える光景だったのである。
銀子と朱美は、そんな小夜子の周囲をゆっくりと廻わり、好奇の眼を向けながら、
「このお嬢さん。京子や桂子より、成長するかも知れないわ。全くの掘出物だったわね」
と、クスクス話し合い、
「ねえ、小夜子。このおにい様達、年は若いけど仲々親切だろう。そうは思わない？ ね、何とかおっしゃいよ」
と、絹糸のようなすすり泣きを、うめくような啼泣に変え、キリキリ舞いをしている小夜子に声をかけるのだ。
「――ああ、もう小夜子、どうなったって、かまわないわっ」
小夜子は、捨鉢になったように激しい調子でいうと、焦点の定まらぬ瞳を上の方へ向け火のように上気した美しい顔を悲しげに曇らせた。
銀子と朱美が、小夜子に近寄って、
「遠慮しなくてもいいのよ、小夜子。でもねえ。貴女を一生懸命介抱して下さるおにい様には知らせた方がいいわ」
銀子は、そういって、そっと小夜子の汗と脂でギラギラ光る、ふくよかな胸に手を伸してくるのだった。
屈辱の涙も涸れたよう、どうしようもない切なさで諦らめと同時に、捨鉢になって来た小夜子は、唇を半開きにし、
「――お、おにい様、小夜子、――ても……？ ねえ、おっしゃって」
と竹田と堀川に、甘く濃厚な百合を連想させる匂いに包まれたような艶肌を慄わせながら、消え入るような屈辱の声を出したのである。

筆と硯

室内の隅々にまで澄んだ空気が行き渡っているような明るい十畳の日本間。その中央に静子夫人は、あぐら縛りにされて、ピタリと冷たい畳に尻もちをついていた。
鬼源と千代は、夫人をこの部屋へ運びこんだあと、階下の食堂から、舶来のウイスキーと皿に盛ったチーズを持運び、それを花梨の卓の上に並べて、一寸、一服というわけか、何かヒソヒソ小声でしゃべりながら、グラスを口に運んでいる。
「わかりました。そいつは田代社長や森田親分からもいわれている事ですし、出来るだけ早く妊娠させるよう捨太郎にハッパをかけますがね。だが、こいつばっかりは、いくら俺が名の通った調教師でも、思うようにゃいかねえもんです。ハハハ」
鬼源は、そういって、畳の中央であぐら縛りにされている静子夫人の方に視線を向けるのだった。
「それに、ああいう美人ともなりゃ、どういうわけか、なかなか身篭らねえもんらしいですね」
「ホホホ、心配しなくてもいいわよ。どうしても駄目な時は、前にいったように人工受精という方法があるわ。身を持ちくずした元、産婦人科の医者でね。アル中だけど、腕のたしかな男がいるの。もうお金も渡してある事だし、これに頼んで、外国人の血を静子に移すのよ。どう、面白いと思わない？」
「外国人ねえ？」

「そう、もし、静子に女の子が出来たとしたら、お母様があれだけの美人だもの、きっと女の子も美人だわ。今は混血児がはばをきかせているでしょ。将来、きっと混血美人のタレントに——」

千代は鬼源と一緒に、大きく口を開けて笑った。

そんな二人の哄笑を聞いて、座敷の中央であぐら縛りにされている静子夫人は、わなわなと美しい頬を慄わせ、大粒の涙をその切長の眼尻から、ぽたぽた落し始める。面長の彫りの深い、気品のある静子夫人の美しい容貌が、世にも哀しげな表情になるのを、千代と鬼源は、じっと楽しそうに眺めるのだった。

そこへ、ノックの音がして、悦子とマリが手に大きなアルバムを持って入って来た。

「何でい、そりゃ。静子夫人の秘密写真集でも出来たのかい」

と鬼源がいうと、違うのよ、と千代が笑いながら、

「この子達、一度、外国へ行ってみたいというので、参考のために、遠山家にあったアルバムを一冊、今朝方、ここへ持って来てあげたのよ。そこにいる素っ裸の奥様が、昔、欧州旅行なさった時の記念写真なのよ」

千代は、ふと、いまいましげな顔つきをして、首を垂れて、すすり上げている静子夫人の方を見ながらいった。

「あんた達、その写真の事で、何か質問があるなら、直接、本人に聞いてごらんよ」

と、千代は煙草を横に咥えて火をつけながら、悦子にいった。

悦子は、うなずき、何か怖いものにでも近づくように、静子夫人に近づく。

悦子は、最初、銀子達と同様、ブルジョア階級に対する一種の反発から、静子夫人を仲間と一緒に徹底して、しいたげつづけたが、そうした気持に最近、微妙な変化が現れ出したようだ。捨太郎達が待つ地獄部屋へ連れて行かれようとする静子夫人に、一片の布を与えようとしたり、夫人が捨太郎と醜悪な行為を行う事を不快に思い、仲間達と行動を共にしなかった。何の罪もない夫人を日夜、地獄の苦しみにのたうたせるという事が、無意味な事に思われ出したのかも知れない。

静子夫人も、悦子には、一片の人間味があるのかも知れぬと感じたのか、彼女が近づいても、銀子や朱美達の時のような硬化した表情はしなかった。涙にキラキラ光る切長の美しい眼を悦子に向け、何かを訴えるような気弱な表情をするのである。

「随分と色々な所へ行ったのね。ここは、一体どこなの。教えて」

悦子は、アルバムの一つを開いて、静子夫人の眼の前に差し出す。

「——南フランスのリヴィエラ——」

静子夫人は、懐かしげな眼差しで、悦子の開くアルバムに見入った。

自分には、こういう時代もあったのかと、静子夫人は胸がしめつけられるような思いになった。

「これは?」

「カンヌ——暖い所で、美しい花の沢山咲く所ですわ」

「これは、パリーね。ここにいるのが奥さんでしょ。きれいだわ、やっぱり」

セーヌ河のほとりを、濃紺の地に松葉模様の豪奢な茶羽織を着、ミンクのショールを軽く巻いて歩いている静子夫人。その美しさにセーヌ河の散歩客達が、横眼で見とれているといった写真であった。

千代が、のっそりやって来てニヤニヤ、アルバムをのぞきこみながら、

「この奥様はね、フランスやイタリーには、何度もいって、向うの社交界でも、大した人

気だったのよ。そうだったわね、マダム・静子」

千代は、からかうような調子で、静子夫人の端正な横顔に眼を向け、

「でもそれは以前の事。フフフ、今じゃ、秘密ショーの花形となったわけだわ。さ、華かなりし昔の事はさらりと忘れて、新しいお稽古に入りましょうよ。ね、奥様」

千代は、そういって、ふと鬼源の方を見ると、彼は、すでに天井の梁に長いゴム紐をつなぎ終え、その下に一坪ばかりもある白布を丁寧に敷いていた。

得体の知れぬ新たな恐怖を感じて、静子夫人は、あぐらに組まされた太腿のあたりを、ぶるぶる慄わせ、美しい眉を曇らせた。

悦子が、千代に聞く。

「これから、何をするんですか」

千代は、ニーと金歯を見せて、

「お習字のお稽古よ。この奥様はね、外国文字でも日本文字でも、実に達筆にお書きになるのよ。だから、これから、鬼源さんに教わるお習字でも、きっと、うまくこつを呑みこんで下さる事と思うわ」

鬼源は、床の間の違い棚を開け、あらかじめ用意してあったらしい硯と墨、そして数本の太筆、細筆を取り出して、白布の上に置いた。

「さ、お前達も手伝いな」

鬼源は、マリと悦子をせき立てて、あぐらに縛った夫人の縄だけを解き、夫人の乳白色の肩に手をかけて、どっこいしょ、と立ち上らせる。

紫のしごきで、きびしく後手に縛り上げられている、艶々と輝くばかりに白い夫人の裸身を押し立てるようにして、白布の上へ歩ませると、天井から吊り下がっている太いゴム紐を、背後に廻している夫人の手首と、胴囲わりに、きびしく結びつけた。

「筆をはさんで字を書くんだからな、伸縮自在にしておかねえと仕事がやりにくい。それで、ゴムを作ったんだ。さ、少し、しゃがんでみな」

鬼源は、静子夫人の肩と背に手を廻わして力を入れ、夫人の体を引降す。天井から垂れ下がっているゴムはピーンと張り、夫人が中腰になる位にまで伸びたので、「よし、これだけ、伸びりゃ充分だ」と、鬼源は、手を離した。

太い一本のゴム紐は、大して力のない静子夫人をぐいぐいと上へ持ち上げ、元通りに立たせてしまう。

習字の稽古。それは、どういう事を意味するのか、静子夫人には、もうわかっていた。

フランスで暮した当時のアルバムを悦子に見せられ、その時代が狂おしいばかりに切なくも恋しくなったのか、現在、こうした地獄の底で、浅ましいばかりにみじめな、犬猫よりもひどい仕打ちを受け、しかも、生きつづけている自分が口惜しいのか、泣くまいとしても、夫人の眼尻からは、大粒の涙が、とめどなく流れて、柔かい頬を濡らすのである。

「何も、泣く事はないじゃありませんか、奥様。遠山家におられた時、奥様は、月に二度か三度、先生を招いて、お習字の稽古をなさってられたのを、私、よく覚えていますわ」

すると鬼源が笑いながら、

「悲しくて泣いてるんじゃなく嬉し泣きですよ。バナナ切りを習得し、そして、次は一筆描きと、自分が段々成長した事に感激してるんですぜ」

そう千代にいった鬼源は、悦子と義子に

「お前達、墨をすりな。硯にたっぷり水を落して、濃い墨を作るんだぞ」

と命じる。

水差しの水を硯に落して、悦子と義子が

互に墨をすり始めると、鬼源は、その間、小休止だと、煙草を口に咥えながら、畳の上に置いてあったアルバムを取り上げ、眼を細めてペラペラめくり出す。

「成程、金持は違うねえ。フランス、イタリー、スイスか。随分と豪勢な遊びをしていたんだな。どうです。一寸、見てみなせえよ、千代夫人。この静子の幸せそうな顔」

　鬼源は、千代の方にアルバムの一頁を向けた。

　千代がのぞくと、それは、カラーで撮ったパリーの大きな高級ナイトクラブの光景で、一見して富裕な上流階級者とわかる盛装した男女の踊る中で、静子夫人は眼もさめるような濃い紫色のドレスに同色の長い手袋、真珠のネックレスを二重に胸に垂らし、外人に一歩もひけをとらないスラリとした見事な肢体で一人のハンサムなフランス人と踊っているのである。

「これだけ、いい思いをしてきたのじゃないの。あとは、一生、森田組のために働けばいいのだわ」

　千代は、静子夫人の絢爛としたこれまでの境遇に反撥を感じたのか、ふと残忍な色を眼に浮かべて、顔を伏せている静子夫人の方を見るのだった。

「さて、墨の具合もいいようだ。そろそろ、お稽古にかかろうかね」

　鬼源は、アルバムを閉じて、畳の上へほうり投げたが、ふと何かに気づいて、千代の方を見た。

「ね、千代夫人。この奥さんは、長い事、外国で遊び暮していたという事だが、というとつまり、外国語はペラペラという事なんですかい」

「当り前よ。美貌と教養を兼ね備えた社交界の花形じゃない。英語でもフランス語でも惚れ惚れする位にきれいな発音で、流暢なものよ。それがどうかしたの」

「実はね。こういうショーに出たがっているニグロがいるんですよ。こいつは脱走兵でしてね。全く日本語が通じないんです。俺の仲間の一人が面倒みているんですが、そう遊ばしてばかりもいられない。こいつも少し、いかれているんで、自分の方から、この種のものに出演を希望してやがるんです。金のある不良外人の客を集めて、一度、ショーをやってみたいと思ってたんですが、どうでしょうかね。そのニグロと、この奥様とをコンビにして――」

　千代は、ホホホ、と甲高い声で笑った。

「そりゃ傑作だわ。雪のように白い静子夫人と、炭のように黒いニグロとが――」

「これが正しく白と黒のショーですよ」

　鬼源も、そういって笑うと、あまりにも恐しい二人の会話に、全身をひきつらせ、気を失いそうになっている静子夫人に向かい、

「ショーに出る相手が捨太郎だけじゃ物足りねえだろう。だから、今いったジョーという黒ん坊ともからませてやるぜ。こいつにゃ日本語は通じねえ。ハニーとかダーリンとかなんとか呼吸を合わせて、仲良くしてやってくんな」

　千代が淫靡な微笑を浮かべて、全身を慄わせて、号泣し始めた静子夫人の艶やかな、うなじに口を近づけた。

「ね、奥様、捨太郎の赤ちゃんを作るのがお嫌なら、そのジョーとかいうニグロの赤ちゃんだっていいのよ。とにかく、どちらかの赤ちゃんを早くお腹へ作って下さいましね」

　この世の者とは思われないような千代の残忍な着想に、静子夫人は、ただ、身を慄わせ泣きじゃくるより手は、なかったのである。

「二三日うちに、ジョーは、ここへ連れて来てやるぜ。ま、それまで、捨太郎を相手に、

しっかり鍛えておく事だな。奴はニグロだ。きっと凄えに違えねえからな」

鬼源は、そういって、白布の上に並べてある何本かの筆を取り上げた。

「さ、お習字のお稽古にかかるぜ。何時までメソメソ泣いてやがるんだ。俺は怒るぜ」

鬼源は、急に声を大きくしていうと、いきなり、静子夫人の頬をぴしゃりっと平手打ちした。

「フランスやイタリーで豪遊した時の事を思い出して、おセンチになったらしいな。いいか、おめえには、もう過去もなけりゃ、未来もねえんだ。俺達の奴隷であるって事を忘れるんじゃないぞ。いいな」

鬼源は、静子夫人のうなだれた顔を下からのぞきこむようにして、そう浴びせる。

静子夫人は、観念の眼を閉じ、こっくりうなずいて見せた。自分は、もう奴隷以外の何ものでもないと、自分の心にはっきりいい聞かせながら、

「ごめんなさい。静子は、静子は、もう泣きません。お稽古を、つ、つけて下さいまし」

静子夫人は、未練を断ち切るように小さくいうと、すっくと首をあげ、妖しい位に冷静な表情を作り、かたく眼を閉ざすのだった。

「そうだ。おめえは、今や森田組の大スターなんだからな。そういう風に素直にならなきゃいけねえぜ」

鬼源は、気嫌を直し、戸棚の中から、三十センチ四方ぐらいに切った薄いベニヤ板と、半紙を一束取り出した。

そして、ベニヤ板に押ピンを使って一枚の半紙をぴったり張りつけると、それを持って夫人の足元に身をかがめる。

「いいな。俺が——の前で、こういう風に持ち添えてやるから、筆をはさんだら、この半紙の上で上手に書いて見せるんだ。体全体を動かしてな」

鬼源が、そんな説明をしている間、千代は鬼源の手から、数本の筆を取り、静子夫人の顔と筆とを見くらべるようにして、クスクス笑いつづける。

静子夫人は、大理石のように白い冷ややかな表情で、何だかんだと得意になって説明する鬼源の口元を悲しげに見つめている。

「いいな。わかったな」

「——ハイ」

静子夫人は、悲しげに睫毛をそよがし、線の綺麗な横顔を見せて、羞（はにか）みの色と一緒に小さく、うなずいた。

「へへへ、それから、特におめえには、うしろ書きという秘伝を授けてやるぜ。昔、バン助くずれに教えてみたが、奴等、頭が悪いんでどうしても、うしろについた筆じゃまともな字が書く事が出来ねえ。そこへいくと、何といったって、おめえは、何カ国語でもしゃべる事が出来るという教養豊かな元、遠山財閥の令夫人だ。すぐに要領を呑みこんでくれると思うぜ」

などと鬼源はいいながら、硯の横にあった細長い一本の筆を取上げた。それは先端がゴムで出来、軸が柔かい折り曲げの出来る金属で出来、その先端に筆の穂先がついている奇妙な代物であった。

「こいつは、そこではさむんじゃねえ。菊がお持ちになる筆なんだ」

静子夫人は、さっと羞恥の感情を表情に見せ、眼をそらせる。

「へえ。そんな器用な事、出来るのかしら。お尻で字を書くなんて」

義子が、吹き出す。

「ハハハ、おめえみたいな頭の悪いのと違うぜ。この奥様は、すぐに要領を呑みこんで下さるさ」

鬼源がいうと、千代が楽しそうにいった。

「面白いわ。とにかく一度、実験してみましょうよ」
「じゃ、千代夫人、如何がです。あんたに手伝ってもらった方が、この奥様も、きっと喜ぶと思いますがね」
鬼源は奇妙な筆を千代の方へ差し向けた。
「まあ、私が――フフフ、でも、まあ、いいわ。昔、色々とお世話になった静子奥様のためですもの」
千代は、筆をとって、静子夫人の背後へ廻わった。
「待ってっ、待って。千代子さん！」
静子夫人は、千代が背後で腰をかがめたのに気づくと、激しく狼狽して、身を揺すり、量感のある美しい双尻をブルブル震わせた。
「どうしたんだよ。今更、うろたえる事はねえだろ。せっかく俺が、秘伝を教えこんでやろうといってるのによ」
鬼源は、再び、けわしい顔つきになる。
「お願いです。千代、千代さんにだけは、こんな事をさせないでっ」
「何だって。どうして、私なら嫌だというのよ」
千代は、夫人のたくましいばかりに盛り上った尻を平手打ちして、舌打ちした。
「だって、口惜しい、口惜しいんです」
「口惜しいだって」
千代は、眼をつり上げた。
「自分の女中に、こんな事をされるのが辛いってんだね。ちょいと、あんた。まだ、遠山家の若奥様でいる気なの。いいかげんにしないと承知しないよっ」
まあ、まあ、と鬼源が手を出して、千代の高ぶりをおさえ、ニヤリとして、歯を喰いしばった表情をしている静子夫人の頬を指で突いた。
「おめえが最近、俺に対して柔順になってきた事は認めるが、だが、やっぱり千代夫人に対しても柔順にならなきゃいけねえ。千代夫人は、いわば森田組の重役みてえなもんだ。千代夫人を怒らせると、小夜子にしろ桂子にしろ、おめえと関係のある者は、とんでもねえ目に合わされるぜ」
鬼源は、説得するような調子で、静子夫人の耳元でいい、
「さ、千代夫人に謝って、筆をしっかりと取りつけてもらいな」
静子夫人は冷たい彫像のように、しばらく黙ったまま、眼を閉ざしていたが、はっきり覚悟したように薄く眼を開き、
「――わ、わかりました。もう二度と生意気な事は申しませんわ」
「へへへ、ものわかりがよくなってくれて、俺は嬉しいぜ」
鬼源は、ホクホクした顔つきでそういい、千代の方を見て、眼で合図した。
「マリちゃん、あんたも手伝ってよ」
千代は、マリに声をかけ、二人で、再び、夫人の背後に腰を低める。
「それにしても、全く、見事なおヒップね」
千代とマリは、顔を見合わせて笑いながら貪欲な感じさえする量感のある夫人の双尻をつくずく眺める。
「――ああ――」
静子夫人は、綺麗に揃った柔かい長い睫毛を閉ざし、線の美しい繊細な鼻を上向き加減にして、花のような唇を半開きにし、屈辱を必死に耐えている。
千代は、夫人が頑(かたく)なに腿や足に力を入れているのに気づくと、
「駄目よ、奥様。そんなに体を固くしちゃ。パリーのナイトクラブで遊び踊っていた時のような、くつろいだ気持になってごらん」
ハハハ、と鬼源は、大きく口を開けて、
「パリーやローマへ行ったって、こういうシ

ョーは、見られねえだろうな」
気品のある美しい静子夫人の顔が苦痛に歪む。
「千代夫人の仕事が、やりいいように協力しなきゃ駄目じゃないか」
鬼源に叱咤された静子夫人は、二度、三度狂おしく首を振ると、
「ああ——も、もう、どうでも、お好きなようになさって」
呻くようにそういうと、抗し切れなくなったのか、淫靡ないたぶりが、ふとじれったくなったのか、女臭さがムンムン匂うような、肉づきのいい太腿から、すっと力を抜くのだった。
千代とマリは血走った思いになって、筆をとりつけようとする。
静子夫人は、電気に打たれた時のような激しい声を上げ、美しい象牙色の頬を火のように熱く染めながら、
「痛いわ。嫌、嫌。そんな乱暴なの、嫌っ」
と、昂ぶった声で叫びつづけるのだった。
「少し位、痛いのは、がまんなさいよ奥様。ここは高名紳士や淑女の集るパリーの社交界じゃないのよ」
千代は、クスクス笑いながら、マリと一緒になって、一気に……てようとした。
再び、絹を裂くような声が夫人の唇から洩れる。
「駄目、駄目よ。ああ——」
静子夫人は、大粒の涙を流しながら、上わずった声で、
「お願い、……でも——」
と、あえぎあえぎ、切れ切れに口走るのだった。
鬼源は、眼を細めて、そんな光景を見つめている。静子夫人が、苦悩し、戦慄しながらも、何とか、鬼源の命令に従おうとして、千代達に協力を示しているのが痛快なのだろう。
「どうしたい、悦子。何だか浮かねえ顔してるじゃねえか」
鬼源は先程から、少し離れた所に立って浮かない顔つきをしている悦子に眼をやった。
「いくら何でも、少しひどいと思うわ。もう少し、人間的に扱ってやったら、どう」
「何をいいやがる。柄にも合わねえ仏心なんか出すな。この奥様はよ、今まで、天下の美女だと騒がれて、栄耀贅沢して暮して来たんだ。お前達、上流階級の人間が憎いんだろう。さ、ぼんやりしていねえで、千代夫人に手伝いな」
悦子は、眼を静子夫人の背後へ戻した。
千代とマリは、夫人の言葉をめずらしく受け入れ、万遍となくコールドクリームをぬりたくっている。
責め手の胸に沁みこむような優雅な啼泣をその口から洩らして、さも切なげに、なよなよと双尻をくねらしつづける静子夫人。
「ホホホ、それはフランスで覚えてこられたお尻の振り方ですの、奥様」
千代は、そういって笑い、再び、筆を取り上げた。
またもや、火にでも触れたような悲鳴が、夫人の唇から洩れる。
「いいかげんにしてよ、奥さん。希望通りクリームまでぬってあげたのに」
マリが舌打ちして、ぴしゃりと夫人の尻を平手打ちし、強引に……もうとする。
「お待ちよ。私がしてあげる」
悦子は、不満げなマリの手から筆をとり上げた。
静子夫人の苦痛を、少しでも柔らげようとするためなのか、悦子は、用心深く、ゆっくりと——
静子夫人は、深く息を吸いこみ、うーんと

甘ったるくむずかるように身を一つくねらせる。何ともいえぬもの哀しげな、ねっとりした瞳を上の方に向け、その眼をゆっくりと閉ざしながら、わなわな唇を痙攣させる。

ギラギラする眼を向けていた千代は

「なかなかうまいじゃないの。一寸、私に代って——」

と、悦子を押しのけ、更にぐっと………る。

静子夫人は、その美しい容貌に名状の出来ない悲痛な色を浮かべ、獣のように生々しいうめきを発しながら、全身を弓ぞりにした。

「ホホホ、こうなりゃもうどうしようもないわね。如何が。元、女中にこんな事されて、口惜しい？　ねえ、奥様、何とかおっしゃってよ」

千代は、勝ち誇ったような顔つきになって夫人の尻たぶを指ではじいた。そして、しげしげと、深………こまれている筆を見つめるのである。奇妙な観物である。千代は信じられぬ思いだったのだ。

ある種の女には、セックスの歓びと役割りを果たす事があると鬼源はいう。鍛え次第では自在に珍芸を披露する事も出来るというのだが、鬼源が静子夫人を仕込み甲斐のある最高の女だと見ているのは、そういう所にも計算があったのかも知れない。

静子夫人は、むせぶような啼泣を断続的に口から発しながら、妖しいばかりに優雅な横顔を見せ、瞼を閉ざしている。

「女狐が、とうとう尻尾を出したという感じね。ホホホ」

千代は、してやったりといわんばかりの表情で、しばらく、そんな夫人を楽しそうに見つめていた。

鬼源は、夫人の背後に廻わって、点検し、満足げにうなずいて立ち上ると、

「普通の女なら、こうも見事にゆくもんじゃねえ。やっぱりこの奥さんは何から何まで特級品なんだ」

といい、次に太い筆を千代の手に渡した。

千代は、微笑して、うなずくと、夫人の前面に廻わった。

「こっちもよ。さ」

静子夫人は、繊細なすすり泣きを洩らしつつ、それを受取ろうと協力し始める。

「二刀流の使い手に仕上げるってわけね。傑作じゃない」

マリが、ガムをぺっと吐き出して笑った。

無器用な手つきの千代を見ると、静子夫人は、美しい眉をしかめて、悲しそうに眼を伏せる。が、突然に、別人のような態度になった。

「——ち、ちがうわ。そうじゃないったら千代子さん」

千代が、びっくりしたように上を見上げると、静子夫人は、ねっとりした仇っぽい視線で千代を見下し、その陰影を湛えた、ぞっとする位に美しい静子夫人の情感的な眼の色。

「——静子は、これでも女ですわ。そんな乱暴な、なさり方は嫌」

静子夫人は、遂に身も心も、千代の軍門に下ったのか。しっとした情感と冷静さを表情に現わし、気弱だが、ねばっこく吸いつきそうな眼差しを千代に向けて、語りかけているのである。

鬼源は、静子夫人が千代に対し、柔順な態度に出て来たようなので、ほっとした気分になる。やれやれといった思いで、元、主人であった遠山静子と元、その女中であった千代とのやりとりを興味深そうに見つめていた。

「どうなんです。奥様」

「ううん。バカ、バカ、御存知のくせに」

「ホホホ、わかったわ」

「おわかりになって、千代子さん」

ようやく仕事を終えて、千代が立ち上ると鬼源は煙草を横に咥え、眼を細めて拍手をした。マリも、キャッキャッと笑いこける。

千代は、床の間に置いてあったカメラを取ると、みじめな姿の静子夫人をフィルムに収めようとして、夫人の周囲をぐるぐる廻わり出す。

暖かい乳色に霞む柔らかそうな裸身を濃い紫地のしごきで後手に縛られ、一本の太いゴム紐に支えられて白布の上に立っている静子夫人。上下にかかった紫のしごきをはじき返すばかりの豊かな美しい乳房にせよ、とりつけられた筆を支えるかのようぴったりと閉じ合わせている妖しい悩しさをもった官能的な太腿にせよ、眼に泌み入るばかりの肌の白さであった。

「はい、奥様、こっちを向いて。眼を大きく開いてごらん」

千代は、静子夫人の側面から背面から、カメラをかまえてパチパチ、シャッターを切りながら、再び、夫人の前面に廻わった。

静子夫人は、象牙色の端正な顔をそっと上げ、しっとり潤んだ翳の深い切長の瞳を千代のかまえたカメラに向ける。

憂愁の色と何か淋しげな深い陰影を湛えた夫人の容貌は、暴力使行者の心まで濡らさせるような優雅なばかりの美しさであったが、そうした芸術品のように美しい夫人の裸身を滑稽な姿に仕上げる事が、千代と鬼源の狙いであったのだ。

「ホホホ、あんまり滑稽なので、シャッターを押す指が慄えて困るわ」

と、千代は、笑いながら、

「出来る事なら、この写真、パリーやローマにいる奥様のお友達に送ってあげたいものだわ。ホホホ、マダム・シズコのショー・スタイルという事で――」

鬼源は、何やら、半紙に筆を動かせて書いていたが、ついと立ち上り、

「さて、そろそろ、お習字のお稽古にかかろうぜ」

と、半紙を張りつけたベニヤ板を千代に渡し、それを夫人の前面で持ち添えるようにいった。

「これから、二時間、みっちり前向きで書く

練習だ。そのあとは夕方まで、うしろの筆を使う練習。わかったな」
　鬼源はそういって、白布の上に跪ずくと、筆の先端を歯で噛みほぐし、それに硯を持上げて墨を浸す。
「新しいお稽古ね。しっかりがんばるのよ」
　千代は、愉快そうに、半紙を張ったベニヤ板を筆の前へ近づける。これから、静子夫人が落さないようにしながら、どういう風にして、この半紙の上に文字を書くのだろうと思うと、千代は笑いが止らない。
「最初の二、三枚は、俺が手ほどきしてやるぜ」
　そして、鬼源は、横でポカンと口を開けているマリに、「これがお手本だ。静子の眼の前で持っていな」と先程、自分が半紙の上に書いたものを手渡す。
「まあ、いやだ。これが習字のお手本なの」
　マリは、それに眼をやると、ぷっと吹き出した。
「ブツブツいわず、静子奥様の眼の前へ持っていくんだ」
　鬼源はそういって夫人の背後へ廻わり量感のある夫人の腰を手でかかえるようにする。
　マリは、お手本を夫人の眼前にかかげる。
　鬼源に書かれた×××の四文字。恐らく夫人は、うろたえるだろうとマリは思ったが夫人は、空気でも見るような無表情さで、涙の乾いた澄んだ瞳を、じっとそれに注いでいる。数々のいたぶりに驚きや狼狽する気力さえ喪失しているのかも知れない。
「さ、始めるぜ。途中で筆をおっことさないよう気をつけるんだぜ」
　鬼源はそういって、両手で抱えた夫人の腰をゆっくりと、うしろから廻わし始めた。
　突きつけるようにその前へ千代が差し出しているベニヤ板の上に一字を書き終えると、鬼源に命じられた悦子が、夫人から筆をそっととり、硯の墨に穂先を浸すのだ。
「へへへ、どうでい、面白いだろう。やろうと思えば――でもこうして立派な字が書けるんだ」
　鬼源は、夫人の脂肪の乗った豊満な双尻を軽く叩いて笑った。
　悦子の差し出す筆をうしろから手をのばして受け取った鬼源は、そのまま、深くとりつけて再び、ゆるやかに動かし始める。
　四文字を書き終え、最後に、しずこ、とサインまでさせた鬼源は、ベニヤ板を手に取って、満足げにうなずき、
「なかなか筋が良さそうだぜ。二、三日、みっちり練習をすりゃ、客に色紙を書いて渡す事も出来るさ。さ、あとは自分一人でやってみな。俺達は一寸、一服だ」
　鬼源と千代は、机の前に坐り、ウイスキーを飲み出して、マリと悦子にあとを任せた。
「さぼらず、みっちり稽古をするんだ」
　鬼源は、じっと静子夫人を観察しながら、ウイスキーを口に流しこむ。
「――悦子さん、お願い、筆に墨をつけて下さいまし」
　静子夫人は、しっとり潤んだ美しい瞳を悦子に注いでいった。
　悦子は、線の綺麗な、妖しいまでに冷淡な表情を強いて作っている夫人の顔を、哀れっぽく見上げながら、筆の穂先を墨に浸した。
　マリが、新しい半紙を張りつけたベニヤ板をその前へ近づける。
「お願い、マリ子さん。もう少し前へ近づけて。そこじゃ、とどかないと思いますわ」
　静子夫人は、その象牙色の頬に、哀しげな微笑をちらとうかべてマリに頼むのである。
　自分のおかれた運命を心底から収受し、静子夫人は人間的な感情は一切投げ捨てて、この醜悪な芸当に、いどみ出したのである。

そうした夫人の心情を感知した鬼源と千代はニヤリとして視線を合わせあい、グラスとグラスをカチンと音をさせて触れ合わせる。

悦子が墨をつけた筆を持ち、夫人の前に立膝をして腰を落すと、こわれものにでも触れるような用心深さで、しかし、また驚く程の器用さで、ゆっくりと取りつけていく。

「遠慮せず、痛かったらいうのよ、奥さん。どう？」

静子夫人は、羞らいのこもった美しい顔をそっと横へむけながら、軽く、甘えるように首を振った。

「――手加減して下さらなくてもいいわ、悦子さん。それより、お願い、おっこちないように――」

再び悦子の手で、しっかりと筆をとりつけられた静子夫人は、能面のような無表情さでマリの持つ半紙の上に筆の穂先を当てるのである。

官能的な曲線を描く夫人の優美な腰がゆるやかに孤を描くように動き始めた。

半紙の上をたどたどしくなする穂先の墨がきれる毎、悦子は夫人の前に坐り、両手を軸にかけて、そっと取り、硯の中の墨をたっぷりと穂先に吸いこませている。

悦子が、夫人に疼痛を与えまいとして、取りつけに時間をくっていると見た鬼源は、

「よ、悦子、何もそう気を使う事はねえよ。元は遠山財閥の令夫人か何だか知らねえが、今はこの鬼源の奴隷同然だ。最低のバン助でも仕込むような調子で、ぶちこんでやんな」

と、卓の前から大声をあげた。

悦子は、それに答えず、ゆっくりした動作で仕事をつづけながら、先程見た夫人のアルバムの写真を思い出している。

粋で豪奢な藤色の小紋の着物を着、白皮のハンドバッグをかかえて、セーヌ河のほとりを幸せそうに散歩していた眼もさめるような美女が、今、ここで、緊縛された光沢のある優美な裸身にギラギラ脂汗を浮かべながら、腰をひねって卑猥な文字を書かされている

――そう感じると悦子は、果してこれがこの世の出来事かというような不可思議な気分になってくるのであった。

「俺がよしというまで休ませず、何枚でも書かせるんだ」

と鬼源は、何杯目かのウイスキーにかなり調子がくずれてきたらしく、ダミダミ声を出してそういい、静子夫人が一枚書き終える毎マリにそれを持って来させて、千代と一緒にゲラゲラ笑いながら批評し合うのだった。

何枚かを、全身をくねらせ天井から垂れ下がるゴム紐の音を軋ませて書きつづけるうちに、静子夫人の額にも首筋にも乳房にも、ねっとりした脂汗がにじみ出す。

介添役をしている悦子の方が、それを見るに耐えられなくなったのか、鬼源の方へ顔を向けていった。

「ね、少し、一服させてあげてよ。可哀そうに、これじゃ、体が参っちゃうわ」

すると、鬼源は、馬鹿野郎、と一喝した。

「昔、吉原で、この道の修業をやっていた娼婦達は、一日、五十枚は練習したもんだぜ。それだけいい体をしている女だ、五枚や十枚ぐらいで音をあげさせるねえ」

そうどなった鬼源は、酒くさい息を吐きながら、フラフラ立ち上ってやって来た。

艶々とした、肉づきのいい太腿から内腿にまで、ねっとりと脂汗をにじませて、描いた四文字の最後に、しずこ、とサインした静子夫人を、鬼源は口元を歪めて、頼もしげに見ながら、

「仲々、筋がいいぜ。成程、書道の心得もあるだけに、こいつは呑みこみが早いや。この分じゃ、この芸当にしても日本一になれるか

も知れねえ」
　鬼源は、そういって、新しい半紙にさらさらと字を書き、「次は、あと四文字追加だ。こういう風に書いてみな」と、新たな手本を夫人の眼の前へ持って行く。
　静子夫人は、鬼源の示した、「しずこの×××」という文字に、ねっとりとした黒眼がちの美しい瞳を向け、ぽーと羞らいの色を頬に浮かべて、顔をそらせた。
「へへへ、何ともいえぬいい気分だろう。そこを使って、こういう文字を次々書かせてもらえるってのは」
　鬼源は、せせら笑って、ハンカチを取出し夫人の額の汗や乳房の汗を拭きとったが、次に夫人の熱く染まった耳たぶに口を寄せ、卓の前で、いい加減、酔払い、無気味にすわった眼つきをギョロギョロさせ始めた千代の方を見ながら、口を開いた。
「千代夫人が酔っ払って来たんだ。あの人は酒ぐせが悪いんで俺も閉口さ。だからさ、おめえ、千代夫人の御機嫌を一生懸命、ここでとっちゃくれねえか。千代夫人を悦ばす事が出来るのは何といっても、おめえだからな」
「――どうしろと、おっしゃるんですか」
　静子夫人は、悲しげに眼を閉ざし、小さく口を開いた。
「つまりだな、ここでもう一つ、千代夫人に完全に屈伏した事を、はっきりおめえに示して欲しいんだ。こういう風な仕事が楽しくて仕様がねえっていう風にな」
　鬼源は、夫人の耳に口を寄せ、ニヤニヤしながら、あれやこれやと、ささやき始める。
　ここ一番、静子夫人を決定的にまで千代の前に屈服させ、永遠の服従を誓わせようとする鬼源の肚である。現在、静子夫人は、身心ともに、秘密ショーのスターとしての完成が近づいている。だが、元遠山家の女中であった千代に対しては、夫人は、ふと、憎悪の色を示すようだ。そうした観念をこの際、完全に喪失させ、はっきりと夫人の心にとどめをさそうと鬼源は考えたのである。
「わ、わかりました」
　静子夫人は、柔かい睫毛を悲しげにそよがせて、柔順にうなずいた。
「――静子は、静子はもうこの運命から逃れる術（すべ）のない女ですわ。何でも、おっしゃる通りに致します」
「よくいってくれたぜ。それで俺も一安心だぜ」
　鬼源は、くるりと千代の方を向いて、
「千代夫人。この奥様が、お呼びになってますぜ。聞いて欲しい事があるんですとさ」
　千代は、アルコールに濁った眼をギョロリと向き、フラフラ歩いて来た。
　鬼源は、ふらつく千代の肩を抱き支えるようにして、
「この奥様がね、今まで千代夫人に対して、色々失礼な態度をとったけど、どうか許してくれるよう俺に頼んでくれというのですよ」
　千代は、それを聞くと、片頬を歪め、憎々しげに静子夫人を見た。
「フン、お習字のお稽古が辛いんで、私にゴマをすり、休ませて貰おうという肚なのね。そうは問屋がおろさないわよ。こっちがよしというまで、五十枚でも百枚でも、書き続けるのよ」
「――ち、違います」
　静子夫人は、千代に哀切的な影の射す瞳を向け、気弱に首を振った。
「静子は、静子は、千代子さんに感謝しているのです」
「感謝だって?」
「本当の事を申上げますわ。静子は、このようなお稽古をするのが、楽しくてたまらないのです。静子の体の中には、こういうものを

悦ぶ血が流れていたのですわ」
千代は不思議そうな顔つきになり、鬼源の顔をチラと見たりした。
「自分がそうした女である事を知られるのが辛く、静子は口に出せなかったのです。でも、もう隠したりは致しません。パリに遊学していた当時やスイスの湖あたりで遊んだ頃より、静子は、このように素っ裸にされ日夜、羞しいお稽古を強いられている方が、ずっと幸せに思うのです。お願い、お笑いにならないで――」
そういう事を口にした静子夫人は、何か、たまらないものがぐっと胸にこみ上げて来たのか、大粒の涙が切長の眼尻から流れ、白い柔らかい頬を濡らした。
「へえ、一寸、信じられない感じねえ。でもそれが本当なら、私としても、こんな嬉しい事はないんだけど――」
千代は、そういって、しゃっくりをしながら、ぴったりと夫人の傍へ寄り添い、紫のしごきで緊め上げられている夫人の豊満で優美な乳房を指で押しながら、
「じゃ、最初の方針通りに、私、奥様を思いのままにするけどいいのね。何ども、奥様とお約束している事だけど――」
静子夫人は、涙でキラキラする二重瞼を千代に向けて、すすり泣くようにうなずいた。
「――わかってますわ。千代子さんのおっしゃる通り、静子は、このお屋敷で、赤ちゃんを生みます」
「よくいって下さったわ。それだけは固くお約束しましたわよ。奥様とそっくりの美しい女の子をお生みになって頂きたいものだわ」
静子夫人の背後でしゃがみこみ、煙草を吸っていた鬼源が、夫人の尻の間から出ている細い筆を指ではじいたりして遊びながら、
「生む生むといったって、口先だけじゃ駄目だぜ。今夜は、捨太郎といよいよゴールインだ。奴の種をしっかり腹へ収めるよう努力しなくちゃいけねえ」
などといって、黄色い歯をむき出した。
千代は、急に、しくしくと声をひそめて、すすり上げ出した静子夫人の柔軟な肩に手を

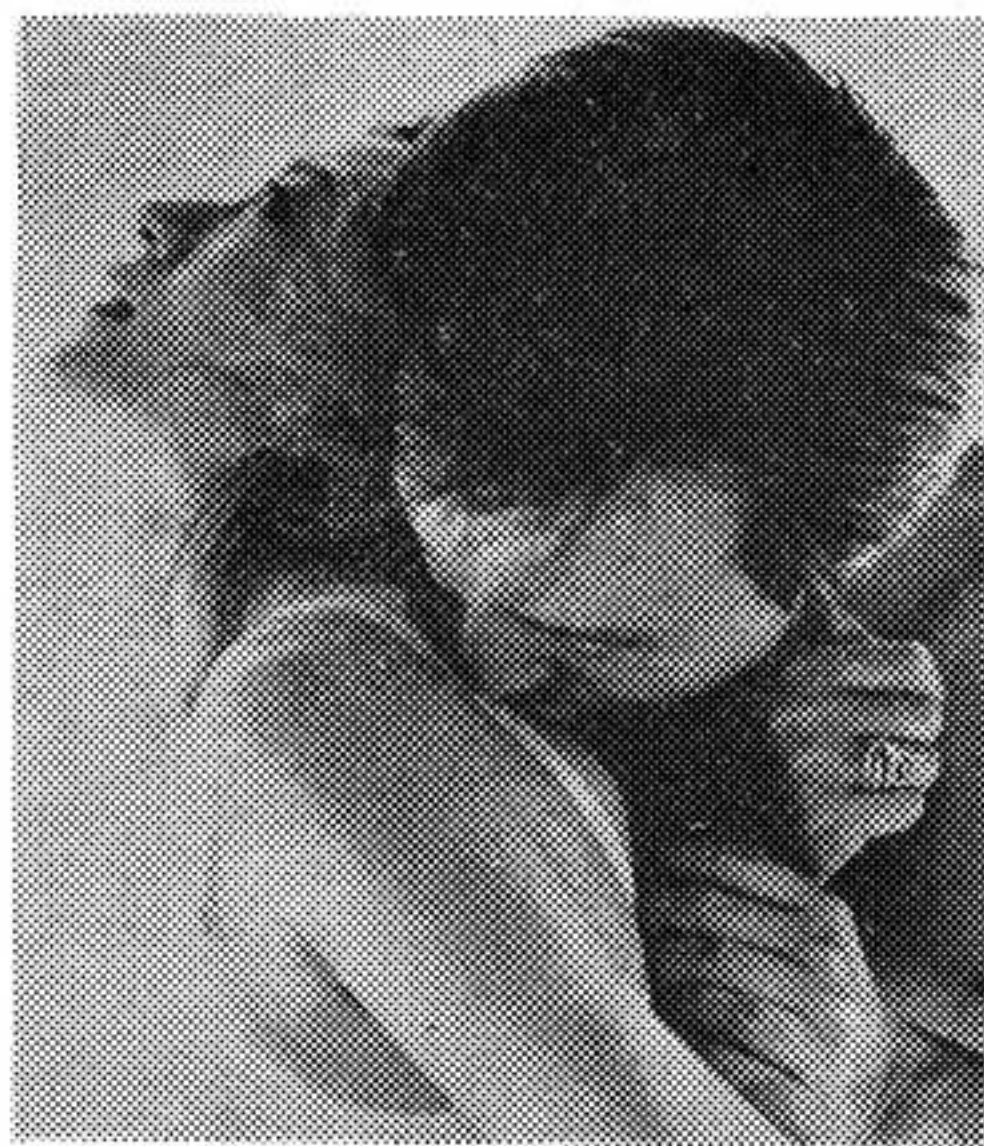
優しくかけて優しい口調になっていった。
「さ、奥様。赤ちゃんがお腹に出来る前に、鬼源さんの教えて下さる芸事だけは全部覚えなきゃいけないわ。元気を出して頂戴」
静子夫人は気を取り直したよう、涙を振り払って気品のある美しい顔を正面に上げた。
「――ごめんなさい。また、泣いたりしちゃって。さ、お稽古をつづけて下さいまし」
よし、来た、と鬼源は立ち上り、双肌抜いでキリキリと向う鉢巻をしめた。
悦子が、たっぷり墨を含んだ筆をとりつけると、マリが半紙をベニヤ板に新しく張りつけ、立膝して、夫人の前へ差し出す。
鬼源は、今しがた半紙に自分が書いたお手本を片手に持って夫人の眼の前へ押しつけ、片手を夫人のふくよかな肩にからませて、
「まず書く前に、このお手本を大きな声を出して三度ばかり、つづけて読むんだ」
静子夫人は、ふと心をととのえるかのように軽い瞑目をしていたが、そっと眼を開けると、鬼源の持つ半紙に眼を注ぎながら、小さく紅唇を開いた。
「しずこの……」
ハハハと鬼源が大口を開けて笑うと、それにつられて千代が口を手で押さえ、肩を揺すって笑いマリがキャッキャッと笑いこける。
「うん、お笑いになっちゃ嫌」
静子夫人は、全身に燃え立つような甘美な色気と、うずくような羞らいの色を浮き立たせ、甘くすねるように、くねくね全身を揺るがしながら、も一度、ハスキーな声でそれを口にした。三度目、それを口にする時は、艶やかに冴えた乳白色のうなじをくっきりと浮き立たせ、恍惚境に浸るかのよう、深い吐息と一緒に――。
「ヘヘヘ、さすがの俺も、何だか変な気分になって来たぜ。さ、次は字の方を書いて頂こうか」
鬼源が、夫人の薄紅に染った頬を軽く指で押すと、何かにとり憑かれてしまったのか、静子夫人は、汗ばんだ優美な肉体をくねくねと、もどかしげに揺り動かしながら、
「ねえ、鬼村先生」
と、羞らいのこもった甘い声を出した。
「これがすんだら、もっと、もっと、羞しい事を静子に書かせて。一生懸命、静子、お稽古するわっ。ああ、もう静子は、静子は、どうなってもいいの。いいのですっ」
酔い痺れたように、そんな事を優雅な身悶えをくりかえしつつ、口にした静子夫人は、ポロポロ涙を流しながら
「――小夜子さん、京子さん、桂子さん。静子は、とうとうこんな所にまで転落した女になったわ。笑って、笑って、笑って頂戴」
と、祈るように口に出していった。
遂に、ここまで、美貌と教養を兼ね備えた大財閥の令夫人を追いこむ事が出来たか、と鬼源は快心の笑みを洩らす。
「よし、わかった。奥さんがそういう風に出て来てくれるのをこっちは長い間待っていたんだぜ。この稽古がすんだら、お望み通り、こたえられねえ程の羞しい目にあわせてやるからな。さ、それを楽しみにして、早くお稽古にかかんな」
静子夫人は、鬼源が眼の前へ押しつけているお手本に、うすら冷たいばかりに白く繊細な面長の顔を、も一度、向ける。
――書けばいいのでしょう。書いて見せますわ――と静子夫人は、ふと鬼源達に挑戦する思いとなり、筆をぐっと押し出すようにし、幻想的なまでに色白のむっちりした二つの太腿をマリが持つ板へ押しつけるようにした。
滑稽な尻尾。たくましいばかりに盛り上った見事な静子夫人の双臀が悩ましく輪を描き、筆の穂先は半紙の上を黒々と染めていく。

映画通信

私の見た緊縛映画

細川英治

最近見た映画の中で「信じられぬ世界」という、われわれが日常をおくっている現実の世界によくある残酷さを、とりあげているイギリス映画がある。

その中で、イギリスの有名な前衛カメラマン、ジーン・ストレッカが、自室を改造した自慢の、スタジオが出る場面があるが、その一室には、いつも一種異様な雰囲気と、熱気がただよっている。それもそのはずで、彼は天才的なサド写真家で〝縛られたニグロ〟の撮影中。一人のニグロの娘が、両手から両の乳房にかけてしばり上げられ、天井から吊り下げられて呻いており、G・ストレッカーの注文で苦もんの表情をうかべている。その黒人娘の豊満な体は見事なもので、縛られた女体の下には前衛的な枯木をはりめぐらし、りっぱな調和がとれていて、別の世界をのぞく様な感じを与えるシーンがある。又、豊満な金髪美女が犬の首輪をつけられ、鉄の鎖を繋ぎ、それをG・ストレッカーの助手に曳かれて犬のように床を這っているシーン。その前にはいろいろな障害物がおいてあって、なかなか前には進めず、そろりそろりとにじり進むのを、G・ストレッカーのカメラが、ゆっくり追いながら、うつして行く。

その他にも、後手縛りにされた女が、正面を向いて立たされており、助手が乳房からまた下にかけて、冷く重い金貨をザラザラと落す。女はその冷さに身をふるわせる、と言うような場面がある。世界的に名の通ったサド写真家は、やる事がやはり、けたはずれにすばらしいと、感心したものである。

「世界猟奇地帯」の中でのナチスの軍人が、かくれ住んでいるユダヤの少女を見つけだし、いろいろ拷問したあげく、リンチする残酷シーンが人気を呼んで、もう、十二年間も

ハンブルグの劇場を満員にしているそうである。ヒットラー時代のやり方そのままに、顔に平手打ちをくわし、両手首を縛って天井から吊り下げて鞭打つ。それも革の鞭で、実際に相当きつく叩いている様子がはっきり分った。その外、かみそり責めなどがあり、ナチスの隊長は、拷問されるいたいけな少女の悲鳴を聞きながら、ものうげにあくびをしているというシーンがある。

又、中にレバノンの女奴隷売買の実態がある。レバノン地方では、いまだに女奴隷市が立つそうである。この国でも奴隷売買は法律では固く禁じられているので、当然極秘の内に小高い山の上でおこなわれる。その奴隷は黒人が大部分であるが、中には金髪の白人娘もいて、買い手のレバノン人にとっては、この上なく素晴らしいお買物となる。いわゆる買主のおもちゃであり、セックスの道具になるわけで、時たま男奴隷もいて、これは肉体労動をさすわけでは無く、ヨーロッパ地方の富豪の未亡人の夜のペットになるらしい。

奴隷達は、箱に入れられてトラックで、レバノン郊外の山あいの、小高い丘の上に連れて来られ、買い手が集まった所で、丸裸にされて、買い手全員に値踏みをされるわけである。買い手達は、初めはおだやかであるが、しだいに興奮してわめきちらし、欲望をむきだして、目を血ばしらせる。いやがり、尻ごみする女奴隷もいるが、鞭で尻をたたかれ、売手の二、三人の大の男におさえつけられ、かんねんして身体検査をされるのだ。買い手は女奴隷の乳房、ウエスト、双尻などを入念に調べて品定めをし、くちびるをまくり上げて歯の検査も綿密にする。白人娘の奴隷は値段が高いので、買い手、十人位が金を出し合って落札させ、自分達の物になると丸裸のまま自家用の車の後部荷台につめこんで帰ってゆく。「その買手の車の中には、ある国の王家に関係のある、バックナンバーがつけてあった」と解説はいう。

（丸裸である女達の全身像は、初めから、フイルムにキズをつけ、かくすべきところはかくしてあるが…ときたま、女奴隷が動いた時などに一しゅんであるがかくし落しがある様な気がした。ほんとうに動物（牛や馬など）のように売り買いされる奴隷達は、つくづくあわれであると思った）

この映画を作った監督は、この奴隷売買の実態をフイルムにおさめる時、その熱っぽい異様なふんいきに、あっとうされ、まるで白日夢を見ている様だったと語っている。

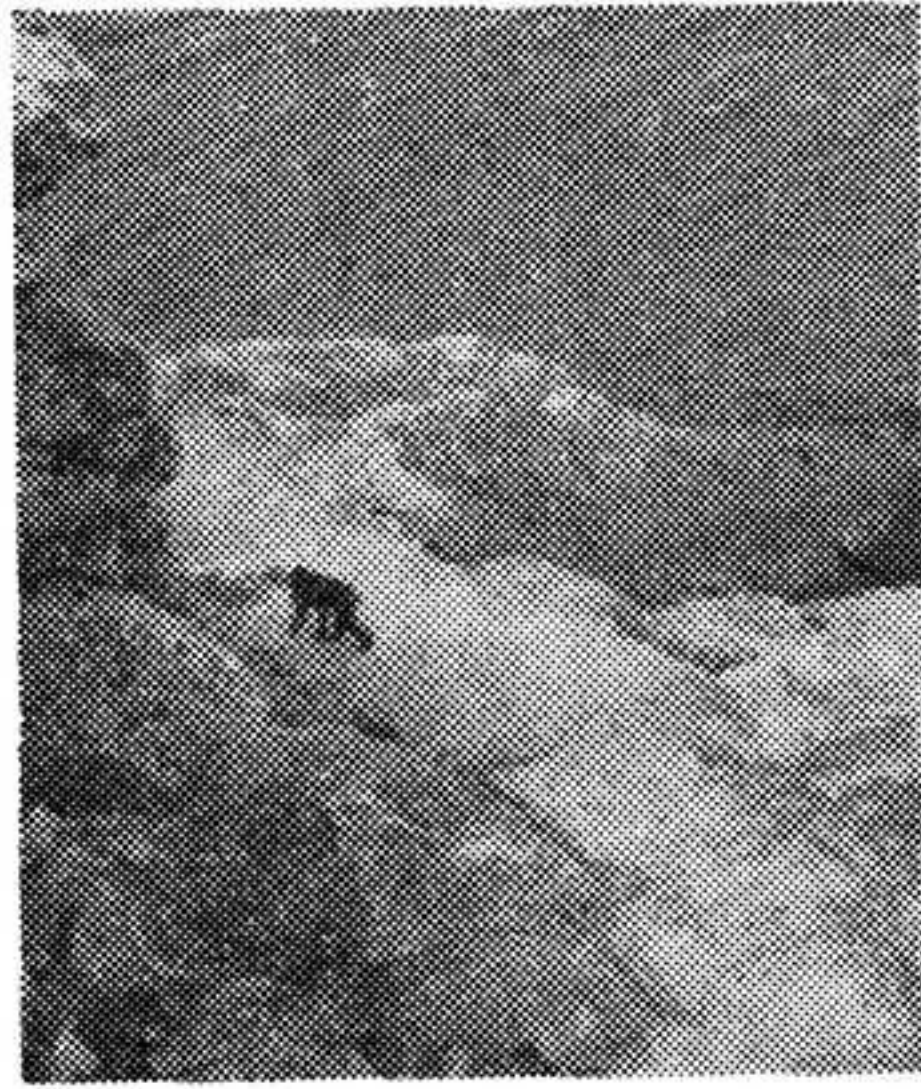
メキシコの国境町、ティファナは、売春婦の供給地となっているそうである。この町はとても貧しく、どの家も食うか食わずなので娘達は、その貧困をすくうために、売春婦として売りに出される。娘達は売春婦となっても、この貧民窟にいるよりは好い暮しが出来るので、あまり悲しそうな様子はない。

その取り引きは、白昼なかば公然とおこなわれる。ひとりずつ、ふつうの家の庭に出された女達は、業者達が十数人居並ぶ中で素裸にされて、まず肌の色、次に乳房、ウエストお尻の形などを調べられ、最後に、一番大切な商品価値も品定めをされる、品調べが終ると、お尻を業者の一人にぴしゃりと平手打ちされて、引きあげる。それが合格の合図らしく、高い値で買われてゆく。

それが、皆、グラマーで金髪の美女ときているから、こたえられない。

「女体蒸発」この映画はたしか東和映画だったと思うが、ある大学の教授が、妻が外の男と仲がよくなり、自分の許を去った事から、世の中の女性を憎み、復讐する事をくわだてる。そして、いともおかしな、お面をつけて、町の若い女の子を二、三人さらって自分

の山奥の別荘に、とじこめる。
まず始めに、最初にさらってきた女の子を、うすいパンティだけの裸にしてあお向けにベッドの四隅の柱に両手、両足を別別にして、きっちり縛りあげる。そうしてその娘の両乳首、へそ、両手、両腿に、電線を取りつけておいて、スイッチをおし、電流を流す。緊縛された女の子は、ギャーギャーという動物的な悲鳴をあげて、もだえ苦しむが、縛られていてはどうにもならず。電流を流すたびに、縛られた女体がぶるぶるふるえピーンとそりかえったりはね返りそうになる。大学教授は、女の子のギャーギャー、ヒーヒーという声を聞きながら、壁にかけてあった皮の鞭を、やおらふり上げると、そのもだえ苦しんでいる女体の上にピシリ、ピシリと音を立てて振りおろすのである。（非情な実験のモルモットにされている女の子の電流責めと、鞭打ちの合せ責めが、すばらしい）
又ある時は、ベッドに、ちがう女の子をうつぶせに、縛り上げる。女の子は、麻酔注射でもうたれているのか、意識はない。
両手は一つにたばねてベッドの上部に、そして両足も合せ、きつく縛ってベッドの下部に縛りつけうつぶせにしてある。教授は刺青の道具を運び出して、その娘の背中にピカソのかく様な絵を彫るのである。それがうまくかけると、その刺青をした部分だけをメスで切り取り、自分のコレクションとして額に入れてかざり楽しむのである。まことに残酷な場面が多い。その上、刺青が失敗した時は、教授は、かん**しゃく**を起し、女の背中にメスをつきたてて殺してしまう。
最後には、逃げた妻まで誘拐して来て、ベッドに仰向けにしばりつけ、ビシビシ鞭打ちの連打をあびせる。その外、妻に動物ワナ（ウサギやタヌキを獲る）をしかけ、ワナに足を噛ませ、アリ責めにする場面もある。
又、刑事の妹を誘拐しようとして失敗し、遂には自殺するのであるが、その娘を自分の車の中でえび縛りにして、放置するシーンもなかなか楽しめる。
別荘の地下にある実験室へ、丸の内のＢＧと、バーのホステスを誘かいしてきて、二人の、若い女性達の皮膚に電極を通し、交替に電流を流し、そのたびに呻きもだえながら、女体がえびの様にピーンと反り返える所は、本当に電流責めにしているのでは無いかと思ったほどであった。
大学講師の非情な実験のモルモットにされている若い女の子（桧ひろみ）などを緊縛している縄は、相当にきつくかけてあって、その縛った縄を解いた時など、はっきり緊縛した跡がついているのがわかった。
「泣きどころ」では恋人のために、六十万円をどうしても作らなければならなくなった辰己のり子が、あと十万円がどうしても出来ず、女の苦もんの表情を見たり、その写真を集めるのが趣味と言う、ある富豪の家を訪ね自からそのモデルとなって十万円を作る所がある。富豪の主人は、辰己のり子をえび縛り（両手両足を別々にしばり上げ、それをあとで一つにすると言う、きわめて苦痛の強烈なやつ）にしたり、天井から両手で吊り下げたり、えび責めの変形のような形で尻を高く上げて鏡の前に置き、のり子の苦もんと身もだえの表情をのり子自身に見させ、羞恥にそまらして、愛用のカメラでたんねんに撮りつづけるシーンが楽しませてくれる。
辰己のり子の、なやましく、せつなげな表情が印象的で、なかなか素晴らしかった。
このシーンがもちろんこの映画の観せ場であるから、当然であるとは思うが、しばり方も相当にきつく、豊満な体をさんざん責められる女優も大変な仕事だと思った。

S・Mカメラ・ハント（三浦一美及安井邦臣・喜久子夫妻の巻）

野猿と戯れる少女

（夫婦プレイ旅行同行記）

辻村　隆

「辻村さん、お願いしますよ。車だけ何とか廻していただければいいんです。ホテルの宿泊や、その外一切の費用は私の方で負担します。決して御迷惑かけませんから」

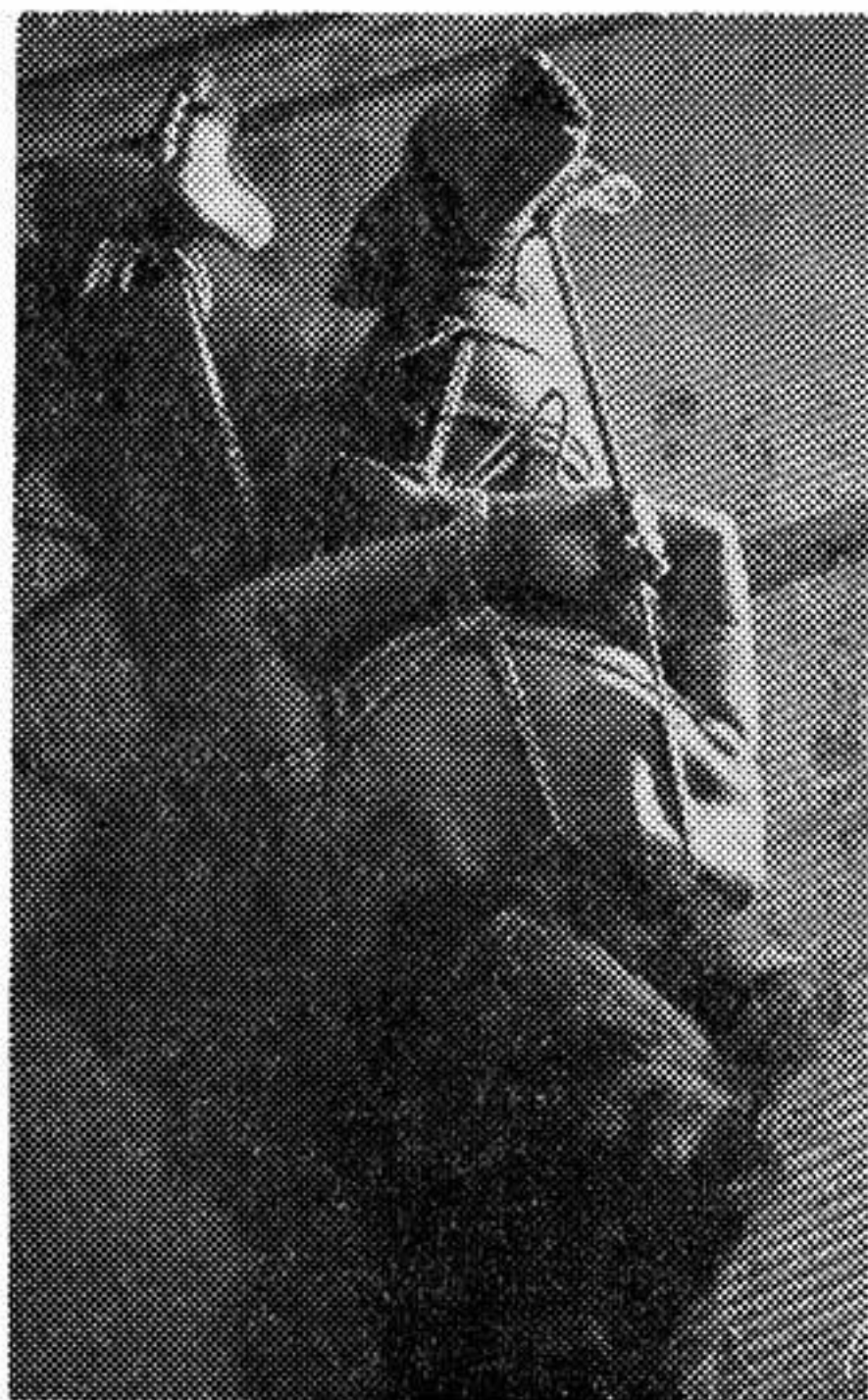
こんな相談を、同好の安井邦臣氏から持ちかけられた。彼との交友は未だ一年半許りにしかならない。夫婦プレイということで、編集部へ来た手紙を廻してもら::て、相知るようになったのだが、その後一向に実現をみることもなく、その癖いつも彼はハッスルしている。D・P・Eの方も揃え、カメラの腕もたしかなのだが、撮る機会がなかったのだ、一口にしていえば――。

訪れてきても一方通行で、彼はしきりにいろいろと資料の開陳を希んだが、彼の提供は皆無に近かった。奇クも五年ぐらい前からのファンで、本人は、ねっからのSである。

プレイをやりたくてウズウズしてはいるのだが、家族構成が複雑で、奥さんとプレイする機会も少なく、連れ出して何処かのホテルでといったようなことも出来なかった。当年とって三十三才の面白い盛りになって来て、近頃頓にSMのプレイに意欲を燃やすようになって来たのである。

そのくせ、同好の方がよく私に希望するような、モデル紹介という望みも持ち出さなかった。自分の手持駒がないから、それは言い

出せなかったのかも知れない。現在の彼の心境は、一度心ゆくまでゆっくりと、妻とプレイしたいというのが当面の目的であった。
　安井邦臣は養子であった。奥さんの御両親が健在。奥さんの妹さん二人が未婚で同居の上、小学二年と一年の年子のお子さん二人、それに大ばあちゃんが八十九才でお元気ときていて、一家九人の大世帯。しかも繁華街で店頭をはる時計貴金属商であるから、これでは夫婦そろって外出する機会も、そうおいそれとはない筈である。
　家つき娘だった奥さんにしては、安井夫人はよく出来ている人で、大世帯の安井家にきてくれた彼に、大いに感謝しているのか、安井氏のS的な傾向にも、かなりよく協力しておられる様子である。私の二女の腕時計を頒けていただいた時も、半額ぐらいに負けてもらって、大いに恐縮したことがあるが、その時一度だけ奥さんにお目にかかったが、なかなか品のある、いかにも控えめな、おとなしそうな人であった。長く伸ばした髪の毛をリボンで結んでおられたのが印象的であった。未だ二十七才になられたばかりということだが、見た目には二十三、四才だった。とても二人の子持ちにはみえなかった。安井氏から私のことは薄々聞いていたのか、顔を合せた時、ポッと頬を赤らめて軽く会釈すると、そわそわと奥の方へ消えていった。自分達夫婦の秘密を知っている男性に、面と向った気恥かしさが、思わずそんな素振りをとらせたのであろうか。
　かねがね安井邦臣から、その喜久子夫人とのプレイのチャンスを作ってもらいたいと、頼まれていた私は、何とか協力しようと言いながらついつい延び延びになっていたのであった。何しろ店舗にかなりのウエイトを掛けているので、彼等の住居の方は狭く、襖一枚へだてて子供が寝ている上、弟妹やおばあちゃんが御不浄に行く通路になっていた。両親は二階でねてはいるものの、そんなわけで思いきったプレイが、とても出来ない状態にあったのである。
「組合や町内とかの旅行ならよくゆくんですがね、家内と一緒となると、仲々チャンスがありませんのでネ。まして子供二人を家の者に預けてゆくとなると、とてもなんです。家内は何時でも、その気になっているんですがネ。よその方の夫婦プレイの模様を、辻村さんからきくたびに、唯々、もうその方々が羨ましき限りです。それで厚顔ましいお願いですが、辻村さんから車で誘っていただいたことにして、あなたのお誘いで已むを得ず行くということにしてあるのです」
　安井邦臣のプレイしたさの、苦肉の策であった。
「それで、私のことは家の方々になんて説明してあるんです?」
「私のサトの方が世話になった方として話してあります。年配がよく似ておりますので、私の兄貴の同級生になっております」
「へえ、兄さんはどこを出られたの?」
「京大の法科です」
「うわーッ、これは上等すぎるよ。気恥かしくなるネ。兄さん弁護士なんでしょう?」
「だから、辻村さんのことは絶対信用あるのです。家じゅうの者が皆私によく気を使ってくれますので、その点では恵まれているんですよ。それだけに反って尚更、家をあけて出にくくってね」
「分りますよ、その気持。義理と人情の板ばさみですね。でも家では、夫婦二人っきりでプレイするっていうようなチャンスも、あることはあるのでしょう」
「まあ皆無ですね。大抵誰か居りますよ。それに定休日以外はずっと店を開けています。

偶の定休日といっても子供連れではね。せいぜい就寝前のひととき、ほんの軽く、静かに縛る程度で、妻も気の毒がっているんです。大家族の悲劇ですね」
「じゃあひとつ、悪者になりましょう。いつがいいかな」
「月曜日が定休なんですよ。それで、この際二泊ぐらいしたいんですが、辻村さん無理でしょうね」
「二泊となると一寸難かしいですね。だってウィークディでしょう」
「何とか償ないを、させていただきますよ。辻村さんの奥さんに、指輪のひとつぐらい、プレゼントする気でいるんですが」
「家内がきいたら喜ぶでしょう。何とかしましょう。それで安井さん夫婦と私の三人で行くのですか?」
「お差支えなかったら奥さんもどうぞ。でもどちらかというとプレイ旅行ですから、女同志どんなものでしょう」
　暗に私のみへの誘いである。安井夫人が果してどの程度の夫婦プレイに耐えられるかは疑問だが、温泉旅館で、夜のひとときを、急ぐこともなく、夜もすがらやってもよし。況して意馬心猿の安井氏なら、或いは思いがけない成果もあるかも知れぬと、私は心を定めた。

　十月上旬過ぎの日曜日あけと日をきめ、彼の家の近くまで車で迎えに行く。それまでに数度、私は旅行の誘いのため、彼の許へ電話することにする。車の提供だけで、ガソリン代もホテル代も食事も土産に至るまで、一切負担するという有難い契約であった。宝石の方でかなり儲けている彼のことだし、私は遠慮なく彼の提案を受け入れることにした。
「本当に安井さん夫婦とあなただけですの」
　家内は一寸疑がわしい顔付になった。或いは私のパートナーを、そっと誰か乗せてゆくのでは、とでも考えたらしい。私は安井夫妻の夫婦プレイの飢餓状態を、多少オーバーに説明し、ダイヤとまではゆかなくとも、指輪のひとつもプレゼントしてくれると説明すると、途端に女房はニコニコ顔になった。女は宝石に弱い。現金なものである。
「何ならお前も一緒にどうだ。二組並んでの夫婦のダブルプレイも、偶には刺激があっていいぞ」
「いやですよ。安井さんの奥さん、未だお若い方なんでしょう。私なんかとても」
「よく似た年令同志なら、プレイする気はあるんだね」
「その人と、時と場合によりますよ。でも矢ッ張り恥かしいわ」
「だろうね。私は独り寝でアテられるから、出来たら行って欲しかったが、まあ無理もいうまい」
「精々、いいお写真、とってあげなさいよ。頼まれれば越後から米搗きね。のむ方、ほどほどにしないと糖尿にダメですよ」
　かくの如く、プレイには理解のある女房である。内心、ハントした娘達の、あの顔、この顔が咄嗟に浮んだが、それも安井夫人の手

前、辻村隆が安っぽい浮気人間に見られるとあきらめて、おとなしく安井夫婦のさしみのツマになることにきめた。縄は私、カメラは安井邦臣がいいのをもっているので、それを使うことにしたが、いざという時の準備で、一眼レフとストロボだけは持ってゆくことにした。

×　×　×

南紀への道は快適だった。大阪から和歌山までと、和歌山を越えて海南市を過ぎるまでは、かなり車の混雑もあったが、それから先の国道四十二号線は、海岸沿いのハイウエイ並みの道がつづく。

私は思い出して苦笑した。安井家の家から数十米離れた車道まで、一家総出の派手なお見送りで、安井夫妻も年甲斐もなく照れていた。子供達は学校へあわててかけていった。

「辻村さん、よろしくお願いしますよ。何しろ世間知らずでしてな。婿を存分に遊ばせてやって下さい」

養父の安井氏が声をひそめていった。可愛いい大切な娘婿であるに違いない。

「よく衝突事故がありますから、ゆっくりと走って下さいね。お願いしますわ」

これは養母の私への気持である。皆から祝福される安井邦臣は、幸せな男であった。

万才と叫びかねない空気の許に私は、安井夫妻を後部座席へのせて出発する。こうした場合、三人というのも困る。彼はしきりに助手席へ坐りたがり、私も長いドライブ中、話相手があっていいのだが、そうなると奥さんひとり、後部のシートにのこるので、己むを得ず彼等夫妻は、うしろに並んでいる。私は白タクの運ちゃん並みである。奥さんが気を配って、チューインガムやチョコレートを差し入れしてくれる。夫婦揃って出ることのなかった喜久子夫人にとっては、女学生の旅行にも似た、浮々した、嬉しくてたまらぬ様子であった。その先に、私を混えての、夫婦プレイが待っていようが、羞恥と屈辱が口を開いていようが、今現在の奥さんの気持は、華やいだ開放感で一杯であった。

有田市に入ると、街道筋は、既に早生（わせ）みかんの生産直売の出店が軒をつらねて並んでいた。農家の人々もがめつくなったものだ。喜久子夫人の要請で車を停めて、かなりの量のみかんを買求める。湯浅を過ぎて車はスカイラインにさしかかった、由良の要塞のあったこの山間を越えると由良町に出る。私達はスカイラインの下降にかかった辺りのドライブイン天山閣で、中華定食の昼食をとった。ビールをのめぬのが残念。安井氏のすすめたコップ一杯のみを、遠慮勝ちにあける。大切な二人をのせているのだ。飲酒運転はつつしまねばならない。日高町、御坊市とつづく辺りで左折して、安珍、清姫で有名な道成寺へ立寄る。変った寺で、拍手を三つ叩いて拝む外は、何の変哲もない寺である。

「あなたの苗字が安井で、奥さんの名が喜久子さんとくると、こりゃ安珍、清姫に縁がありそうですね。浮気すると奥さんが蛇になって追ってきますよ」

私の冗談に、喜久子夫人は一寸にらみ、彼は妙にシブい顔をした。この冗談、まずかったかな。

梅林で有名な南部町では梅干の土産ものが多く、この辺り一帯、漁村がつづくのか目刺し魚のヘンな特産店が点在していた。

「喜久子に遠慮せず、面白い話をして下さいよ。特に同好の夫婦プレイの話などきかして下さい」

安井氏はせがむが、そういわれて、急に話題をその方に転向、出来るものでもない。眼は前方を直視しながら、口はうしろに向って開いている。折りおり、バックミラーで安井

夫妻の様子を窺いながら——。思い切って、喜久子夫人の顔の赤らむような事を言ってやれ。彼女がどんな反響を示すか、一寸嗜虐的な興味を抱いた。私はこの、品のあるほっそりとした、一見して二児の母とも見えぬ、箱入娘だった奥さんの心を、虐めてみたくなった。もういつまでも猫をかむっている必要もあるまい。

「安井さん、椿温泉の方で、何処かホテルを予約してあるのですか。白浜なら知っている処もあるんですよ」

「ええ、白浜と思ったのですが、組合の旅行で二度許り来ているのです。騒々しいし、男許りなら面白いでしょうが、夫婦プレイなんかは、反って静かな椿の方がいいと思いましてね。椿温泉のTグランドホテルを予約しておきました」

「部屋は二つ、とったのですか」

「ええ、辻村さんに悪いとは思いましたが、家の方から電話したものですから、一室というのも妙で、二部屋、頼みました。なあに、いいんですよ。一部屋は空けておいて、三人一緒に寝ましょうや」

私が言う前に、安井邦臣はそんな事を言い出したのである。

「あなた」

喜久子夫人が、彼の袖を引いたようであった。奥さんにしてみれば、滅多にない二人っ切りの夜を愉しむつもりなのに、それは困るのだろう。私は、わざととぼけている。

「そりゃ面白いですね。所期の目的に向って夜っぴてやってもいいですよ。何しろ私は独りなんですからね。日頃溜りに溜ったプレイの憂積を、思い切ってブチまけるんですね」

「辻村さんさえ、お疲れじゃなかったら、構いませんよ、私達」

「あなた」

夫人が又何か言いたげに、彼の体を押す。

「ところで奥さん、御主人がSMのプレイに対する関心を持っておられて、奥さんを始めて縛られた時、どんなに思われました?」

「わたくし……」

「びっくりなさったでしょうね?」

「ええ」

「結婚して、いつ頃からプレイを始められたのです?」

「…………」

バックミラーにうつる喜久子夫人の顔は、真白いハンカチで蔽われていた。羞恥が全身をかけ巡るのであろう。

「以前に、辻村さんに確かお話したと思いますが…」

安井邦臣は見兼ねて助け舟を出した。勿論私も知っているのだ。しかし、奥さんの口から、それを直接聞き出してみたかったのだった。私は、わざと空とぼける。

「そうだったかなあ。何しろ、いろいろの御夫婦のプレイをきいているので、すっかり忘れてしまいましたよ」

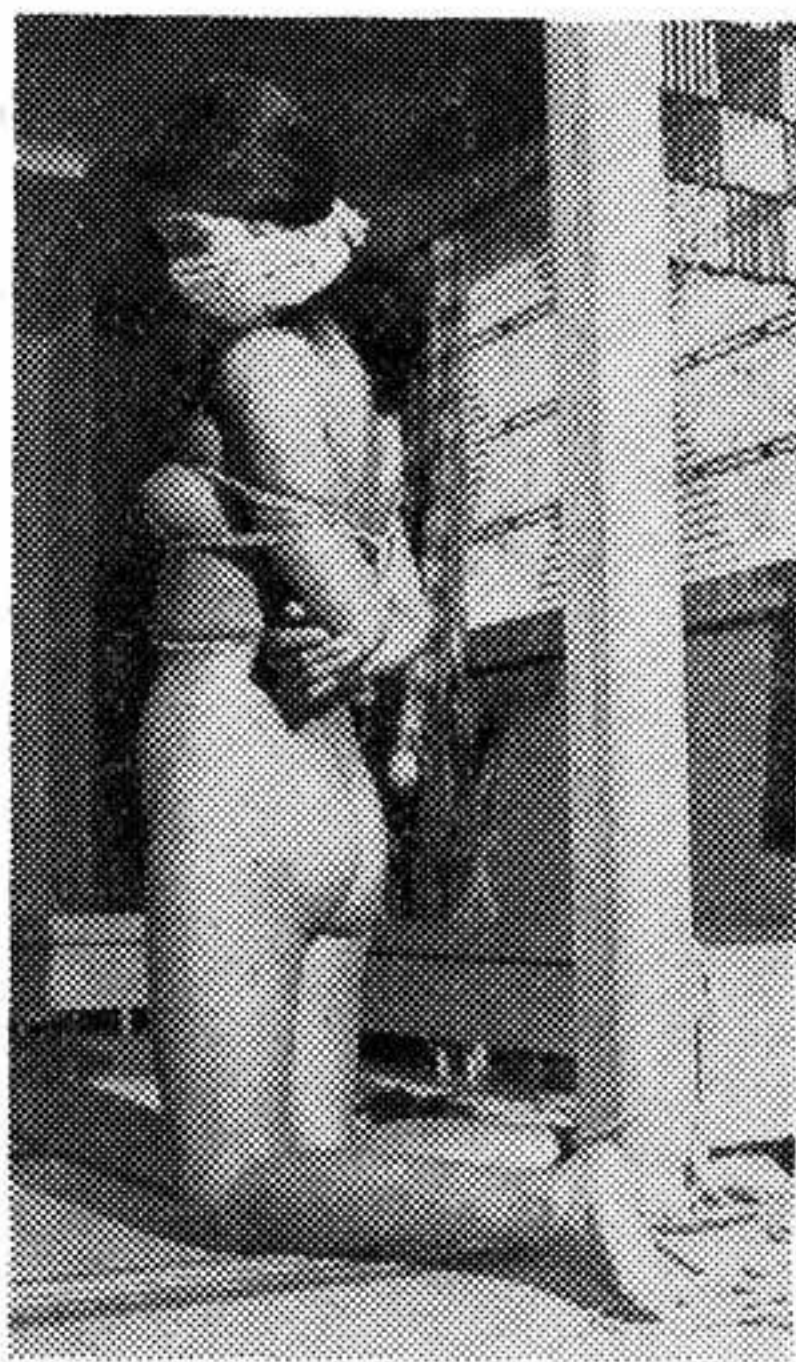
改めて、夫人の前で、私は喋らそうとしていた。長いドライブの旅のつれづれ、退屈しのぎにはもってこいのプレイ談義だ。車は田辺市の曲折した迂回路をやっと通過し、椿に向う四十二号線の悪路を避けて、白浜道路へと向っていた。白浜駅前から紀勢線に沿って、再び四十二号線に入り、およそ二十分も走れば、目指す椿温泉は、もうそこである。

「ほら、いつかお話したでしょう。始めて縛ったのは新婚旅行の三日目だって。私も養子というハンディキャップがあるから、最初にバーンと噛ませておかねばと腹をきめて、あとはどうなろうと、兎も角、新婚旅行中にやっつけたんですよ」

「あッ、そうでしたか。そう言えばお聞きした様な気もしますね」

「心細いですな。じゃあもう一度喋べっちゃうか。でもプレイといっても、ほんとの、ごく初歩の初歩で、辻村さんにとったら、とてもプレイの中には入らないかも知れませんが私にしては清水(きよみず)の舞台から飛び降りる程の覚悟でしたよ」

「そりゃ、そうでしょうね。新婚ホヤホヤの奥さんにしちゃ、随分驚かれたでしょうね」

「本当に何ひとつ、セックスのことすら碌々知っていない妻でしたからね。嘸びっくりしただろうと思います。新婚旅行の第一日の箱根、二日目の伊東では我慢しましたが、三日目の最後の鬼怒川でとうとう思いきりました。旅行の最後の夜ですからね。ひとつは気力をそれによって振い立たせたかったからかも知れませんがね。当時は未だ奇クの存在を知りませんでしたが、S的な性格は既に学生時代より内攻させておりました。妻に『お前を自由にしていいか?』と申しますと、妻は判っきりうなずきました。自由と言う意味を単なる愛情の表現としてとったのでしょうね。『お前の自由を奪って、体の隅々まで、この眼で確めるんだ』と言ったのです。私は恥かしそうにする妻を裸にして、ホテルの寝巻の紐で、妻の両手を後手に縛り、両足も紐で縛りました。妻は強いて逆らわず、私のするが侭になっていました。あの時はどう思った?」

彼は傍らの妻にきいた。

「すごく不安でしたわ。何をされるのかと思って。でも信じていましたから……」

喜久子夫人は小さい声で応えた。

「私は愛する人をこうして縛って、自由を奪い、好きな様にしたいのだ。本当はもっともっと強く、犇々と縛ってみたいと、夢中でうわ言の様にいって妻を抱きしめていました。妻は、どうされてもいいと、途切れ途切れに呟きましたが、それがプレイへの、第一歩だったのですね。とうとう辻村さんの前で、プレイしてもいいという処まで、家内を説得しました。家にいちゃ、ろくな縛りも出来ない。自分はそれでイライラしているといったのです。奇クを読ませ、辻村さんから聞いた、よその人の夫婦プレイの話をきかせ、毎夜の様に吹き込んだのです。その気にさせるまで、半年以上もかかりましたが、それだけに、これからの時間がすごく待ち遠しいのですよ」

安井邦臣は、運転席にのしかかるようにして、熱心に話した。彼の心は既にプレイの方へ飛んでいるのかも知れない。

ひなびた湯の街が国道沿いに見え始めて、黒汐の浪が、近く響いている。目指すホテルは、その国道を右に折れて、急降下した隘路に大きく威容を誇って建っていた。

× × ×

（浪の瀬音を枕に、一風呂浴びるコンコロモチは、ああいいよ）そんなTVの宣伝文句でCMされているこのホテルで、CM通りに大浴場で一風呂浴びて戻ってくる。

日は未だ高かった。四階の窓から見下す眼下には、秋の陽射しを浴びてひと気もない大プールが、佗しく夏の名残りを留めていた。

白浜の景観にも似た、ミニ千畳敷へ、遊歩

道を伝って、三々伍々、家族連れや若いアベックが、揃いの浴衣で点在し、白く砕ける波濤の彼方の、壮大な眺望に堪能していた。

バスは室内に有ったが、安井邦臣も喜久子夫人もそれぞれ大浴場にひたりにいって、未だ戻ってこない。揃って広いホテル内をうろうろとさまよい歩いているのかも知れない。或いは、いざとなって躊躇する夫人を、懸命に口説き落しているのかも知れなかった。夫人にとっては、私は明らかに邪魔者に違いないであろう。夫と二人、旅のいで湯で、のびのびと心ゆくまで過したかったに違いない。しかしそのチャンスメーカーとして私が登場したのであれば、夫人としても無下に私を疎外視することは出来なかったのであろう。

私は夫人の心情を察すると共に、この場合は程々に切上げて、兎も角簡単なプレイで済ませ、喜久子夫人に甘えさせてやりたかった。しかし安井邦臣はどうであろうか。恐らく彼はこれを千載一遇のチャンスとして、飽くまで強烈なプレイを強行したいのではなかろうか。

私はボンヤリと戸外の景観を眺め乍ら、そんな思いに耽っていた。

「おや、早かったのですね。少し売店や娯楽室の方をうろついていたものですから。夕食には早いですが、ビールでものみましょう」

彼は備え付けの冷蔵庫からビールを両手に提げ缶詰を抱えて机に戻ってくると、匆々に栓を抜いた。湯上りのビールは腹にしみわたって旨い。明日まで運転はない、私は心おきなくコップを傾けた。

「食事を六時に持ってくる様、頼んだのですが、それ迄長いですね。少し簡単なプレイをやりましょうか」

意馬心猿の彼は、逸り立っていた。

「まだ気分が落着かぬでしょう。夜にしましょうよ」

「ウーン、残念だな。もうウズウズしているんですよ。一刻も惜しい気がしましてね」

「奥さんが笑っておられますよ。落着いて落着いて」

喜久子夫人はもう腹をきめている様子であった。ここまでくればジタバタしても仕方あるまいといった度胸の据え様であった。夫を最も喜ばす法は、夫のプレイに逸る心に同調することであると悟ったらしい。今更どの様にあがいても、くるものは必らずやってくるに違いないという諦観の念でもあったのであろう。私はホテルのフロントで受取った案内書を何気なく開いてみた。そこでこの近在に野生猿群の出没する伊勢ガ谷という辺地を知った。夕景までのひととき、野生猿の棲息地を訪れるのも悪くない。

「野生猿がこの近くの伊勢ガ谷という処に棲息するそうですよ。行ってみませんか」

「そうですね。それもいいですが……」

彼は気乗薄の返事をしたが、夜までの時間を持て余す私は、かなり強引に誘ってみた。

「喜久子、どうする?」

「ええ、私どちらでも……」

夫人も又気乗り薄である。大阪から椿までの二百キロを超すドライブが、かなり体に応えたのか、疲労の色がただよっていた。

「悪いけど辻村さん、夜のプレイに備えて、少し一服しますよ」

「そうですか、じゃあ、残念だけど私ひとりで少しの時間、行ってみようかな」

「そうして下さい、済みませんですね」

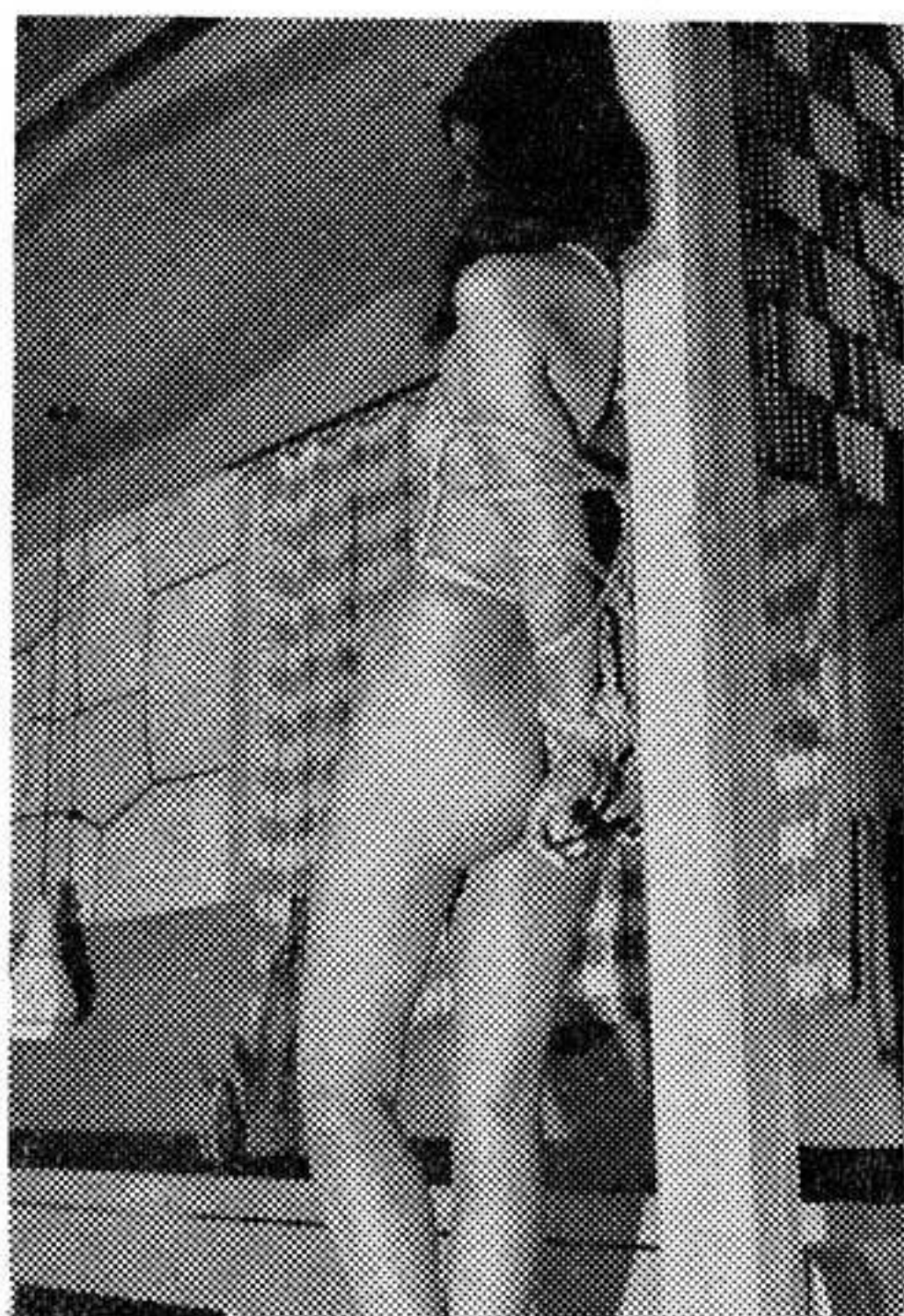
喜久子夫人は、夫と二人になれるのが嬉しいといった笑みがチラリと走った。気をきかせてやれ。ハイヤーを呼ぶのも大層だし自由もきかないので、私は車のキイとカメラをさげると、ひとりで立った。

浴衣がけの下駄履きで車にのりこむ。少し

危なっかしいので下駄をぬぎ、裸足でアクセルを踏んだ。

距離にしてみれば僅かであったが、伊勢ガ谷への路は、すごい悪路であった。椿温泉へ来ても、訪れる人は滅多にいないのか、地肌その侭の凸凹道が、山手のホテル『富貴』を過ぎた頃から続いた。

野猿群生地の入口にやっと到着。協力費五十円要るとフロントできいたので、カメラに百円札を数枚挟んできている。

誰一人居ない。シーンと辺りは静まって、聞こえるのは、遥か足許の下から微かに響く波音だけである。

急な狭い小道を徐々に下ってゆくと、磯辺が見えて、数隻の漁船がごつごつした石ころだらけの波打際に繋がれていた。その辺りのここかしこに、漁師の風雨にたたかれた瓦葺の家が佗しく点在している。

入江の静かに打寄せる波打際に立って、水平線に近く、赤く輝やく太陽にしばし見とれていた。寂として音もなく、佗しい秋の夕まぐれの感傷が、そこはかとなく私の胸をしめつけていた。キーッというけものの声に振向いて山肌に密生する樹林の彼方に眼をやって、私は野生猿の姿を求めようとした。眸を凝らすと、粗い岩石の点在する山肌のここかしこに、数十匹に近い野生猿が、あるいは群動し、あるいはチョコナンと木の実を噛んで、無心に大自然にとけ込んで、猿族の世界を形成していた。

野生猿の群に向って、私は足音を忍ばせながら徐々に近づいて行く。カメラを向けても逃げようとしない。私は忽ち数枚のフィルムを費消した。家族で秋の小旅行をした時、撮ったフィルムの残りは、この数枚によってあと幾許もなかった。例え数枚でもプレイを撮れば、私自身の手で現像しなくてはならないが、ノーマルなもの許りなら、面倒な手間をかけるまでもなくDP屋へ現像が依頼出来る。この一本はそんな気持も手伝って、猿群の自然に戯れる姿に終始するつもりだった。一眼レフのカメラを構えて、波打際まで疾走してきた中猿を、素早くカメラにとらえて、三枚。そこでフィルムは廻らなくなった。

私は岩の平らなのを探して、腰を降す。協力費五十円をとりに来る人影もない。多分この辺りの漁村の篤志家へでも支払うのであろうが、軒々から白煙のたつ夕餉時分なのか、私独りとみてか、誰一人も出てくる気配もなかった。

渚に向って煙草をくゆらし、冥想に耽りながら、今宵の安井夫妻とのプレイの計画などあれこれ思いめぐらせて、妖しい妄想を逞ましくしていた私は、心ここにもあらず、しばし、放心状態にあった。

フト我に返った時、私は近々と人の気配を感じた。振り返ったそこに一人の少女が佇ずんでいた。野生猿の飛び交い、うずくまるそれらを夢中で眺めているのか、私の視線にも

一向、気付かぬ様子であった。
彼女の着る浴衣は、私の浴衣とは異なっていた。長く垂れた素直な髪が、渚の汐風にそよと吹かれて軽くなびいている。
ここにもう一人の人間を見出した人恋しさに、私はフト呼び掛けたくなった。それは都会から離別した、いで湯の旅の気易さからであったかも知れない。
「面白いですか?」
唐突な呼び掛けであった。
「えッ?」
その娘はハッとしたように私の方を見た。浅黒い顔立ちだが、眼のパッチリした、化粧気の全然ない、女子大生風の少女めいたひとだった。
「さき程から、随分、愉しそうに見ておられますね」
「あら、お猿さんのことですのね」
娘は、はにかんでヒソと笑った。
「ここまで一人で来られたのですか?」
「ええ、一寸スケッチしたくて……」
そういわれてみれば、成程一冊のスケッチブックを片手で胸に抱えている。
「描かれたんですか?　みせて欲しいな」
「うまく描けないんですのよ」
「御謙遜でしょう。だけど全然、貴女がいらっしゃったことに気がつきませんでしたよ」
「あの繁みの辺りに坐っていたんですのよ」
娘は彼方の山肌の据に密生している権木の茂みの方を指さした。その辺りには特に野生猿が群遊していた。
「怖くないんですか、お猿さんが?」
「みんなおとなしいですわ。サツマイモを少し許り準備してきたのですけど、私のそばまで近づいて、喜んで喰べましたわ」
「ほう、私は全然、気付かなかった」
「私は遠くの方から、おじさんの姿をみかけましたわ。お写真をとってられましたわね」
「ええ、知つておれば、貴女のために二、三枚残しておけばよかった。すっかり撮りつくしてしまったんですよ」
「おじさん、お独り?」
「ホテルで連れは待っていますが、ここへは独りで来たんですよ。貴女は?」
「私は独りポッチ――」
「へえ、どうして又一人で温泉なんかへ?」
「旅をするのが好きなんです。静かに誰にも煩らわされず、自分のしたいように、自由にのびのびと振舞いたいのです」
「どこのホテル?」
「一番安いホテルですわ。自炊も出来るようなチッポケなホテルです。おじさんは、Tグランドホテルですのね。浴衣にローマ字でそう書いてありますわ。あそこは一流なんでしょう」
「多分ね。しかし、私のみた眼では、あなたは女子大生の様に思うけど、当らなかったかな」
「そうみえます?」
「見えるね、何となく」
「女子大生が、ウイークデーにのんきに温泉なんかに来ませんわ」
「そうだろうね。しかし……」
私はハキハキと喋べる、この少女めいた素顔の娘を改めてマジマジとみつめた。
「浪人なんです。二度もすべっちゃった」
「どこを志望して?」
「京大の文科系統――」
「高望みなんだね。そいつはむつかしい」
「アルバイトして予備校通いなんです。でも気持がくしゃくしゃすると、時々ブラッとこうした処へ出掛けてくるんですのよ」
「気分転換にはいいよ」
「そうね、私もそう思いますわ。すみませんけどおじさん、タバコ一本、下さらない」

「ああ、いいよ」

この少女めいた娘が煙草を吸うのか。私は一寸意外な感に打たれつつ、ピースを半分抜き出して、彼女に箱ごと渡した。私のライターの火に近々と顔を寄せると、彼女は旨そうにフーッと紫煙を吐いた。

「スケッチしてたそうだけど、絵の方もやってるの？」

「高校時代からクラブ活動で、好きでやっていましたが、アルバイトで絵の方にだんだん関心を持ち出したのです」

「みせてもらえない？」

「下手なんですよ」

彼女はあっさりとスケッチブックを私の方に差出した。

粗いタッチのデザインで、三枚許り描かれてある。生れたての赤ン坊猿を腹に抱いて、餌をあさる母猿——、山肌の岩にチョコナンと坐って無心にたわむれている二匹の猿——漁船をあしらって、渚の辺りを群遊する五匹の猿の遠景——。そのどれもが、女の筆致と思えぬくらい、力強いタッチで描かれていた。デッサンの片隅にサインがある。（椿伊勢ガ谷にて、ひとみ）

ひとみというのか彼女は——。

「余りうまくないでしょう」

傍らから彼女は、ややへりくだった口調でいった。内心は見てもらってもいいという衿恃を持っているのであろうが——。

「私にはよく分らないんだけど、素人眼でみると、とてもいい線を摑んでいると思いますね。これを下地にして描くのでしょう」

私は次を何気なくめくっていった。白浜の三段壁、千畳敷、平草原の瞰瞰、円月島と、白浜の名所が続いている。この娘は昨日を白浜で過したらしい。名勝の果てたページに、裸婦のデッサンが三枚許りつづいた。その一枚にハームシャーレが描かれてあった。私はまじまじとそれをみつめる。

「まあ、いやだわ。そこまで見ちゃ」

いきなり彼女は、スケッチブックを引ったくるようにして奪った。

「いいじゃないですか、ナチュラルで」

娘は黙って心持ち頬を染めた様であった。

「ヌードも描いているんですね」

「ええ、誘われて時々——」

「勿論、実物をみてでしょう？」

「そりゃ、そうですわ。あの人、私のお友達なんです」

「仲間？」

娘は、しばし返事にとまどっていた。

「貴女もアルバイトに、モデルになるのじゃないの？　いい体だから、そんな感じがするけれど——」

「御想像に任せますわ」

その返事は否定ではなかった。私はこのひとみという娘に急激に意欲を覚えてきた。ムラムラとハント精神が蘇がえって来たのである。

「ひとみさんは大阪？」

「あら、どうして私の名を——」

「サインしてありましたよ」

「ああ、そうでしたわ。急になれなれしく呼ばれてビックリしました」

「大阪なの？」

「いいえ、どことお思いになる？」

「ウン、関西弁じゃないな。関東の人かな」

「でもありませんわ」

「和歌山？」

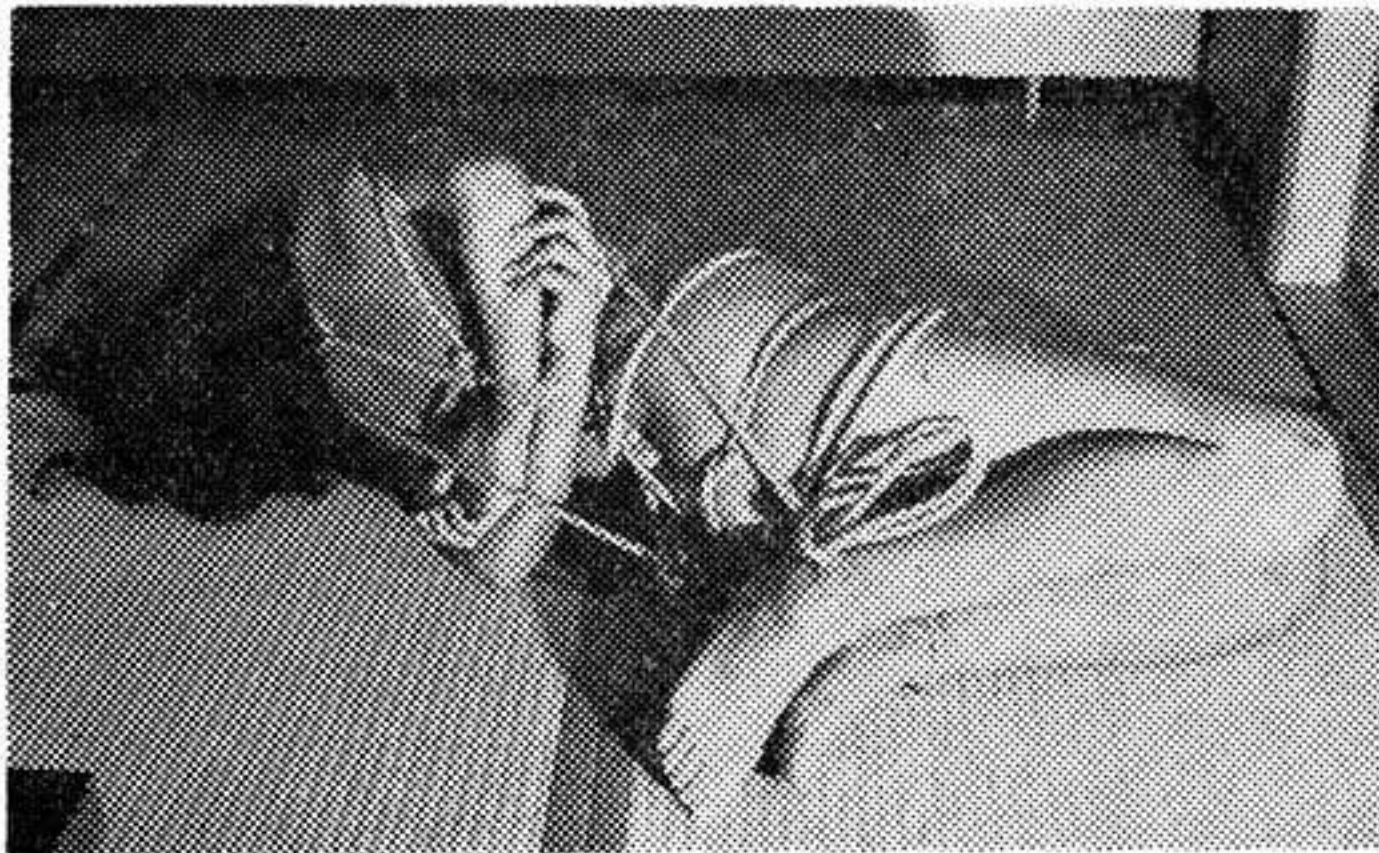
「いいえ」

「じゃあ、分らない」

「岡山ですの。でも現在は京都の、百万遍の近くで、学生許りの下宿寮におりますわ」

「京大が近いからね、あそこは」

「皮肉ですの？」

「とんでもない」
「おじさん、京都はよく御存知なのね」
「よく行きますよ」
「おじさん、車でこられましたの？　それとも汽車で？」
「車だよ」
「いつお帰りになるの？」
「どうしてきくの、そんなこと」
「若し明日、帰られるのだったら、乗せてもらえないかなあと思って……。だって汽車賃が浮くもの。おじさん大阪なんでしょ」
「まあね」
「でも、お連れがあるってさっき御有ったわね」
「ウン、でもそれは夫婦ものなんだよ。一寸わけがあって、その夫婦をのせて私が運転してきたのさ」
プレイのことは言えなかった。それを聞いたら驚倒するかも知れない。
「お邪魔なのね」
ひとみは少しガッカリした口調になった。この娘は少しでも冗費を省いて、合理的な旅行をしたかったのだろう。それが現代娘の、或る種の無軌道さでもあり、又若さからくる物怯じしない行動であったのかも知れない。私の心に、急速に愉しさが湧出してきた。思いもかけぬ彼女の申し出に、ひょんなことから、ヒョータンから駒が出て、味気ないサシミのツマの旅行が、一変して愉しいドライブになりそうな気配である。
「よし、じゃあ、乗せていってあげよう。だけど、そんなに私を信用して大丈夫？　男は誰しも浮気心があるんだからね」
「まさか乱暴もしないんでしょう。タダでのせてもらうのだから、お礼にキッスぐらいならいいわ」
これはエライことになってきた。私はこの行動派の女性に、無精に嬉しくなり出した。私の腹はきまった。安井夫妻を二人きりにしてやって、袂をわかつとしよう。喜久子夫人は反ってその方を喜ぶかも知れない。彼等二人は明日は勝浦へ行く気でいた。椿から勝浦までの、未舗装の砂埃の悪路を走ることに、私は多少ウンザリする気持にもなっていたのだから、恰度いい。大阪へ帰る時間を打合わせて、彼の家まで車で送り届けてやればいいのだ。
「明日、何時に出発する？」
「私は何時でもいいの？」
「ひとみさんは何ていうの？　苗字も知らなきゃね」
「三浦一美――、一美は一と美しいと書くの」
「私は辻村隆――」
始めてそこで互いの自己紹介を終った。
「ひとみさんのホテルはどの辺り？」
「ホテルと名のつくようなものじゃないけど橋を渡って少し行った右側のT荘よ」
「じゃあ、明日午前九時に迎えにゆくよ。支度をして表へ出ていて呉れ給え」
「おじさんこそスッポかしちゃいやよ。ゲンマン」
彼女は真剣な表情で小指を差し出した。児

戯に等しい行為ながら、私はそれに小指を絡ませて、力強く数度振った。

夕陽は既に水平線に在った。辺りを黄昏が薄墨色に染めかえていった。野猿の悲しげなつんざく啼声が断続して私達の耳をうった。あついしじまに囲まれた伊勢ガ谷に別れを告げて、私達二人は急坂の細い道を、息を切らせ乍ら駈け登っていった。

ハント出来そうなわくわくするような予感が、今はその確実性をはっきり強めて私の心に灼きつけていった。

×　×　×

ギラギラと顔一杯に脂を浮かせて、安井邦臣は今、夫婦プレイの極に達していた。喜久子夫人の美しい緊縛をもっともっと撮りたいという、私の期待は最早希めぬ状態にあった。きおい立つ彼は激しい奔流となって、妻に挑んでいる。そこには最早プレイというルールはなかった。私は唯唖然として、あれよあれよと見守る許りである。勿論許容された夫婦のプレイであってみれば、それは当然の結果であったかも知れない。しかし、フォトを撮る私の胸中に去来するものは、ハントとして、又分譲フォト向きフォトとして発表出来ぬものが多かったことに対する心残りであった。

「辻村さん、縛り方をあれこれ指導して下さいよ。喜久子も承知の上ですからね」

夕食の宴の時、ビールにほてる顔を更に紅潮させて、安井邦臣は度々と、くどいほど私に言ったのに、さて夕食の膳を女中がとり下げに来て、やっと三人きりになった時、彼は既に興奮の極にあったのだった。

彼がしきりに懇請したものの、いきなり喜久子夫人の肌に縄をかけるのも流石に気がひけて、

「安井さんから先ず手始めに、ひとつ縛ってみたらどうですか。矢張り夫婦だから、ツボを心得ておられるでしょう。でないと、どうもいきなり私がやるのでは、奥さんも恥かしいでしょうからね」

といったのがまずかった。あっさり、『そうですか』といって、引受ければよかったのだ。なまじ遠慮をしたばっかりに、

「それもそうですな。じゃあ、まず一丁――」

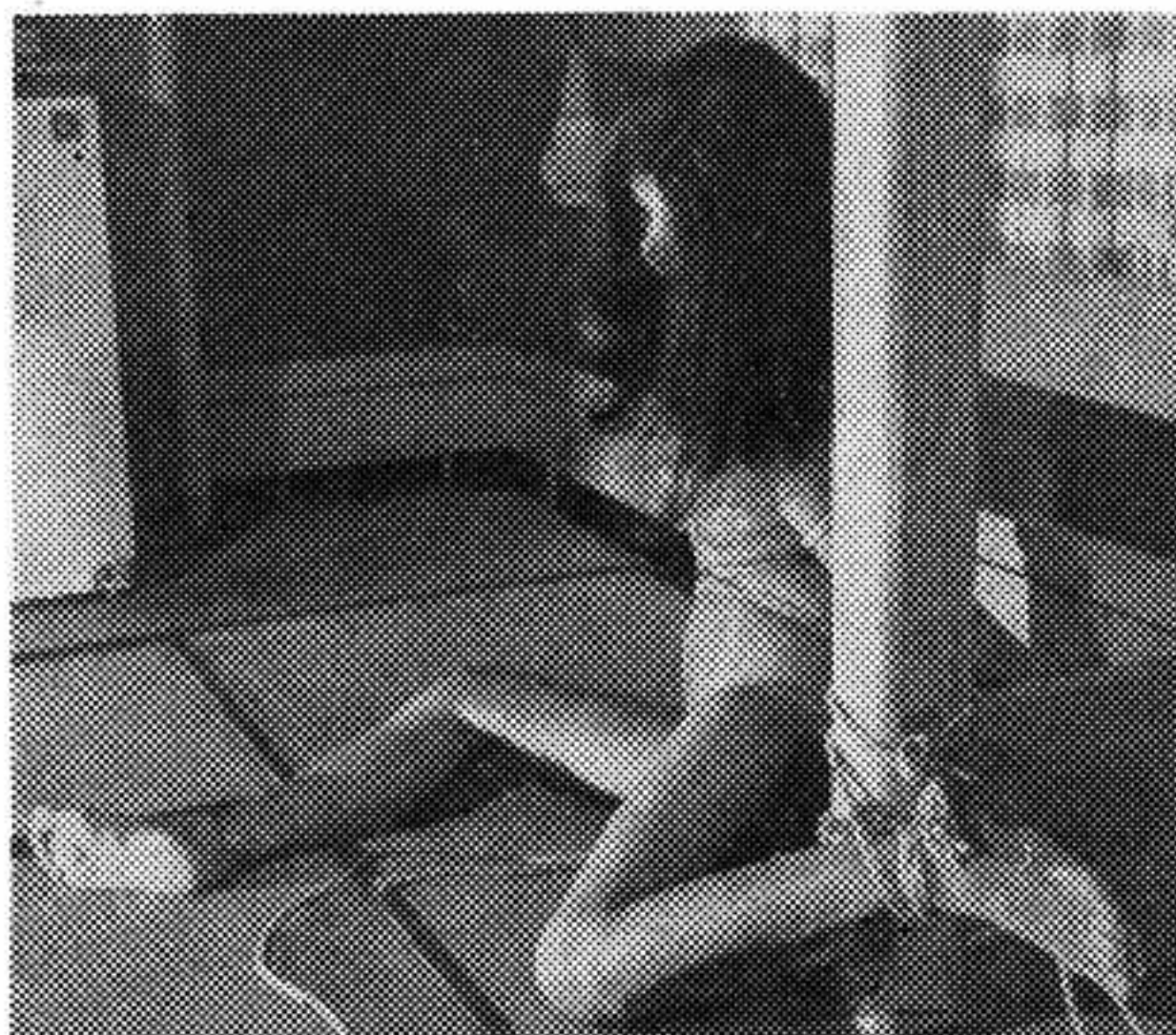
安井邦臣は、ハアハアとビールの匂いのする粗い息を吐き乍ら、緊張した手付で、私の差出した袋から縄をとり出した。使い馴れた例のダンダラ模様の縄が三本に、新品のロープが一本。彼はその柔かい方の縄を一束にして握ると、夫人の背を押すようにして二の間へ消えた。私はストロボを装填して、カメラの準備を手早くすますと、彼等の出現を期待に胸を弾ませて待った。まだ娘ッ気の抜けきれない夫人の顔が、刹那淫蕩めいて心に浮んだ。第三者を交えての初のプレイに、或いは夫人の心は顛倒しているかも知れない。

小間の方で、安井邦臣のはげしくはずむ吐息と、縄ずれの音がサラサラと微かにきこえる。あの上品な喜久子夫人の裸身が、間もなく私の眼前に展開されるのだ。この刹那、私の心奥に絶えずチラついていた三浦一美の面影は、忽然と雲散霧消して、代って、羞恥に悶えてあがく喜久子夫人の屈辱のあらゆるポーズが、ありありと今私の脳裡のすべてを支配していた。

「辻村さん、いいですか」

彼の声が襖の彼方から聞えた。

「ああ、いいですよ」

その声と共に境の襖が開かれ、そこに一糸纒わぬ裸身に猿轡をされ、胸縄をかけられた夫人が、すらりとした長身をゆらめかせ、後手縛りの縄尻を彼にとられて、よろよろとよろめくように現われたのである。雪かとまがう純白の女体は妖しく打震え、私の姿をそこ

に見出した瞬間、ハッとしたように彼女は立竦んでかたく眼をつぶった。みるみる喜久子夫人の裸身は仄赤く染まり、その全身に強烈な羞恥がみなぎっていた。佇立する彼女の上半身を抱きかかえるようにして、安井邦臣は妻を座敷の方へ押し出してくる。それに向って、既に私の閃光は走っていた。柱の真近くまで引っ張ってくると、彼は妻を押え込むようにして坐らせた。ふくらはぎの白さと共に、すべすべしたその辺りに私の眼は吸いよせられる。夫婦プレイの一種の流行でもあろうか、彼女も亦、関谷夫人や田宮夫人と同じく、なだらかな丘状はヴィナスの白磁の美しさに冴えて輝やいていた。

シャツとパンツ一枚になった彼は、妻の背後に廻って、柱に向って引き寄せていった。

中腰になった夫人は、堅く神妙につぶっていた眼を、漸やくにしてそっと開いた。

その妻の顔に彼の緊張した顔がかぶさっていって、唇の合う音がしじまを破って響いた。私は役目柄、先ず夫婦プレイのこの段階を順次撮ってゆかねばならない。この辺りまでは未だ辛うじて彼は冷静さを保っていた。

私は彼に依頼して、様々にポーズを変えてもらってかなり撮りまくった。彼の許可を得て、これを分譲フォトとして編集長に渡せば、喜こんでくれるかも知れぬという気持が、その時私の心を相当に支配していた。

抱きかかえて、転々反そくさせるうち、急激に彼は自己を見失なっていった。そこに最早私の存在はなかった。彼は縛った妻を転がすと、寸時ももどかしげに、自分の身につけていたものを脱ぎ捨てた。彼の腕に一入激しい力が篭っていった。フイゴの様に弾む息。

「ウウウ、く、くるしいわ。やめて……」

かぼそく絶叫する夫人の声に更に刺激されてか、傍若無人の行動が、連鎖反応を絶叫と共に起したかの様に、ひきもきらず続いた。

「いけませんわ、辻、辻村さんが……」

羞恥に身を反転させて、喜久子夫人は必死に拒もうとしていた。呆然と立ちすくむ私の存在が、未だ夫人の心に、大きなウェイトをしめてのしかかっていたのだ。

安井邦臣はアブに徹しようとして、その行為は余りにも性急でノーマルにすぎたきらいがあった。夫人に満喫の表情はなく、唯一方的に、激情に走った夫の飽和状態の姿を、何とも言えぬ表情で、あわれみといたわりの交錯した眼で、うつろに眺めているのみであった。

のろのろと夫は身を起した。既に歓喜は遠ざかり、照れ臭い苦笑が、自嘲にも似て彼の頬に浮んだ。

「済みませんでしたねえ。こんな筈じゃなかったのだけど、お預けがあんまり長いものだから、ついハッスルしちゃって……。矢張りプレイに馴れていないんですねえ」

「…………」

私は黙笑してうなずいた。感極まった彼の行為を肯定していたのかも知れない。

私はカメラを置くと、煙草を咥えた。
夫人の顎の辺りに、猿轡は外れてしまっていた。『濡れぬ先こそ露をもいとえ』という言葉通り、今、激しい夫婦プレイの一段落が過ぎて、反って女の方に平然とした冷静さが漂っていた。夫は、やや気まり悪げに浴衣を肌に、じかに着た。
「痛かったかい?」
思い出したように彼は、縛られて打ち伏す妻にきいた。
「両手がしびれているようですわ」
私に顔をそむけた侭、夫人は答えた。あえてほどいてくれとは言わなかった。彼の手は素早く、妻の縄を解きにかかっていた。
解かれてハダカの妻は、夫の投げた浴衣をそそくさと身につけて、裾を揃えた。
「どうしましょう。辻村さん、縛ってやってくれますか」
「安井さんに興味ある?　もう少し時をおいたらどうです。一杯のみ直しましょうや」
「じゃあ、そうしましょう」
あっさり彼はうなずいた。直後だけにプレイに対する関心は、稍々、気乗薄になっていたのだろう。
「撮ってくれましたか――」
「ああ、撮りましたよ」
「一寸羞かしいなあ。あの時のフォトはいただけませんか」
「勿論そのつもりです」
「やいやい、言っていたのに、いざとなるとダメなんですねえ。本当に辻村さんには悪いと思いますが、もう一回だけつき合って下さい。なあ喜久子、いいだろう」
妻はかすかにうなずいた。ここで夫の日頃の欝積をはかせてやらないと、その無念は家に戻って、あとあとまで尾を曳くと、賢明にも推察したに違いなかった。
「あなた、あたたまって来てもいいかしら。少し寒くなりましたわ」
喜久子夫人は、こころもち顔を白けさせて体を縮めていた。暖房に早く、冷房には冷めたすぎる十月の空気は、過すには快適であっても、ハダカの身には冷えびえとしていた。
「辻村さん、今日のフォトを矢張りハントにのせるんでしょうね」
妻が部屋のバスに立ったあと、彼はフトそんな事をきいた。
「安井さんさえよければ、のせたいと思いますが、いけませんか」
「いいんです、書いて下さい。唯、あんまり判っきり顔が出ていると少し困るんですが」
「心得ています。ところで、どうでしょう。かなり沢山撮りましたが、分譲フォトとして編集長を喜ばせてあげていただけませんか」
「私はいいけど、分譲出来るほどのものになるでしょうかね」
「勿論なりますとも。承知していただければあと一息、バリバリ撮りたいのです。奥さんはとても素晴しい」
「本当でしょうか。お世辞じゃないでしょうね。妻にもきっと承諾させますが、編集長の気に入るでしょうか」
「太鼓判ですよ。孰れ、編集長にも会っていただきますが、売り出すかも知れませんよ。いや、きっとそうなる」
私には喜久子夫人の、この楚々とした、如何にも被虐タイプの容姿に自信があった。分譲については、彼の撰択に任せるとして話はついた。安井邦臣は、未だ裸の侭の姿で、いつしか真剣な表情になっていた。

×　　×　　×

私は妙に気分が昻ぶって、どうしても寝つかれなかった。明日の運転を考えると、寝なければいけないと、必死に心を鎮めようとするのに、頭脳は反比例して益々冴えてくる。

枕元の腕時計を、スタンドの光でのぞくと、もう午前二時に近い。

改めて始まった、午後九時頃からの、緊縛図絵が延々と続いて、解放されたのは午前零時を廻っていた。引止める彼をなだめて、私はやっと今、一人になって、真白なシーツの上で横たわっている。

二人きりのあの部屋で、飽きることなく夫婦プレイは続行されているかも知れない。私のフィルムは、既に四本撮り終っていたし、安井邦臣自身も二本ぐらいは費消していた。

プレイの緊縛模様が、走馬燈のように、次々と私の脳裡に浮かんでは消えてゆく。

安井邦臣は、激情のおもむく侭に行動した一回目とは違って、流石に次のプレイに対してはじっくりと取組んでいった。二人共プレイの雰囲気に馴れてきたのかも知れない。

喜久子夫人も、最早私の眼、私の手を意識しなくなっていた。柔肌に抵抗もなく、私の手をあがらいもせず、強烈な緊縛の数々を、さながら宿命であるかの様に甘受していた。私も彼も一ポーズ変る毎に貪ぼるように撮りまくっていた。一体幾度緊縛の構図を変えたであろうか。六回、いや八回であったかも知れない。縛り、解き、又縛り、さまざまに工夫を凝らして、二匹の野獣は、息もたえだえに、或いは呻き、或いは悶絶しようとする。

可憐な窈窕の美人を、縛りに縛りまくったのであった。そのひとつひとつを細密に描写していては、いくら枚数があっても足りない。

この強烈な緊縛の数々を、せめてフォトで察していただくより外、筆にするすべもない。安井邦臣の快諾による分譲フォトの、編集部での表題が、その緊縛の様子を克明に伝えてくれるであろう。

無我夢中の四時間であった。私の頭脳は濁った空気と疲労で混濁し、思考能力を失なっていた。若い肉体をもて余し気味だった安井邦臣も眼を真赤に充血させていた。条々と縄痕は夫人の全身を彩どり、美しく結い上げていた長い黒髪は乱れに乱れて、嗜虐に狂い立った名残りを哀れに止めていた。

もう一度、この夫人を対象として、心ゆくまで虐めつくし、縛りつくして、撮りまくってみたい欲望が、私の心に渦巻いている。

この椿での一夜が、思いもかけず、喜久子夫人に対する断ちがたい愛情を植えつけてしまったのだ。安井邦臣の溺愛する妻に、その感情は不貞であったに違いない。しかし、いつの日か再び、今一度、撮る機会に恵まれることを、私は確信していた。

鎮めようとする心に弥増して、心は妖しく疼いた。その時、彼女の鮮烈な肢態にダブって、突然に三浦一美の姿が浮び上った。そうだ、彼等にとって更に明日への快楽があるように、私にとっても、明日への未知の愉しみが待ちうけていたのだ。成る成らぬはその時の風次第。しかし確信があった。その確信を奈辺から持つようになったかは、漠としてロには言えぬとしても、帰阪するまでのその道中で、必ずやハント出来るという自信めいたものが、ヒタヒタと私の胸中を占め始めていたのだった。

寝苦しい夜もすがら、ウトウトとして、フト目覚めた時、海浜べりのカーテンごしの硝子のサッシ戸から、朝の陽光が明るく射しこんでいたのである。今日の天気も上乗のようであった。

×　×　×

「ねえ、どうして急に帰るのです。何か私達に気に入らぬことでもあったのでしょうか」

私が突然、独りで車で帰るといい出したので、安井邦臣はびっくりして、オロオロしてしきりに言訳した。昨夜来のプレイについて、私が何か不興にでもなったのかと感違い

していらしい。三浦一美との一件を言えば易いが、彼女と何もなかった時の体裁悪さを考えると、彼女のことは言えなかった。うまくいったら、その時は安井邦臣に得々と発表する気でいたらしい。そんな点、矢張り私はスタイリストなのだろうか。

「そうじゃないんです。忘れていた用事を急に思い出したのです。どうしても私が帰らないとうまくゆかないのでね。あなた達が天王寺に着く時間をきめておいて、迎えにゆきますよ。昨夜のプレイの様子を見せていただいて、お二人でゆっくり愉しんでもいただきたいのですよ。奥さんもその方がいいんでしょう。少しは察して上げなさいよ、奥さんの気持を――」

　事実、二人でゆっくりさせてやりたい。私という第三者がいる以上、どうしても協同行動をとらねばならず、安井夫妻とて、おちおち温泉気分も愉しめぬと思ったのだった。

「あれ程仰有っていただくのですから……」

　夫人は心中ひそかにホッとした様子であった。安井邦臣も、私の他意のないことを漸やく悟って、最後は笑顔で納得した。

　椿温泉の土産を頂戴して、私は二人とホテルの入口で別れた。三浦一美のことを黙っていたのが一寸悪い様な気になる、彼等夫妻の親切ぶりであった。

　もう一夜、その夜こそは、邪魔者のいない二人きりの水入らずで彼等は心ゆくまで耽溺することだろう。それでいいのだ。使いなれた三本の縄は、わざと部屋に忘れてきた。私のバッグには、新しい一条の縄のみ残っているに過ぎない。一抹の希望をこの新しいロープに托して――。

　二人との別れが長引いて、予定の時間の午前九時を十五分近くも過ぎている。このホテルから、彼女の泊った旅館までは、車で走ると、ものの三分もかからない。

　旅館が近づいてくると、既に三浦一美は旅装をととのえて、道路にたたずんで、一心にこちらを眺めていた。私の車に気付いたらしい。数歩駈けて、小走りに近づいてくるのが見える。私は車の窓を開いてUターンした。息を切らせて、彼女は窓から首をさし込んできた。

「お早うございます。私、大分心配しましたわ。本当にいらっしゃるのかと思って」

　私は笑顔で無言の侭迎え入れた。助手席に坐って、彼女は鞄をうしろへ押しやった。

「この侭まっすぐお帰りになるの?」

「どちらでも。真すぐ帰ればひる下りにはつくよ。途中どこかへ寄ってもいいよ」

「本当、嬉しいわ。汽車だとそういうわけにもゆかないものね。私、アメリカ村や日の岬へもついでに行ってみたいと思っていましたけど、構わないかしら」

「行きましょう、あなたとならばね」

　通りすがりのガソリンスタンドで、ガソリンを満タンにして、車は快適に走り出した。

　私の魂胆をいつ話し出そうか。私は根よくそのチャンスを待つことにした。疾走する車中で、私は徐々に雑談のうちに話を核心へも

って行こうとした、私の肚を知る由もない。軽やいだ気持で浮々と、三浦一美はしきりにはしゃぎ、意識してか、せずか、私の運転するかいなに腕をかけてきたりして来た。機は追々と熟しつつあった。

日高川を渡ると御坊市の中心に入る。和歌山まで68K、日の岬10Kの標識をにらんで左に折れる。美浜町、通称アメリカ村と称するこの近辺は、海外移住民の先駆者の土地だった。五分も走った頃、海岸が見えた。防風林が美しい。噂にきく煙樹ガ浜とはこれであろうか。紀州藩祖の徳川頼宣が、延々五キロに及ぶ松林の植樹をしたといわれている。

一望にみはるかす海岸線には、人ッ子の影一人見当らず、数艘の漁船が、秋の陽の下に乾いて打ち上っていた。

道路ぎわに車をとめて、砂浜にくだる。南海の黒汐がじかに打ち寄せて、風は冷たい。

真夏にはキャンプや臨海学舎で賑うこの周辺も、今はうらぶれた佗しさのみが果てもなくただよっているかに見えた。

「素晴しいわ。日野てる子の夏の終りの浜辺を唄った感じだわ。メロドラマにみる海辺だわ……」

三浦一美は、この壮大な果てしなく続く海岸線にすっかり魂を奪われたように、感嘆しきりだった。海岸線の砂辺に並んで腰を降すと、私は御坊市に入った途中で買った寿司折の包みを開いた。ドライブインレストランで定石的な洋風食事をするより、遥かに野趣に富んで、寿司は旨かった。彼女も遠慮なく寿司をつまんでいる。

「スケッチしたいわ。おじさん、少しぐらい時間、構わないかしら？」

「いいとも、車からとってきてあげようか」

「私とってきますわ。おじさんに行かせるの気の毒ですわ」

ひとみはそういうと、ピョンと飛び上ってパンパンと腰を二、三度叩いて砂を払うと、勢いよく駈け出していった。まるでしなやかな牝鹿が跳躍するように走ってゆく。

無心に遠望をスケッチするひとみのかたわらで、私は所在なくねそべっていた。彼女の膝を投げ出して坐った腰の辺りに、私の頭がある。

「書けたかい？」

「うん、二枚ばかり」

「どれどれ、見せてごらん」

私の声で、彼女はスケッチ帳を、私の頭上にかざす。粗いタッチ乍ら、煙樹ガ浜の眺望を適確に摑んである。

「おじさんのお蔭よ。こんなに愉しいドライブが出来るとは、思ってもいなかったわ」

「モデルをやって、もう大分なるの？」

それに応えず、私は話をそらした。ここらで何とかうまく核心にもってゆかないと、手遅れになってしまう。

「半年許り前から、お友達に誘われて、週に一ぺん——」

「絵のモデルだけ」

「そうよ」

「勿論、ヌードだろう」

「まあね」

矢張り私のカンは当っていたのだ。伊勢ガ谷で聞いた時、確答はなかったが、このさりげない問いに、彼女は案外素直にスラスラと答えた。

「写真モデルはやったことないの？」

「二度ばかり……」

「単なるヌード？」

「そうよ」

「プロなの、それともアマに？」

「そうね、絵の方の人でしたからアマなんでしょう」

「一対一で？」

「いいえ、三人ぐらい一緒にきました」
「私もカメラいじくっているんだけど、あんたにモデルになってほしいな」
「まあ、本気で?」
「勿論、本気だよ」
「いいわ、なっても。だけど私、イロ黒いわよ。本当はカラダに自信ないんだけどなあ」
「自信ないどころか、ピチピチした若さに溢れているよ。服を着た上からでも分るさ」
「おじさん、ヌードよく撮るの?」
「ああ、下手の横好きでね。だから伊勢カ谷の、あの野猿の棲息地で、始めてあった時から、第六感でピーンときたんだ」
「いけないおじさん。少しエッチなのね。でも私、おじさんをいい人だと思いますわ。正直に仰有るもの。京都へ帰ったら、私の体の空いている日をすぐ連絡しますわ」
「今からじゃいけないかい?」
「えッ、これから!」
「ウン、これからだよ」
「ダメよ。今はそんなアルバイトする気持全然ないんですもの。折角こうして愉しんでいるのに気分壊れちゃうわ」
「知らない以前ならいざ知らず、こうしてあんたと一緒にいる以上、もう矢も楯も耐らないんだよ。ねえ、いいだろう」
「だって、突然だし、私、未だおじさんのこと何も知っていないのよ。困りますわ」
　三浦一美は困惑を如実に顔に現わし、眉にしわをよせて、私の体から少し身をにじらせて退いた。
「そうだね。何もお互いに知っていないんだものね。じゃあ、あんたの気持の出来るまでいつまでも待つとするよ」
　私はあっさりと強硬な態度を豹変させた。
「さあ、そろそろ行こうか。これから日の岬だったね」
「ええ、行って下さる?」
「ああ、いいよ。行きますよ」
　こうあっさりと要求を徹回してしまわれると、ひとみは少し勝手が違ったのかオロオロし出し、しきりに私の顔色を窺がっていた。
　強硬に押せば、尚更意地張るにきまっているのを私は見抜いていた。私の老獪な常套手段であったかも知れない。ひとみは私が一向怒っていないと知って、ホッとした様に生気を取戻していた。
「おじさん、御免なさいね。我侭いって…」
「無理をいったのは私の方だよ。君が謝まることなんかチットモないよ、さあ行こう」
　車は奇岩点在する細い道を走った。紀伊水道に突出した日の岬は、未舗装の急坂がしばらく続く。緑のスロープと紺碧の海に、美しく映える白亜の日御崎灯台がやがてみえてきた。
　頂上のパークに降り立つと風は冷めたく、かなり強く私達に吹きつけた。
　デンマーク汽船『エレン・マークス号』の機関長ヨハネス・クヌッセンの胸像の前で、私は一美と共に、セルフタイマーで記念の写真をとった。遭難する日本漁船員を助けようと、深夜の荒海に単身飛び込み、自らの命も絶ったクヌッセンの、国籍を超えた人類愛は、尊く、美しいものであると、私はしばし胸像の前で、その来歴を読んで心を打たれていた。ひとみは早速スケッチを始めていた。美しいものに対する関心の深さは、絵画という芸術を通して、彼女の心に脈々とうつっているに違いない。パークに数軒の売店や食堂、上り口にレストラン等散在しているが、閑静そのもので、子供連れのドライバーの親子であろうか、遊園地で遊ぶ一組だけが、私達の外にあるのみだった。
　眼下の展望は、正に絶品であった。三浦一美は、嘆息にも似た吐息をもらして、この壮

大なる展望に心を奪われてみとれていた。
「とても絵にならないわ。余りにも素晴し過ぎて、書けないわ」
彼女は彼方の白亜の日御崎灯台の風景のみ一枚書いてスケッチ帳を閉じた。

×　　×　　×

車は今、十数カ所のトンネルを抜けて、海南市の市中の、市電沿いの道を走っていた。
自然の美にうたれてか、私も三浦一美も、フォトやモデルの話は全然口にしなかった。時間はもう午後三時を大分廻っている。寄道して大分時間を食い過ぎたようだ。
「私、この夏に和歌の浦へ来たのよ。絵の人達と一緒に」
「描きにきたの?」
「ううん、その時は描く方じゃなくて描かれる方――」
「モデルになったのだね」
そろそろ機が熟してきたようだ。今度は慎重にゆこう。
「ええ、雑賀崎の海岸でヌードよ。旅館からの海岸べりで、絵の人以外はオフリミットだったけど」
「フーン」

「その時、カメラ持っていた人もあったわ」
何を言おうとしているのだろう。又ぞろ人の気を揉ますようなことを喋べり出す。
「………」
私は返事せず、かなり混雑する海南市の街中を抜け出そうと、懸命にハンドルを握っていた。彼女はしばらく黙っていたが、又口をきる。
「奥和歌の方に、とってもいいお風呂のある旅館知ってるのよ。あそこはよかったわ」
どうやら、ドライブに疲れて一服したいらしい。しかし自分から一休みしようと言い出し難くて、しきりに私に言わせせようとしている魂胆らしかった。無理もない、椿を出てから、もう一三五キロ近くも走っているのだ。ドライブ馴れせぬものにとっては、かなりの疲労を感じることだろう。
「疲れたのだろう」
「ええ、少し……」
「君がえらく気にいっている和歌の浦へ行くかね」
「あらッ、私はどちらでもいいのよ」
腹を見すかされたようで、彼女は心にもなくあわてて打ち消した。
「いいんだよ、君の気にいってるホテルで一休みしても。何しろ和歌山から大阪までは、未だ七十数キロ走るんだからね。しかし不時着すると夜になるかも知れんよ」
「京都へは、おそくなっても今日中には帰るんでしょう」
「そりゃ帰れるけれど、和歌の浦での時間次第だ。少し早いが、風呂にでも入って、メシを喰ってゆくか。じゃあそうしよう」
私は腹をきめた。あわよくば、ここらでモノに出来そうである。
南海電車の海南線の、和歌の浦停留所で左折して、旅館群の櫛比する細いうねうねした

道を昇ってゆく。新和歌、奥和歌の景色は、旅館に遮ぎられて何一つみえない。いい位置はすべて旅館で遮蔽されていた。
「双子島がみえる雑賀崎にあるの。でもおじさん我侭いって本当にすみませんでした」
三浦一美は神妙にペコリと頭を下げた。

×　　×　　×

私の眼前近々と、三浦一美の全裸がありの侭にあった。もう数枚、私はそのピチピチしたヌードをカメラに納めていた。モデルをしているだけあって、ひとみのポーズは所謂型に嵌っていた。巧みに腿を合せ、或いは掌で一部を隠蔽した。それは職業柄からくる技巧であったかも知れない。
一室に落着いた時、私は一言だけ言った。
「どう、撮らさないかい」と。
「ええ、いいわ」
三浦一美はあっさりとうなずいて応諾したのだった。煙樹ガ浜でのやりとりのわだかまりが、きっと彼女の心を重くしていたのであろう。だからこそ、自らをそれとなく、この場所へ誘ったのではなかろうか。
彼女が大浴場へいっている間に、私は食事の会席膳を注文し、電話で時間を告げたら持ってきて貰う様伝えた。
彼女は単なるヌードのみと思っているに違いなかった。私の心の奥に秘む、Sへの要求は今の場合、言い出し様もなかったのだ。若しそのことに触れたならば、彼女はきっと拒否するに違いないと感じた。
モデル料をきくと、彼女はそんなもの要らないと言う。彼女にとって、ドライブの帰途の旅の交換条件のつもりかも知れなかった。なまじタダより、それなりの報酬を支払った方がやり易いのだが、モデル料を受取らない彼女の意思を尊重するとなると、緊縛のフォトはいよいよ撮り難くなってくる。旅でのゆきずりに、若い娘の裸を写しただけでも以て冥すべしだ――と、半ばプレイの方はあきらめて、私は彼女の戻るのを待った。
湯上りの浴衣姿で、彼女はクリーム気ひとつない、地肌の侭の、多少日焼けのした顔で戻ってきた。手に下着を丸めて抱えている。この娘は素肌に浴衣をまとってきたのだろうか。それはヌードになろうとする、既に覚悟の上の行為であった。
「おじさんのお好きなポーズ注文して頂戴。いわれた通りしますから」
私がストロボを装填して、カメラをいじくっていると、彼女はうながす様に言った。その言葉の裏には、早く撮り終って心の負担を軽くしたいような口調が感じられた。いきなり妙なポーズもさせられない。ハイドになろうとする心をぐっとこらえて、表面は紳士面でさりげなく、
「さあ、君の方が反ってポーズをとるのが馴れているだろうから、思う様にやって御覧。適当にうつすから……」
と、心にもない言葉を吐き出す私。緊縛の要求なんてとてものことじゃない。さして面白くもないが、ここは我慢して週刊誌にでもザラにのっていそうなフォトをとるより仕方あるまい。彼女は自分で次々とポーズを換えていった。一応私は閃光を走らせている。
「おじさん、余り興味ないんじゃない。それとも私が気に入らないの？」
流石に女心で彼女は気付いた様だった。
「どうして？　とても愉しんだよ」
「ウソ！　ちっとも愉しそうじゃないわ。私知っているのよ。カメラうつす人は、いろいろと構図をかえたり、それこそ転がったりして、皆眼の色が真剣なはずだわ。おじさんは何となくとってるって感じなの。気が進まないのなら、よすわ」
「いや、そうじゃないんだ。疲れたからかも

知れない。君が一生懸命やってくれていることは分り過ぎるくらいだよ。やめないでね」

　私はあわてて弁解した。

「本当？　それならいいんだけど、何だか私の一人角力みたいで、一寸悲しかったの」

　三浦一美は敏感であった。ヌードにさして興味を示さない私の態度を逸早く見抜いたらしかった。しかし、私の心の奥のもう一つの欲求に迄は、到底判る筈もなかったのだ。

　彼女は立ったポーズを崩して、浴衣をとり上げようとした。やめる気になったのかも知れない。

「あッ、一寸待って。君の好意が凄く嬉しいんだよ。けれど私のとりたいポーズはないんだ。思いきってやってくれる？」

「どんなこと？」

「口で言えないけど、そうだ。あの腰掛けに坐って、じっと眼をつむって御覧」

「変ね、こうするの？」

　言われる侭に、彼女は窓際の腰掛けを両手で提げてくると、壁に面して置いて坐った。

　膝に両手を揃え、両腿をピッチリと閉じて坐っている。その眸は私の言う通り、静かに閉じていた。ＳＭ気の全然ない（私はないと信じている。そうしたことを何一つ喋べらなかったのだから、若い娘は想像もしていないだろう）この娘に、縄をかけることは、相当の冒険であった。或いは抵抗するかも知れないし、悲鳴をあげるかも知れない。最悪の場合、独り脱走する危惧もあった。しかしこの場に及んで、凡々たるヌードに甘んじることは私の嗜虐心が辛抱していなかった。その時はその時のことだ。なる様になれという気持で、私はそっと鞄から、例の新しいたった一本きりのロープをとり出すと、矢庭に彼女に近づいた。両膝の手にロープを素早くかける。バッと眼を開いた彼女は、咄嗟に貞操の危機を念頭に走らせたに違いなかった。

「あッ、何をするの？」

　と両手を激しく動かせて、縄をとこうとした。私は押えつけるようにして、その両手を上に挙げさすと、椅子のうしろから胸にかけていった。

「おじさん、やめて、ひどいわ！」

「静かに、何もしないよ。こうして縛った姿をとりたいのだ。それが私の願望だった」

「いや、いや、そんなこと」

　彼女は必死に反抗した。

「声を出すわよ、やめて――」

「頼む、これ一回きりだけ、ね！」

　私も必死だった。あがらう彼女を押えつけながら、長い縄を足にかけて、腰掛の肘当てに片脚を縛りつける。きつく閉じようとする太腿を引きはがす私も又必死である。開股縛りを終えて、私はホッとした。既に一美は諦観の念を表情にうかべて、固く眼をつむっていた。最も極端なこのポーズに、彼女の脳裡には甘言に欺されたという悔悟の思いが走っていたのではなかろうか。

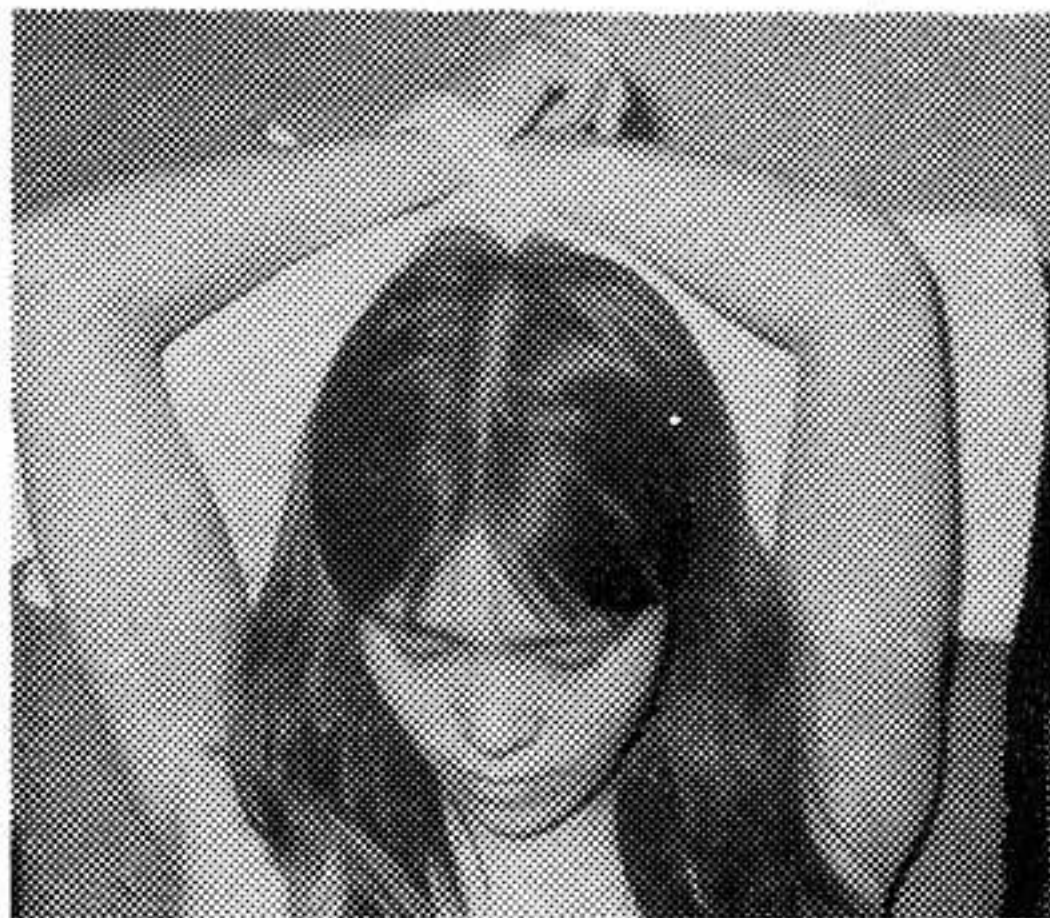
　私は眼を血走らせる想いで十数枚この同一ポーズをあちこちから撮りまくった。

　羞恥と屈辱に一美の頬は歪んでいた。この数分間の私の行為が、今朝から今までの愉しいドライブ旅行の、甘い想い出を一挙に破壊してしまうに違いないと暗胆としたが、私のＳの執念は、やはりこんな行為に出てしまったのである。三浦一美の私に対するイメージは一変したことであろう。昔の私なら、ヌードから徐々に口説いて、そろそろＳＭ議義に持込み、納得ずくで、緊縛したかもしれなかった。近来頓にそうした長い時間をかけることが煩らわしくなって、短兵急になっている私を、今、一美のこの緊縛の姿を前にして、深く反省していた。綺麗な美しい、秋の澄みきった空にも似た想い出は、無惨にもこの数

分のSプレイの粗暴な行為で、粉々にふみにじられたといっても過言ではない。私は自分のそうした嗜虐の性癖が呪わしくなりさえした。

私は一美に近寄ると、大急ぎで縄をといていった。解き終った時、パッと立上った彼女は、浴衣を素早く纏い、下着をつけ始めた。屈辱にまみれて、一人でもここから立去る気であろうか。謝りたいと思ったが、むしろ無言で時を稼ぐ気で、私はのろのろとカメラや縄を鞄にしまいこんでいた。彼女は片隅で、私に背を向けて踞くまっている。私も気拙く無言でタバコをふかす。思い出したように私は電話をして食事を頼んだ。

恐ろしく白々しい、息のつまりそうな雰気であった。

女中が食事を運んで来た。奇妙な沈黙の雰囲気を口説か痴話げんかとでもとったらしかった。口説きそこねた中年男に見えたに違いない。料理を机上にならべると、さっさと出ていってしまった。気をきかせたのか一本のビールが机上に栓をぬいた侭おいてある。

「食事をしよう」

ポツリというと、一美は向うをむいてうつむいた侭、そっと顔を押えて、うなだれた侭素直に向い合って坐った。

「悪かったね」

「非道いことなさるのね」

「ヌードに飽いて、ああしないと興味がのらないのだ」

「サジストね、おじさん」

「知っているんだね、そんな言葉」

一美の頬に硬い笑いが浮んですぐ消えた。

「話にはきいたことあるけど、お眼にかかったのは始めてよ。そんなことして面白い?」

「…………」

私は返事に困って手酌でビールをついだ。思いきり飲んで、この苦いひとときを忘れたかったが、大阪までの道程を考えると、そうもならず、一本のビールさえあけかねた。

「いつも縄なんか持ち歩いているの?」

「いや、一緒にいった夫婦がやはりこうした趣味の人達なのだ。それで頼まれて準備していったのだけど……。怒っているかい?」

「怒っても、すんでしまったことは仕方ないわ。サイナンとあきらめることにするわ」

一美はそういって、そそくさと料理をたべ始めた。二人の間には固い垣が出来ていた。もうこの垣は、再び取り除かれぬかも知れない。

「食事すんだら、すぐ出ようか?」

「おじさん、お風呂は?」

「待っていてくれるかね」

一美はだまってうなずいた。折角だから入ってこよう。しばらく冷却期間があっていいかも知れない。その間に彼女が逃げ出したらそれ迄のことだ。

私はタオルを摑むと立上った。

×　×　×

つるべ落しの秋の陽昏れは早かった。和歌山に向う道は、もうとっぷりと昏れ果てている。一美は硬い沈黙をつづけていた。

私は知っている。大浴場へ立った間に、彼女が数枚の紙幣を私の紙入れより抜いたことを——。勘定した時、私はハッと気付いて、

一美を見た。彼女は素知らぬ振りでソッポをむいていた。ムラムラッとした感情がこみ上げたが私は押えた。最初は好意に酬ゆるための、無償のヌードであっても、最後の緊縛プレイによって、彼女は考えを変えたに違いなかった。大浴場へ行くことをすすめたのは、その手段であったかも知れなかった。彼女のその行為で、私の所業は許されるべきだと思った。たった一つのポーズにしては、高価な代償であったが、彼女にとっては金銭であがなえぬ屈辱であったかも知れないのだ。

眼にささる対向のライトを避け乍ら、和歌山の市中を走ってゆく。

「おじさん、トイレにゆきたくなったの。どこかで止めてもらえない？」

「困ったね、じゃあどこかの駐車出来る喫茶へでも寄るとするか」

私は勝手知らぬ市中を右顧左べんしながら車を徐行させていった。

「あッ、あそこに喫茶店あるわ。あそこにしましょう」

彼女の指さした彼方に、喫茶のネオンが光っていた。車を道路ぎわに近寄せて止めると三浦一美は扉を開いて、鞄を握って車から素早く降りた。

「さよなら、おじさん――」

あッと思った時、彼女はスカートの裾をひらめかして、さっと走った。姿はシルエットとなって、遥か十数米先で、流しのタクシーに手を振っていた。

それが彼女の見おさめになったのである。

（おわり）

随想

責められる時

早木夢二

時々、堪らないほど責めてもらいたい時がある。先日紹介した、便所の落書生〝東京マゾ男〟氏が、希望通りの豊満美女に行き合ったのではないか。希望通りに責めて貰っているのではなかろうか、などと勝手な想像をして羨しく思うときなどは、その責められたい気持の強い時なのだ。

以後、注意して見るクセがついたのか、ちょいちょい目につく。「美青年を求む。当方○○○のホステス」というのがあって、電話番号が書き添えてある。本ものかどうか疑しいが、私がもっと若くて美貌だったら、即座に応じてみるのだが……。これも、わが年齢をかこつ他はない。

「しばって、拷問して下さい。マゾヒストよ

り」……どうも、このトイレはマゾに縁が深いようだがこの程度なら私にも乗れそうだ。十七とか八とか、美貌とかの注文はどうも都合よくない。

堪らなく責められたい気持が湧くと、すぐ妻を呼びつけて縛らす——？——のであるが、女房も、縛るより縛られる方が好きなのだから すぐに縄を独占する恰好で、逆に私に縛らせようとするので弱ってしまう。

時々は〝責めの浮気〟もしてみたいとも思うのだが、こう、妻との縛り遊戯が安易に、気ままに実行出来ると、なにかおっくうな気になってしまう。実をいうと、現在の妻以前に二、三人の女性と、縛り縛られた経験もあるが、今となっては、妻以外の女と新らしいかかわりを持てたとしても、かなり虫のいい私の要求を、とても受け容れてくれるとは思えないので、多少はトウがたって、それこそ真新しい縄で縛り上げても、どことなく弛みのみえはじめた妻であっても、やはり慣れた方がよさそうだ。

ひと頃、私はよく風呂場で縛って貰った。浴槽の中に立ったまま入念に縄がけしてもらうのだが、きっちりと菱縄縛りにされた体を湯に浸し、水を吸った縄がグングン締ってくる感覚を、しみじみ楽しんだものだ。

なんとも、やりたい放題に実行しているような感じで、ヌケヌケとこんなことを書くのが気恥かしい想いもするが、こんなわがままが出来るようになるまでには、仲々日時を要したものだ。私たちの場合、緊縛生活二十年近くになろうというのだから、そのキャリアと努力に免じて、大目に見て欲しいという想いもある。

いわば、私たちの夫婦生活の、今や不可欠の要素となっているといえるのだ。そして尚かつ、時には浮気をしてみたいなどと、思うのだから、この菱縄マニヤの欲深さも始末が悪い。

場末の映画館の前を通り合せた時、「赤い肉」というポスターにひかれ、つい入場券を買ってしまった。

脚本は団鬼六先生。期待してスクリーンを眺める眼に神経を集中したが、残念ながら甚だ失望。菱縄姿が出てこなかったからではない。責めの場面がほんのつけ足し程度であったからである。私の眼からみれば、甚だお粗末といわざるを得ない。

珍らしく剃毛責めを採り上げているが、勿論、その雰囲気をにおわすだけのものであるし、縛りも、この程度のものではもう私はなんの感興も覚えられない。前記のように、生活の中に緊縛というものが入りこんで、ごく当然のことになって、その縛り方も凝りに凝ったものを平気で行っている私だからかも知れないとは思うけれども、なんとも失望せざるを得ない。ストーリーも、団先生の手慣れたもので、もう何度も繰り返して観たもののような感じが拭えない。焼き直しでは面白いと思うはずはない。

失望したから八つ当りをするわけではないが、もっともっと〝責め場面〟を重視して貰いたいものである。何といっても、こういう場面は、こんな映画でないと観られるものではないし、又、そういうところこそ、この種映画の〝真価〟ともいえるのではないだろうか。もっと別の重要なファクターになって、叮寧な描写が欲しいと望むのは無理か。

もう一つ、つけ足させて貰えば、もっともっと〝菱縄〟に重点を置けば、その価値は更に更にあがると思うのであるが……。

欲深い菱縄マニヤは始末が悪い……。

繊細な白肌に豊満な
—女体がからむ妖しい
——レスビアン・ラブの
———魅力と夢幻的な美し
————さを描く実践派の
—————体当り的体験小説。

背徳の果てに

清原麻耶

十二月の寒風に凍てつく真夜中の国道26号線を、俺の愛車〝スリーエス〟は百二十キロのフルスピードで突っ走る。

目的地、和歌浦の旅館街に着く頃には、三時を過ぎるだろう。

＜この女も俺の秘密を知ったら、やはり逃げ去るだろうか？＞

そんな事を考えながら、俺は助手席にうなだれている端正な横顔へ、素早く視線を走らせた。

＜この女と知り合ったのは二カ月前だ＞

俺が行きつけの、南のバー〝サタン〟でだった。

「あなた好みの美人が来たわよ」

かなり酔いの回った俺に、太っちょのママは、カウンターごしに低く囁いたものだ。

＜ちえっ！ また始めやがった＞

何度となく聞かされたその言葉に、さほどの期待もかけず視線を向けた俺は、その女の美しさに思わず見とれ、心が妖しく騒ぐのを知った。

「どう、気に入った？」

再び耳許で囁くのへ無言で頷くと、いたずらっぽいウインクをチラリと送り、俺の隣の空席へ女を坐らせたのだ。

さわやかな脂粉を漂わせて、注文したブランディを静かに飲む女。

さりげなく、そのさまを観察する俺だった。日本人離れした彫りの深い顔立は端正に整っていて、どことなく気品があり、好みの良い着物に包まれた肢体は、意外なほどボリウムがある。

しなやかで、指を押しつけると、どこまでもめり込みそうな雪の肌。

エキゾチックだが、日本女性特有の古風なしとやかさを小柄な全身に漂わせた女の、そのすべてが俺は気に入った。

恰好な獲物だった。

「あんた、東京の人だろ?」

ぶっきらぼうに切り出してみる。

「えっ?」

驚いた顔が俺を見つめ、

「ええ、そうですわ」

首をかしげるようにして答え、口元をかすかにほころばせた。

〈よしっ、落ちた!〉

その時俺は、そう直感した。

長いガールハント生活から得た勘に狂いはないはずだ。

しかし、表情はごく冷淡に

「俺も東京なんだ。だからひと目で解るよ」

視線を外しながら言ったものだ。

「まあ、そうなんですの」

なつかしそうな女の声音だった。

「住み良い所さ、大阪は……」

じっと見つめて言うと、照れて横を向き、頬が紅を散らしたように赤くなる。

その美しさに、俺はぞっこんまいってしまった。

〈大阪には、俺の秘密を知ってる奴はひとりも居ない。だから住み良いのさ……〉

ギリシヤ彫刺を思わせる、神秘的なまでに整った横顔へ、俺は無言の呼びを投げつけていた。

一時間後、〝サタン〟を出る俺の誘うままに女はついてきた。

同郷の親しみが、俺のたくみな話術によって、いつか信頼に変っていたのか……

それも、やがて俺によって見事に裏切られるとも知らずに……。

さらに数時間後、女は、俺のマンションに居た。

しかも白い肌を晒して後手に縛られ、乳房の上下に深く沈むロープに苦しげに喘ぎ、妖しいうねりをジュータンの上にくり返しているのだ。

何軒目かのバーで、酔いに火照った熱い体を俺の胸に預け、渇きを訴える女に、俺はポケットのハイミナールを取り出し、

「これを飲めば悪酔いしないよ」

小さく開いた唇へ三粒入れてやると、こっくり頷いて水で流し込んだものだ。

ハイミナールは睡眠薬。

悪酔い、二日酔いには、まったく関係ないのだが、何ともいえない快楽を与えてくれる。しかし、理性を殺してしまう恐しい薬でもあった。

過去においても、新しい獲物を釣る時、俺はよくこれを利用し、確実な成果を納めた。

そしてこの女も例外ではなく、その日のうちに捉える事ができたわけだ。

薬の効きめにモーローと陶酔している女を裸にし、縛る事など朝飯前の俺だった。

生まれて始めて受ける厳しい縛しめに苦悶しのけぞった険しい表情が俺の行為を咎め、やがて、苦痛の呻きの中に哀願を流して許しを乞い、さらにあきらめた忍び泣きに、と変

ってゆく。

ロープにくびられて盛り上った乳房は、激しく波うち、細く引き締った肢体は見事にしなって脂汗に光った。

死にも勝るべき恥辱の連続に怯え、おののくさまは妖しいまでに美しく、着衣の上からは予想しなかった豊満な肉付きを持った女体の反応は、やはり想像以上に素晴しく、かって味った事のない満足感に酔いしれる俺だった。

朝の日差しがカーテンの隙間から眩しく差し込む頃、女体を解放してやった、が、ぐったりと開ききった四肢をあからさまに晒す恥しさに震えながらも、閉じるのさえ自由にならないほど、体力を消耗していたのだ。

「ど、どうしてこんな事を……」

かなりして、ようやく体を伏せて裸身をかくす事ができた女は、涙をジュータンに滲ませながら喘ぐように言った。

「あんたが美し過ぎたからさ。男なんて獣はね、それを自分の手で触れてみたくなるものさ。触れているうちに目茶苦茶に破壊したい衝動に駆られる。そんなものを、いつも心の奥深くに持っているのが男さ、男という名の獣なんだ。俺は素直に実行したまでだ」

不敵な笑いを口許に浮かべて、俺は答えたものだ。

「む、むごい、そんな……そんな……」

激しい怒りのために、罵倒し、詰る言葉さえ見失った口惜しさに、狂ったように身悶えて泣きじゃくる女。

解けた髪が長く、濡れた背中にからみついて小刻みに震えている。

「送ってやろうか？、それとも泊る？」

「いやっ、帰る！」

さえぎる声音は鋭く、しかし怯えた響きがあった。

「帰るの、帰して……」

一瞬四肢を硬直させ、やがて身をよじって哀願するのだった。

まるで母に甘える駄々子のように……

「どこまで帰るの？」

行先を問う俺に、タクシーの運ちゃんにでも言うような口調で女は言ったものだ。

「大阪Gホテル」と……

「部屋まで行ってやろうか？」

去らぬ苦痛に呻きながら車を下りる背中へ声をかけると、振り向いた顔がこっくりと頷いた。もう怒ってはいなかった。

それが俺には、なぜか甘えているふうに見えるのだ。

シングルベッドへ静かに横たえてやると、女は大きな溜息を吐いて、ぐったりと全身の力を抜いてゆく。

「帰って…」

薄く瞳を開けてつぶやくように言う唇が濡れて、かすかに震えた。

素早く俺は、それを奪ってやった。

「あっ……」
重ねる寸前に女は熱い叫びをあげた。が、それもやがて、俺の唇に消された。
「逢いたくなったら、〝サタン〟においで…」
桜貝を思わせる愛らしい耳許へ低く囁いてそれにも軽く口づけしてやると、女は閉じた睫毛を震わせて頷いた。……と、思ったのは気のせいだったろうか?。
いや、気のせいではなかったのだ。
半月近い日が過ぎた頃、女は〝サタン〟に待つ俺の目の前に、再び現われた。
その時の感動をあえて表現するならば、〝熱い血潮が逆流するような〟そんな息苦しいまでの歓喜を覚えた俺だった。
しかし、表情には出さず、冷たい一瞥を女に投げて、俺は店を出た。
女は無言で従った。
車の中でも、マンションに入ってからでも貝のように固く閉ざした唇は開く気配さえ無く、ぶしつけな視線を痛いほど全身へ感じるのか、深くうなだれ、震えるさまは、まるで猫に睨まれたネズミだった。
「脱ぎなよ!」
再び訪れたそこに、半月前の悪夢の一夜をまざまざと思い出したのか、茫然と立ちすくむのへ俺は命令した。
「あー、なぜ? なぜ!」
乳房を両腕に抱いて泣き伏し、女は呻くように低く言ったものだ。
それは、俺に、というより、一度教え込まれた歪んだ情欲の快楽を求めて、体から従ってしまった自分の弱さを責め、問い返しているふうだった。
ドサッ、と音をたてて顔のそばへ落ちた太いロープの束に、ギクッと体を起し、悲痛な声で女は言った。
「あー、許して…」
しかし、瞳が妖しく光った。
「じゃあ、何しに来たんだよ。息が止まるほど強烈に縛られたいからだろう。そんな姿でいじめられるために来たんじゃないのか?…
…思い通りにしてやるよ。裸になるんだ!」
「あー　いや、そんな言いかたはやめてっ! ひどい、ひどいわ……」
せきを切ったように涙が頬を濡らし、身悶えて、泣きじゃくる女。
その肩を乱暴に抱き寄せ、唇を重ねると、後は、俺の思うままになった。
太いロープにくびれる女体へ、笞の甘美な激痛を教えたのは、その時が始めてだった。
ジュータンの上をころげ回ってのたうち、身をよじって泣き叫ぶ女の白い背肌は。美しく光っていた。
「名前は?」
力いっぱい笞を振り降ろしながら、俺は問うた。
「ひーっ! 長谷川、久美、許してっ」
悲鳴の中に鋭く答える女。
「年は、いくつだ?」
乳房の丸みを潰すように弾かせながら、さらに問う俺の声音は、久美のそれと対照的に静かに落ちついていた。
二十三才、俺よりひとつ年下だ。
すべてを告白した時は、全身にみみず腫れを何本も刻みこまれた女体は、強打に大きくのけぞって咽喉を鋭く鳴らし、ガックリと力を抜いた。失神したのだ。
伸びた女体は笞跡も美しく濡れて光り、俺はその美しさをいつまでも飽かずに眺めていたものだ。
セミダブルのベッドへ寝かした意識の無い女体を開かせ、俺はむさぼるように激しく挑んでいった。

息苦しく呻いて目覚めた久美は、あまりにも真近にある俺の顔に一瞬戸惑い、驚いた表情で見つめた。

しかし、次の瞬間、早くも自分の置かれている立場を知って声もなく叫び、弓なりにのけぞって逃げようともがく。

だが、後手に縛られた不身由な体で、そのすべてが空しい抵抗にしか過ぎない事を悟ったのか、ぐったりと置かれた立場に身を任かせるのだった。

身内を貫き抜けるような激痛に悲鳴をあげながらも、全身を這う唇の感触に狂おしく喘ぎ、言葉にならない声を流して、やがて、深い恍惚の谷間に落ちてゆくさまをみせる久美だった。

責めに責め抜かれた女体は、昼下りのけだるい太陽を、カーテンごしに受けて美しく輝き、薄暗いベッドの上で、か細い鳴咽を止めようともせず、

「捨てないで……私を捨てないで、どんな事でも従います。だから……お願い……」

消え入りそうな声音で言ったものだ。

無理もない。

厳しくロープに縛られた全裸を、俺の視線に晒け出しているのだから……

〈俺の秘密を知ったとしてもか？〉

心で叫びながらも、俺は頷いてしまった。

今にして思えば、その時すでに、俺の心は久美に魅かれていたんだと思う。

〈好きだよお前が！　だけど、どうしょうもないんだ俺には……〉

腹の底からせぐりあげる、ヤリ場のない憤りに身震いしてアイセルを強く踏んだ。

百三〇、百五〇……

風のうなりに舞い上る砂煙を尻目の暗闇へ捨てて、愛車〝スリーエース〟は凍てつく路上を矢のように突っ走る。

鈴鹿サーキットのレースに何度も優勝したキャリアを持つ俺は、こと運転に関して誰にも負けない自信がある。

タイヤを軋ませて左右にスリップする車内で、久美は激しく揺れて悲鳴をあげ、恨めしそうに俺を見た。

しかし、潤んだ輝きに甘えにも似た影が走るのを、俺は見逃さなかった。

額に浮かぶ汗は、まんざらヒーターからくる暖房のせいばかりではない。

黒地に手染めの小花を全体にあしらった着物の下で、火のように燃えた肌にはロープが深く沈んでいるのだ。

細い皮紐で後に廻した手首を縛られた久美は、突出すようにした乳房を豊かに喘がせ、のけぞって目を閉じていた。

それは苦痛に耐える。というよりも、体の内部から湧きあがる狂おしい炎を味わい、それを全身で確認しているがごとくに見えた。

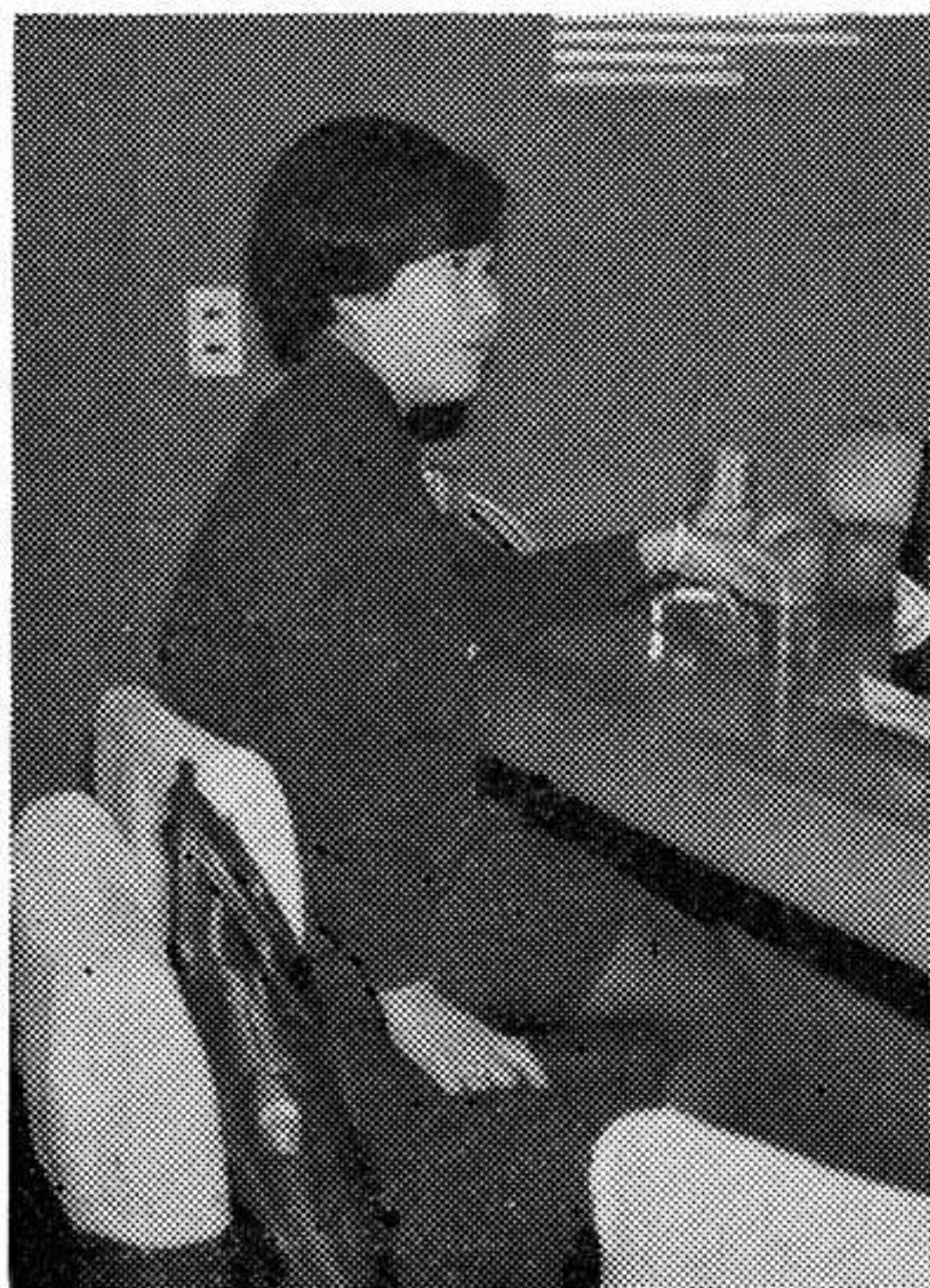
大阪を出る時に飲ませたハイミナールが回

り始めたのか……
　乳房の上下を締めあげ、両腕の下をくすぐるロープの結び目のせいなのか……。
　いや、深く深く喰い込む太いロープの感触と車の揺れと共にくる刺激に、酔っているのかも知れない、
　温泉町のネオンの林が、なまめかしくぼやけ、やがて、ぐんぐんと目前に迫った。
「お願い、手首を解いて……」
　縛ったまま防寒コートを着せる俺に、熱く呻くように久美は言った。
「いいじゃないか、どうせ縛られるんだからコートを着てればわからないさ。それとも、『久美は縛られているんですよ』って大声で叫んで歩くつもりなのか?」
「あー、いや」
　消え入りそうにうなだれる耳元へ囁くように俺は言った。
「置いってっちゃうぞ」
「いやっ、待って。降りますから、待って」
　車の震動に痺れてしまったのか、鈍い動作で身をよじり、降りようと切なく喘ぐ久美。
「あー駄目。降ろして」
　泣き声で哀願した。が俺は笑って言った。
「子供じゃあるまいし、ひとりで降りなよ」
　眉を寄せ、唇を噛み締めてくねるたびに、太股が妖しく覗き震えた。
　股肉のロープが、どうもいたずらな作用をしているらしい。
　本館から、かなり離れた〝K〟ホテル別館は本来が客用ではなく、現経営者の先代が自室として建てただけあって、豪華なうえに、落ちついた情緒がある。
　もちろん、誰にでも貸す、というのではない。先代が死去した後、なぜか客用として使用しなかったのだ。
　俺とは飲み友達にあたる現経営者は、
「親父の趣味で造っただろ。何だか異様に不気味で家族も嫌うんだ。それを客用に使えるものか、壊すといっても金がかかる—さ…」
　酔うと愚痴るように言うのだった。
〝異様に不気味〟そのことばが、次第に俺の興味を魅き、訪ねてみて〝親父の趣味〟なるものが飲み込めた。
　それは、その趣味の者にしか解らないだろう。自然の立木を室内に利用したり、粋を凝らして建てられたそのすべてにサディスチックなムードを、さりげなく漂わせていた。
　多少の叫びや、泣き声が外部に漏れないことが、俺は何よりも気に入った。
「時々、貸してくれないか?」
「いいよ。だけど、お前も変人だな」
　というわけで、俺には気安く使わせてくれるのだ。
　昼間は直接、外へ出入りできるのだが、夜になると本館を通らなければならない。
　長い廊下を何度も曲り、やっとたどりついた時、久美は待ちかね、耐えかねて悲鳴をあげて畳へくずれ、激しく肩をくねらせた。
「脱げよ!」
　手首を解いて、俺は言った。
　びくっと震えて起きた久美は、首を左右に振って後ずさった。
「いや、いやっ!」
　衿が乱れて肩からすべり、乳房の上を縛ったロープが、覗く。
　剝き出しになった太股が痛いほど白く、しっとりと濡れたように震えている。
　久美と訪れるのは始めてだったが、不思議なほど、この部屋にピッタリな感じがした。
「いや、許して」
　無言で見つめる俺に、久美は哀願して首を

左右に振り続けた。
「帰るのか？　帰ったって良いよ」
　突き離すように俺は言い。意地悪く、スーツケースに忍ばせた責道具を取出し、久美の鼻先へ突き付けてテーーブルへ並べてゆく。
「あっ、あー」
　そのたびに、その効果を刻むように教えられた女体は小さく叫んで身悶え、喰い入るように見つめるのだ。
「ひーっ！」
　笞が軽く畳へ躍ると、まるで打たれたように、びくびく震えて叫び、妖しくくねって笞を追う久美の瞳が、次第に熱っつく潤み、頬が痙攣した。
　ハイミナールが、完全な効果を発揮したのはこの時だった。
「どうする。車を呼ぼうか？」
　喘ぐ久美の顎を笞の先へ乗せて、ぐいっと仰むかせ冷ややかに問う俺に、消えかけた理性を懸命に保とうと固く目を閉じた。
「うっ！」
　顎を支えていた笞が、素早く衿の中へ消えて乳房を剝き出しにしたのだ。
　ロープに歪んで盛り上る花びらに、それは吸い付くように触れ、孤を描いて沈んだ。
「あっ、いや」
　畳へ爪を喰い込ませて震え、のけぞった顔が熱い喘ぎに濡れて、力なく首を振った。
「燃えてんだろ、早く脱げよ」
　催眠術にでもかかったように、意志のない指が震えながら帯を解き始める。
　ためらいながらも、体の中を駆けめぐる甘い誘惑に負けて、一枚ずつ脱いでゆく久美。
「あー　駄目、許して」
　そんな自分の浅ましい行為に消え入りたいほどの屈辱を覚えるのか手の動きが止まる。
　いつの場合も久美は激しい抵抗を示すのだ。しかし、俺は知っていた。そんな時、一番敏感な神経を責めると、切なく叫んで前よりも早く手が動き始めることを。
　ロープにくびれた全身が、明るい光の中に剝き出しになった時、久美は乳房を両手に抱き、細い腰から後へ回された縦の喰い込みに歪み、恥ずかしくさらけ出された内股をかくすように伏せて肩を喘がせた。
　それが、その美しさが、俺を残忍に駆りたてる事を久美は知っているのだろうか……
　固く閉ざした睫毛が小刻みに震えて、久美は恥辱のポーズに泣いていた。
　両手を頭上に延ばし柱を抱くような形に縛られて、あぐらに組んだ足首もまた、ガッチリと縛られているのだ。
　乳房の上下と、腰から縦にロープの跡がくっきりと刻まれ、痛々しくも、美しくも見えるのだった。
「うっ！　いや……あーっ」
　豊かな乳房を襲う筆に、恥ずかしいほど女を狂わせる秘薬が染み込んでいるのを肌で感じたのか、胸を引いて久美は逃げた。
　その効きめを、事実いやというほど何度も教えられた女体なのだ。
「あーんっあー」
　その動きに妖しくくねり、切なく高く喘いで身悶える久美。
　秘薬を筆へ、筆から乳房へ……
　何度もくり返すうちに、火のような喘ぎの中に言葉にならない悲鳴をあげてのけぞり、潤んだ瞳は焦点のないままに素早く走って、それも、次第に夢を見ているような恍惚とした輝きに濡れてゆくのだった。
「うーっ！　いや……いやっ、止めて！」
　白く引きつって鋭く咽喉を鳴らし、女体は弓のように返りかえった。
　乳房の筆が、たっぷりと秘薬を吸い込んで

あぐら縛りの柔肌を襲ったからだ。
　ぴくぴく腹を痙攣させ、脂汗がしたたり、波の様なうねりが全身を走る頃、妖しい嗚咽が強烈な効きめを現した事を俺に教えた。
「あーっ、か、かん、にんしてっ。ああーっいやっ、許して……うっ！」
　背中を柱の角へこすりつけて苦悶する久美は、目の前の俺を意識する余裕もなく、貫く狂おしい旋律に酔いしれていた。

　口を縛った皮ベルトに悲鳴も消され、おし殺した呻きは獣の遠吠えを連想させた。
　空気の流れにさえ、切なく疼く濡れた肌へ羽毛が這いずっている。
　小刻みに痙攣する肌は、やがて脂汗をしたたらせ、波のうねりに苦悶するのだった。
「ム、ムムッ、ム」
　物言いたげな眼差しが、必死の哀願をこめて許しを乞い続けた。
　しかし、俺は止めるどころか、さらに素早い踊りを走らせた。
　直赤に燃えた肌が光り、狂ったようなのたうちと、すすり泣きがいつ終るともなく始まるのだ。
　目のくらむような、気の狂いそうな恥辱のぐり返しに、次第に精根つきて頭を落した女体は、時々、耐えかねたように呻いてのけぞり、燃える瞳が白く引きつった。
　弱く首を左右に振って、何度も襲いくる苛責の嵐に素晴しく反応するさまは、俺をも妖しく燃えたたせていった。
　赤いスタンドの光に照らされた夜具の上にぐったりとのびた女体は再び後手に縛られている。
　背に回した腕のために、ロープ跡をくっきり浮かべた乳房が、いっそう豊かに盛り上って、かすかに息づいていた。

「うっ！」
　体の一部にえぐられるような痛みを覚えたのか、久美は目覚めた。
「あーっ！」
　細く高く叫んで弓なりにそり、久美は再び狂おしい嵐の中へ投げこまれていくのだった。
　ふたつの唇から流れる熱い喘ぎは、いつかひとつになり、久美の表情が俺の指導で美しく豊かに変化する。
「あっ、か、ん、にんして。うっ！」
　涙にむせび、哀願し、めくらめく炎に耐えきれず失神しそうになると、俺は力いっぱい頬を打ち、柔肌へ爪を立てて、激痛を与え、妖しいうねりと、切ないすすり泣きを、強いた。豊かな丸みが潰されてひしゃげ、激しい鼓動を伝えてくる。
　汗にすべる肢体を強く抱きしめると、大きくしなってのけぞり、耐え間なく悲鳴を流して慄える女体だった。
　熱い旋律にぐったりと力を抜

いて、俺に全身を預けた。
喘ぐ唇が激しくわななき、うつろな瞳が陶酔した輝きに濡れている。
ゆっくりと呼吸を整えて、俺は再び挑みかかってゆく。
「あっ！　あーいや。許して」
若さは、苦痛をも、疲労をも、炎と燃やすエネルギーを持っているのか、女体は敏感に反応した。
俺は狂った。
何もかも忘れて、燃えたぎる嵐の中を体力の続く限り、泳ぎまくった。
久美の存在さえも忘れて、俺自身の歓喜をむさぼり吸いとっていく。
何度も失神し、苦痛に目覚めて泣き叫ぶ久美の哀願をも無視して俺は狂った。
＜くそっ、バカヤロー！＞
獣と化した己の醜さを、浅ましさを罵りながら、悲しく狂ってしまうのだった。
まだ冷めやらぬ熱い肌に、冷たいシャワーの滝を頭から浴びて俺は泣いた。
中途半端な性が憎い！
すべての終りにくる耐えようのない空しさが、惨めさが、俺の心を責め苛む。

＜くそっ！　誰が悪いんだ＞
吠える声までが、男なのか、女なのか解らないのが、なおさら悲しい。
恋人にさえ、道具の力を借りなければ歓びを与えられない。そんな愛しかたしかできない事が、気の狂いそうな苦痛を教えやがる。
俺は泣いた。声を殺していつまでもシャワーの滝に打たれて泣いた。
＜久美は俺を男だと信じている。だから愛したのだ。だから、どんなむごい辱しめを与えられても耐え、素直に従うのだ＞
中途半端な俺の性を、苦しい秘密をうちあけよう、と何度、思った事か……。
しかし、その勇気はすでに無かった。
過去において、取るにたりない女でさえ、その事実を知った時、怯えて去った。
どんなに俺を愛していても、やはり去って行くのだ。
＜俺が半端者であるがゆえに……＞
そのすべてが、まったく俺の理想とする久美を絶対に失いたくないのだ。
その後に襲いくる孤独な生活を思うと、どうしても勇気が萎える俺だった。
だから、必要以上に乱暴な言葉を使って荒々しく愛してやるのだ。

秘密を悟られたくないために……。
久美に知られたくないために……。
＜しかし、俺は本当に女なのか？＞
一メートル七〇近い長身。骨ばった体には、スポーツで鍛えた筋肉の盛り上りはあっても、乳房の脹らみは、まったくない。
しかし、女だ。
一カ月に一度の赤いお客さんもわずかだがある。女にはない男のシンボルも、やはり俺にはないのだ。
女であって女でなく、さりとて男とも呼べない俺が、東京を捨てたのは五年前。
たったひとりの我子なのに、親父は何も言わずに自由にさせてくれた。
あり余る仕送りに、毎夜浴びるほど酒を飲み、車を持って豪華なマンションで何不自由なく暮す俺を、プレーボーイと呼んだ奴がいた。しかし、孤独で淋しい半端者の生活を知る奴は、ひとりとして居なかった。
それがまた、安らぎでもあったのだが。
「ねえ、私って、押しかけ女房ね」
くすっと笑って首をすくめ、久美は俺の胸にしがみついてくる。

ふたりが結婚したのは、正月も明けた五日過ぎだった。

俺の人生において、決して、望めない許されない甘美な奇跡が起きたのだ。

Kホテル別館に泊まったあの夜に……。

＜泣くだけ泣いてさっぱりした俺は、冷え切った肌に晒を巻き、縞の着物に角帯を締めて部屋へ戻ったんだっけ＞

モーローとする意識の中で、妖しいうねりに、隠影を落す女体を、俺は見つめて放さない。それに気付いた久美は、小さく叫んで伏せようと悶えたが疲労に、思うにまかせず、すすり泣きを噛み殺し力を抜いてしまった。

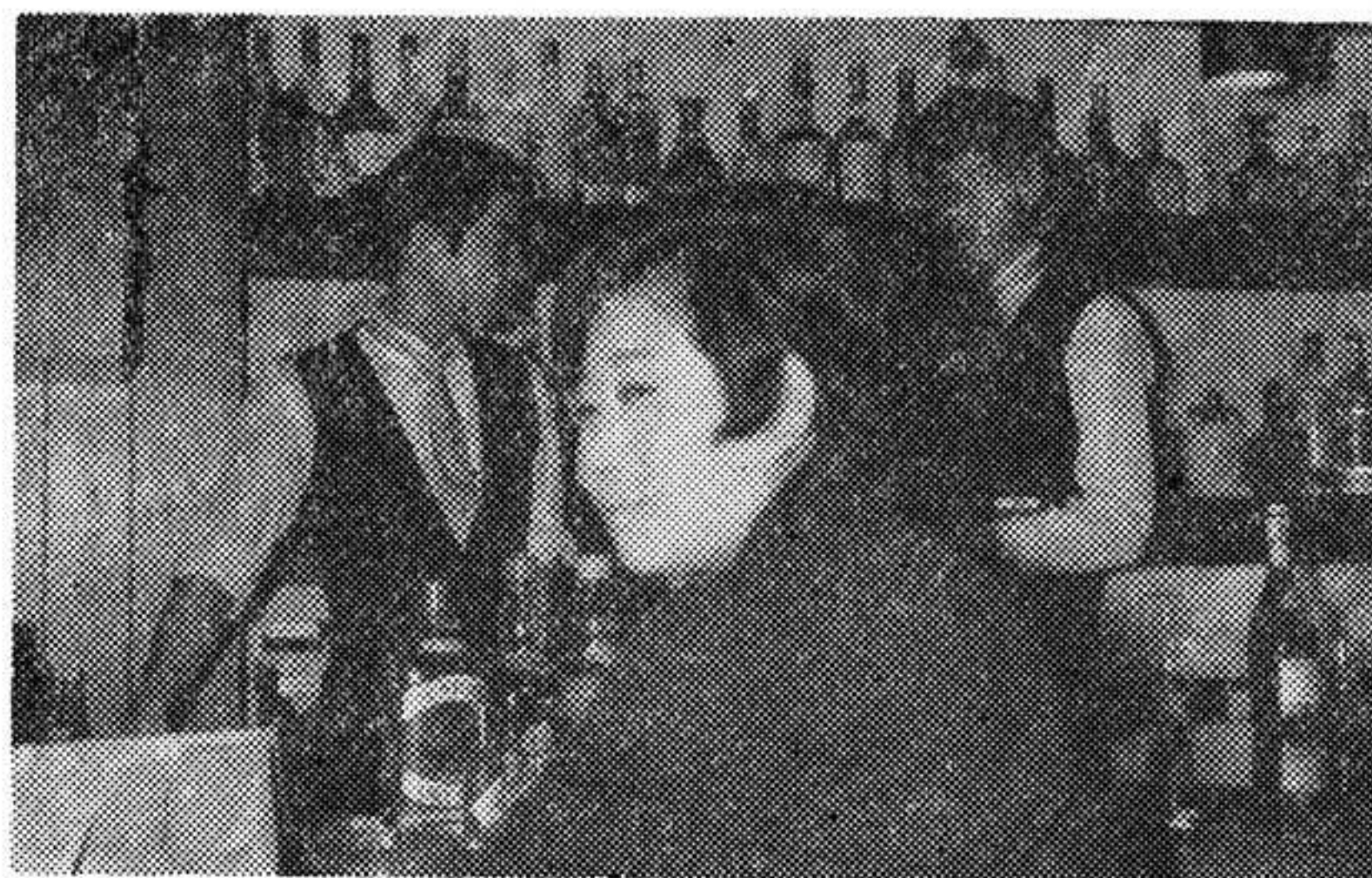
解放してやると、痺れた腕が感覚のないままに、歯型の刻み込まれた乳房を抱いてくるりと伏せ、全身をわななかせて喘ぐ久美。

濡れた細いうなじへ、そっと唇を触れると呻いてのけぞり、身悶えながら哀願した。

「あー　もういや、許して」

「風呂へ入ると良い。さっぱりするよ」

低い声音には、俺自身、驚くほどのうつろな暗い響きがあった。

おそらく、久美も始めて聞いたのだろう。びくっと震えて俺を見つめ、怯えたようにすがりついてくる。

「いいの、ごめんなさい。いいのよ、あなたの好きなようにして！」

俺の首へ、すがりついて泣きじゃくる背中を、優しく撫でてやった。

それは、他意のまったくないものだった。久美は何度も〝ごめんなさい〟と詫びた。細い体を抱き上げて浴室へ運ぶ俺に、

その時のその態度が、まさか愛の告白だとは知らなかった。信じられなかったのだ。

＜違うんだ、お前が悪いんじゃない。誰にもどうすることもできないことなんだよ＞

心とは反対に、俺は冷淡な声で言ってしまった。

「ゆっくりと肌を清めてくれよ。二、三日は起きられないほど、愛してやるからさ」

頬がポッと染まって視線を外らせ、しかし安心したように久美は小さく頷いた。

静かに湯を使う音を聞きながら俺は海に面したベランダのソファーに身を沈めて、眼下に広がる夜明けの海の美しさに心を奪われていた。

＜この自然の中に住む、男女の自然な愛。俺はどうすれば良いんだ＞

ぼんやりと、そんな事を考えていると熱いものが湧き上り、ぼやけて見えなくなった。

それを、ぬぐう気にもならない。

「いやっ！　泣いては、いや…」

その声に、ハッと我に還ると、バスタオル

を巻いて解いた髪を長く背に流した久美が、棒みたいに突っ立って、しゃくりあげ、泣いているのだ。

俺は言葉を失った。

人に、涙など見せた事がないのだ。

「私、知ってるのよ。泣かないで……」

まるで、俺の涙が自分のせいでもあるように泣きくずれる久美とは反対に、俺は身震いして喘ぐように言った。

「な、何を知っているというのだ！」

「何もかも、あなたの事を知っているのよ」

目の前が真暗になり、俺は再び、言うべき言葉を見失った。

「言わないつもりだった。それでも私は幸福だから……でも、あなたが苦しんでいるのを見て、とうとう言ってしまったの……」

俺の足を胸へ抱き、涙に濡れ、湯上りに火照った顔が、必死に見上げている。

「そうか、知っていたのか。でも、なぜ？　いつ解ったんだ……」

呻くように俺は聞いていた。

「始めてあなたに愛された時に、解ったの。私は男を知っていたわ。だから……」

ほとんど聞き取れないほど低い声音で答える久美は、もう泣いてはいなかった。

＜そうだったのか、俺は女しか愛した事がない。だから解るまいと思い込んでいた＞

始めて久美を抱いたのは、二度目の時だった。その日から、四、五回は逢い、むさぼるように久美を抱いている。

＜すると知っていながら従ったというのか＞

「こんな半端者に、なぜ従ったんだ！」

言葉の不利を考え、選ぶ余裕などすでに俺にはなかった。

「あなたを愛していたから……」

「うそだ！同情したからとはっきり言えよ」

反射的に、俺は鋭く怒鳴っていた。

「違う、信じて！」

すがりつく久美を力いっぱい叩きつけて、俺は部屋を飛び出していた。

砂浜にさまよう、うつろな心の中を凍るような隙間風が吹きまくり、冷えきった瞳からは、涙さえ涸れていた。

どこまでも、どこまでも、半端者が苦しまなくても生きられる国へ歩いて行きたかった。右へ左へ、泳ぐように歩く俺の耳に、久美の悲痛な叫びが追いすがる。

＜あっ！　久美は死ぬかも知れない＞

不吉な予感に立ちすくみ一目散に部屋へ走って帰る俺だった。

久美は、さっきと同じ場所に、死んだように、ぐったりと伏せていた。

「久美っ、どうした！」

夢中で抱き起す体が、氷のように冷たい。必死に呼び続け、全身を強く撫でてやると、しばらくして目を開いた。

「許して、あなたを傷つけてしまったのね。ごめんなさい、許して……」

虚脱したように、久美は力なく詫びた。

しっかりと胸に抱き締めてやっても、うわごとのように詫び続けるのだった。

「よかった、生きていて良かった。もう離さないよ、久美。離すもんか！」

腹の底から湧きあがる泉のような感動に、俺は素直に久美の愛を、告白を受け、俺もまた激しく誓うのだった。

＜このまま、ひとつに溶ければ良い＞

そう思う、俺だった。

＜縛られない久美を抱いたのは、その時が始めてだったっけ……＞

「ねえ……」

むさぼりあった後のけだるい疲労と陶酔に

俺の腕を枕に寝ていた久美が、薄く上目使いに言いかける。
「……」
目顔で問い返すと、かくれるように俺の胸へ髪をからませて言ったものだ。
「いやっ、恥ずかしいから言わない……」
「どうした、言わないとくすぐっちゃうぞ。言えったら」
言葉も終らないうちに、俺の指は濡れた背筋を下から撫であげた。
「あっ、いやーっ！」
のけぞって小さく呼び、妖しく身をよじるのを、指の届く限りまさぐってやると、シーツを握り締めた指を震わせ哀願した。
「あー、かん、にんしてっ。あっ！」
動きを止めない指に悶え、吐き出すように
「あなたの、お嫁さんにしてっ！」
電気にでも触れたように俺の動きが止まった。波のような荒い息づかいで告白したその言葉に、嬉しさを知るよりも、恐れを感じたのだ。
まったく予期していなかったから……。
「いいでしょ。いっしょに住むの、私達……」
さっと、俺の胸へ、火のような熱い体を激しくぶっけて身悶える久美は、消え入りそうに言うのだった。
「ねえ、いいでしょ。いいと言って…」
「不幸だよ、お前が…」
「バカッ！　いいのよ。いいんだってば」
じれたように見つめる瞳に、俺は美しい真剣な輝きを見出した。
その時のふたりに、言葉など、という無粋なものは不用だった。
骨が砕けるのではないかと思うほど強く抱きすくめてやると、久美は呻くように何度も言うのだ。
「いいのね、いいのね」
「いいよ、いいんだよ」
細い肢体を、いつまでも離そうとしない俺だった。
こうして、年が明けた五日。久美は俺のマンションへ来た。結婚したというわけだ。
「俺みたいな半端者を、どうしてお前は愛してしまったんだよ……」
その夜、俺は聞いたものだ。
「あなたが愛してくれたから……」
すかさず答えるのへ、思わず苦笑した俺。
逢えば狂人のように責める俺だった。
相手の、久美の意志さえも無視して……
「あんな愛しかたでもか？」
「ええ、本当の歓びを教えてくれましたわ。あなたが……」

『じゃあ、お前はマゾだったのかな?』
「いいえ、あなただったから燃えたのよ私。あなたでないと、駄目な女にされてしまったのよ。あ、た、く、し、は」
聞き取れないほど小さな声音で、句切るように言う久美だった。
「久美、俺は幸福だよ。このまま死んでも良いとさえ、思う……」
俺にしては珍しく、しみじみと言ったものだ。
「そんな……いやっ、いやよ!」
泣きそうに言って、苦しくなるほど強い力で、からみついてくるのだ。
それを、くるりと押し倒し、唇を重ねていこうとすると……、
「いや、あげない。そんな悲しい事を言って私を苦しめる人にはあげません!」
力の限り抵抗し、俺の手から逃れようともがく久美。
「逃げてごらん。ほら、ほらっ……」
力を抜き、起き上ろうとすると強く抱き締めて捻じ伏せる俺。
激しく争ううちに、久美の喘ぎは熱っぽく高まり、潤んだ瞳から涙が流れた。
「バカッ、バカ……」
俺の背中へ回した手で小さな握り拳を作って叩き、泣きじゃくる久美だった。
そんな久美が、たまらなく可愛い。
満身の力を込めて抱きすくめると、苦しく呻き開く唇へ、俺は激しく重ねていった。
許されない、望めなかったはずの甘い奇跡が俺にも与えられたのだ。
〈たとえ世間から背徳だ、と罵られ、軽蔑されても、久美を離すものか!〉
久美も決して離れはしないだろう。
遠く、かすかに、幼女の唄う羽根つき歌が聞こえる、のどかな初春の昼下りだった。

☆

私こと、清原麻耶が文中〝俺〟と書かれた人物に逢ったのは、友人が経営する。南のバー〝サタン〟でだった。
一年近く交際したが、その間、彼?を男だと信じて疑わなかったほど、男っぽい、たくましさを感じさせる人だった。
〝源氏の君〟と私は彼を呼んでいた。
言葉こそ乱暴だが、意外にナイーブな面を持っていて、育ちの良さからくる品の良い人柄が、私のイメージに描いた〝源氏物語〟の主人公を思わせたからだった。
とにかく、私は完全に魅せられていた。
彼の愛車〝スリーエス〟で芦有ドライブコースのスリルを何度も満喫した事もある。
すべてに身勝手で、強引に振舞うのだが、ふと見せる淋しげな表情に、母性本能が人一倍強い私は弱かった。
いや、彼独得の甘いムードには、それ以上に弱かった私なのだ。
どの程度まで、ふたりの間が進行したかは想像にお任せするとしょう。
彼からの連絡がバッタリ絶えてしまったのは、深秋の香りも色濃い十月の終りだった。
〈気まぐれな彼の事だ。そのうち元気な姿をひょっこり見せるだろう〉
仕事の多忙も手伝って、さほど気にもかけず再会を楽しみにしていた私も、一カ月が過ぎ二カ月が終ろうとする頃、たまらなく不安になった。
〈訪問されるのを極度に嫌う彼だけど、明日こそ尋ねてみよう〉
彼から呼び出し電話を受けたのは、そう決心した矢先だった。
待合せた〝サタン〟へ約束の時間より早目

に行ってみると、すでに彼は奥のボックスでひとりポツネンと待っていた。

「麻耶を信じて相談したい事があるんだ」

受話器の向うに聞いた弱々しい彼の声音に想像通りの表情が、私を待っていたのだ。

「麻耶は、いつだったか酔った俺に〃女の子みたいだ〃と言った事があったね」

しばらくして重々しく口を開いた彼。

彼との連絡が絶える少し前に、珍しく溺酔した彼の動作が女性のように見えて、つい口をすべらせ、怒らしてしまった事があるのを思い出した。

「あの時、源氏の君、すごく怒ったから覚えているわ。だけど、今頃になって、それがどうかしたの?」

「うん……」

返事するともなく答えて、彼はブランディを一気に流し込んだ。

「まさか、女だっ、なんて言うんじゃないでしょうね」

彼につられて、私の声も、いつか低く小さくなっていた。

「いや女じゃない。だけど男でもないんだ」

その意味が理解できず、唖然と見つめる私に彼は静かに、恐るべき秘密を語りだした。

まったく信じられない事実を……。

「久美と結婚したいと思う。彼女も望んでいるんだ。だけど許される事じゃないし、それ以上に彼女の幸福を考えると…」

永い身上話の後、再び彼は重く口を閉ざした重苦しい沈黙が流れた。

「何と答えて良いか解らないけど、世間の常識から言えば許される事ではないと思うわ。だけど、この世の中は常識で割り切れない事が公然と行なわれているわ。それに幸福なんて自分自身が感じて満足できれば良いのであって、世間の目や、陰口を気にしていたら生きていけないと私は思う」

悪い頭脳で考えながら言う私に、彼は何度も肯き、始めて笑顔を見せたものだ。

ジングルベルが、やけにけたたましく気になる夜だった。

「妻の久美だよ」

三月もなかば過ぎ、春とは名ばかりの寒い日が続く頃、招きに応じて訪問した私を迎えた彼は、かって見せた事のない晴々とした表情で、照れながら紹介した。

彼の背中へピッタリと寄り添った〃久美〃なる女性の美しさに私は驚いた。

一身同体、そんな言葉が、ふと脳裏をかすめるほど、二人は似合いのカップルだった。

以前、一度だけ訪問した彼の部屋に感じた侘しく冷い面影を見出す事は不可能だった。

新婚の甘いムードの中にも、どこの家庭にも見られる落付いた暖かさがあるのだ。

ことさら妻らしく勤めようとする彼女……懸命に夫らしく振舞おうとする彼……。

ままごとみたいだったが、そんなしぐさのひとつひとつが実に新鮮で嫌味が無く、見ていると胸が熱く込みあげる感動を覚えた私。

それが、物語を書かせたと言えるだろう。暗い半生を、ただひたすら歩いた半端者がようやくたどりついた幸福への道だった。たとえ、それが背徳への道しるべでも、彼はすべてを捨てて進んでいくだろう。

今は、そのふたりも大阪には居ない。

最後に、是非、付加えたい会話がある。

「ねえ、フランスでは私達のような結婚が正式に認められたんですってよ」

「お前もそれを望むのかい?」

「いいえ、私はこのままで幸福ですわ。紙の上に立証できるものが幸福だとは思わないし神前に誓えても、許されたとて、それだけが決して本物ばかりとは限らないでしょ。私はあなたさえ居てくれれば、世界一、幸福な女なんですもの……」

大阪を離れる前に訪れた彼が、のろけ半分に私に聞かせたものだ。

〈甘くて結構。時にはけんかもして下さい。もちろんSMプレイも楽しくどうぞ。そのかわり〝世界一、幸福だ〟と確信持って言える人生をふたりで歩いてほしい。許されない背徳の果てに、たとえ地獄に落ちようと、それがふたりなら耐えられるはず。いえ、楽しい事かも知れないのだから……〉

二度と逢う事もないだろう後姿へ、心から祈り、いつまでも見送る私だった。

（おわり）

◉清原麻耶に寄す◉

（編集子）

彼女からの通信（十二月号二五九頁）と共に「白い玩具」と題した自伝的小説の第一回75枚を入手したとき、その女性放れしたしっかりした文章に感心した。しかし、「白い玩具」は連載小説の第一回ということなので、目下のところ、これ以上連載物は増したくないと返事したら折返えし電話があって直ぐ逢いたいということだった。二、三日して私の暇が出来たとき二時間ばかり彼女に来て貰って逢った。

SM作家を志しているしカメラにも自信があるので辻村さんの向うをはって〈カメラ・ハント〉もやってみたいという彼女の積極的な気迫に感じいって、とにかく四、五十枚の読切を書いて貰う約束をした。色白の小柄でとても二十四才には見えないお嬢さんなのに、SMに関しては造詣が深いのには驚いた。そんなわけで、本稿『背徳の果てに』を一週間ばかりで書いて貰ったのだが、原稿を受取りがてら、彼女の行きつけのレスビアン・バーへ案内してもらう約束をして日をきめていた。

その日、丁度立川談志氏が編集部を訪ねたいと言ってきていたので私は彼の宿舎へ車を走らせて共々辻村氏宅を訪れた。釣瓶落しの秋の陽が沈んだ頃、編集室から辻村氏宅へとリレーされた彼女の電話で、とあるレストランで落合うことが出来た。立川氏は仕事のため一足先に帰ったので、彼女を挟んで三人はSMのよもやま話に花を咲かせたのであった。

超ミニスカートで颯爽と夜の街を濶歩する彼女のあとを追ってストロボの閃光を走らせること数十発、その中の極く一部を誌上でごらんに入れた。今後どのような作品を発表するか注目頂きたいと思う。

住みにくい世の中なら、いっそのこと人の意表に出るようなことを、やらかして憂さを晴らすのも一法だが、さしあたり猫や犬ではなくて、正身正銘の人間が、そのまた人間を束縛するお遊びという奴は、時節柄、手頃な鬱憤晴らしの道具かも知れない。

ただ、こうなるとお互いが人間同志なのだから、兎角、醜悪になり勝ちなものを如何に美的に振舞うかが、やっぱり問題となろう。それともう一つは、心理的な盛り上りとも云うべき相手側の情感を、いやでもこの眼で探りたくもなる。私はそんな場合にぶつかると用意はしていても、いつも真先に魂を抜かれて呆然となってしまう。その癖、心の中ではいろいろとむずかしい条件やら注文をつけたがるのだから、我ながら始末におえないのである。

例えば人里遠く離れた深山幽谷で、今日も人柱（もちろん男性ではなく若くて美しい女性に限るのだが）が立つというシーンがあるとすれば、一方的にわめいたりお祭騒ぎをやるのではなくして、咳払い一つも聞えぬという全くの沈黙と静寂さの中に在って、ほのかに色彩のみが微動するという、昔懐しいサイレント映画をすぐさま想像するのだが（否、今でも大いにしたいのだが）事実、採算を抜きにしても、こんなドラマ映画の一つ位はあって然るべきではないかと勝手に思うあたりが、今云った、いやな私の癖なのである。

それにしても、話は飛ぶが昨今のTV映画は、誠に騒々しく始まって騒々しく終るものがきわめて多い。東京地方で十月から新番組として登場した「おせん捕物帳」などは、何が何んだか判らぬうちに、乞う御期待の捕物が終ってしまうのは、今回がお披露めなのだからしばらく我慢するとしても、同じ仲間の「十六文からす堂」が、たまたま特別ゲスト

出演した三浦布美子（もちろん一般向のスターでなく、従ってお馴染さんでないかも知れないが、NHKの芸能百選で小唄舞踊を演ずる常連でもあり、その道の達人で、しかも美人）がさんざんお暴れになった末、思いがけなく後手に縛られるシーンまで放映されたのに比べると、おせん捕物帳の目明しおせん姐さんこと日劇ダンサーのピカ一、重山規子嬢が、赤い蹴出し云々のテーマソングに陶酔して、あけ放しのお色気をむやみやたらにふりまくだけで、THE・ENDにされちゃ大いに茶の間で不満が出ようというものである。

元来この捕物という奴は、くどいようだが昔から、誰かが無情に縛られなくちゃ一向に面白くないものだ。それも何も悪人ばかりと限らず、時と場合によっては、事件に全くかかわり合いのないおかみさんや娘達までが、派手に両手を後手に縛られるところに、大いに添物的なポイントが、加わろうというものである。

そもそも、かく云う私のへそが生れながらにして曲っているのか、あるいは人間がもともと皮肉に出来上っているのかは判らぬが、私は何千何百ルクスで輝くダイヤモンドのようなシャンデリヤよりも、ほのかに暗く妖気のひたすら漂うお江戸は行燈（あんどん）の灯に、どう云うものか限りない愛着を感ずる者の一人なのである。

かつて旅の序でに、往年飛弾の高山で合掌造りの家を観せて貰ったことがあるが、そこに確か夜這いの部屋という〝秘〟に属する小部屋があった。一階の入口の脇に吊り梯子が態よくかくされてあって、必要な時にはその梯子が土間に向っておりる仕掛けになっている。もちろん二階ではこのような部屋は人目につくと見えて、わざと中二階のようなところに設けられてある訳だが、畳三畳位なこじんまりした愛の巣（ならよいが、場合によっては怖ろしい地獄部屋にもなり兼ねないだろうけれど）なのだ。おっぴらに外に向って窓がつくれないから、部屋の中は勿論、暗い。恐らく女と逢引する時には、ひるひ中でも行燈の一つ位用意し灯を入れたに違いない。そんな場合、もし女が初めから合意でないとすれば、無理矢理に強奪したものとなり、いやが応でもそのまま監禁せざるを得なくなるものだが、髷ががっくりと崩れ裾前を乱した娘（の方がお婆ばより魅力があろう）が、怖れおののきながら荒縄で後手に縛られ、ほの暗い行燈のそばに身も心もなくうずくまっている姿は、どう見ても浮世絵以上の哀れさが漂よう。

気の狂った馬鹿（フーテン）でない限り、相手側の男は逸る心を押さえ押さえして、じっとその女を凝視していることだろう。もともと部屋が狭くて人間一匹の行動半径がないのと同然なのだから、この上声を立てられちゃ百年目だ。そのためには女には早目に、しかも厳重に厚手の猿轡をかませて置くのが常套手段ということにもなろう。

しかしこう目と鼻の先に、たとえ縄目を受け身体の自由を奪われたとは云え、めざす女がでーんと身近に居坐られていては、いくら心臓の強い男でも、日頃蘊（うん）蓄を傾けたもろもろの知恵は程よく廻らぬものと見え、何んとなく慌わてふためいて来るものだ。

その昔、赤線華やかなりし頃、おしのびの進軍ラッパが鳴り渡ると、まずおもむろに懐中の財布の金を押さえてそれとなく算えてみる。大丈夫だ、充分の軍資金我にあり、ならば景気づけにと焼鳥やに飛び込んで、一杯ぐっとひっかける。赫ら顔に事寄せて自らを麻酔し、遣手の婆を開戦の血祭にあげて楼名入りの紫のれんを肩でハネのけて、くぐる迄はよかったが、女と階段を昇るあたりで身も心

も萎え切り、赤い枕と布団を見た途端に昇天したのでは何んにもならないのと同様だ。

　云ってみれば世の中ってものは、そう万事がこちらの思惑通りに運ぶとは限らない。古い諺にも「夜目遠目傘の内（うち）」と云う言葉がある。元来至近距離って奴は、物にもよるが、なべて鼻持ちならぬうちに、思い切ってさっさと遠ざかるに越したことはない。だから古い日本を紹介し、古きよき時代？を眼のあたりに髣髴たらしめることをもって、今なお盛大に演ぜられている京は島原の花魁レビュー（太夫のかしの式）は、一面夜の京都観光の花でもあるが、なんせ場処柄暗いので、撮影どころの騒ぎではないが、私が先般ゆえあって訪れた時でも、30W位の行燈が三つ、ボウーと、ともっていただけだった。

　それはまあよいとして、50センチ間隔の至近距離で花魁と正対すると、いやが応でも花魁太夫の衣裳から移り香までが嗅げるのだ。それも身に余る光栄で誠に有難いのだが、もち前の衣裳学をさらけ出すまでもなく、なんと花魁女史の前結び帯、うちかけ、さては商売道具の緋の長襦袢までが、至るところくたびれ切っていたのには、まず驚かされたのである。無形文化財をうやうやしく結構がる前に、この疲れ切った衣裳を何んとかしなくては、由緒ある元女郎屋「角屋（すみや）」さんの面目にもかかろうというものだ。豪華な西陣帯の金糸銀糸が、ほつれて垂れ下るようでは世も末である。

　まして、花魁の生命とも云うべき緋縮緬？の長襦袢が色あせて、そこにどのような理由があったにせよ、うすら汚れ放しというのは如何にも哀れであると云わねばなるまい。

　とんだけなし文句になったが、黒一色に光った柱、天井につかえそうな低い部屋の造りは、戦後背丈の高くなった現代人の感覚からは、恐らく永久に歓迎されないかも知れないが、私は別の意味で大いに食指が動いたのである。

　それは最前の飛弾の合掌造りの家に夜這いの小部屋があったと同様にいやしくも女郎屋と名乗る以上、御存知〝行燈部屋（あんどんべや）〟が、必らず何処かにある筈である。いや、無くてはまた困るのである。

「若し、そちらの観光バスのお客さん。みだりに矢印以外のところに行かないで下さい。指定以外の部屋へ入っては困りますよ……」

　呼び戻されるまでもなく、その昔、云うことをきかぬ女郎をむりやりに閉じ込めて、責め折檻したという行燈部屋こと物置部屋は、一寸見渡したところでは見当らなかった。あったとしても人目につかない便所の脇か階段の下あたりであろう。

　しかし、かつての街の浮世絵師伊藤晴雨が描く行燈部屋は、そんなじめじめしたところではなくて、何処からもよく見える見晴しのきわめてよい？　ところにあったようだ。考えてみるとこの方が半公開的で、みせしめには屈強な場処でもある。

　さて、部屋がこのように明るみに出されたものとすれば斯く云う女郎屋「角屋」では一体どのあたりにあったらよろしいか……などと勝手に想像をたくましくする（から毎度申上げているとおりわれながら困っている次第であるが）。

　西原柳雨氏の名著「川柳吉原志」に依ると

〽縮緬をしごいて遣手立ちかかり（安永年代）

〽縮緬は遣手のつかう猿轡（宝歴年代）

あたりはまるで絵を見るようで無難だが、

〽色をするつらかと遣手縄をかけ（明和年代）

で、そろそろ危なくなり、

〽目出度い柱（大黒柱）へ女郎をくくしあ

げ（安永年代）

や、

へ大黒柱しょっているむごいこと……

でどうにもならなくなってくるのである。

「皆さま、正面玄関向って左側を御覧下さいませ。黒光りする二つの大黒柱の間に小窓の開いている部屋が見えて参りました。これは昔からお女郎屋さんになくてはならぬもので、別名をあんどん部屋と申します。沢山のお女郎さんの中には、お勤めを嫌ったり、稼業を怠けたりする者が出ると、即座に両手を後手に縛りあげられて、あの部屋に放り込まれました。御存知かと存じますが、このお女郎屋さんには楼主やおかみさんの外に遣手の婆が住んでおり、これが可哀いそうなお女郎さん達を天井から吊るしたり、庭に曳きずり出して折檻したりしたと申します。只今はこのあんどん部屋は国宝に指定され、出入を禁止されております。少し遠くて御覧になれないかと思いますが、黒く汚れたあの畳敷の右隅にあるのが、当時お女郎さんを縛りあげた荒縄で御座います……」

「どれどれ、成程、あれか。ひどいことをしたもんだネ。東本願寺の女の髪毛縄も凄いが、これはまた相当なものだ。藁の縄ばかりでなく木綿製みたいなものもあるようだネ。あれは車掌（ガイド）さん一体、何んです？」

「あれは、お客の前ではまさか毛ば立った荒縄で縛る訳には行きませんので、体裁のよい黄色いあの綿製の縄で括り上げ、遣手婆に縄尻を取られて一先ず行燈部屋へ入れられたと申します。それからの本責めは全部荒縄で赤い長襦袢の上から、両手は捻じ上げるようにされ後手に縛られて、あの梁（はり）から吊るされたと伝えられて居ります」

「あの——序ですが、吊るされたあと、どうされたンです？」

「さア、よくは存じませんが、古老のお話では松の葉や杉の葉を火鉢でくすべて、いぶし責めにしたり、赤い湯文字一枚に剝（む）いて、ささら竹で打（た）たいたりしたと申します」

「あの——もう時間がないかも知れませんが、もう一丁お訊ねしますがね、そんなむごい責折檻をした挙句に、仮りにお女郎さんが死んだりしたとすると、あとが大変でしょうね。そんな時は……」

「ですから責め折檻は決して命にかかわるようなひどいことは致しません。じわじわと責め抜いて、悪い了見を改めさせ、名実共に立派なお女郎さんになるように、行燈部屋で再教育したということで御座います。お客様のしつこいご質問は、これで一切打切らせて頂きます。では皆さまごゆっくりご観覧の上、第何号車へお戻り下さいませ」

……てな具合に、観光バスのガイドさんが云やぁしないかと、実は大いに期待していたのだが、今のところ、そんな奇特なサービスはまだないと見えて、何んとなく新選組の亡霊にでも追いかけられたように、寒々として島原遊廓をあとにしたのであった。

話はまたまた前後するが、飛弾の高山でも、北陸の山中温泉町でも、一寸注意して歩いてみると結構行燈部屋のありそうな、女郎屋造りの家が見付かるものだ。そんな時は勇敢に入ってみるものである。

実は最初そんな気持ちで泊った訳ではなかったが、どうも寝ている部屋がただの造りではない。それに第一、二階へ上る階段がゆるやかで優美である。しかも二階は、判で押したように手頃な小部屋がならんでいる。道理で玄関の右側は格子造りになっていて、外から品選みが出来そうだ。してみると幸か不幸か、よりによってその昔、絃歌さんざめき紅裙の右往左往したであろう女郎屋（今はただの旅館）に、泊ったということになる。しか

も、どうやら行燈部屋らしい。

まあ、そんなことは今更詮ないことだし、時代も変って、今は、れっきとした法定旅館なのだから、ちっともおかしくないじゃないかと自問自答して寝るには寝たが……。さて死ななけや直おらない馬鹿者は、一夜の宿とは云え存外、眠れないものである。

夜中ふと眼を覚ますと、部屋の四隅の多分このあたりに不用の行燈を山積みにしたであろうあたりで、女のすすり泣く声がする……。冗談じゃないぜ。江戸時代じゃあるまいし。しかし耳を澄ませば澄ます程、女の泣く声に混って渋いしわがれ声が次第に大きく、しかも何やらわめき散らしているようにも聞えてくる。

「どうじゃ、ここは行燈部屋というてな、お前等みたいに、やれ身体が悪いの気分がすぐれないだのと云うて、大切なお勤めをさぼろうなどという奴はどんな目に逢うか試めしに身体にきいてみる処じゃ。入れられた以上、文句は云わせない。三人共よく顔を見せな。あしかけ三年で、ちやほやされ、小染太夫とか何んとか名乗ったからとて、そうのぼせるんじゃねえ……。齢の順で帯をぼちぼち解きな。解いたらその着物を脱ぐんだよ。緋の長襦袢一枚というところでお前は勘弁してやるから、両手を後ろに廻わしなよ。年の暮にゃまだ早いが、お歳暮の鮭の吊るしと同じような恰好にしてやる」

「それから染鶴お前は血の道で客を振ったというが、ここに来てまだ半年もならんというじゃないか。いってみれば見習みたいなものじゃ。それならなおさら何故大切なお勤めを放棄するのじゃ？　今後は一切許しませんぞえ。今日は一丁みせしめのため、赤い湯文字一枚になって大黒柱でも抱いて貰ろうかい。あられもなく足を拡げてな。ウヒヒッ……」

「さて最後はお前じゃ。何んという小生意気な顔をするのじゃ。照菊太夫ともあろうものが、このように責められるとは。さてさてたんと遣手の婆めに手数を煩わせ居って女の恥とは思いませぬかえ。この阿呆たらめが」

しわがれた声がそれ切りと切れると、今まで行燈にとぼっていた灯が、あたかも油でもきれたようにとぼとぼと薄暗らくなった。すると色々な恰好を強いられた女郎達のなまめかしい姿が眼前に、すうッと現われた。

この際つまらぬことを云うようだが、赤は赤でも赤い「蹴出し」とか、緋縮緬の「湯文字」とか云われたものは、やはり抜ける位鮮明なものがよろしい。さっきの角屋さんのお女郎さんみたいに、くたびれてどこか褪色しかかったものは、ドサ廻りの田舎芝居ならいざ知らず、いやしくも名うての場処では、ひどく寒けを催すものである。

そんな眼で三人の女郎をじっと見ていると、成程一幅の名画である。女が新しいのはどの足の先や脛をみても判るが、着ているものもまた新しいから、なお一層の色気があるのだ。

さて話はひどく横道に飛んだが、最前のお色気ショウならぬ三人の花魁の責折檻ショウは、誠に残念ながら手の届きそうなところに鮮明さをとどめただけで空しく蜃気楼のように私の眼中から消え去ったのである。

そこはかとなきソフトな行燈の灯と妖しいまでに情慾をそそる女のきもの——私はそこに、現代のテラテラ光って鋭い音の電気ギターと、国籍不明の男性歌手によって奏られる、かしましいステージから解放された天地のあることをま近かに感じ、逝く秋と共に、心のやすらぎとほのかな色気に十二分に浸った我が身を、いつの時にも見出すのである。

（終）

惨酷人間の世界

丸鬼士佐渡

ヴェトナム戦争は、もう慢性的になった感があるが、悲惨な戦争による残酷さは変らないであろう。この泥沼戦争の実際を目撃すれば、おそらく眼をおおうに違いなかろうとは思うが、活字にされたものを拾ってみよう。

「ヴェトナム戦争」（小山内宏）より。

――そこで、女の胸をはだけて、鋏で女の乳首を切り取り、その上に塩をなすりつけた。女は悲鳴をあげてとうとう口を割った――。

――わたしは彼女をさかさまに水溜りにつけて、溺死させた――。

――ある晩、何の理由もなくカックは、幼い娘を縛りあげると豚小屋に投げこみ、豚の悪臭と汚物の中に転がしたまま、一夜を明かさせた。……あるときは、後手に縛りあげて、さかさまに吊して苦しめたばかりか、そのまま、便器の中へ吊り下げた。娘は尿の中に首をつっこみ、それを飲まされた。……ある日のこと、豚の餌をこしらえていると、お前はいくら教えてもおぼえない！と叱りつけ、棒でなぐりつけた。それでもあきたらず、娘の服を剝ぎとって丸裸にすると、娘の恥部へ火のついた薪をおしつけた――。

――フランス軍は、共犯者があるとみて、それを白状させようと、残酷な拷問を若い娘にかけた。クックは戸外に手を縛されて吊るされ、フランス兵は眼を血走らせながら、ナイフで娘の身体を小刻みに刺していった。腕、背中、脚と、そして着物も引き裂かれ、血のにじんだ身体が露わにされていくのを、遠くから村人たちは見つめ、涙を流した――。

――無残な辱しめと苦痛にも、二十一才の娘は耐えぬいた。焦立ったフランス兵は彼女を全裸に剝き、杭に縛りつけた。そして、フランス兵は、鋭利なナイフで、娘の乳房を一つ一つ切り落していった。娘は、なおも呪いの言葉をなげつづけた。ナイフが左の肩を割くと娘は……と叫んだ。フランス兵はもう一方の肩に切りつけた。そして切って切って、切り刻み、最後に小銃弾をうち込んだ――。

これはインドシナ戦争のときの、フランス軍兵士の手記や、アメリカ人記者の取材した実話である。

さて今回のヴェトナム戦争では、この残酷さはどうかわっているであろうか。同じであ

るが只、その残酷さに科学性、近代性が加わったといえよう。では戦争の初期であるゴ・ジンジェム時代は、どうであったろうか。

——ゴ・ジンジェムの私兵隊は、アメリカ製の電気拷問道具を含めて、おそろしく近代的な拷問技術を村へ持ちこんできた。……この六カ月間というのは、黒い恐怖がディエン・バンを襲った。鞭打ちや殴打や電気拷問具が活動しはじめると、聞えてくるのは、絶叫と悲鳴とうめき声と鈍い鞭の音だけだった。赤ん坊は母親の胸からひき離され、母親が拷問室へ連れていかれれば、石だたみの上で、ばたばた死んでいった——。

——フーロイ収容所では、政治犯再教育という美名の下に、残虐な拷問が行なわれていた。そしてある娘は、何カ月も続けて、ひどい拷問をうけ、あるとき、意識を回復してみると、まる裸でからだじゅうの傷から血が流れていた。……薄くらやみの中に一人の婦人が血の海に横たわっていた——。

戦争が泥沼化してくると、ますます残虐性を発揮し、最近になるとどうか。

四月頃、町に張り出されていた赤旗写真ニュースには、チャン・ティという三十才位の美人だったが、説明によれば、ベトコンの容疑者として南ベトナム収容所に送られ、そこで恐るべき拷問にかけられた末、死体としてすてられ、奇跡的に同志に救われたのだが、その拷問は、彼女の両手首に針金をつきさして、大の字に縛りつけておいて、両乳をもぎとるというものだった。彼女が、露わに出している肩にも、大きな傷跡があった。彼女のグラマーな両乳房をもぎとる場面は実にすさまじいものだったろうと思われる。

労働旬報社の「**ベトナム黒書**」によれば、

——彼等は前代未聞の非人間的な方法による拷問や虐殺を行なっている。彼等は、捕えた人々を生きながら四肢を一つ一つコマ切れにしたり、肉を少しずつ切りとっていったり、生きたまま火をかけたり、生き埋めにしたりしている。さらに残虐なことには、両親の面前でその子供を打ちすえたり殺したりしている。彼等は婦人を死にいたるまで強姦し、あるいは殺す前に強姦している。更に彼等は犠牲者の腹を切り開いて肝臓をとりだしたり、目をえぐり出したり、あるいは装甲車を使って道路上をひきずりまわしたりしてる——。

とあり、その中の写真をみると、後手に縛られたまま大きな水瓶の中に頭をさしこまれて水責をされている者、掃討中につかまった婦人が全裸で後手首縄縛りで両足も縛られているもの、死んでいる婦人の胸をナイフで切りさいなんでいるものなど様々な異常の世界がくりひろげられている。

同じく労働旬報社「**歴史の告発書**」には、吊し責め、装甲車を使って犠牲者を道路上でひきずって殺す写真があった。更に、惨酷といえば最も惨酷なものに、婦人の白い腹が、股から胃のあたりまで幾筋も切りさかれ、パックリあいた裂け目からは腸がグニャグニャとびだしており、更に乳房がえぐられて、えぐられた部分がわずかの切れのこりで体にくっついたのがあった。

等々、恐ろしい話しが並べられている。我々のいう、プレイに依る無残美とは根本的に違うのは当然であろう。ついでに、ブラウン管に観た残酷美シーンを紹介しよう。

○九月一日の「**ザ・ガードマン**」

この日の「**女の戦争**」は女同士のひときわ残酷で陰湿なリンチ場面が見事であった。

マンションの美容院は中原早苗としめぎ・しがこの共同経営であるが、その美容院は事あるごとに中原派と、しめぎ派に分かれていがみ合いをする。

ある日、しめぎ派の渚まゆみが洗髪した、中原の上客の髪がひどく脱毛してしまったことから、故意にやったと考える中原のためにリンチされる。中原と第一の子分の夏圭子とが、まゆみの帰りを襲って美容院につれ込み「故意にやったのだろう、白状しろ。白状しないのならこうしてやる」ということで、まず、まゆみを椅子にすわらせ、髪をぐいとつかんで顔をあおむけさせておいて、中原が洗髪用のシャワーで、その顔に熱湯を容赦なくあびせる。まゆみは「熱い熱い」と、それから逃がれようとするが、圭子にしっかりとおさえられていて、どうにもならない。

美しい鼻があおむけになって大写しされ、二つの鼻腔が切な気にあえぐ。それでも白状しないので、今度はバスルームにつれていかれ、髪をわしづかみにされ、頭をザンブと湯の中に何回もつけられる。後手にされて圭子にしっかりとにぎられている。まゆみは「ウッ」とか水を飲んでゴボゴボと溺れそうな声を出す。それでも白状しないと見て、中原は圭子に、まゆみをそのままの姿勢にさせておいて、「ゴムホースでぶってもキズはつかないのだから、あれで思いきりぶってやろう」といいながら、次の間に消える。そしてホースをもって現われた時には、まゆみは既にこと切れて、大きな目を開いたままになっている。

その翌日、今度は中原派の紺野ユカが、しめぎの上客のバックをしていて、混合されていた劇薬のため、顔に大やけどをさせてしまう。中原の報復と見たしめぎはユカをリンチする。しめぎと、その第一の子分の真山知子がユカの帰りを待ち伏せてつかまえ、ハンカチを口につめ込んで声の出ないようにして、手取り足取り、マンションの美容院につれ込むと、ユカをなぐり倒しておいて、ロープでユカのボリュームある体をギリギリとしばり、後手にして床に仰向けにころがす。乳房の上下の幾重ものロープが切なげに息づく。その腹の上に、しめぎが馬のりになると、子分の知子にリンチ道具の試験をやらせてユカに見せる。電気マーサージ器の先端を金属にふれさすと、パッと火の子がとびちって、そこから電流が出ていることを知らせる。と、ユカは恐怖のまなざしとなる。

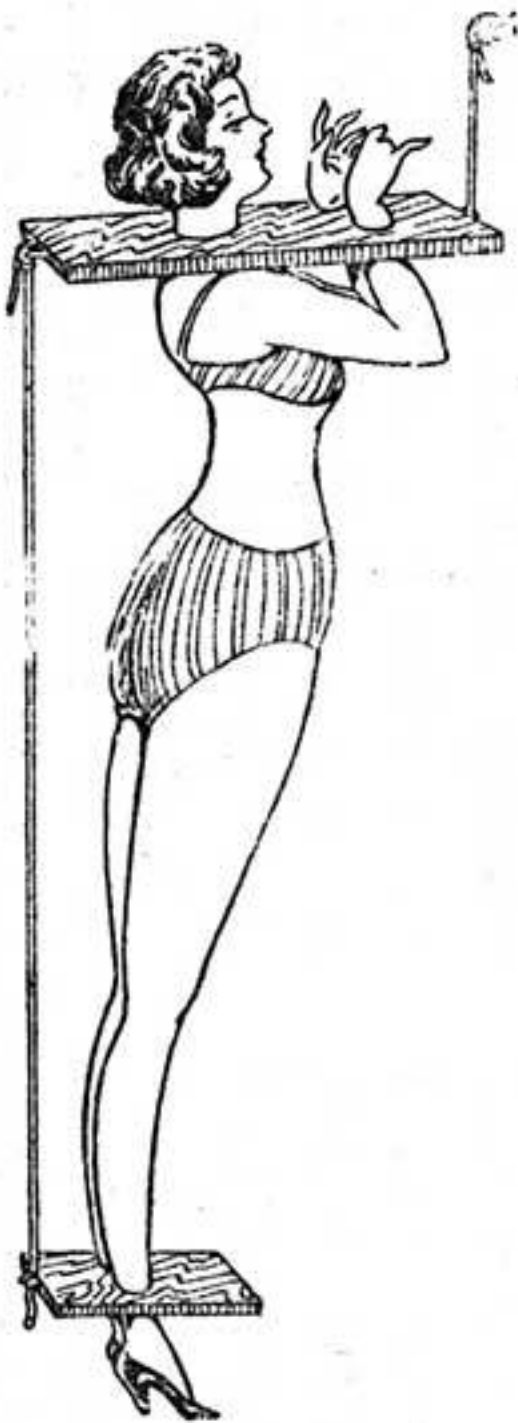
今度は、それをユカの頬におしあてる。途端にユカは、うめきとも悲鳴ともつかぬ叫びをあげて、頭をいやいやする。その両頬に交互にマッサージ器をおしあてて苦しめる。それでも白状しないので知子に電圧器のボリュームをあげさせてからまたおしあてると、失神しかけていたユカは強い電流を逃れようと、前よりもはげしく顔をふる。出た方の頬は、たちまち電流が通されると、ユカは「うつ、うっ」とうなりながら、いつしか顔に油汗が光りはじめる。しめぎの目は異様に光り、知子に電圧のボリュームを最高に上げろと命じ、電流の先をユカの頬におしあてるとユカは断末魔の悲鳴をあげながら、最後の力をふりしぼってあばれる。しかし、電流の前についに息断える。という惨酷なもの。

特に、美人が本当に縛られてリアルなプレイをするのだから、たまらない。彼女等にもマゾ性とサド性があって、それがよび起こされたのではないかとさえ、思うほどだった。

九月十五日のザ・ガードマン「**殺しのお知らせ**」でも、勝山まゆみが犯人に後手に縛られたまま引ったてられ、ガードマンをのがれて山を登っていくシーンがあるが。後手のために、もつれながら走る彼女の美しい後脚が大写しされたり、ロープが乳房の上下を縛っているために、異常にしぼり出されているあたり、サド的であった。

女と縄のある限り

一、憎縄の記、所感
一、有閑夫人の手紙
一、マニアの落書

能美積

憎縄の記をよんで

二十三日、十一月号を入手した。例によって一頁宛、ていねいに丁寧にめくっていくうち、のっけから面白いのに、でっくわした。「ある若妻の抗議」である。本気で抗議しているのかどうか？ そこん処は眉唾ものだが大変面白く拝見させて貰ったし、本年度の傑作といっても良いように思った。

　が奇クファンの一人として面白がってばかりもいられないのである。かくも見事に、よくもまあ本誌をけなしてくれたもんだと感心もし、それを又トップに持ってきた編集責任者にもおそれ入った。反骨精神も結構だが、伝統ある奇クのファンはともかくとして、始めての購読者はさぞかしおったまげたに相違ない。御本人は八つ当りであるから気に入らなければ破いてくれてかまわない。とおっしゃっているが、そうはいくまい。八つ当りをした以上、なんらかの形ではねっかえりがくるかも知れぬ、ぐらいの事は覚悟されてしかるべしであろう。もっとも文句を言った処で本人のお眼に達っするかどうかはわからぬが、掲載された以上は相応の稿料も入る事だし、だとすれば、せめて次号ぐらいは読んでみる義務は、あろうというものだ。

　八つ当りというのは私流に解釈すると、相手嫌わず処構わずあたり散らかす、という事だろうとは思うのだが、如何に亭主運に恵まれず、けったいな男性と結ばれる破目になったとはいえ、その責めが総て本誌にあるが如きおっしゃりようは、いささか筋違いではなかろうか。けったいな、というよりも、むしろ性的狂人ともいえる御亭主にとって、本誌は単なる道具にすぎないのである。狂人は、あくまでも狂人に過ぎない。奇クを読もうと読むまいと、生来のきちがいはきちがいなのである。であるから、八つ当りのほこ先は、

まず亭主に向ってなされるべきで、あほらしくって二の句が告げず、とかバカくさくなって反論する気はなくなったとか。揚句にはベタ惚れだった彼には、せめて今夜だけでも勇を鼓して笑顔を以って縛られようと存じます。怨み深い細紐を、ハサミで以ってチョン切って黙って出て行く。その代りに奇クにだけは当り散らす、とは、ちと虫がよすぎはしますまいか。つまり、イタチのなんとかは、ケツの持っていき方が違っている、といいたい訳けです。

きちがいに刃物という言葉があります。奇クが刃物的役目ぐらいは果しているかもしれないけれど、刃物は必要欠くべからざる品でこれを悪用したのはあなたの御亭主だという事です。下手なたとえで恐縮だが、大分前、黒沢明という監督が〝天国と地獄〟という映画を作った。優秀映画観賞会が推薦する程の名作だったが、これを真似て誘拐事件を引き起した大馬鹿者がいる。それを又、新聞の投書で、こういう映画を作るからいかんのだ。と、のたもうた見当外れな阿呆がいた。どんな素晴しい物を与えても悪用しようと思えば出来るのである。逆に、あなたからみれば文献誌なぞとは、おこがましい。性誌とすべきだ、とおっしゃる本誌にしても、多くの人々にこよなく愛され、私のように善用されてもいるのです。

極端な例を挙げよう。私は基督教というのが嫌いだ。理由は簡単。神の子であるとか、私は神を視たなぞと、のたまうイエス・キリストの大ボラを信用出来ないからである。だからといって、批判はやらない。彼の大ボラは信仰に名を借りて善用され、多くの人々を正しく導びいているからである。

あなただって〝女を縛って愛するのが好き〟だとか〝しばられて愛を感じ悦ぶ心情〟なぞは到底、理解出来ないが、だからといって否定はしない、といって下さる。そのくせ、私のような悲しい思いをする女性を出来るだけ少なくするようにしろ、とのたまう。その事は本誌を悪用した御亭主に対して、いって欲しい言葉なのです。悲しい思いをする女性が誕生したのは、くどいようだが狂人によって悪用されたからであって、善用されて、楽しい思いをしている女性だっているのです。

自分勝手に物事を判断するのは、いけない事です。私は決して、あなたに敵意を抱いている訳けではない。むしろ、こういう男性と結ばれた、あなたに同情的なのです。しかし、だからといって奇クに八つ当りしても良いというものではありますまい。お返事など当然、戴こうとも思っておりませんし、御相談でもありません。なぞといわずに、奇クに感化されたのか亭主の様子が、かくかくで困っている。その道のベテランである皆様に良い智恵はないものか、ぐらいの相談はして欲しかったと思うのです、それが女性というものではありますまいか。

変態の寄り集りみたいな連中に相談なんか馬鹿々々しいというのなら、それは貴女の慢心というもの。大体、文章を拝見した範囲では、あなたには高慢の嫌いがある。自覚はしておられるようだが、十人並以上のフェースを誇る、とか、とても及ばないとか思えるような女に行き合う事は少ないとか。ふざけてはいけない。振り返られた覚えがあるそうだが、美人だから振り返るとは限らないよ。オカチメンコだって振り向くし、もっとも良く振り返るのは美人でもないくせに美人面している鼻もちならぬ女。それにあんた二十二才にもなって自主性に欠けるね。人をみる眼も少し悪いよ。一年余りも交際していて、夫の趣味は音楽と魚釣り、それに観るスポーツだ

った筈。縄を捌く趣味があったなぞとはオクビにもみせてくれなかったのに、というが、私は性慾旺盛で毎晩なにしないと眠れない性質だとか、そういう事は言わないでも良い事になってるんですぞ。無条件で懐にとび込んでいける素晴しい人に思えたそうだが、縄でふんじばり、鞭でひっぱたけば、女は喜ぶもんだなぞと、本気で思い込んでいるような男が、どう考えたって素晴しいとは思えんね。つまり、その一挙手一投足に自分勝手な野郎かどうかぐらいは見分けなくちゃあ、いけないよ。オッと、口が滑りすぎたかな。ゴメンナサイ。

私には個人攻撃の権利もないし、他人の夫婦生活に言及する意志もありません。ただあるのは、奇クのみです。こんなケッタイな抗議文で巻頭を飾られ、我が親愛なる奇クファンが、それでなくとも気弱でいるのに、余計に意気消沈てな事になられたら、それこそ大変だと思うだけです。奇クの読者が、みんなあなたの亭主のような狂人ばかりとは限らんのです。

ついでに一言。あんた別居なんて生ぬるいのは駄目よ。別れる、完全に離籍しなさい。奇クの悪口さえいわなんだら、私はあなたに応援したのに。繰り返しますが私には、あなたやあなたの御亭主の狂歴を攻撃する意志は毛頭ありません。しかしながら〝少くともマゾ気のない女は女としての資格に欠けるというような錯覚に陥いる書き振りをする方に、何らかの行き過ぎ是正を促す編集方針〟云々という事が許せないのです。御主人に勧められて、クダラナイ奇クを二十数冊もお読みになったそうだが、その何処にそのように書かれてあったか。私なぞ到底、足元にも及ばないような名文をものされるあなたが、いかなる所在で錯覚に陥いられたか、知りたいものです。

奇クはマゾ性のない女性をマゾ化するために編集されているのではありません。あくまでもマニヤのための雑誌なのです。それを悪用した御亭主が間違っているのであって、あなたも一人の人間として間違っていると思ったら、自主的に拒否すれば良いのであって、〝縛られてもいいから私の話を親身になって聞いてチョウダイ〟という態度自体、間違っておるのです。許容したのちに話合いに入るなぞとは、凡そナンセンスではありますまいか。

今、私の妻は、私の手で素裸にむかれ細紐を甘受して、私の膝で私に頁を繰らせながらこの抗議文をよんでおります。奇クを私の意志で妻によませるのは、これが最初です。それは、私の異常な嗜好を愛情で以って受け止めている妻を、私が理解しているからであって、女はすべてマゾだなぞとは長い間、奇クを愛読している私ですら思ってはいないからです。妻は言いました。〝かわいそうな奥さんね、会って慰さめてあげられないかしら〟そして、こう附言したのです。

〝あなたのように優しく愛してくれるのだったら、あたしはどんなにきつく括られても平気よ。あなたを変態だと思ったのは事実よ。でも今は、そうは思わない。あなたに喜こんで貰えるのなら、どんな辛い事だって辛いとは思わないわ。あなたの愛を一番惨めな姿態で受止めても、そうすればそうするほど素晴しい赤ちゃんを授かると思うの……この奥さんだって、旦那さまが心から愛して下すったら、きっと私と同じ事をおっしゃるわ、……だってそう書いてあるんですもの〟

寺宇治久美様。一日も早く立ち直って下さい。縄を憎まないで下さい。もちろん、別れた夫の事も出来れば忘れて許して下さい。第三者（姉）にその卑劣な性情を知られた事に

よって、彼は一生、負い目を背負って生きなければならないからです。暴言多謝。

その一

この手紙は、あるサラリーマン夫人に小説「花と蛇」を読んで貰い、その感想として私宛に送られてきたものです。「花と蛇」とは関係のない個処もありますが、省略しますと辻褄があわなくなりますので原文のまま紹介させて貰う事にしました。もっとも必要以上に〝ざぁます〟言葉がありますので、その辺は適当に訂正しました。

夫人との面識は三回限り。全くSMとは無関係の方？　ですが、私が多少、変質性の人間であると判断して寄せられたものです。「女と縄」それがこの落書のテーマでもありますので、Sファンの諸兄の参考になれば倖せこれに過ぐるものはありません。文中（　）のあるのは私の蛇足。

○　　○

お便り有難う御座居ました。裏書に女名の御配慮、なんとなくアバンチュールな感じ。あなたって案外、纖細な神経をお持ちのようですわね。でも、その必要はありませんことよ。坂田（主人仮名）も存じておりますの。と申しますのは、お約束を無視した事になりますが、あなた様がこの御本を読んだ場合、女性心理はどのようなものかという事をお知りになりたいのと同じように、私は坂田がどの程度の関心を示すのかという事を知りたかったので、態と坂田の眼に触れるように致したのでございます。

その以前にA・B子（夫人の知人）にも見られてしまいました。「化物の話」を拝見させて頂いて以来、三人の関心がもっぱらあなた様に向けられていますので、止むを得なかったのでございます。でも発行所の住所が既に変更されている旨、伝えておりますし、でなくても決して御迷惑をおかけするような事はありませんので、私のした事はお許し下さいまし。

二人には夫々、二日の期限を切って貸し与えたのですが、Bの方が七日も返してきませんでしたの。しかも旦那様が殊の外の気に入りようで、手放したがらないとの事なので、あたくしも坂田に見せてみようという気になったのでございます。

Aの方は棒読み程度、それも馬鹿々々しくなって途中で投げ出したといっております。彼女としてみれば、私生活の面でもどちらかと申しますと旦那様をリードしていく性格なので、当り前の事と思われます。でも面白いものですよ。Aの旦那様は月に一、二度、私宅へ泊りますの。勿論、本当に泊ってらっしゃるのなら面白くもなんともありませんが、名目だけ。お解りいただけますわね。それも決って十二時ジャストまで麻雀に興じ、それからお出掛け。つまりそれ以前でしたら、いつAから電話があるか解りませんでしょ。御本人も恐妻家を自任していらっしゃいますが、そんな秘密をお持ちなのです。

もっとも午前0時以後は何処へなにしにいらっしゃるかは存じません。坂田へ尋ねても他人の事は詮索の必要なしと申しますから、知る術もありまん。

坂田自身も時々A宅で外泊しますの。変ですわね。でも、この事についてAも私も話し合った事は御座居ません。女同志のつきあいなんて、この程度のものなのかも知れません。

Aの旦那様はもっぱら猥本の愛読者。御存知でしょう、ザラ紙に孔版刷した、いやらしい本。旦那様におききした訳けではありませんのよ。そんな不道徳な事をおっしゃるようなお人柄ではありませんが、Aが持ってくる

のです。男と女の、もっともいやらしい関係を、微に入り細に亘って表現してありますの。Aは、とっても面白いのですって。私は、も一つ、感心出来ません。「花と蛇」はに反して、表現はどうあれ、男女の性の在り方を書いている猥本の方が正常だというのがAの意見なのです。その証拠に、猥本の方は実生活に活用できても、こんな狂気の沙汰は有害無益。ごめんなさい。結局、あなた様が高尚なる趣味であるとおっしゃるサジスムの世界も、異常だという事になるのです。

勿論、最愛の奥様にこのような事なさる訳けはありませんものね。あくまでも空想の世界。いやらしい猥本を実生活に活用する方がいけない事ですわね。その意味では、私はどちらの存在も否定は致しません。でも悪書である事は認めざるを得ませんわね。

こんな御手紙を差し上げる私も少し可笑しいのじゃあないかしらって自問自答してみるので御座居ますが、でも書いていて、いやらしいって感じはしませんの。あなた様を良く存じあげないのに、変な事から変なご本を拝借する事になって。いえ、よく知らないからこそ平気で書けるのかも知れませんわ。あなたの提案どおり、本をお返えしする事にょって、もう二度とお会いする事もないのですから、もう少し、ちゃんとした事を書かねばいけないのに、本当にごめんなさいね。

職業運転手に対する私達のイメージ。といえば、矢張りなんとなく怖い感じの無学な人を連想しますの。思いあがった、無智な自分を、お手紙を頂戴してつくづく反省しておりますの。平凡な家庭ですのに、良家の主婦である貴女が、粗野で異常で浅学の小生が提供した小説をお読みになり如何なる反応ありや、って居直ってこられたんですもの、正直いって驚きましたわ。それで慌てて読ませて頂き、偶然ですがA・Bにも見せる結果になったんですの。

Bは旦那様一辺倒の温和しい子です。三つ年下なのですよ。女の子が一人いますの。それでいてお床の中で旦那様とご一緒で、ご本を読ませて頂いたのだそうです。あの本をよんで、どのような感じがしたかなぞという事は、たとえききだしたとしても、しんぴょうせいがありません事よ。女って、ずる賢いから本心は、そうそう口には、いたしませんの。もっぱら旦那様の事ばかりでした。京子というんですね。私立探偵の秘書が脱走に失敗して静子と再びつかまえられ、むりやり自分で裸になる事を強要される処、凄くコーフンするんですって。折目がついていますわ。

この本のテーマでもあります、美しくて貞淑な女性を完膚なきまでに打ちのめす。そして京子の場合は強い女性を征服する男の喜び、なんとなく解るような気がします。

こんな本をよんでいる男性は、決して女性が嫌いなのではない。むしろ女性崇拝者なんだよ、と旦那様がいわれたとの事で、三人で議論百出。女性が好きなのなら、なぜこんな物をよむ必要があるのか。責める側の男たちを憎い憎いと思いながら読んでいるのか。可哀想な女たちが、いつ救い出されて倖せになるかを祈って読みすすむのかなどなど、それはもう大変でございました。

二人の提案で、坂田はなんというのかという事に、落ちついてしまいましたの。私は坂田には見せられないし、見せる必要もない。と応えたので御座居ます。だってそうでしょう、良い年をした私達が目鯨たてて批判する程の小説ではありませんし、企業とか経営とかの専門書ばかり読んでいる坂田に、こんな物を見せでもして御覧なさい、なんといわれると思いまして。

私達が主だって力を入れている主婦会の、子供を悪書から守る運動についても、坂田は批判的ですの。そんな事は経済的に恵まれた有閑人のする事で、お前らの口出しすべき事ではないと申します。ましてその悪書の見本みたいな物を坂田に見せてごらんなさい。主婦会なんか脱会しろって事ぐらい、いいかねませんもの。

でも数日後、坂田の方から話が出ましたの。お前、面白い本を持ってるそうじゃあないかって。ずっと前の主婦会の例会の時、資料として提供された本が数冊ありますの。私はその事をいっているのだろうと思ってその場は済ませましたが、後でBに電話して、どうやら旦那様のお口から洩れたらしいという事が解りましたの。

Bは夙川のほら阪急の米田って投手いるでしょう、その近くに住んでいるのですが、お仕事の関係で交友がありますの。男の人って、案外お口が軽いんですわね。あたくし、すっかり慌ててしまいましたの。ご本の事も事ですが、あなた様との関係をBが旦那様にはなし、今度は旦那様からどのような形で坂田に伝わっているのかと思うと妙に落付けなくて、坂田が深く尋ねようともしないので余計に気懸りでなりません。

こうなった以上あの本を坂田に見せて、なんらかの形であなたとの事を話し出す必要があると存じ、キッチンの目のつく位置に他の七冊と一緒に積みあげておきましたの。坂田はすぐに目にして、これは何だ？　と尋ねて参りました。悪書よ、後で燃やす積りと云ったのですが、坂田は暫く頁を繰っていましたが一冊借りる、というなり書斎に去ってしまったのです。

調べると、あんのじょう「花と蛇」を持っていっております。坂田が特に「花と蛇」に関心を示すとは考えられませんし、Bの旦那様からあなた様との事をなにかきき出しているに違いないと、いよいよ確信を深め、居ても起ってもいられない心境で御座居ました。

坂田は半日、書斎に引き篭ったままなのです。苛々しながら、其の内、あたしはひょっとしたら坂田はあの小説に読み入っているのではなかろうかと思うようになって参りました。としたら、もう少し知らぬ顔をしていて坂田の関心の度合を探ってみようと、そんな風に考えていたので御座居ます。

その二

この辺で一服、着けて貰いましょう。

別にこの手紙が、此処で切れている訳ではは有りません。でも何時間か或は何日間かを費して、書かれた物である事は歴然としています。文字も変っているし、便箋紙も違います。はじめに原文のままと申しあげましたが、矢張り具合の悪い部分、それからそれから等の重複部なぞは省略しました。

さて先日、一寸した交通違反で罰金を取られる破目になり交通裁判所へ出頭しました。トイレに入ると、多くのくだらない落書の中に面白いのがありました。〝ああ、俺は馬鹿だった。こんな罰金出すぐらいなら初島で使えばよかった〟という物です。大阪以外のファンの方には何の事だか解りますまいが、初島というのは今も尚生きている、赤、いや青線地帯というのですか、昔の遊廓（私は昔は知らないが）みたいな処なのです。

昨今では罰金も万という額がザラにあるので、いうなれば四、五日分の日当を持っていかれちゃうのですから、その嘆きが解るような気がします。

アパートに戻り、独身時代の日記を引っ張り出してみました。親爺（知人の愛称）と二人でなんと四月程の間に十二回も通っており

ます。勿論、縛りを楽しむためであって、下の方のサービスを受けると変なお土産を貰う事になるので、敬遠する事にしていました。親爺のいう、やり手婆ぁの、しつっこい程の客引きをあしらいながら、これと思う好みの子のいる店へ入ったのですが、最初から縛らせて欲しいなぞとは言える訳けはありません。二人の子をあげて、一つ室で膝つき合わせてビールを抜きます。早くすませて、なんて凡そ色気のない申し出はきき流して、時間になると引揚げるのですが、何しろその目的のためにあがる処ですから、ただそれだけで変な目でみられて終います。

二度目ともなると大歓迎されます。なんにもしなくて銭をくれるのですから、こんな結構な客はないでしょう。三度目は女の方で放ってはおきません。この上、客をなんとしてでも己が手中に、と至れり尽せり、はやる心をじっと押えて二人は外に、お互のお目当の女を縛りあげた図なぞを語らいながら帰路に着きます。

縛って楽しめるような美人なんかはいないだろうって、とんでもありません。びっくりする程の器量良しが沢山います。信じられないかも知れませんが、こんな美人がなぜこんな処に、と思う程です。どうしてもお好みの娘がいないなら、その時は一杯召し上って行く事ですね。赤い灯、青い灯で彩られた室の中で、プロの女性が待ってるんですから。

おっと失礼。遊びをすすめる気は毛頭ありません。ただ良きパートナーに巡り合えないSの友達だけには、その目的のためにだけなら、ストレス解消法としてお歓めしてもよいのではないでしょうか。ただし一人では駄目ですよ。余程の強心臓でない限り、悶々の種がふえるだけです。時間単位で遊ばせてくれるから、それほどの出費にもなりますまい。

四度目には私達は、まるで罪人のように詰問されたものです。揚句には

「どうせ私達のような女とは遊べないのでしょう。顔をみるだけとは、あんまりやわ」

という事になりました。親爺曰く。

「実は儂等は変態クラブのメンバーなんだ」

と。

「変態」

「そうさ、女の子を縛って楽しむのさ」

「……」

「そんな事をする訳けにはいかんだろう。だから自分の好きな君達とこうして飲んでいるんだよ。君達を縛ったりはせえへん。つまり、実害をあたえる事はない訳や。その代り、腹の中で楽しむ分にはかまへんやろ」

「しばって、それで抱く訳けなの」

「とんでもない。わいらは、これでも芸術家やで。縛るいうたかて痛くもなければかゆくもせえへん。ただ美しゅう飾るだけや」

「そんなら縛られてもかまへんわ」

私の方の子が、先に承知したものです。

「からだに傷さえつけへんのやったら、どないされても構わんわ。好きにしてえな」

「そないに急にいわれても困るよ。第一、恥ずかしいがな」

「なにいうてんねん。寝るのも縛るのも変らへんが。早よう、縛ってよ」

流石はプロである。以後、私達は存分に楽しませて貰った。丸裸にもしたし、海老責め、両手吊り、後手亀甲縛りと自由自在、しかも演技力満点で、悶えのた打ちのサービスだった。もっとも、あがるたんびに他の女たちに変な目でみられるのは覚悟しなければならない。吹聴されるんですからね。

場所を知りたいんですって。それは困ります。名前だけ内緒ですがね、広子っていうんです。通りの入口に酒屋があります。ハイ、ソレマデ。

では、たばこの消えた処で先へ進みましょう。手紙に関心のないお方は、その三は、とばしてどうぞ、お先をお読み下さい。私だって落書をしている方が楽しいんです。人様の書いたものを写し取るのは骨が折れます。

その三

三日程して私は坂田に尋ねてみましたの。この間のエロ本、始末したいんだけど、どうなすったのって。坂田は何も焼き捨てる必要はないだろう。要らないのなら、私が貰っとくですって。

それは困ります。だって、あなた様に返済の義務があるでしょう。あたし、その事を話しましたの。むろん、Aの投書にあなたが反論され、それがごえんでお借りする事になったのだという事を詳しく説明いたし〝化物の話〟もみせましたし、お便りもみせましたの。だってそうしない事には、あたしの立場がありませんもの。ご諒解下さいましね。

坂田は別に変に、かんぐったりはしておりませんでした。返さなければならないのなら、一冊欲しいから注文しとけというのです。でも発行所は変更になっているんでしょう。それに、すでに三日の間、読んでいる筈でしょう。いつもでしたら夕食後は茶の間にころがって、父母と雑談したりテレビをみたりで刻をすごしますのに、この三日の間、寝室に浸っていたんですもの、もうその必要はない筈なんです。

そうたずねますと坂田は「お前は馬鹿だよ」そう前置きして、この本の意図するところも把握せずに、能美（私、筆名）という人にどのような感想をかいて出す積りなんだい、と笑うのです。感想文なんか書くつもりはないし、そんなもの詳しくよんでもいないけど、要するに男性の加虐性を満足させるためのもの、そのぐらいの事は分りますすっていったのですが、坂田は、そこまで分っているのなら、この本を三日やそこらでよめるかどうか、分りそうなもんじゃあないかっというんですの。

つまり、坂田は「花と蛇」は、よむ本ではないって申しますの。巻頭の絵や巻末の写真は別としても、本文自体もよむものではないっていうんですの。もちろん、小説だから一応ストーリーもあるだろうけれど、そんな事には関係なく、ベッドに入ってパッと、めくった個所をよみ始める、それだけで官能は刺激され、夢魔の境に遊ぶことが出来る。あなた様にですから歯に衣をきせず申しあげてしまいますが、坂田にいわせますと、白磁の裸身を翻弄される静子夫人という個所をよむ時は、テーマ画集と交互に見比べながら、よみすすむ内に、コーフンが頂点に達する。女房不用の状態になるって申しますの。そうなれば、先をよみすすむ必要はないではないか。あくる日に、又その気になれば別の個所からよみ始め、同じ状態をくりかえす。だから、この本をはじめからしまいまで一気によみ通すなんて到底、出来ない。出来るとすれば、余程体力のある人か、あるいは全く反応のない人。反応を感じないなら、よむ訳けはないから、矢張り体力のある人に限られるか、今一つは、色ボケといって他に何も仕事のない人間、その事ばかり考えて生きていられる人しかない。という事なのでございます。

あたしには、はっきり意味がわかりません。と申しますと嘘になりますわね。坂田の申した事を大要あなた様にお伝え出来るという事は、なんとなく理解しているからでございましょう。それでも私は精一杯、反ぱつしてみましたの。だって、いくら夫婦二人限りの会話とは申せ、失礼でしょう。この本を読む時に、お前に傍におられたんではまずい。

なぞと平気でいうんですもの。
　もっとも結婚七年ともなりますと、その方があたしは助かるんでございますが、プライドが許しません事よ。能美さんには、一週間のお約束で借りたのよ、という事は、能美さんはあなたのような読み方、つまり小説で性的満足をうるような不潔なよみ方はしないという事よ。あなた、少しおかしいのとちがいますって言ってやりましたの。そんな事はないだろう。能美という人は、プレイの参考にするためにお前の意見をしたい。プレイ、即ち実演じゃあないか。私は雑誌で楽しむ。実演するだけ向うの方が異常じゃあないか。
（スミマセン）と申します。
　とにかく、この小説の感想なんかお前には無理だ。書いたとしても、それは能美という人をがっかりさせるだけさ。どうしても書くのだったら、お前がこの小説の悪党たちの立場にたつか、逆に女たちの立場に回るかしかないよ。という事なのでございます。とにかく、つまらぬ事にいつまでもかかわりにならず、到底、理解出来ないので御容赦願う、とでもかいてやるんだな。その代り、この本だけは分けて貰えよ。全く勝手ないい分でございましょう。あたくし、すっかり立腹して、とりあげてしまいましたの。でも翌日は、私専用の小抽出から扮失していましたわ。夜、寝室へ入りますと、大急ぎでしまってますの。マイクロ・テレビの台の下に隠していましたわ。なんですか一冊のご本のために夫婦生活をかきまわされてる感じでございます。
　月に一度、坂田は福岡へ参ります。（四行削除。仕事関係の事）本を持って行くのではないかと警戒しておりましたが、流石にお仕事と遊びとは分離させているようでございます。一人になりますと、矢張りもっとも気懸りなのは、坂田の事でございます。自分で蒔いた種とは申せ、坂田の「花と蛇」という、得体のわからない小説に対する執着のようなものを思うと、なんとなく怖いような気がいたしてならないのでございます。
　このような場合、あなた様のおくさまは、どうなすったのでございましょう。坂田は当然、ご夫婦で実演なすっている筈だと申すのですが、そんな事、信じようもありません。
　Bの旦那様は、その後、「花と蛇」については、全く無関心らしゅうございますし、坂田のみが、すっかりとりこになってしまった模様なのが、気がかりでならないのでございます。もし万が一、そのような事を要求するような事になりましたら、どう処置すべきなのでしょうか。その時は、今一度ご相談申しあげる事になると存じますが、坂田に御忠告下さる訳けには参らぬものでございましょうか。不安な気持で小説をよんでみたりの、毎日なのでございます。

その四

この手紙は、今度は本当に一旦、ここで切

れております。なぜ、サラリーマン夫人が運転手風情の私に、こんな告白めいた文章をよせてきたのか、はっきりその正体は摑めないのですが、要するに、暇でひまで仕方がないから面白半分に書いてみたのではなかろうかと、私は判断しています。

しかし、それにしては少し熱心すぎる嫌いがあります。活字にされると、どうという事もありますまいが、便箋紙に細い字で丁寧に丁寧に書かれているのですから、ただのいたずらとも思えないのです。

なんの報酬がある訳けでもないのに、本を借りたお返えしにしては、念がいりすぎているのです。親爺にいわせると、これは明らかに主人がプレイを強要しているのではないだろうか。という事になるのですが、「花と蛇」は一夫婦の私生活にそれ程までの波紋（モン）は投げてはいないようです。ひょっとしたら、このおくさん、多分に誇大妄想の気があるのかも知れません。さて、追伸の形で綴られているその先にすすむ前に、一服させて頂きましょう。

先日、A・B・C三夫人に会う事が出来ました。勿論、この手紙より、ずうっと後の事です。M電気の招待で一泊の温泉旅行に行けるのですが、団体ではつまらないから、三人で遊ぼうという事になり、不要になった招待状をまとめて私宛に送ってくれたのです。私は旅行は大嫌いな性質なので、親爺のおくさんに二枚と女房に一枚、タダで（元々タダですが、恩着せて）渡し、その旨、伝えておいた処、当日、阪神デパートの食堂にお越し願えないか、という電話があったのです。

午後は久し振りに親爺と羽根をのばす約束があったので、同伴しようと思ったのですが生憎と他出中、止むを得ず室中ひっかき回して三枚金程さがし当てて、後は出先から親爺に連絡する事にしました。

C夫人と会うのは、これで四回目。A・Bは、お世辞にも美人とはいえぬ御面相なので、なんとなくがっかりしたような、ほっとしたような気持でした。A夫人は、かつて私を地球の上で住む価値のない人間と、のたもぅた程の女傑ですが、温和そのもの。床の中で旦那様と「花と蛇を」お読みになったB夫人も控え目な人で、この三人が揃って私に会う気になったのが、不思議みたいなものでした。

食事をすませ、男（オトコ）気を出して何処か静かな処でレザートでも、と誘ったのですが、内心冷々。なにしろ懐中が淋しいんです。夜になればツケで呑める処もありますが、相手が女性では仕方ありません。とにかく、金の卵でもある親爺と会うまで、間をもたさねばなりません。C夫人は乗用車をステェションパァキングにおいてあるという事なので鍵を預かり、もう一度、電話、首尾よく連絡が取れました。

いつもの処でという事なので、三人を乗せて南へ直行。A夫人が見事な運転です事、とほめて下すったので、どうです免許証返済の必要はないでしょう。と皮肉をいったら笑いころげて肩をたたく始末。それですっかり意気投合し、言葉使いもぞんざいになった。親爺にあうと、流石は年の功で一流の店に案内し、話をそらさぬ応待振りには、改めて感心させられたものでした。

が、後がいけません。揃ってピンク映画でもみましょうかというのです。主婦連の視察みたいな顔をして堂々とみればよいという事で、尻込みする三人を強引に連れ込んだものです。二本だけみたのですが、倖いそれ程、どぎついものはありませんでした。もっとも二本とも、ちゃんと縛りはありましたが抵抗なくみられるものです。一つは、人間蒸発を

皮肉ったもので、たしか放浪の？　というもののの幻想場面に出てくる逆海老の鞭打ちは実に見事にとってありました。三夫人は、この映画を適当に批判していました。一応、観賞に耐えたという事でしょう。

親爺に、あんた方御主人をあんな風に酷使してはおらんでしょうな、と後で、やんわり質問された時、真っ先に否定したのがＡ夫人。なんともしょっぱい顔でした。館を出て馴染の店に繰り込むのですが、肝心な手紙の方を片付けもしょう。

その五

前文御免下さいまし。実を申しますとこの手紙を書く以前に、長い手紙をしたためているのでございます。あなた様の御意向とはちがう事柄なので、どうしたものかとは存じましたが、折角書いたものですから、はじめに同封いたしておきます。

私自身は小説をよんだ限りでは、別段これといった感想はございませんの。坂田のいいますように、あたしが苛められる人の立場になって読みすすんで参るとしますと矢張り静子夫人を対象としなければなりません。美しさには、まるで自信が御座居ませんが、一人寝の気楽さから精一杯おめかしして、真面目によんでいくつもりになりましたの。

クドイようで申し訳けもありませぬが、感想をお送りするというよりも、坂田がこのような事を要求したとしても、私にはそれを拒否する力はないのでございます。

坂田は、始めの内は私が傍にいたのではよむ気がしないなぞと申しておりましたのに、出張の前夜なぞは、いつもとまるで態度が代りましたの。性生活には淡白なたちなので、余程の事がない限り求めてくる事もありませのですが、留守にする前夜は………する事に黙契のようなものができあがっていますます。なのに、私を無視してよみふけっているのでございます。ときどき筋肉をピクつかせたりして、揚句には挿絵（テーマ絵の事）の部分を枕にして高いびきなのでございます。

女として、これ以上の侮辱はありません事よ。はしたない愚痴を申しあげて御免なさいましね。ズベ公たちに翫弄される静子に対しては、あたくし何の感がいもいたしません。むしろ、そんな無知な同性をあわれむ気持を持ったようにおもいます。でも遠山を坂田におきかえ、運転手の川田というのを（田代ではなかったかと私は思うが、返送されていないので調べようがない）あなた様と仮定してよんで行きます内に、なんとなく変な気持になって参りましたわ。だって職業が似てらっしゃるでしょう。（御冗談は、よして下さいよ）

クーラーを止めてよみすすむ内に、あたくしなんですが、あたし自身が犯されでもしたように、全身に汗をかいておりましたの。全裸のまま姿見の前にたって、両手を背中に組んでみましたの。自分でもびっくりするぐらい美しいっていうのですか。本当は美しくもなんともございませんけれど、汗は吹きでていますし両手は動かせませんし、こんな姿で立ち縛りにされた私の姿を、あなた様や坂田が、川田のようなみだらな瞳でじっとみつめていると、本当に変な気持ちになるのではないでしょうかと、そんな事まで考えてしまったのでございます。

坂田は、ときどき、あたくしに鏡の前に裸でたつように申しますの。でも、ずっと昔の事でございます。お前は私のものだから、そのすべてを知りたいなぞと申して。御経験おありでしょうか。私、そんな時の坂田の目

が、とっても嫌でしたの。手をあげてほしいとか、さまざまな要求を出されて、結婚しなければよかったと思った事は一再ではありませんでしたの。

でも、よそさまでは、もっと極端な事をなさるんですって。体中をおなめになる旦那様もいらっしゃるそうよ。お新婚のお宅では、いかがですの。（舐める舐める）でも冷静によんで参りますと、この小説、矢張り変ですわね。括りあげて屈伏させた静子をどうして今度は他人に売ったりするのでしょうか?。そんなに素晴らしい静子ですから、ズベ公達を裏切ってでも自分の物にすべきではないでしょうか。

そうしてくれれば、たとえ川田という男があなた様のような変態であっても（私を引合いに出さんといて）静子は身を任せるかも知れません事よ。縛られて無理矢理、犯される。そこまでが女性として許せる限界だと思いますし、事情は違いましても、あなたさまのおっしゃるプレイというものも、その程度のものではないかと想像いたします。

坂田はサジストにも種々あって、動物をなぐり殺して喜ぶ人もあるし、あなた様のように縄で縛った女性をみて喜こぶ人もあると申します。（お宅の亭主もドッコイ、ドッコイだぞう）でも、少し可笑しいですよ。云う事をきかない女性を犯すのなら征服感でございますが、それはそれでわかりもしますが、好きで御一緒になられたおくさまを、どうして縛ったりなさるのですか?　なさっていないのでしたら御免あそばせよ。

それともそうする事で、お芝居で満足なさるのでございましょうか。それでは、おくさまが可哀想ではありません事。あなた様にそうされるのですから、静子のように死ぬ程のはずかしめは感じないとしましても、何分の一かは辛い思いを我慢なすっていらっしゃるのに違いない筈だと存じます。（そういう事になるかな）御免なさい、あなた様を攻撃する意志なぞ毛頭御座居ませんの。でも多少、おうらみはいたしております。だって、その為に、あたくし辛い思いをいたしておるので御座居ますもの。

ご本はご本として、もしこのような事を要求するような旦那様を持ったらどうしょうという事を、悪いとは存じましたが、あなた様を仮定して三人で話し合ってみましたの。旦那様にそうされるのなら新しい刺激があってよいかも知れない、という変な結論が出ましたの。では旦那様の前で、オシッコが出来るかって大笑いでしたわ。でも本当に悪書でございますわね。浣腸器というのは病人に使用する道具なんですのよ。浣腸責めなんて甚い話し。それに恥毛を剃るなんて、いくら旦那様の要求といっても許せませんわ。御免なさい、小説と現実とをゴッチャにして。

でも、あたしにはあなた様がこの小説の主人公にみえて、仕方がないので御座居ます。もしおよろしかったら、体験なぞおきかせ下さいまし。でも、お返事は坂田には見せたくない事もありますので、B宛にお願いしますわ。これ以上、坂田を扇動なさるような事、いやですわ。

よみかえしてみて、なんて下らない事を書いたのだろうと呆れております。でも、とても別に書き改めるなぞ思いもよりませんし、このまま破いてしまった処で、適切な感想文の出来る訳けもありませんので、とにかく、お約束の一助にもと思い、郵送させて頂きます。ご本人は、坂田が戻りまして諒解をとり、お返えしさせて頂く所存でおります。留守中にですと、変に勘ぐられても詰りませんもの。では御免あそばせ。

お会いする事は御座いますまいが、時折は

季節のお便りなぞ差し上げたく存じます。奥様に宜敷く伝言下さいまし。余り苛めないようにね。さようなら。

〇　〇

奇クファンの皆様にとってなんとくだらない、という事でしたらお詫び致します。私自身は大変面白くよんだのですが、如何でしたでしょう。

細かい字で、びっしりと書き込まれた便箋の束？（チョット、オーバー）を、原稿用紙に書き改めるという作業が、楽ではないことよく判りました。まったく、少なからぬ努力を要したのですゾ……と、ひとりで力みたくもなろうというものです。

花と蛇だけは返して欲しいと思っているのに、知らぬ顔です。坂田氏の勤ム地に近い十三の書店を知らせておいたので奇クを発見してくれるか、どうか。芦屋の山芦屋から注文があったら編集長、歩合をチョウダイ。

さて愚作「狂獣の宴」を採用して頂いた。お目を汚すのが申訳けない程の愚作ですが、これを書くのには三人のモデルの協力がありました。もし不採用になった場合でも、原稿を提供するという約束を親爺と交しておいたのですが、助かりました。でも親爺の〃上〃をよんだ限りでは、全然面白くないという有難くない評でした。責めが足りないというのですが？

次回は、その時の模様なぞ、許されれば書かせて欲しいと思っております。思い掛けなく「憎縄の記」の飛入りがありましたので、今回は、これで失礼させて頂きます。

（完）

〈最近作緊縛傑作フオト〉

- **開股竹棒羞恥責め**　大手札三枚一組　中河恵子　略号「ねろ」四〇〇円
- **逆エビ責め手足縛り**　大手札三枚一組　中河恵子　略号「ねき」四〇〇円
- **竹棒開股強烈緊り**　大手札三枚一組　中河恵子　略号「ねく」四〇〇円
- **鼻責めと鼻孔大写し**　大手札三枚一組　中河恵子　略号「ねけ」四〇〇円
- **首縄後手強烈縛り**　大手札三枚一組　中河恵子　略号「ねこ」四〇〇円
- **全裸開股膝頭縛り**　大手札三枚一組　中河恵子　略号「ねさ」四〇〇円
- **菱縄縛り竹棒責め**　大手札三枚一組　中河恵子　略号「ねし」四〇〇円
- **柔肌に喰込む縄目**　大手札三枚一組　大島照代　略号「ねす」四〇〇円
- **豊満な全裸を弄る**　大手札三枚一組　大島照代　略号「ねせ」四〇〇円
- **逆エビに痛める魔手**　大手札三枚一組　大島照代　略号「ねそ」四〇〇円
- **黒髪をいたぶる手**　大手札四枚一組　大島照代　略号「そや」五〇〇円

- **菱縄縛りにあえぐ**　大手札四枚一組　大島照代　略号「そゆ」五〇〇円
- **強烈後手縛りの狂態**　大手札四枚一組　大島照代　略号「そき」五〇〇円
- **牝犬奴隷の醜態**　大手札四枚一組　大島照代　略号「そよ」五〇〇円
- **全裸二つ折り縛り**　大手札四枚一組　中河恵子　略号「そむ」五〇〇円
- **菱縄しばりの表情**　大手札四枚一組　中河恵子　略号「その」五〇〇円
- **八の字開股羞恥責め**　大手札四枚一組　中河恵子　略号「そか」五〇〇円
- **菱縄縛りの全裸を晒す**　大手札四枚一組　中河恵子　略号「そえ」五〇〇円
- **奴隷捨札開股縛り**　大手札三枚一組　木村洋子　略号「きむ」四〇〇円
- **菱縄強烈開股縛り**　大手札三枚一組　木村洋子　略号「きま」四〇〇円
- **竹柱立縛り晒し者**　大手札三枚一組　木村洋子　略号「きみ」四〇〇円
- **柱宙縛り苦痛表情**　大手札三枚一組　木村洋子　略号「きめ」四〇〇円
- **猿轡股間縛り歩き**　大手札三枚一組　木村洋子　略号「さも」四〇〇円

- **浣腸にむせび泣く女**　大手札四枚一組　大島照代　略号〈つゆ〉五〇〇円
- **身動き出来ぬ強制浣腸**　大手札四枚一組　大島照代　略号〈つえ〉五〇〇円
- **竹棒開股苔打ち縛り**　大手札三枚一組　関谷富佐子　略号〈つい〉四〇〇円
- **後手吊りにもがく女体**　大手札四枚一組　川越美佐子　略号〈くて〉五〇〇円
- **逆エビ縛りの色々**　大手札四枚一組　愛知葉子　略号〈つか〉五〇〇円
- **逆さ吊りと足吊り**　大手札四枚一組　愛知葉子　略号〈つよ〉五〇〇円
- **片足吊り上げ縛り**　大手札四枚一組　愛知葉子　略号〈つお〉五〇〇円
- **美しき臀部を晒す**　大手札四枚一組　左近崟里子　略号〈つや〉五〇〇円
- **階段に晒す全裸身**　大手札四枚一組　左近麻里子　略号〈つく〉五〇〇円
- **花瓶を太股で挾む裸身**　大手札四枚一組　左近麻里子　略号〈つの〉五〇〇円
- **麻里子の裸身をあばく**　大手札四枚一組　左近麻里子　略号〈つね〉五〇〇円
- **柱に立縛りの全裸身**　大手札四枚一組　左近麻里子　略号〈つな〉五〇〇円

- **絶妙の鞭打ちポーズ**　大手札四枚一組　左近麻里子　略号〈つに〉五〇〇円
- **悶える白肌を俯瞰する**　大手札四枚一組　左近麻里子　略号〈つね〉五〇〇円
- **両膝頭開股宙吊り**　大手札四枚一組　中河恵子　略号〈くち〉五〇〇円
- **片足挙げ吊り責め**　大手札四枚一組　中河恵子　略号〈くも〉五〇〇円
- **両手吊りに悶える女**　大手札四枚一組　中河恵子　略号〈くい〉五〇〇円
- **開股責めを悦ぶ女**　大手札四枚一組　中河恵子　略号〈くあ〉五〇〇円
- **両手万歳吊りにもがく**　大手札四枚一組　中河恵子　略号〈くむ〉五〇〇円
- **静子夫人への羞恥責め**　大手札四枚一組　中河恵子　略号〈くめ〉五〇〇円
- **雁字搦目縛りにうめく**　大手札四枚一組　川越美佐子　略号〈くと〉五〇〇円
- **八カ月の妊婦に革具責め**　大手札四枚一組　増田みゆき　略号〈へぬ〉五〇〇円
- **九カ月の妊婦に首枷責め**　大手札四枚一組　増田みゆき　略号〈への〉五〇〇円

新しいモデルに依る強烈縛りフオト集

絶妙のバック姿態
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せき」
定評のある麻里子嬢の美しいバックスタイルを余すところなく晒して縄にもだえる有様を見せる。

松葉のさるぐつわ
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せか」
松葉模様の粋な手拭で息もつかせず強く猿轡されて殊に美しい瞳を大きく瞠いて縄目に耐える。

ボリウムをしばる
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せも」
豊かに息づいた女体の首、胸、胴へと縄は蛇のようにまといつき肌に喰い込んでゆく見事な姿態。

左右開股をしばる
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せみ」
両脚を縄という小道具によって無理矢理開かされた肉づきのよい左近嬢の全身の表情は美しい。

ゴムカバーの猿轡
大手札三枚一組　四〇〇円
左近麻里子　略号「せな」
生ゴムのオシメカバーによって鼻も口も一緒に猿ぐつわされて、その息苦しさにのたうつ表情。

開股羞恥椅子縛り
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せけ」
正面向いて椅子に坐らされた麻里子の両脚は思いきり開股された椅子は羞恥の椅子に早変りする。

黒布の猿轡と緊縛
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せこ」
真黒い布は妖しいムードをかもし出して麗顔に襲いかかり可愛いい鼻口を無惨にも踏みにじる。

甘美な椅子プレイ
大手札四枚一組　五〇〇円
木村洋子　略号「せま」
両足をいやでも開げなければならないように、縄掛けされて吊された女体は、正面向いて揺れる。

開股吊り縛り姿態
大手札四枚一組　五〇〇円
木村洋子　略号「せむ」
甘美な女体責めのムードの中でもこれは又最高の好さを持った開股吊りで大きく揺れる女体美。

菱縄雁字搦目縛り
大手札四枚一組　五〇〇円
木村洋子　略号「せえ」
痩型の裸身にぎりぎりと縄が喰い込む菱縄に更に滅茶苦茶に掛けられた雁字搦目の縄のきびしさ。

私を虐めて下さい
大手札四枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号「せろ」
私をいじめて下さいという名札を前にぶらさげて緊縛の身を花と蛇ファンの前にさらすお嬢さん。

豆絞りに映える顔
大手札四枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号「せれ」
豆絞りの猿ぐつわをされて輝く瞳も美しい麗顔をしかめて縄の苦痛に耐える絶妙のポーズは最高。

裸身に悶える表情
大手札四枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号「せり」
全裸の肌にまといつく縄目に悶える美しい表情は、彼女の若々しい肢体の魅力と共に最高の逸品。

麗身の裏と表の綾
大手札四枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号「せと」
縛られた美しい裸身の正面と背面を二種の狙いで四葉のフオトに仕上げた恵子の魅力満点の作品。

竹棒と猿轡と縄と
大手札四枚一組　五〇〇円
中河恵子　略号「せて」
竹棒と猿轡と縄の三点によって責めつけられた女体が激しく反応して狂いまわる表情のアップ集。

豊満な全裸を晒す
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せゆ」
両脚を竹の棒で固定された拘束女体は、更にその豊満さを誇示して女体縛りの魅力を発揮する。

陽光に映える裸身
大手札四枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号「せい」
陽のさす六階の庭園に亀甲縛りにあった真白な女体が、その全裸の羞じらいをいじらしく晒らす。

縄で弄ぶ豊満女体
大手札四枚一組　五〇〇円
大島照代　略号「せた」
身動きできぬ程厳しく拘束された女体は、その縄尻の操りによって面白いように猥らに揺れる。

後手縛りに狂泣く
大手札四枚一組　五〇〇円
大島照代　略号「せの」
一分のすきもない厳重な後手縛りの女体を思いのままにいたぶりその全裸の変化を楽しむ男の眼。

逞ましき臀部責め
大手札四枚一組　五〇〇円
大島照代　略号「せね」
後手縛りのまま豊満な臀部をむきだしのまま高々と掲げて、あらゆる打擲と暴虐にゆだねられる。

強烈縛りに喘ぐ顔
大手札四枚一組　五〇〇円
大島照代　略号「せに」
仰向けにされた豊かな裸身に下敷きとなった後手が痛さに痺れ喰い込む二の腕の縄目がむごい。

○

奇ク十一月号、久しぶりに愛読すばらしい内容で奇クの健在を知り喜びにたえません。もう数年前まで、ずっと愛読していて懐しい誌名ですが、その後しばらく御無沙汰していて、再度、手にした次第です。早速、夫婦プレイを行い秋の夜長を心ゆくまで楽しみました。私の主人は四十才、私は三十二才。結婚以来、十年も経ています故、どうしても中だるみになっていましたが、貴誌にて青春がよみがえった思いです。これからが楽しくなってきました。主人も貴誌を毎月、求めて夫婦生活の潤滑油にしたいと申しております。夫婦プレイを楽しんでおられる御夫婦の方からのお便りをお待ちいたします。

（愛媛県八幡浜市・松永多可子）

○

私は二十八才の人妻で子供はございません。主人は結婚当初よりS的で私はM的だと思います。今まで夫婦プレイは何回となくやっており、写真も大分撮りました。そこで数枚を同封しておきます。Aの印のものは誌上にて発表されても構いません。この頃は自分でもよくわかるくらいM的になり、剃毛されており、いつもこのような状態を続けております。報酬はいりませんから御誌のモデルに是非使っていただきたいと願っております。本当は夫婦の相互プレイ三人プレイ、四人プレイが一番好きです。一度お返事いただければ幸いです。

（岐阜市・金原喜代子）

○

いろいろの困難のなかで発行を続けておられる奇譚クラブの皆様御苦労様です。数年前、お手紙を読者通信にのせて下さったことがあり、又、お便りをいたします。私は、初めの数号は別として、二百三十三号のうち、少くとも二百二十五号ぐらいは毎月、手にとって見てきたのであると思いますと中年も深まった（四十五才）自らの半生の影のように感慨も一入のものがありました。十一月号サロンの頭に、やはり古い読者らしい粂田氏の文をみて、ますます、その感があります。二十代であった頃から四十も過ぎる今日まで、その間、発禁、白表紙、と、いろいろの曲折があり、又、私の趣味とする女斗美の記事や女褌の記事はとくに白表紙時代きわめてまれで（土俵四股平氏の二、三の記事と山田氏の二篇のみ）月々、手にしては失望を味わっていたものです。発禁号の直前、土俵氏の「女斗美考現」や、畔亭氏の「娘相撲」などで喜んでいたのですが……。近頃の復活は雪崎京人氏のものにはじまり、記事もさることながら、おびただしいS・E画伯の女斗図は、女相撲のイメージを決定的に鮮明にしてくれたもので、記念すべき活動といえます。増田俊郎、加茂三千彦、円山景三、津谷正春氏らと、あげることが出来ますが雄松比良彦氏は、唯一篇ながら「高校女子相撲」で、スポーツ女相撲の、新しいイメージ開拓を達成され、上記、雪崎氏もこの線で色々すばらしい挿画を提供されましたね。これが更に、今日まで奮斗士好太氏の「花の女斗美」長篇と結実しています。しかし、何といっても、雪崎氏と双璧といえるのは、海野美津男氏の、とくにその完璧な画でしょう。まことに奇譚クラブをものにする昭和女相撲はこの両氏に代表されるようです。かえりみて二十年、人生の四半生とともにあった奇クですが、私どもオールド読者は、粂田氏の言のように近頃、満たされぬ変な文章が多くて残念です。しかし、これも時世でしょう。この辺で希望を一つ。すでに入手困難な本や雑誌の女斗美記事や画を出来るかぎり再録していただけませんか。各女斗ファンの提供をお願いすればずい分、あるでしょう。たとえば、村松梢風に「仇討女相撲」というのがあるそうですが、私はずい分さがしましたが、見ていません。例の風俗諸雑誌にも、ずい分出ていましたから、かなりあると思います。伊藤晴雨の「雄略女相撲」の図なども珍しいものです

ね。（もっとも、この図は、ふんどしはしめていない。タフサギとは腰巻のことか）糸田氏のいわれるように、遠ざかりいくとはいえ、苦難の行末を見守ります。奇クの常連（?）には「数学者」と自称される先生方が多い。そこで、しばりにも褌にも共通あるノット・セオリーの専門家は居られませんか。ライデマイスターやフオックス（というと、私は専門は何かわかりましょう）には、たのめないので、奇ク的ノットのトポロジーをひとつ。六尺褌は男褌も女褌もホメオモルフですが、稽古褌はちがいますね。

（草津・S・T生）

○

拝啓、高天肥馬の候、益々御隆昌の事と御喜び申し上げます。大変長らく御無沙汰いたしておりますが、小生、強度のマゾにて毎日見はてぬ夢を追いながら過しておりますが、思いあまって拙ないペンをとりました。小生の妻とは結婚して十年になります。小生はどちらかというと痩せ型で、性質も神経質だそうです。反対に妻は小生よりも体重があり大柄で、性質も、おうようです。女学生時代バスケットの選手をしていたというだけあり、かなり力もあるようですが、おとなしい方ですから、女らしく振舞っております。小生の体内にひそむマゾの本性をどうしても押さえることができず、思いきって妻に打明けてみましたところ、最初は「エッチね」といって取合ってくれませんでしたが、ある晩、思いきって「どう、お前のからだがどれだけ重いか、ちょっと俺の胸の上に馬乗りしてくれヨ」といってみたところ「マア、イヤーネ」といいながら、案外、素直に馬乗りになって「どう、おもたいの、つぶれるわヨ」なんて、じょう談をいったりしたものでした。こうしたことが、二、三度、重なる中、ある晩「あんた、こんなことと女にされてうれしいの。どんな気持がするの」というのです。私は本当はたまらなく嬉しいのをかくしながら、何気なく「ただ、そうされてみたいんだよ。特に美しい女性にネ」と、おだてておきました。てきめんに効果が現れて、「あんたも馬鹿ネ」といいながら、ドシンと大きなお尻を胸の上に乗っけて、馬乗りになってきました。「あんたって本当に変態ネ、こんなことされて嬉しいの。あきれた」と口ではいっていても、結構気持よさそうでした。白いパンティに包まれた湯上りの柔肌が、フワリと私の口と鼻におほいかぶさってきました。私は、じっと目をとじて花の中に埋まったような気持で石けんの匂いのぬけない妻の肌をかいでいました。ふと目をあけて見上げると、妻は気持よさそうに肩で息をしながら、うっとりと、あらぬ方角を見つめているようでした。このことがあって以来、妻の方も、だんだん大たんになってきました。この頃では妻の方から仰向けになった小生の首のあたりに馬乗りになり、大きなお尻を両肩に据えながら「さあ、どうオ、あたしを跳ね返してごらん。十かぞえるまでに跳ねかえせなかったらフォールよ」小生は内心はねかえしたくないのですが、わざとあばれたふりをしてバタバタすると、妻も興にのってはねかえされまいとお尻に力を入れて一層強くのしかかってきて、しまいには太股の間に小生の顔をギューとはさみこんで「サア、どうだ、弱虫」といいながら畳を三つポンポンとたたいてフォールの合図をし、私の上から下りると「アー気持よかった」と髪のほつれを掻き上げながらいうのです。ある晩、妻が風呂から上った時、私は思いきって「ノーパンで一つ、運動やろうヨ」「バカ、知らない」といって、つーと次の間にいってしまいました。「しまった、あまり出過ぎたかナ」と、失望と悔いの気持にかられて電灯を消して横になっていますと、何やら人の気配がして、私の顔にふわりと快い風が巻き起り、アッという間に首っ玉のあたりは、やわ肌の重圧に押しひしがれてしまいました。「あっ」と声を立てようとすると、その声をふさぐかのように、ぐいっとやわらかいものが口をふさぎました。妻は上からニヤニヤしながら見下していましたが、この時ほど妻の顔が、まぶしく見えたことはありませんでした。

（米子市・マゾ男）

○

奇ク11月号を始めて見て、びっくりしてしまった男です。ただただ、びっくりの連続でした。特に団鬼六氏の「花と蛇」が強く私の印象にのこり、矢も盾もたまらずすぐ特集号を購読いたしました。一週間ほどで送ってきた臨時増刊号「花と蛇」を読んだ時の気持は、それはなんと云おうか、感慨無量としか云いようのないものでした。私は今までにエロ本やエロ写真は何度も見たことがありますが、そんなものよりも数十倍もの感激でした。団氏の傑作をエロ本やエロ写真と比較してしまって申訳ございませんが、私が生を享けて以来読んだ雑誌小説の中で「花と蛇」ほどの感動を受けた小説はなかったからです。何故「花と蛇」という小説がこのように私の心を捉らえてしまったのか、それは私にもよくはわかりませんが、とにかく、私を有頂天にさせてしまったことは事実です。「花と蛇」の魅力の秘密を私は私なりに感じとってゆきたいと、今後の愛読を誓いたいと思います。作者団先生の御健筆を祈ります。

（東京都・村松尊雄）

○

小生は三十三才になる男性ですが、若くて美しい女性に責めさいなまれ、恥ずかしめられることを日夜念願しておりますMです。現在までの私のささやかなる被虐の経験を申し上げますと、鞭打ちでは皮バンドと三本足の氷割りを併用します。（これは昨夜も行いまして、まだ全身にみみずばれが残っています）次に人間便器は今までに三十回余り経験しました。顔の上にまたがって直接口中に排尿を受けるケースが大多数ですが、三回ばかり浴室で立ったままで行ったことがあります。これはいつでも行えるというものではありませんが素晴しいものでした。下着なめと称している、汚れたパンティを口中に押し込められるのも大好きです。緊縛はいつも後手に縛ってころがされ、身体中をハイヒールの尖った先で踏みつけられるのです。現在小生が夢想している汚辱場面は、会社か工場の女子寮にパンティ泥に忍び込んで見つかり、表沙汰にしないとの条件で次々と恥ずかしめられるという設定です。足枷や首枷、手枷をはめられ、風呂桶ほどの容器の底に固定され、上を抜いて仮設便所とし、丁度顔面に糞尿がかかるようにされます。入れ替り立ち替り女たち

の排泄に埋もれまる一昼夜の後、溺死寸前に助けられる。といった多数の女性になぶり者にされるというのが夢です。一対一の時は相手はSM両方を理解する女性が望ましいと存じます。この女性に極限量の浣腸を施し、緊縛されて転がされた小生の顔の上に排出させるのです。汚物にまみれた小生の顔は苦痛と歓喜にゆがむことでしょう。とりとめのないことを書きましたが、小生の空想のひとこまです。次回にMモデルを募集される際には是非御一報賜りますよう願い上げます。

（神戸市・鍵田源次）

〇

私は田舎より都会へ出てきて住込みで働いている一青年です。12月号で東京一人ぼっちのミグマ様の意見、大変うれしく思いました。私もこの広い東京に心をゆるす友人とて一人もなく、全くの孤独で淋しく思っております。東京へ出てきて以来、奇クの大ファンとなってから、一人でもいいから同じ話題を持つ友人をほしいものだと、かねがね思っておりました。是非、私のような者でもよかったら、お友だちになって下さい。一方的ですが、この文がのりました翌月の5日に都合がよければ夜9時に池袋東口の喫茶店フジキの入口の前に本誌の一番新しい号をもっていて下さい。私はその前号をもってゆきます。では会える日を楽しみにお待ちしております。

（東京杉並・S田中23才）

〇

小生奇クに興味を持ち始めたのが昭和三十一年頃です。名古屋市内のある店で立ち読みしていた時、ふと取り上げたところ、四馬孝さんの絵と「潰滅の前夜」という文章を読み、驚きに似た感情を抱いたことを覚えております。それ以来十一年間、唯読み方が違っているかもしれないのですが、愛読し続けてきました。当時名古屋に親戚があったので、日曜日など行く度にこっそり買い求めたものです。大学は京都の方でしたので、引続いて京都市内で購入、私なりに自分の性格を見つけだして満足しておりました。現在27才にて社会人として頑張っております。二年前に父を亡くしてから後を継いでおりますが、今後とも自分なりに静かに貴誌の一愛読者として精進してゆきたいと考えています。愛読歴十一年といっても、もっともっと先輩もおられることですから大口も叩けませんが、愛読者として貴社の御苦労を謝すと共に一層の御発展を心より祈念するものであります。尚、大津に中河恵子さんがおられる由、近い所ですし、もし彼女さえ宜ろしかったら御連絡頂くなり文通するなり、互いに負担にならぬ位に御交際したく存じます。今秋御婚約されるとのことですが、機会を与えて下されば、この上なき幸甚に存じます。小生も中河さんと同様、車が好きで走りまわっております。いつでも、好きなことの出来るのんびりした状況にあります故、彼女に迷惑をかけることなく

楽しい御出会いが出来ることと存じます。

（滋賀県彦根市・間島勉）

○

「復讐」作者曰く、拙い作品ですが、御好評をいただき感謝に耐えません。特にイラストでは、本文の内容を忠実に表現するように努めております。しかし、本誌の自しゅく方針にも従わねばなりません。従って、作品の一部は発表不能、又は修正を余儀なくされたものもあります。誠に残念ですが、より大きな損失を避けるための処置ですから御了承ねがいます。さて、今回のイラストは、苦しまぎれに分解影絵にしてみました。挿画に両眼を近づけて、点線のところをみながら、静かに眼を遠ざけて下さい。二つのシルエットが重なってくる筈です。緋沙絵夫人と恵利香が連縛された状態を御想像いただければ幸いです。

（千葉・青鬼）

○

私は奇クの昭和二十七年以来の愛読者です。もう十六年近くのおつき合いになります。今までに、古くは「風俗草紙、デカメロン、ロマンス」等、新しくは「裏窓、風俗奇譚」等、この道を扱った書物が、夫々の時代を背景として出版されました。しかし、それらは次々と種々の事情から姿を消していきました。そんな中にあって、奇クだけが、実にガッチリと腰を落ちつけて、あせることなくこの道を歩み続けているということはなんと素晴しいことでしょう。それだけに、編集にあたられる方々の御苦労が、つくづく、しのばれます。過去を振りかえってみますと、現在、奇クがとっている編集方針は、今の時代を生き抜いていくための、もっとも賢明なものだと思います。あせらずに、じっくりと歩を進めていただきたいと思います。我々読者も、長い目で奇クの発展を守り、育てていかねばならないと思います。私は、三十年ほど東京で生活し、勤務の関係で現在、東北のある県都に住んでいる独身の国家公務員です。前にも書きましたように、私は十五年以上、奇クを愛読し、蔵書し、また、その他のS・M関係の書物やフォト（愛好者で集って撮影会を開いた時のもの、その他、愛好者と交換したフォト）等、多くの資料を集めています。S・Mの傾向としては、あくまでも女性の美しさをベースにした、緊縛オンリーの方です。いわば、フェミニスト的サジスト愛好者といったところです。したがって、緊縛を男女間のセックスに直接むすびつけて考える方ではありません。最近、読者通信等に女性の名前を多くみかけますが、もしS・M関係の資料の交換や、縛られることに興味をお持ちの女性の方がおられましたら、先に書きました私の傾向を御理解の上、誌上で呼びかけて下さい。私は、すぐに、どこどこに何時にこいといったような呼びかけ方は、きらいです。誌上で何回か意見を交換し合った上で、お互いに通ずるところがあったら、直接資料を交換するなり、直接お会いしてお話しをし合うなりしてみたいと思います。お互いの人格を尊重し合った上で。名古屋の三好留美様、東京都の清野勝子様、もしこの一文をごらんになったら、誌上でお話し合いをしませんか。その他、勇気ある女性の呼びかけを希望します。

（みちのく・まこと）

○

私は会津の奇クファンです。先月（十一月号）の読者通信を拝見して岸英徳氏のサド、マゾ発見法は大変参考になりました。ありがとうございます。結婚の相手は絶対、得たも同様です。ところで会津若松市近辺の愛読者の方、ぜひ一度会いたいですね。とくに女性の方、通信コーナーで文通とまいりましょう。

（福島県川桁・大伊生）

○

浜田市の志間みち子様、十一月号で拝見しましたが、自分達夫婦も本誌を愛読しております。写真は以前より自分で現像、焼付をしております。私でよかったら現像焼付、フォートの交換をいたしたいと思いますが、御返事下さい。私達は浜田市のとなりの市に住んでいます。同封の写真は、妻の妊娠の記録と思って写したものです。今、五カ月ですが、これから続けて出産までの状態を写していきたいと思います。写真はまずいので誌上発表は無理かと思いますが、何しろ妊婦は、そうどこにもいまいと思い、お送りしました。次月も又、お送りします。

（島根・Y生）

○

前文、御免下さい。十一月号は小生のようなピアシング・マニヤには、とてもたまらない、ありがたい結構な贈り物で、今後もこう

いう記事と絵画をお願い申し上げます。㈠表紙の耳環と頚飾の連結㈡サロン楽我記の辻村氏の話中「名古屋M七〇氏の乳頭のピアス」㈢川崎進一氏の「耳に穴をあける時代」㈣愛知葉子氏の「彼女が天女の刺青を彫るまで」㈤千葉青鬼氏の「復讐」であります。表紙の耳環に頚飾を連鎖して責めている場面は非常に魅力を感じます。幼稚園に通園している時、十才ぐらいの外国少女が見学にきました。彼女は耳環から豪華な頚飾を連結して大変、立派なものでした。十年ほど前に博物館で南方の織物の陳列がありました時に、原住民の風俗写真に、耳環と頚飾の写真がありましたが、これも立派なものでした。名古屋のM七〇氏が乳頭にピアスされた由、これは八月号の庄司一氏のピアシングに刺激されて実行されたものと考えます。小生も以前から考えていますが、首から下、ピアスすると、入浴に差しつかえると思うので実行しません。「耳に穴をあける時代」は女性自身七月三日号に掲載されていましたのを読みましたが、川崎氏はなかなか辛らつな批評をしておられます。小生もはじめは木綿針にてピアスしましたが、結構、穴はあいてくれますが、今は千枚通しにて根本まで通して同じぐらいの太さの栓をします。刺青は、桃源社の「快楽の女性」にもあるように、なかなか魅力のあるものらしいですね。小生が耳鼻にピアスする刺戟と同様でしょうが耳鼻のピアスは止められません。「復讐」の鼻吊り、一二九頁の両耳のピアスの穴に釘が差しこまれ、釘づけにされる、なかなか残酷なシーンですね。小生も釘づけにされたいと思います。八月号、角三生氏の「ピアーシングと刺青」大分、ピアーシング文字を読ませてもらい大いに楽しんでいます。それから分譲品写真のモデルの鼻責めが毎号発表されていますが、モデル嬢に鼻隔壁のピアスしている人はありませんか。もう七、八年になるかと思いますが、東浦ひかる嬢が辻村氏に鼻環をはめられたフォトがありましたが、あれは、はさんであるのですか。その後はピアスしませんか。刑部典子嬢は、その後いかがですか。すっかり消息がありませんが、マンションの浴室で、貴女の耳朶の孔を発見した彼女もどうしていられますか。（佐々木耳環鼻環生改め耳環にピアスを楽しむマニア）

○

三年前から奇クを愛読している一青年です。奇クを読みはじめてから、私の心の中には現実から切りはなされた新しい世界が生まれました。それは法も道徳もない全く自由な、私自身の空想の世界です。その世界をさまようことが、私の最も生きがいを感ずる時なのです。私は、S、Mどちらにも興味があります。しかし、どちらかといえばMかもしれません。前者では縛り、浣腸などで精神的に苦しめることをのぞみます。後者では、ドレイとなり、女性の肉づきのよい尻に敷かれ、又、下着などを頭からかぶせられたり、口につめられたり……。こんなことを書いている今でも、私はもう空想の世界に入っているのです。こんな私の願いをかなえてくれる女性の方はおられませんか。特に年上の女性、有閑マダムなど。私は二十一才で身長一七二センチ体重六〇キロ。顔と体には自信があります待合せは、十二月六日、七日の中野駅のブロード・ウエー寄りの改札口附近で夜の七時半〜八時まで待っております。貴女の目印は、左手に週刊誌、平凡パンチ、右手に白いハンカチを持っていて下さい。私も週刊誌をまるめて持っております。（東京都深川・鈴木）

○

私は現在、某私学で統計学、計画工学等、少々変った学科を専攻している者です。貴誌を以前は時々読んでおりましたが、最近はほとんど買ったこともありませんでした。それが、この間ひさしぶりに買い求めて読んだのですが、内容が今一つ物足りません。その原因は何といっても挿入写真が余りにも少なすぎることです。この種の雑誌が写真なしで読者を引きつけることは、非常な文章の力が必要となります。とにかく十一月号で私が終りまで読んだのは、河本氏の告白記、辻村氏のカメラハント、及び山本氏のカメラルポの三つだけです。しかし、この雑誌の性質上、多くの制限が加えられるのは、やむを得ないことでしょう単なるヌード写真は芸術とみなせても、S・M写真はマニアの興味を満足させることのみを目的としているわけですから、以前にあれほど多くの、しかも大たんなグラビア写真をのせることができたことの方がふしぎな気もするのですこの観点から、奇クの現在の内容

に関して編集部はもちろん、今の社会情勢に対してさえも、不満をぶつけるのは、だ当ではありません。奇クのこれからの出版方針は以上のようなことを前提として考えていかねばならないのです。内容を我々の要望を満たすものにしようと思えば、市販は不可能です当ぜん、残された方法は郵送販売ということになるのですが、そうすると今度は、新しい読者の開拓がむずかしくなります。そこで私が提案したいのは、市販と郵送の二本立てでいってはどうかと思うのです。一般書店には今まで通りに発行し、それとは別に豪華版を郵送、直接発売するのです。一般市販の方は百ページぐらいの厚さで、内容も文字通り風俗研究誌とし、適当にさし絵をそう入する程度でよいでしょう。一方、郵送版は、写真を満載した、いわゆる見る雑誌にします。そうなれば以前のように、いやそれ以上に充実した内容のものができると思います市販版と郵送版の発行所を別会社にするのも一方法です。又、郵送版は無理に毎月発行する必要もなく、分譲品のような形にすることもできます。郵送版誌上において我々のあらゆる望みが、かなえられるのではないでしょうか。以上まことに自分勝手な希望をのべましたが、編集部の方々の健康を祈りながらペンをおきます。

（大阪・大関四郎）

○

美川芙美子様「肥満せる女性の郷愁」拝見いたしました。小生、以前より肥満した女性のムッチリと盛り上った腹部に激しい愛着を持っておりましたが、それが奇クを読むようになってから益々拍車をかけられたようになって参りました。と申しましても、肥満した腹部を縛るとか鞭打つとかいうのではなく、そのものズバリ、膨んだ腹部を鋭利な刃物で切り裂いて中の臓物を引きずり出してみたいという欲望です。奇クにもたびたび妊婦モデルが登場したり、分譲写真等で妊婦の膨んだ腹部が見られますが、いずれも切腹、又は腹裂きというのは全然お目にかかれません。又、単なる女性の切腹ファンは多々見られますが、妊娠するか、又は肥満して膨んだ自分の腹部を切り裂いてみたいという勇かんな女性は、羽鳥水江さんをおいて貴女が恐らくはじめてでないかと思い、同好の士として大変感激している次第です。間違ったらお許しねがいたいと思いますが。以前、奇クに仙台、又は多賀城の「安斉けい子」というペンネームで投稿されたのは、貴女ではなかったのではないでしょうか。もしそうだとすれば、小生はその頃より貴女のファンということになります。とにかく、よろしかったら一度お会いしてゆっくりとプレイについてお話しいただければ幸甚です。

（南九州・T・K生）

○

私は前から考えていたことを、十二月号の清野嬢の記事を読んで急に実現したくなりました。もし本趣旨に賛同される同好の諸氏並びに女性がありましたら誌上に御意見なり又、具体的な方法につい

て御投稿下さい。男三名、女一名計四名のグループを二グループぐらいが最良と思いますが、今、費用等、考えて男五、女一名、計六名を以って一グループとします。グループの数は一グループぐらいですが、出来れば二グループぐらいがよい。先ず男子会員の資格は資本金二十億円以上の大会社の社員か、又は公務員が第一条件であろう。第二条件は四十才から五十才までとします。すなわち四十才から五十才の大会社の社員といえば地位もあり、信用第一と考えておりますから、人間的には間違いはなく、如何なる場合でも理性は失わず安全だからです。第三条件は、神戸市内、あるいは阪神間在住の者です。第四条件は、写真の撮影、現像、焼付を自分で行なえる設備もあり、趣味としてやっていること。これは責め或は緊縛プレイ並びにそれの撮影、及び研究を主目的とする会合にしたいからです。そのため緊縛あるいは責めも種々研究を行い、最も理想的な完成された女体を写真にとることです。もし二グループがあれば、モデルは交換することも可能です。以上、四条件を満足できる人で、週に一度は撮影したいものです。女性は出来ればMに興味のあればOLでもウエイトレスでも女工でも何でもかまいません。年令は二十前後が一番身体が柔らかく理想的ですが、そんなぜいたくもいえませんので制限しないこととします。費用は我々はサラリーマンですから大したことも出来ませんが安いのはプレイと思って我慢して下さい。そのかわり、はじめにのべた如く、責め、或は緊縛以外は絶対信頼出来ますから安心して下さい。もし、はじめの条件に合った男子が集って女性がいない場合奇クの方で、どなたか紹介してもらえませんでしょうか。今、クラブの名前をKOBE・KITAN・CLUBの頭文字をとってKKCクラブとしますが、会の細かい規則は出来たとき送りたいと思います。例えば週一回、会合の時、男子二名以上でないとプレイしてはいけないとか、あるいは会費はどうするかとか。以上のようなKKCクラブに賛成される方がありましたら、如何ですか入ってみませんか。奇ク読者通信に投稿して下さい。特に女性の投稿を歓迎します。尚、本クラブは定員が集らなければ発足しません。

（神戸・田中恭一）

○

編集部の皆様、奇ク愛読者の皆様、お元気ですか。私は神戸に居住しているM男性です。神戸近辺に居住していられるS女性の方に御奉仕申し上げ、心からお仕えしたいと、常日頃、思っております。もし、私の前にS女性が出現したならば、御足下にひれ伏し、女王様と仰ぎ奉り、御命令には絶対服従し、どんな卑しい行為でも行ない御満足なさる様御奉仕申し上げます。こんなお恥ずかしい中年男ですが、一度男性をいじめ玩弄物にしてやろうといわれる勇気のある女王様、何卒私を奴隷にして飼育して下さい。女王様であれば、年令、容貌は問いません。私を素裸にひきむき、馬にして乗り回し、乗りつぶし、顔面尻敷責めをして下さい。犬にしてひきずり回し、蹴とばし踏みつけ、珍芸を仕込み、舌の御奉仕をさせても結構です。人間便器にさえなりかねない私ですから、どんな残酷な仕打ちでも喜こんでお受け申し上げ、御奉仕申し上げます。お一人で奴隷を飼育なさる勇気のない方は、二、三人から五人ぐらいのグループで、私をいじめ責めつけ痛ぶり玩弄物、下等動物として弄そんで下さい。又、同性の御主人様でも結構ですが、出来るだけ肥満体の御主人様にあこがれ、御奉仕申し上げたいと思います。S女王様、肥満体の御主人様お便り下さい。御返事は必ず差し上げます。お互いの秘密は厳守致します。

（神戸市・奴隷志願者）

○

近ごろ、奇クの誌上に、私達浣腸マニアにとってこれといった作品のないのを残念に思っております。浣腸マニアの皆さん、是非力作を奇クの誌上に見せて下さい。女性の浣腸マニアの方のお便りも少なくなり、どうしたことかと思っております。女性の浣腸マニアの方、どしどしお便りを誌上に寄せて下さい。私は筆無精なので、あまり書くという事は上手ではありませんが、是非女性の浣腸マニアと手紙なりとも交換いたしたいと思います。女性の浣腸マニアの方お便り下さい、返事は必ずいたします。

（東京・河西生）

○

――清野勝子さん、小生ほとんど創刊以来の、奇ク愛読者です。もっとも、いたって内気な人間ですから、投書もプレイも一、二度ぐらい、初心のSにすぎません。

三十を越して、金と暇の出来た近ごろ、あらためてプレイへの夢が、もえたつ様になりました。Mに興味と理解の目をひらかれたあなたに、ぜひお逢いしたいのです。お話もうかがいたいし、手持の資料も見ていただきたいし、無論プレイも。但し、ぼくには、残酷趣味はありません。縄は、女性の美と可憐さを強調する、少々手荒なアクセサリーと解釈しています。（十二月号所載、木見氏の私評論に近いと思います）ルールとして秘密厳守は当然のこと。――十二月一、二両日、正午から午後一時まで、（三六三）六四二一番の電話口でお待ちいたします。桂とお呼び出し下さい。「一人ぼっちのミグマ」さんではありませんが、この広い東京の、どこに同好の方や、M女性が埋もれているのやら。思えば淋しい限りです。

（東京・K生）

○

小生は貴誌の古くからの読者にて、かなりの量のS文学を集めておりますが、貴誌の昭和31年頃より34年にかけて連載された土路草一氏の一連の作品、すなわち「潰滅の前夜」「続潰滅の前夜」並に「魔境圏No.8」は世界のS文学界にとっても最高の作品の一つだったと確信しております。小生は雑誌としては全て揃えて持っておりますが、単行本としても、ぜひ備えておきたいと思いますので、発売をお願いいたします。価格は一、〇〇〇円から三、〇〇〇円程度で上装挿絵入り、この場合、挿絵は理想化された美人で描いて下さい。飛ぶ様に売れる事確実です。S文学の金字塔を後世に残すためにもぜひお願いいたします。

（横浜市・田中二郎）

○

編集部の皆様、お元気ですか。10月号以来すっかり奇クの大ファンとなって11月号、12月号と3人の美女が深夜になると私の机上に晒されます。私はあたかもスリップ、ブラジャー、パンティとその美女の下着を一枚一枚脱してゆくように奇クのページをめくってゆきます。さて、まだ読みだして3カ月目の私ですけど、色々と意見をいってみたいと思います。まず毎月、表紙に美しい女性がおります。これ等に説明をつけてはいかがでしょうか。裏表紙の女性に対しても同様です。団先生の「花と蛇」は我々S男の思う事を次々と可愛いい小夜子ちゃんや麗わしい静子夫人に実験してくれております。この物語、最初からお読みの方はこれ等の美女が蛇達の前で脱衣させられ、一番女として恥しい部分をさらけ出されるシーンを覚えておられるから良いでしょうが、途中から読んだ者は、やはり物足りなさを感じていると思います。ですから、もう大分調教の方もすすみ、彼女達が裸身を晒す事にある程度慣れたところで、パンティかバタフライみたいな前をかくすものだけを与え、毎朝の調教開始の時、皆の見ている前で、それらを取らせるという方法はいかがでしょう。静子夫人等、もう全スト等やらせても良い頃と思います。「心傷たむ遍歴」これはあまり面白くありません。S的な読物で新しいものと早く換えて下さい。「カメラハント」三カ月共いうことなし、すごい。又私は一人でS画を書き楽んでおります。そういう趣向のある人と文通してみたいのでお便り下さい。家中の者が留守にしたほんの短い時間で書きましたので乱雑でごめん下さい。

（神奈川県鎌倉市・芝理好庵）

○

貴社発行の月刊誌奇譚クラブが三カ月程前から店頭に姿を消してしまいました。何年も愛読していた小生にとって淋しい限りです。無駄と知りつつ市内や近郊の書店を覗いてみましたが、ありません。小生は小説、花と蛇を愛読していただけに残念でなりません。先般、花と蛇の特集号を送って頂き何回も繰返し読みました。唯一つ欲しいのは捕えられている静子等五人の令嬢の人物絵がなく物足りません。そこで小生勝手に好きな女優を選び役を割り当てた次第です。例えば絶世の美女静子夫人を想像して新珠三千代、義娘の美しい令嬢桂子には入江若葉、勝気な探偵助手京子には肉体美の浜美枝、妹の情純可憐な美津子は星由美子、宝石店の令嬢小夜子は鰐渕晴子等々をイメージに浮かべ、これ等の美女達を全裸のまま自由を奪い思い通りに泣かせたいと考えるのは小生だけではないでしょう。さて、「花と蛇」の前篇が大分以前に売切れ在庫がないとのことですが、是非再刊下さるよう願います。（大分県豊後高田市玉津中町・日光庄次）

○

街の木も黄色くなりベーブメントには枯葉もまい、何だか淋しい

気になり勝ちの今日この頃、皆様にはお元気で活躍されていることと思います。私は奇クという強い友があります。毎日、作業にせい出してつとめられるのも奇クがあればこそです。この世の中があるかぎり奇クもぜったいになくなることはないと信じます。毎月二十五日が待ち遠しく買い求めます。本当は十一月号は私には余りよくなかったと思います。しかし十二月号を見て生きかえった気がいたしました。特に春川様の画は、いつみても、わくわくしますね。私は四十六才の妻ある身ですが、妻が外出するときが多いのです。十二月号のトップに三好様のボリュームあるかわいらしい写真が出ていましたね。私の目は写真にピタリと止まりました。三好様はMの方ですが、このような美人の尻の下に圧しられて、こてんこてんにやられ、息も絶え絶えになったところでアッという間にあたたかい水でむせんでみたいと思います。又、ボリュームのあるおヒップをピッタリと包んでいるパンティの古い物でもいただければ一生の思い出に長く残ることと思います。自分勝手なことばかり、ずい分厚かましいことを申し上げますが、これは私のいつわりのない心なのです。どうか私の思いの一端なりとおくみとり下さいますようおねがいいたします。編集部様、一月号には三好様の色々のポーズ、特にM男性が三好様にギュウギュウといわせられている写真をおのせ下さい。かならず、おねがいします。三好様に文通できましたら、この上もなく幸せと思います。今でも一月号が目にちらつきます。

（岸和田市O・M生）

○

最近のK誌の発展ぶり、読者として嬉しく思っております。ところで最近は、妊婦もの及び切腹ものが余り誌面に載らず、マニアとして一寸、淋しく思っているところです。妊婦及び切腹物は、他の同類誌には見られない、貴誌だけが持つ特徴ですから、ぜひ多くとはいいませんから、少くとも二、三篇はのせて下さるようおねがいいたします。十二月号によれば河本恵子さんが妊婦モデルになって下さるようですが、この際、妊婦の切腹フオトを撮っていただきたいと念願しております。ぜひ実現して下さい。できれば妊婦の腸露出切腹フオトなどは最高と思いますが。また、切腹フオトの特集号もぜひ実現していただきたいものです。以前よりこれはマニアの方々から実現を望む声が聞かれますが、緊縛物ばかりでは片手落ちです。切腹物ばかりではファンが少く採算がとれないというのでしたら、緊縛または浣腸ものなどとの組合わせでも結構です。東京では流行のアンダー・グラウンド劇団「赤と黒」などで、妊婦の腹裂きや女性の切腹物を上演して、連日、大好評を博しているなどから、これらが今や一部のマニアのものではなく、多くの男性にみと

められてきているためと思います。編集子の再考を望みます。また、妊婦物のエース、高野原美さん、その後、音沙汰ありませんがいかがおすごしでしょうか。ぜひすばらしい文を、お書き下さるよう、貴方のファンとして待望しております。（宮崎・上林恒雄）

○

私は当年三十三才、貴誌をはじめて手にしましたのは昭和二十八年の春、京都の高校の寮にいたときでした。その頃は風俗草紙などとともに店頭や貸本屋にも出ていて（もっとも貸本屋で借りるほど心臓は強くありませんでした）隔月ぐらいに買ってきては、こっそり読んだものでした。でも私のこういうことに対する興味は、すでに年少のころからあったと思います。中学生のとき、裏山の木から吊り下ってみたり、池の中に夜こっそりと入ってみたり（冬にも）首をくくるまねをしました。そしてその頃に自分で色々と縛り方を考え、物置の中で、よく二時間ぐらい自縄自縛にふけりました。ハンモックを吊り、両手両足をバラバラに、または一とまとめに（猪吊りも逆エビ吊りも）したこともあり、時にはなかなかほどけなくなって爪先で縄をほぐして自由になったこともありました。勿論、両手吊り、後高手小手吊り、胴吊り、開脚吊り、片足吊り、逆吊りもマスターしました。たしか昭和三十年頃の記事に、男性モデルをハンモック吊りしょうとしたらネをあげて失敗したとのことがあり、私なら平気なのにと思ったことでした。縄も荒縄、麻ロープ、太い麻縄（三センチぐらいの）綿ロープ、サラシをしごいたのなど、さまざまでしたし草の上、物置の土間、池の中、泥田、雪の中、藪の中などと、場所もいろいろでしたが、縄のあとが残ったり、アザになったりするのには困りました。やはり、一人で巻いてしごいたりするので余計に傷がついたのでしょう。寮に古井戸がありましたので、ふちから縄を下げて首まで水に浸かり、後手の縄をそれに結んで一時間ぐらいがんばったこともあります。（私は泳げませんでした）逆吊りでも足首に喰い込む縄がなければ今でも一時間ぐらいは平気です。宿置のときは今でも二、三時間は楽しんでおります。（水沢市・浜田弘）

○

十二月号を拝見して非常に強い印象をうけました。海野氏の「若き領主の試み」は、私が年来、脳裏にもっているイメージをズバリ具体化したもので、しかもその構成やディティールも私の考えているものより、はるかにすばらしい作であったからです。海野氏独得の古典的な格調のある文体で静かに語られるこの物語は、氏の諸作の中でも白眉のものと思われます。そこに登場する人物もすべて、きわめて古典的な、りりしさとやさしさを持ち、しかも強いバイタリティをもっているのが海野氏の世界ですが、私はこれをこよなく愛するものです。それは単なる女斗美への関心ではなく、失われた古典的な世界のすばらしい再現であるからです。加えて挿画数葉もまたきわめてすばらしく、前褌をとって争う図や、投げの打ち合いの図などは全くすばらしいの一言につきます。奇譚クラブの開拓し継承する女斗美の世界に、この一作を附加しえたことは、全く大きな喜びといえるでしょう。（山口市・赤沢桂一）

○

三好様、貴女のすばらしい写真を拝見して、年甲斐もなく思わず筆をとりました。今までに縛ったＯＬは二名ありますが、どちらもＭでなく普通の女性ですが、私の調教ですばらしい奴隷になりました。特にその中の一名は、奴隷というよりオモチャといった方が適当であり、毎日の生活は私の定めた通りであり、身体もどんな状態にでもすることが出来、それも毎日五時間、私の手により、あらゆる状態に身体を曲げたり折ったり、ねじったりして責められ、縛られしかも一言も苦情、苦痛もいわないようになりました。彼女は今は結婚して良きママになっておりますが、世の中はままならぬものでもし子供さえなければ妻も離婚しても良いような女性でした。勿論私は妻を愛してはおりますが、ＳＭについては極端に嫌うので仕方ありません。私は今年四十三才の神戸市六甲に住むサラリーマンですが、人間は絶対間違いありません。また、プライバシーの点は貴女のことは勿論、私も絶対秘密にしたいので、この点も安心して下さい。緊縛は相当強烈ですが、責めは余りしておりません。また、直縛による身体に加わる苦痛は、直ぐなれるらしいです。貴女の柔らかい身体に思いきり縄をかけ、徐々に奴隷として調教した

いのです。特に貴女の腕は柔らかそうで折れるほどねじ上げ、しびれるほど首縄をかけて緊め上げたく、顔が変形するほどナイロン靴下でさるぐつわをかけたいものです。そしてその上、写真をとって辻村先生に頼み、奇クに掲載したいと思います。
（神戸市・寺口宅雄）

○

美川芙美子様、九月号の貴女の告白記を拝見して、大変嬉しく思いました。私の身近に貴女のような女性がいたということは夢のようです。私は、この二月で二十才になりましたS的男性です。お望みのような十五才ぐらいの美少年ではありませんが、少なくとも、ごつい男性ではないつもりです。もしよろしければお便りをして下さい。K・K誌は大学に入ってから読んでいます。私は女性の偉大なお腹の上に乗ったり、浣腸して苦しめたり、乳房を責めたりするのが好きです。でもいつも頭の中で空想するだけで実際にやった事はありません。貴女の望みを、私は必ずかなえてあげます。貴女は私の尻の下できっと喜びの声を上げるでしょう。ではお便りを待っています。（横浜市・北一輝）

○

愛読者の皆様、ごきげんいかがですか。十二月号は久しぶりで私達フエチ（ゴムバンド、オシメカバー等）党にとっては楽しく拝見させていただきました。安田氏の「続・フエチの海水浴」実験談として、よく感じが出ていますし、うらやましくさえ思います。安田氏にお聞きしたいのですが、誌上発表の写真はセルフタイマーで写したものですか。それとも実験談に出ている女性の方に写してもらったのですか。私は後者の方であってもらいたいと思います。安田さん、貴殿がバンドを着用し、頭からオシメカバーを猫のように女性の手でかぶせられて、まわりの女性三人ぐらいから、さんざんからかわれている。そしてついに失禁してしまい、ピンクのゴムメンスバンドから漏らして……美しい若い女性から笑声と軽侮の目にかこまれながら失神してしまう。以上のような想定を写真に（周囲の女性からあらゆる角度より）数枚写してもらって、ぜひ誌上に発表して下さい。又、機会がありましたら安田氏の写真を見せていただきたいと考えています。つまらぬことを書きましたが、御参考になれば幸いです。失礼をお詫びします。次に原由貴子さんについて原女史の独特のソフオムードの投稿は、十二月号に見られなくて残念ですが、原女史のイラスト「無理強い」は、なかなか良く画けていました。特に女学生の恥ずかしく困惑した表情がよく、カラーであれば、もっと実感が出てくるだろうと考えるのは、私のみでないはずです。それにしても、原女史は「文章」と「イラスト」といい、なかなか秀作揃いで、我々凡人の及ぶところではありません。今後の御活躍をお願いします。尚、並原新一氏の「ブルマー・マニヤの溜息」や川村順子さんの「オムツ狂騒曲」など面白く拝見いたしました。今後とも新作を、どうぞ。さて、独身女性のゴムカバー・マニヤの方で、男性とプレイをしたいと願っていられる方がありましたら、一度会って話していただけませんか。秘密厳守の真面目な方に限り、デート費用は御心配無用ですが、オシメカバーを着用し、貴女様の好みの責具を御持参の上（取替用その他）で神戸駅待合室にて毎日曜日、午後一時頃、目印に、週刊誌を丸めて白ハンカチにて細く中央を結んでいて下さい。尚、通路に伝言板がありますのでこちらからはK・K・Rよりと連絡し、貴女様はB子様としておきますので同時刻前後お互いに注意して伝言板を見て下さい。尚、当方は真面目な会社員にて御心配無用ですがヒヤカシ半分の方は、お断り申し上げます。（神戸市K・K・R生）

○

奇クを御愛読のS女性の方々、私は都内の一流商社につとめる二十七才の独身M青年です。最近、奇クを読むたびに、S女性の方のような投書、又、M男性の心をゆさぶるようなM読みもの等のページが非常に少なく感じられ、常々疑問とさびしさに明けくれしています。私も過去に一度だけ都心の高級クラブのホステスとのかけごとが原因で、代償にそのホステスの奴隷として一週間、男としては最低の恥ずかしめを受けたことがあります。掃除、洗濯は勿論、化粧台の椅子がわり、食事中の座ぶとんがわり。あるいはビンタ、ムチ打ち足なめ、人間馬等、多種多様にいたぶられ、お客様が見えた場合、（女性の方）は「タンツボ男」と称して皆様から口の中に顔中にとタン、唾を吐きかけられ、お礼ま

次号(二月号)は十二月二十五日に発売します。

でいわせられるのです。こんな毎日を過ごして一週間たった最後の日は、真裸にさせられ荒縄で身動きできないほどしばりあげられ、さるぐつわをはめられた上、車のトランクの中にほうり込まれ、多摩川の土手の上に、みじめな恰好の姿でほうり捨てられ、三時間の後アベックに助けられたのです。それ以後、そのホステスは、どこへ行くともなく私の前から姿をかくしてしまい、私もガックリしてしまったのでした。しかし、その時のことがどうしても忘れられずもう一度こんな私を御使用いただける女王様が御出現されたらと考え、奴隷志願をいたす者であります。(東京 川本保)

○

全国のM男性どもに告ぐ! 最近、誌上を見ますと、非常に女性のMが増加しているのを見て、大変残念に思っております。私は生れながらの典型的なS女性です。私は四十代ぐらいのM男性を支配してみたいと願っています。特に独身者なんかではなく、社会的に相当な地位にある者で、普通の時は部下達の前で威張り散らしている男で、私の前に出た時は、ひたすらに土下座して私の用事を足すことだけに専念し、人間馬となりあるいはそれ以上のことを命ぜられた通りに出来る男を求めています。ただし、お互いに秘密を守ることを前提としてのことを強く要望します。目下、私は一人の下僕を飼育しています。が、ただ一人だけではなく、外に求めてみたいと思っています。私は今年二十三才、身長一米六〇、体重五十キロ容姿は人並以上。全国のM男性どもよ、頭を垂れて私の前に跪きなさい。便りを待っています。(東京都 佐藤喜久子)

○

小生、目下「おんな牢物語」又は「伝馬町女牢」と題して当時の女囚の生態を書いてみたいと思っております。時代としては、やはり天保年間をとった方が一番かと思います。この種類の文献としては山田風太郎の「おんな牢秘抄」土師清二の「おんな牢」半七捕物帳の中の「大阪屋花鳥」柴田錬三郎の「江戸群盗伝」等が、あります。主人公になる牢名主には、この種のものでは出来るだけ兇悪残忍な女性の方にピッタリすると思いますが、候補としては「妲妃のお百」か「大阪屋花鳥」があげられるわけですが、この二人を比べると、入牢前の悪事としては「妲妃のお百」の方が、ドギツイですが、全体としては「大阪屋花鳥」の方が、はるかに暴虐ですので、この毒婦を牢名主に描くことにします。彼女の伝記としては、明治初年に柳亭燕枝によって口演された「鳥千鳥沖津白浪」を土台にして書かれた三代実録中の「佐原の喜三郎」に詳しく描かれており、前記の文献も大体はこれによっているかと思われます。私も、あらすじはこれによることにして筆をすすめるつもりですが、手許にありませんので、そこはフィクションで適当に書くつもりです。もっとも、私は女牢内の女囚による、女囚の責めに重点をおいていますが、やはり適当な構成がないと物語りになりませんので、原則的には史実に従っていくつもりです。で、気に入った形に書き上げると大体六百枚(二十×二十)ぐらいになる予定で、金ももうからないのに忙しい仕事についておりますので、中々暇がないのですが、出来るだけ早く原稿を整理してお送りしたいと思っております。採用されるかどうか判らないのに、こういっては変ですが、ただ単に女牢内の責め場だけをエピソート風に描くなら、四十枚ぐらいは直ぐ書けますし、それだけで十二回分ぐらいの構想はあります。以下いずれ又。(大阪 O・T生)

○

私は奇クを愛用しはじめてから二年目になりますが、私はまだS・Mの経験は一度もありません。しかし、すごく興味を持っております。町中で魅力的な女性に会うと、あんな人に奴隷の如く責められればと思い、ハッとすることがあります。誰か女性の方で、一度も経験のない私で良かったら御指導して下さいませんか。小生は二十五才、体重は六十キロ、身長は一米七〇です。又、女性の下着に関心があり、若い女性の方の使用したものが欲しく思っています。どなたかわけて下さいませんか。おねがいいたします。私は字は下手ですが真面目な青年です。必ずお返事いたします。貴社の繁栄をお祈りします。(広島 広若望)

○

「奇ク」益々ご発展の様子、うれしく存じます。私は数年来、ひそかに奇クを愛読している同好者です。最近、趣味を同じくする人の多いことを感じ、勇気をもってお便りする次第です。どなたか私とパートナーを組んで下さる女性の方は、いらっしゃらないでしょうか。同好のものが寄り合い、プレイをすることにより、人生が一層エンジョイできるものと、思います。私は、幸いS・M両方のようですので、もし貴女がお望みでしたら立場をいれかえて、プレイすることが出来ると思います。勇気を持った貴女（女王、奴隷）の出現を待っております。貴女の方は複雑でも結構ですよ。申しおくれましたが、私は二十八才、昨年結婚をし、平和な家庭を持っておりますサラリーマンです。十一月三十日及び十二月一日の両日、午後七時より七時半まで環状線、京橋駅外廻りホームの前の方（森の宮より）で眼帯をかけ週刊誌をもって待っております。（大阪高倉）

○

K誌愛読者の皆さん、初めての投稿ですが、今後ともよろしくお願い申します。私もK誌を主人と共に、この半年ほど前から愛読していますが、毎月が楽しみで取りっこしている有様です。さて、私どもの恥ずかしいお話を思い切って申し上げて、御同好の方のお便りをお願いいたしたいのです。私ども（夫は四十五才、私は三十六才）の楽しい営み、アイデアによるプレイ等……（ただし、F・MはK誌を参考に一寸、試みましたが、まだうまくいきません）を、どなたか御円満な御夫婦とともに話し合ったり、率直に研究し合えたら、本当に素晴しいと……夢のようなことを考えております。御同好の御夫婦よりの御連絡を御待ちしております。（東京RN子）

○

皆様お変りございませんか。私は三年ほど前より奇クを愛読していますM男性です。最近号にはMの方のお便りが少なく淋しく思っております。私は肥った体格のよい女の方に、例えば何月号か忘れましたが肥満体の女の方の文が載っていました。あのような女の人の奴隷になっていじめてほしいと思っております。丸々と大きなお腹、で思いきり押えつけていただきたいと思っています。私は息も絶え絶えにされ、最後には気づけの水を飲まされます。このようにして下さる女の方のお便りお待ちしています。私は二十才のいたって内気な男です。どうか私を思い切りいじめて下さる方、御返事下さい。伏して女王様におねがい申し上げます（大阪市　マゾ男）

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少なものもありますから、お早い目に御注文願います。
○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は〈小包〉にて発送申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和39年7月号（送共三二〇円）
昭和39年8月号（送共三二〇円）
昭和39年9月号（送共三二〇円）
昭和39年10月号（送共三二〇円）
昭和39年11月号（送共三二〇円）
昭和39年12月号（送共三二〇円）
昭和40年2月号（送共三二〇円）

昭和40年3月号（送共三二〇円）
昭和40年4月号（送共三二〇円）
昭和40年5月号（送共三二〇円）
昭和40年6月号（送共三二〇円）
昭和40年7月号（送共三二〇円）
昭和40年8月号（送共三二〇円）
昭和40年9月号（送共三二〇円）
昭和40年10月号（送共三二〇円）
昭和40年11月号（送共三二〇円）
昭和40年12月号（送共三二〇円）
昭和41年1月号（送共三二〇円）
昭和41年2月号（送共三二〇円）
昭和41年3月号（送共三二〇円）
昭和41年4月号（送共三二〇円）
昭和41年5月号（送共三二〇円）
昭和41年6月号（送共三二〇円）

昭和41年7月号（送共三二〇円）
昭和41年8月号（送共三二〇円）
昭和41年9月号（送共三二〇円）
昭和41年10月号（送共三七〇円）
昭和41年11月号（送共三七〇円）
昭和41年12月号（送共三七〇円）
昭和42年3月号（送共三七〇円）
昭和42年4月号（送共三七〇円）
昭和42年5月号（送共三七〇円）
昭和42和6月号（送共三七〇円）
昭和42年7月号（送共三七〇円）
昭和42年8月号（送共三七〇円）
昭和42年9月号（送共三七〇円）
昭和42年10月号（送共三七〇円）
昭和42年11月号（送共三七〇円）
昭和42年12月号（送共三七〇円）

☆編集後記☆

○巻頭には団・辻村両氏の対談を用いた。幸い左近麻里子嬢が紅一点を添えてくれたので両雄の舌端も一入躍ったことと思う。

○斉藤夜居氏は文献紹介『夜の巴里城物語』を寄せられたが〈資料入門〉の方は来月号より引続いて連載の予定。団氏の提供によって映画シナリオ「奴隷妻」を掲載した。映画を見られた方にも、これから見られる方にも大いに参考になることと自負している。

○夫婦プレイ実践者の代表として安井夫妻を取上げた〈カメラ・ハント〉は共感者も多いことだろう。今月号はいささか長い原稿が多く懸賞入選作品が若干翌月回しとなった。その中で清原麻耶の〈背徳の果てに〉を急拠滑り込ませたが高評を賜れば幸いである。

○新年号というので『花と蛇』は特に枚数を増して内容の充実を企って貰った。十一月号の巻頭〈憎縄の記〉についての反響が案外多く今月号で一応その代表的なものを掲げた。

○田部井さんの〔告白〕『サーカスの女』なんかは、もう少し長いものが欲しいものだ。羽鳥、千葉、牧、早木、能美の各氏の筆が益々冴えて読みごたえのある内容に更に重量感を与えている。黒井珍平氏の真面目さは大いにかいたい。芳野眉美氏の〈水中花〉も愈々大詰に近づいたが続稿の飛躍を期待する。

○みはら・ひろし氏の「アテネの休日」は華麗なペンで流暢な文章を操りM人士の胸奥をさぞ抉ることだろう。映画演劇に於けるSM傾向は注目すべき風俗現象とはいえる。

◎懸賞原稿募集

〈体験、告白、手記〉

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹蔵なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

〈創作、小説、物語〉

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のものでも結構です。皆さまの平常抱かれている夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもので自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記を願います。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

〈感想、論評、批判〉

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したものでも結構です。とにかく本誌を読まれご感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇には賞金二千円以上を贈呈いたします。

〈（映画、雑誌）通信〉

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。

◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真を御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の栞☆

一月分（1冊）三五〇円〈送20円〉
三月分（3冊）一〇五〇円〈送共〉
半年分（6冊）二一〇〇円〈送共〉

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ　定価　三五〇円
一月号〔第二十二巻第一号 通刊第二三五号〕
昭和四十二年十二月二十日　印刷
昭和四十三年一月一日　発行
編集人　箕田京二
発行人　吉田稔
印刷人　北村俊夫
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所　暁出版株式会社
〈振替口座大阪四二七八三番〉
（昭和三一年四月二〇日第三種郵便物認可）
（昭和四二年四月二一日 国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号）

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、十八才未満の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれもお願い申し上げます。